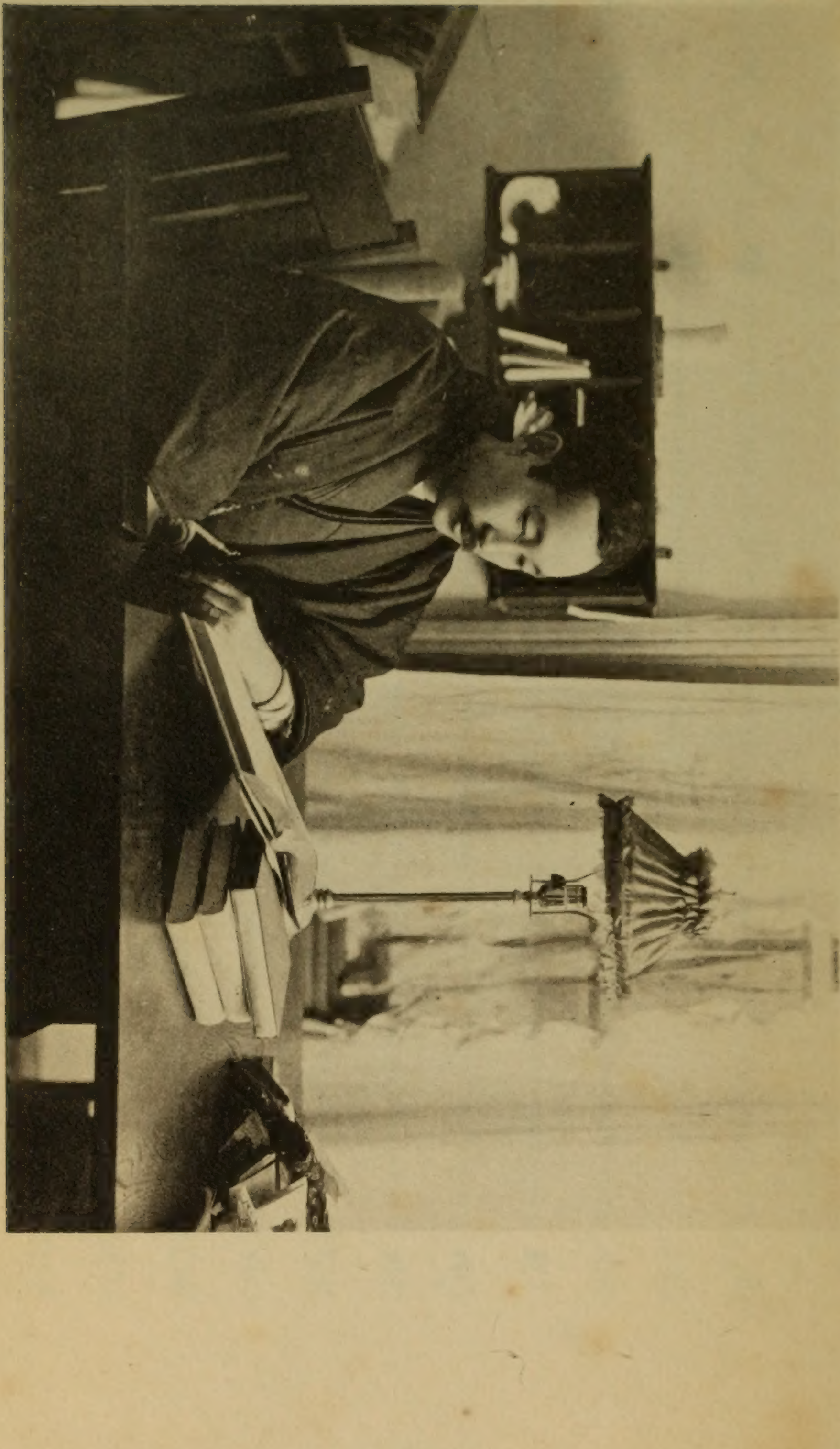
有島武郎全集

第一巻



第一卷目次

監修者　有島生馬
　　　　里見弴

編輯校訂者　織田正信

有島武郎全集

第一巻

かん〳〵蟲

ドゥニパー灣の水は、照り續く八月の熱で煮え立つて、總ての濁つた複色の彩は影を潛め、モネーの畫に見る樣な、强烈な單色ばかりが、海と空と船と人とを、めまぐるしい迄にあざやかに染めて、其の總てを眞夏の光が、押し包む樣に射して居る。丁度晝辨當時で太陽は最頂、物の影が煎りつく樣に小さく濃く、それを見てすらぎらぎらと眼が痛む程の暑さであつた。

　私は辨當を仕舞つてから、荷船オデッサ丸の舷にぴつたりと繋つてある大運搬船の舷に、一人の仲間と並んで、海に向つて坐つて居た。仲間と云はうか親分と云はうか、兎に角私が一週間前此處に來てからの知合ひである。彼の名はヤコフ・イリイッチと云つて、身體の出來が人並外れて大きい、容貌は謂はゞカザン寺院の緣日で賣る火難盜賊除けのペテロの畫像見た樣で、太い眉の下に上睫の一直線になつた大きな眼が二つ。それに挾まれて、不規則な小亞細亞特有な鋭からぬ鼻。大きな稍ゝしまりのない口の周圍には、小兒の産毛の樣な髯が生ひ茂つて居る。下顎の大きな、顴骨の高い、耳と額との勝れて小さい、譬へて見れば、古道具屋の店頭の樣な感じのする、調和の外れた面構へであるが、それが不思議にも一種の吸引力を持つて居る。

　丁度私が其の不調和なヤコフ・イリイッチの面構へから眼を外らして、手近な海を見下しながら、草の綠の水が徐ろに高くなり低くなり、黑ペンキの半分剝げた吃水を嘗めて、ちやぶり〳〵とやるのが、何かエヂプト人でも奏で相な、諧律の單調な音樂を聞く樣だと思つて居ると、

睡いのか。

とヤコフ・イリイッチが呼びかけたので、顏を上げる調子に見交はした。彼に見られる度に、私は反抗心が刺戟される樣な、それで居て如何にも抵抗の出來ない樣な、一種の壓迫を感じて、厭な氣になるが、其の眼には確かに强く人を牽きつける力を籠めて居る。「豹の眼だ」と此の時も思つたのである。

私が向き直ると、ヤコフ・イリイッチは一寸苦い顏をして、汗ばんだだぶ〳〵な印度藍のズボンを摘まんで、膝頭を撥きながら、突然かう云ひ出した。

おい、船の胴腹にたかつて、かん〳〵と敲くからかん〳〵よ、それは解せる、それは解せるがかん〳〵蟲、蟲たあ何んだ……出來損なつたつて人間樣は人間樣だらう、人面白くも無えけちをつけやがつて。

而して又連絡もなく、

お前つちは字を讀むだらう。

と云つて私の返事には頓着なく、

ふむ讀む、明盲の眼ぢや無えと思つた、乙う小ましやつくれてけつからあ。

何をして居た、舊來は。

と嚴重な調子で開き直つて來た。私は、ヴォルガ河で船乘りの生活をして、其の間に字を讀む事を覺えた事や、カザンで麪麭燒の弟子になつて、主人と喧嘩をして、其の細君にひどい復讐をして、とう〳〵此處まで落ち延びた次第を包まず物語つた。ヤコフ・イリイッチの前では、彼に關した事でない限り、何もかも打明ける方が得策だと云ふ心持を起させられたからだ。彼は始めの中こそ一寸熱心に聽いて居たが、忽ちうるさ相な顏で、私の口の開いたり閉ぢたりするのを眺めて、仕舞には我慢がしきれな相に、私の言葉を奪つてから云つた。

探偵でせえ無けりやそれで好いんだ、馬鹿正直。

而して暫くしてから、

だが蟲かも知れ無え。から見ねえ、斯うやつて這ひずつて居る蠅を見て居ると、己れつちよりや些度計り甘めえ汁を嘗めてゐるらしいや。暑さにもめげずにぴん／＼したもんだ。黑茶にレモン一片入れて飲め無えぢや、人間つて名は附けられ無えかも知れ無えや。

昨夕もよ、空腹を抱へて對岸のアレシキに行つて見るとダビドカの野郎に遇つた。懐をあたるとあるから貸せと云つたら澁つてけつかる。いま／＼しい、腕づくでもぎ取つてくれようとすると「オ、神樣泥棒が」つて、殉教者の樣な眞似をしやあがる。擦つた揉んだの最中に巡的だ。四角四面な面あしやがつて「貴樣は何んだ」と放言くから「蟲」だと言つてくれたのよ。

え、どうだ、すると貴樣は蟲で無えと云ふ御談義だ。あの手合はあんな事さへ云つてりや、飯が食へて行くんだと見えらあ。物の小半時も聞かされちや、嚙み殺して居た欠伸の御葬ひが鼻の孔から續け樣に出やがらあな。業腹だから斯う云つてくれた――待てよ斯う云つたんだ「旦那、お前さん手合は餘り蟲が宜過ぎまさあ。日頃は蟲あつかひに、碌々食ふものも食はせ無えで置いて、そんならつて蟲の樣に立廻れば矢張り人間だと仰しやる。己れつちらの境涯では、四辻に突つ立つて、警部が來ると手を擧げたり、娘が通ると尻を横目で睨んだりして、一日三界お目出度い顏をしてござる樣な、そんな呑氣な眞似は出來ません。赤眼のシムソンの樣に、がむしやに働いて食ふ外は無え。偶にも少し位荒つぽく働いたつて、そりや仕方が無えや、さうでせう」てつてやると、旦那の野郎が眞赤になつて怒り出しやがつた。もう口ぢやまどろつこしい、眼の眩る樣な奴を鼻梁にがんとくれて逃んだのよ。何もさ、さう怒るがものは無えんだ。巡的だつてあの大きな圖體ぢや、飯もうん

と食ふだらうし、女もほしからう。「お前もか、己れもやつぱりお前と同じ先祖はアダムだよ」とか何とか云つて見ろ。己れだつて粗忽な眞似はし無えで、兄弟とか相棒とか云つて、皮のひんむける位えにや手でも握つて、祝福の一つ二つはやつてやる所だつたんだ。誓言さうして見せるんだつた。それをお前帽子に喰着けた金ぴかの手前、芝居をしやがつて……………え、芝居をしやがつたんだ。

己れにや芝居つてやつが妙に打て無え。

氣心でかヤコフ・イリイッチの聲がふと淋しくなつたと思つたので、振向いて見ると彼は正面を向いて居た。波の反射が陽炎の樣にてら／＼と顔から半白の頭を嘗めるので、うるさ相に眼をかすめながら、向うの白く光つた人造石の石垣に圍まれたセミオン會社の船渠を見やつて居る。自分も彼の視線を辿つた。近くでは、日の黄を交へて草綠なのが、遠く見透すと、印度藍を濃く一刷毛横になすつた樣な海の色で、それ丈けを引き放したら、寒い感じを起すにちがひないのが、堪へ切れぬ程暑く思へる。殊にケルソン市の岸に立ち竝んだ例のセミオン船渠や、其の外雜多な工場のこちたい赤青白等の色と、眩ぐるしい對照を爲して、突つ立つた煙突から、白い細い煙が喘ぐ樣に眞青な空に昇るのを見て居ると、遠くが霞んで居るのか、眼が霞み始めたのかわからなくなる。

ヤコフ・イリイッチはさうしたまゝで暫く默つて居たが、內部からの或る力の壓迫にでも促された樣に、急に「うん、さうだ」と獨言を云つて、又其の奇怪な流暢な口辭を振ひ始めた。

處が世の中は芝居で固めてあるんだ。右の手で金を出すてえと、屹度左の手は物を盜ねて居やあがる。兩手で金を出すてえ奴は居無え、兩手で物を盜ねる奴も居無えや。餘つ程こんがらかつて出來て居やあがる。神樣つて獸は――獸だらうぢや無えか。人ぢや無えつて云ふんだから、まさか己れつち見てえな蟲でもあるめえ、全くだ。

何、此の間スタニスラフの尼寺から二人尼つちよが來たんだ。野郎が難有い事を云つたつてかん〳〵蟲手合ひは鼾をかくばかりで全然補足にならねえつてんで、工場長開けた事を思ひつきやがつた、女ならよからうてんだとよ。

二人來やがつた。例の御說敎だ。集まれてんで、三號の倉庫に狼が羊の檻の中に逐ひ込まれた樣だつた。其の中に小羊が二匹來やがつた。一人は金緣の眼鏡が鼻の上で光らあ。狼の野郎共は何んの事はねえ、舌なめずりをして喉をぐびつかせたのよ。其の一人が、神樣は獸だ……何ね、獸だとは云は無えさ、云は無えが人ぢや無えと云つたんだ。

其の神樣つてえのが人間を創つて魂を入れたとある。魂があつて見れば善と惡とは………何んとか云つた、善と惡とは………何んとかだとよ。さうして見ると善はするがいゝし、惡はしちやならねえ。それが出來なけりや、此の婆婆に生れて來て居ても、人間ぢや無えと云ふんだ。

お前つちは字を讀むからには判るだらう。人間で善をして居る奴があるかい。馬鹿野郎、ばちあたり。旨い汁を嘗めつこをして居やがつて、食ひ餘しを取つとき物の樣に、お次ぎへお次ぎへと廻して居りや、それで人間かい。畢竟芝居上手が人間で、已れつち見たいな不器用者は蟲なんだ。

見ねえ、死つて仕舞やがつた。

何處からか枯れた小枝が漂つて、自分等の足許に來たのを、ヤコフ・イリイッチは話しながら、私は聞きながら共に眺めて、其の上に居る一匹の甲蟲に眼をつけて居たのであつたが、舷に當る波が折れ返る調子に、くるりとさらつたので、彼が云ふ樣に憐れな甲蟲は水に陷つて、油をかけた綠玉の樣な雙の翅を無上に振ひ動かしながら、絕大な海の力に對して、餘り悲慘な抵抗を試みて居るのであつた。

私は依然波の間に點を爲して見ゆる其の甲蟲を、悲慘な思ひをして眺めて居る。ヤコフ・イリイッチは忘れた樣に船渠の方を見遣つて居る。

話柄が途切れて閑とすると、暑さが身に沁みて、かん〳〵日のあたる胴の間に、折り重なつていぎたなく寢そべつた勞働者の鼾が聞こえた。

ヤコフ・イリイッチは徐ろに後ろを向いて、眠れる一群に眼をやると、振返つて私を顎でしやくつた。

見ろい、イフヒムの奴を。知つてるか、「癇癪玉」つてんだ綽名が――知つてるか彼奴を。

さすがに聲が小さくなる。

イフヒムと云ふのはコンスタンチノープルから輸入する卷煙草の大箱を積み重ねた蔭に他の勞働者から少し離れて、上向きに寢て居る小男であつた。何しろケルソン市だけでも五百人から居る所謂かん〳〵蟲の事であるから、縱令市の隅から隅へと漂泊して歩いた私でも、一週間では彼等の五分の一も親交にはなつて居なかつたが、獨りイフヒムは妙に私の注意を聳やかした一人であつた。唯一樣の色彩と動作との中にうよ〳〵と甲板の掃除をして居る時でも、船艙の板圍ひにずらつと列んで、尻をついて休んで居る時でも、イフヒムの姿だけは、一團の勞働者から浮き上つた樣に、際立つて見えた。ぎりつと私を見据ゑて居るものがあると思つて振向くと、屹度イフヒムの大きな夢でも見て居る樣な眼にぶつかつたものである。あの眼ならショパンの顏に着けても似合ふだらうと、さう思つた事もある。然しまだ一遍も言葉を交へた事がない。私は其の旨を答へようとするとヤコフ・イリイッチは例の頓着なく話頭を進めて居る。

かん〳〵蟲手合ひで恐がられが已れでよ、太腐れが彼奴だ。

彼奴も字は讀ま無えがね。

あの野郎が二三年以來カチヤと譯があつたのを知つて居た。知つては居たがそれが何うなるものかお前、イフヒムは見た通りの裸一貫だらう。何一つ腕に覺えがあるぢやなし、人の隙を窺つて、鈎の先で船室小盜でもするのが關の山だ。何うなるものか。女つて獸は榮燿榮華で暮さうと云ふ外には、何一つ慾の無え獸だ。成程一とわたりは男選みもしようし、氣前惚れもしようさ。だがそれも金があつて飯が食へて、べらつとしたものでもひつかけられた上の話だ。眞つ裸にして日干し上げて見ろ、女が一等先きに目を着けるのは、氣前でもなけりや、男振りでも無え、金だ。何うも女つてものは老者の再生だぜ。若死したものが生れ代ると男になつて、老耄が生れ代ると業で女になるんだ。あり相で居て、色氣と決斷は全然無しよ、あるものは慾氣ばかりだ。

私は思はずほゝ笑ませられた。ヤコフ・イリイッチを見ると彼は大眞面目である。

又親つてものがお前不思議だつてえのは、娘を持つと矢つ張りそんな氣にならあ。己れにした處がまあカチヤには何よりべら〳〵したものを着せて、頬つぺたの肉が好い色になるものでも食はせて、通りすがりの奴等が何處の御新造だらう位の事を云つて振向く樣にしてくれりや、宿六はちつとやそつとへし曲つて居ても構は無えと思ふ樣になるんだ。

それでもイフヒムとカチヤが水入らずになれ合つて居た間は、己れだつて口を出すがものは無え、默つて居たのよ。すると不圖娘の奴が妙に鬱ぎ出しやがつた。鬱ぐもをかしい、さう仰山なんぢや無えが、何かから頭の中で圓い玉でもぐる〳〵廻して見て居る樣な面付をして居やがる。變だなと思つてる中に、一週間もすると、奴の身の周りが追々綺麗になるんだ。晩飯でも食つて出懸ける所を見ると、お前、頭にお前、造花なんぞ挿して居やあがる。何處からか指輪が來ると云ふあんばいで、仕事も休みがちで遊びまはるんだ。偶にや大層も無え、お袋に土産なんぞ持つて來やあがる。イフヒムといがみ合つた樣な噂もちよく〳〵聞くから、貢ぐのは野

郎ぢや無くつて、これはてつきり外に出來たなとさう思つたんだ。そんなあんばいで半年も經つた頃、藪から棒に會計のグリゴリー・ペトニコフが人を入れて、カチヤを圍ひたい話に乘つてくれと斯うだ。

之れで讀めた、讀めは讀めたが、思はく違ひに當惑いた。全くまごつくぢや無えか。

蟲の娘を人間が欲しいと云つて來やがつたんだ。

ぢり／＼と板挾みにする様に照り付けて居た暑さがひるみそめて、何處を逃れて來たのか、涼しい風がシヤツの汗ばんだ處々を撫でゝ通つた。

其の晩だ、寢ずに考へたつてえのは。

己れが考へたなんちや可笑しからう。

可笑しくば神様つてえのを笑ひねえ。考へのねえ筈の蟲でも考へる時があるんだ。何を考へたつてお前、己ら手合ひは人間様の様に智慧がありあまるんぢや無えから、けちな事にも頭を痛めるんだ。話がよ、何うしてくれようと思つたんだ。娘の奴をイフヒムの前に突つ放して、勝手にしろと云つてくれようか。それともカチヤを餌に、人間の食ふものも食は無えで溜めた黄色い奴を、思ふざま剝奪くつてくれようか。蟲つけらは何處までも蟲つけらで押し通して、人間の鼻をあかさして見てえし、先刻も云つた通り、親つてえものは意氣地が無え、娘丈けは人間並みにして見てえと思ふんだ。

おい、「空の空なるかな總て空なり」つて諺があるだらう。旨めえ事を云ひやがつたもんだ。己れや其の晩妙に瞼が合は無えで、頭ばかりがん／＼とほてつて來るんだ、何んの事は無え暗闇と睨めつくらをしながら、窓の向うを見て居ると、不圖星が一つ見え出しやがつた。それが又馬鹿に氣になつて見詰めて居ると、段々西に廻つてとう／＼見えなくなつたんで、思はず溜息つてものが出たのも其の晩だ。いま／＼しいと思つたのよ。

さうしたあんばいでもぢり／＼する中に曉方近くなる。夢も見た事の無え己れにや、一晩中ぽかんと眼球をむいて居る苦しみつたらねえや。何うしてくれようと思案の果てに、御方便なもんで、思ひ出したのが今云つた諺だ。「卒の卒なるかな總て卒なり」「卒なるかな」が甘めえ。神符でも利いた樣に胸が透いたんで、ぐつすり寢込んで仕舞つた。

おい、も少し其方い寄んねえ、己れやまるで日向に出ちやつた。

其の翌日鼻とカチヤとを眼の前に置いて、己れや云つて聞かしたんだ。「卒の卒なるかな總て卒なり」つて事があるだらう、解つたら今日から會計の野郎の妾になれ。イフヒムの方は己れが引き受けた。イフヒムが何うなるもんか、それよりも人間に食ひ込んで行け。食ひ込んで思ふさま甘めえ御馳走にありつくんだてつたんだ。さうだらう、早い話がさうぢや無えか。

處がお前、カチヤの奴は鼻の先きで笑つてけつからあ。一體がお前此の話つてものは、カチヤが首行になつて持出したものなんだ。彼奴と來ちや全く二まはりも三まはりも己の上手だ。

お前は見無えか知ら無えが、一と眼見ろ、カチヤつて奴はさう行く筈の女なんだ。厚い胸で、大きな腰で、腕つたら斯うだ。

と云ひながら彼は、兩手の食指と拇指とを繋ぎ合はせて大きな輪を作つて見せた。

面相だつてお前、己れつちの娘だ。お姫樣の樣なのは出來る筈は無えが、膽が太てえんだからあの大かい眼で見据ゑて見ねえ、男の心はぴり／＼つと震へ込んで一たまりも無えに極まつて居らあ。そりや彼奴だつてイフヒムに氣の無え譯ぢや無えんだが、其處が阿魔は阿魔だ。矢張り老耄の生れ代りなんだ。當世向きに出來て居やあがる。

そんな譯で話も何も他愛なく纏まつちやつて、已れのこね上げた腸詰はグリゴリー・ペトニコフの皿の上に乘つかつたのよ。

それ迄はいゝ、それ迄は難は無えんだが、それから三日許り經つと、イフヒムの野郎が飈風の様に驅け込んで來やがつた。

「イフヒムの野郎」と云つた時、ヤコフ・イリイッチは再び胴の間を見返つた。話がはずんで思はず募つた癇高な聲が、もう一度押しつぶされて最低音になる。氣が付いて見ると又日影が移つて、彼は半身日の中に坐つて居るので、私は默つたまゝ座を讓つたが、彼は動かうとはしなかつた。船員が食ふのであらう、馬鈴薯と鹽肉とをバタで揚げる香ひが、蒸暑く二人に逼つた。

海は依然として、ちやぶり〳〵と階律を合せて居る。ヤコフ・イリイッチはもう一度イフヒムを振返つて見ながら、押しつぶした儘の聲で、

見ろい、あの切目の長え眼をぎろつとむいて、其奴が血走つて、からつきし狂人見てえだつた。筋が吊つたか舌も廻ら無え、「何んだつてカチヤを出した」と固唾をのみながらぬかしやがる。

「出したいから出した迄だ、別に所以のある筈は無え。親が已れの阿魔を、救主に奉らうが、ユダに嫁にやらうが、お前つちの世話には相なら無え。些度物に理解を附けねえ。當世は金のある所に玉がよるんだ。それが當世つて云ふんだ。箆棒奴、娘が可愛ければこそ、已れだつてこんな仕儀はする。あれ程の容色にべら〳〵したものでも着せて見たいが親の人情だ。誠カチヤを女房にしたけりや、金の耳を揃へて買ひに來う。それが出來ざあ腕つこきでグリゴリー・ペトニコフから取り返しねえ。カチヤだつて呼吸もすりや飯も喰ふ。ぽかんと遊ばしちやおかれ無えんだから……………お前つちや一體何んだつて、そんな太腐れた眼付をして居やあがるん

だ」

とほざいてくれると、イフヒムの野郎ぢつと考へて居やがつたけが、

と語を切つてヤコフ・イリイッチは雙手で身を浮かしながら、先刻私が讓つた座に移つて、ひた〳〵と自分に近づいた。乾きかけたオヴァオールから酸つぱい汗の臭ひが蒸れ立つて何とも云へぬ。

云ふにや、

と更に聲を低くした時、私は云ふに云はれぬ一種の恐しい期待を胸に感じて心を騷がさずには居られなかつた。ヤコフ・イリイッチは更めて周圍を見廻はして、

氣の早い野郎だ………宜いか、是れからが話だよ、………イフヒムの云ふにや其の人間つて獸にしみ〴〵愛想が盡きたと云ふんだ。人間つて奴は何んの事は無え、贅澤三昧をして生れて來やがつて、不足の云ひ樣は無い筈なのに、物好きにも事を缺いて、蟲手合ひの內懷まで手を入れやがる。何が面白くつて今日々々を暮して居るんだ。蟲つて云はれて居ながら、それでも偶にや氣儘な夢でも見ればこそぢや無えか……畜生。

ヤコフ・イリイッチはイフヒムの言つた事を繰返して居るのか、己れの感慨を漏らすのか解らぬ程、熱烈な調子になつて居た。

畜生。其奴を野郎見付ければひつたくり、見付ければひつたくりして、空手にして置いて、搾り榮がしなくなると、靴の先へかけて星の世界へでも蹴つ飛ばさうと云ふんだ。慾にかゝつてそんな事が見えなくなつたかつて泣きやがつた……馬鹿。

馬鹿。己れを幾歳だと思つて居やがるんだ。蟲つけらの眼から贅澤水を流す樣な事をして居やがつて、悍りながら口幅つてえ事が云へる義理かい。イフヒムの奴も太腐れて居やがる癖に、胸三寸と來ちやからつきし乳

臭なんだ。

だが彼奴の一念と來ちや油斷がなら無え。

宜いか。

宜いか、今日で此の船の錆落しも全然濟む。

又肩からもたれかゝる樣にすり寄つて、食指で私の膝を念入に押しながら、

全然濟むんでグリゴリー・ペトニコフの野郞が檢分に船に來やがるだらう。

斯う云つて彼は私の耳へ口を寄せた。

イフヒムの奴、默つちや居無え筈だ。

私は「默つちや居ねえ」と云ふ簡單な言葉が、何を言ひ顯はして居るかを、直ぐ見て取る事が出來た。餘りの不意に思はず氣息を引くと、逆る樣に鋭く動悸が心臟を衝くのを感じた。而してそは〳〵しながら、ヤコフ・イリイッチの方を向くと、彼の眼は巖の樣な堅い輪廓の睫の中から、ぎらつと私を見据ゑて居た。思はず視線をすべらして下を向くと、世の中は依然として夏の光の中に眠つた樣で、波は相變らずちやぶり〳〵と長閑な階律を刻んで居る。

私は下を向いた儘、心は差迫りながら、それで居て閑々として、波の階律に比べて私の動悸が何の位早く打つかを算へて居た。而してヤコフ・イリイッチが更に語を次いだのは、三十秒にも足らぬ短い間であつたが、それが恐ろしい樣な、待ち遠しい樣な長さであつた。

私は波を見つめて居る。ヤコフ・イリイッチの豹の樣な大きな眼睛は、私の眼から耳にかけたあたりを揉み込む樣に見据ゑて居るのを私はまざ〳〵と感じて、云ふべからざる不快を覺えた。

ヤコフ・イリイッチは齒を喰ひしばる樣にして、
お前も連帶であげられ無えとも限ら無えが、「知ら無え〳〵」で通すんだぞ、生じつか………
此の時ぴーと耳を劈く樣な響きが遠くで起つた。其の方を向くと船渠の黑い細い煙突の一つから斜にそれた靑空をくつきりと染め拔いて、眞白く一團の蒸氣が漂うて居る。ある限りの煉瓦の煙突からは眞黑い煙がむく〳〵と立ち上つて、むつとする樣な暑さを覺えしめる。勞働を強ひる爲めに、鐵と蒸氣とが下す命令である。私は此の叫びを聞いて起き上らうとすると、
待て。
とヤコフ・イリイッチが睨み据ゑた。
きよろ〳〵するない。
宜いか、生じつか何んとか云つて見ろ、生命は無えから。
長え身の上話もこの爲めにしたんだ。
と云ひながら、彼は始めて私から視線を外して、やをら立上つた。胴の間には既に眼を覺したものが二三人居る。
起きろ野郎共、汽笛が鳴つてらい。さ、今日ですつかり片付けて仕舞ふんだ。
而して大欠伸をしながら、彼は寢亂れた勞働者の間を縫つて、オデッサ丸の船階子を上つて行つた。
私も持場について午後の勞働を始めた。最も頭腦を用ふる餘地のない、而して最も肉體を苦しめる勞働はかんかん蟲のする勞働である。小さなカンテラ一つと、形の色々の金槌二つ三つとを持つて、船の二重底に這ひ込み、石炭かすで眞黑になつて、油の樣にとろりと腐敗したまゝに溜つて居る鹽水の中に、身體を半分浸しながら、か

ん〳〵と鐵鏽を敲き落すのである。隣近所でおろす槌の響は、狹い空洞の中に籠り切つて、丁度鳴りはためいて居る大鐘に頭を突つ込んだ通りだ。而して暑さに蒸れ切つた空氣と、夜よりも暗い暗闇とは、物恐ろしい假睡に總ての人を誘ふのである。敲いて居る中に氣が遠くなつて、頭と胴とが切り放された樣に、頭は頭だけ、手は手だけで、勝手な働きをかすかに續けながら、惡い夢にでもうなされた樣な重い心になつて居るかと思ふと、突然暗黑な物凄い空間の中に眼が覺める。周圍からは鼓膜でも破り相な勢で鐵と鐵とが相打つ音が逼る。動悸が手に取る如く感ぜられて、呼吸は今絕えるかとばかりに苦しい。喘いでも喘いでも、鼻に這入つて來るのは窒素ばかりかと思はれる汚い空氣である。私は其の午後もそんな境涯に居た。然し私は其の日に限つて其の境涯を格別氣にしなかつた。今日一日で仕事が打切りになると云ふ事も、一つの大なる期待ではあつたが、軈て現はれ來るべき大事件は若い好奇心と敵愾心とを極端に煽り立てゝ、私は勇士を乘せて戰場に驅け出さうとする牡馬の樣に、暗闇の中で眼を輝かした。

とう〳〵仕事は終つた。其の日は三時半で一統に仕事をやめ、其處此處し殘したところに手を入れて、偖て會社から檢査員の來るのを待つ計りになつた。私はあの二重底から數多の仲間と甲板に這ひ出して、油照りに横から照りつける午後の日を船橋の影によけながら、古ペンキや赤鏽でにちや〳〵と油ぎつて汚れた金槌を拭ひにかかつた。而して拭ひながらいつかヤコフ・イリイッチが「法律つてものは人間に都合よく出來て居やがるんだ。シヤンパンを飮み過ぎちやならねえとか、靴下を二十足の上持つちやならねえとかそんな法律は藥にし度くも無え。はきだめを覗いちやなら無えとか、落ちたものを拾つちやなら無えとか云ふんなら、數へ切れ無え程あるんだ。そんな片手落ちな成敗にへえ〳〵と云つて居られるかい。人間が法律を作れりやあ、蟲だつて作れる筈だ」と云つたのを想ひ出して、蟲の法律的制裁が今日こそ公然と行はれるんだと思つた。

丁度四時半頃でもあつたらう、小蒸汽の汽笛が遠くで鳴るのを聞いた。間違なくセミオン會社所有の小蒸汽の汽笛だ。「來たな」と思ふと胸は穩かでない。船階子の上り口には勞働者が十四五人群がつて船の着くのを見守つて居た。

私の好奇心は我慢し切れぬ程高まつて、商賣道具の掃除をして居られなくなつた。一つ見物してやらうと思つて立上らうとする途端に、

様あ見やがれ。

と云ふ鋭い聲がかの一群から響いたので、私はもう遣つたのかと宙を飛んで、

ワハ………

と笑つて居る、其の群に近づいて見ると、一同は手に〳〵重も相な獲物をぶらさげて居た。而して瞬く暇にかんかん蟲は總て其の場に馳せ集まつて、「何んだ〳〵」とひしめき返して、始めから居たかん〳〵蟲は誰と誰であるか更に判らなくなつて居る。ナポレオンが手下の騎兵を使ふ時でも、斯うまでの早業はむづかしからう。

私は手欄から下を覗いて居た。

積荷のない爲め、思ふさま船脚が浮いたので、上甲板は海面から小山の様に高まつて居る。其の甲板にグリゴリー・ペトニコフが足をかけようとした刹那、誰が投げたのか、長方形のズク鐵が飛んで行つて、其の頭蓋骨を破つたので、迸る血煙と共に、彼は階子を逆落しにもんどりを打つて小蒸汽の錨の下に落ちて、横腹に大負傷をしたのである。薄地セルの華奢な背廣を着た太つた姿が、血みどろになつて倒れて居るのを、二人の水夫が茫然立つて見て居た。

私の心にはイフヒムが急に擴大して考へられた。どんな大活動が演ぜられるかと待ち設けた私の期待は、背負

投げを喰はされた氣味であつたが、きび〳〵とした成功が齎らす、身ぶるひのする樣な爽かな感じが、私の心を引つ掴んだ。私は此の勢に乘じてイフヒムを先きに立てゝ、更に何か大きな事でもして見たい氣になつた。而してイフヒムがどんな態度で居るかと思つて眼を配つたが、何處にまぎれたのか、其の姿は見當らなかつた。

一時間の後に二人の警部が十數人の巡査を連れて來船した。自分等は其の嚴しい監視の下に、一人々々總て危險と目ざゝれる道具を船に殘して、大運搬船に乘り込ませられたのであつた。上げて來る潮で波が大まかにうねりを打つて、船渠の後方に沈みかけた夕陽が、殆ど水平に横顏に照りつける。地平線に近く夕立雲が渦を卷き返して、驟雨の前に鈍つた靜かさに、海面は煮つめた樣にどろりとなつて居る。ドゥニパー河の淡水をしたゝか交へたケルソンでも海は海だ。風はなくとも夕されば何處からともなく潮の香が來て、濕つぽく人を包む。蚊柱の聲の樣に聞こえて來るケルソン市の薄暮のさゝやきと、大運搬船を引く小蒸汽の刻をきざむ樣な響とが、私の胸の落ちつかないせはしい心地としつくり調子を合はせた。

私は立つた儘大運搬船の上を見廻して見た。

寂然して溢れる計り坐つたり立つたりして居るのが皆んなかん〳〵蟲の手合ひである。其の間に白帽白衣の警官が立ち交つて、戒め顏に佩劍を撫で廻して居る。艫に眼をやるとイフヒムが居た。とぐろを卷いた大繩の上に腰を下して、兩手を後方で組み合せて、頭をよせかけたまゝ眠つて居るらしい。ヤコフ・イリイッチはと見ると一人おいた私の隣りに大きく胡坐をかいてくはへ煙管をぱく〳〵やつて居た。

へん、大袈裟な眞似をしやがつて。

と云ふ聲がしたので、見ると大黑帽の上から三角布で頬被りをした男が、不平相にあたりを見廻した居たが、一人の巡査が彼を見おろして居るのに氣が附くと、しげ〳〵それを見返して、唾でも吐き出す樣に、

畜生。

と云つて、穢らはし相に下を向いて仕舞つた。

（一九〇六年於米國華盛頓府、一九一〇年十月白樺所載）

半日

地には雪、空も雪の樣に白み渡つて家並ばかりが黑く目立つ日曜日の午後晩く相島は玄關にあつた足駄をつツかけて二町計りの所に郵便を入れに行つた。歸り路に曲り角で往來を見渡したがそれらしい橇の影も見えぬ。「今日は廢めたのか知らん」と思ひながら横道を這入つて覺束ない足駄の步みを運ばすと子供が凧の絲目をなほして居るのに遇つた。多分は父親でも造つてやつたのだらう、六角形の四枚張りで隅に小さく「佐倉」と名前が書いてある。日本の軍人が支那兵の辮髮を握つて劍を振上げた畫の赤や靑に、雪がちら〳〵と降りかゝつて居る。「御免よ」と云ひながら相島は軟かい雪に一足踏み込んでよけながら通つた。小兒は眞赤な顏を一寸上げて相島を見たなり又絲目をそゝくつて居る。

もう一つ角を曲ると自分の門が見えて、其の前には待ち設けた橇が留つて居た。齡の若さうな瘦せた鹿毛が鼻尖で積んだ雪に惡戲をして居る。相島は其の馬をさすりながら又足駄を雪の中に踏み込んで門を這入ると、玄關の前に井田が居た。

「やア」

と相島は心の中で喜びながら快活に云ふと、井田は疲れた樣子でそれでもほゝゑみながら點頭いて見せた。

相島は大急ぎで中の口から上つて、自分の書齋を通り拔けて玄關に出ると、書生が旣に戶を開けて、暗い家の中から明るい雪の庭が眩しい樣に見える。其の中に井田は矢張り少し氣の拔けた風で立つて居た。

橇は丁度門の前にあつて荷がそつくり見える。竹行李が二つ、柳行李が一つ、漬物樽が一つ、ストーヴが一つ、大きな風呂敷包が一つ、書棚が一つ、それ等がごつたに折り重なつた上に、簡單な机が仰向けに積んであつた。井田が黑の二重マントを式臺に脫ぐ中に出面は机を卸しにかゝる。相島は玄關の障子と奥の襖を外す。書生は玄關につツ立つて其の力强い腕に荷を運ばうと待ちかまへた。

井田は外套を脫いで身が輕くなつたと共に不圖淋しい心持がしたが、それも束の間で、直ぐ机の下にあつた行李を運び始めた。恐らくは井田が淋しく感じた其の時であらう。相島は出面が運んで來た机の隅にくツついて居る雪を指先でさらひながら「まア宜い事をした」と何んの事はなくさう思つた。

電光の如くぱつと輝いた其の思ひはまた消えて相島は一心に荷物を己れの書齋の隣の八疊に運び出した。相島と書生とが梭の樣に這入つたり出たり五六遍すると、荷は室の中に運ばれてしまつた。井田は懐中から蟇口を出して出面に拂ひを濟ますと、出面は一寸禮を云つて馬の轡を引いた。

「おい、そりや馬方のぢやないかい」

と相島が井田の脫ぎ捨てた外套を指すと、井田は例の輕い樣で居て沈んだ語調で、

「いゝえ、是れは僕んです」

と云ひながら式臺に腰を下して靴を脫ぎにかゝる。相島は橇の鈴に氣を取られて暫くは耳を澄ました。

書棚の位置も定まりランプや炭取はそれ〴〵の所に仕舞はれて、井田が住む可き室は彼處此處に雪のこぼれ、堆い皺くちやな新聞紙、赤と白のカタン絲で亂れた。それをまとめて書生が掃除にかゝると、井田はさも疲れた樣子で隣の相島の書齋に這入つて來た。相島は仕切りの襖を締めて廊下に出て、其處の押入れから茶碗を二つと土瓶と茶筒とをつかんで來た。

相島が前膝をついてそれを雜多に疊の上に置くと、
「未だ挨拶もしないで」
と云ひながら井田は一寸ゐずまひを直して頭を下げる。相島は無頓着な風で茶筒から茶をこぼし〳〵土瓶に移してストーヴの上の藥罐を下しながらにこついて居る。書生が隣から座敷を掃きながら、
「井田先生の來るのは大分評判になつて居ますよ。隣家ではフラヘットさんで先生の齡を卜つたら三十四とかの人だと答へた相です」
と云ふ。それを相島は引きとつて、
「うむ、長屋のアマゾン連も二三人出て見て居た」
と云ふ。井田も稍〻元氣づいて、
「隣とは何處です、彼處永丘？　ア、飛んだお嫁さんが舞ひ込んで……蕎麥でも配らなけりやいけないのか知らん」
而して其の最後の蕎麥の事は稍〻眞面目で云つたのであつた。然し相島は平氣で居る。
「今日は君の爲めに湯を沸かして置いたから、少し休んだら一つ片付けて仕舞つて這入つたら如何です」
と云つたが井田は容易に立ち上らうとはしなかつた。而して二人は隣の長岡家に居る白痴の青年の話を始めた。
「妾の何んなんですか」
と井田が聞く。
「さうです。妾の子でもう二十八だ相です」
「大佐は矢張り一處に居るんですか……東京ですか」
「大佐は死んでしまつたんだ――もう餘程前ですよ」

と相島が說明する。

「三十四は驚くな、然し僕は此の頃何んだか青年と云ふ時代と別れる樣な氣がしてならないけれども」

井田は二十七歲である。實にいゝ齡だ。情は熱し未來の到達は未だ夢の儘で居る。實にいゝ齡だと考へながら相島は自分が既に三十二になつたのに思ひ入つた。而して屹と頭を擧げて、

「何、君」

と勢よく口を切る。

「未だ〳〵そりや人は僕等を青年としてはもう許さんかも知れないが、僕は未だ何處までも若い積りだ。さうだね、人は許さないだらうね」

と云つて齒を喰ひしばる樣にした。井田は、

「さうですね」

と云つてほゝゑんだ。井田は相島に對してほゝゑみかけたから、ほゝゑんだのであるが、心の中では深く相島の言葉を憐れんだ。而して又しても起る淋しい思ひをせき留め得なかつた。

「僕は君が來る前から思つて居たんですがね、是れから必ず每週一篇づゝ創作をやつて、土曜の晩に朗讀會をしたら如何かと思ふんですが」

と相島は男らしい安坐の膝を組み直して又快活な事を云つて居る。井田は疑はし相に、

「出來るでせうか」

と又ほゝゑんだ。

「出來るさ……出來すさ」

と相島もにこついた。

斯う云ふ樣な話を低い聲で續けて居る中に、冬の日は急に暗くなつた。窓障子の紙の色が黑みがゝつた薄紫になつた。十日の月が光り出したのだらう。

井田は、

「それでは一寸片付けて仕舞ひますから」

と云ひながら立上つて隣に行つた。時々紙のがさつく音や重い物を疊の上に置く音がする。室は恐ろしく暗くなつて來る。相島は取殘されて疊に落ちた茶の葉を指先にくツつけてストーヴの臺の所に捨てゝ居る。書生が來て

「先生、湯が沸きました」

と開きの外から云つてランプの掃除にかゝつた。井田の心の中には此の頃、おツかぶさる樣な暗い一つの影がさまよつて居るのである。是れは恐らく彼程の年頃の者には誰にでも起る影であらう。前途には眼もくらむ樣な輝きがある。彼は今迄それを心の眼でぢつと眺めて、云はゞ心の中にある五官とも名づくべきもので、しみ〴〵と味つて其の中に甘い悲しみと燃ゆる喜びとを感じて居つたのであるが、手を反へした樣に此の頃其の感じが薄らいで、彼は肉と靈との間の痛切な吸引力に動かされずには居られなくなつた。事實に觸れ度い、事實、事實、事實、事實と彼の全身全靈はをめき叫ぶのである。

それのみならず周圍の境遇は井田に逼つて結婚の決心を促した。こんな事は是れまで井田が思ひもよらぬ事であつた。此の不可思議な人生の一事件を全く客觀的に見せ、井田は隨分大膽な解釋を爲して居たが、事實に踏み込まうと云ふ彼の心と其の友等の熱心な勸告と、斷ち切り難い人の習慣とが激しい權威を振つて彼の上に臨むのである。若い彈力性のある心が、善惡は兎もあれ、是れに抵抗はずに居られようか。

井田の血色が惡くなつて時々淋しい心になつた。

井田は尙ほ暗闇の中に片づけ物をして居る。相島は井田が持つて來た「帝國文學」を開いて眉を顰めながら窓明りで井田の文を讀んで居た。相島はまだ獨身だが、實は旣に婚約をした身である。世に彼程外觀內容のちがつた人間も珍らしからう。彼は始終快活で呑氣で、そゝつかしい骨太ではあるが、頸や手足が小さくて何處かに女性的な小兒らしい面影が見えぬでもない。然るにその內部の傾向は餘程外貌とは異なつて居る。富裕な家に生れて攫むべき機會は幾何も與へられながらそれに對して冷淡な事は驚く計りである。一かどの專門家たり得べき才能を持ちながら、それを其の方向に用ゐようとはしない。三年程外國にも行つて居たが、歸つて來ても格別見識學問を增した樣子もなく、身のとりなしが丸で二十二三の靑年同樣である。結婚の問題の如きも、昔から提供せられたものだが、彼は超然としてそれを跳ね付けた。恐らく彼の父なる人の頭に白髮が增さなんだならば、彼は何處までもそんな調子で居たかも知れぬ。其の辮眞身に彼の心の戸を敲くものがあると、思ひがけない藍色の悲哀がふいと顏を出す樣な事もあつた。

井田が室內を片づけ終つた時は旣に夕餉の支度が出來て居た。井田は湯に這入らうと持つて來た石鹼や手拭をランプ棚の上にのせて中の口に出て來た。此には五分心のランプがチヤブ臺の上に載つて居る。加賀產れで丸々と克明な門徒のばアやがもご／＼云ひながら挨拶すると、井田も口の內で何か云ひながら、世話になると云ふ心を示した。チヤブ臺の上には豆腐の汁と何か魚の煮たのと井田の持つて來た淺漬とが置いてある。書生を合せて鼎座で箸を取つた。

「今日では敎會に行きますがね。ひよつとすると楠が來るかも知れないが、さうしたら敎會に居るからツて、さう云つて呉れ給へ」

と相島は書生に言ひながら井田と共に食卓を立つた。而して一寸休んだ後、袴をはいて黑い毛絲の頸卷をまき付けて氣輕相に出掛けて行つた。

井田は自分の室からソフォクレースの悲劇集を持つて來て開いて讀まうとすると、書生が來て湯の事を云ふので這入りに行つた。暗いランプの下には濛々と湯氣の立ち籠めた狹い風呂場ではあるが、長く下宿屋の生活をして町湯にばかり這入りつけた彼には、一種家庭的な心地がする。井田は暖く濕つた手拭を顏に押しあてた儘暫く解ける樣な疲れの味を味つた。「相島と云ふ男は何んだつて敎會へなんぞ行くんだらう、矢張り囚へられてる連中か知らん」と思つたが、さうは解釋し度くなかつた。今、井田が住む町で相島が一番趣味の合つた話相手なのである。井田は顏から手拭を取つて上向き加減に湯氣の奧の暗やみを見やつて又何と云ふ事なしに考へた。不圖隣の長岡家からけたゝましい驚いた鷄の樣な聲が、手に取るばかりに聞えたので不思耳をひき立てた。それが二度三度と聞える。「白痴の靑年だな」と井田は思つた。而して不思議にも彼の想ひは東京の自分の家に飛んで、弟の面影がまざ〳〵と眼に浮んだ。井田の眉は烈しくひそんで同時に眸が異風に輝いた。すると又叫びが聞える。井田は舌鼓を打ちながら「傳染り相な聲だな」と不知に獨語して頭からまくしかゝる或者をつき破るかの樣な勢で、さつと風呂から立上つた。

相島は其の頃丁度敎會に着いて居た。辷り相な石段を上つて男子入口の戶を開けると暖い空氣と華やかな光とが暗と寒さとに逆らつて流れ出た。見ると牧師は腰掛の一端に倚りかゝつて後向に一人の靑年と話をして居たが、相島の這入るのを見ると、其のつや〳〵しい長い髮を電燈の光に輝かして一寸挨拶をした。相島は地味な衣服を着た居竝んだ一群の婦人席を一寸顧みて末席に腰を下した。

「それでは少し讃美歌の練習をしませう」

と聽て牧師が男らしい聲で快活に云ふと、女で居ながら人の前で決して面をかぶらない、其の細君は飾り氣のない身ぶりて腰掛を立上つてオルガンに近づいた。風呂敷の中から讃美歌集を取出す音が暫くざわ〳〵と聞えた。

オルガンが鳴り出すと相島は昻然として腰掛から立上つたが、餘の人は坐つた儘で居る。歌が起る。「神よ己が願ふ所は重荷を輕められん事にあらず、願ふはそを負ふに堪ふるの力を與へ給はん事なり」と云ふ意味の歌が離れ〳〵の調子で物惰げに堂に滿ちた。相島は低い力のある聲で半ばまで歌つたが「くだらん」と思ふと本を閉ぢて坐つて仕舞つた。而して眼をつぶつて皆の歌ふのに耳をかたむけた。離れ〳〵の調子で物惰げにゆるく音律が流れて電燈の光までが暗くなる樣に思はれる。「もう少しゆるく歌へば好いんだ、さうすれば基督教なんぞは滅びて仕舞へるのに」と云ふ樣な冷刻な考へが、深い淵の中に石が沈んで行く樣に彼の感情の最下底に落ちて來る。

拔き足で相島の前の腰掛に坐つた人があるので、相島が眼を開いて見ると楠であつた。病院に居る妹の處から來たのだらう、彼男は屹度妹に親切に違ひない。乙に取すました調子で看護婦や妹の友達などが出入する室で色色と世話を燒くのだらう、始終良心に攻められて居る樣な顏をして實際も多少は攻められながら萬人の行く大道を利口に先走りする典型だなと相島は益々皮肉になる。不圖許婚の自分の妻の事が眼に浮ぶと四圍が急に華やかになる。東京をたつ其の日荷物を造りながら「安子僕の名を呼んで御覽」と云ふと顏を赤めてはにかんで仕舞ふのを近寄つて肩に手をかけながら「安子」と云つても返事をしない、又「安子」と強く云ふと下を向いて前髮を振はしながら聞えない程に「雪雄さん」と云つた。相島は不思心がときめいて、息のつまる程かき抱いて始めて女と云ふものゝ唇に自分の唇を觸れた。其の時の事を思ひ出したのである。彼の眼の前には教會もない、讃美歌もない。今まで妻の事を思ひつめながら見詰めて居た、前の腰掛に爪で書いてある「明治三十九年八月二十二日」と云ふ字もない。顏がほてるのさへ覺えて、頬から今日剃つた顎にかけて撫で廻すと、はツと夢が覺めた樣

になつて相島はふツと氣息を天井に吹いた。同時に「それが何んだ」と云ふ聲が雷霆の如く心を撲つたので、彼は「へん馬鹿め」と誰かに鼻の頭でもはじかれた様な顏をした。

相島が眼をさまして見廻すと、會堂には三分程人が坐つて居た。牧師はやをら身を起して講壇に登つたが、例の黑い運動着が又眼に付く。松崎には似合つた代物だが、松崎牧師としては不似合極まると心の顏をしかめながら思つた。讃美歌が濟み聖書の朗讀が濟み松崎は思ひ入つた様に原稿の皺を伸しながら「モーゼの神と基督の神」と云ふ題で傳道說教を始めた。モーゼが四十年の間アラビヤの砂漠をさまよつた事、基督が四十日の間荒野の中で苦しみ給ひし事、そんな事が時々相島の耳を撲つたが、相島の心は說教に耳を傾けて居ないで、隣に坐つて居る二人の青年のさゝやきに耳を傾けて居た。中學生であらう、二人とも生意氣らしい。一人はにきびの出來た顏に强い近眼の眼鏡をかけて居る。

「おい行かうか」

と一人が云ふと、片方のが指さしをしながら小さな聲で何かさゝやいたが、相島が邪魔で出られないぢやないかと云つたのが相島にはすつかり判つた。又話がつゞく。

「うまいね」

「〇〇ぢや一番うまい」

「だけど、もう厭やになつた」

「己れもよ」

「來て居るかい」

と二人が婦人席をのぞく。

「馬鹿ッ」と一人が大きな聲で云つて、二人で高笑ひをする。聽衆は過半振返つて青年を見たが、相島は振返つた聽衆を睨みかへしてやりたかつた。相島は此の二人の青年と此の振返つた聽衆との間に伍する事が腹の立つ程厭やになつた。而してぶッつり下を向いて腕を組むと遂に彼の心の底の蓋が口を開いた。相島ははッと生れ代つた様に眞面目になつた。超越した人生を送るのに何の誇りがある、我が見る所聞く所が人生ではないか、人とあるなら見事に其の中に生き通せ、彼等に伍し彼等を愛し得られぬ位なら死んで仕舞へ。天才と稱せられる少數の人の間に呼吸をするのは、最も醜惡な空氣を最も高尙に吸ふ事だ。其の人は最もまとまつた人生の圈外を歩くものだ。高い所から下を見てあざわらふ、そんな卑劣な惡魔的な態度に安住すべきでない。

最も高尙な空氣を最も醜惡に吸つて生きろ。

相島はひし／＼と基督の人格に觸れた樣に思つた。漁夫や稅吏や娼婦やマグダレナのマリアやザーカイやの間にまじつた基督の顏を見る樣に思つた。而して殆んど涙にあふれんとする眼を擧げて牧師を見た。說教は進んで牧師の意氣も昂まつて居た。あの牧師は科學の思潮には最も觸れ易い學校の出身者で、實生活と云ふものにも鋭敏な感覺を有つた人であるのに自ら好んで基督の宣傳者となり、其の同窓等が一かどの科學者として宗教其の者の存在をすら疑はうとして居る間に、獨り目立たぬ苦闘をして居ると思ふと、相島は眼の前に一個の殉教者を見る樣な心持がして熱心に其の姿を見やつたのであつた。而して相島は嘗て日記にフォツクスの事を書いて「われは彼を尊敬す。されど神は歩むべくわれに他の道を賜へり」と結論した事や「人は其の終局に於て遂に孤立せざる可らず」と書いた事やを思ひ出した。

禮拜が終ると相島は楠に一言二言云つて直ぐ教會を出た。外套を着ない懷に夜風がしみて空の星が交る／＼近

くなつたり遠くなつたりする樣に光る。急いで淋しい町に這入つて何んとなく唯急いだ。「他の道」「孤獨」と云ふ樣な字を繰返し〳〵考へたり、やめたりして、彼の心はせき立てられる樣な不安に充ちた。

家近くの露地で相島は突然雪の上にすべつた。彼は元氣よく起き上つて、手袋を脫いで腰の雪を拂ひかけた途端、

「貴樣はすべる時屹度人の居ない所ですべるぞ」

と云ふ聲が心の奧でした。彼は雪を拂ふのをやめてしまつて、肩を怒らしながらづか〳〵と步いて家に着いた。書齋の唐紙を開けると明るいランプの下に井田はソフォクレースを讀んで居た。相島は火を見る事が好きな男で、蠟燭の火が一番綺麗だとか、油煙の立つランプ程癇癪の起るものはないとか云つて、此の町に來てから四度ランプを取り代へた。彼は今此の明るい火を見て總ての事を忘れた樣な快活になつて黑い頸卷と鉢の高い帽子とを玄關になげ出したなりどつかりストーヴの側に腰を下した。井田は書物から眼を放して稍ゝ遠慮げにほゝゑんだ。

「唯今……湯に這入りましたか」

と云つて相島は井田の机の上に眼をやつて、

「其のソフォクレースの表裝は大したものですね」

と腕を伸してそれを取つた。

「えゝ是れは安くつて一寸好ござんす」

「あゝ本當の皮ぢやないんですね。是れが本當のだといゝんだが……古いのはいゝですね」

「えゝ」

「どうです是れは面白う御座んすか」

「矢張り希臘のものには云はれない好い所があつて、何んだが大きい深い様な所がある様ですね」

「はアさうかナ」

と云つて相島は小兒の様に羨まし相な顔をした。而して話題は暫く希臘の世界に這入つて行つた。井田は何時でもかうなると顔が冴える。聲にも力が出てパリスの悲劇を語り出した。相島は依然として羨まし相にそれを聞いた。而して不圖思ひ出した様に立上つて隣の室の書棚から古びた一冊の書物を持つて來た。

「何んです」

相島は意味の分らないほゝゑみかたをした。

「是れはねえ、是れでも僕が……學校に居た時は夢中で愛した本だ。こんな風に表装までさしたんです」

それは若くて死んだ一基督教青年の遺稿であつた。黒皮の表装で中には相島が自分で描いた挿畫が入れてあつて、詩や文には赤青の線が引き散らしてある。相島はなつかし相に彼處此處とペーヂをまくつて躊躇して居た様子であつたが、やがて其の中の一つの詩を讀み上げた。聖書の雅歌其の儘の調子で意味のまとまらぬ様な事が書いてある。井田は、

「いかにたゝへん、いかにほめん」

とか、

「あまつそらに、今日始めて歌の組の首となり
香とび散る百合の影に」

とか、

「此世にて又遇ふべきか――遇はざるか

此世にて又遇ふ事のなかれかし。
又遇ふとは恨の井戸を深く掘りなして
若水くむなり」

とか云ふ句を處々聞きながら默つて首を下げて居た。下らん何んで相島は時々あゝ平凡になるんだらうと考へながら彼の心は今まで熱烈に彼を捕へて居た希臘の悲劇に飛んで居る。一つの歌を讀み終ると、相島も氣が付いたらしい、自分もつまらなさ相に其の本を投出したが又拾つてページをばら〳〵とやつて又なげ出した。井田は何んだか氣の毒になつて其の書物を取上げて見たが、どうしても下らんので下に置いた。話が一寸途切れる。

相島は側にあつた籠を引き寄せて、其の中から皮の色の見事に紅い林檎を選んで、器用に皮をむいて口に入れるとさく〳〵と渇いた人の様に嚙んで居たが、やがて眼をつぶつて林檎をふくんだ儘で默つて居る。やがて、

「うまい」

と眼をつぶつた儘で云つた。

其の時突然玄關の戸を動かしたものがある。相島は一寸立つたが思ひついた様に後がへりして先刻の古い本を持つて出た。玄關の所で話聲がする。

「先刻は失敬」

と相島の大きな聲がすると、小さな聲が何か云つて居た。

「是れは僕が嘗て愛讀したんだが、此の外には一寸日本の本はないからまあ持つて行つて見給へ……こんなものでも病人にさはるといけないから、初めに君が讀んで見てくれ給へ。それで關はないと思つたら病院に持つて行きたまへ」

て行つた。

楠は夜更くなつて濟まなかつた事や、本を貸して與れた事の禮やらを今夜は殊に丁寧に小さな聲で云つて歸つて行つた。相島は楠が返してよこした書物三四冊を抱へて書齋に這入つて來た。

フラウ・ゾルゲとハイマートとサンクト・ヨハニス・フォイエルとインガソールの文集とであつた。井田は其の中からフラウ・ゾルゲを取上げて、

「貴方も是れをお持ちですね、僕は此の間丸善に註文して置いたが」

と云つた。

相島は井田がフラウ・ゾルゲの飜譯に着手しようとして居るのを知つて居る、而して「あれが井田の弱點だ。井田は動かされ過ぎる、も少し執着するといゝんだ」と思つた。此の時相島は自分の企てゝ居る飜譯の仕事が井田の心を動かしたのだと推して居たのだ。

それから二人の間にフラウ・ゾルゲの内容に就いて話が進んだが、どうした調子か話頭が戀愛の事になると、相島は突然彼の周圍に起つた種々の事件を語り出した。彼の妹が道ならぬ戀の爲めに死なんとした事や、弟に夫婦約束をした女のある事や、其の他其の友達の上に起つた事迄も大膽に打開けて物語つた。井田は此の話を聞きながら相島を見ると、其の眼は異樣に輝いて、繰出す言葉には熱がある樣である。相島は如何にも井田を親しいものゝ樣に思つた。何もかも今夜を過さず云つて仕舞ひたくなつた。而して井田が、

「今度は君の懺悔を聞き度いものですね」

と云ふと、彼は淋しく笑つてから云つた。

「僕に打込む樣な女を見ると、僕は其の女が低い女だと思うて取りあはないし、僕が打込みたいと思ふ女に遇ふ

と其の女の愛を受ける事が何うしても出來ないものと獨りで定めて仕舞ふもんだから僕にはローマンスなんかはないんです……考へて見ると僕の行方は皆んな左樣だね、何か一つ取捕まへて固着しなければうそだとは始終思つとるんだが、其處がさう行かないんだ。第一取捕まへて仕舞へば其奴が安つぽいものになつて仕舞つてそれに執着するなんて云ふ馬鹿は出來なくなるしさ……畢竟僕なんざア斯う云ふ風に安住の地を求めて、それに安住したら一つの仕事をしとげる氣で居て一生涯安住の地なんぞは見もしないで死んじまふ典型だと思ふんです」

と何時もの訥辯に似ずすら〳〵と言ひ切つて、成程と心からうなづいて見せた井田を見やつた。而して暫くしてから懺悔をする人の樣に少し下を向いて、

「つまり僕は心のどん底が臆病なんですよ」

とつぶやく樣に云つたが、ふツと擧げた其の面は見違へる樣に快活になつて居る。井田はこんな不思議な變化は自分に絕えてない所だと思ひながら、

「僕もどうも左樣な樣だな」

と低く云つてぢつと相島の顏を見返した。

二人の話は又暫く途切れた。段々と淋しみが二人の胸に逼つて來る。此の二つの心は急に密接した爲めに、今は却て恥かしい樣に一種の遠慮を感じ初めたのである。相島が、

「どうです、もう寢ようか」

と口を切ると、井田も、

「左樣ですね」

と重く贊成をしたが身體は割合に輕く立上つた。

相島は自分の布團をひきながら、

「井田君、君は初めて他人の家に泊る時でも同じ樣に寢られますか」

と聞いた。自分の室に退いた井田は、一變した自分の境涯を見廻しながら、

「さうですね、寢る事もあるし……」

と單純に答へる。相島は何か尙ほ話を續けたい樣であつたが、

「今日は疲れたから寢られるでせう……左樣なら」

と云つて床にもぐつて仕舞つた。井田も仕切の襖を締めて床に就いた。消したランプの油煙の匂と蜜柑の皮の香が室に滿ちてストーヴのぬくもりが氣味の惡い程である。井田は寢ながら相島の性格を色々に考へて見たが、其の奧の方に中々分り兼ねる節が一つある。兎に角數箇月彼と同居するのは面白からう。事實々々、さうだ。此處にも事實がある。如何して自分は事實を眼の前に見ながら、其の事實に觸れて見る事をしないのか知らん、東京の姉は今何をして居るだらう。子供の眼がさめて乳でもやつて居るか知らんと思ふと、自分に似た眉頭の邊がまざ〳〵と見えて來る。それが不圖近頃結婚した內山の細君の顏になる。ソフォクレースの悲劇集の中にはさんであつた、內山の去年の夏の手紙の中の、

「われとわが思ひ定めし人の行末は、知る人ぞ知る神もなし……彼女は益々われに忠實なれば、わが心は切らるるが如し……煙を見よ」

と云ふ樣な煩悶の句がちぎれ〳〵に頭に浮んで來る。事實に觸れなければいかんと思ふ。內山の細君の樣な人を自分も、思ひ切り命かぎり戀して見たい樣な氣がする。內山の妹の十四五の幼な顏が見える。結婚と云ふ事に考

へが向くと彼の眼はぱツと冴えた。此の時隣で相島が、
「君未だ寢ないんですか」
と聲をかけた。
「えゝ未だ寢られません」
と云つて井田は眞面目に寢ようと身體を一ゆすりゆすつた。相島は寢床に這入ると非常に疲れて居た。「井田君は甘く寢られゝばいゝが」と彼は心から親切にさう思つた。而して體質の健康な彼は井田よりも少し早く深い眠りに陥つて居た。

（一九〇九年二月、於札幌北二條東三ノ九）

西方古傳

――シェンキウヰッチ――

五彩の水ゆるやかに流るゝ河に添ひて、限り知らぬ草野あり。草野のなだらかなる凹處には、渉りせらるべき程淺き溷澤成り、白蓮と紅蓮と之れに華き、綠なる葦は澄みて藍なる水を抽けり。虹の彩なる胡蝶、蜻蛉、花を遶りて遊び舞ひ、草野に茂れる松の木の間には、白日の中に小禽銀の鈴振れるが如く歌ふ。

河の此方なるを名づけて「命の地」と云ひ、彼方なるを「死の地」と呼ぶ。共に佛陀が全能の御手に成れり。彼れ佛陀「命の地」を慈悲の菩薩ヴェスヌに授け、「死の地」を智慧の菩薩シバに與へ、心の儘に司り治めよと宣り給ひぬ。

ヴェスヌが領には萬生競ひ榮え、漲り滿ちぬ。日出でゝ入り、潮寄せて歸り、夜往きて日來り、雲空に起りてかつ流れ、森地を蔽ひてやゝに殖え行く人と野の獸之れに屯しぬ。慈悲の菩薩そをいやに榮えしめんとて、生命を將て安養と伴ならしめ給へり。

玆に佛陀ヴェスヌを召して宣はく。「爾金剛寶土を成就せり。下界にありては克く之れに過ぐる事を望み難し。暫く拱手して相干はる事なかれ。爾の名づけて『人』と謂へる者をして、おのがじゝ生命の綵績がしめよ」と。

ヴェスヌ宣を畏みぬ。かくて後、人の振舞其の願欲する所に從ふべくなりぬ。

かくてより安養怡樂の瞬轉は哀傷悲愁の瞬轉と相交るに、人、生命の常住久遠の樂境にあらざるを驚き覺りぬ。佛陀の宣へる「生命の絲續げる」姉と妹、一人は笑ひ一人は泣きぬ。されば二人ヴェスヌの前に歎き請ひ曰ひけるは、「あはれ我等が菩薩、現世は哀傷に充ち、生命は酸苦なり」、菩薩應へ給はく、「慈悲相憐もて囘向せよ」と。

彼等安堵して退けり。實に慈悲は苦悶と悲愁とを沒了し、相憐の功德は無量にして哀傷の荷を輕む。さはれ慈悲相憐の發露は生命を產み擴ぐるに、ヴェスヌが治ろす地廣しと云へど、森の木の實蜜蜂の蜜漸く足はずなりぬ。かゝりければ中に性賢きもの木を伐りて畑となし、種播きて秋に蒐めぬ。

勞役玆に起り、總ての人是れに從事せり。之れに據らざれば生くべからずして、生命は卽ち勞役となりぬ。勞役には努力を要す。努力の結果する所は疲弊なり。かゝりけれど人再びヴェスヌの座に詣り、擧手禮拜して訴ふらく、「やよ菩薩、勞役我等を疲弊せしめ、我等の骨痛む。我等休安を求むれども生きんが爲めには勞役する外術あらず」。

ヴェスヌ、「大慈大悲の佛陀わが爾等の勞役に干るを禁じ給へれど、爾等が苦愁を輕めんが爲めの故に、一事を裁して慰藉を得しむべし」と宣り給ひて、人に新たなる寵賜睡眠を投けたびぬ。眠れば煩惱も哀傷も失せて、退ける力還りぬ。睡眠は慈母の如くなやめる者の涙を拭ひ、「忘却」の衣着す。人稱へけるは「祝福すべきかな睡眠、爾は現世の生に勝れり」と。

されども滿足は遂に成り難し。睡眠の樂境は久遠ならず。覺むる時那事彼等をか待てる。新たなる哀傷、新たなる惑溺、已む時なき勞役のみ。人是れを知りてより三度ヴェスヌの座前に進む。「噫、菩薩、尊貴なる寵賜は我等畏みて承けぬ。されどそも亦缺くる所あり、希くば睡眠を久遠ならしめ給へ」

慈悲の菩薩が眉は、人の心の厚かましさに集りぬ。答へ給ふらく、「爾等わが念力のよくせざるものを求むるよ。永へに眠らんとならば、かの河の涿澤を越えよ」と。

宣に從ひて人雲の如く涿澤の方に下り行き、向へる岸打見やりぬ。

彼方の岸水深く澄み花競ひ咲きたるが「死の地」菩薩シバの領なり。

其處に、日昇らず將た沈まず、晝もなく夜もあらず、暮靄萬象を裹みて物影を投げず、紫光總てを貫き紫光總てを創れるらし。景物咸らに潤澤し、谿あり、丘あり、花の枝には葛羅り、蘿と野の葡萄とは巓を裝ひ、巖も木も透徹して光もて織れるが如く、葛蘿の葉は曙の色に匂ふ。萬象實に唯甘き夢に醉へるにや、「命の地」には見るべからざる淨樂の氣遍漫して聊かの動なく花かたぶかず、葉ものいはず。

岸邊に罵り集へる人、此の見知らぬ寂光淨土のいつくしさに固唾のみぬ。

「何等の寂寥、何等の樂土ぞ、爾かなり安養彼處にあり。久遠の睡眠も亦彼處にあり。我等行きて休安する事久遠ならばや」と心はやりたるもの叫びぬ。

輝ける水の面は、心誘ふ魔の如く群集を迎ふるに、殘れる誰彼哀別の苦しみ遣る瀬なくて、もどさんと犇きけれども振返らんずる者一人だにあらぬ斗り、現としもなき景色は彼等を魅したり。進み行くまゝに彼等の五體は淨透し、やがては「死の地」に滿ちたる寂光に輝き匂ふ計りとなりぬ。かの岸に上れる時、彼等は懸崖に近き草野なる木立の下に花折り敷きて伏し眠りぬ。睫を合せたる其面わには、安養の色相描ける如く、言筆に絕えたる淨樂の相「命の地」には見難しとまでなり。

此方の岸に之を見たる人相語りけるは、「シバの領は我等の國に勝れり」

かくて殘れる者も踵を連ねて相渉りぬ。幼きも老いたるも妹も夫も、母は子と、吉士は少女と、幾千の人衆先

きを爭へば、軈て「命の地」荒れ果てんとす。

保正の菩薩は、偶然なりし一語のかくなり果てしに驚き給ひて、全能佛陀の前に奏すらく、「南無如來尊意成就して『命の地』莊嚴圓滿なりしが、人總てそを捨て了んぬ」。「一人だに殘れるはなきや」と佛陀問ひ給ふ。「唯妙齢花顏の一男と一女、互に相戀ひて現在瞬轉の懽樂には、久遠の安養も代へまじと云へるが逗れるのみ」、「爾の念欲する處は那事ぞ」、「『死の地』をして寂滅爲樂の淨土たらしめざれ。留殘の二人も亦老いて戀思の薄らがん時、我が領には得留るまじければなり」。

佛陀傾首須臾にして宣く、「我れ『死の地』を變化する事なからん、人の彼の岸に渉るに任せよ、唯々長壽を保ちて彼岸に至る事を以て容易ならざらしめん」と。かくて厚き暗黑の帳を織りて兩地の境に揭げ、惡棘の幽鬼「煩悶」と「畏懼」とをしてそを取り守らしめ給へり。

かくて後、生命再びヴェスヌに競ひ榮えぬ、「死の地」は昔ながら寂滅爲樂の淨土なれども、人はかの物凄き黑き帳をおぢ恐るゝなりけり。

（一九一〇年四月、白樺所載）

彼はとう〳〵始末に困じて、傍に寢てゐる妻をゆり起した。妻は夢心地に先程から子供のやんちやとそれをなだめあぐんだ良人の聲とを意識してゐたが、夜着に彼の手を感ずると、警鐘を聞いた消防夫の敏捷さを以て飛び起きた。然し意識がぼんやりして何をするでもなくそのまゝ暫くぢつとして坐つてゐた。

彼のいら〳〵した聲は然し直ぐ妻を正氣に返らした。妻は急に瞼の重味が取り除けられたのを感じながら、立上つて小さな寢床の側に行つた。布團から半分身を乘り出して、子供を寢かしつけて居た彼は、妻でなければ子供が承知しないのだと云ふことを簡單に告げて、床の中にもぐり込んだ。冬の眞夜中の寒さは兩方の肩を氷のやうにしてゐた。

妻がなだめたならばと云ふ期待は裏切られて、彼は失望せねばならなかつた。妻がやさしい聲で、眞夜中だからおとなしくして寢入るやうにと云へば云ふほど、子供は鼻にかゝつた甘つたれ聲で駄々をこねだした。枕を裏返せとか、裏返した枕が冷たいとか、袖で涙をふいてはいけないとか、夜着が重いけれども、取り除けてはいけないとか、妻がする事、云ふ事の一つ〳〵にあまのじやくを云ひつのるので、初めの間は成るべく逆らはぬやうにと、色々云ひなだめてゐた妻も、我慢がし切れないと云ふ風に、寒さに身を慄はしながら、一言二言叱つて見たりした。それを聞くと子供はつけこむやうに殊更聲を曇らしながら身悶えした。

彼は鼻の處まで夜着に埋まつて、眼を大きく開いて薄ぼんやりと見える高い天井を見守つたまゝ默つてゐた。

晩くまで仕事をしてから床に這入つたので、重々しい睡氣が頭の奥の方へ追ひ込められて、一つのとげ〳〵した塊的となつて彼の氣分を不愉快にした。

彼は物を云はうと思つたが面倒なので口には出さずに默つてゐた。

十分。

十五分。

二十分。

何んの甲斐もない。子供は半睡の狀態からだん〳〵と覺めて來て、彼を不愉快にしてゐるその同じ睡氣にさいなまれながら、自分を忘れたやうに疳を高めた。

斯うしてゐては駄目だ、彼はさう思つて又むつくり起き上つて、妻の傍にひきそつて子供に近づいて見た。子供はそれを見ると、一種の嫉妬でも感じたやうに氣狂ひじみた暴れ方をして彼の顏を手でかきむしりながら押し退けた。數へ年の四つにしかならない子供の腕にも、こんな時には癪にさはる程意地惡い力が籠つてゐた。

「マヽちやんの傍に來ちやいけない」

さう云つて子供は彼を睨めた。

彼は少し嚴格に早く寢つくやうに云つて見たが、駄目だと思つて又床に這入つた。妻はその間默つたまゝで坐つて居た。而して是れほど苦心して寢かしつけようとしてゐるのに、その永い間、寒さの中に自分一人だけ起して置いて、知らぬげに臥てゐる彼を冷やかな心になつて考へながら、子供の仕打ちを胸の奥底では justify してゐるらしく彼には考へられた。

彼は子供の方に背を向けて、そつちには耳を假さずに寢入つてしまはうと身構へた。

子供の口小言は然し耳からばかりでなく、喉からも、胸からも、沁み込んで來るやうに思はれた。彼は少しづついら〳〵し出した。しまつたと思つたけれども、もう如何する事も出來ない。是れが彼の癖である。普段滅多に怒ることのない彼には、自分で怒りたいと思つた樣々の場合を、胸の中の棚のやうな所に疊んで置いたが、どうかすると、それが下らない機會に乘じて一度に激發した。さうなると彼は、彼自身を如何する事も出來なかつた。はら〳〵して居る中に、その場合々々に應じて、一番危險な、一番破壞的な、一番馬鹿らしい仕打ちを夢中でして退けて、後になつてから本當に臍を嚙みたいやうなたまらない後悔に襲はれるのだ。

妻は、相かはらず煮え切らない小言を、云ふでもなし云はぬでもなしと云ふ風で、その癖中々しつゝこく、子供を相手にしてゐた。いら〳〵してゐる彼には、子供がいら〳〵してゐる譯が胸に徹へるやうだつた。あんなにしんねりむツつりと首も尻尾もなく、小言を聞かされてはたまるものか、何んだつてもつとはつきりしないんだ、と思ふと彼の齒は自然に堅く嚙み合つた。彼はさう堅く齒を嚙み合はして、瞼を堅く閉ぢて、もう一遍寢入らうと努めて見た。塊的になつた睡氣は然し後頭の隅に引つ込んで、眼の奥が冴えて痛むだけだつた。

「早く寢ないとマヽちやんは又あなたを穴に入れますからね」

始めは可なり力の籠つた言葉だと思つて聞いてゐると仕舞には平凡な調子になつてしまふ。子供はそんな言葉には頓着する樣子もなく、人を焦立たせるやうに出來た泣き聲を張り上げて、夜着を踏みにじりながら泣き續けた。彼はとう〳〵たまらなくなつて出來るだけ聲の調子を穩當にした積りで、

「そんなに泣かせないだつて、もう少しやりやうがありさうなものだがな」

と云つた。がそれが可なり自分の耳にもつけ〳〵と聞こえた。妻は彼の言葉で注意されても子供を取扱ふ態度を改める樣子もなく、默つたまゝで、無益にも踏みはぐ夜着を子供に着せようとしてばかりゐた。

「おい、どうかしないか」

彼の調子はます／＼尖つて來た。彼はもう驀地に自分の癇癪に引き入れられて、胸の中で憤怒の情がぐん／＼生長して行くのが氣持がよかつた。彼は少し慄へを帶びた聲を張り上げて怒鳴り出した。

「光！　まだ泣いてるか――默つて寢なさい」

子供は氣を吞まれて一寸靜かになつたが、直ぐ低い啜り泣きから出直して、前にも增した大袈裟な泣き聲になつた。

「泣くとパヽが本當に怒るよ」

まだ泣いてゐる。

その瞬間かつと身體中の血が頭に衝き上つたと思ふと、彼は前後の辨へもなく立上つた。はつと驚く間もあらせず、妻の傍をすり拔けて、兩手を子供の頭と膝との下にあてがふが早いか、小さい體を丸めるやうに抱きすくめた。不意の驚きに氣息を引いた子供が懸命になつて火のつくやうに「マヽ……マヽ……パヽ……もうしません……もうしないよう……」と泣き出した時には、彼はもう寢室の唐戶を足で蹴明けて廊下に出てゐた。冷たい板敷が彼の熱し切つた足の裏にひやりと觸れるのだけを彼は感じて快く思つた。その外に彼は何事をも意識してゐなかつた。張り切つた殘酷な大きな力が、何等の省慮もなく、張り切つた小さな力を抱へてゐた。彼はわなゝく手を暗の中に延ばしながら、階子段の下にある外套掛けの袋戶の把手をさぐつた。子供は腰から下が自由になつたので、思ひきりばた／＼と兩脚でもがいてゐる。戶が開いた。子供はその音を聞くと狂氣の如く彼の頸にすがり付いた。然し無益だ。彼は蔓のやうにからみ付くその手足を沒義道にも他愛なく引き放して、いきなり外套と帽子と履物と掃除道具とでごつちやになつた眞暗な中に子供を放り込んだ。その時の氣組なら彼は殺人罪でも

犯し得たであらう。感情の激昂から彼の胸は大波のやうに高低して、喉は笛のやうに鳴るかと思ふ程燥き果て、耳を聾返へらすばかりな内部の噪音に阻まれて、子供の聲などは一語も聞こえはしなかつた。外套のすそか、箒の柄か、それとも子供のかよわい手か、戸をしめる時弱い抵抗をしたのを、彼は見境もなく力まかせに押しつけて、把手を廻し切つた。

その時彼は滿足を感じた、跳り上りたい程の滿足をその短い瞬間に於て思ふ存分に感じた。而して始めて外界に對して耳が開けた。

戸を隔てゝ子供の泣く聲は憐れにも痛ましいものであつた。彼と妻とに嘗めるやうにいつくしまれたこの子供は今まで眞夜中にかゝるめには一度も遇つた事がなかつたのだ。

彼は何かに醉ひしれた男のやうに、衣紋もしだらなく、ひよろ〳〵と蹌けながら寢室に歸つて、疲れ果てゝ自分の寢床に臥し倒れた。そつと頭を動かして妻を見ると、次の子供の枕許にしよんぼりとあちら向きになつて、頭の毛を亂してうつ向いたまゝ坐つてゐた。

それを見ると彼の怒りは又亂潮のやうに寄せ返した。

「あなたは子供の育て方を何んだと思つてるんだ」

氣息がはずんで二の句がつげない。彼は芝居で腹を切つた俳優が科白の間にやるやうに、深い呼吸を暫くの間苦しさうについてゐた。

「あまやかしてゐればそれですむんぢやないんだ――」

彼は又氣息をついた。彼はまだ何か云ふ積りであつたが總てが馬鹿らしいので、そのまゝ口をつぐんでしまつた。而して深い呼吸をせはしく續けてゐた。

外套掛けからは命を搾り出すやうな子供の詫びる聲が聞こえてゐた。彼はもう一度妻を見て、妻が先つきからその聲に氣を取られてゐると云ふ事に氣がついた。苦い敵愾心が又胸につきあげて來た――嫉妬と云ふ言葉でゝも現はすべき敵愾心が――

「それでなくてもパヽは怖いものなんだよ、……それ……に」

パヽだけが折檻をやつては、尙更怖がらせるばかりで、仕舞にはどう始末をしていゝか判らなくなる。男の兒は七つ八つになれば、もう腕力では母から獨立する。女でも手がける事の出來る間に、しつかり母の强さも感じさせて置かなければ駄目なんだ。それは前から度々云つてる事ではないか。それを一時の愛着に牽かされて姑息にして置く法はない。是れだけの事を云ふ積りであつたのだけれども、迚も云へないと氣がついて默つてしまつたのだ。妻は寒い中に端坐して身もふるはさずに子供の聲に聞き入つてるらしかつた。

「もう寢ろ」

彼は暫くたつてからこんな亂暴な云ひやうで妻を强ひた。

「出してやらなくつても宜しいでせうか」

彼の言葉には答へもせずに、妻は平べつたい調子で後ろを向いたまゝかう云つてゐる。その落着き拂つたやうな、ちつとも情味の籠らないやうな、冷靜な妻の態度が却つて怒りを募らして、彼は妻の眼の前で子供をつるし切りにして見せてやりたい程荒んだ氣分になつた。憤怒の小魔が、體の內からともなく外からともなく、彼の眼をはだけ、歯を噛み合はさせ、喉をしめつけ、握つた手に油汗をにじみ出さした。彼は焰に包まれて、宙に浮いてゐるやうな、目まぐるしい心の輕さを覺えて、總ての羈絆を絕ち切つて、何處までも羽をのす事が出來るやうにも思つた。彼はその虛無的な氣分に浸りたいが爲めに、狂言をかいて憤怒の酒に醉ひしれようと勉めるらしく

もあつた。

兎に角彼は心ゆく許り激情の弄ぶまゝに自分の心を弄ばした。生全體の細かい强い震動が、大奏樂の Finaleの樂聲のやうに、雄々しく狂ほしく互に打ち合つて、もう一歩で回復の出來ない破滅を招くかとも思はれるその境を、彼の心は痛ましくも泣き笑ひをしながら小躍りして駈けまはつてゐた。

然しさうかうする中に癇癪の潮はその頂上を通り越して、やゝ引潮になつて來た。どんな猛烈な事を頭に浮べて見ても、それには前ほどな充實した眞實味が漂つてゐなくなつた。考へたゞけでも厭やな後悔の前兆が心の隅に頭を擡げ始めた。

「出したけりや出したら好いぢやないか」

この言葉を聞くと妻は釣り込まれて、立上らうとした樣子であつたが、思ひ返したらしく又坐り直して始めて彼の方を振りかへりながら、

「でも貴方がお入れになつて私が出してやつたのでは、私がいゝ子にばかりなる譯ですから」

と答へた。それが彼には、彼を怖れて云つた言葉とはどうしても聞こえないで、單に復讐的な皮肉とのみ響いた。

何が起るか解らないやうな沈默が暫くの間二人の間に續いた。

その間彼は自分の呼吸が段々靜まつて行くのを、何んだか心淋しいやうな氣持で注意した――インスピレーションが離れ去つて行くやうな――表面的な自己に還つて行くやうな――何物かの世界から何物でもない世界に還入つて行くやうな――

呼吸が靜まるのと正比例して、子供の泣き聲はひし〳〵と彼の胸に徹へだした。慈愛の懷から思ひも寄らぬ

孤獨の境界に投げ出された子供は、力の限り戸を敲いて、女中の名や、家にはゐない親しい人の名まで交る〳〵呼び立てながら、救ひを求めてゐた。その訴への聲の中には、人の子の親の胸を劈くやうな何物かゞ潜んでゐた。妻は始めから今までぢつと我慢してこの聲に鞭たれてゐたのかと甫めて氣がついて見ると、彼には妻の仕打ちが如何にも正當な仕打ちに考へなされた。

それでも彼は動かなかつた。

火のつくやうに子供が地だんだ踏んで泣き叫ぶ間に、寢室では二人の間に又いまはしい沈默が續いた。

彼はぢつとこらへられるだけこらへて見た。然しかうなると彼の我慢はみじめな程弱いものであつた。一分ごとに彼の胸には重さが十倍百倍千倍と加はつて行つて、五分も經たない中に彼はおめ〳〵と立ち上つた。而して子供を連れ出して來た。

彼は妻の前に子供をすゑて、

「さ、マヽに惡う御座いましたとあやまりなさい」

と云ひ渡した。日頃ならばかうなると頑固を云ひ張る質であるのに、この夜は餘程懲りたと見えて、子供は泣きじやくりをしながら、なよ〳〵と頭を下げた。それを見ると突然彼の胸はぎゆつと引きしめられるやうになつた。

冷え切つた小さい寢床の中に子供を臥かして、彼は小聲で半ば嚇かすやうに半ば敎へるやうに、是れからは決して夜中などにやんちやを云ふものでないと云ひ聞かせた。子供は今までの恐怖になほおびえてゐるやうに、彼の云ふ事などは耳にも入れないで、上の空で彼の胸にすり寄つた。

後ろを振返つて見ると、妻は横になつて居た。人に泣き顏を見せるのを嫌ひ、又よし泣くのを見せても聲など

を決して立てた事のない妻が、床の中でどうしてゐるかは彼には略〻想像が出來た。子供は泣き疲れに疲れ切つて、時々夢でおびえながら程もなく眠りに落ちて了つた。

彼は石ころのやうにこちんとした體と心とになつて自分の床に歸つた。あたりは死に絶えたやうに靜まり返つてしまつた。寢がへりを打つのさへ憚られるやうな靜かさになつた。

彼はさうしたまゝでまんじりともせずに思ひふけつた。

ひそみ切つてはゐるが、妻が心の中で泣きながら口惜しがつてゐるのが彼にはつきりと感ぜられた。

かうして稍〻半時間も過ぎたと思ふ頃、かすかに妻の寢息が聞こえ始めた。妻の思ひとちぐはぐになつた彼の思ひはこれでとう〳〵全くの孤獨に取り殘された。

妻と子供とを持つた彼の生活も、たゞ一つの眠りが銘々をこんなにばら〳〵に引き離してしまふ。彼は何處からともなく押し逼つて來る氷のやうな淋しさの爲めに存分にひしがれてゐた。水色の風呂敷で包んだ電球は部屋の中を陰鬱に照らしてゐた。彼は妻の寢息を聞くのがたまらないで、そつちに背を向けて、丸つこく身をかゞめて耳もとまで夜着を被つた。憤怒の苦い後味が頭の奥でいつまでも〳〵彼を虐げようとした。

後悔しない心、それが欲しいのだ。色々と思ひまはした末に玆まで來ると、彼はそこに生き甲斐のない自分を見出だした。敗亡の苦い淋しさが、彼を石の枕でもしてゐるやうに思はせた。彼の心は本當に石ころのやうに冷たく、冷えこむ冬の夜寒の中にこちんとしてゐた。

（一九一四年四月、白樺所載）

幻想

彼は或る大望を持つてゐた。

生れてから十三四年の無覺醒な時代を除いては、春秋を迎へ送つてゐる中に、その不思議な心の誘惑は、元來人なつこく出來た彼を引きずつて、段々思ひもよらぬ孤獨の道に這入りこました。ふと身のまはりを見返る時、自分ながら驚いたり、懼(おそ)れたりするやうな事が起つてゐるのを發見した。今のこの生活——この生活一つが彼の生くべき唯一の生活であると思ふと、大望に引きまはされて、移り變つて行く己れ自身を危(あや)ぶんで見ないではゐられないやうな事もあつた。根も葉もない幻想の翫弄物になつて腐り果てる自分ではないか。生活の不充實から來る倦怠を辛(から)うじて逃げる卑劣な手段として、自分でも氣付かずに、何時(いつ)の間にか我れから案じ出した苦肉の策が、所謂彼の大望なるものではないか。さう云ふ風な大望を眞額(まつかう)にふりかざして、平氣な顔をしてゐる輩は、いくらでもそこらにごろ／＼してゐるではないか。かすかながらこんな反省が彼をなやますことは稀れではなかつた。

それにも係らず大望は彼を捨てなかつた。彼も大望が一番大切だつた。自分の生活が支離滅裂だと批難をされゐる時でも、大望を圓心にして輪を描いて見ると自分の生活は何時でもその輪の外に出てゐる事はなかつた。さう云ふ事に氣がつくと急に勇ましくなつて、喜んで彼は孤獨を迎へた。彼は柔順になればなる程、親からも兄弟からも離れて行つた。妻や友人が自分を理解するしないと云ふやうな事は、てんで問題にならなくなつた。彼自身

の他人に對する理解のなさ加減から考へると、他人の理解を期待すると云ふやうな事が卑劣極まつた事に思はれた。段々と失つて來てゐた心の自由を、段々と回復して行く滿足は、外に較べるものがなかつた。

空は薄曇つたまゝで、三日の間はつきりした日の目を見せなかつたから、今日あたりは秋雨のやうなうすら寒い細雨が降るのだらうと彼は川上から川下にかけてずつと見渡して見た。萌えさかつた堤の青草は霧のやうな乳白色を含んで、河原の川柳はそよ風にざわ〱と騒いではゐたが、雨の脚はまだ何處にも見えなかつた。悒鬱な氣分が靜かにおごそかに彼を壓倒しようと試みるらしかつた。彼はそれを物ともせずに、しつかりした歩き方で堤の上を大股に歩いた。後の方には細長い橋を痩せた腕のやうに出した小さな町が、川にまたがつて物淋しく横はつてゐた。

行手の堤の蔭には不恰好に尨大な黑ずんだ建物がごつちやになつて平らな麥畑の中に建つてゐた。近づいて見ると屠殺場だつた。その門の所に、肥つた四十恰好の女房と十二三のひよろりとした女の兒とが立つて此方を見てゐた。少女のエプロンが恐ろしい程白かつた。堅く閉つた大きな門を背にして、二人は手をつないで彼の近づくのを見守つてゐた。彼は遠くからその一人を睨まへて歩いて行つた。程が段々近よつて、互の顏がいくらか見分けられるやうになると、二人は人違ひをしてゐたのに氣付いたらしく、吸ひ込まれるやうにそゝくさと木戸から這入つてしまつた。

彼は用のないものに氣を向けてゐたのを悔むやうに又川上を眞向に見入つて進んで行つた。見詰めてゐた白いエプロンは然し黑いしみになつて、暫くは眼の前をちら〱として離れなかつた。然しそれもやがて消えた。

彼は自分のつゝましやかな心を非常に可愛く思つた。自分の大望の爲めに、意識して犧牲を要求しながら少しも悔いなかつた古人の事を思ふと、人の生活の細やかな味ひが、心の奥まで響き亙つた。蟲けら一疋でも自信を

以て自分の爲めに犧牲にする事の出來た人を彼は同情と尊敬とを以て思ひやつた。事業と云ふ大きな波にゆられながら、この微妙な羅針盤を見詰めるしみ〴〵した心持を何に譬へよう。

人達ひながら自分を待つてゐる人のあつた事が、彼には一種の感激の種となつた。木戸を潜る時その母と子らしい二人の間に取りかはされた小さな失望の會話をはつきり想像して見る事が出來た。然し結局その人達とても無緣の衆生に過ぎない。而して彼は結婚したばかりの妻の事を思つた。「お前も何時か犧牲にしてやるぞ」さう彼は悲しくつぶやいた。

その邊は去年大水の出た跡だつた。堤の壞れた所を物の五十間ほども土俵で喰ひ留めた、その土俵の藁は半ば土になつて、畑中に盛り上つた砂の間からは、所々に一かたまりになつて、大根の花が薄紫に咲き出て居た。彼れはこの小さな徵にも自然の力の大きさと强さとを感受した。而して彼は今更のやうに立停つてあたりを見まはした。百姓の捨てた畑の砂の上には、怒り狂つた川浪の姿が去年のまゝに殘つてゐた。その浪がこの邊に住んでゐた百姓の一人息子を容赦なく避難の小舟から奪ひ去つたのだ。沈澱した砂は片栗粉のやうにぎつしりと堆積して雜草も生えて居なかつた。何んにも知らないやうな顏をしてゐる。今まで親しみ慣れた自然とは大分違つた感じが彼の胸を打つた。

固より彼は自然とも戰ふべきものだと云ふ事を忘れてゐたのではない。然し彼は人間と自然とを離して考へてゐた。人間の理解から孤獨となる事が自然と離緣する事にもなるとは思はなかつた。彼はその瞬間まで人間から失つた所を自然から補はせる事が出來ると思ひ込んでゐたのだ。

彼はそこに立つてあたりを見廻したが、人の姿は何處にも見當らなかつた。細長い橋を瘦腕のやうに延ばして橫になつてゐる町がかすかになつて川下に見えるばかりだつた。

彼はしんみりした心になつてぢつとそれを見た。その町で人力車に乘らうとしたが蝦蟇口の中の錢が足りないのを恐れて乘らなかつた事をも思ひ出してゐた。

彼は彼の大望と云ふ力に誘はれてそこまで來てゐるのだと云ふ事を更に思つて見た。

大望とは何だ。

一つの意志だ。

否、彼自身だ。

そんなら何んで彼は自身の前に躊躇するのだ。

神か。

彼は頭に一撃を加へられたやうに頸をすくめてもう一度あたりを見まはした。

つばなを野に取りに出て失望した記憶がふと浮んで來た。手にあまる程取つて歸つた翌日から三日ばかり雨が降つたので、外出せずにゐて出て行つて見ると、つばなは皆んなほうけてしまつてゐた。大望がほうけたら如何する。彼は再び氣を取り直して川上の方へ向き直りながら、かう心の中でつぶやいて、自分自身の胸に苦い心持を瀉ぎ入れた。

暫く行くとちよろ／＼としか水の流れない支流に出遇つて、彼は自ら川の本流に別れねばならなかつた。支流に沿うても、小さな土手が新しく築かれてゐた。石垣の上の赤土はまだ風化せずに、どんよりした空の下にあつても赤かつた。彼はそのかん／＼堅くなつた赤土の上を――彼ならぬ他人のした事業の上を踏みしめ踏みしめ歩いて行つた。

土手には一間ほどづゝ隔てゝ落葉松が植ゑつけてあつた。而してその土手の上を通行すべからずと云ふ制札が

立てゝあつた。行きつまる所には支流に小さな柴橋が渡してあつて、その側に小ざつぱりとした百姓家が立つてゐた。彼は垣根から中を覗き込んで見た。垣根に沿うて花豆の植ゑてあるのが見えた。

彼も自分の庭の隅に花豆を植ゑて置いた。その自分の花豆は胚葉が出たばかりであるのに、此處の花豆はもう大きな暗綠の葉を三つづゝも擴げてゐた。

彼は鋭く孤獨を感じながら歩いて行つた。彼の歩き方は然し大股でしつかりしてゐた。彼は正しく彼の大望に勵まされてゐるやうに見えた。

柴橋は渡られた。

眼の前の展望は段々狹まつて、行手の右側には街道と並行に山の裾が逼り出した。

彼は其の大望の成就の爲めには牢獄に投げ入れられることを前から覺悟してゐた。牢獄生活の空想は度々彼の頭に釀された。牢獄も如何する事も出來ない孤獨と、其の孤獨の報酬たるべき自由とが、暗く、冷たい、厚い牢獄の壁を劈いて勝手に流れ漂ふのを想像するのは、彼の一番快い夢だつた。

然しその時彼はその夢を疑はないではゐられない程の親しみを以て路傍の小さな井戸を見た。その井戸は三尺にもならない程の淺さで、井戸がはも半分腐つてゐたが、綺麗に掃除が行き屆いてゐて、林檎箱のこはれで造つたいさゝかのながしも塵一つ溜つてゐなかつた。彼は其處に人の住んでゐる事を今まで感じた事のないやうな感じ方で強く感じた。牢獄はこんな親しみのある場面を彼の眼から遠ざけるだらう。

彼は彼の孤獨の自由を使つて、牢獄からこの井戸の傍に來る事が出來るであらうか。

とう〳〵雨が落ちて來た。遠い所から、木の葉をゆする風につれて、ひそやかな雨の脚が近づいた。

彼の方に向つて雨の脚は近づいて來た。彼は雨の方に向つて足を早めた。白く塵ばんだ街道は見る中に赤黑く

變つて行つて、やがて凹んだ所に水溜りが出來、それがちよろ〳〵と流れ出し始めた。

傘もない彼は濡れるまゝで進んで行つた。ふと彼は鳴きかはす鳥の聲を聞きつけて又脚をとめて山の方を振り仰いだ。街道のそばに逼つた山は非常な高さだつた。彼はその高みを見上げるに從つて不思議な恐怖を感じた。山には處女林が麓から頂までぐつすり込んで生ひ茂つてゐた。雨氣が樹と樹との間に漂ふので、總ての樹は個性を回復して、うざ〳〵する程むらがり集まつてゐた。その樹の總てが奇異な言葉で彼に呼びかけた。その樹の言葉に綾をかけて、かけすが雨に居所を襲はれて、けたゝましく鳴きかはした。

山が語る。嘗て聞いた事のない不可解な、物凄い、奇異な言葉で山が語る。

彼はそれを竊み聞きした。

恐怖の爲めに彼の全身は唯がた〳〵と震へた。

彼は始めて孤獨の中に自分が段々慣れひたつて行く事を感じた。而して彼は言葉につくせぬなつかしさを以て、垣根の花豆と底の淺い井戸とを思ひ浮べた。

やゝ暫くして雨に濡れまさる彼は又川上の方へ向いて街道を歩き始めた。雨に煙る泥道の上には彼一人の影が唯一つ動いた。

（一九一四年八月、白樺所載）

宣　言

（AよりBへ）

千九百十二年九月十五日　東京

B兄、

この間貰つた手紙では、君は歸れるのだとのみ思つてゐたのに、その甲斐はなかつたな。

昨日から講義は始まつたが、相變らず下らないものだ。學年の始りには何時でも、今年こそはといふ多少の期待を持つて見るが、何時でも判で押してあるやうに裏切られてしまふ。〇教授の講義なぞは半時間聽いたゞけで、十分うんざりさせられてしまつた。Cは今年は珍しくもう出席してゐる。いつもの通り、長い體の上に、皮肉な顏を乘つけて一同を睥睨してゐるよ。

君の病氣は一體どうなんだ。東京もまだ少し暑いには暑いが、うまい具合に天氣續きで、空氣も割合に乾燥してゐるし、夕方なんかは中々いゝ時があるぜ。思ひ切つて歸つて來ないか。僕の叔父のかゝつてゐた〇〇博士は呼吸器病にかけては自信もあるといふし、實際評判もいゝから、君が歸つて來たら是非紹介しよう。僕は元來病氣といふものには、小さい時から割合に縁がなかつたから、君の心持をしつくり想像して見る事は出來ないだらうけれども、君は少し大袈裟に自分の病氣を考へ過ごしてはゐないのか知らん、兎に角今の場合、色々な事を考へるのはよくないと思ふな。鹽原といふ所は君の病氣には適してゐるのかい。氣溫の變化もひどさうだし、冷氣も

東京よりは勿論早く來ると思ふが。

僕は僕自身の爲めにも君が今東京にゐてほしいと思ふんだ。僕も宗教といふものに對して多少の理解が生じて來た氣がするからだ。一體僕の家は信仰生活なるものを丸つきり無視した家でね。それも或る自覺から出た事かといふと決してさうではないんだ。父には何か相當の思慮があつたやうだけれども、その外の奴等はまあだらけた無自覺な生活をしてゐる爲めにさうなんだ。僕もその空氣に卷添へを喰つて、この齡になるまでそんな事には交渉を繫がないでゐた。科學の或る僻見から生れて來た淺薄な先入主觀をそのまゝ受け入れて、宗教といふものを正面から見詰める程の必要は感じない積りでゐたし、又實際感じもしない程に呑氣だつた。然し僕の生活に或る不思議な回轉期が來たやうだ。唯運命とか何んとか、抽象的な回避的な言葉だけでは片附けておけない程、この世の中が生命に充ちた目的に向上する、有機的なものゝやうに感じられ出したんだ。かういふ考へが浮んで來るにつけて、僕は君の信仰する基督教に第一に引きつけられ出したんだ。僕は改めて僕の周圍を見て見た。而して今まで少しも氣が附かなかつた神祕的な世界が眼の前に展けて來るのに驚いてしまつた。人間の生活といふものは見やうによつてこんなに姿の變るものかとその豐富さ加減に膽をつぶすばかりだ。僕はこの頃寢る前に必ず羅馬書を讀んでゐるが、その當時の祕密が、一つ／＼僕の心の中にもちやんとあるのを感じて、基督の智慧の深さ鋭さに怖毛をふるつた。基督によつて甦つたポーロでなかつたら、あんな雙刄の劍のやうな深刻な觀察は出來ないだらうと思つた。一寸進めば一寸だけの罪が擴がり、一尺退けば一尺だけの悔いが殘るやうな恐しさに襲はれる。

僕は今まで相當の勇氣を持つた、どつちかといへば活動的な、精力の强い男として自分を見てゐたんだが、今假りに信仰の生涯を迎へ入れるとすれば、是れまでの自覺は跡形もなく根こそぎ取られてしまひさうで淋しいよ、

淋しすぎるよ。

こんな時に君がゐてくれたらばと、頻りに思はないではゐられない。

話は大變飛んでしまふが、君は戀愛といふ事を如何思つてゐるい。幸にして――幸にしてといひたい。それとも不幸なのかしら――僕はこれまで女に對して互に戀愛の關係を作り、それに深入りした覺えがないんだ。級の奴等が、ストーヴの周りなんかでやる奇怪な orgies を立聞きする度に、恥かしい一種の牽引と好奇心とを覺えながら、心の中の或る清淨な力に引き立てられて、その場を外してしまふのを常とする。その時には、いつでも鐵縁の眼鏡の奥から覗く、鋭い、澄んだ、君の眼が思ひ出されるんだ。それにつけても僕は君に聞いて見たい。戀愛は修道の妨げになるものだらうか。戀愛三昧に這入つた人だけが經驗すると思はれる、あの純一な、沒我的な、而して淋しくも華々しい心の動搖は、若い者が必ず一度味ふべき醍醐味ではないのだらうか。ポーロやトルストイが男女の關係について言つてる所には勿論拒む事の出來ない强い理由がある。それは僕も首肯するよ。するが、それが本當につきつめた人生のどん底だらうか。

何んだか煮え切らない事を長々と書いて、君を苦しめやしなかつたか知らん。然し君の病氣の樂な時に、君の考へを言つてよこしてくれたら、僕は非常に嬉しく思ふよ。

昨日は放課後から、皆んなで羽田の方に採集に行く筈だつたが、氣乘りがしないので、斷つて、獨りで小石川の植物園の方まで散歩にいつた。何んだかこの頃は自分ながら僕は少し妙だよ。筋肉が綏んだやうにだるくつてふと氣が附くと、とてつもない事ばかり考へてゐる。君が東京にゐない故もあるだらう。

例の金はお送りする。學校にゐるのより餘計かゝるだらう。自炊もいゝが無理をしないやうにし給へよ。金ならば少しは餘裕があるから、遠慮せずに使つてくれ給へ。

今夜は何んだかもつと書きたいけれども、夜も更けるし、君の病氣に障つてもいけないから、これで筆を止める。

どうも誰でも彼でもなつかしいやうな晩だな。

あのねえ（以下抹殺）

（BよりAへ）

一九一二、九、二〇　鹽原

又散歩の歸り途で、珍しい蛾を一匹手に入れた。新種らしい。こゝは、採集には一寸いゝ所だ。

君は戀を知つたね。この頃僕の神經は相當に鋭敏になつてゐるよ。

君を措いて、誰が戀愛の寵兒であり得よう。君には健康な體質がある、眞摯な資性がある、attractive な容貌がある。汚れない初々しさがある。君の前には事業がある。而して後ろには恒産がある。

是れは皮肉ではない。單に、皮肉と取れる程明白な、事實の羅列に過ぎないのだ。

戀愛は滋味の溢れた貯藏庫でのみ醱酵する薫りの高い香素だ。

僕のやうな貧弱な病人も、この香素を嗅ぐと胸を跳らさない譯には行かない。羨望の爲めでなしに……否、羨望の爲めに。明白な羨望の爲めに。

然し世には戀愛の適者と不適者とがある。

僕は君に勸める。必ずその戀を遂げ給へ。君に戀愛の歷史の添はないのは、神の誤謬だとさへも云へる。

トルストイは、謂はゞ美酒に醉ひしれて、囈言を吐く樂天の徒だ。何んといふ明らさまな、なつかしい心だら

う。

トルストイとボーロとを併せ説かんとする君は、謬つて幼兒を惡魔の傍に置いたのだ。基督は二度磔刑に遇ひ給うた。初めは猶太人によつて。二度目はポーロによつて。彼は最初の受難によつて昇天した。二度目の受難によつて、地にまで踏み躙られた。

ポーロの支離滅裂な言議を僕は何よりも厭ふ。「人によつて法を說く」と云ふのか。さらば「人によつて法を說く」僞りの豫言者を愼めよだ。

偖て、僕の病氣は、實に立派な肺結核だと診斷されてゐるのだ。〇〇博士は痛快な醫者だつた。君には物を隱す必要はないからと云つて、すつかり事情を打明けてくれた。君が知る通りの僕の事だから、聞かされた當時は、五體の神經が氷つて、四肢を強直狀態にしたかと思つて、身動きさへ出來ない程苦しんだ。

然し今は平生と違はないだけに心は回復した。然し學校に歸る事は當分出來ないだらう。時々は硏究室の空氣をなつかしまないではないが、是非のない事だ。

金の事は難有う。今居るのは君も知つてるあの川端の長屋なんだが、往來の人がうるさいので、その中、百姓家にでも間借りをしようかと思つてゐる。

又熱が出て來たやうだ。手紙の斷片的になるのは、いけない事だが、許してくれ給へ。忘れたが、僕の信仰觀は述べ立てる程のものではない。僕は、唯醉つてゐなければ生きて居られない質だから、基督に醉はうとして居るだけの話だ。若し僕が、ボードレールより先きに生れてゐたら、彼をして、あの「陶醉」といふ散文詩を先驅けはさせなかつたらう。

（AよりBへ）（葉書）

千九百十二年九月二十二日　東京

今植物園を散歩して歸つたら、君の手紙が屆いてゐた。結核と知つて、僕の血も氷るやうに思ふ。本當に君の心をお察しする。

見事に圖星を指されてしまつた。僕はその中委しい告白をして、力にもなつて貰ひたいと思つてゐるが、君の心持が悪くない時に讀んでくれ給へ。鹽原はもう冷え〲するだらう。呉々も病體を大事にし給へよ。

（AよりBへ）

千九百十二年十月六日、東京

B兄、

情け容捨もなく凡ての希望を奪ふばかりか、極端に人を威し附けたり、不安にしたりする病魔に對して、君がどれ程苦しみ拔いて戰つてゐるかは、恐らく君にしか分らない祕事だらうと思ふ。何んだか君の煩悶には恐しく神聖なものが潜んでゐて、僕のやうに病苦を知らないで來た人間は、それを窺くのさへ出過ぎた事のやうに思はれもするよ。僕なんぞが病人を慰めるといふやうな事をするのは、間違つてゐるかも知れない。然し僕は僕なりに君に深く同情し、君の健康の早く回復するやうに祈らないではゐられない。

この前の手紙ではしつかり判らなかつたが、病氣は少しはいゝ方に向つてるのかい。若し氣が向いたら、もつと委しく熱度や食慾の加減を知らし給へな。そんな事が何んの足しになるかと君はいふだらうけれども、兎も角僕はそれが知りたいんだ。

僕はね、僕の是れから思ひ切つて書かうとする告白を、何度書かうか書くまいかと躊躇したか分らない。それは君の病氣を悪くしはしないか知らといふ心配もあるにはあつたが、果して僕が自分を少しも僞らないで告白を書き終へる事が出來るだらうかと疑つたからだつた。

然し今日は思ひ切つて書く。それは君に圖星を指された僕の戀愛問題に就いての事だ。然し、重ね〴〵斷つて置くが、是れは君の氣の向いた時に讀んでくれ給へよ。

僕は當面の告白に移る前に、少し過去に溯つて、僕の性的生活を書いて置く必要があると思ふんだ。

一體こんな事は凡ての男性に通有な事だのに、それを公言する人がない故なのか、それとも僕一人が餘人とちがつて、飛び離れた經驗を持つてゐるのか、兎に角僕は自分の過去を考へて見ると、そのずつと奥深い幼い時代に、女性に對して既に可なり強い執着を持つてたのを思ひ出す事が出來る。僕は、八つの時、隣りに住んでゐた若い細君に、男からは得られない懷しみを感じてゐた事を記憶する。僕はその頃、皆んなから「お可愛いゝ坊ちやん」といつて愛される質の子供だつたが、その女の人は殊更僕を可愛がつてくれたと僕には思へた。それがどれ程嬉しかつたか知れない。僕は自恃と滿足……不安にばかり戰いてる今の僕とは何んたる相違だらう。而して何んといふ望ましい蜃氣樓だらう……に氣負つて、僕はその女の人の眼の前で、遊び仲間を輕蔑したやうに高慢ちきに振舞つたものだつた。

ふと或る時、その女の人は良人が轉勤したので、僕の眼の前から何處にか消えて無くなつてしまつた。耳で聞き眼で見る世界が、世界の凡てだとのみ決めこんでゐた僕の世界觀は、がらりと變つて、その時から、思ひも寄らない別世界が、空虛な世界が僕の心の中に湧き出して來るやうになつた。僕の不可知的に對する一種の憧憬も、思へばその時から芽ぐみ始めたんだ。その人が消えて去つた不思議な世界、それをその時の僕はどうしてもしつ

かゝり頭の中に描いて見やうがなかつた。何んだか大變に淋しく思ふばかりだつた。夕方なんぞ、どうかすると、不思議なノスタルジヤに襲はれて、譯もないのにしく〳〵泣き出したり、母や女中に八つ當りをして、滅多に怒つた事のない父に痛くたしなめられたりした。人々は、僕に蟲が起つたのだといつた。諷刺的な言葉ぢやないか。實際その時から無邪氣な僕にも、とう〳〵蟲が起つてしまつたんだ。

君は病氣を押してこの手紙を讀んでゐるんぢやあるまいね。用心してくれ給へよ。

その時の事を思ふと、僕は今でも自分が可愛くて堪らない。故郷を懷ひ出す時に滲み出るやうな涙が、僕の睫毛にたまつて來る。

それからその美しい女の人に對する記憶は、いつともなしに薄らいで行つた。僕は又舊のやうな快活な子供になつてゐたらしい。然しかすり傷ではあるが、小さな心臟につけられた傷は、その持主の知らない間でも、始終癒しの力を待ち望んでゐたものと見える。僕が十二になつた時、僕の妹が、一人の友達とその姉とを遊びに家に連れて來た事がある。その姉といふのは僕と同じ齡で、名をお艷さんといつてゐた。一と眼見たばかりで、僕はそのお艷さんが好きで〳〵たまらなくなつてしまつた。妹の方は片眼が盲ひて醜かつたから、名も覺えてはゐないが、姉の方は見違へるやうに美しかつた。母が「お人形さんのやうだ」と賞めるのを聞いた時は、僕の心臟は思はず同感に跳り上つた。然しそんな言葉をおくびにも自分ではいへないのをもどかしく思つた。僕は勉めて平氣でお艷さんに近づかうとして見たが、その時の僕にはもう肉の詛ひが、かすかながらその醜い頭を擡げかけてゐた時なので、どうしても恥かしくつて近寄る事が出來なかつた。然しお艷さんの見てゐる前では、どんな事にかけても第一の優者であらうとあせつた。僕の周圍には敵ばかりが出來た。而して僕は又妙にこぢけた不機嫌な子供になつてしまつた。

思ひ出すとこんな事もある。僕はお艶さんの手近にゐたくつて堪らない望みから、お艶さんの寫眞がほしくつて仕やうがなくなつた。それには、どうかして僕の寫眞をやつて交換する外はないと、その頃の僕は思つたと見えるんだね。然し僕一人だけ寫した寫眞をどうして先方にやるやうな大膽なまねが出來よう。で、とう〳〵一計を案じ出して、二三の友達を語らつてグループの寫眞を寫した。出來上つて來たのを見ると、僕の顏はいかにも不滿足な出來で、友達の顏の中に好ましい風なのがあつた。僕は幼いながら大分躊躇はずにはゐられなかつたが、然し寫し直すことはもう出來ない。ある晚、その姉妹や男の兒が大勢集まつて遊んだ擧句に、僕は何氣ない風をして、その寫眞をお艶さん姉妹の前に放り出した。素早くそれを拾ひ上げたのはお艶さんであつた。妹もすぐ姉に身をすり寄せて、二人でそれを眺め入つた。僕はすかさず「それを誰かにやあらうか」と、半分歌ふやうな調子でいつて見た。「頂戴」といつて片眼を輝かしたのは妹だつた。つゝましやかな姉は、惡いものに手を觸れでもしたやうに、そつと寫眞を疊の上に伏せてしまつた。僕はかつとなつて、何んの分別もなく、皆んなの惘れて見てゐる前で、その寫眞をずた〳〵に破つてしまつた。

　こんな事を讀ませられるのは隨分厭き〳〵するだらうね。然しもう少し我慢して讀んでくれ給へ。

　僕は何んとかしてお艶さんが僕を愛してくれるといふ證據を摑みたいと思つたが、お艶さんはたゞ無邪氣にしとやかに誰にでも同じやうに振舞つてゐるので、僕は胸のつまる程悶えに悶えた。僕は、今の自分の境遇からその頃僕が苦しんでた純一な熱烈な煩悶を憐れむの情に堪へない。

　その中に又一つの事件が起つたつけ。それは妹の通學の道に、一人のいぢめつ兒が住んでゐて、學校の往復には屹度張番してゐて、自分の家の前の砂利を一粒でも踏みつけたら、なぐり附けると妹を威すんださうだ。お艶さん達もその兒を懼れて、僕の家には足が遠くなつた。僕はその頃中々の妹思ひだつたが、お艶さんに度々遇ひ

たいといふ欲望も手傳つて、ある日その子供と喧嘩をした。僕の持つてる方の竹竿が長かつたばつかりに、とうとうその子供を逐ひこくつて、家の內に逃げこましてしまつた。僕は勝ち誇つて、得意になつて、そこの門の前をうろついてゐた。と、彼が塀の內から狙ひを定めて投げた石が、あやまたず僕の右の眉根に中つて、そこからさつと血が迸つた。僕は無我夢中で怒りながら、その家にがなりこんだ。而してその家で介抱されて、やがて自家に引き取られて、三針程縫はれて、床にねかされたが、僕は囈言にも「卑怯だ、卑怯だ」といひ續けてゐたさうだ。

十日程經つたら傷は大抵癒つて、庭の中を散歩するまでになつた。然し僕の憤怒は中々納まらないで母を困らすものだから、母は僕をなだめる積りで色んな事を言つて見た中に、小林のお孃さんの一人が、僕の傷が早く癒るやうに、毎日お稻荷様に參詣してくれてゐると知らしてくれた。小林さんとはお艶さんの苗字なんだ。それを聞いた時、僕は思はず喜びの爲めに跳り上らうとした。其れで僕の傷は十分の報酬を受けた。ようこそ傷を負つたと思つた。然し、と僕は小さな胸で考へた。

「お孃さんの一人とは一體どつちのお孃さんなんだらう」僕はどうしてもそれを母に聞くだけの勇氣を持つてゐなかつた。

僕が父學校に通學するやうになつてからは、お艶さんと妹とは、寮から店の方に移つて、もう一度も遇ふ機會は與へられずにしまつた。僕は何故喧嘩をした時死んでしまはなかつたのだらうと思つたりした。實際幼い時ほど死に對して輕々とした決心の出來る時代は無いね。それから思ふと今の僕と死との距離は驚くほど遠くなつたものだ

僕はとう／＼いまだに二人の中のどちらが願掛けをしてくれたかを知らずにしまつてゐる。その後僕の家も仙

臺に引越してしまつたが、僕はよく前に住まつてゐた小さな都會に遊びに行つたものだ。而して豫てからお艶さんの家の商賣と聞いてゐた葉茶屋の店の前を通る每に、人知れず注意してゐた。ある時一寸大きな或る葉茶屋の店先きでお艶さんらしい人を見たと思つた。僕は雷にでも打たれたやうに氣を顚倒させて、すぐ首を正面に向けなほして、そこを通り過ぎてしまつた。

その頃は、僕はもう悲しくも、お艶さんをきれ〳〵な追憶の中から引き出して、妄想の迷宮にとぢこめながら、自己遂情を敢てする半獸兒になり下つてゐる時だつた。

その後でも僕は、お艶さんを見たと思つた葉茶屋の前を幾度通つたか知れない。その中にその葉茶屋は閉店してしまつた。而して、僕の全靈全心を搖り動かしたお艶さんは、僕の胸の中に不完全な像を殘したまゝで、あの若い細君と一緒に、僕には露ほどの交渉もない不思議な存在の中に姿を隱してしまつた。それはその頃の僕に取つては、死ぬといふ事よりもつと悲しい不思議な出來事だつたんだ。それは考へて見ると今では神祕だ。恐ろしいやうな神祕だ。一度見た人の顏をもう金輪際見る事が出來ない……そこには、奧底の知れない運命の神祕があるのではないか。

B兄、君は今下らない長い序曲を聞き終つたんだ。僕の性的生活は勿論是れで盡きてゐるんではないんだが、その餘の事はこの告白には直接の關係がないから、他日の馬鹿噺の種に殘して置いて、是れから最近に起つた出來事を詐りなくお話しする。

この夏僕が母と共に、北海道の登別溫泉に行つたのは、君が知つてる通りだ。母は永年の世帶の苦勞で、體を非常に傷めてゐたので、勸める人があつたから、僕は好奇心も手傳つて、面倒がる母を無理やりに連れ出したのだつた。北海道人で云ふ內地に育つた僕には、あの何處となく荒涼とした北海道の自然の姿は親しみ易いもので

はなかつた。凸凹の烈しい山道を馬車に搖られて行く時は、先きに一體どんな宿屋があるだらうと心細くさへ思はれたが、行つて見ると思つたより大きな旅館が何軒かあつた。然し大きい割合に似もつかぬ不潔さで、おまけに浴客が、最も低級な趣味に生きるらしい會社員や鑛山師の類ばかりだつたので、僕はすぐ不愉快な居心地を感じた。幸に僕等の部屋は見晴しのいゝ二階に取つてあつた。そこから見渡される青葉の景色は見事だつた。然し健康な體を溫泉場の部屋に横へる程 out of place に感ずるものはないね。

然し又君のやうに、病氣の爲めにそんな處にゐなければならない境涯はなほつらいだらうね。僕の今の言葉は君を不快にしはしなかつたらうか。

夕餉をすますと、僕は二階の緣側を一廻り歩きまはつて見た。ふと裏庭の、公園風な、築山の下道に、うづくまつてゐる浴衣を着た二人の人影を見つけて、柱に身を倚せながら立止つた。

一人は瘦せて背の高さうな老人だつた。それに向ひ合つて、日本髮を結つて、オリーヴ色の帶をしめた娘がしやがんでゐた。よく見ると、今取つて來たらしい根まがり竹の枝を折つたり皮を剝いたりしてゐるらしい。娘も細々とした體つきで、遠眼にも、潤澤な髮の毛を持つてゐるのが際立つて眼についた。僕は見るともなしにそんな事を觀察しながら、無意識に頭の中で、過去の記憶を擇び分けてゐるらしかつたが、ふと幻想から現在に立ち返つた時には、その娘の中にお艶さんを結び附けて考へてゐたのに氣が附いた。而して僕は不思議な自分の頭の働きに自分ながら驚いた。

姿のいゝ十二三の女の兒に見る、あの小鹿のやうな、優美ななよなよしさは、又お艶さんの特長ともいふべき生際の非常に美しい、抱きかゝへて嚙みしめたい程魅力を持つた髮の毛は、二つとも眼の前の娘が持つてるらしく僕には思はれた。僕の總ての過去の回想は、氣息もつがせず押し寄せて來て、全身の血を煽り立てるやうに心

臓に突き入るのを感じた。

是れを讀んでゐる君の顏に、僕は輕い皮肉な微笑が浮んで來たやうに思はずにはゐられない。君のやうに默つてゐながら、世の中の事を知り拔いてる人には、實際兒戯に等しい馬鹿氣た挿話とも見られよう。然し隱し立てをしない積りで玆まで書いて來た僕は、もう後に引く事は出來ない。君の皮肉な微笑の影に見える同情に依賴して、僕は構はず續けて書いて行くよ。

世の常ならぬ僕の凝視に催されたと見えて、娘はふと顏を上げると眞直に僕の方を見た。僕も全身の力を眼に集めて、この白日の夢を破るまいとした。咄嗟に老人は直ぐ娘の所作に氣が附いて、娘の視線を辿りながら僕の方に眼を向けた。娘は慌てゝ顏を伏せた。而して老人に先んじて立上つて、僕の方に後ろを向けてしまつた。而して二人の姿は築山の向うに消えてしまつた。

白いものを見つめてゐた僕の眼は、日の目の足りなくなつた夕方の景色の前には盲目のやうだつた。その爲めに意識までがぼんやりして、自分ながら自分の足が、緣を踏んでゐようとは思へなかつた。然しこの錯覺はぢきに破れて、僕は段々と中有から降り立つた。而して、總ては眼のあたり起つた事であるのをしつかりと意識した。夢ではない、現實だ。こんな現實があるのか。勿體ない。僕の心はそは〳〵する程嬉しかつた。失はれた世界が又戾つて來てくれたんだ。ひとりでに微笑を浮べながら、僕は力強く緣側の上を行つたり來たりした。母が湯に行かうと促しに來るまで、一秒が過ぎ去つたのか、永遠が過ぎ去つたのか、僕には分らなくなつた。僕はただぼんやりとにこ〳〵しながら母の跡について行つた。

疲れた母は、藥湯の効力に快い睡氣を催したと見えて、湯から上るとすぐ安らかな眠りに落ちた。僕は、持つて來た君の「蜻蛉の幼蟲と氣管に關する研究」を讀まうと試みて見たが、幾度讀み返して見ても何んにも分らな

かつた。聖書も同様だ。僕の眼の前には夕方に見た娘の印象がきれ〲に見えたり隠れたりして困つてしまつた。日記も習慣的につけはつけたが今讀んで見ると、唯、

「今日登別○○館に來た。穢い所だ。然し非常にいゝ所だ。僕はこんなに幸福に感じた事はない。ダビテのやうに裸かで跳りたいやうな晩だ。今日の出來事は一生涯忘れられまい。こんなに湧き上る愛の力を如何すればいゝんだ。勿體ない。母の寢顔の懷かしさよ」

とだけ書いてある。實際その晩、僕はこの世に生きる事が、有難くて、勿體なくて、寢てはゐられなかつた。二時を打つのを聞いて思ひ切つて床に這入つて見た。床は軟かく快かつた。床の中で總ての青年が襲はれる多くの妄想……野心、空想、後悔、肉慾、自責、企圖……から全く解放されて、僕は子供のやうに、すぐ深い樂しい睡眠の底に引込まれて行つた。

翌日眼が覺めた時には、晴れた日の光が、北海道では板戸の代りにガラス戸を使ふ習慣なので、もう横ざしに緣側の上に射しこんでゐた。僕は蕾が花になるやうにひとりでに眼をさまして、思はず床の中でにこ〲してゐた。而して自分の體を今更のやうに、逞しい頼もしいものに思つて、左右の腕を代る〲眼の前につき出して、握つて見たり、側にあつた鏡を取つて、白い齒を出して映して見たりしてゐた。軈て僕は雪をはね返す若笹のやうに、床の上にすつきり起き上つた。そこには、母が疾に着がへをして、眼で撫でながら僕を眺めてゐた。

僕は心の中でにこ〲しながら、着物を着かへ始めた。どうした加減か、その時ふつと今まで知らなかつたいまはしい不安が頭を擡げ出した。僕は、帶を結びながら、何か忘れものでもしたやうな心持で、昨夕の光景を思ひ出さうとしてゐた。思ひ出さう所ぢやない。その光景は眼で見た時よりも明瞭な輪廓を取つて、僕の頭の中にへばり着いてゐた。それにいまはしい不安の起る筈はない。それぢや何が自分をこんなに不安にするんだ。何ん

だかあの娘を見た爲めに、僕の生命は悲哀不幸の道筋にしつかりと結び附けられてしまつたやうな氣がしたんだ。そこには何か知らん渡る事の出來ない溝のやうなものがあつた。不思議な物淋しさが漂つてゐた。「はあ先生、呑氣至極にも幻想を現實に引つ張り下さうとしてゐるな」僕はその時の氣分から、こんな輕い自己反省をやつても見た。然し、思へば、僕が今惱んでゐるこの不安この煩悶の總ては、その時頭の中に顏を出し始めたその小惡魔の仕業なんだ。

僕はその娘をせめてはもう一度見たいと願ひに願つた。彼女は自分と同じ宿屋にゐる。然しその部屋は何處だらう。輕い心懸りが殘つてその日は暮れた。夜、寢る前にもう一度湯に行かうと思つた。ぐつしより濡れて鼻緒のゆるんだ下駄を氣味惡く引きずつて、暗いランプの光を便りに、危い石段を下りて、崖の下に、小さな急流に跨がつて建てられた浴室に着いた。客らしい人は一人もゐないで、方々の宿屋の番頭や女中が混浴して、あらん限りの卑猥な言葉を、鐵砲でもうつやうに抛りつけ合ひながら、はしやぎ切つてゐた。がつかりしてその儘歸らうかと思案してゐると、脫衣室で丁度着物を脫がうとしてゐる一人の老人に僕は昨日の人を見出した。僕は躊躇なく脫衣室に這入つた。而して老人より先きに裸かになつて、湯槽に躍り込んだ。逞しいパンと醜いニンフとは、浴客の襲來に興をさまされて、一人あがり、二人あがりして、やがて、板じきりで隔てられた二つの大浴槽は、かの老人と僕とが二人だけで占領する事になつた。

偖て、この場合あたりまへならば、僕が世慣れた調子でかの老人に何か話しかけでもして、近附きになつて行くのが順序なんだらう。處が、僕にはそんな藝當は眞似にも出來ない。のみならず、その老人といふのが餘程氣むづかしさうな、昔氣質らしいお爺さんだつた。始終何か口の中で小言でもいふ風で、僕の方には見向かうともしなかつた。上り湯から溢れて來る水の音と、二人が顏や手首を手拭で洗ふ度に起る、油を撫でるやうな滑らか

な響きとの外には、浴室の中は森閑として靜まり返つてゐた。

その時、入口の方で突然足駄の音が聞こえた、僕はぎよつとなつて而しておど〳〵した。老人も耳を澄したやうだつた。而して又暫く沈默が續いた。

もうと思ふ頃に、入口の戸が細目に開いた。僕の全心全靈は唯一つの「注意」だつた。湯氣につゝまれた暗い石油ランプの光に隱れて、首だけ湯から出した僕は、獵夫のやうに、這入つて來る人を窺つた。「お爺さまお一人？」といふ沈んだ、然し若々しい聲が、僕の耳を雷のやうに撲つた。「思つたに增して何んといふいゝ聲だ」と思ひながら、僕はその聲を耳から心の奥まで飮みこんだ。

僕がゐる事は心得ながら、そんな事をいふのは面倒臭いとでもいつたやうな「む」といふ返事が、老人の口から聞こえると、その人はいそ〳〵として石の段々を降りて來た。濡れた敷石が辷るので、右手を平らに延ばして中心を取りながら、刻み足に歩みよるそのめでたさ。やがて敷石と平らに、滑らかな湯のひた〳〵と溢れる湯槽の側に立膝をして、手拭で胸のあたりを濕しながら、湯氣の間を、祖父を目探つてゐたが、そこにもう一人若い男のゐるのに氣附くと、五體に漲る羞恥に思はず手足を縮めて、首垂れてしまつたその可憐さ。僕はたゞぽんやりして、夢でも見るやうに事の成行きを眺めてゐた。娘はやがて老人に促されて、思ひ切つて湯槽に沈んだ。僕は水を隔てた數尺のあなたに、彼女の肉體のある事を痛い程意識した。而して、飽電した水の中にゐるやうに、ぴり〳〵する刺戟が、僕の皮膚を攻め立てるのを覺えた。自分ながら、餘りの初々しさに惘れて、强ひても心を鎭めて、そこにゐ殘らうと藻搔いて見たが駄目だつた。僕はとう〳〵たまり切れないで、そこ〳〵に隣りの湯槽に移つてしまつた。

それから、板じきり一枚を隔てゝ湯につかりながら、僕は隣りの湯槽の音を一つも聞き漏すまいと、兎のやうに

聞耳を立てた。愛に飽き足りた同士の間にばかり成り立つやうな沈默が快く老人と娘との間に取り交はされてゐるらしく、何んの話聲も聞こえて來なかつた。僕は心安く一人になつて、平和を極めた微笑を湛へながら、その能辯な沈默に醉ひふけつた。靜かな穩やかな夜だつた。無人の山の中を流れ出て、人里の方に急いで行く溪河の水音だけが、この沈默にふさはしい淸い伴奏となつて耳を撫でゝくれた。

彼女はやがて上り湯の所に來て髮を洗ひ始めた。體は板じきりの蔭になつて見えないけれども、處女らしい細細とした二の腕と、潤澤な黑髮の一部分とが、時々感能を刺戟して、なまめかしい洗粉の匂と一緒に、僕の腦を爛醉させた。二人が湯から上つて、下駄の音の遠ざかる頃、僕は盜人のやうに上り湯に近づいて、そこに彼女の面影を忍ばうとした。幾個かある手杓を探つて、洗粉のついた一本を見出だした時には、雀の如く小跳りした。而して凱旋の祝盃でも飮み乾すやうに、渴いた喉に、その手杓で冷たい山の水を瀉ぎ入れた。歸る時にはその手杓を大事に握つて歸つた。

その夜寢床に這入つた僕の眼の前には、まざ〳〵とボッチチェリのヴィーナスの誕生の畫が出現した。今摘み取られたばかりな薔薇の花を弄びながら、樂しさうに、輝き、躍り、微笑むあの小刻みな春の波が、まづ眼に浮ぶ。その波の上に擴がる空虛な、然し充實した大きな空間が、次ぎに思ひ出される。その眞中に描き出された、純粹な希臘風とはいへない優美な一種のポーズ。水の泡か、人か、海妖か、まだ乾き切らない、潤澤な、栗毛の髮を支へかねるやうに首をかしげて、夢からさめ切らない眼を稍ゝ細めに正面を見つめながら、細々と立上つた處女の姿。無限の生と喜びとを生み出すべき處女の姿。行きつまる所まで靈化した豐潤な肉感……。

その後、彼女と僕とは折々顏を合せるやうになつた。次ぎの日には、洗ひ髮のまゝで束髮にしてゐた。僕は、彼女が僕に媚びてさうしてくれたのだと思つて見たりした。一度遇ふ度に僕の執着は一段々々はつきりと深まつ

て行つた。今はもうお艶さんの聯想から切り放しても、立派に獨立して、僕をぐん／＼引きつけて行く力になつてしまつた。僕はそれを恐れた。然しどうする事が出來ようぞ。美しく刻まれたエボニーの塔のやうに、形のいい顔の上を飾る黒漆の髪、潤澤なその髪の毛の爲めに殊更纖細に見える淺黒い、然し艶のあるその細面、謎のやうな大きな眼、乳房のふくらみのない靈感的なその胸、小股の切れ上つた、すつきりしたその足つき。僕は、心の中で、さういふものを數へ立てながら、彼女に遇ふ事が少し遲すぎたと殘念がらないではゐられなかつた。彼女には、情熱の籠つた幾人もの若い男の眼がそゝがれたらう。その男達の中から彼女は心を搖り動かす何物をも見出さなかつたか。彼女は屹度見出してゐるに違ひない。見出さないといふのは奇蹟だとより考へられない。何事も知らぬらしく、觸れぬらしく見えるその胸の奥深く……あゝ、僕は彼女に遇ふ事が確に遲過ぎた。僕の心の中には、ひとりでに深い嫉妬と羨望の思ひが芽ざして來た。而して妙に打沈んだ氣分になつて、母などはうつちやらかして、獨りで二里ほど離れたカルルス溫泉に出かけて見たりした。

　貴樣は一體その女の何處に執着してゐるんだ。貴樣の知つてるのは彼女の皮相な外貌ばかりぢやないか。黒い髪の毛が何んだ。大きな謎のやうな眼が何んだ。あの病を祕めてるらしくも見える貧弱な胸が何んだ。若しあの形のいゝ頭の中に、無智な腦味噌がつめ込んであつたらどうする。あの天使の顔にふさはしい眼が、邪婬の相に引きつけられ易い眼だつたらどうする。あの初々しく見える胸の中に、ちやんと一人の男が座を占めてゐたらどうする。貴樣はつまり爪の垢ほども彼女には觸れてはゐないんだ。何んといふ貴樣は空想家で妄想家だらう。貴樣の努力してゐる靈性の生活は、一體いつの間にどこに捨てゝしまつたんだ。貴樣の事業は一體如何する積りだといふんだ。それよりも貴樣には女の愛を要求し得るものがあると思つてゐるのか。二十二の今日まで貴樣は一つでも自信のある仕事を仕上げてゐるか。貴樣の顔をよく鏡で見ろ。平凡に過ごした二十二年が、下手の描いた

肖像畫のやうに、力感もなく神彩もなく、鈍重に寫つてゐるぢやないか。垢拔けのしない貴樣の態度と服裝とをよく見ろ。何を考へ違ひをしてゐるんだ。馬鹿。貴樣は默つて、樽を破つて、トイフェルスドロックのやうに矻々と自分を築き上げなければならないんだ。女を求めるなら、貴樣がしつかり占領した王國の住民の中から求めるがいゝ。今總ての女は貴樣にとつては全くの異邦人だぞ。勘違ひにも程があるぞ。こんな聲が、一語一句、僕の頭を張りなぐるやうに響きわたる。

僕は默つて齒がみする。僕は僕自身の彈劾に手向ひの出來る何んの力も持つてゐない。然し僕には一つの尊い直覺のある事を知つてゐる。而して運命には後ろに髮のない事を知つてゐる。彼女の髮一筋は、彼女が僕のものである事を僕に信じさせる。而してその機運は今熟してゐる事を感じさせる。僕は勿論未熟な一青年に過ぎない。僕の容貌には女を牽き附ける何物もない。然し僕は、今まで、一生の苦樂を共にする女性に與へるために、この心とこの肉とを、能ふ限りの努力をもつて淨く保つて來てゐるのだ。僕は若い。而して今こそ一つの仕事も仕出來してはゐないが、生きる限り、內に潛む强いもの、美しいもの、尊いものを現す氣力と大望とを失ひはしない。彼女が旣に戀を知つてゐるとするか。好し、それなら僕はそれ以上の戀を知らして見せる。ほんとの戀がどんなものだか味はしてやる。僕は彼女に對してさういふ運命を持つと直感するのだ。

人氣のない森の間の小道を、匂の高い羊齒の葉を踏みしだいて力强く步きながら、僕はこんな風に自分を責めたり慰めたりした。僕の心は、霜枯れのやうに淋しくも、春の野のやうに望み多くもなつた。そんな眼まぐるしい不思議な變化が一日の中に幾度も起つて來るので、僕は全く知らない迷宮に這入りこんだやうに、毎日々々夢心地で過ごしてしまつた。

八月の二十六日には、あの大颶風が激しく北海道にも襲つて來たんだ。翌日の新聞を見ると、青森東京間の線

路に故障が出來て、汽車が不通になつたといふ記事が欄外に出てゐた。その次ぎの朝、食事をした時、給仕をした女中が、立つべき客が立たれないで困つてゐるといふ話をした序に、かの老人が一克にも、どんな不便があつても構はないから是非出發するといひ張るので、可哀さうに娘がもう二三日は逗留したいと泣いてゐたと噂した。僕は飯を食ひながら、氷のやうにひやつとしたものを胸に覺えた。女中は母に對して問はず語りに、その老人は東京の小石川とかに住む人である事、急いで歸らうとする譯は、孫にあたるその娘の學校が九月の一日から始まる爲めである事、老人は毎年その娘を連れて長逗留をする客だが、生粹の江戸兒で、恐ろしい頑固な人である事などをしやべつてゐた。

それは、からんと忘れたやうに晴れて、何んとなく秋らしい光を帶びた青空の研ぎ出された嵐の後の美しい朝だつた。雲一つないその空のやうな淋しい空虚が、僕の胸にも漲り亙つた。

便所に行つた歸りに、階子段を上つて、ふと縁側を見ると、自分の部屋の前の欄干に娘が立つて、小さな聲で「烏、烏」と呼んでゐるのを見た。手には食べ殘した食物を持つてゐるらしい。彼女はそれを屋根の上に投げて、かの貪婪な醜い鳥を招いてゐるのだつた。その横顏には、毎時もより更に深く沈んだ淋しさが漂つてゐるやうに見えた。烏は、板屋根の上に、興のさめるやうな足音をたてながら、横歩きに餌に近よつた。途端に、彼女は僕が暗い階子段から姿を現したのに氣がついて、こつちを見た。大きな印象の深い眼が、始めてまともにぢつと僕を射た。僕は事の不意に驚いて、思はずたじろいたが、最後の機會をむざ／＼と捨てる事の無念さに、反らした眸をもう一度彼女の眼に集めた。不圖つのる何んとはない甘愁が、僕の唇を震して、もう僕の眼は彼女から離れることが出來なくなつた。二人は離れようとしても離れられない運命的な強い力で結び附けられたやうだつた。何んの意味か、娘はそのまゝ二歩三歩後しざりした。僕は遠慮せずに彼女の方に歩んで行くべきだといふ事

を知つてゐた。そこには彼女に物いふべきたゞ一つの機會が殘されてゐるのを知つてゐた。それなのに、何んといふ馬鹿者なのだらう。是れ以上の飽滿にはとても堪へ切らない卑怯者のやうに、僕は緣側を、僕の部屋の方に曲つてしまつた。かう書くと長いやうだが、それは一分の四分一にも足りない短い間に起つた、はかない出來事に過ぎないのだ。然しこの瞬間から、一生忘れる事の出來ない恐ろしい感銘は、僕の生命を離れなくなつてしまつたよ。

　僕は驚く母をしやにむに急きたてゝ、其の日仙臺に歸る事にした。母は唯驚いて僕の狂暴な振舞を見守つてゐるばかりだつた。

　荷物を片附けてゐる中に馬車の來る音がした。驚いて緣側にのしかゝつて下を覗くと、玄關の屋根に半分隱れて、土地で一番立派な馬車が用意されてゐるのが眼に入つた。宿屋の下男下女が大勢がゝりで、それに荷物を運びはじめた。僕は今までの忙しさを忘れたやうに、茫然として一心にそれを視詰めてゐた。やがて主人の挨拶を受けながら、かの老人が姿を現した。僕は思はず欄干を堅く握つて唇を嚙んだ。それに續いて、かの少女が現れた。紫の袴の上に紫の外套を着て、あの潤澤な黑髮に飾り一つ着けぬその姿は、餘りに淋しい悲しいものだつたが、僕の眼には神々しく見えた。その袴の裾の一箇所折れ返つてゐるのすら、はつきり眼に映つた。「もう一度こつちを見上げてくれ」さう僕は神に祈つてゐた。二人が馬車に乘つて座を定めるまでに可なり長い間だつたけれども、彼女は、僕の眼を感じてゐると思はれるにも係はらず、見返つてはくれなかつた。馬車が動き出した。僕は皺枯れた聲を立てたと思つた。然し、結局、聲どころか、身動きもなし得ないで、馬車の後を見送つてゐるばかりだつた。見えるかぎり見送つた。けれどもその神々しくも冷やかな處女の首は、小搖ぎもしないで、とうとう視界の外に消えてしまつた。

空虚な世界は、淋しく、寒く、果しもなく擴がつた。
ふと氣がついて見ると、僕は欄干を握つたまゝ慄へてゐた。母でも何んでもひねりつぶして、そのまゝそこを駈け出したい戀愛の狂暴を、僕はその時始めて經驗した。その爲めには何物を犧牲にしても構はない殘虐な心が、がん／＼と體中を鳴り響いた。

（AよりBへ）

千九百十二年十月七日朝　東京

B兄、

僕は昨日の夕方から君に書き續けた。夕餉は勿論喰はなかつた。疲勞し切つて睡氣を催し、何處まで書いたとも辨へずに封筒にたゝき込んで、床に這入ると、夢から夢の苦しい眠りが今朝の九時まで僕の瞼を開かせなかつた。

頭が破れさうに痛む。然し兎に角僕は告白をし切らなければ氣がすまない。

孤獨が、今、僕の食物でもあり、毒藥でもあり、最大の慰藉でもあり、最大の苦痛でもある。ある時は、自分が滅茶苦茶に可哀くなり、ある時は見向きもしたくないまで厭はしくなる。神の愛にひたり切つた赤兒の覺えるらしい赫奕とした法悅と、樂園を逐はれたアダムのやうないら／＼した苦悶とが、交る／＼僕の心をさいなむ。僕には人間がこんなものだとは思ひもよらなかつた。九月に君に書いた僕の手紙はよくもあゝ白々しく書けたもんだ。

種の持續のために、自然が作つた狼穽とはこれをいふんだらうか。意識を打貫き、心を打貫き、靈を打貫いて、

なほその奥までにも這入りこんで、存在の根柢を自在に搖り動かすこの恐ろしい力が、單に生殖といふ自然律を保存するための道具に過ぎないといふのか。こんな人間内部の神祕な活動が、知能だけで輕く取扱はれて結論を下されるのを、僕は人生に對する侮辱だと思ふよ。この頃の僕の生活は、どの斷片を取つて見ても、科學の組織を根こぎにすることが出來るやうにさへ考へられる。然し、この心の動亂の跡に殘るものは畢竟何んだ。生々とした心の皮膚に、隙間なく殘された擦過傷……それだけだ。

さあ、何處まで書いたかよく覺えないが、まあ書いて行く。

僕は郷里に母を送り返すとすぐ東京に出た。それから今日までにした事といへば、唯小石川區を當もなくうろ〳〵つき歩いたゞけだ。登別を發つ時、僕は宿帳を取り寄せて、彼女の名前を知る事だけは出來たが、每年來るためか住所は書き入れてなかつた。今から思ふと、何故その住所を知る手段を取らなかつたかを怪しまざるを得ない。この戀に對しての僕の眞劍さが足りなかつたやうにさへ思はれる。何んといふ腑拔けだらう。不思議な事には彼女の姓はお艷さんと同樣に小林といふんだ。女學生の登校の時刻になると、僕は自制も恥も忘れてしまつて、夢遊病者のやうにふら〳〵と家を出る。而して當もなく町々を歩いて見る。午後にもさうする。夜が來る。すると滿たされなかつた心賴みに代つて、苦々しい心の苦しみが僕を脅かし始める。僕は不良少年のやうな恥知らずの眞似を悔い、學術に對する尊敬と興味の荒んで行くのを悲しみ、餘りに亂雜な自己の分散を憤りもする。苦しい淋しい自己否定の淚が、每晩僕の眼からは溢れ出る。ある晩は、僕は、如何なる人よりも激しく自分を責める。又ある晩は、苦しみぬいた擧句、ぐた〳〵になつて、彼女の前にとも、神の前にとも知らず、何んとはなしに切ない祈りの頭を下げてゐる。而して眼からは留め度もなく淚を流してゐる。

學校には初めの四日出たきりだ。

前には自分の容貌を案じたり、力量を疑つたり、彼女の愛はもう他人にいつてゐるのではないかと心配したりした僕は、唯一と眼だけもう一度彼女を見たい小さな願ひに固まつてしまつた。その代り、その願ひは我慢が出來ない程深まつて行くばかりだ。

唯偶然な邂逅がこんな奇蹟を現すといふのは一體何を意味するのだらう。僕は不思議な光明界に抛りこまれた盲人のやうだ。眼の外には遍照不斷の光明がある。然し眼の中には永劫不壞の暗黑があるばかりだ。

B兄、僕は幸に自分を僞らずにこゝまで告白を書いて來た。然し今は自分ながら馬鹿らしくなつた。今はもう希望も野心も根こそぎ無くなつてしまつたんだ。何んの感激もない虚無が僕の次ぎの瞬間を待つてるんだ。僕と君との連絡は絶えてしまつた。もう僕にはこの上君と交る必要もなければ資格もないんだ。恐らく是れだけの事を知つて貰ひたい爲めに僕はこんな馬鹿々々しい手紙を書いたんだらう。

若しこの長い手紙が君を不快にしたら、是れまでの交誼に免じて許してくれ、それよりも僕は要もなく君の病氣を惡くはしなかつたか知らん。

僕は心からこの手紙が君をよりよき健康に於て見出さん事を祈る。

（AよりBへ）

千九百十二年十月十日　東京

B兄、

少くとも六日の晩に書いた手紙に對して、今日あたりは君から何んとか消息を得はしまいかと思つたのも空賴みになつてしまつた。然し考へて見ると、君から返事を待ち設けてゐた僕は、どこまでも蟲がいゝといはなけれ

ばならない。僕は又こんな手紙を書き續けてはならないのかも知れない。然し戀する心は深い祕密を希望しながら、廣い露見を求めるのをどうしよう。

僕には、今、人文の總てがすつかり面目を革めたやうに眺められる。科學も、文藝も、道徳も、僕の白熱した心には假面舞踏としか思はれない。それらのものは、僕の心讀したやうな心の動搖を全く知らなかつた不幸な人達が、消しがたい寂しさを忘れる爲めに、據ない手段として、表面的に工夫し出したものとより見做されない。

今外界は、僕以外の人は誰も知らなかつたやうな獨自な姿を現してゐる。こんな姿を窮めた科學はない。こんな姿をあつかつた藝術はない。こんな姿に卽した道徳はない。この姿の主たるものは僕唯一人だ。總ての人文はこの姿の外周だけで活動してゐて、僕だけがこの姿の內部に生きてゐるのだ。僕は創造に着手する神のやうな自由と昂奮とを感ずる。

僕の戀がきつと成就する運命にあるといふ事は、はつきりと默示されてゐる。この絶大な特權に報謝するためには、僕は總ての人を愛しようと思ふ。と、いふよりは、苦し過ぎる程止め度なく湧き溢れる愛慾は、やがて僕の戀の成就を裏書きするものだ。今日まで力を盡して神聖に保つた僕の心と肉とを、全部彼女に與へる時、僕に飽和した彼女の全體を僕の掌に掴む時、人類の喘ぎ求めてゐた幸福は、僕等二人の上に完全に成就するだらう。而して僕等は新しい力となつて、新しい人文の建設に全力を注ぐだらう。

彼女の眼は僕を驅り立てる。僕はもう紙の前に坐つて、哲學者じみた事なんか書いてはゐられない。僕にはもつと重大な生々した仕事が殘されてゐる。

B兄よ、さらば。僕の心持は君にも通じる筈だ。それなら君の病氣は今日はずつと快くなつてゐるに違ひない。

（AよりBへ）

千九百十二年十月十五日　東京

B兄、

先程（午後四時頃）お茶の水橋の袂で僕は彼女に遇つたと思つた。束髪にしたその髪は見覺えのあるものだつた。紫の袴をはいてゐた。痛々しいほど痩せてゐた。而してその氣高い優しい歩きぶりが、何よりも僕に確信を持たせた。それを見附けた瞬間に思はずかつとなつた僕の頭は、やがて恐ろしい程冷靜になつた。又と遇ふことの出來ない機會が來たなと思ふと、僕は眞劍勝負でもする時のやうな妙な凄い落着きを覺えて、屹と思案した……跡をつけて行つて、その住所をつきとめたものだらうか、それとも追ひすがつて言葉をかけようかと……僕は知らず／＼立ち止つて考へたが、僕の理窟は勿論第一の方法が常識的な安全な事だと僕に教へてゐるのに、僕は平氣でまつしぐらにその少女の方に急ぎ出した。宙を歩くやうな足どりを、强ひてしつかり踏みしめて、間もなくその人に近づいて、聲をかけた。自分ながら疎ましい鈍い聲が、喉を漏れたと思ふと、その人は驚いて僕を振返つて見た。人違ひだつた。不良少年にでもつけられたと思つたのだらう。その人の顏には鋭く恐れと憎しみの色が讀まれた。と思つた時は、僕は夢中で、何處とも知らぬ場末町を、ひた走りに走つてゐるのに氣がついた。

何んといふだらしのない墮落だ。

神も人も僕を惡め蔑め。僕を地獄の底にまでふみにじつてくれ。

何んといふ、何んといふこつた。

（AよりBへ）

千九百十二年十月十六日　東京

B兄、

一昨日の日記に、

「退け恥知らずの肉慾の惡魔！　俺の靈性が輝いて天秤の一方を重くしてゐる時に、貴樣が誘惑の重味を他の一方に加へようとするのは、飢ゑた虎の前に兎を置いて、虎を肥らせまいとする間違ひ程の間違だとは氣附かないのか」

と書いてゐる。一昨日までは肉の誘惑も、僕の靈性を向上する一つの糧に外ならなかつたんだ。それだのにどうだ、昨日の忌はしい出來事に遇つた僕は、その晩、容易に寢つかれないで、喘ぐやうに肉を思つた。僕は妄想の中に、かの恐れと惡しみに燃えた少女の顏を兩手で押しつぶさんばかりに抱きしめてゐた。その少女はどうかすると彼女にもなつた。僕は野獸のやうに寢床の中でのたうつた。而して夜の白むまで、あらゆる汚穢、あらゆる破廉恥、あらゆる暴虐の限りを盡した。而して白痴同樣に頭の働きが鈍り切つてから、疲勞の極、暗黑な眠りの底に陷つてゐた。

自分が恐ろしい。僕は何處まで行かうとするんだ。君はまだ旅行する程に健康は囘復してゐないのかい。僕は狂人と同樣に監督者を要するらしいよ。君が來られなければ僕が行く。

天に昇つたかと思ふと、眞倒樣に地に落ちこむ僕の心は恐ろし過ぎる。

恐怖――僕は恐怖といふ言葉の本當の意味を初めて知つた。

（BよりAへ）

一九一二、一〇、一八　鹽原

九月二十日以來君の消息は、絶えて久しく死灰のやうに靜まり返つてゐた僕の神經を昂奮させるに十分だつた。僕は目當てのない嫉妬をすら感ぜずには居られない。

「君が鹽原に來る事は、事件の進捗の上に何んの效果をも齎らし得まい。小林といふ姓と小石川とが分つてゐる以上、僕は上京して、必ず「薔薇の騎士」の役目を勤め了せると信ずる。だから今朝電報を打つた。都合のつき次第上京する。その都合の中には旅費の才覺も含まれてゐる。金がマイナスになつてゐるのだ。

その序に僕は君を牧師に紹介しよう。彼は少くとも自分以下に說教し、自分以下に親切を盡す眞率さを失はない男だ。

君が僕に信仰を質さうとするのは筋道が違つて居る。君は今生活慾の絕頂に居る。僕の當面には唯死といふ問題がある計りだ。僕の物凄い青白い幻影を提げて、僕は君を脅かすに忍びない――縱令君の人生觀を顚倒させて、君を眞靑な悲觀論者にする程な深刻さを僕が持合して居たとするも。

同じアルプス山に源を發しても、君はその兩岸に葡萄と薔薇とを播いて行くライン川であり、僕は水松と唐檜とで黑ずむダニューブ川だ。人は遂にその終局に於て孤獨があるのみだ。それが人の十字架だ。而して誇りだ。

何しろ神は正確だ。彼の道には無さ過ぎる程誤謬がない。恨まうが喜ばうが、君に戀のあるといふ事は、嘗て云つたやうて、豫定の運命だ。僕が惡魔であつたら、又、してやられたと、皮肉笑ひに失敗をまぎらすであらう。若し天使であつたら、聲を限りにハレルヤを叫ぶであらう。

餘りに十全な君の是れまでの生活は、僕に友誼の挾み所なからしめた。今君は滿されざる空虛を持つてゐる。

その空虚が直ぐ滿さるべきものである事は、君の幸運が裏書きしては居るが、暫くの間でも、僕が君に何等かの助力をなし得る事は、僕に取つては兎も角も大きい滿足だ。

君よ、君の爲めに戀愛の道德を語らう。條理ある勿れ。躊躇する勿れ。唯燃えよ。燃えて愛せよ。是れだけだ。

（AよりBへ）

千九百十二年十月二十二日　東京

B兄、

君はまだ汽車の中だらう。それを追ひかけてこの手紙を書く。

君よ、僕にとつては神を信ずるといひ現すのは、不可能と思はれるほど困難な事だつた。然し今僕は神を信ずる、神に祈る、神を生きる。僕には愛があり、神はそれを充して下さるからだ。君に連れられて行つたその教會の入口で、第一番に彼女に遇はうとは、誰が、何時、どうして思ひ設ける事が出來ようぞ。その時の感激を君は想像して見ることすら出來まい。君は僕の樣子を一眼見ると一寸微笑んだが、その笑ひは先づいゝとして、冷やかに「あゝ、あれか、あの小林なら疾に知つてたんだ」といひながら、事もなげに僕を彼女に紹介してくれた時には、僕は危く君をなぐりつけようとしてゐたのを知つてはゐまい。僕に取つては何物にも代へがたい程尊い再會が、あんなに安價に取扱はれようといふ事は、實際その時には堪へがたく思はれたんだ。一方にそんなこだはりを心の中に作りながらも、僕は彼女の眼が、果して僕を覺えてゐるか、少くとも僕を思ひ出してゐるかを探らうとした。數人ゐた中から殊更自分だけが選ばれて、一人の若者に紹介されたのを訝りもし、羞ぢらひも

して耳まで眞赤に取りのぼせた彼女の眼が、ちらつと僕の眼に出遇つた時、僕は心にも體にも、冷水と熱湯とを一度に浴せかけられたやうな不思議な身ぶるひをして、わな〳〵と慄へてしまつたよ。彼女は僕を覺えてゐてくれたんだ。

それからの事は、唯夢の中を歩いて來たやうだ。牧師に引合はされた時も、賴もしさうな人と思つた外、何をいつてゐたか覺えてゐない。會衆が聲を合せて讃美歌を歌つた時は、人の聲と聲とのからみ合ふそのありがたさに、嬉し泣きをしてゐた。彼女も歌つてるに違ひない。さう思つて僕もその聲にからみつかうとした。然し僕の歌は喉元で感激のために押しつぶされてしまつた。牧師の說教は小まどろしくばかり思はれた。僕は時々君を竊み見てその冷淡なのに惘れてしまつた。會堂を出て、君が默つたまゝ僕に握手を與へてくれた時、僕は一體どんな表情をしてゐたらう。

僕は君に感謝する。總ての實在に感謝する。「死よ爾の刺何處にありや」僕の手が死人の額に置かれたら、彼は愛の世界に甦つては來ないだらうか。僕には奇蹟を疑ふものが憐れまれる。一切萬有は奇蹟で築き上げられた美しい塔だものね。

然し待て。僕にはまだ仕殘された仕事が澤山あるんだ。君は彼女（とはいふまい。是れからその美しい名でY子と呼ばう）の住所を探し出してくれた。第一の鍵は僕の手に這入つた。然し第二第三――第七までの鍵は如何すれば手に入れる事が出來るんだ。君はY子に手紙を書けと勸めてくれる。僕にはY子の僕に對する好意は疑へない氣がするけれども、一方にはまた暗い疑ひが絕えず頭にこびりついてゐる。で、この大膽な一歩を踏み出すために僕は憐れな程躊躇する。僕の快活さは一體何處に姿を隱してしまつたんだ。

開けてくれ最上の道！　その爲めに僕は、僕を助けてくれる總てのものゝ合力を賴む。

僕は君に何をしてあげればいゝんだ。僕は先づ有り餘る僕の幸福の總てを獻げよう。

（BよりAへ）　葉書

一九一二、一〇、二二　西奈須停車場

是れから又山に這入る。燃えるばかりに紅葉した山が彼方に見える。消える前の燈火のやうに、透明な鮮かな色をして。

實をいふとあの小林とは少し意外だつた。子供ではないか。然し君の眼は恐らく君を欺いてはゐないだらう。子供は自然の胎だから、而してその人は、僕の見る所では、貴いものを少からず孕んで居る胎だから。

では左樣なら。今から人力車でそろ〳〵うたせよう。

（AよりBへ）

千九百十四年正月三日　仙臺

今、家内で雜煮を祝つてゐたら、突然君からの電報が來たので、一時は思はず腹を立てたが、それと同時に安心もし、喜びもした。一昨年の秋、西奈須から一枚葉書をよこしたきりで、一體全體君は今まで何處で何をしてゐたんだい。

あの時、僕は長い返事をすぐ鹽原に向けて書いたら、郵便局から「宛名人轉居先不明」の附箋がついて返つて來た。その時の僕の驚きを想像してくれ給へ。僕は折返し先方の家主に君の消息を尋ねてやつたが、少しも要領を得ないぢやないか。心當りはあちこち尋ねて見た。然し皆目見當がつかなかつた。僕は君の失踪を色々に想像

して見た。而して病氣の治らないのに失望してしまつて、田舍に歸つたんぢやないかと思つた。又Gに云つて笑はれながら若しやといふ事まで考へても見た。而して我慢がし切れなくなつて、大學の事務所で君の家の番地を尋ねて電報を打つて見たら、三日程してから返電があつて、「倅無事の由、居所わからぬ」といつて來た。これで安心の胸は撫でおろせた。と、同時に、どういふ譯で君は僕の友情をすら裏切るのだといふ不平が、苦しい程胸につき上げて來た。お世辭にせよ、君は僕に力を貸す機會の來た事を喜んでくれたのではないか。それなのに、どういふ事情があつたにせよ、君は、僕の大事の瀨戸際に、斷りもなく姿を隱してしまつたんだからな。

　僕はその冬仙臺に歸着する時、念の爲め鹽原まで出かけて見た。家主に聞くと十月二十三日の朝、君の借りてゐる家の表戸がいつまでも開かないので、不思議に思つたが、夕方になつても餘り靜かなものだから、不審に思つて開けて見たら、もう君はゐなかつたといふのだ。丁度その日は雪が降つてゐて、家の中は刺すやうに寒く、浴客の絶えた溫泉場の冬籠りの樣は淋しかつた。克明な家主は、君の古袴と殺蟲壜と原稿用紙と食器とを部屋の片隅にきちんと片附けて置いてゐた。それらの上には眼に立つほど塵が積んでゐた。それを見ると、僕は何んともいへない淋しい便りなさを感じて、がらんと薄暗い部屋の眞中に突つ立つたまゝ涙ぐんでしまつた。而してこゝで又君は一體どうしたんだらうと考へて見たが、判らない事は矢張り頑固に判らなかつた。僕はがつかりして力が拔けてしまつた。而して雪の中をとぼ／＼と獨りで步いて停車場に歸つて來た。

　それから一年三箇月といふもの君は死んだ人の樣に沈默して僕の記憶にばかり住み續けたんだ。

　その頃君の肉體は隨分ひどく衰弱してゐたし、思想の傾向も暗かつたから、悒鬱な氣分で暮してゐたのは十分承知しながら、僕は自分の心の動搖にかまけて、君の事をもつと深切に考へる暇を作らなかつた事は、惡かつたには違ひないが、それにしても、僕に何んの理由も打明けないで、そのまゝ一年餘も消息を絶つて姿を隱した事

は、少なからず僕を淋しく不安にさせたよ。君は東京に歸つて來て、初めて僕のゐないのを知つて驚いたんだらう。而して電報を打つてよこしたんだらう。

君の健康はその後どうなんだ。僕はもう怒つてはゐられない。こゝまで書いて來る中に、絕えて久しく打ち絕えた君に遇ひたい氣分で胸が一杯になる。

話したい事、相談したい事は、山ほどある。然し兎も角も、君のその後の樣子を簡單にでもいゝから知らしてくれ給へ。僕は元氣だ。Y子は肺炎に犯されて東京にゐる。二人は婚約した。僕は今一寸仙臺を動く事が出來ない。

（BよりAへ）

一九一四、一、三　東京

君と別れて、鹽原に歸つて見たら、山の中は寒くつて健康に適しないのを知つた。加之(のみならず)、自分の煮え切らない生活に深い懊惱(あうなう)を感じてゐた。その翌朝早く、あるかなきかの荷物をまとめて、僕は小笠原島への旅に上つて居たのだつた……懷(ふところ)が君から貰つた金で暖かい中に。

孤獨といふものを眞に味識したい爲めに、總ての羈絆を思ひ切つて斷(た)つてしまつた。孤獨となり得んが爲めには、君との交際は斷(た)たねばならぬ第一のものだつた。

小笠原島は氣に入つた所だつた。朝と夕とには、綿帽子のやうに山の上に宿り、晝間と夜とには瑠璃紺の空と海とを殘して、未練もなく消えてゆく一叢(むら)の雲。時あつてか、島を化して龍と爲すかと思はれる强雨と雷電。穏かな日の瀦(みづくま)に立つ花のやうな漣(さゞなみ)。甘味を帶びた、淸淨な、重い空氣。さういふ中に、黑い一つの汚點(しみ)のやうに僕

は一年を一人で住んだ。

僕の疑惑は深く募るばかりだつた。然し僕はより多く自分にはなり得た積りだ。他人の築いた塔の上に自分を乘せる姑息を許すまい。是だけの覺悟と、相當の創見を含むと自信する六箇の論文と、多少回復した健康とを抱いて僕はあの思ひ出多い島を去つた。

花の中に蘂がないやうに、東京には君が居なかつた。淋しさの限りだ。

Y子さんはどうした。

（AよりBへ）

千九百十四年一月五日　仙臺

B兄、

僕が碌な事もしでかさない中に、君は凱旋の將軍のやうな都入りをした。けれども、六箇の論文といふ大功績よりも、君の黄金の心臟が、もう一度僕に歸つて來た事を僕は較べるものなく愉快に思ふ。

僕は、先づ、君の健康の回復した事を何よりも祝福する。

僕は何事もし遂げなかつた。然し僕の外部は、僕の內部と外緣とを少なからず變化さした。

君が突然影を隱したんで、僕は戀愛事件をうまく運ぶ爲めに思はざる困難を感じて、無經驗なりにもそれを一人で切拔けて行かなければならなかつた。僕は次ぎの一歩を踏み出すのにさへ途方に暮れてしまつたよ。快活で一本氣だと誰からも見られる僕が、どんなみじめな躊躇と煩悶にさいなまれたかは君にも想像は出來まい。日はどん〳〵走るやうに立つていつたが、僕の胸に殘るものといつては、燒きつくやうな思慕の情と、段々暗くなつ

て行く失望の念ばかりだつた。僕は毎夜のやうにＹ子の門口を訪れた。然しＹ子の姿らしいものでも見れば、すぐ小盜人のやうにこそ〳〵と逃げてしまふのだつた。唯日曜日毎に教會に行つて、他所ながら彼女を見るのがせめてもの慰めだつた。Ｙ子は去年の四月に優等の成績で學校を卒業した。それからは時々會堂に姿を見せぬやうになつた。僕はなほ〳〵焦ち悶えた。而してとう〳〵切羽つまつた熱情に驅り立てられて、思ひ切つて、忘れもしない五月十二日に、僕は彼女にあてた最初の手紙を書き送つた。

その次ぎの日曜日に、僕は死刑の宣告を受ける囚人のやうな心持で教會に行つた。總ての人の眼が、僕の心のどん底を刺し貫くやうに思はれた中に、僕はＹ子が來たらとそればかり氣を配つてゐた。が、Ｙ子はとう〳〵教會には來なかつた。

その頃の僕は、肉が一日々々に落ちて行くのを感ずる程衰弱して行つた。それと反對に、神經は極度に緊張した。一昨日より昨日、昨日よりも今日といふやうに、僕は眞劍になつて行つた。今日以上に眞劍になつたら、死ぬより外はないと思ふほど苦しみながら、次ぎの日に、別に死にもしないで、一層せつぱ詰まつた自分を見出して驚いてしまつた。ある時はかくまで女性に心を奪はれた自分の子供のやうな熱意が可哀相になつて、何んとなく腕をさすりながら涙を流した事もあつた。遇ふまでは一眼見たいばかりだつた僕の欲望は、又恐ろしく大きくなつた。若し彼女が既に他人と契つてゐたら…… さう思ふ瞬間に、人の側にゐる時でも、夜中でも、見界なく、跳り上つた。

一度思ひつめた僕は、性質として、成るにしろ成らぬにしろ、徹底しないではゐられなかつた。而して冒險にも無我無性に手紙を書き續けた。Ｙ子はその頃教會に來る事もあつたが、男子席の方には眼もくれずに、すつと來てすつと歸つてしまふし、僕には一行の返事もよこしてくれなかつたから、一體なら僕は絶望に沈まなければ

ならない筈のやうだが、時々遠くから見るだけのＹ子の擧動に、鋭敏になつた僕の神經は、確かな手答へを感じて希望だけは捨てないでゐた。Ｙ子の顏は際立つて蒼ざめて來た。而して假面のやうに表情の乏しい容貌になつた。上を向く時は、何か怒つてゐるやうにも思はれ、下を向く時は、泣いてゐるのではないかと、はつとする程だつた。僕は、その着物の襞、髮のほつれ毛にも意味を讀まうとあせつた。彼女は無頓着ではない。それは確かだ。僕に對して或る關心を持つてゐる。それも確かだ。それなのに、何故あんなに煮え切らないんだ。彼女は僕の愛に酬ゆる事の出來ない心にあるんぢやないのか。さう考へると、僕の頭はかーんとなつて、眼の前は眞暗に光を失つてしまつた。

　こんな風にあらゆる不安と執着に苦しめられながら、漸く學年の始末をつけて、兼ねて仙臺から來てゐた手紙に從つて歸省しようと支度をしてゐると、ある日牧師から呼ばれた。牧師は、Ｙ子が四五日前に來て、僕のやつた手紙の總てを披露して、苦しさの餘り、判斷して貰ひに來たといふ事を話した。さすがに僕は赤面した。牧師は懇々と、僕が謬つた手段を取つたのを說諭し、處女の心といふものはこんな不意な接觸に遇つて、どれ程迷ひ亂れるものだか知れないと、憐憫に滿ちた調子で嚴かにいつた。僕は今更にＹ子が愛せられてたまらなかつた。その外牧師は色々の事を云つたが、兎に角この問題の解決は牧師に委せて貰ひたいといふ事、牧師はなほよくＹ子の心中を確めるといふ事、二人の事情については何處までも同情者となつて、惡いやうには決してしないから、歸省して靜かに消息を待てといつた。

　僕は聽かなかつた。若し二人だけでいけないといふのなら、是非牧師の前でＹ子に遇はせて貰ひたいと强請した。牧師は何んだが躊躇してゐるやうだつたが、兎も角次ぎの日に來いといつた。

　次ぎの日卽ち六月の二十七日だ。行つて見るとＹ子は既に來てゐた。而して意外な事にはＤ教授も見えてゐた。

牧師は教授と一緒に立會つて、僕等の會見をさせる積りであつたらしいが、教授の考へで僕等だけ別室で會ふ事になつた。

美しい六月の日だつたが、教會内の裝飾のない白壁の一室は妙に愴慘な感じを與へた。僕は窓際に行つて、手を窓枠に突つ張つて、ぎごちなく立ちながら、Y子の來るのを待つてゐた。初夏の風に弄られて、窓の外のポプラの葉の笑ふやうに裏返るのが、僕には關係のない、幸福に充ち足りた若者の舞踏のやうに妬ましく眼に映つた。そこにY子が獨りで這入つて來た。その全身は震へる事も出來ない程緊張して堅くなつてゐた。たゞ血の氣のない唇だけが、斷末魔の人のやうに小刻みに戰いてゐた。その痛ましい姿はまともに見られない程哀れだつた。僕は今更に自分が思つた以上の大事な瀬戸際に出遇つてゐるのを强く感じない譯には行かなかつた。しん〳〵と浸みわたるやうな眞劍な心持が僕を非常に冷たくした。その冷たさに圍まれて僕の熱情は物を被せられた火のやうに苦しんで燃えた。

僕は何んといつていゝか知らなかつた。然し二人は互にいはうとする事を知り合つてゐた。

「僕はあなたを信じてゐていゝんですか」

何をいつてるんだと自分をたしなめながら、僕はこれだけの言葉を機械的にいつてしまつてゐた。石像のやうに下を向いたまゝ立つてゐたY子は、表情のない、裏ともいふべき聲で、大急ぎで唯「はい」と答へた。而して恨むやうな眼を上げて、ぢつと僕を見て、又下を向いてしまつた。

僕には、自分の言葉もY子の答へも、非常に物足らないものだつた。僕はこんな散文的な事をしたり云つたりする積りぢやなかつたのにと思つた。然し、同時に、この會見は始めから終りまで、是れ以上淨くする事の出來ない程、尊い美しい儀式のやうにも考へられた。

僕は簡單に事の顚末を牧師とD教授とに報告して、すぐ教會を出た。總てが夢だつた。僕は二十三でこの世に生れ出た赤子のやうだつた。

仙臺の用事といふのは全く異つた方面のものだつた。それは父の病氣が存外重かつたのと、家政の整理をするために親族會議が開かれてゐたのだつた。僕は家に歸つてもY子の事は、教授と牧師に注意されてゐたから誰にも打明けなかつた。而して一方では父の看護をし、一方では不愉快極まる親族會議なるものに顏を出した。「Aさんは學者の質だから、こんな事はよく判らんだらうが」などと前置きをして、僕に事件の說明をする奴なんかがゐた。この會議にはほと〳〵降參してしまつたよ。あいつ等のやうに何も事を面倒にする必要は何處にもありはしないんだ。取扱ひにくい財產は賣拂つてしまつて、債劵か何かに直せばいゝんぢやないか。さう僕は高を括つてゐたけれども、つべこべいはなければ氣のすまない奴等なんだ。

ある日僕は花壇の方に散步に出た。廣瀨川の川條が幾つかに分れて、それが呑氣らしく幾つかの水車を動かしてゐる。花壇といふ地名がつくだけに、昔から花の多い所なのか、葉を擴げたばかりのつや〳〵しい綠の中に、熱い陽にふさはしい色の花が、見え隱れに咲いてゐた。僕は頭一杯にY子を夢みながら、新鮮な生々した初夏の場末町をぶら〳〵步いて行くと、突然人を乘せた車屋に呼びとめられた。この邊にかういふ所はありませんかと僕の家のありかを聞くではないか。僕は改めて車の上を見たら四十位に見える女の人が乘つてゐた。第一印象がすぐ僕を不愉快にした。物慣れた、猫撫聲でも出しさうな、その癖、人を呑んでかゝるやうな、東京人の劣等な典型だつた。僕がその家の人だと知らしてやつたら、女の人は目立つて見える程驚いてゐたが、强ひてそれを押隱しながら、急に車から降りて、「私はY子の母で御座います、」Y子がどうのかうのと、女のすなる長挨拶を、頭を上げたり下げたりして、始めたのには、こつちが驚いてしまつた。而して戀愛につきまつはる忌はしい形式

事が、もう頭を擡げ出したのを不快に思はないでは居られなかつた。その女の人は何か僕に話したい事があるといふので、兎も角も家に案内した。彼女の用事といふのは、然し、手紙で十分事足るやうなものだつた。彼女は頻りと僕や家の樣子に探るやうな眼を向けてゐたが、暫くするとさも滿足したらしく笑みかまけて、良人が來られない次第があるので、女だてらに自分が來て失禮したといふやうな事を急がしくいつて、僕の母に對しては挨拶もそこ〳〵に歸つていつてしまつた。僕は堪らない程不快にさせられてしまつた。Y子と結婚するお蔭であんな女を母と呼ばなければならないのが不條理に思はれ出してならなかつた。

その後二日して牧師が仙臺に來てくれた。僕の父にも母にもさして異存はなかつたが、父は式を十二月まで延ばして貰ひたいといつた。父の病氣がその理由となつてゐたが、今から思ふと、その時僕の結婚をさす費用の出し所にも窮してゐた病中の父の苦しい胸の中が察せられてならぬ。牧師は、それでも是非結婚の式だけは擧げておく方がいゝと逼るやうにいひ張つたので、僕は親族會議を一週間ほど延ばして貰ふ事にして上京した。それが七月の十四日だつた。

それから僕には有頂天な日が續いた。僕にはあらゆる機會が與へられ、從つてあらゆる愛撫を彼女に與へたけれども、結婚の式によつて普通導き入れられる關係を結ぶ事だけは避けた。一週間經つてから別れる時、Y子は何か或る不吉でも豫覺したやうに、哀れな程打沈んでしまつた。僕にも妙に不安がつきまつはつた。然し、この不安は僕を不快にした。二人の前途に些かなりとも疑の雲をかけて見るのが、癪にさはつて、例の向つ腹からY子をたしなめて上野を發つた。

汽車の中で、僕はY子をあんなにたしなめたのを非常に後悔した。何んの必要があつてそんな事をしたのだらうと考へて見たが、實は根も葉もない事だつた。僕は幾度そのまゝ東京に引返してもう一度Y子の優しい項を大

事に胸に抱いてやりたいと願つたらう。
それから僕は又下らない親族會議といふものに沒頭しなければならなくなつた。父の病氣はどん／＼重つていつた。而して八月の三十一日に彼は僕等から離れて神の懷に歸つてしまつた。
B兄、僕は父の記憶を大事に愛せずにはゐられない。彼は僕に色々なものを遺して行つてくれた。商家に生れながら彼には勝れて上品な所があつた。福澤先生の門下の中でも、先生の勝れた點を會得した一人だといへると思ふよ。父の性行から推して考へると、先生はほんとは實利主義には緣遠い種類の人であつたらしいね。明治維新の際に、時を得顏に片田舍から中央にのさばり出て來た田舍武士が、事々しくも騷ぎ立てた武士道といふ乾燥で不自然な道德に、ひどく反感を持つた所から、平民の味方となり、從つて平民の生活と職業との味方になつてしまつたのらしい。その根柢では、先生は一箇の詩人肌な理想家ではなかつたらうか。父も、一生涯商賣人として過ごしたが、そのした跡を見ると、商賣は彼の一番表面的な生活に過ぎなかつたことがよく分るんだ。父の座右には、よく莊子と、スピノザと、カール・マークスの「資本論」とがころがつてゐたもんだ。父は又勝れてストイカルな人だつた。あり餘る情熱と多感とを强ひて押へつける必要から、父はあんな態度をしてゐたんだなと思ひ當る事がよくあつた。可なり齡の進むまで、幾人かの女に慕はれてゐた事を僕は知つてるが、父は淋しい程の冷靜さで、まじろぎもせずにそこを通り越してゐる。今から父の一生を振返つて考へて見ると、起伏のない廣野を靜かに淋しく通り過ぎた秋風のやうな心持がする。何んといふ氣高い淨い記憶だらう。
父は死ぬ二日前になつて、始めて財政上の失敗を殘らず打明けた。親族會議の相談が支離滅裂で、少しの纏りがつかなかつたのも無理はない。畢竟父は死ぬ間際まで、自分一人で回復策を講じてゐた爲めに、眞相は誰にも知られてゐなかつたんだ。彼の手傷は誰の想像したよりも大きかつた。今君に委しく話すにも當らない事だが、

兎に角二年程前から、父は每月僕に送つてよこす學資金にすら窮してゐたんだ。それでゐて、彼は今日までの生活に小動ぎ一つ見せなかつた。呑氣な僕は、平氣な顏をして人一倍にそんな血の出るやうな金を浪費してゐたんだ。若いものをいぢけさす程惡い事はない、と父はよく人に話してゐたさうだ。

父の死んだ日から僕の世界はがらりとひつくりかへつた。母が早く死んでゐてくれたらと思ふやうな悲慘な事が、眼の前でどん〳〵まくし上つた。仙臺でも評判な、屋臺骨のがつしりした建物は、競賣に附せられる始末になつた。父の祕藏な馬溪の觀音も、ルーソーの楢の林の畫も、一藏あつた書籍も、皆んな散り〳〵ばら〳〵になつてしまつた。東北學院の教師が二人來て、藏前の薄暗い廊下で、マークスの「資本論」を安いの高いのと世話人に云つてるのを聞いた時には、我慢が出來なくなつた、否應な𪜈に僕はそれを引つたくつてしまつた。眞夏の白日の下に行はれたあの暴虐の光景を思ひ出すと、僕は今でも口惜涙がこぼれるよ。

それから、母と僕と妹とは、ある親戚の屋敷内にある形ばかりの二階家を賃借りして引越す事になつた。十月になつても、僕の遊學の道はつかなかつた。尤も、周到な父は、一軒の製粉所を、永年使つてゐた老僕の名儀にして、母に遺して置いてくれたが、それから生活費を儲け出すためには、僕がゐなければ目下の處駄目なんだ。勿論、僕は總ての事情を包まずY子に知らせてやつた。Y子からは早速眞情の溢れた返事をくれた。Y子に對する僕の執着は、苦しい程强まつて行くばかりで、彼女も亦、この後永く別居して居なければならないのなら、病氣になるかも知れないといつてよこすのだつた。結婚費の出し所を如何する事も出來なかつた父が、病氣にかこつけて、擧式を十二月まで延ばしたのを知つたら、親心の苦しさをしみ〴〵思ひやつて、その事を考へる度に同情の涙を流したが、僕にとつては、式なんぞはてんで問題ぢやない、同棲すればいゝんだ、僕はY子なしには氣が違ひさうになる事さへあつた。で、兎も角も仙臺に來いとさういつてやつた。所が牧師から返事が來た。それ

は十月の中頃だつたと思ふ。何しろ薄ら寒くなつてからだつた。Y子はとう〱肋膜炎と肺炎とを併發して、もう二週間も寢てゐる。母が返事を書くべきだが、字が不自由だから、自分が代つて書くのだと前置きがしてあつた。Y子は病氣の事を、僕が心配するとでも思つたのだらう、一言もいつてよこしてゐなかつたんだ。僕は、最後の葉までもぎ取られた樹木のやうな心持がした。その後に何が書いてあるか、讀んだつて分りもしないから、從つて讀みもせず、取るものも取りあへず上京した。Y子は見ちがへる程痩せてゐた。世の中がたつた二人きりになつたやうに、二人の心はより添つた。而して二日の間その枕許で日を暮したが、二人一緒に國に歸る望みはない、といつて、僕は何時までも東京に留つてゐる譯には行かないので、已むを得ず二人は又袂を分つた。家に歸ると彼女から雄々しい手紙が屆いた。自分はどんな事をしても早く健康な體になつて、仙臺に行くから、僕は僕で精一杯に前途を切り開いてくれ、とあつて、然し心配なのは彼女の母の思惑だ。この頃の言葉にはちよいちよい僕を疎外するやうな口調が出る。さすがに具體的に破約しろとは いはないけれども、何かにつけて二人の間を割くたくらみを考へてゐるらしく思へる。然しこれがY子の心を露ほども動かし得ないのは勿論だ、といふ事が書き加へてあつた。僕にはこの母の心持がはつきりと讀めた。見ろ、見ろ、見ろ。僕はどんな事があつても血路を開いて見せる。僕等の戀を假りにも妨げようとするものは災ひだ。其奴は自分の惡い打算の爲めに、回復出來ないまでに罰せられるから見ろ。それまでは、僕はあの母には決して遇ふまいと決心した。而して、それからといふものは、僕の努力は全部家政の整理に向けられてゐるんだ。Y子を小氣味よく鬼のやうなその母から奪ふために、母の晩年をいくらかでも安泰にする爲めに、而して唯一人の妹を更に教育し向上させるために。

製粉所に通つて毎日粉塗れになつてゐる間に、年は暮れていつた。極地から手を擴げるやうに、せはしく逼つて來る北國の冬景色を、僕等は何んといふ淋しい心で眺めたらう。然しそんな事に老い込んでしまふには、僕に

は有り餘る氣力と自負心とがある。而して輝く希望がある。妹が僕に氣をかねて、世帶じみたまねでもすると、たまらなく腹が立つて我鳴りたてた。而して工場に行くと僕は力一杯に働いた。勞働の生活も小氣味のいゝものだつた。ぐん／＼働いて、汗みどろになつて、熱し切つた血が、パイプを走る熱湯のやうに、體中を思ふさま流れめぐるのを感じながら、工場の入口に立つて、雪を交へた風に吹かれるのは、僕には中々 cong nial なものだつた。學問三昧がくだらなくさへ思はれた。夜になると僕一人がはしやぎ切つて見せた。一日を屈託に暮した母でさへが聲を立てゝ笑ふやうな事もあつた。今まで下女や下男に邪魔されてゐた親子兄妹の愛情が、何一つ妨げるものゝない爲めにしつくりそぐつて、三人は鼎の脚のやうに一つの愛情を捧げ支へた。然しそこには矢張り二分の附燒刄があつたのだらう。吹雪が家を搖り動かして吹きすさび、火燵では凌ぎかねる程夜寒のつのる時などに、どうかすると三人は氣を揃へたやうに滅入つてしまふ。三人は三人ながら別々な事を考へて淋しがつた。「Bさんは一體どうしていらつしやるんでせう」そんな時には、妹が屹度さういひ出した。妹は、僕の唯一人の友ともいつていゝ君をなつかしんだ。僕は堪へ性もなく腹を立てた。「あんな不人情な奴！　どうしようと俺が知つた事かい」さういふ晩に限つて、僕は祈りにまで感情が高ぶつてゐた。

Y子は、病氣を押して書いたと思はれる、短い手紙を絶えず送つてよこした。如何にも餘裕ありげな文句が、憐れに思はれる事もあるし、面憎く思はれる時もあるし、飛んで行つて、この炎のやうな情火で、氣息もつまるほど押し包んでやりたいと思ふ時もあつたが、その母の事を考へるや否や、齒を喰ひしばつて、停車場に行かうとする足を幾度か踏み返した。

そんな生活が繰返されて、年が暮れた。僕等の一家にも春——寒い北國の春が來た。三日から仕事を始める積りで、その朝雜煮を喰つてゐた。そこに君からの電報が來たんだ。

B兄。僕に取つて、君の歸りがおそ過ぎるといふ事はない。君は畢竟歸つて來てくれたんだ。

貧窮といふ新しい生活は決して僕の累ひとはならぬ。僕の境遇の激變につれて、見知らぬ世界が澤山眼の前に開けて來た。知識であれ、習慣であれ、衣食であれ、總ての生活の附帶物は、兎角心と心との接觸を妨げて、ある時はその接觸を全く拒んでしまふ事さへある中に、富といふ附帶物ほど人を孤獨にするものは外にないといふ事實に得心がいつた。

僕は又無一物になつてから、自分が出發點だぞといふ勵みを心の中に感ずるよ。僕は科學者となる立場はどんな事があつても捨てようとは思はない。然し、僕には、母を養ひ、妹を教育し、小さいにしても、妻と一緒に一つ領土を建て上げる生活の附加へられた事を限りなく愉快に思ふんだ。是れは、僕が今までの間意識しないながら miss してゐた生活だつた。もつと重い荷物を擔がせられると、僕の肩は始めて落着きのある姿勢となるだらうから。

然し殘念な事には、今の場合、僕は君に何等經濟上の助力が出來ないよ。父のやうに、僕も君に對して幾分なりとも學資を貢いで、僕の分の勉强もして貰ひたいのだが、少し意氣地がないが、まだそこまで行けない。父の破產を氣の毒に思ふ人は隨分あるから、賴めばどうかなるには違ひないが、僕はそんな人達からどんな形にでも、同情をされるのを忌んでゐる。父に對する同情の下に僕は生長したくないんだ。

前便には上京は出來ないと君に書いたけれども、僕は上京しないではゐられなくなつた。出來るならY子の母に遇はずに、君とY子とに遇ひたいものだと思つてる。

餘事は總てその時に讓る。もう晝になつたが、僕はこれから仕事始めに工場に行く。

牧師も勸める、君もあれだけ勸める。で、僕は今日からY子さんの家に寄寓する事になつた。あてがはれたのは、北向きに格子窓の一つある八疊のあの部屋で、僕にとつて是れ以上いゝ光線を送り得る書齋はあり得ぬ。僕の運び入れた荷物が、特別に汚く眼に立つ。こんな安穩な生活は先づ生れてから初めてだ。

一九一四、一、一〇　東京

（BよりAへ）

僕が君に遇ひに仙臺に行つた事は、總ての點からよかつた。僕には、性質として、妙に幸福の到來を畏れる心がある。かの怠慢の徒が、過分の報酬を心竊かに恐れる意味で、畏れるのではない。幸福は可なり確實な性格をも欺き了せる假面だ、といふ事を知つて居る爲めだ。まともに「眞實」にぶつかる事には、嫌ひな酒を一と飲みにあふりつける程の快感が伴はないでもない。然し、幸福の後ろに隱された「眞實」を忖度せねばならぬ場合には、運命そのものを忖度するやうな畏ろしさが感じられるのだ。處が、廣瀬河畔のつゝましやかな君の家では「眞實」が幸福といふ假面をぶら下げたまゝで微笑んでゐた。「眞實」が微笑む――僕は「眞實」も人間並みに微笑むものだといふ事實を君の家で發見した。他人事だけれどもそれが非常に愉快だつた。君のお母さんといふ人は、何んといふ charming な母だらう。又君の妹は何んといふ可憐な處女だらう。而して君は、何んといふ率直な生長力の裕かな若者だらう。君等三人のゐる所には、自然が太古の自然に還るやうにさへ見える。

それに比べると、この小林の家は全く別種の世界だ。父といふ人は、始終旅行ばかりしてゐて、家庭の雰圍氣を形づくる上には、全く關係のない人らしい。君が登別で遇つたお爺さんといふのは、成程恐しい一克者らしい。而して所謂江戸兒だ。江戸兒の資質はその根柢に於て善良なのを要件とする。唯極端な性格の加工と退嬰とが、僕の氣分を可なり不愉快にする。無理でも男は立てるもの、强者には必ず楯をつくもの、思ひ立つたら邪が

非でも通すもの。かゝる安價な形式を生命とする性格の弱さが、僕には癪に障る。母なる人に至つては一番劣等な女の類型だ。彼女は阿諛そのものだ。而してその阿諛の對象が、彼女自身だから堪らない。その毛孔の一つ一つからは pleasure に對する盲目な欲念が、毒素の如く發散して、彼女を包んで居る。あの黑ずんだ唇を漏れる馬のやうな齒の一つにでも君は注意したか。然し、彼女には醜惡ながら一種の純一さがある。僕はどうかした瞬間に、彼女から性格的な壓迫を感じる事すらある。最後に、Y子さんには唯驚愕の一語を有するのみだ。自然が醜い土の中から、かの薔薇の一朶を拈じ出す不思議の如きは、この驚異の前には何者でもあり得ぬ。僕の嘗て見た彼女は子供であつた、無であつた。今は女だ、而して總てだ。その性格は無機から有機に移る經路を、科學の思量の許さぬ敏速と巧妙と正確とを以て成就して居る。君が彼女の特色だとするあの大きな眼に閃く、この謎を、誰が解き得ようぞ。女は戀の成就によつて、神祕の玉座から一蹴し去られるものだと僕は決めて居た。然るにY子さんは、あの瘦せ衰へた肉體の中に、更に無限の謎を抱き、而してその謎に自分を苦しめて居るやうに見える。それはこれから芽ばゆべき飽滿な性格を暗示する。

かくて、小林の家庭は一箇の雜然たるパンドラの箱だ。試みにそれを手に取つて搖り動かしたら、如何に奇怪な噪音が釀し出されるだらう。蓋を開いて見る事は、弱い奴等の假りにもなし得る所ではない。

晝飯の後で、家內を相手に僕は君の家庭を委しく語つて聞かせた。母は耳の痛いやうな顏をして居た。Y子さんは勿論非常な熱心と、稍ゝ好奇心的とも云ふべき興味を以て聞いて居た。君の妹さんの話が出た時には、彼女の熱意は頂點に達した。而して指揮官が偵察者の報告に耳を傾けるやうに、その容貌から性情までを貪るやうに聞き糺した。僕は稍ゝ氣持を惡くさへした。

僕自身の經驗から考へると、Y子さんの病氣は決して安心すべきものではないと思ふ。今東京は非常に寒い。

而してこの寒さが暖かさに移り變る時が殊に心懸りになる。僕は先づ○○さんに診て貰ふ事を勸めて置いた。Y子さんの體溫表を同封して置く。

　僕は今度の入京を機會として、敎會を脫する事に決めた。第一、僕は他人に信仰を傳へ得るやうな柄ぢやない。敎會は僕を必要としない。第二、僕は外界の規約によつて、心身の行動を律すべき總ての桎梏を避けたい。僕は敎會を必要としない。第三、僕の信仰は明白に云へば醉興だつた。自分の性格の根柢に觸れる事を畏れてゐた僕は、醉によつて自己の空虛を忘れようとしてゐたのだ。僕の信仰は要するに返上すべき信仰だつた。第四、基督は四十日荒野を退かなかつたか。基督の天才を有せず、基督の經驗と年齡をだに有せざる僕が、何んの厚顏を以て、人集と伍居して平然として居られよう。第五、僕は聖書に書き記され、敎會によつて解釋されたる事實を馬鹿らしく思ふやうになつた。君を謬らないために玆に註をする。僕は決して實在の根柢に橫はる神祕を否定しようとするのではない。今まで試みられた如何なる說明も、この神祕を如何する事も出來ないといふ事を肯定しようといふのだ。この神祕の中に生きる切實な體驗の外に、如何しようもないと云はうとするのだ。第六、僕の性格が眞價以上若しくは以下に評價される事を厭ふからだ。敎會員である事は往々この評價の錯誤を人に强ひる結果になる。

　貧窮に臨んでの君の態度は如何にも君らしいものだと思つた。君は與へられた境遇に臆せず乘り出して行く。而して永い或は短い經驗によつて、不動の眞理をしつかり摑んでゆく。生氣の漲つた鈍さ、純白の良心を蓄へた無頓着、さう云つたやうなものが君の中にはある。然し僕は僕として、それがまどろつこしいな……面倒臭くなつた。今日はこの上、書かない。

　金は敎室の手傳ひと、博物學會會報の編輯とで、學資だけは十分だから安心してくれ給へ。

僕は今小笠原島で書いた論文の一つを獨逸で出して貰ふ事にF教授に相談してゐる。然し時々發熱するので、如何も思ふやうに心熱が摇がないで困る。

（AよりBへ）

千九百十四年一月十二日　仙臺

B兄。

君の仙臺に來てくれたのは、僕の一家にとつてもいゝ事だつた。一見氣むづかしく近づき憎い君の背後に、母はすぐ自分と和鳴するものを見出してゐた。妹は唯もう君を崇拜してゐる。

それから君が枉げて小林の家に住んでくれた事を有難く思ふ。僕がそれを君に賴むにつけて、何よりも苦しく思つたのは、君がY子のあの忌しい母と一緒に住はなければならない事だつた。然しY子はきつとその埋合せをすると思ふ。Y子についての君の觀察は僕のいはうとしてゐる所だつた。ほんとに彼女には、これから芽ざして行くべき豐滿な性格がある。然しそれをどんな風に芽ざして行くかとなると、中々 delicate な問題だと思つたもんだから、僕はあのやうな家庭に彼女を一人だけ放り出してはおけなく思つたんだ。君のお世話で彼女が自然の意志に叶つたやうに發達する事を僕は心から祈つてる。君の手紙と同時にY子からも手紙が來た。Y子は君の寄寓を大變喜んでゐるが、少し恐ろしい事のやうにも思つてゐるらしい。實際君の眼の前では、誰でも自分の弱點の暴露するのを本能的に怖れるだらうからな。Y子は又、君が噂したN子（Aの妹）の事も書いてゐる。N子さんの事をB樣から伺つて、殊更なつかしく思つたとも書いてある。N子さんとB樣とが御結婚なさるやうにして上げてはいけないのだらうかとも書いてある。Y子が君にN子の事を管々と尋ねた譯も解るやうだ。

君がまどろつこしいと云つた僕の性質については、もう少し説明を聞く必要があるやうだな。君は何時でも未來を目懸けて生活してゐるし、僕は何時でも現在を最上に生きようとしてゐる所に相異があるのではないか知らん。僕は製粉所の基礎を固めて、母と妹とに生活の保障を與へるのが、將來の活動を一番容易にしてくれると思つてる。心のまゝに他人の助力を得られる境遇にありながら、それを利用しないのは、或は馬鹿かも知れない。けれども僕の馬鹿正直がそれをさせないのだから仕樣がない。畢竟如何する事も出來ない僕の性格の發露なのだ。

君の教會を去る理由を聞いても、二人の性格の相異が感じられて微笑まれる。僕は教會に席をおいてからまだ日が淺いから、大きな事をいふ資格もないが、僕は教會を脫するなら、同じ理由で、家族の一員たることも、國家の一員たることも止めなければならないと思つてる。僕に力があつたら、教會を脫せずに、及ばないまでもそれを改造する。力がなければその中に抱擁されてゐて徐ろに力を蓄へる。僕はひとりでに周圍を征服するまで、與へられた立場を退くまいと思つてる。君としては教會の束縛から離れるのが、恐らくはいゝんだらう。然し僕としては、戰はずに教會を脫するのは、僕自身の退縮を意味するに過ぎないやうだ。兎に角君が行かれたんで、教會は大分打擊を受けたらう。僕はあの教會の爲めにそれを惜しく思ふよ。

製粉所の事業は兎に角目鼻がついて來た。その中に僕も手を離す事が出來るだらう。夜は讀書に耽つてる。今は重に Mendelismus に關したものを讀んでゐるが、早く實驗の出來る境遇にならないと、こんな實驗的のものは物足りない。今年の四月には動物學會の年會が久しぶりで開かれるさうぢやないか。その時には僕も出席が出來るやうになりたいもんだ。

Y子の事はくれぐれも頼むよ。彼女の病氣が思ひの外重體だと聞かされるのはたまらない事だ。僕はどうかすると彼女の死を想像してゐたりするが、僕の勇氣はその瞬間にぐちやぐちやに沮んでしまふ。Y子が死ぬものとす

れば、僕の誕生とこれまでの生活は何んのためだ。僕はどうかして彼女のために回復の出來るやうな手段を講じてやりたい。その爲めに必要とあれば……あゝ、然しどうすればいゝんだ。

Y子には僕にもまだ打明けない祕密があるに違ひない。手紙の上では勿論だが、親しく遇つて二人の心が打解け切つた時でも、ふとした機會に、彼女は、謂はゞ、その祕密の中に身を隱してしまふやうに見える事が度々ある。率直にいふと、それが僕には實に物足りないんだ。彼女の心の外周ばかりをどう〳〵めぐりしてゐるといふ自覺は凡そ我慢のし切れない自覺だ。それとも是れが戀するものゝ心の常態なのだらうか。兎にも角にも僕はもつとどん〳〵彼女の心の奧底まで這入りこんで行かなくちやならない。僕は何故彼女の肉にも觸れる事を敢てしなかつたらうかと今では悔んで見る事すらある。二人の心は、肉の障壁に遮られて、通じ合はない所があるんぢやないかとすら疑ふからだ。

寒い盛りだから君の健康にも十分注意し給へよ。君は extra work の爲めに疲勞しすぎるやうな事はないかい。君の體温の度差はY子のよりいゝのかい。若し惡けりや思ひ切つて、暫く研究を中止した方がいゝと思ふがな。

今日は朝から雪だつた。夕方歸りがけに一人の年取つた職工に話しかけて見た。昔は米が安くなれば暮しいゝとしたものだが、この頃では高くつても安くつても、樂な人は樂をするし、苦しむ人は苦しむが、あれはどういふもんだらうと首をかしげてゐた。彼には病身の妻と、放蕩な息子と、忠實な嫁と、澤山な小さな孫があるんださうだ。何處でも勞働する人たちの家庭の樣子を聞くと似たりよつたりだが、僕はその一人の人の運命について未だに妙に考へさせられてゐる。

（BよりAへ）

一九一四、一、一四　東京

君はいつでも最上に現在に生きようとし、僕は未來を目懸けて進んでゐる、と君は說く。

君は一見寛濶な現在の消費者で、僕は吝嗇な未來の蓄積者のやうにも思はれる。僕自身としては時にさうありたいと望みもする。科學者は未來に對する蓄積者たるの任務に服すべきである。

然し僕は最も不逞(ふてい)な消費者であるのを如何(どう)しよう。

人は要するに消費者か生産者だ。消費者に二つの類型がある。生産せんが爲めに消費するものと、消費せんが爲めに消費するものとだ。生産者に二つの類型がある。消費せんが爲めに生産する者と、生産せんが爲めに生産するものとだ。君は消費せんが爲めに生産する最も合理的な類型に屬して居る。僕は到底消費せんが爲めに消費する放蕩者の外ではあり得ないらしい。換言すれば、僕は根柢に於て、徹底的な egoist だ。若し僕に、人類に貢獻すべき何者かゞあるとするなら、それは僕の消費によつて、人類が今までにどれ程の蓄積をしてゐたかを證據立てる位のものだ。

消費するために消費する典型的な一群は藝術家等だ。彼等は要するに人類中の有力な消費者だ。この點に於て、僕の性格は一味藝術家と通ずる所がある。

から生れて來た以上、僕は人類の何十萬年かゝつて成就した蓄積の全部を蕩盡する位な放蕩がして見たい。

事業は生産し、藝術は消費する。この意味に於て神は最大の事業家であり、惡魔は最大の藝術家だ。

話が飛ぶ。

君は今の科學に對して可なりの敬意を拂つて居る。僕は今の科學の自己矛盾を嗤(わら)ふ。

科學は眞理を闡明(せんめい)すると宣明して居る。而して實際は事實を整頓して居る。

整頓せられた事實が眞理だと云ふのか。然らば圖書館のカード・ボックスの中にこそ、最上の眞理は潜むであらう。

科學がその僭位の王座を退いて、鞣皮（なめしがは）の仕事着と鐵鎚とに身を裝うた時、その權威は初めて生れるであらう。科學は、要するに生産の爲めに生産する實生活の奴僕に過ぎないからだ。普通の勞働者が筋骨と柔順とを持つやうに、科學は明晰な頭腦と牛の如き忍耐とを持つて居る。普通の勞働者と等しく、科學はその生産物を如何に處理すべきかを知らない。普通の勞働者は工場で働く。科學の勞働者は研究室で働く。

僕は端（はし）くれながら方今の科學者だ。科學は、僕にパンと、部分的な好奇心と、時には退屈な時間消費法とを提供する。僕は、科學の名によつて、如何なる事が人生に密接した要求であるかを考察する義務から免（のが）れ、自己の好奇心だけを挑發する問題に沒頭して澄して居る事が出來る。而してその問題が人生當面の要求からかけ離れゝば離れる程、僕の學者振りは高調される。

僕は然しこれ位な消費者たるを以て甘んじては居られないのだ。消費するなら、大つぴらに消費したい。詐僞をしながら消費するのはいやだ。君の手紙を讀んだら、こんな返事が書きたくなつた。以下次便。

（BよりAへ）

一九一四、一、一五　東京

昨日風邪の氣味で少し熱が高かつたから、學校に出ずにゐたら、Y子さんが色々世話してくれた。而して母は墓詣りに行つて（何と云ふ自己僞瞞（ぎまん）だらう）居なかつたので、二人は割合に打解けて話をした。

僕は先づY子さんに心の全體を開いて君に見せるべきだと、激（はげ）し過ぎる位に忠告した。Y子さんは僕を訝（いぶか）るや

うに見て、心を開いて見せようともしないのは、却つて君なのだと訴へた。僕は戀人の間に挾まつた馬鹿者を自分に見出して苦笑を禁じ得なかつた。

君にまだ云はなかつたが、小笠原島に居る時分、僕は無名で二度Y子さんに手紙を出して居た。それは君等二人の關係がまだ不確實な間だつた。だから、Y子さんは、君から最初の手紙を受取る前に、君の輪廓と意向だけは知つて居たのだつた。昨日の話によると、Y子さんは、その手紙の筆者が僕であるとすぐ直感したと云ふのだ。僕は如何して解つたと尋ねて見た。「それ位な事は私見たいな者にでも分ります」と云つて、その敏感な眼で睨むやうにした。

Y子さんがあのいやな母の子でもなければ、あの父の子でもないと云ふ事實は、勿論君は知つて居る事だらうが、僕は昨日初めて聞かされて一寸驚いた。僕は彼女のしみ〴〵とした話から、その過去を明瞭に心に描いて見る事が出來る。大阪を出た東京通ひの小さな汽船が先づ眼に浮ぶ。その三等室の片隅に、中有をさまよふ魂魄のやうに上の空になつて臥し倒れた、良人に捨てられた一人の若い女を見る。その女の胎の中で、流離の悲しみを極印された小さな一つの魂を見る。東京と云ふ大都會の動亂と混雜とのどん底に沈められて、吐息しながら未熟の技藝を賣物にする婦人勞働者の、疲れ果て、悲しみ果てた境遇が思ひやられる。夜半を過ぎてから漸く出不足な乳房にありついて、甫めて眠りに落ちる、頭の大きな醜い嬰兒が浮び出る。物件の如く母から伯母に引き渡されるその時に、嬰兒の立てた無殘な叫び泣きの聲が聞こえる。而してその枯れかゝつた芽から辛く生ひ立つて、一人の女になつたY子さんの姿は僕の眼にあつた。Y子さんの羸弱な體質も、奥深い心も、時々彼女を秋の霧のやうに淋しく美しくして、襲つて來る悒鬱も、僕には初めて會得された。

僕は彼女のこんな過去を發き示されて、今更眼が覺めたやうな心になつた。彼女に總ての慰藉を與へ得る君

と、かゝる人から却つて慰藉を受けねばならぬ僕との、運命の相異に心を驚かした。又科學がかくの如き人生の大事を、下手糞な教師が生徒を取扱ふ程にも、取扱ひ得ないのを痛感した。而して思はず知らず昨夜の手紙を書いてしまつたのだ。

然しかゝる過去を知る事によつてY子さんがあの母の血を稟けて居ないのを明かにし得たのは痛快だつた。この位溜飲を下げた事は近頃にない。

明白に云ふと、僕の過去にもY子さんの過去に殊に同情すべき或る物があるのだ。是れは君にすら一切語らないで居る。人生の不幸を暴露して、それだけ人世を暗くすべき理由はない。

僕は今日も寢床を上げる事が出來ないで居る。僕のやうな病軀には沁み入るやうな寒さだ。Y子さんは自分の健康は忘れ果てたやうに親切に世話してくれる。僕は彼女の病の爲めそれを危ぶむ。

大きな生が力強く流れて行く。何んといふすさまじい然し勇ましい姿だらう。僕は遂にその傍觀者として終らねばならねのか。よし、それに踏み入るとも、肉の弱さが壓倒されて、在る間もなく、泡沫の如く消え去るのであらうか。

よし、それもよし。

君のお母さんとN子さんに好意を寄せる。

(BよりAへ)

一九一四、二、三 東京

Y子さんは僕如きものゝ存在を必要としないで生長して行く。而して彼女の健康の爲めには、僕の存在が害に

なる。僕は僕の病を傳へはせぬかと危惧の爲めに、不安に襲はれ通して居る。それだから、この間から、再三轉居の事を君に相談したのだ。君はそれを拒んだ。然るに今日牧師が來て、突然僕に轉居を慫慂した。僕が教會を脫した事が原因なのか、他に理由があるのか僕は知らない。牧師は單に propriety の爲めにと云ふ。最も不眞面目な言だ。然し、初め、こゝに僕を寄寓させたのは君と牧師である。それ故今一度取るべき處置に就いて君に謀る。

Y子さんの健康はどう見てもいゝ方とは云へない。嘗ては、その細々とした手にも、指と指との間にも、一つ一つ笑窪があつた。それがこの頃は影を隱した。時には、內部に漲り立つ或る力の爲めに、弱い肉體が摧け相なので、懊惱に堪へないと思はれる時もある。この頃君からの消息の稀れになつた事をY子さんは非常に物足らなく思つて居るらしい。君は、君の有する總ての愛熱、總ての同情、總ての推察を以て彼女に書かねばならぬ。君は彼女の眼に寂寥の涙が集まる事を想像し得るか。それは僕にすら殆んど堪へられない痛ましさだ。

Y子さんの健康と反比例して、この頃の僕の健康は進んで行く。僕は終日研究室にあつて、獅子の如く……眞に獅子の如く……働いてゐる。Mutation Theorie の反駁者等に對して、ドフリスの爲めに援護の陣を張らうとするのだ。僕に取つて、ドフリスの主張する突發變種は可能事だ。僕の內部的要求は、その可能を信ぜしめる。君は僕の先入主觀から出發する非科學的態度を嗤はうとするか。然し新學說の提唱者にして、僕と同樣に先入主觀を持たなかつたものは嘗てない。ダーウヰンの自叙傳は、最もよく是れを語つて居る。彼が生物進化の現象に對する暗示を受けた時、彼の實驗は、彼をしてこの大膽なる想像を懷かしむべき程度には達して居なかつた。——加之、僕は Fauna 中にもドフリスを利益すべき信據ある deta を多少集め得たと信ずる。僕は、勿論、科學的良心を忘れて、事實の否定を冒してまで、暗示を辯護するやうなことはしない。然し突發變種の假說が決定する事

は、僕に取つて、科學的勝利以上、性格の滿足を完からしめるであらう。
獨逸で出す論文の事は決定した。
製粉所の利益から君が頒つてくれた金は感謝して受取られた。その晩、如何に不思議な現象が起つたと君は思ふ。一箇の人形を小脇に抱へて僕が家に歸つて來たのだ。而して、それが君からの贈物として、neglect されたY子さんの枕頭を飾つたのだつた。

（AよりBへ）

千九百十四年二月五日　仙臺

B兄、

牧師の無理解な獨斷は僕を驚かせる。勿論簡單な手紙は彼から受取つたが、その中にはたゞ、君とY子とが同じ病氣であるのに、同居するのは雙方の健康のために危險だから、といふ事だけが書いてあつた。そんな理由なら、君があすこに行つてくれる前から分つてゐた事で、今更新しくいひ立てべき事柄ぢやない。恐らくは、牧師は僕にあらはには打明けられない理由を持つてゐるのだらう。それにしても僕を出し拔いて、君にそんな注意を一人でするといふ法はない。それは僕にも下らない噂の傳はつて來た事もないではない、然しそんな事をいふ奴は、馬鹿か、墮落者か、どちらかだ。僕は君がその馬鹿と墮落者のためばかりにでも、小林にゐつゞけて貰ひたい。僕はもつと大きな立派な友情を知つてゐる。

僕がY子に疎遠する!?　又竹篦返しをいふやうだが、その不平は僕の方からいひたい位のもんだ。以前には彼女は、短くとも殆んど毎日消息してよこした。而してそれには率直な情緒と輝く希望とが織り込んであつた。夕

方工場から歸ると、机に向つて、僕は妹の所謂「お手紙の勉强」をして、一日の苦勞を忘れるのを常とした。工場に行くと力が湧いた。母を見ると同情が湧いた。妹を見ると優しみが湧いた。手紙を見ると愛が湧いた。而して愛が總ての心の働きの根柢になる盤石なのを知つた。處がこの頃はY子からの消息の來方が不規則極まるものになつてしまつたんだ。どうかすると葉書が三枚も來てゐる事がある。さうかと思ふと二枚切手を貼つた重い手紙が屆く事もある。が、その間に二日も三日も、偶には四五日も、不愉快ないら〳〵した待ちぼけを喰はなければならないんだ。おまけに、更に呪ふべき事には、不思議にも、Y子から消息のない時には、君の手紙すら僕を慰めて來てはくれないんだ。東京からの便りのない時の僕の澁面を、君は恐らく想像する事は出來まい。兎に角机に噛りついて、讀みかけた本の字を拾つて見るが、字と字との間には書物と無關係な奇怪な句が挾まれて、不思議な思想の錯覺が出來上つてしまふ。いま〳〵しさに寢床をとつて寢ると、そこには恐ろしい不眠が眼を光らして待つてゐて、腦天に稜釘をがしん〳〵とたゝき込む。

今日といふ今日も、Y子の消息が絕えてからもう三日になる。最後の手紙に、

「私にはあなたの仰有る自覺といふものが、そろ〳〵眼を覺して來たやうにも思はれます。でも、それは、あなたの仰有るやうに樂しい事ではちつともなくつて、私には唯恐ろしい〳〵事で御座います。私は、今まで、自分といふものは、是れまでの習慣が集まつて出來たものだとばかり思つてをりましたが、この頃は、私の習慣を裏切るものが時々出て參ります。そのものは是れまで何處に潜んでゐたので御座いませう。習慣から獨立して、初めから私の胸に潜んでゐたので御座いませうか、それともマリアが聖靈を孕み給ひしやうに、後から私に宿つたもので御座いませうか。私は、この頃、聖母の御心の苦しさが、おぼろげながら分るやうな心地が致します。この末どんなになつて行くので御座いませう。私の眼の前は段々暗くなるやうにも存じます。あなた

ですら、もう私の胸の中をほんたうに知つて下さる事は出來ないのではないかとすら存じまして、心細う御座います。あなたはヨセフにも増した善良ななつかしい方。私は……あゝ私は、どんなに恐ろしい自覺に眼ざめるので御座いませう。私ははつきりと眼を見開かなければならないので御座いますか。でもあなたはそれをしろと仰有います。私はあなたをお疑ひ申しません。でも私はほんたうに怖う御座います。

私は又伏せつてをります。B様は夕方灯がつかなければお歸りにならない位、よく御勉強なさいます。夜など、お疲れだらうと思つて、強ひて起上つて、紅茶を持つて上りましても、お禮はもとより、お顔を上げて下さる事すらなさらぬ程で御座います。手もおつけにならぬ紅茶の、塵が浮いてお机の上にあるのを翌朝見ます時などは、あんまりだと思ふ程で御座います。でも、奇妙に、私の悪い時は、B様はお宜しく、B様のお悪い時、私は氣分がいゝので御座いますのよ」

といふやうな一節がある。彼女は單に少女でなく、女でなく、人にならうとする過渡の苦痛を感じつゝある事は、大體想像出來る。然し僕は何故彼女の心を理解し得ないといふのだらう。少くとも何故Y子は毎日の苦痛を毎日僕にも味はゝしてくれないのだらう。僕はそれが非常に物足りないんだ。君も多忙ではあるだらうが、然しこの場合多少の時間を割いて彼女の甦生を助けてやつてくれ給へ。僕はY子に自覺を強ひた。今から思へば僕は自分以上をY子に強ひてゐたやうでもある。然し今となつては又もとの出發點に歸る事は出來ない。僕はもつと自分を責め鞭たう。而して彼女に強ひた自分の目的を徹底させよう。心のどん底まで打破つて行つて、そこで二人の魂が抱き合ふのでなければ僕は氣がすまない。ルビコンは渡られた。僕は後ろを向くまい。Y子も後ろに振向く餘地はない。僕等は大事な瀬戸際に立つてる。それを君に察して貰ひたいんだ。

それにしても今夜の僕の淋しさはどうしたんだらう。窓の外は眼の覺めるやうな月の光だ。寒さも忘れて、一

ぱいに障子をあけ放して、僕は庭の隅にある大きな杉の木に廣瀨の川音の力強く籠るのを聞いてゐる。莊嚴な水の聲が、幾百年の大杉の木膚にしん〳〵と沁み入つて行く。母は今夜は早く寢てしまつた。N子は次ぎの部屋で仕事をしてゐるらしい。時々鋏の音が寒く響く。「兄樣お火があつて」とさつき襖越しに尋ねてから、彼女は何んとも物をいはない。恐らくはあの若い心も何か考へこんでゐるんだらう。

あゝ、一體僕は如何すればいゝんだ。

君は働いてゐるんだな。病氣に打勝ち〳〵獅子のやうに働いてゐるんだな。僕も働く。僕も心を襲つて來る不安に打勝ち〳〵働いて行かう。さうだ、働かう。シラーのロバルトではないが、顳顬から血の滲み出るまで働かう。

每時ものやうに赤毛布を頭から被つて、鐵緣の眼鏡から書物を睨みつけながら働いてゐる君の姿がまざ〳〵と眼にちらついてしやうがない。笑ふかも知れないが、僕の眼には今淚がたまつてゐる。

何んといふ月の光だ。

（BよりAへ）

一九一四、二、六　東京

ぢや矢張りこの家に居よう。

僕は病氣と戰つて居るのではない、運命と戰つて居るのだ。この大膽な言葉を君が思ひ知る惡い時が來なければ幸甚だ。

僕はさうはさせたくない。

何時かY子さんが、君の妹を僕が貰つたらどうだらうと君に云つてやつたさうだな。僕はその事を眞面目に考へるやうになつた。君は僕のやうなものにでもN子さんをくれる氣があるか。

獨逸で出す論文の事は斷つてしまつた。自分ながら自分のちつぽけな虛榮心に愛憎が盡きたからだ。人間の事業といふものが一體何んだ。どんな大きな事業でも要するに地球と一緒に滅びて跡方もなくなる砂の樓閣だ。然しかう考へると、一寸獨創のある小論文でも書いて得意になつて見せるのが、却つて運命に對する大きな面白い皮肉かも知れない。

Y子さんにさう〳〵度々消息を逼るのは君の無理といふものだ。東京は寒さの盛りなので、Y子さんは大分痛められて居る。僕と雖もさう書物にばかり沒頭して居る譯ではない。偶にはY子さんとも眞面目な話をする。僕はその度に唯驚くばかりだ。

諸々な力が男の心の中で奇蹟を働く。然し女の心の中で奇蹟を働くものは戀愛のみだ。三年前に日曜學校の一隅に人形の如く坐つてゐた彼女と、今の彼女とを較べて見ると、僕は又科學の權威の絕無が叫びたくなる。

一昨日Y子さんの父なる人が突然歸つて來た。而して今朝は旣に姿を見せない。才取りじみた小賢かしい男だ。然し母ほどの醜惡な感じは與へない。母といへば、この頃母の僕に對する冷遇は天下一品だ。一つはそれもあるから、この家に居續けてやりたい氣もする。

（BよりAへ）

一九一四、二、七　東京

A兄、僕は自分の裏に潜む皮肉家に嘔吐を催す。

僕は慚愧して前の手紙を取消さして貰ふ。N子さんの事も、もう一度深く考へさしてくれ給へ。僕は自分を憎む。極端に憎む。何故正面から眞實にぶつかるだけの勇氣がないのだ僕は。

Y子さんは朝食を取らずにゐる。一寸見たら泣いてゐるやうだつた。

研究室に行く前、匆々。

（AよりBへ）

千九百十四年二月八日夜　仙臺

B兄、

六日と七日に書かれた君の手紙を讀んで、君のこの頃の心の樣子を、僕はどう判斷していゝか分らない。兎に角君の胸の中に何かひどい葛藤の起つてるのだけは想像されるが。

僕は然しさういふ想像をひねくり廻して君を忖度するよりも、率直に僕のいひたい事をいふ方が早道だと思ふ。君がN子の事をいつてよこしてくれた時には、僕自身が求婚を受けた處女のやうに心を躍らした。けれどもすぐ後から失望が起つた。N子は僕には眼に入れても痛くない程可愛いゝ奴だ。あいつは、君に遇はない時分から君の事を聞かされて、君を思つてゐた。君に遇つてからは、いつかも書いたやうに、唯もう君を崇拜してゐる。單純ではあるが單純だけに透き通つたあいつの心は、その兄を熱愛してゐる以上、兄の心交する友を熱愛せずにはゐられないんだ。あいつは勿論君なんかと太刀打ちの出來る人間ではない事は觀念してゐる。だから一度でも君を慕ふその心持を僕にでも見せた事はない。謂はゞ心の一番隅つこの、一番聖い所にしつかりと君の思ひ出を祕藏してゐるんだ。而してそれだけの favour に十分滿足して、始終元氣よく働いてゐる。恐らく、愛情の眼鏡で見

なかつたら、神ですらあいつの心の祕密を發くのはむづかしからう。僕は神ではない。然しあいつを愛する事にかけては、誰にも劣らないから、その胸の中が見え透いて可哀さうになる。君の配偶として十分聰明でない事、知識の不足な事、しつかりしてゐない事、容貌の美しくない事などを、自惚れを捨てゝ覺悟してゐるのがいぢらしいんだ。同時に、若し君の爲めとならば、どんな女にも劣らないだけに、身も心も捧げ切つて見せるそと思ひ込んでゐるその心根が更にいぢらしいんだ。僕が母に向つて君の噂なんかしてゐる時、傍で針仕事をしてゐる彼女が、ひとりでに仕事をそつちのけにして、僕の言葉に聽きほれる時の顏は、君でも美しく思ふだらうと僕は思ふよ。

この前僕がN子の事を一寸書いたきりにしてしまつたのは、あんな事を筆にしたのを後悔したからだ。僭越な事をいつたと思つたからだ。君に對する愛慕の强さをのけて考へると、君はN子などより遙かに勝れた女を妻とすべき力と尊さとを持つてゐるのに氣がついたからだ。僕は今でも堅くさう信じてゐる。君が假りにあいつに結婚を申込んでも、あいつは屹度斷るにちがひない。そして又それが正當な事なんだ。唯その正當だといふ事は、あいつに對する僕の憐憫の心持を少しも減じはしない。何故つていふと、あいつはどの女よりも、愛すべきものを如何に愛すべきかをよく知つてゐるからだ。

何んの爲めにこんな事を書いたんだらう。さうだ、僕は君にあいつの心根を知つて貰つて、あいつに一片の同情を寄せてもらひたかつたんだ。暇な時にでも手紙を書いてやつてくれ給へ。それはあいつの魂に少しも危害を與へないで、深い慰藉を授ける結果になるに違ひない。僕はその事を君に知つて貰ひたかつた。

七日にはY子からも手紙を受取つた。この頃彼女の手蹟は段々君のと似通つて來て、今日なんぞは區別がつかない位だつた。君から二通來たのだと思つて開いて見たら、さうでなかつたので、もう一度封筒を見直した程だ

つた。それにこれまで白い封筒を使つてゐたのに、何時の間にやら君のと同じな薄緑色のになつてゐた。而していつもながら君が人を動かす不思議な力に驚いた。上眼を使つて話を聞く君の癖が、今ぢや研究室の流行ださうぢやないか。それはさうと、この頃のY子は一體どうしたんだらう。この頃のY子は一體どうしたんだらう。この頃の手紙に、死といふ問題の書かれてゐない事はない。神の意志と人間の生活との間には、確かに埋めがたい矛盾があると彼女はいふんだ。生活の或る形式が必至的なもので、しかもそれが神の意志と容れ合はない場合に、死といふものは唯一つ殘された矛盾の解決法ではあるまいか。自分は無責任の死には少しも同情は持てないが、神の意志を體現する餘地がない生活は、死に蹂み躙らして差支ない生活ではないだらうかとも書いてある。病身な自分は遠からず死の手に捕へられるやうな心持がする。死の手に捕へられる程哀れな事はない。その位なら、死を使役して自殺する方が美しくはないかとも書いてある。死の恐しいのは、自分が空に歸すると思ふからだ。自分は或る心を捕へた。その心は自分を忘れよう筈がない。自分は、その心の中で、淸い高い生存を續けられるとも書いてある。僕はY子の心を或る點まで理解する事が出來る。僕も、或る人々の主張するやうに、自殺を罪惡だとは思はない。自己の意志でなくこの世に生れ出たものが、その偶然を破り棄てるのを咎め立てする理由はないと思ふ。然しY子と自殺とを結び附けて考へるのは僕はいやだ。勿論自殺しても、彼女は僕の心の中にいつまでも高く深く淸く生きるだらう。然し僕は彼女の胸に祕められたまゝ、彼女と共に空しく死なねばならぬのを彼女は察してゐないのだらうか。彼女は又神の意志と生活との矛盾といふが、何處に矛盾があるんだ。何故その點をはつきり僕に打明けようとはしないんだらう。神の意志に從つて、僕等二人の生活を改造し得ない程、僕は卑怯ではない積りだ。考へて見ると、この頃のY子の態度の中には、どうも煮え切らない不滿を覺えずにはゐられない。例へば、祕密を抱き合つた人と人との間に起るやうな不安と猜疑が、ともすると僕の頭をかき亂さうと

する。

僕等は春の大空のやうに若いんぢやないか。大きく大氣を吸つて、光のやうに心を通はしたいぢやないか、喜ぶにしても悲しむにしても、どん底から搖り動かして、喜びもし、悲しみもしたいぢやないか。明らさまな自然そのものゝやうに振舞つてはなぜいけないんだらう。見たまへ僕の窓の外の自然を。

先刻から荒れ出した空模様はすさまじくなるばかりだ。雪氣のない突風が、鋸のやうに平べつたく鋭く戸の隙間から切り込んで來たと思ふと、木端のやうな僕の家はけし飛ぶかと思ふばかりにぐら／＼と搖り動く。何んといふすさまじい物音だ。然し何んといふ莊嚴なオーケストラだ。僕はこれから工場まで見廻りに行つて來なけりやならない。土管を積み上げた煙突が倒れやしないかと心配になる。あれが倒れると機械の運命が危ぶまれるからな。

何んといふすさまじい物音だ。然し何んといふ莊嚴なオーケストラだ。

神の祝福君の上にあれ。而してＹ子の上にあれ。

僕はその中上京する。

（ＢよりＡへ）　葉書

一九一四、二、九、夜　東京

颶風は帝都をも襲ひつゝあり。

Beaufort Scale にて十度にも及ぶべしと思しき風速もて、飄蓬として頽嵐は天地を行く。何等悽愴なる狂音ぞ。而して何等莊嚴なる諸調ぞ。

畏るべきかな自然。眞に憐れむべきかな人。

自然如何に狂歌亂舞の痴態を盡すとも、そが中には嚴かにして破るべからざる諧調あるものを。人は自然の一分身とし生れながら、何故に、事每に、諧調を亂すに爾く巧みなるや。

眞に憐れむべきかな人。唾棄すべきかな我れ。

（ＢよりＡへ）

一九一四、二、九、夜　東京

君の手紙を讀むと、何んといふ事なしにあんな葉書を書いて、嵐の中をまろび出てそれを投函した。歸つてからすさまじい咳の爲めに小半時間油汗を搾つた。餘り激しいので、Ｙ子さんがわざ〳〵寢床から起きて來て、介抱してくれた。二三日風邪を引いたやうだ。熱が頭に籠つて不愉快千萬だ。

今Ｙ子さんと暫く話をした。君に對して打明けない祕密があるのではないかと突込んで聞いて見た。Ｙ子さんは眞劍な顏付で……さういふ時に彼女の美は神々しい程になる……きつぱり、無いと云つた。

今夜は妙にそは〳〵して讀書が出來ない。一つゆつくり構へ込んで、この頃のＹ子さんを君に紹介しよう。

僕は、一體、讀書の外には何事にも無頓着な男だと誰からも思はれてゐる。實際僕の服裝や僕の部屋の亂雜さを見た人が、さう思ふのは無理がない事だ。然し少し無頓着でない人が見たら、僕も案外無頓着でない男だといふ事が、直ぐ知れべき筈だと思つて居る。ある學者の所に新に下女が來て、忠義振りを見せる積りで、その書齋を隅から隅まで整頓した。その學者は迷惑相に下女を顧みてから云つた。「俺が折角規則正しく散らかして置いたものを、お前は不規則に片づけてしまつたな」君は可なり忠實に僕の報告を信じて差支ないと思ふ。

日曜學校時代のY子さんを回想すると、尋常な、然し齡にあはせると少し悒鬱な少女が描き出される。痛々しい程痩せて、節々の延びた體と、眞黑な豐かな髮の毛と、物を探るやうな大きな眼とが、强ひて云へば特長だつた。あの眼にはその時分忘れられない印象を受けた事がある。六年前だからY子さんは十四の時だつたのだ。日曜學校の教師が病氣で休んで居るから、僕に出ろと牧師から云つて來たので、僕は出た、——Pshaw!——話をした級は丁度Y子さんの級だつた。七八人居たがY子さんが一番齡下だつたらう。

　秋の初めだつた。女の集まる所で香ふあの一種の匂——僕は臭氣と云ひたい——をひどく嫌ふ僕は、何よりも先づ側の窓をがらつと開け放した事を覺えてゐる。僕と生徒との間には、黃色い暖かい光の河が流れて、僕が生徒に與へようとした視線は遮斷されてしまつた。生徒の席は部屋の隅になつて居たから、光に飽和した僕の眼にはそこは眞暗に見えた。僕は眼をしよぼ〳〵させながら、その暗い中を見分けようとした。その時僕の第一に感じたのは、大きな二つの眼が僕のすぐ前で仰向き加減に僕をまんじりと見やつて居る事だつた。外の生徒の眼も僕を見て居た筈だのに、その大きな眼だけが逸早く僕の視覺を刺戟した。一體を云ふと、陰影の中に在る青味を帶びた白眼ほど不調和な氣味の悪いものはない。人をして牡蠣のむきみを聯想させ、死體の毛の生え際に現れる毒毒しいあの灰色を聯想させるものだが、その眼は黑目勝ちであつた爲めか、少しもそんな氣を起させずに、僕は暖かくはないが、一種の深い柔か味を覺えた。始めは稍ゝ直線に似て太く、末に行くに從つて次第に細りつゝ、上あがりに消えて行く曲線、例へば新月の一半を蔽うて眺めだやうな曲線を見入つた時に起る感覺を、僕は靜かに受入れてゐたことに氣が附いた。靜かに落着いて居ながら、底の底の方に根强い動搖を潜め、色々に物は動きながら、しんとする程の靜かさを何處にか持つた、夏の終りとも秋の始めともつかないあの季節が、又この眼によつて聯想された。僕はこの聯想から、あの時の初秋であつたのを、未だに覺えて居るのだ。僕もぢつとその眼

を見た。大抵の女の眼は、男の、殊に僕のやうな鋭い眼の男の熟視によつて、たじろぐのに、この眼は少しも怯まなかつた。恥づべきものを持たぬ子供の顔のやうに怯まなかつた。僕の眼の方が意氣地なくも心の疚しさを覺えた。而して先づ眸を移した。僕は今でもあの時の敗亡を考へると羞恥を感じる。それがY子さんの眼だつたのだ。

Y子さんは、その後、僕の記憶には上らなかつた。一昨年教會の入口で、君を彼女に紹介した時も、その前彼女から受けた印象を繰返すに過ぎなかつた。十七になつても、十四の時の彼女と變つて居なかつたのが、少女を何時までもそのまゝであらしめたいと思ふ僕の利己的な立場から嬉しかつたゞけだ。

話は外れるがこゝは無駄話を聞くと思つて讀んでくれ給へ。女が若し、生理的にも性情の上にも、十四十五以上に年を取らないものなら、世界の歴史はどれ程美しくなつたらうと僕は考へるものだ。これが僕の利己的の立場と稱するものだ。その年頃の美しい少女を見たり考へたりすると僕はよく涙ぐむ……そんなロマンチックな口吻が君の口から漏れるのは似合はなくをかしいと君は云ふかも知れない。然しそれはロマンチックでもなければセンチメンタルでもない。もつと深刻な生の深みに築かれる人間本來の要求でもあり情緒でもあると僕は堅く信じて居る。骨がこはゞると同時に、心までこはゞつて粗造になる奴等は論外だ。僕は死ぬまで心の delicacy を失ふまいと思ふものだ、纖細とか何んとか譯される爲めに、この大きな一つの心の力は、著しく誤解されて居る。働きの細かい事が力の弱い事ではない、と云つても心の delicacy を失つた奴等には依然として分らないのだから仕方がない。彼等には破瓜期前の少女の持つ力の強さは理解されないだらう。例へば、少女の立つて居る時の膝から踵に至る足の線を辿つて見ろ。何んと云ふ素直な非點の打てない美しい線の配合だらう。その全體の輪廓は白日の下に驚くべき神祕な姿を描いて居る。然し更に驚くべき神祕はその心の中から流れ出ると云はねばなら

ぬ。少女の前に一輪の花を備へて見ろ。彼女はその花に恥ぢない禮儀を以てその花を愛撫するだらう。少女のする千百の可憐な虚僞も、恐ろしい程男の心をそゝりながら、遂行にまで近づく事を許さぬ不思議な蠱惑も、地上樂園を飾るべき唯一の花環だ。僕はよく色々な錯覺的聯想を起す。例へば夜汽車に乘ると、屹度自然死を聯想するし、朝の空氣を吸ふと、口笛のメロデーを聯想する類だ。而して少女を見て居ると、何時でも、人類の運命と云ふものを、極く朦朧とした輪廓ではあるが、非常に鋭く聯想させられて、思はず涙を流すやうになる。而して僕はこの二つの對象の間に、密接な連絡のある事を確信して居る。而して少女によつて聯想させられる人類の運命は、逃れる術なき美しさと痛ましさとを持つて居る。僕は非常にそれが好きだ。

然し、今は、Y子さんも、少女と云はうか、童女と云はうか、僕のやうな女の傍觀者に取つて、一番心を牽く時期を乘り越してしまつた。人生の諸門は樂園の門と同じだ。その蝶番は blank hinge ではない。出る者に對してのみ動く窮屈な蝶番だ。自由意志からにせよ、偶然にせよ、壓迫からにせよ、一度その門を開いて出たものには、――そのものが甦生の奇蹟を遂げない限りは――二度と開くべき機會は永劫にない。然るに、過去には斷じて復歸し得ないことを知りぬきながら、振返つて門の方に咏歎の眼を向けるものを、センチメンタリストと云ふのだ、僕はさう云ふ態度に出るものゝ愚しさを知つて居る。而してかくの如き態度を精力の浪費として憐れむものだ。僕は久遠の童女を讃美する。然しその實現の不可能を知る場合、直ぐ視角をかへて女を見る現實主義者でもあり得る。僕は眼を押し拭つてY子さんを眺むべき立場に立つた。

僅かばかりの荷物を例の赤毛布にひつくるんで、この家に越した來た時、Y子さんの metamorphosis は恐ろしく急激な根本的な相を呈して居た。僕の心の瞳孔をその觀察に適應させるまでには、大分の時間が過ぎねばならなかつた。この家の空氣は、Y子さんの爲めにひどく搖ぎ動いて、謎のやうな不思議なものが漂つて居るのを、心

地惡い位に感じた。僕はそれを喜んでいゝのか遺憾に思つていゝのかを知らなかつた。僕のものと決められた部屋の壁には、ロゼッチの「ビヤトリス」の見事な複製に竝べて、少女雜誌の附錄らしい少女の肖像が、趣味の惡い額緣にはめられて懸つて居た。僕は澁面を造りながら荷も解かない中に、その少女の肖像を取り下して、跡にドフリスの寫眞像をかけて見た。處が「ビヤトリス」と猶更妙な取りあはせになつてしまつた。その晩はその儘で我慢したが、翌朝はどうしても落着けないので、「ビヤトリス」も聖座から引きずり降して、ヨークシャーの地質圖と取代へることにした。僕はこんな事になると、人の思惑なぞは構つて居られない性分なので、Y子さんの好意とは知りながら、眼をつぶつては居られなかつたのだ。Y子さんが、これではAも中々骨が折れるなと思つたりした。こんな風に僕は部屋から始めて、思ふまゝにそこいらを變革した。留守中にして置いてくれたY子さんの片附け方が氣に喰はなければ、見て居る前で、構はず模樣變へをした。部屋の掃除のしかたなぞも僕の氣に入らない事が多かつた。部屋の隅々の塵をこそぎ取るやうに掃いて置いてくれない事なぞもその一つだつた。始めの中は掃除は母がするのだとばかり思つて居たから、ある時部屋の隅に氣味惡く溜つた塵を指しながらY子さんに「あなたのお母さんのやうな人には、部屋を楕圓形に造つて置く外ありませんね」といつて、Y子さんを消え入る程赤面させた事があつた。Y子さんはその時、僕を、冷酷な、女のやうな皮肉を云ふ男だと思つたさうだ。さうかと思ふと溜飮の下るやうな事をY子さんがするので、默つたまゝで感謝する事が度々あつた。例へば楊枝を必ず熱湯に浮けて出す事とか、角兵衛獅子、侏儒又は色のあせた袴をはいて、さゝらのやうな聲で慈善を勸める孤兒院の女などの物貰ひが來た場合に、人と生れたのを悔むやうな顏をして、奥座敷に逃げこむ事、その母を蔭日向なく卑しんで居る事、厠に立つのを人に見せたためしのない事、君から便りがあつた時、日頃に似ぬ晴々しい顏付になる事など。然し要するに、僕の移轉當時、Y子さんが僕に傳へる charm と云つては、未成品にのみある、

かの完成の場合を豫想する事によつて成り立つ特殊な charm に外ならなかつた。

斯うは云ふものゝ、僕は、その時分ですら、Y子さんを一目下に見る氣は決してしなかつた。たしかあの頃の手紙にも書いたと思ふが、かゝる不完全と矛盾とを持ちながら、Y子さんは多分の尊い未知數を蓄へて居る、さう感じないでは居られなかつたからだ。女は、戀の成就によつて平凡になるものだが、Y子さんには、戀愛によつて捥ぎ去られないものが澤山ある、と云ふやうな事を書いたと覺えて居る。君のみを考へて居る筈の彼女か、君すら全く捨て置いて、考へ事をして居るな、と感ぜられる場合が度々あつた。それが、女にあり勝ちな、取りとめもない眞晝の夢とのみは思はれなかつた。君はY子さんの寫眞を見せて貰つた事があるだらう。而してその寫眞の表情と云はず、容貌までが、一つ〳〵同じ人とは思はれぬまでに違つて居るのに氣がついたか。如何かして、ひよつとY子さんと眼を合はせる時、幽靈に遇ひでもしたやうに、身の毛のよだつ感じを受ける事がよくあつた。人の表情は自然の印象と同じく、どれがその人本來の表情と決めてかゝる事は出來ないものだが、如何かした拍子に、あれがY子さんかと思ふやうな、餘り飛び離れた表情に出遇ふので、思はずぎよつとするのだ。Y子さんの祖先が、ふとY子さんの瞳孔を借りて現世を覗いたのか、それとも未來のY子さんが、逸早く朧ろげながら、その肉體に宿つて現れ出たのか。ある時には其の表情に極度の屈託と悲哀とが表現され、又ある時には鐵鎖を斷ち切つたプロメシユスのやうな、極度の奔放と自由とが表現される。ある時には、瞳は黒い火のやうに燃え、又ある時には唇は花のやうに接吻を求めて開く。而して有難い事にはその表情の中、露ほども自己作爲の影がない。始終自分の誠實を危ぶんでゐる僕は、他人の誠實を感得する力が割合に激しいと同時に、その不誠實を見貫く力は自分を苦しめる程鋭敏だ。その僕が、彼女のかゝる表情の中に不誠實の何者をも見出す事が出來ないのだ。僕はそれを或る意味に於ていま〳〵しくさへ思つた。然し僕は事實を枉げるべく餘りに多く科學的だ。女

は根柢に僞善者だといふ傳說的な定義、僕が公理としてそれまで承認して居たその定義は、この事實の前に動搖し始めた。僕は一種の壓迫を感じないでは居られなくなつた。それが一種の不安となつて絕えず僕を脅かした。瀕死の熱病者が、無意識に、何かを見詰めるやうな、虚ろな、然し緊張した眼のかゞやきを、ある時は、Y子さんを襲ふ回歸的な發熱の所爲かと思つて見た。その頃Y子さんは實際三十八度近い熱が出たり潛んだりして居たのだ。ある時は、ぶしつけに其の譯を詰り問うても見た。さう云ふ時Y子さんは何時でも非常に不安な顏付をした。然し返事は屹度病氣だからと云ふに過ぎなかつた。或はさうなのかと自分で考へて居た癖に、僕は「噓をつけ」と心の中で思つた。

如何かすると懼ろしい忌はしい疑惑が、僕を襲ふ事があつた。Y子さんはAを愛すると思つて居るのに、その奧の方に潛む誠實が、それを裏切るのではないか。僕は驚いて自分をたしなめたが、ともすると同じ考へに引入れられた。然し君の手紙を手にした彼女を見ると、この忌はしい心の曇りは跡形もなく晴れるのだつた。

今日は僕がこの家に移つて來てから丁度一箇月目になる。短い時間は可なり多くの出來事を成就した。來た當時は、Y子さんは僕の例の人を近づけない性質に氣兼ねをして居たし、僕は又今書いたやうな不思議な不安に惱まされて居たので、二人の心の交涉は、實にいら〳〵する程遲くしか捗らなかつた。一月の十四日に母が墓參に行つた留守に、二人が始めて友達らしい會話をしたのは、君に書いた通りだ。僕と母とは初めから公然と嫌ひ合つて居た。母はY子さんが僕と言葉を交はす事にすら、卑陋な眼を向けた。Y子さんは見返すやうな態度で、わざと僕に親しげな口をきいて見せた。然しあの母の傍近く居ると云ふ意識は、僕の膽囊の過剩分泌を促すのに十分だつたので、本當の親しみは、母の居る所では、Y子さんに對して如何しても現す事が出來なかつた。その母が居なかつた。而してその日は具合が惡かつたので、僕は學校に出ずに居た。朝から、氷雨とでも云ふべき寒い

雨が霧のやうに隙間といふ隙間から這入つて來て、肺患を持つた人ばかりが知る苦しい日の一つだつた。おまけに僕は前の晩に實にいやな夢を見た。

何處を見ても、豪奢とか華麗とか云ふ言葉のみで形容せねばならぬ不思議な廣間の不思議な群集の間に、ころりと抛げ出された慘めな石のやうに、僕の居る夢だつた。僕は自身の力量を容易に自分で見くびるやうな男ではない。その僕が妙にひけ目になつてしまつて、如何しても心熱が燃え上らないのだ。僕は強ひて自分を勵して、昂然と立上つて、あたりを睥睨してやつた。然し群集は一人として僕の方には眼もくれずに、僕には後ろを見せて、非常に興味ありげに、何か一つの事柄に熱中して居た。その事柄が何んだかは如何しても僕に見窮める事が出來ないのだ。或は——或は一番大切なものを見得る眼を僕は授かつて居ないのではないか。さう夢の中で思つた。而してそれが僕を限りない失望に誘ひ込んで行かうとする。僕は肉體を持つた敵に對するやうにこの失望に對して手足を動かして悶えて居た。どつと哄笑が起る。彼等は僕を見て笑つて居るのではない。彼等は總て僕に後ろを向けて笑つて居る。僕の居る事などを彼等は知りもしない風だ。僕は憤怒の爲めに額が破裂しさうになつた。僕に無關係な哄笑が又起る。僕は拳を握りしめて聲を立てゝ泣き出した。眼は群集を見据ゑたまゝ乾き切つて居た。氣の強い惡太郎が、衆寡敵せず、泣きわめくやうに聲ばかりで泣いた。僕に關係のない面白げな哄笑が又起る。眼がさめると顏も手も盜汗でぬら〳〵になつて、毛孔が一つ〳〵收縮するやうに惡寒を催して居た。而しその夢の爲めに僕は不思議に日頃の自信を失つて非常に淋しかつた。「俺は放蕩者だ。而して卑怯者だ」と云ふ自棄糞の氣分が、體中を鳴り廻つた。瞑想の絲には果てしがない。僕は頭から布團を被つたまゝ、段々先きの狹まつて行く迷宮に這入り込んで行つたその時、Y子さんが靜かに襖を開けて來てくれた。而して、折よくも、Y子さんの本質を最もよく表はす姿勢——小じんまりにきちんと坐つて、胸を折つて、少し下向き加減に、顏の右半

面を多く見せ、手を流れるやうにゆるく膝の上に延ばして、掌を上向きに輕く重ねるその姿勢(ポーズ)――をしてくれた。それはその日の吉徵の始まりだつた。僕の機嫌はまだ治(なほ)らないで、床の中から上眼遣ひで挨拶しながら、「あなたは何故A君にもつと心を打明けて見せないんです」と、いきなり、ぶつきら棒な調子で云つてしまつた。而して直ぐ後から、何んと云ふひねくれた俺だと思つて悔いた。その時Y子さんは、ちらつと毎時(いつ)ものやうな不安な表情を閃めかしたが、それは僕のやうな奴でなければ氣附かない程さゝやかなもので、直ぐ、心から僕の言葉を訝(いぶか)るやうに、又君の片手落ちを殘念がるやうに、豐かな髮で重さうな小さな顏を少しかしげて、少し赤面しながら――話が君の事になるとY子さんは何時でも眼の下を赤くする――「Aがそんな事を云つてよこしたのか知らないけれども、自分は是れ以上、どう心の打明けやうもない。自分は却つてAこそ、もつと無遠慮に、總ての事を打明けて下さればいゝと思ふのに、男と云ふものは强がりをするからいやだ」と云ふ意味の事を云つた。僕は文學者のやうに、女の言葉を mimic する術(すべ)を持たないが、言葉から來る感觸だけは鋭く感受する事が出來る。「男といふものは强がりをするからいやだ」といふ意味をY子さんが云つた時には、一味の甘々しさと、Aの爲めになら、自分の肩骨は折れるまでも重荷を背負つて見せると云ふ强い覺悟が、美しく滲(にじ)み出た。それを聞いて僕の胸は始めてからつと晴れた。

それから僕は可なり精密に、小笠原島の話と、僕の專門の話をして、仕舞には惡夢から覺めて思ひつゞけて居た默想の結果を話した。君が東京に居たら、君に語らるべき話なのだ。僕は又獨りになつてから、この默想をつづけねばならぬかと思つたら、淋しくつてたまらなかつたので、それを誰かに打明けて、その人が解決を與へてくれぬにしろ、その默想の芽生えを斷(た)ち切るきつかけにしようとしたのだ。僕は苦しさを押へながら、懺悔するやうな心持になつて、ぽつり／＼訥辯に語り進んだ。Y子さんは下を向いて、そこにあつた檢溫器の赤皮の箱を

いぢくりながら熱心に聞いて居た。君に對する時とは又異つた熱意が湧いて、Y子さんには解りさうもない思想上の葛藤だの、僕の幼年時代の斷片的な思ひ出だのを語り續けて居る中に、自分の感情が自分に珍らしく驅り立てられて來た。又熱を出すなと思つたけれども、もう如何する事も出來ない。僕の調子は段々感傷的になつて來て、ふと言葉を切つて、二人が暫くの間深い沈默に陷つたその時、疊の上に、極く小さなものゝ落ちる鈍い音がした。僕ははつとした。それはY子さんの眼から溢れた一滴の淚だつた。今まで熱し切つて居た僕の血は、氷のやうに循環をとめた。Y子さんの肩が小刻みに震へて居るのを見ながら、僕は自分の pride が踏みにじられたやうに感じた。「貴樣のエゴイズムもその位小さくなれば澤山だ」僕はさうして固唾を呑んだ。

淚の乾いたY子さんの顏には誠實が漲つて居た。「自分はあなたの事を泣いたのではない。貴方によつて自分の過去が泣かれたのだ。自分は苦しくつてもうその上を聞いては居られなかつたのだ」と云つた。而して如何にも聰明を思はせるやうな、男には眞似の出來ない一種の筋道の立つた話振りで彼女の過去を聞かしてくれた。Y子さんは話が進むほど度々言葉を途切らして肩を震はした。泣くまいとぢつと堪へる苦しさを僕は形で見た。それは君も知つてる通り悲しい物語だつた。其の日の天氣は物語の背景のやうに思ひなされた。君と婚約するまで、初初しい delicate な乙女心に、一身にふりかゝる總ての問題を、――或る時には難澁な、或る時には醜惡な、又或る時には痛慘な――取りさばいて來なければならなかつたのだと思ひやると、僕の心は痛ましく、悲しく、苦しい pathos によつて、締め附けられるやうに思つた。而してY子さんの力量について、今までとは全く違つた考へ方をせねばならなくなつた。

二人の話はいつまでも盡きるやうには思はれなかつた。話題は始めから終りまで、快活なものとては一つもなかつたが、二人は、悲哀を知る人が、互を慰藉する爲めに、微笑みかはす如く、微笑みかはした。Y子さんは知

らないが、少くも僕はY子さんの立去るのを何時までも欲しなかつた。獨りになつて後に、また僕の心に漲り滿つる今朝の默想の續きを豫想するのは、實につらかつた。

二時間も話した後、Y子さんはその祖父に呼ばれて部屋を去つた。然しその結果は意外だつた。僕は心の隅に嘗て覺えない暖かさを感じた。而してこんな人を妻となし得る君の幸福を心から祝福した。僕には世界がより美しくさへ見えた。

然しその晩、僕には猛烈極まる反動が來た。それはあの手紙を讀み直してくれゝば分ると思ふ。自分の性格、健康、運命の先天的失陷が、深刻に僕を苦しめさいなんだ。

A兄、僕の頭は今日は如何(どう)かして居る。やゝともすればY子さんの消息を語る代りに、自分自身の消息を多く語つて居る。然し、文學者ならざる僕は、自分から切り放して一個の人を描寫する術(すべ)を知らないのだから、已むを得ざる結果として許して貰はねばならぬ。然しY子さんを寫す僕の鏡は歪(ゆが)んだり曇つたりはして居ない。

この日から僕等二人は、甫(はじ)めて輪廓だけ互に知り合ふやうになつた。それから二三日すると、僕の健康は恢復し、心の狀態も、嵐の後のやうな平靜に還つて、再び自己と仕事とに對する興味と愛着とが湧いて來た。而してY子さんのする事が總て好意と同情とを以て眺められ出した。Y子さんの不安な表情も、略ゝ(ほゞ)想像が出來ると思ふやうになつた。落着いた居心地は、更に僕の胸の障壁を取りのぞいてくれた。君の事がよく話題の中心になつた。Y子さんの君に對する理解は僕の想像した以上だつた。君の素直(すなほ)な、力強い、愛心の溢れた性格を僕等は寶物のやうにもてあつかつた。而して四五日が過ぎた。而して二人の間の平和の絕頂(ぜつちやう)は行つてしまつたのだ。

或る日Y子さんが教會から眞靑(まつさを)な顏をして歸つて來た。その日は非常に寒い日だつたから、又やられたなと思つて居ると、Y子さんが一寸と云つて僕の部屋に這入つて來た。その眼からは異樣な光が閃(ひらめ)いて、唇を震はして

ゐた。教會にY子さんが缺席勝ちになつたのは、異教徒たる僕の惑はしによると云ふ噂が立つて居るのださうだ。それだけではない。僕の誘惑は信仰の事ばかりでなく、もつと恐ろしい方向に進んで、二人は性的に近づき合ひながら、總ての道義を放擲して、有るべからざる歡樂に溺れて居ると云ふのださうだ。Y子さんは漸くそれだけの事を云つて默つてしまつた。Y子さんは忽諸にも、自分が僕の名譽に故障を與へる原因になつたのを殘念がつた。僕は人間の根性の下劣さ加減を今更に苦々しく思つた。二人は、口にこそ出さないが、この噂の張本人が母その人である事を知り拔いて居たのだ。君からY子さんを切り放さうといふのは豫てからの母の宿願だ。加之、Y子さんがこの頃その母に對して取る態度は、母の憎惡を買ふに十分だつた。僕のこの憎むべき女性に感ずる敵愾心は極度に達した。長い沈默の後に、僕は突然立つて茶の間へ出て行つた。Y子さんは、こんな場合に僕を引きとめる無益を飲み込んで居て、止めようとはしなかつた。それが愉快だつた。僕は溜飲の下り切るまで、ぐんぐん母を追迫した――母の叛逆に就いて何等具體的な證據も握つて居ないのに勝身になれる僕の意力と直覺とを小氣味よく感じながら。

　然しその日からY子さんの健康は俄然一變した。殆んど毎日のやうに喀血が續いて、熱の度差が激しくなつて行くばかりだつた。病に虐げられる彼女を何に譬へたらいゝだらう。痛ましくも肉の美しさが破壞されて行く跡に、奇蹟のやうに現はれ出る全く違つた肉の美しさを何に譬へたらいゝだらう。彼女は瘦せる程美しくなる。而して瘦せる程、深い靈の力が外部から感ぜられる。神の試練の爲めに憔れ果てた聖者のやうな氣高さが、彼女を光り輝くものにする。僕は、彼女を扶け勵ますよりも、その前に身を投げ出して、心ゆくまで懺悔したいやうな心地になる。

　然し僕はもつと常識的に自省せねばならなかつた。同じ病氣を持つた僕が、Y子さんの側に居るのは第一よく

ない。その點からのみ考へても僕がこの家を去るべき理由は十分ある。第二には、Y子さんは僕のやうなものゝ存在を必要としないで、どん〳〵進んで行く力を備へて居る。彼女のこの頃の飛躍は僕を驚かせる。全能者に對する信仰の如きは、僕等不可思議論者に取つては、又今の世の所謂信者なるものゝ標準から見れば、一つの驚異と云ふべきだ。その信仰は總ての信條から解き放された、自由なものだが、信條の破棄は一層全能者に近づいた必然として行はれたので、束縛を厭つて行はれたものではない。だから、彼女の思想なり行爲なりは、信條によつて排斥される事はあつても、全能者の嘉納し寛恕すべき種類のものだ。ドグマで堅まつた日曜學校で始めから練られた彼女が、宗教に對して無感覺な家庭に育つた彼女が、如何してこんな三昧を會得したか。恐らくは君の感化もそこに強く働いて居るのだらう。然し彼女の心靈の本質が、玲瓏たる珠のやうでなかつたならば、如何して生命の根蔕にこんな聖境を拓き得よう。枝葉に亙つては、或は僕も多少貢獻をして居るかも知れないが、それは、畢竟、一大事因縁を把持したものには、老婆親切にしか當らない。害になるとも益にはならない。僕はこの家を出る事を決心した。一體ならば、これだけの固い理由を捕へる場合には、僕は他人に相談するやうな事はしないで、直ちに決心を遂行する。然るに僕は手紙で君に相談した。君からは勿論反對して來た。それには僕に少し後ろめたい理由があつた。第一、僕はY子さんの力量を信じながら、母一人の傍に置く事を可哀相に思つた。第二、僕はY子さんから離れる事を苦しく思つた。Y子さんが僕を要するよりも僕の方が寧ろY子さんを要する心の狀態にあつた。と云つて、僕は君のあゝ云ふ返事を豫期しながら、態と手紙を書くやうな詐謀を行つたのでない事は、君も信じてくれると思ふ。僕の心の間隙がかゝる手續きを取らせたに過ぎない。Y子さんの健康は益益衰へて行くばかりで、神經が第六感にさへ反應するかと思ふ程鋭くなつて居る所に、牧師が來た。牧師は先づ僕に面會を求めて、この家を立退く事を勸めた。僕は簡單に、Aに相談して見ようと答へたゞけだつた。それか

ら一緒にY子さんの病室を見舞つた。

Y子さんは仰向けになつて、兩手をかいまきの襟の所で輕く組合せたまゝ、すや／＼と眠つて居た。生きてる人とも死んでる人とも區別がつかない程清淨で靜かな眠りだつた。彼女の祖父は、枕許にきちんと坐つて、たゞみ加減に兩臂を膝について、音樂のやうな旋律を描いて白い枕から滑り流れた黑髮の端を、さもいとしげに手まさぐつて居た。僕はこの光景をそのまゝにして置いて、何時までも眺めて居たく思つた。僕等が這入つて行くと祖父は大分慌てゝ髮の毛を打捨てゝ、Y子さんを搖り起した。Y子さんは大きな澄んだ眼をまんじりと開いてあたりを見廻したが、僕に連れ添うて牧師の居るのに眼をとめると、その眼は、僕にだけ分るやうな複雜な言葉を語つて居たが、やがて熱い淚を湛へ出した。そこを誰も口を切らうとする者はなかつた。暫く沈默が續いた。第三者からは輕く取扱つて濟ませさうな事も、當事者たるY子さんの心には、どれ程致命的な苦痛であるかを、牧師は驚きながら思ひ知つたらしく、今更自分の使命のやり場に困つて、とう／＼僕の移轉の事に就いては一言も云ひ出せないで、匆々に歸つて行つてしまつた。僕は、こゝにも、底力の強いY子さんの性格を實證した。劍でも拔いて戰はなければ、勝つた氣になれない自分が、少し淺薄にさへ思はれた。

牧師が來てから當面の問題に對する僕の決心は定まつた。君さへ許すなら、世間の爲めにも、君の爲めにも、又自分の爲めにも、僕はこの家に居ようと決心した。而して強い勇氣が歸つて來た。健康も比例して回復した。仕事の興味がうづ／＼する程湧き上つた。

それに反してY子さんには、無殘と思はれる程の落潮が來た。彼女は君の愛を疑ひ出した。自分は正當に愛せられては居ないのだ。でなければ、自分は正當に愛する事を知らないのだ。自分は、今まで、素直に、眞劍に、男の愛を受入れる事によつて、強い心の滿足は得られると信じ、あらゆる力を振ひ盡して其處に沒頭した。そ

れの酬いられない失望と苦痛とを察してくれ。自分の前には測り知られぬ暗黑が迫つて來るやうにも見える。Aさんの手紙一つは身に餘る愛撫だ。それが自分の生命の燈をかき立てる。然しその直ぐ跡には、恐ろしい薄明が自分を押し包まうと待つて居る。自分の愛がまだ足りないのか。否々。自分はそんな事を疑つて見るのすら恥ぢる。Aさんの勸めてくれる自覺と云ふものを、しつかり掴まうとすればする程、この恐ろしい暗黑は薄明を先驅にして自分に近づいて來る。自分は然しまだそれをAさんにどう告白していゝのか自分でも分らない。告白は要するに無益だ。若しそれが自分の思ひ不足か思ひ餘りから來たものなら、徒らにAさんを苦しめる許りだ。自分ほど世の中に孤獨な者はない。自分の愛の流れ出る先きは、唯祖父とAさんがあるばかりだ。その中でも祖父に對する愛は、愛と云ふよりも寧ろ憐憫だ。自分の愛の本質を動かす對象にはAさんがある許りだ。それだのに……

Y子さんはこんな事を打明けたりした。

それ許りではない。健康の衰弱は、彼女を屢〻生死の問題にも逢着せしめた。君の同情と推察とを以てするも、必至的にこの問題に面接せねばならぬ人の心をはつきり描いて見る事は出來まい。死の恐怖は距離の介在……それは縱令毫釐の距離であつても……によつて遊戲に墮する。死より一尺を離れよ。人は笑つて死を讃美し、侮蔑し、飜弄し得るであらう。然し一尺の距離を撥無して、若しくは讃美、若しくは侮蔑、若しくは飜弄の手を擧げ得る人が何處にあらう。ゴルゴンの一瞥は人を石に化する。死の一瞥は人を微塵に碎く。僕は倒立した三角塔の上に盛られた花を見るやうに、はら〳〵しながら手に汗を握るの外はなかつた。

幸にも、この恐るべきY子さんの生死の苦悶は、三日程續いて後稍〻くつろいで來た。而して一種の安心が頭を擡げかけて來た。その頃、偶然、僕等はメターリンクの「アグラヹーンとセリセット」を會讀した。僕がこの不思議な神祕の力を潜めた詩を讀むのは三度で、Y子さんは始めてだつた。三度目に讀んだ僕が驚いた如く、始めて

讀んだY子さんは驚いた。眞裸かな運命の眞實が二人の前に投げ出された。眞に美しい。從つて眞に恐ろしいものを見せつけられたやうに、二人はおど〳〵して上の空になつてしまつた。「三人とも善良な人ばかりだのに如何してこんな悲劇が起るのでせう」とY子さんが云つた。「惡人榮えて善人滅ぶと云ふ様な事實は、悲劇の條件とはならない。それは體のいゝ茶番に過ぎない。人間の豫知を幾重にも裏切る恐ろしい力――神的なのか惡魔的なのか自分は知らない――によつて、人が眞實に目覺めて行くに從つて、段々苦しい運命に這入り込んでしまふ場合にだけ、本當の意味の悲劇は成立つのだ。この意味に於てエデパスはハムレットよりも遙かに偉大で眞實だ」と僕も云つた。二人はその戯曲中の人物のやうに、美しいとも悲しいとも定めがたい緊張した心になつた。

Y子さんの方に小康が來たと思ふと、今度又僕の方にdepressionが來た。元氣にまかせて……實は空元氣にまかせて、寒風に吹きさらされながら、採集なぞをして歩いた。朝から晩まで勉强を續けた。間隙さへあれば跳り込まうと身構へをして居る兇惡な惡魔に機會を與へまいとして、噛り付くやうに仕事に沒頭した。僕は又つらあてがましくこの家に居殘つた事を、後悔した。又、日頃は隨分豐富に特殊な勝れた性格を、まだ十分發達は遂げて居ないにせよ、持つて居ると思つて、竊かに誇りを感じて居た僕は、さう云ふ性格に附隨する孤獨の淋しさに堪へがたくなつた。而してどん〳〵人にぶつかつて行く代りに、却つてぐじ〳〵と人から尻ごみをして行つた。圓滿な性格は、小さいなりにもそのまゝで完全だ。特殊な性格ほど特殊なcomplementを待つて始めて完成される。時間と空間と傳習とに非常な制約を加へられた人間の生活に、この特殊なcomplementを待ち受けて居る程、間の拔けた馬鹿々々しい期待はない。さう云ふ要求を無視して居る人も、或はあり得るだらう。然し性格の生長を強く深く欲求する者に取つて、是れほど運命の皮肉を思はせる事はない。自由主義、平等主義の眞の基礎觀念は、悠久な人類生活が、この制約から少しでも解放されたい願望の結晶したものだ。自由平等主義といへば、人は、

平凡な、何の要求もない弱者の泣き言だと思つて居る。何んと云ふ無省察だ。かゝる主義の熱心な主張者が、何時でも、特殊な性格を持つた人だと云ふ單なる事實一つを見てさへも解る筈なのだ。

自由、自由、赤裸な心靈のをめき叫ぶ要求を充すべき眞の自由、僕等はその自由を求めようではないか。その自由の前には、無條件の服從をなし得る勇氣を養はうではないか。

砲兵工廠の汽笛が鳴り響いた。夜は戸の隙間から白み初めた。又苦悶の一日の幕が開く。昂奮と病熱とによつて綿の如く疲れ果てた僕は筆を擱かねばなるまい。

Y子さんその他は、まだ安らかに眠つて居るらしい。

僕は總てを君に語り盡したか。Y子さんと僕との交渉について云ふべき事は、まだ澤山殘つて居る。それが語らるべき機會は又來るであらう。要するに言葉は言葉だ。

もう一言を附加へる。僕がN子さんと結婚したいと思つた動機は、Y子さんによつて促された事だ。僕がN子さんとでも結婚したら、僕の膽汁のやうな苦い生活は、幾分か緩和されはしないかと、Y子さんは思つて居るのだ。而して是非N子さんと結婚するやうに勸めてくれたのだ。僕も一時は乘り氣になつた。然し自分の性格の歪みさ加減を思ふと、自己に失望してしまつたのだ。どうか輕率の擧動を許してくれ給へ。

是れで濟んだ。このペンは役目が終つた。折つて捨てる。

（AよりBへ）

千九百十四年二月十一日　仙臺

B兄、

今日は祭日だ。

嵐は過ぎて平らかな日和(ひより)が來た。來るべき春の豫言のやうな暖かい日の光だ。一日中工場の穢(きたな)い隅々にまで照り渡つて、總てのものを淨化せずには置かないといふやうに見えた。工場の名儀主になつてる爺さんも、今日は珍らしく兎の皮の背(せな)あてを脫いで、甲斐々々しく働きながら、眼の藥にでもなるやうに太陽の光を貪(むさぼ)つて眺めてゐた。而して始終氣安げなをかしな事を云つてゐた。僕も喜び勇んで仕事に熱中すべき筈なんだが、それが出來なかつた。何故だか出來なかつた。出來なければ出來ない程、手足は機械的に唯動いた。而して夕方には、滅茶苦茶に疲れはてた五體と、ぎつしり角ばつたものゝ塡(つま)つたやうな頭とを抱へて家に歸つた。門口では不吉の前兆のやうに、母の苦しさうな咳嗽(せき)の聲が聞こえた。母は二三日前から急に氣が弱つて、おまけに風邪に犯されて臥(ね)てゐるんだ。N子はN子で突然持上つた緣談の爲めに何んだか落着かないでゐる。家の中が何んとなくがたぴししてゐるやうで、僕はなほ〳〵面白くなくなつた。せめてはと思つてすぐ自分の机の所に行つて見ると、そこには薄綠色の封筒の手紙が置いてあつた。その色は、以前は、君からの便りの符牒だつたんだが、今ではY子も同じものを使つて、而も同じやうな書體を書くのだから、どつちから來たのか封筒だけではさつぱり見分けがつかなかつた。この曖昧がまた僕の氣に障(さは)つた。僕はいら〳〵しながら發信者の名を調べて見た。Y子からではない。白狀するが、君には濟まないけれども、僕はがつかりして、ほんとにがつかりして、崩れるやうにそこに坐りこんでしまつたよ。

夕食には、母の臥(ね)てゐる側で、三人が芋粥(いもがゆ)をすゝつた。母は又してもN子の緣談の事を氣にして、色々と樣子を聞き始めた。緣談を申込んだ男といふのは、この町の理科大學の應用化學科の助手をしてゐるんだ。製粉の方法の事で一度僕が相談に行つた事がある。その時、彼は汚(きたな)い下宿屋の二階にゐて書物を讀んでゐた。僕が座につ

いても振向きもしないで、一寸待つてくれ給へと云ひながら、いゝ切りのところに來るまで、平氣で後ろを向けてゐた。而して此方を向いたと思ふと、小さな愛嬌のある眼でまじ〱と僕を見ながら、直ぐ自分の今まで讀んでゐた元子論の話をやり始めた。僕は馬鹿にそれが氣に入つて、それから互に往來するやうになつたんだ。彼は金がないと共に繋累のない男だ。而して剽輕な、親切な、一寸日本人には珍らしいタイプの男だ。N子に不相當な配偶ではない。N子は彼に對して何等かの成心を持つてる譯ではないが、結婚といふ問題について、色々に思ひなやんでゐるらしいんだ。僕としては、N子を現狀のまゝで人に貰つてもらふのを好もしく思はない。僕は、母がこの問題を繰返してくど〱いつてゐるのがくだらなかつたので、とう〱珍らしく、いはないでもいゝやうな事をいつてしまつて、母を涙ぐました。食事がしまつてから、僕は机に向つて、ぼんやりして、流元でN子の物をゆすぐ音を聞きながら、何を考へるともなく唯坐つてゐた。而して時々思ひついたやうに、どつしりと重い君の手紙を、机の上に音をさせて、裏がへしたり、表を向けて見たりしてゐた。その中に夜が更けた。隣りの部屋で、母の咳嗽の聲が間遠に聞こえる外、あたりはひつそりして、N子ももう寢入つたらしかつた。かういふ時に貧窮といふものは、不思議な力に變じて人を脅やかして來る。人の心の鎭まるのを待ち構へてゐたやうに。僕は重い物でも背負つたやうに、ひとりでに肩を聳やかした。而してぢつと眼をつぶつてゐた。その中に僕のいつもの可愛いゝ力が又歸つて來てくれた。靜かな家の內が又平和な愛情に滿ちて眺められた。而して內部の力は外部の力と平均して、やがてそれに打勝つて行つた。その時には始めて君の手紙の封を切つて讀んで見る氣になつたんだ。

感情の潮の滿干によつて、綿密に綺麗になつたり、粗大に奔放になる君の手跡は、君の心持を理解する上に屈强の手引きになつた。Y子の近狀をあれだけ委しく知らしてくれたのは先づ何よりも有難い。この頃のY子の手

紙と來たら、僕を苦しめる爲めに書いたのかとより思はれなくなつてゐる。段々何事にか緊張してゆくその心持だけは受取れるが、どんな事情の下に、どんな事柄に對してさうなつてゐるのかは、さつぱり說明がしてないんだ。僕はそれがもどかしくつて堪らなかつた。君の手紙はそれに比べれば雲泥の相違だつた。Y子の心がどんな風に、云ふ事やする事に現はれてゐるかゞ、可なり見るやうに想像出來た。僕はそれを有難く思ふ。

然し僕の不滿足は それだけで全く取去られたといふんではない。取去られないばかりぢやない。君の手紙を讀んでから、その不滿足が却つて不思議に深味を增して來たのは、どういふものだらう。謂はゞ君は龍を描きながら肝心な睛を點じてくれないんだもの。繰返すも愚かな事だが、僕の彼女に對する愛溺は、たゞ生長してゆくばかりだ。女といふものを唯一人より外に知らうとしない僕を、君は憫れな奴だと思つてゐるかも知れない。然しそれは、思つてゐるとすれば、君のいひ得る事で、僕の知つた事ぢやない。僕は、神の攝理によつてアダムがエバを見たやうに、彼女を見たのだ。アダムはエバを措いて牝鹿とは伴偶になれなかつた。僕もさうだ。僕は裸かで創り出された事を知つてゐる。僕は神に對して潔く自分の本來の無一物である事を肯ふが、若しY子が僕から取去られたなら、僕はつぶやかないではゐられないだらう。僕はそれをすら平氣でゐる程には、神の仁愛を疑つてゐないからだ。Y子は僕の纖維の一つづゝ、細胞の一つづゝにも沁み亙つてゐる、丁度總ての露の上に月の影が宿るやうに。僕は餘りにY子に飽和して現身のY子を要しないと思ふ事さへある。然しそれは噓だ。噓だ。僕はY子の心、肉、髮の一筋、黑子の一つでも自分のものにしなければ滿足しない、滿足が出來ない。B兄、色んな事をよく知つてる君も、まだこんな慘酷な呵責を經驗した覺えはないんだらう。さうでなければ君の同情は、も少し適切に僕の傷を撫でゝくれさうなもんだ。僕は是れまで出來るだけ感情を平靜にして、やゝともすると內部から突起して來る不滿の聲をなだめようとした。僕は謙虛であられるだけ謙虛であつた積りだ。僕は顳顬

から血の滲み出るまで働かうとした。晝間は一心不亂に勞働し、夜は机の上に寢倒れるまで讀書した。眠られない夜はがむしやらに祈つた。而して不測の運命に兎に角打勝ちつゝ快活を失はずに來た。然しどうかすると、これ程の努力も脆くくづれてしまふんだ。隙を窺つて恐ろしい忌はしい力が殺到して來る。奥深い謎を見つめてゐるやうなあの大きな眼、噛みしめたい程魅力を持つたあの髮の毛、僕の唇と手に燒附くやうに殘つてる彼女の二つの唇と十の指――僕は氣息のつまるのを覺える。さういふものが一つ〳〵不思議な鞭撻だ。暗黑な悲慘なその過去、衰へて行く健康、誤解と惡意との中に育つて行くその靈性、さういふものは男としての僕の憐れみと同情とを極端に煽りつける。僕はゐても立つてもゐられなくなる。而して僕は幾度か、さうだ、幾十度か心の中で叫びながら誓つた。「俺は屹度彼女を幸福にしてやる。僕等二人は一番幸福にならなければ滿足しない。彼女を助けて下さい、救つて下さい、最上の道を謬らずに歩かせて下さい」僕が愛を感じたんではない、愛が僕を感じ彼女を感じたんだ。僕は唯飄風に遇つたやうに、烈しく强く引きずり廻されてるんだ。僕のする事はY子がするんだ。僕はもう何んと書いていゝか分らない。僕の心を表はしてくれる文字はない。君は判るね。然し僕は書く。天と地とは滅びる。僕等の愛は滅びてはならない。滅びない。滅びないやうにして下さい。滅びるものなら、その前に僕を殺して下さい。然し僕は死にたくないんだ。僕は若いから、力があるから、生きるだけの事はするから、屹度しなければならないから、僕は死にたくないんです。Y子を僕の胸に呼び寄せ、Y子が僕から眞の幸福を味ひ知るまで、僕は死にたくない、死にたくないんです僕は。

（こゝまで書いて來た時、僕はふと隣りの部屋の物音に氣が付いた。而してぎよつとして耳を欹てた。寢入つたとばかり思つたN子が、そつと啜り泣きをしてゐる聲だ。机の上を見ると、僕のハンケチも涙でしぼるやうになつてゐた。N子はいつの間にか僕の泣いてゐるのを聞きつけてゐたんだ。いま〳〵しい奴だ。僕は寒氣を感じて

突然叱りつけられた子供のやうにきよとんとしてしまつた。

今まで書いた所を讀み返す心持にはなれない。が、どんな馬鹿らしいものが書いてあつても、君ならその中から僕の眞實な情をすくひあげてくれるだらう。兎に角筆を擱いて少し落着から。

…………………………………………………………

僕は小聲でN子をたしなめた。N子はおとなしく「はい」と答へて齒を噛みしぼつたらしかつた。氣がつくと母も寢てはゐないらしい。それを知ると僕の涙は又何んといふ事なしに、新しく流れ出した。それを又感附きでもしたやうにN子がもう一度泣き出した。母までが泣き出した。三人は互ひ互ひを憚りながら默つて泣いた。とう／＼僕はたまらなくなつて今怒鳴つた所だ。二人は漸く屛息してしまつたから、是れから又書き續ける。

それだのにY子の手紙は、僕の期待の十が一の滿足も與へてはくれない。彼女の手紙は事の眞相を端的にいつてよこす事がない。それを詰問すると、自分でもはつきり分らないのを外に書きやうがないと云ふんだ。僕が彼女を愛する程度でないまでも、彼女が強く僕の愛に酬いて居る事は察せられる。然し、同時に、自分は僕のやうなものゝ愛を受ける資格のないものではないかを恐れると繰返して云つてよこすんだ。彼女が婚約後に病氣になつた事から過度の遠慮をしてさう云ふのかとも思つて見たが、彼女がそれほど僕の心を淺薄に解釋して居るとは考へられない。或は、彼女は僕の力量について不滿を感じ始めたのではないか。それならば理由がないではない。若し彼女の僕に對する愛の根柢が、僕の力量と云ふ事であつたならば、婚約をしてから、今日まで、小ぽけな工場を大事に守つて、實生活にすら向上の模樣の見えない僕に愛想を盡かすのも無理がない事だ。それなら科は僕にある。Y子の心の深さをもう少し深いもの、少くも、深くなり得るものと迷信して居た僕が、自分の馬鹿を罵る外に途のない事だ。君の今度の手紙は君に似合はない感情的なもので、從つてY子の境遇の苦しさや煩悶

の様子を、Y子自身の手紙よりはつきりと想像する事が出來た。然し肝腎の點の說明されてない事は、Y子の手紙と同樣だと云ひたくなる。君のやうな理智的な頭腦に、Y子の煮え切らない點位の判らない筈はないと思ふんだ。それが僕に取つてどれ程不愉快な事であれ、知らずにゐるよりはどれ程愉快であるかを知つて貰ひたいんだ。風邪で熱のある身を無理して一晚不眠で手紙を書いてくれた君の同情と親切を、僕は決して疎かにするのではない。僕はそれに對しては深い感激を感じてゐるばかりぢやない、君が二度とそんな無理をしない事を忠告したいと思つて居るんだ。僕は君を促して又あんな事をさせようとは夢々思つてはゐない。どうかあんな亂暴は今後屹度やめてくれ給へ。唯短くても端的にY子の心を傳へてもらひたいもんだ。散光を一つのフォーカスに集中して貰ひたいんだ。僕の心の苦痛を察してくれ給へ。

僕は光を愛する。光の中に苦しましてくれ。蝙蝠のやうに、薄暗の中に、羽ばたきをするのは、僕の性格が否定する苦痛だ、呵責だ、刑罰だ。

僕はY子に對しては、何んだか手紙を書く氣になれない。君の手紙は、好意ある手紙は、不幸にしてY子に對する、より普遍な理解を與へたと同時に、より深刻な疑問を投げかけてしまつた。人を疑ふと自分の心が溝泥見たいになつてしまふ。

白狀すると、戀人の本能によつて、僕の心の中に、思ひもかけぬ猜疑が閃く事が二三度はあつた。然し僕はまだそれを綺麗に心の中から一掃する男らしさを失つては居ない。だからその內容は委しく君に告げる必要もなからう。

君の健康はその後如何なのか。恐ろしいのは盜風だ。それに用心したまへ。この間嵐が來た時、粗造な僕の家は方々の隙間から風が來るので、閉口し切つて、嵐がやむと、僕は早速妹を手傳はせて、縁の下に潛り込んで、

蜘蛛の巣だらけになりながら「西の内」で裏から緣板の目貼りをした。それにも拘らず、母は盜風にやられたらしいんだ。Y子の健康もいゝ方に向つて、心の重荷の上に肉の重荷が加へられぬようにと祈つて居る。Y子の母と云ふのは何處まで下劣な女なんだらう。

霽れ亙つた空の下にある北國の寒さは髓まで沁み通る。明日は又いゝ天氣だらう。何と云ふ僕の心に不似合な天氣だ。二人の女は女らしく、もう悲しみは忘れて、眠つてしまつたと見える。彼女等と僕との上に來た、而して來りつゝある運命の不思議を、恐ろしい程に思はせられる晩だ。

この手紙は必要と認めるならばY子に讀ませてくれ給へ。直接には當分Y子に書く氣にはなれないから。心から祈りたい夜だ。苦しい夜だ。

（BよりAへ）

一九一四、二、一四　東京

君は危機に臨んで居る。

斷崖の上には脚を支ふべき土がある。君はそれを貴ばねばならぬ。

斷崖の下には土はない。其處は死だ。而して空だ。君はそれを惡まねばならぬ。

今、この瞬間に、Y子さんをしつかりと摑め。今を逸する事はY子さんを逸する事だ。

君の所謂氣分、君の所謂猜疑は、Y子さんを賣拂ふに値する代償ではない。それは君自身が最もよく知つて居るべき筈の明白な事實だ。眞珠の代償に豚を求める貴女が何處にある。薔薇を根こぎにしてあざみの種子と代へる園丁が何處にある。

君の戀愛は僕を驚かせる。然しながら君の愛情に似合はしからぬ不平は、更に僕を驚かせる。

戀愛は二條の縻だ。手に唾して綯ふもの丶みが強き索の持主となる。縻の一條を彼處に、他の一條を此處に置け。一條は悲しみ、一條は恨むであらう。而して共に朽ち果て丶行くであらう。

君は東京に來るべきである。でなければ、Y子さんが仙臺に行くべきである。その外に道はない。危機は逼る。急湍に近づいた水は突如として歩みを早める。危機に臨んだ運命は常に親指を立てる暴君だ。

君位公明な男はない。然し君位に拘泥する男もない。君は公明に拘泥する。君は自分の男である事に拘泥する。君は富者の獨子たる生ひ立ちに拘泥する。君はにはか貧乏に拘泥する。君はY子さんの母に拘泥する。更に悪い事は、その拘泥がいつでも公明な心を以てなされる事だ。だから、君は自分の缺點を美徳とすら思ひ込むのだ。今の君はY子さんさへ摑めばい丶のだ。摑むか摑まぬかゞ問題だ。その外に何んの拘泥すべき問題があるか。

君の神經は、もつと鋭敏に物の機微を縫つて進まねばならぬ。一人の女の心より知らないと云ふ事實が、それをしないで居る申譯とはならない。君はもつと度々東京に來るべきであつた。而してY子さんと反比例して、多くの消息をY子さんに送るべきであつた。僕は今まで幾度それを君に慫慂したらう。然し君はそれを用ゐなかつた。恐らくは君の公明な性格がそれを用ゐしめなかつた。君はY子さんを愛した。その愛は渝らない。同様にY子さんは君を愛すると云つた。その愛は渝るべき筈でない。是れは公明な歸納だ。然し君は枝を張り盡した若い楡の木で、Y子さんは是れからどう枝を擴げようかと迷つて居る幼い白樺だ。君の公明は、仕舞には、必ず君に輝き亙る勝利は齎らすであらう。然し、その前に、君は、恐らくは幾度かその寶を抱くが爲めに、つまづき倒れねばなるまいと恐れる。だから敢て云ふのだ。

僕の肉體は病熱の爲めに苦しんで居る。僕の靈體は心熱の爲めに更に苦しんで居る。熱意が燃える。焰のやう

に燃える。何を燃料として燃えるのか、何を燒かんが爲めに燃えるのか、僕は知らない。僕はそれを確かりと知らうとしながら、知る事を拒んで居る。否、僕がその心熱を強く意識する時には、その焰は死灰の中に潜む螢火のやうになつてしまふ。無意識の狀態にある時に、その焰は僕の靈體と肉體とを併せて燒き盡すまで燃え上る。僕は急喋に何事をか目論んで居る。而して、見よ、何事をもなし遂げては居ない。僕は最早自分を知らない。責任を以て自分を見つめる事が出來ない。僕の心はジャーナスの首だ。西に面した顏は、東に面した顏を見ない。東に面した顏は、西に面した顏を知らない。過去と未來が互に知り合はぬ如く、僕の心は僕の心を知らない。

呪ふべき二重生活よ。

自然が總て二重に生活する。僕はそれを呪ふ。

（BよりAへ）

一九一四、二、一四　東京

前の手紙を投函して歸つてから、部屋に這入ると、Y子さんが來て待つて居た。

Y子さんは君の手紙を讀んだのだ。今まで泣いて居た涙でその大きな眼は水に映る月のやうに漂うて居た。さう云つて形容するより外はない。（その眼に涙を要求し得る心は羨まるべきである）

N子さんの緣談の事が話題に上つた。Y子さんは僕がN子さんと結婚すべきであると云ひ張つた。

僕の決心はそれで動かされたのではない。然しその瞬間に僕の決心は成立つた。僕は矢張りN子さんと結婚したいと思ふ。君がそれを徒らな出來心と取らうとも取るまいとも、N子さんさへ承知してくれるなら僕は結婚したい。是れは哀願ではない宣言だ。僕等の間に交はされる言葉は總て宣言であらねばならぬ。宣言を取消す事

が恥辱ではない。僕等は宣言をなし得ぬ事を恥辱とせねばならぬ。

パンドラの箱は遂に覆へされた。僕等が話して居ると母が這入つて來た。僕は母に對してもY子さんを仙臺に送るがいゝと說いた。母は直ぐその刄を奪つてY子さんと僕とに向つて來た。二人はまだ本當に結婚したと云ふのではない。（肉の關係もまだ成り立つて居ないと云ふ事もY子さんから聞き取つてあると彼女は勝ち誇る如く附け加へた）その間にY子さんは病氣が起つた。是れは先方に對して迷惑な事であらねばあらぬ（と彼女は確信を以ての如くに獨斷した）先方としては家の零落と云ふ事がある。Aさんは今結婚なぞと云ふ問題を考へてなどは居られない筈だ（と彼女は又臆面もなく結論した）だから相互の都合上、この緣談は、兩方の難題が解決するまで、延期するのが正當だ（まだ何んと云つても瑕附かずなんだから仕易う御座いまさあね、と云つた。僕は女の言葉の眞似などは出來ないが、この雜言ばかりは醜い烙印のやうに僕の耳を今でも燒きたゞらかす）と云ふのだ。彼女はそれに餘論を附け加へる事を忘れなかつた。君とY子との關係が當分中絕すれば、僕と云ふものゝ此處に居る理由は當然消滅するのだ相だ。僕等の聲高な爭論を聞きつけて、其處へ祖父もやつて來た。僕は得意な戰鬪的態度を取つた。皮肉と毒言とが霰のやうに彼等の顏を續け打ちに打つた。鬱積して居た心熱が噴火の如くに迸つた痛快さは、今考へても惡魔のやうな微笑を僕の口邊に湛へさせる。祖父の言ふ事は、所謂江戶兒の言ふ事だ。先方の家が百萬長者にならうと、一文なしにならうと、約束は約束だ。娘の病氣は、何處までも、大事な時まで預かつて居る自分達の不行屆だから、先方でやめると云ふのならおとなしく引込む外はないが、呉れろと云ふのなら煮るなり燒くなり先方の勝手にするがいゝのだ。今になつて縱令何と云はうと、金輪際娘はA家のものに違ひない。Bがこの問題に口を出すのは餘計な世話だ。母がBの前などで話を持ち出すのが、自體間違つて居ると云ふのだ。Y子さんを極端に溺愛し、Y子さんなしには死んだも同樣なこの老人が、瘦我慢に齒を喰ひしばるに

は、見て居るのも悲慘だつた。僕は何しろ云ひ度い事は云つてしまつた。もう我慢にも、そんなに特別の理由もなく、神經をいらだゝせる家には居續きたくない。何とか考へてくれ給へ。佛者の說は何は兎もあれ、僕はこの世界に一箇の存在を有して居る。再生があらうがあるまいが、現在は僕の寶玉だ。この寶玉を襤褸に包んで置く譯には行かない。

もう一度云ふ、僕はN子さんと結婚したい。更に附け加へる、Y子さんは呵責のあらん限りを味つて居る。側に見て居るだけでも、この世の中が暗くなつてしまふ。てきぱき何んとか片を附け給へな。

（AよりBへ）

千九百十四年二月十五日夜　仙臺

B兄、

君の二通の手紙は受取られた。東京に行つた處が碌な結果を得られない事は、君の手紙自身が語つてゐる。仙臺はY子を雙手を擴げて待ちに待つて居る。衰弱はしてゐても、今の彼女の健康は仙臺までの旅行を許さないのではあるまい。

Y子は呵責のあらん限りを味つてゐるんだね。而して、それを僕に手紙でさへ訴へないで味つてゐるんだね。僕に何等の失態があつたのか。彼女はそれもいはうとしない。一體僕にどう彼女を判斷しろといふんだ。愛憎は紙一重だ。僕にこの恐ろしい眞理を經驗しろといふのか。

君は何んだつてさう嵩にかゝつた物の云ひ方をするんだ。もつと對等に物を云つたつて、筋の通つた理窟なら僕にでも判るよ。君は又立派な宣言をする男だ。宣言を取消す事は、成程君のいふやうに恥辱ではない。但し一

旦取消した宣言を、恥かしげもなく又宣言するのは、少し恥辱らしい事に君は思はないのか。

君のいふ通り僕は公明だ。僕は公明以外の道を知らない。君を待たないでも、この一本氣な性格は屢〻僕を苦しめた。而して幾度か複雜な性格に移らうと試みた。而して何時でも失敗と屈辱の經路を繰返した。今僕は迷はない。愛するものは愛する。愛し得ないものは憎む。同時に憎む事の苦痛を人一倍に知つてゐる。この苦痛に對する本能的の反射作用として總てのものを愛したいと僕の心は祈る。僕は愛したが故に、又憎んだが故に、僕から物が失はれても悔いない積りだ(たとへ極度の悲哀を經驗しても)それは本來僕の物でないからだ。僕は純粹に、正當に、僕の愛が要求し得るものだけを要求して行く。僕に取つてはそれのみが眞だ。僕の愛は眞のみを生まねばならぬ。僕の足は眞の上にのみ立たねばならぬ。だから僕は物に拘泥するのだ。第三者になつたらその善惡を批評する事も出來よう。僕に取つては、それがいゝにしても、惡いにしても、必要な條件に過ぎないのだ。僕のこの信仰は性格的だ。僕を壞さなければ僕の信仰を壞す事は出來ない。こんな觀易い理窟をならべなければならない程、君の僕に對する洞察には缺陷がある。聰明な君にも血迷ふ時があるんだ。用心し給へ。

（BよりAへ）

一九一四、二、一七　東京

君がN子さんの兄であると云ふ一片の理由から、僕がN子さんと結婚したいと申出でたのに對して君は無關心と云ふ狂暴を示した。

僕は君を待たない。

N子さんにあてた同封の手紙をN子さんに渡してくれ給へ。君は可なりの沒理漢だが、N子さんにそれを渡さ

ない程、僕の人格を尊重しない事はよもやしまい。

（BよりAへ）　電報

一九一四、二、一七　東京

「NコサンヘノテガミトリケスYコサンノタンガンニヨル」

（AよりBへ）

千九百十四年二月十七日　仙臺

僕は君に眞相の告白を要求する。狂暴な態度を示すものは君等だ。N子は土偶(でく)ではない、僕は郵便脚夫ではない。僕はN子の人格を尊重するからこそ云ふんだが、君は彼女を弄(もてあそ)んだ。幸にして、電報は手紙より早く僕の手許に屆いて居たから、N子は實際手紙を讀んだのではないけれども、事實としてはN子は確かに弄ばれたのだ。僕はN子の兄として、正當な理由を知らない間は君に對して敵意を含む。

さうだ、僕は君の告白を必要としない。是れまでの非禮な事實が能辯に眞理を語つて居る。君はY子（以下抹殺）……恐ろしい〳〵。僕の頭は何故考へる能力を持つてゐるんだ。この頭は何故碎(くだ)けてしまはないんだ。愛人と友とを疑ふまでに僕を苦しめるのは君自身である事を忘れるなよ。君はこの事を些事(さじ)と思ひ込むと間違ふぞ。

（AよりBへ）電報

千九百十四年二月十九日午後七時　仙臺

「Yコケフキタ一二ニチタイザイアトフミ」

（AよりBへ）

千九百十四年二月二十日朝　仙臺

B兄、

僕は唯首を垂れてゐる。僕の呼吸の續けられてゐるのが不思議だ。Y子も僕の傍に首を垂れてゐる。二人は泣く事すら出來ない。取りあへず是れだけを報告する。

（AよりBへ）

千九百十四年二月二十日朝　仙臺

B兄、

Y子は、君にすら何事も打明けずに、昨日朝早く東京を發つたと云ふから、安心のために電報を打つた。それは落手してくれた事と思ふ。書留の短信も屆いたと思ふ。

昨夜は、二人とも、坐つたまゝで夜を明した。一時僕の頭は音を立てゝ壞れるやうにさへ思はれたが、今は却つて物凄い程に澄み切つてゐる。この機に乘じて總ての顚末を出來るだけ冷靜に公平に書きつゞらうと今筆を取

る。時計は十一時半で止つて居るが、陽の具合では九時頃だと思ふ。

昨日も僕は工場に行つた。而して狂氣のやうに働いてゐた。十時頃妹が一通の電報を持つて慌てゝかけ込んで來た。發信人のY子であるのを知つたN子の顏に現れた極度の不安は、すぐ僕を襲つた。妹は僕の顏を見た。僕は妹の顏を見た。而してその瞬間、妙に互に憐れみ合つてゐた。僕は出來るだけ心を鎭めながら、强ひて氣を落着けて、窓際まで行つて封を切つた。

「ケフユク、コクハクスル、ソノツモリデマツテ」と云ふ文句が讀まれた。僕は妹に、家に歸つてY子を迎へる支度をするやうに吩咐けて、頭から被つた埃を拂つて、兵隊の古外套を羽織つて一緒に工場を出た。別れる時、「何か御心配な事が出來たんぢやなくつて」と妹が云つた。「默つてろ、貴樣は家へ歸つて支度をすればそれでいゝんだ」さう僕は怒鳴つてしまつた。もう少し妹がぐづ／＼して居たら、亂暴を働いてゐたかも知れない。

一人になつてから停車場を目懸けて一目散に走つた。そこには勿論まだ彼女は着いで居なかつた。始めて氣が附いて、もう一度電報を讀み直さうと、ポッケットを探したら、用紙はいつの間にやら手で揉みくだかれて、油汗でぐつしより濡れてゐた。で、仕方なしに時間表を見ると、一番の急行でも、十二時過ぎでなければ仙臺には着かない事が判つて、すつかり力が拔けてしまつた。僕は奇妙に度々人とぶつかり合ひながら、停車場を出て、瓦斯會社の南側の土手に腰を下した。そこは人氣のない所だつた。今日も空は晴れ渡つて居るなとその時氣が附いた。風は身を切るやうに寒かつた。何んの告白だか知れないが、何しろ容易ならぬショックに堪へる準備をしなければならないと思つて、僕は氣を落着けようとした。片端から考へを纒めて行くつもりで、ふと氣が附くと、僕はぽかんとして、前に落ちて居る蜜柑の皮を見つめて居た。幾度やり直しても同じ事を繰返すばかりだ。而してその時は、それをさう癪にさはる事だと思つて居なかつた。そんな風にしてどの位時が過ぎたらう。

その中に、少しづゝ頭の隅の方に餘裕が出來て來て、僕は蜜柑の皮を瞬きもせずに見つめながら夢のやうに、Y子と會堂の別室で遇つた時の事を思ひ出してゐた。部屋の隅に置かれた日曜學校用の掛圖のけば／＼しい色が視角外にありながら、神經に感ぜられた。その心持までを僕は再現して見る事が出來た。表面は冷たい石像のやうに身動きもしないで――できないで――俯きながらY子が立つてゐる。僕はその前に立つてゐる。二人は言葉を待たないで、互の要求を十分に諒解し合つてゐる。僕は然し最善最美の言葉を語らねば氣がすまぬ。さうして二人の立つてるのは何たるいゝ事だらう。天使もそれを見たら微笑まずには居られない。僕の眼には、甘い哀しい涙がじわりと湧き上つた。その涙が眼の中にたまり切ると、一滴の玉となつて、冷え切つた頰にちらりと暖かみを覺えさせながら、音も立てずに土の中に沁み込んで行つた、僕は魂もとろけるやうになつて、この淡い樂しい哀しみにひたつてゐた。

哀しみは哀しみを生んで、涙の下る事が段々しげくなつて來た。而してそれが熱い苦い涙に代つて行つた。僕の前からはY子の淸淨な乙女の姿は何時か消えてしまつて、朦朧たる意識の中に、何等の意味もない暗黒が深まり出した。僕は降るやうな大空の光の許にゐながら、すつかり暗黒に包まれてしまつた。眞黑な絶望が僕を取りまいた。身動きも出來ない。何故Y子に遇つたんだ。僕は何故Y子に遇つたんだ。この一つの疑問に壓されて、僕は芝土手の上に石のやうに丸まつて呻いた。

それからやゝ暫く僕は生きながら死んで居た、死にながら生きてゐた。突然傍で鳴つた會社の汽笛に愕然として時間の世界に生れ出て、時計を見るともう十一時半だつた。然しその時計は昨日から卷かれなかつたので、時間の世界に住んでゐなかつた。それに氣が附くと、既にY子を見失つてしまつた僕は、せめて肉身のY子を見失ふまいとして又停車場に馳せもどつた。改札口からはこみ合つてぞろ／＼と旅客の出て來る所だつた。最後に出て

來る一群の殿り(しんがり)に、病に瘦せ、旅にやつれた、處女とは思はれぬ程暗いY子の姿を見附け出した時、僕は突然ぐつと後ろに引きもどされるやうに思ふと、極度の愛着と極度の憎惡とに、頭は八つ裂きにされたやうになつて、僕の前は眞暗(まつくら)になつてしまつた。

然し、場合は僕をY子の所まで引きずつて行つた。半ば上の空になつたと見えるY子の眼は、乞食のやうな僕の姿を驚き惘(あき)れたやうに、又落着き拂つてゐるやうに、ぢつと見た。その眼の繰出す言葉こそは、昔のそれとは似もつかぬものでありながら、眼そのものは、悲しくも昔のまゝの姿を變へてはゐなかつた。

ぎごちない挨拶を取りかはしてから、二人は連れ立つて歩いた。三丁ほど默つたまゝで歩いてから、僕は「Bは丈夫でゐますか」と、途方もない出鱈目を云つた。Y子は「えゝ」と滅茶苦茶な答へをした。二人はそれを憤つたり恥ぢたりした。それからは二人は默つたまゝで家に着いた。

入口に出迎へた妹の心配げな顏は、二人を見た瞬間に一入(ひとしほ)の青みを加へた。自分達の顏色は、妹が思つた以上の險惡さを持つてゐるなと僕は思つた。Y子はN子を見ると、姉らしくなつかしげに「貴女はN子さんでいらつしやいますね」と笑ひを含んでいはうとしたが、言葉が絶えるか絶えない中に、髮を震はして伏目(ふしめ)になつて泣き出した。N子はあんまりの意外に眼を見張つた。Y子は泣いたまゝで部屋に通つた。而して顏を疊にすり附けて、忍び泣きに泣き續けた。茶器を襖の蔭まで持つて來た妹は、そこに膝をついて這入るのを遠慮してゐる。悲慘な氣分がもう家中を一杯にしてしまつた。僕は默つてY子を見てゐる中に、一味の哀れを感じ出した。Y子は泣き續けてゐる。憐れみが段々いらだゝしさに變つて行くまで泣きつゞけてゐる。僕のいらだゝしさは、段々に怒りに變つていつた。然し怒鳴りつける氣にもなれないで、いきなり立つて亂暴に外套を脫いで、荒々しく釘にかけて、荒々しく坐り直した。Y子はそれに氣附きもしないやうに泣いてゐる。僕は、又默つて、Y子の震へる髮の

毛と細々とした背首とを見詰めてゐるよりしやうがなかつた。その中に怒りが又憐れみに移つて行つた。深い憐れみが——叫びも得しないで死んでいく一人子を唯見守る外に道の盡きた母の味はうと思はしい憐れみが、ひしひしと胸に逼つて來た。僕は鼻の奥と涙堂とにつき上げて來る或る者を幾度か嚥み下した——冷靜であれ、冷靜であれとすがり附くやうに心の中で祈りながら。

あきらめた、思ひ切つた、といふやうに、ハンケチを眼がしらに強く三度押しあてゝ、Y子が起き直つた時は、僕も稍ゝ氣が落着いてゐた。火鉢を中に置いて二人は向ひ合つた。手の翳されない火鉢は邪魔物のやうに、二人の間にあつた。Y子は暫く頭の中で云ひ出すべき言葉の筋を立てゝゐるやうだつたが、やがて少し震へを帶びた、然ししつかりした齒切れのいゝ言葉で話し出した。

「私は唯貴方に濟まないと存じます。是れまでの貴方のお心持は、我慢し切れない程つらくお察し申してをりましたのですけれども、私としては、今日まで何と申上げやうもなかつたので御座いますの。自分の心を考へても考へても、考へあぐんでをりました。でも、一昨日N子さんとの御結婚を取消していたゞくやうに無理にBさんにお願ひ申しました時、やうやく私は決心がつきましたから、それから昨夜おそくまでかゝつて、これだけのものを書いて、今朝暗い中に家を脫け出して參つたのです。こんなに亂暴な書き方でお恥かしいんですけれども、どうかお情けにお讀みになつて頂けますまいか。私は口をきくと泣き出してしまひさうで御座いますから。」

かう云つて、Y子は懷の中から、覺えのある薄綠色の書翰箋に細々と書いたものを取出して、僕の前に置いた。この他人行儀は尠からず僕に反感を起させたが、僕はそれを取上げて見ない譯には行かなかつた。それはY子が持つて歸つて直接君に見せるだらう。

…………………………………………

（Y子の手記）

A様、

自分でも知らなかつた心の中を申上げねばならぬ時が參りました。私はこんな事を申上げるより、死んだ方がいゝと思ふ位で御座いますけれども、この弱い體はまだ死なゝいで居ります。死なゝい限りは自分をいつはつて生きる事は如何しても出來ません。是れから書きます事にも、どうか私の誠實だけは認めて頂きたう御座います。貴方をお信じ申した者の書いたものだと云ふ事だけは、どうか〳〵、お認めなさつて下さいまし。

私は小さい時から、自分を可哀さうな子だと思ふ癖を拔く事が出來ないで居ましたが、十五六になると、未來に對して始終おど〳〵する悒鬱な心になつてしまひました。殊に男の方に向つては、理窟も何もなく恐ろしくのみ思ひました。登別で、二階から貴方の見ていらつしやるのに氣が附きました時でも、私は胸がひやりとする程薄氣味惡く存じました。何時か男の人が現はれ出で、私をこの上もつと深い不幸につき落すに違ひないと、ちやんと心の中で極めて居りました。祖父ですら、男である爲めに恐ろしさの餘り、譯もなくその言葉に逆つた事がよく御座います。神樣の事を伺ひました時でも、私は心の中で、神樣を男のやうに思ひまして、唯恐れに恐れました。

でも、登別を發つ三日前、私が誰にも氣附かれない所に身を匿して、庭で子供達を相手に遊んでいらつしやる貴方を、何時までも〳〵見て居りました事を、よもや貴方は御存じになりますまい。私が一番恥かしいと思つたのはその時で御座います。貴方が如何かして此方をお向きになる度に、私の胸は早鐘のやうに震へながら、それでも思ひ切つて其處を立退く事が出來ませんでした。部屋に歸つてから、祖父と顏を見合せる度に、何とも云へない心咎めを覺えましたが、見た事は如何しても忘れたく御座いませんでした。私はそれを心の奥に大事にしま

つて、そのまゝで過ごさうと存じました。夫婦と云ふやうな事は考へたゞけでも、もう恐ろしくつて堪りません。私は一生この事は私だけにして置かうと思ひました。でも明日此處を發つと祖父が申しました時は、私は居殘りたう御座いました。水害の事を楯にとつて、泣いてまで居殘りたいと申張りました。

教會で貴方と御約束を致しました時でも、本當は何とお答へしていゝやら存じませんでしたの。貴方が外の女の方と御一緒におなりになるのは、死んでもいやで御座いましたけれども、貴方の妻になつて、私の是れからの運命を、男の方に任せると云ふのは、考へても見られない程恐ろしう御座いましたから。

御婚約の式を擧げましてからの一週間は、私には忘れられません一週間で御座いました。その時、私は本當に貴方から離れられないと思ひ込むやうになりましたから、私の心は渦卷きの近所にある水のやうで御座いました。恐ろしい〳〵と思ひながら、私は貴方に吸ひ込まれて參りました。女に似合はぬやうな事を申すのをお許し下さい。私は今いつはり飾りを申してはなりませんから。その時私の心の中に、始めて性の欲望も目醒めまして、一人では如何しても滿す事の出來ない淋しさと苦しさと悲しさとを深く〳〵味ひ始めましたので、私の心は上の棚から急に下の棚におろされたやうに、深く暗くなりまさりました。私は神の御前に身も世もあられぬ程恥ぢ苦しみ而して又故のやうな私になりたいと泣いて祈つた事も御座いましたが、それぱかりは如何する事も出來ないで、それからは裏表のある心になりました。貴方とお別れ致します時、私がヒステリーのやうに悲觀的になりまして、貴方がひどくおたしなめになつた事をお覺えでいらつしやいますか。私は裏切られたやうに思ひ入つたので御座います。女の本能が、世の中の習慣など申す事を忘れさせたので御座います。でもそればかりでは御座いませんでした。あの時、私は譯なしにもう貴方とは永久にお別れしなければならないと感じましたので御座います。今から思ふとそれが不思議でなりませんけれども、私の思ひつめた一心には、將來の事までが朧ろげながら通じた

のでも御座いませうか。貴方を上野にお送りして、停車場を出る時、私の心は「もう〳〵おしまひ〳〵」と云つて泣いて居りました。

この妙な心持は、何時まで經つても拔けませんでした。私は、それから、前にも増して未來を恐ろしがる女になつて、寢られない晩だの、頭の痛み通す晝などが絶えず續くやうになりました。その中、お父上のお亡くなりになつたお知らせが參りました、あの恐ろしい破産のお知らせが參つたり致しました。私は直ぐにも飛んで行つて貴方と御一緒に泣きたいと思つてぢれましたが、もうその時には弱い體は恐ろしい病を起して居りましたし、母が何處までも私の參る事を承知致しませんでした。牧師も却つて邪魔になるばかりだと申されました。私は悶えながら、ぢつと家に籠つて、貴方のお上をのみ案じて居りました。けれども此處でも私は正直に申上げねばなりません。私の心の奥底には、仙臺に參りたくない不思議な心が隱れて居りました。うつかり仙臺に參れば、今までよりはもつと〳〵悲しい恐ろしい事がきつと起ると云ふ事が何んとなく感ぜられたので御座います。唯貴方の尊い御手紙をよく讀んで、自分で美しく高くなるより仕方がないと存じました。どんなに悲しい心になつた時でも、貴方の御手紙をいたゞいた暫くは急に夜が明けたやうに心がさつぱりして、すぐ御返事が出したくなりました。

こんな風にして、夏から秋に、秋から冬になつて參ります間に、貴方の仰有る心の生長と云ふ事にも、そろそろ氣が附いて參りました。唯何んと云ふ事なしに、男を恐れる心が段々とれて行くにつれて、幾分づゝか女の力を感じて參るやうになりました。私は心の中で、私の實の母や、義理の母のした事を考へて見ました。義理の母に對しては申しやうのない憎しみ、あんな女があればこそ、女は何時までも恥を曝して居なければならないのだと云ふ憎しみを抱くやうになり、實の母に對しては、眼を覺さずに、男を恐れ憎みながらぐづ〳〵に過ごした哀

れさを思やうになりました。それでも私は、私として如何すればいゝのか身近な事になると少しも判りませんでした。唯貴方のお家の事を伺つて、母が急に疎遠に疎遠にとたくらんだり致しますと、私は前のやうに、唯おとなしくはして居られなくなりました。おとなしくして居てはいけないのだと云ふ事位が、わかるやうになりました。

今年になつてから、急にB様が小笠原島からお歸りになりました。私はB様と書いたゞけでもう胸が裂けるやうで御座います。

B様は日曜學校に來て、二三度私達にお話をなさつて下さいましたので、その頃からお顔は存じて居りました。私は、その頃、男の中でもB様位恐ろしいと思ひ、憎らしいと思つた方はありませんでした。貴方がB様の親友だと伺つた時には、貴方さへ一しほ恐ろしく思はれました。でも貴方にはおやさしいと思ふ所が御座いました。B様はその頃は唯こはい方のやうにばかり思ひました。貴方とお約束を致す前、無名の御手紙が二度ほど私の所に參りました。が、如何いふ譯か、それがB様から參つた事を私はすぐ知りました。その御手紙の中には、少しの飾り氣もなく、貴方のお性質や貴方のお思召が書いて御座いました。私はそれを讀んでから、決心して貴方の御手紙を、殘らず牧師にお見せ申しましたので御座います。B様の御手紙が御座いませんでしたら、私は貴方から御手紙を頂く度に、唯々男を恐ろしいものとのみ思ひつのつた事で御座いませう。B様の仰有る事は、何んでも背けないやうな氣が致してなりませんでしたから、B様が私の家にお出でになると伺つた時には、人知れず心を痛めました。昔の癖が拔けなかつたので御座います。

お引越しなさりたてのB様は、可なり傍若無人で、御自分の思つた通りになさらなければ、氣がおすみにならないのです。私はお蔭で、いくらか氣を置くのがゆるみました。B様が私の家にお出でになると云ふから、私は

N子さんとお結婚なされればいゝと存じました。でも私は始終B様をお憚り申して、心の底には反抗すら持つて居りました。

　ある時――それは雨の降る日で御座いました――B様がしみ〴〵私に色々なお話をなさつた事が御座いました。B様は固よりお氣附きにはならなかつたので御座いますが、その時私は突然B様を戀するやうになつたので御座います――許して下さいまし。こんな明らさまな申し方をするのを許して下さいまし。どんなに柔かく申しても申さねばならぬ事は同じで御座います――私はその時魔にあやつられたやうに、すら〴〵とB様に心の中をありつたけ申してしまひました。でもB様に對して私の戀をお打明け申したのでは御座いません。B様はまだ私から露ほどもそんな事はお聞きになつて居りません。私がその時からB様を戀するやうになつたと申しますのも、今から考へての上で御座います。その時には――神様に誓言致します――私は貴方の妻だと極めて居りました、思つて居りました。

　B様のお話が身にしめばしむ程、私は紙をはがすやうに快く、自分の目醒めて行くのが判りました。B様をお知り申すやうになつてから、私の心に起る性慾にも、不思議に自然な感じが添つて後ろめたさを覺えなくなりました。私の信仰なぞも、戸板を裏がへすやうに變つてしまひました。世の中の嘘いつはりと、本當とが、はつきり眼にうつるやうになりました。けれどもこんな事は、今からその時を思ひ返して申すので御座います。その時には、私は、一方には何處までも貴方の妻と極めてかゝつて、B様から來る不思議な力を命がけで押し戻さうとして居りましたので御座います。是れから本當に苦しい日が續きました。貴方から御手紙を頂くたびに、力強い援兵を頂いたやうにも思ひますが、苦しい枷をかけられたやうな心持も、胸の何處かに添ふやうになりました。それだと申して、私は露ほどでも貴方をお敬ひ申す事を怠りましたか。責めてはさうでもあればと今から思ひま

す。その頃からB樣も何か屈託勝ちにおなりになりました。私共は別々に苦しみ通しました。私が如何かしてB樣から遠ざかる事が出來たと思ふと、B樣の御病氣は屹度お惡くおなりになります。B樣の屈託が少し薄らいだと思ふと、私の心は堪へ得られない淋しさにさいなまれて喀血をしたり熱を出したり致しました。でも、その頃私ははつきりさうとは氣附いて居りませんでした。貴方は私の誠實を信じて下さります。私は體の續くだけ、心の續くだけ戰ひました。私は苦しまぎれにB樣にN子さんと結婚なさる事を幾度もお勸め致しました。それは私の我儘です。N子さまの未來を思つてゞは御座いません。死んでもこんな事をB樣に申上げまい、何處までも何處までも私はA樣のものだ、と思ひつめました。何にせよ私はB樣から、のがれようと藻掻いたので御座います。B樣もN子さまとの御結婚を御決心なさいました。でも私がその後でひどい熱にかゝりますと、直ぐそれをお取消しになりました。貴方からは、手紙の度毎に私の心を打明けてよこせとお責めになります。私にお答への出來る譯が御座いません。貴方のお苦しみ、お一人の御老母をお抱へになり、朝から晩まで生活の爲めに勇ましくお戰ひになりながら、私を唯一つの光明のやうに思つて下さる貴方が何んとなくお感じなさるその苦しみを、お察し申上げますと、私さへ死んでしまへばと存じます事が幾度御座いましたらう。ほんとに死ぬ方が樂でも御座いました。然し私は、もう前のやうに、いゝ加減に事を切り上げては置けない人間になつて居りました。生きて居る間はどんな苦しみの中にも生きようと思ふだけには力を得て居りました。B樣と私は苦しむ程互に執着して參ります。いゝえ、私は苦しむ程執着して參ります。で、又もやB樣にN子さまと御結婚なさるやうに强ひてお勸め致しました。B樣は今度はこの前以上の御決心で、貴方にお手紙をお書きになりました。

私は、初めて、眞空の中から救ひ出された人のやうな息をつきました、けれどもそれと一緒にもう一つ深い眞實にぶつかつてしまひました。私は一體如何いふ心でA樣の所に行く事が出來る。B樣は又一體如何云ふお心で

N様をお迎へになるのだらう。私はさう思ふと、卑しい、醜い、私の義理の母にも劣つた心構へを、自分の心の中に見付けてしまひました。それからの私は眠りを知りません。病氣を知りません。一瞬も一秒も休まないで、この事ばかりを考へ續けました。而して、とう／＼、もう一度強ひてB様にお願ひして、貴方にN子さまの事の取消しの電報を打つて頂きました。而してぢかに貴方にお目に懸つて、何もかも告白致さうと心を定めました。心が急いで亂れて居りますから、申上げた事に前後もあり、過不足もあると存じますが、大まかな事はお判り下さつた事と存じます。

私の心はB様を戀して居ると申す事を告白致します。

私は貴方を卑しんで居りますのでは御座いません。昔も今も、貴方は私にとつて尊い淸い強い男の方でいらつしやいます。私は永久に深い尊敬を捧げます。それを許して頂きたいと存じます。けれども私のいつはらざる性格は貴方を尊敬し、B様を戀させます。

私は貴方と結婚の御約束を致して居ります。御約束はお互ひの事で御座いますから、貴方がその約束を果たせと仰有りますれば、仕方が御座いません。私は虚ろな心を抱いて、貴方へ參る外はないと存じます。

私はB様を戀して居りますけれども、一言もそれを申上げた事はなく、又戀愛の關係にある男女の間にのみ許される擧動も、勿論致しては居りません。

N子さんに內情をよくお話し下さいまして、どうか誤解のないやうにして上げて頂きたう御座います。若しお許し下さるならば、私が直々にお詫びを申上げたう御座います。

Y子

A様

僕の眼は、讀みながら、紙の上を、幾度か働きをせずに、走り廻つた。前にもどつては讀み直し讀み直して、仕舞ひまで來た時には日が暮れてゐた。

Y子から電報を受けた時でも、彼女を家に迎へた時でも、「もう終結が來た」と云ふ覺悟の裏に、せめては蟻の這ひ出る程の餘裕でもあれかしと祈つた事は、總て空頼みになつてしまつた。運命は眞向正面から暗黑に僕にぶつかつた。君の最近の手紙がひし〳〵と思ひ合はされる。

これを讀む君に、總ての謎は解けたらう。同樣に今僕には總ての謎が解けた。君等のこれまでの手紙は一つ一つ絕大な意味を含んで逼つて來る。僕は笑ふべき時に怒つて居た、怒るべき時に笑つてゐた。小弱な自分の力が唯泣笑される、憫泣される。

僕にはY子の心中がよく理解出來る。尤もだと思ふ。而して、よくも危い道を踏み迷はないで、君以上の所まで突き進んで行つたと思ふ。Y子の覺醒がも少し低級であつたらば！　Y子の行爲に些かの缺點だにあり得たならば！　僕が一層卑しく生れてゐたらば？　そこにはまだY子を僕の胸に引戻すべき道があつたらうに。

N子がそつと這入つて炭をついで行つた後で、僕は思ひ切つて顏を上げた。而して、

「よく解りました。僕としては何んにも云ふ事はありません」

と感心にきつぱり云ひ切つた。Y子も屹と顏を上げて、僕の言葉を聞いて居たが、見る間にほろ〳〵と熱い涙がその頰を傳つて流れた。僕の心は却つてしいんと冷え切つた。その冷やかさの中に、僕の最後の嫉妬と自尊とが宿つた。僕は今それを恥ぢて居る。

母が折々咳嗽をする外には、女達二人は、内容は判らぬながら、事の重大に怯ぢ怖れて、小さくなつて息を殺

してゐる。僕達二人は唯對ひ合つて坐りつゞけた。時々何事か思ひ出して、Y子の肩をゆるがして竊やかに泣く外に、動くものとてはなく、そのまゝ夜が更けてやがて夜が明けた。二人は默つたまゝで、淋しく鈍く白んで行く曉の光を見た。

今夜Y子は君の許に歸り行くであらう。僕は君の宣言を待つ。

序に云ふがY子はN子に遇つた。この二人の女性の悲しい會見は、委しく報ずる必要はあるまい。N子は兎も角もY子を許すと云つた。

（BよりAへ）

一九一四、二、二一夜　東京

運命を支へようと促した僕が非だつた。

運命の波頭は容赦なく僕等三人を眞實の巖頭に打ちつけた。誰かそれを逃れ得ようぞ。

三人は傷いた。痛ましく傷いた。君も泣かねばならぬ。Y子も泣かねばならぬ。僕も始めて誠の涙と云ふものを知つて泣く。

萬人は三人を見て聲を擧げて笑ふ。不節度、無恥、無謀、輕佻、沒道義。

裸かなる眞實、いつはらざる誠實を三人は知つた。不倶戴天の敵であり、同時に情を等しうする殉教者たる三人は、過たず踏らはず各ゝの道を行かねばならぬ。

君の敗北の上に祝福あれ。

Y子の甦生の上に同情あれ。

僕の勝利の上に悲涙あれ。

僕はY子に於て正しき僕の complement を見出した。この吉報を第一に君に捧げる。

僕はY子と共に、來るべき總ての戰を雄々しく戰ひ、回避する事なしに戰ふ事を誓ふ——僕等二人の爲めに、君の爲めに、而して僕等の哺育し行くべき人生の爲めに。

黄金の如き君の友情、君の實質上の補助、君の信賴、君の苦境、N子さんの好意——是等の總てを僕は敢て犧牲にする。それは僕が如何にY子を愛し尊べるかの左券である。

然し僕等の羸弱な健康は、恐らくは僕等を永く戰場に立たしめぬであらう。人生の事業は重く且つ遠い。君は悲しみを負ひながら、僕等の斃れる所に立上らねばならぬ。悲しき、然し勇ましかるべき君の未來に對する僕等の盡きざる好意を受けてくれ給へ。

宣言は盡きた。劍を秉るべき時が來た。

（AよりBへ）

千九百十四年二月二十三日朝　仙臺

B兄、

Y子、

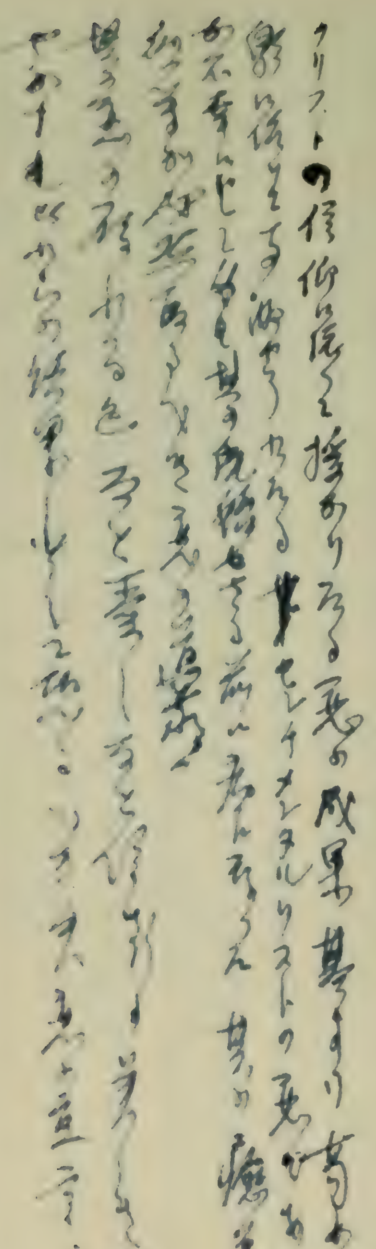
病の重り行く母と、失戀の妹との住む小さい巢から、……

僕の机の上には、今、君等の手紙と共に、使ひ古した時計が置いてある。

時計は持主に同情するやうに十一時半でとまつて居る。馬鹿な奴だ。だが何んだか可哀さうな奴だ。

僕は、今、不思議にも、この時計のゼンマイを卷く氣になれない。
心よ。忍んで待て。
黎明の空の端に、二月二十三日の太陽が今昇り始めた。
僕はそれを見つめて居る。

（鎌倉にて最初の稿を起し鎌倉にて最後の稿を終る）
（一九一五年七月——十二月、白樺所載）



お末の死

一

お末はその頃誰から習ひ覺えたともなく、不景氣と云ふ言葉を云ひ〳〵した。

「何しろ不景氣だから、兄さんも困つてるんだよ。おまけに四月から九月までにお葬式を四つも出したんだもの」

お末は朋輩にこんな物の言ひ方をした。十四の小娘の云ひ草としては、小ましやくれて居るけれども、假面に似た平べつたい、而して少し中のしやくれた顔を見ると、側で聞いてゐる人は思はずほゝゑませられてしまつた。

お末には不景氣と云ふ言葉の意味は、固よりはつきりは判つて居なかつた。唯その界隈では、誰でも顔さへ合はせれば、さう挨拶しあふので、お末にもそんな事を云ふのが時宜にかなつた事のやうに思ひなされてゐたのだつた。尤もこの頃は、あのこつ〳〵と丹念に働く兄の鶴吉の顔にも快からぬ黑ずんだ影が浮んだ。それが晩飯の後までも取れずにこびりついて居る事があるし、流元で働く母がてつくひ（魚の名）のあらを側にどけたのを、黑にやるんだなと思つてゐると又考へ直したらしく、それを一緒に鍋に入れて煮てしまふのを見た事もあつた。さう云ふ時にお末は何んだか淋しいやうな、後から追ひ迫るものでもあるやうな氣持にはなつた。なつたけれども、それと不景氣としつかり結び附ける程の痛ましさは、まだ持つてゐよう筈がない。

お末の家で四月から追つかけ〳〵死に續いた人達の眞先きに立つたのは、長病ひをした父だつた。一年半も半身不隨になつて、どつと臥つたなりであつたから、小さな床屋の世帶としては、手にあまる重荷だつた。長命を

させたいのは山々だけれども、齢も齢だし、あの體では所在もないし、手と云つてはねつから屆かないんだから、あゝして生きてゐるのが却つて因業だと、兄は來る客ごとにお世辭の一つのやうに云ひ慣はして居た。極く一克な質で尊大で家一杯ひろがつて我儘を通して居た習慣が、病みついてからは更に募つて、家のものに一日三界あたり散らすので、末の弟の哲と云ふのなぞは、何時ぞや母の云つた惡口をそのまゝに、父の面前で「やい父つちやんの鼻つまみ」とからかつたりした。病人はそれを聞くと病氣も忘れて床の上で跳り上つた。果てはその荒んだ氣分が家中に傳はつて、互に睨み合ふやうな一日が過ごされたりした。それでも父が居なくなると、家の中は楔がゆるんだやうになつた。どうかして思ひ切り引きちぎつてやりたいやうな、氣をいら〳〵させる喘息の聲も、無くなつて見るとお末には物足りなかつた。父の背中をもう一度さすつてやりたかつた。大地こそ雪解の惡路なれ、からつと晴れ渡つた青空は、氣持よくぬくまつて、いくつかの凧が窓のやうにあちこちに嵌められて居る或る日の午後に、父の死骸は小さな店先から擔ぎ出された。

その次に亡くなつたのは二番目の兄だつた。ひねくれる事さへ出來ない位、氣も體も力のない十九になる若者で、お末にはこの兄の家に居る時と居ない時とが判らない位だつた。遊び過ごしたりして小言を待ち設けながら敷居を跨ぐ時なぞには殊に、誰と誰とが家に居て、どう云ふ風に坐つて居ると云ふ事すら眼に見えるやうに判つて居たけれども、この兄だけは居るやら居ないやら見當がつかなかつた。又この兄の居る事は何んの足しにも邪魔にもならなかつた。誰か一寸まづい顏でもすると、自分の事のやうにこの兄は座を外して、姿を隱してしまつた。それが脚氣を煩つて、二週間程の間に眼もふさがる位の水腫れがして、心臟痲痺で誰も知らないうちに亡くなつて居た。この弱々しい兄がこんなに肥つて死ぬと云ふ事が、お末には可なり滑稽に思はれた。而してお末は平氣でその翌日から例の不景氣を云ひふらして歩いた。それは北海道にも珍らしく五月雨じみた長雨がじと〳〵

と薄ら寒く降り續いた六月半ばの事だつた。

二

八月も半ば過ぎと云ふ頃になつて、急に暑氣が北國を襲つて來た。お末の店もさすがにいくらか景氣づいて來た。朝早く隣りの風呂屋で風呂の栓を打ちこむ音も乾いた響きをたてゝ、人々の軟らかな夢をゆり動かした。晴天五日を打つと云ふ東京相撲の畫びらの眼ざましさは、お末はじめ近所合壁の少年少女の小さな眼を驚かした。札幌座からは菊五郎一座のびらが來るし、活動寫眞の廣告は壁も狹しと店先に張りならべられた。父が死んでから、兄は兄だけの才覺をして店の體裁を變へて見たりした。而してお末の非常な誇りとして、表戸が青いペンキで塗り代へられ、球ボヤに鶴床と赤く書いた軒ランプが看板の前に吊された。おまけに電燈がひかれたので、お末が嫌つたランプ掃除と云ふ役目は煙のやうに消えて無くなつた。その代り今年からは張物と云ふ新しい仕事が加へられるやうになつたが、お末は唯もう眼前の變化を喜んで、張物がどうあらうと構はなかつた。

「家では電燈をひいたんだよ、そりや明るいよ、掃除もいらないんだよ」

さう云つて小娘の間に鐵棒を引いて歩いた。

お末の眼には父が死んでから兄が急にえらくなつたやうに見えた。店をペンキで塗つたのも、電燈をひいたのも兄だと思ふと、お末は如何にも賴もしいものに思つた。近所に住む或る大工に片づいて、可愛いゝ二つになる赤坊をもつた一番の姉が作つてよこした毛繻子の襷をきりゝとかけて、兄は實體な小柄た體をまめ〳〵しく動かして働いた。兄弟の誰にも似ず、まる〳〵と肥つた十二になるお末の弟の力三は、高い齒の足駄を器用に履いて、お客のふけを落したり頭を分けたりした。客足も夏に向くと段々繁くなつて來る。夜も晩くまで店は賑はつて、

笑ひ聲や將棋をうつ音が更けてまで聞こえた。兄は何處までも理髮師らしくない、おぼこな態度で客あしらひをした。それが却つて客をよろこばせた。

斯う華やか立つた一家の中で何時までもくすぶり返つてゐるのは母一人だつた。夫に先き立たれるまでは、口小言一つ云はず、はき〳〵と立ち働いて、病人が何か口やかましく註文事をした時でも、默つたまゝでおいそれと手取早く用事を足してやつたが、夫はそれを餘り喜ぶ風は見えなかつた。却つて病死した息子なぞから介抱を受けるのを樂しんで居る樣子だつた。この女には何處か冷たい所があつたせゐか、暖かい氣分を持つた人を、行火でも親しむやうに親しむらしく見えた。まる〳〵と肥つた力三が一番祕藏で、お末はその次に大事にされて居た。二人の兄などは疎々しく取りあつかはれて居た。

父が亡くなつてからは、母の樣子はお末にもはつきり見える程變つてしまつた。今まで何事につけても滅多に心の裏を見せた事のない氣丈者が、急におせつかいな愚痴つぽい機嫌買ひになつて、好き嫌ひが段々はげしくなつた。總領の鶴吉に當り散らす具合などは、お末も見て居られない位だつた。お末は愛せられて居る割合に母を好まなかつたから、時々はこつちからもすねた事をしたり云つたりすると、母は火のやうに怒つて火箸などを取り上げて店先まで逐ひかけて來るやうな事があつた。お末は素早く逃げおほせて、他所に遊びに行つて他愛もなく日を暮して歸つて來ると、店の外に兄が出て居て待つて居たりした。茶の間では母がまた口惜し泣きをして居た。而してそれはもうお末に對してゞはなく、兄が家の事も碌々片づかない中に、かみさんを迎へる算段ばかりして居ると云ふやうな事を毒々しく云ひつのつて居るのだつた。かと思ふとけろつとして、お末が歸ると機嫌を取るやうな眼付をして、夕飯前なのも構はず、店に居る力三もその又下の跛足な哲も呼び入れて、何處にしまつてあつたのか美味しい煎餠の馳走をしてくれたりした。

それでもこの一家は近所からは羨まれる方の一家だつた。鶴さんは氣がやさしいのに働き手だから、いまに裏店から表に羽根をのすと皆んなが云つた。鶴吉は實際人の蔭口にも讃め言葉にも耳を假さずにまめ〳〵しく働きつゞけた。

三

八月の三十一日は二度目の天長節だが、初めての時は諒闇でお祝ひをしなかつたからと云つて、鶴吉は一日店を休んだ。而して絕えて久しく構はないであつた家中の大掃除をやつた。普段は鶴吉のする事とさへ云へば妙にひがんで出る母も今日は氣を入れて働いた。お末や力三も面白半分朝の涼しい中にせつせと手助けをした。棚の上なぞを片付ける時には、まだ見た事もないものや、忘れ果てゝ居たものなどが、ひよつこり出て來るので、お末と力三とは塵だらけになつて隅々を尋ね廻つた。

「ほれ見ろやい、末ちやんこんな繪本が出て來たぞ」

「それや私んだよ、力三、何處へ行つたかと思つて居たよ、おくれよ」

「何、やつけえ」

と云つて力三は惡戲者らしくそれを見せびらかしながらひねくつて居る。お末はふと棚の隅から袂糞のやうな塵をかぶつたガラス壜を三本取出した。大きな壜の一つには透明な水が這入つて居て、殘りの大壜と共口の小壜とには三盆白のやうな白い粉が這入つて居た。お末はいきなり白い粉の這入つた大壜の蓋を明けて、中のものをつまんで口に入れる假爲をしながら、

「力三是れ御覽よ。意地惡にはやらないよ」

と云つて居ると、突然後ろで兄の鶴吉が普段にない鋭い聲を立てた。
「何をして居るんだお末、馬鹿野郎、そんなものを嘗めやがつて……嘗めたのか本當に」
あまりの權幕にお末は實を吐いて、嘗める假僞をしたんだと云つた。
「その小さい壜の方を耳の垢ほどでも嘗めて見ろ、見て居る中にくたばつて仕舞ふんだぞ、危ねえ」
「危ねえ」と云ふ時どもるやうになつて、兄は何か見えない恐ろしいものでも見つめるやうに怖い眼をして室の内を見廻した。お末も妙にぎよつとした。而してそこ〳〵に踏臺から降りて、手傳ひに來てくれた姉の兒を引きとつておんぶした。

晝過ぎに力三は裏の豐平川に神棚のものを洗ひに出された。暑さがつのるにつれて働くのに厭きて來たお末は、その後からついて行つた。廣い小砂利の洲の中を紫紺の帶でも捨てたやうに流れて行く水の中には、眞裸かになつた子供達が遊び戲れて居た。力三はそれを見るとたまらなさうに眼を輝かして、洗物をお末に押しつけて置いたまゝ、友と呼びかはしながら水の中へ這入つて行つた。お末はお末で洗物をするでもなく、川柳の小蔭に腰を据ゑて、ぎら〳〵と光る河原を見やりながら、背の子に守り唄を歌つてやつて居たが、段々自分の歌に引き入れられて、ぎごちなさゝうに坐つたまゝ、二人とも他愛なく眠入つてしまつた。

ほつと何かに驚かされて眼をさますと、力三が體中水にぬれたまゝでてら〳〵光りながら、お末の前に立つて居た。手には三四本ほど、熟し切らない胡瓜を持つて居た。
「やらうか」
「毒だよそんなものを」
然し働いた擧句、ぐつすり睡入つたお末の喉は焼け付く程乾いて居た。札幌の貧民窟と云はれるその界隈で流

行り出した赤痢と云ふ恐ろしい病氣の事を薄々氣味惡くは思ひながら、お末は力三の手から眞青な胡瓜を受取つた。背の子も眼をさましてそれを見ると泣きわめいて欲しがつた。

「うるさい子だよてば、ほれツ喰へ」

と云つてお末はその一つをつきつけた。力三は呑むやうにして幾本も食つた。

四

その夕方は一家珍らしく打揃つて賑はしい晩食を食べた。今日は母もいつになくくつろいで、姉と面白げに世間話をしたりした。鶴吉は綺麗に片づいた茶の間を心地よげに見廻して、棚の上などに眼をやつて居たが、その上に載つて居る藥壜を見ると、朝の事を思ひ出して笑ひながら、

「危いの怖いのつて、子供にはうつかりして居られやしない。お末の奴、今朝あぶなく昇汞を飲む所さ……あれを飲んで居て見ろ、今頃はもうお陀佛様なんだ」

とさも可愛げにお末の顔をぢつと見てくれた。お末にはそれが何とも云はれない程嬉しかつた。兄であれ誰であれ、男から來る力を嗅ぎわける機能の段々と熟して來るのをお末はどうする事も出來なかつた。恐ろしいものだか、嬉しいものだか、兎に角強い刃向ひも出來ないやうな力が、不意に、ぶつかつて來るのだと思ふと、お末は心臓の血が急にどき〳〵と湧き上つて來て、かつとはち切れるほど顔のほてるのを覺えた。さう云ふ時のお末の眼つきは鶴床の隅から隅までを春のやうにした。若しその時お末が立つて居たら、いきなり坐りこんで、哲でも居るとそれを抱きかゝへて、うるさい程頰ずりをしたり、締め附けたりして、面白いお話をしてやつた。又若し坐つて居たら、思ひ出し事でもしたやうに立上つて、甲斐々々しく母の手傳ひをしたり、茶の間や店の掃除を

したりした。
　お末は今も兄の愛撫に遇ふと、氣もそは／＼と立上つた。而して姉から赤坊を受取つて、思ひ存分頬ぺたを吸つてやりながら店を出た。北國の夏の夜は水をうつたやうに涼しくなつて居て、青い光をまき散らしながら夕月がぽつかりと川の向うに上りかゝつて居た。お末は何んとなく歌でも歌ひたい氣分になつていそ／＼と河原に出た。堤には月見草が處まだらに生えて居た。お末はそれを折り取つて燐のやうな蕾をながめながら、小さい聲で「旅泊の歌」を口ずさみ出した。お末は顔に似合はぬいゝ聲を持つた子だつた。

「あゝ我が父母いかにおはす」

と歌ひ終へると、花の一つがその聲にゆり起されたやうに、眠むさうな花びらをじわりと開いた。お末はそれに興を催して歌ひつゞけた。花は歌聲につれて音をたてんばかりにする／＼と咲きまさつていつた。

「あゝ我がはらから誰と遊ぶ」

　ふと薄寒い感じが體の中をすつと拔けて通るやうに思ふと、お末は腹の隅にちくりと針を刺すやうな痛みを覺えた。初めは何んとも思はなかつたが、それが二度三度と續けて來ると突然今日食べた胡瓜の事を思ひ出した。胡瓜の事を思ひ出すにつけて、赤痢の事や、今朝の昇汞の事がぐら／＼と一緒くたになつて、頭の中をかき廻したので、今までの透きとほつた氣分は滅茶苦茶にされて、力三も今時分はきつと腹痛を起して、皆んなに心配をかけて居はしないかと云ふ豫感、さては力三が胡瓜を食べた事、お末も食べた事を苦しまぎれに白狀して居はしないかと云ふ不安にも襲はれながら、恐る／＼家に歸つて來た。と、ありがたい事には力三は平氣な顔で兄と居相撲か何か取つて、大きな聲で笑つて居た。お末はほつと安心して敷居を跨いだ。

　然しお末の腹の痛みは治らなかつた。その中に姉の膝の上で眠入つて居た赤坊が突然けたゝましく泣き出し

た。お末は又ぎよつとしてそれを見守つた。姉が乳房を出してつき附けても飮まうとはしなかつた。家が違ふからいけないんだらうと云つて姉はそこ〳〵に歸つて行つた。お末は戸口まで送つて出て、自分の腹の痛みを氣にしながら、赤坊の泣き聲が涼しい月の光の中を遠ざかつて行くのに耳をそばだてゝ居た。

お末は横になつてからも、何時赤痢が取つゝくかと思ふと、寢ては居られない位だつた。力三は遊び疲れて、死んだやうに眠ては居るが、何時眼をさまして腹が痛いと云ひ出すかも知れないと云ふ事まで氣をまはして、何時までも暗い中で眼をぱちくりさせて居た。

朝になつて見るとお末はやつぱり何時の間にか寢入つて居た。而して昨日の事はけろりと忘れてしまつて居た。その日の晝頃突然姉の所から赤坊が大變な下痢だと云ふ知らせが來た。孫に眼のない母は直ぐ飛んで行つた。が、その夕方可愛いゝ赤坊はもうこの世のものではなくなつて居た。お末は心の中で震へ上つた。而して急に力三の擧動に恐る〳〵氣を附けだした。

朝からぶつツとして居た力三は、夕方になつてそつと姉を風呂屋と店との小路に呼び込んだ。而して何を入れてゐるのか、一杯ふくれあがつてゐる懷ろを探つて白墨を取出して、それではめ板に大正二年八月三十一日と繰返して書きながら、

「己りや今朝から腹が痛くつて四度も六度もうんこに行つた。お母さんは居ないし、兄やに云へばどなられるし……末ちやん後生だから昨日の事默つて居ておくれ」

とおろ〳〵聲になつた。お末はもうどうしていゝか判らなかつた。力三も自分も明日位の中に死ぬんだと思ふと、頼みのない心細さが、ひし〳〵と胸に逼つて來て、力三より先に聲を立てゝ泣き出した。それが兄に聞こえた。

お末はそれでもその後少しも腹痛を覺えずにしまつたが、力三はどつと寢ついて猛烈な下痢に攻めさいなまれた擧句、骨と皮ばかりになつて、九月の六日には他愛なく死んでしまつた。

お末はまるで夢を見てゐるやうだつた。續けて祕藏の孫と子とに先立たれた母は、高度のヒステリーにかゝつて、一時性の躁狂に陷つた。死んだ力三の枕許に坐つてきよろつとお末を睨み据ゑた眼付は、夢の中の物の怪のやうに、總てがぼんやりした中に、はつきりお末の頭の中に燒き附けられた。

「何か惡いものを食べさせて、二人まで殺したに、手前だけしやあ／＼して居くさる、覺えて居ろ」

お末はその眼を思ひ出すと、何時でも是れだけの言葉をまざ／＼と耳に聞くやうな氣がした。

お末はよく露地に這入つて、力三の遺した白墨の跡を指の先でいぢくりながら淋しい思ひをして泣いた。

五

折角鶴吉の骨折りで、泥の中から頭を持ち上げかけた鶴床は、他愛もなくずる／＼と元にも增した不景氣の深みに引きずり込まれた。力三のまる／＼肥えた顏のなくなつた丈けでも、この店に取つては致命的な損失だつた。ヒステリーは治つたが、左の口尻がつり上つたきりになつて、底意地惡い顏付に見える母も、頰だけは美しい血の色を見せながら、痩せて蠟のやうな皮膚の色の兄も、跛足でしなびた小さい哲も、家の中に暖かみと繁盛とを齎らす相ではなかつた。病身ながら、鶴吉は若い丈けに氣を取り直して、前よりも勉强して店をしたが、籠められるだけの力を籠め切つて餘裕のない樣子が見るに痛ましかつた。姉は姉で、お末に對して殊に怒りつぽくなつた。

その中にお末だけは力三のないのをこの上なく悲しみはしたけれども、内部からはち切れるやうに湧き出て來

る命の力は、他人の事ばかり思つて居させなかつた。露地のはめ板の白墨が跡かたもなくなる時分には、お末は前の通りな賑やかな子になつて居た。朝なんぞ東向きの窓の所に後ろを向いて、唱歌を歌ひながら洗物をして居ると、襦袢と帶との赤い色が、先づ家中の單調を破つた。物ばかり喰つてしかたがないからと云つて、黒と云ふ犬を皮屋にやつてしまはうときめた時でも、お末はどうしてもやるのを厭がつた。張物と雜巾さしとに精を出して收入の足しにするからと云つて、黒の頸を抱いて離さなかつた。

お末は實際まめ〳〵しく働くやうになつた。心の中には、どうかして胡瓜を食べたのを隱して居る償ひをしようと云ふ氣がつきまとつて居た。何より樂しみに行きつけた夜學校の日曜日の會にも行くのをやめて、力三の高下駄を少し低くしてもらつて、それをはいて兄を助けた。眠に這入りさうに哲も可愛がつてやつた。哲はおそくなつてもお末の寢るのを待つて居た。お末は仕事をしまふと、白い仕事着を釘に引つかけて、帶をぐる〳〵と解いて、いきなり哲に添寢をした。鶴吉が店を片づけながら聞いて居ると、お末のする昔話の聲がひそ〳〵と聞こえて居た。母はそれを聞きながら睡入つた風をして泣いて居た。

お末が單衣の上に羽織を着て、メレンスの結び下げの男帶の代りに、後ろの見えないのを幸ひに一とまはりしかない短い女帶をしめるやうになつた頃から、不景氣不景氣と云ふ聲がうるさい程聞こえ出した。義理のやうに一寸募つた暑さも直ぐ涼しくなつて、是れでは北海道中種籾一粒取れまいと云ふのに、薄氣味惡く米の値段が下つたりした。お末はよくこの不景氣と云ふ事と、四月から九月までに四人も身内が死んだと云ふ事を云ひふらしたが、實際お末を困らしたのは、不景氣につけて母や兄の氣分の荒くなる事だつた。母ががみ〳〵とお末を叱りつける事は前にもないではなかつたが、どうかすると母と兄とが嘗てない激しい口いさかひをする事があつた。お末は母が可なり手嚴しく兄にやられるのを胸の中で快く思つた事もあつた。さうかと思ふと、母が不憫で不憫で

たまらないやうな事もあつた。

六

十月の二十四日は力三の四十九日に當つて居た。四五日前に赤坊の命日をすました姉は、その日縫物の事か何かで鶴床に來て、店で兄と何か話をして居た。

お末は今朝寢おきから母にやさしくされて、大變機嫌がよかつた。姉に向つても姉さん〱となついて、何か頻りと獨言を云ひながら洗面臺の掃除をして居た。

「どうぞ又是れをお賴み申します——是れはちよつぴりですが、一つ使つて御覽なすつて下さい」

その聲にお末がふり返つて見ると、エンゼル香油の廣告と、小壜入りの標品とが配達されて居た。お末はいきなり駈けよつて、姉の手からその小壜を奪ひ取つた。

「エンゼル香油だよ、私明日姉さんとこへ髮を上げてもらひに行くから、半分私がつけるよ、半分は姉さんおつけ」

「ずるいよこの子は」

と姉も笑つた。

お末がこんな冗談を云つてると、今まで默つて茶の間で何かして居た母が、急に打つて變つて怒り出した。早く洗面臺を綺麗にして、こんな天氣の日に張物でもしないと、雪が降り出したらどうすると、毒を持つた云ひ方で、小言を云ひながら店に顏を出した。今まで泣いて居たらしく眼をはらして、充血した白眼が氣味惡い程光つて居た。

「お母さん今日はまあ力三の爲めにもさう怒らないでやつておくんなさいよ」

姉がなだめる積りでかうやさしく云つて見た。

「力三力三つて手前のものゝやうに云ふが、あれは一體誰が育てた。力三がどうならうと手前共が知つたこんで無えぞ。鶴も鶴だ、不景氣不景氣だと己ら事ぶつ死ぬまでこき使ふがに、末を見ろ毎日々々のらくらと背丈ばかり延ばしやがつて」

姉はこの口きたない雜言を聞くと、妙にぶツつりして、碌々挨拶もしないで歸つて行つてしまつた。お末は所在なさゝうにして居る兄を一寸見て、默つたまゝせつせと働き出した。母は何時までも入口に立つてぶつ〳〵云つて居た。鉛の塊のやうな鈍い悒鬱がこの家の軒端まで漲つた。

お末は洗面臺の掃除をすますと、表に出て張物にかゝつた。冷えはするが日本晴とも云ふべき晩秋の日が、斜に店の引戸に射して、幽かにペンキの匂も立てた。お末は仕事に興味を催した樣子で、少し上氣しながらせつせと、色々な模樣の切れを板に張りつけて居た。先きだけ赤らんだ小さい指が器用に、黑ずんだ板の上を走つて、かゞんだり立つたりする度に、お末の體は女らしい優しい曲線の綾を織つた。店で新聞を讀んで居た鶴吉は美しい心になつて、飽かずそれを眺めて居た。

組合に用事があるので、早晝をやつた鶴吉が、店を出る時にも、お末は懸命で仕事をして居た。

「一と休みしろ、よ、飯でも喰へや」

優しく云ふと、お末は一寸顏を上げてにつこりしたが、直ぐ快活げに仕事を續けて行つた。曲り角に來て振返つて見ると、お末も立上つて兄を見送つて居た。可愛いゝ奴だと鶴吉は思ひながら道を急いだ。

母が晝飯だと呼んでも構はずに、お末は仕事に身を入れて居た。そこに朋輩が三人程やつて來て、遊園地に無

限軌道の試驗があるから、見に行かないかと誘つてくれた。無限軌道——その名がお末の好奇心を恐ろしく動かした。お末は一寸行つて見て來る積りで、襷を外して袂に入れて三人と一緒になつた。

厳めしく道廳や鐵道管理局や區役所の役人が見て居る前で、少し型の變つた荷馬車が、わざと造つた障害物をがたん／＼音を立てながら動いて行くのは、面白くも何んともなかつたけれども、久し振りで野原に出て學校友達と心置きなく遊ぶのは、近頃にない保養だつた。まだ碌々遊びもしないと思ふ頃、ふと薄寒いのに氣がついて空を見ると、何時の間にか灰色の雲の一面にかゝつた夕暮の景色になつて居た。

お末はどきんとして立ちすくんだ。朋輩の子供達はお末の顔色の急に變つたのを見て、三人とも眼をまるくした。

七

歸つて見ると、頼みにして居た兄はまだ歸らないので、母一人が火のやうにふるへて居た。

「穀つぶし奴、何處に出てうせた。何んだつてくたばつて來なかつたんだ、是れ」

と云つて、一こづきこづいて、

「生きて居ばいゝ力三は死んで、くたばつても大事ない手前べのさばりくさる。手前に用は無え、出てうせべし」

と突放した。さすがにお末もかつとなつた。「死ねと云つても死ぬものか」と腹の中で反抗しながら、母が剝してたゝんで置いた張物を風呂敷に包むと、直ぐ店を出た。お末はその時腹の空いたのを感じて居たが、飯を食つて出る程の勇氣はなかつた。然し出がけに鏡のそばに置いてあるエンゼル香油の小壜を取つて、袂にひそますだけの餘裕は持つて居た。「姉さんの所に行つたら散々云ひつけてやるからいゝ。死ねと云つたつて、人、誰が死

ぬものか」さうお末は道々も思ひながら姉の家に着いた。

何時でも姉はいそ〳〵と出迎へてくれるのに、今日は近所から預かつてある十許りの女の子が淋しさうな顔をして、入口に出て來たばかりなので、少し氣先きを折られながら奥の間に通つて見ると、姉は默つて針仕事をして居た。勝手がちがつてお末はもじ〳〵そこいらに立つて居た。

「まあお坐り」

姉は劍のある上眼遣ひをして、お末を見据ゑた。お末は坐ると姉をなだめる積りで、袂から香油の壜を出して見せたが、姉は見かへりもしなかつた。

「お前お母さんから何んとか云はれたらう。先刻姉さん所にもお前を探しに來たんだよ」

と云ふのを冒頭に、裏に怒りを潛めながら、表は優しい口調で、お末に因果を含めだした。お末は始めの中は何がと云ふ氣で聞いて居たが、段々姉の言葉に引入れられて行つた。兄の商賣は落目になつて、月々の實入りだけでは暮しが立たないから、姉の夫がいくらかづゝ面倒を見て居たけれども、大工の方も雪が降り出すと仕事が丸潰れになるから、是れから朝の中だけ才取りのやうな事でもして行く積りだが、それが思ふやうに行くかどうか怪しい。力三も亡くなつて見ると、行く〳〵は一人小僧も置かなければならない。お母さんはあの通りで、時々臥もするから藥價だつて積れば大きい。哲は哲で片輪者故、小學校を卒業したつて何の足しにもならない。隣り近所にだつて、十月になつてから、家賃も拂へないで追ひ立てを喰つた家が何軒あるか位は判つて居さうなものだ。他人事だと思つて居ると大間違ひだ。それに力三の命日と云ふのに、朝つぱらから何んと思へば一人だけ氣樂な眞似が出來るんだらう。足りないながらせめては家に居て、佛壇の掃除なり、精進物の煮付けなりして、母を手傳つたら、母も喜んだらうに、不人情にも程がある。十四と云へば、二三年經てばお嫁に行く齡だ。

そんなお嫁さんは誰ももらひ手がありはしまい。何時までも兄の所の荷厄介になつて、世間から後指をさゝれて、一生涯面白い眼も見ずに暮すんだらう。勝手な眞似をしていまに皆んなに愛想をつかされるがいゝ。そんな具合に姉はたゝみかけて、お末を責めて行つた。而して仕舞ひには自分までがほろりとなつて、

「いゝさ暢氣者は長命するつて云ふからね、お母さんはもう長くもあるまいし、兄さんだつてあゝ身をくだいちや何時病氣になるかも分らない。おまけに私はね獨りぽつちの赤坊に死なれてから、もう生きる空はないんだから、お前一人後に殘つてしやあ／＼してお出で……さう云へば、何時から聞かうと思つて居たが、あの時お前豐平川で赤坊に何か悪いものでも食べさせはしなかつたかい」

「何を食べさすもんか」

今まで默つてうつむいて居たお末は、追ひすがるやうにかう答へて、又うつむいてしまつた。

「力三だつて一緒に居たんだもの……私はお腹も下しはしなかつたんだもの」

と暫くしてから譯の判らない事を、申譯らしく云ひ足した。姉は疑深い眼をして鞭つやうにお末を見た。

かうしてお末は押し默つて居る中に、ふつと腹のどん底から悲しくなつて來た。唯悲しくなつて來た。何んだか搾りつけられるやうに胸がせまつて來ると、止めても／＼氣息がはずんで、火のやうに熱い涙が二粒三粒ほてり切つた頰を輕くくすむるやうにたら／＼と流れ下つたと思ふと、たまらなくなつて無我夢中にわつと泣き伏した。

而してお末は一時間程ひた泣きに泣いた。力三のいたづら／＼した愛嬌のある顔だの、姉の赤坊の舌なめずりする無邪氣な顔だのが、一寸覗きこむと思ふと、それが父の顔に變つたり、母の顔に變つたり、特別になつかしく思ふ鶴吉の顔に變つたりした。その度毎にお末は涙が自分ながら面白い程流れ出るのを感じて泣きつゞけた。

今度は姉が心配し出して、色々に言ひ慰めて見たけれども甲斐がないので、仕舞ひにはするまゝに放つて置いた。

お末は泣きたいだけ泣いてそつと顔を上げて見ると、割合に頭は輕くなつて、心が深く淋しく押し靜まつて、はつきりした考へがたつた一つその底に沈んで居た。もうお末の頭からはあらゆる執着が綺麗に無くなつてゐた。

「死んでしまはう」お末は悲壯な氣分で、胸の中にふか〳〵とかううなづいた。而して「姉さんもう歸ります」としとやかに云つて姉の家を出た。

八

用事に暇どつたゝめに、灯がついてから程たつて鶴吉は歸つて來た。店には電燈がかん〳〵照つて居るが、茶の間はその光だけで間に合はして居た。その暗い處に母とお末とが離れ合つて孑然と坐つて居た。戸棚の側には哲が小搔卷にくるまつて、小さな鼾をかいて居た。鶴吉はすぐ又喧嘩があつたのだなと思つて、あたりさはりのない世間話に口を切つて見たが、母は碌々返事もしないで布巾をかけた精進の膳を出してすゝめた。見るとお末の膳にも手がつけてなかつた。

「お末何んだつて食べないんだ」

「食べたくないもの」

何んと云ふ可憐ななつツこい聲だらうと鶴吉は思つた。

鶴吉は箸をつける前に立上つて、佛壇の前に行つて、小つぽけな白木の位牌に形ばかりの御辭儀をすると、しんみりした淋しい氣持になつた。餘り氣分が滅入るので、電燈をひねつて見た。ぱつと部屋は一時明るくなつて、哲が一寸眼を覺ましさうになつたが、そのまゝ又靜まつて行つて淋しさが增すばかりだつた。

お末は默つたまゝで兄の膳を流元にもつて行つて洗ひ出した。明日にしろと云つても、聽かないで默つたまゝ洗つてしまつた。歸りがけに佛壇に行つて、燈心を代へて、位牌に一寸御辭儀をした。而して下駄をつッかけて店から外に出ようとする。

鶴吉は何んとなく胸騷ぎがして、お末の後から聲をかけた。お末は外で、

「姉さん所に忘れた用があるから」

と云つて居た。鶴吉は急に怒りたくなつた。

「馬鹿、こんなに晚く行かなくとも、明日寢起きに行けばいゝぢやないか」

云つてる中に母に肩を持つて見せる氣で、

「わがまゝな事ばかししやがつて」

と附け加へた。お末は素直に返つて來た。

三人とも寢てから鶴吉は「わがまゝな事ばかししやがつて」と云つた言葉が、どうしても云ひ過ぎのやうに思はれて、氣になつてしかたがなかつた。お末はこちんと石のやうに押し默つて、哲に添寢をして向うむきになつて居た。

外では今年の初雪が降つて居るらしく、めり込むやうな靜かさの中に夜が更けて行つた。

九

案の定その翌日は雪に夜があけた。鶴吉が起き出た頃には、お末は店の掃除をして、母は臺所の片附けをやつて居た。哲は學校の風呂敷を店火鉢の傍で結んで居た。お末は甲斐々々しくそれを手傳つてやつて居た。暫くし

てから、

「哲」

とお末が云つた。

「う？」

と哲が返事をしても、お末が何んとも言葉をつがないので、

「姉や何んだ」

と催促したが、お末は默つたまゝだつた。鶴吉は齒楊枝を取上げようとして鏡の前の棚を見ると、そこには店先にある筈のない小皿が一枚載つて居た。

七時頃になつてお末は姉の所に行くと云つて家を出た。丁度客の顏をあたつて居た鶴吉は碌々見返りもしなかつた。

客が歸つてからふと見ると、さつきの皿がなくなつて居た。

「おやお母さん、こゝに載つてた皿はお母さんがしまつたのかい」

「何、皿だ？」

母が奧から顏だけ出した。而してそんなものは知らないと云つた。鶴吉は「お末の奴何んだつてあんなものを持出しやがつたんだらう」と思つて見まはすと、洗面所の側の水甕の上にそれが載つてゐた。皿の中には水が少し殘つて白い粉のやうなものがこびりついてゐた。鶴吉は何んの氣なしにそれを母に渡して始末させた。

九時頃になつてもお末が歸らないので、母はまたぶつ〳〵云ひ始めた。鶴吉も、歸つて來たら少し性根のゆくだけ云つてやらなければならないと思つて居ると、姉の所で預つてゐる女の子がせきこんで戶を開けて這入つて

來た。
「叔父さん、今、今」
と氣息をはずまして居る。鶴吉はそれが可笑しくて笑ひながら、
「どうしたい、そんなに慌てゝ……伯母さんでも死んだか」
と云ふと、
「うん、叔父さんとこの末ちやんが死んだよ、直ぐお出でよ」
鶴吉はそれを聞くと妙に不自然な笑ひかたがしたくなつた。
「何んだつて」
もう一度聞きなほした。
「末ちやんが死ぬよ」
鶴吉はとう〳〵本當に笑ひ出してしまつた。而していゝ加減にあしらつて女の子を返してやつた。
鶴吉は笑ひながら奥に居る母に大きな聲でその事を話した。母はそれを聞くと面相をかへて跣足で店に降りて來た。
「何、お末が死ぬ?……」
而して母も突然不自然極まる笑ひ方をした。と思ふと又眞面目になつて、
「よんべ、お末は精進も食はず哲を抱いて泣いたゞが……はゝゝ、何そんな事あるもんで、はゝゝゝ」
と云ひながら又不自然に笑つた。鶴吉はその笑ひ聲を聞くと、思はず胸が妙にわく〳〵したが、自分もそれにまき込まれて、

「はゝゝあの娘つ子が何を云ふだか」
と合槌を打つて居た。母は茶の間に上らうともせずきよとんとしてそこに立つたまゝになつて居た。
　そこに姉が跣足で飛んで來た。鶴吉はそれを見ると、先刻の皿の事が突然頭に浮んだ――はりなぐられるやうに。而して何んの譯もなく「しまつた」と思つて、煙草入れを取つて腰にさした。

一〇

　その朝早く一度お末は姉の所に來た。而して母が散藥を飲みづらがつて居るから、赤坊の病氣の時のオブラートが殘つてゐるならくれろと云つた。姉は何んの氣なしにそれを渡してやつた。と七時頃に又縫物を持つて來て、入口の隣りの三疊でそれを擴げた。その部屋の戸棚の中にはこま〳〵したものが入れてあるので、姉はちよいちよいそこに行つたが、お末には別に變つた樣子も見えなかつた。唯羽織の下に何か隱して居るらしかつたけれども、是れもいつもの隱し食ひでもと思へば聞いても見なかつた。
　三十分程經つたと思ふ頃、お末が立つて臺所で水を飲むらしいけはひがした。赤坊を亡くしてから生水を毒のやうに思ふ姉は、飲むなと襖ごしにお末を叱つた。お末は直ぐやめて姉の部屋に這入つて來た。姉はこの頃佛いぢりにかまけて居るのであの時も眞鍮の佛具を磨いて居た。お末もそれを手傳つた。而して三十分程の讀經の間も殊勝げに後ろに坐つて聽いて居た、が、いきなり立つて三疊に這入つた。姉は暫くしてからふと隣りで物をもどすやうな聲を聞きつけたので、急いで襖を開けて見ると、お末はもう苦しんで打伏して居た。いくら聞いても默りこくつたまゝ苦しんでゐるだけだ。仕舞ひに姉は腹を立てゝ背中を二三度痛く打つたら、始めて家の棚の上にある毒を飲んだと云つた。而して姉の家で死んで迷惑をかけるのがすまないと詫びをした。

鶴吉の店にかけこんで來た姉は前後も亂れた話振りで、氣息をせき〳〵是れだけの事を鶴吉に話した。鶴吉が行つて見ると姉の家の三疊に床を取つてお末が案外平氣な顔をして、這入つて來た兄を見守りながら寢て居た。鶴吉はとても妹の顔を見る事が出來なかつた。

醫者をと思つて姉の家を出た鶴吉は、直ぐ近所の病院にかけつけた。藥局と受附とは今眼をさましたばかりだつた。直ぐ來るやうにと再三駄目を押して歸つて待つたけれども、四十分も待つのに來てくれさうにはなかつた。一旦鎭まりかゝつた嘔氣は又激しく催して來た。お末が枕に顔を伏せて深い呼吸をして居るのを見ると、鶴吉は居ても立つても居られなかつた。四十分待つた爲めに手おくれになりはしなかつたか、さう思つて鶴吉は又かけ出した。

五六丁駈けて來てから見ると足駄をはいて居た。馬鹿なこんな時足駄をはいて駈ける奴があるものかと思つて跣足になつて、而して又五六丁雪の中を駈けた。ふと自分の傍を人力車が通るのに氣がついて又馬鹿をしたと思ひながら車宿を尋ねる爲めに二三丁引きかへした。人力車はあつたが車夫は老人で鶴吉の駈けるのよりも餘程おそく思はれた。引返した所から一丁も行かない中に尋ねる醫師の家があつた。總ての準備をして待つて居るから直ぐ連れて來いとの事であつた。

鶴吉は人力車に頓着なく姉の家に駈け附けて樣子を聞くと、まださう騷ぐには及ばぬらしいとの事であつた。鶴吉は思はずしめたと思つた。お末は壜の大小を間違へて、大壜の方のものを飮んだに違ひない。大壜の方には苛性加里を粉にして入れてあるのだ。それに違ひないと思つたが、それをまのあたり聞く勇氣はなかつた。

人力車を待つのに又暫くかゝつた。軈て鶴吉は車に乘つてお末を膝の上にかゝへて居た。お末は兄に抱かれながら幽かに微笑んだ。骨肉の執着が喰ひ込むやうに鶴吉の心を引きしめた。どうかして生かさう、鶴吉はたゞさ

う思ふだけだつた。

　やがてお末は醫師の家の二階の手廣い一室に運ばれて、雪白のシーツの上に移された。お末は喘ぐやうにして水を求めて居た。

「よし／＼今渇かないやうにして上げるからね」

　如何にも人情の厚さうな醫師は、診察衣に手を通しながら、お末から眼を放さずに靜かにかう云つた。お末はおとなしく首肯いた。醫師はやがてお末の額に手をあてゝしげ／＼と患者を見て居たが鶴吉を見返つて、

「昇汞をどの位飲んだんでせう」

　と聞いた。鶴吉はこゝで運命の境目が來たと思つた。而して恐る／＼お末に近づいて、耳に口をよせた。

「お末、お前の飲んだのは大きい壜か小さい壜か」

　と云ひながら手眞似で大小をやつて見せた。お末は熱のある眼で兄を見やりながら、はつきりした言葉で、

「小さい方の壜だよ」

　と答へた。鶴吉は雷にでも撃たれたやうに思つた。

「ど、どれ位飲んだ」

　豫て大人でも十分の二グラム飲めば命はないと聞かされて居るので、無益とは知りながらかう聞いて見た。お末は默つたまゝで、食指を丸めて拇指の附根の邊につけて、五錢銅貨程の圓を示した。

　それを見た醫師は疑はしげに首を傾けたが、

「少し時期がおくれたやうだが」

　と云ひながら、用意してある藥を持つて來さした。劇藥らしい鋭い匂ひが室中に漲つた。鶴吉はその爲めに今

までの事は夢だつたかと思ふほど氣はたしかになつた。

「飲みづらいよ、我慢してお飲み」

お末は抵抗もせずに眼をつぶつてぐつと飲み乾した。それから暫くの間昏々として苦しさうな假睡に落ちた。

助手は手を握つて脈を取りつゞけて居た。而して醫師との間に低い聲で會話を取りかはした。

十五分程經つたと思ふと、お末はひどく驚いたやうにかつと眼を開いて、助けを求めるやうにあたりを見まはしながら頭を枕から上げたが、いきなりひどい嘔吐を始めた。昨日の晝から何んにも食べない胃は、泡と粘液とをもどすばかりだつた。

「胸が苦しいよ、兄さん」

鶴吉は背中をさすりながら、默つて深々とうなづくだけだつた。

「お便所」

さう云つて立上らうとするので皆がさゝへると、案外丈夫で起き直つた。便器と云つてもどうしても聞かない。鶴吉に肩の所を支へてもらつて歩いて行つた。階段も自分で降りると云ふのを、鶴吉が無理に背負つて、

「階子段を一人で降りるなんて、落ちて死んじまふぞ」

と云ふと、お末は顏の何處かに幽かに笑ひの影を宿して、

「死んでもいゝよ」

と云つた。

下痢は可なりあつた。吐瀉の是れだけあると云ふことが、せめてもの望みだつた。お末は苦しみに背中を大波のやうに動かしながら、はつ〳〵と熱い氣息を吐いて居た。唇はかさ〳〵に乾破れて、頰には美しい紅みを漲ら

して。

二

お末は胸の苦しみを訴へるのがやむと、激しく腹の痛みを訴へ出した。それは慘めな苦悶であつた。それでもお末は氣丈にも、もう一度便所に立つと云つたが、實際は力が衰へて床の中でしたゝか血を下した。鼻からも鼻血が多量に出た。而して空をつかみシーツを引きさく無殘な苦悶の間には、ぞつとする程恐ろしい昏睡の靜かさが續いた。

そこに金の調達を奔走して居た姉もやつて來た。而して麻のやうに亂れたお末の黑髮を、根元から堅く崩れぬやうに結び直してやつたりした。お末を生かしたいと思はないものはなかつた。その間にお末は一秒々々に死んで行つた。

でもお末には生にすがると云ふやうな風は露ほども見えなかつた。その可愛いゝ堅い覺悟が今更に人々の胸をゑぐつた。

ふとお末は昏睡から覺めて「兄さん」と呼んだ。室の隅でさめ〴〵と泣いて居た鶴吉は、慌てゝ眼を拭ひながら枕許に近づいた。

「哲は」

「哲はな」

兄の聲はそこで途絶えてしまつた。

「哲は學校に行つてるよ。呼んでやらうか」

お末は兄に顔を背けながら、かすかに、
「學校なら呼ばなくもいゝよ」
と云つた。是れがお末の最後の言葉だつた。
それでも哲は呼び迎へられた。然しお末の意識はもう働かなくなつて、哲を見分ける事が出來なかつた。——強ひて家に留守させて置かうとした母も、狂亂のやうになつてやつて來た。母はお末の一番好きな晴れ着を持つて來た。而してどうしてもそれを着せると云つて承知しなかつた。傍の人がとめると、それならかうさせてくれと云つて、その着物をお末にかけて、自分はその傍に添寢をした。お末の知覺はなくなつてゐたから、醫師も母のするまゝに任せて置いた。
「おゝよし〱。それでよし。ようした〱。ようしたぞよ。お母さん居るぞ泣くな。おゝよしおゝよし」
と云ひながら母はそこいらを撫で廻して居た。而してかうしたまゝで午後の三時半頃に、お末は十四年の短い命に別れて行つた。
次の日の午後に鶴床は五人目の葬式を出した。降りたての眞白な雪の中に小さい棺と、それにふさはしい一群の送り手とが汚ないしみを作つた。鶴吉と姉とは店の入口に立つて小さな行列を見送つた。棺の後ろには位牌を持つた跛足の哲が、力三とお末とのはき古した足駄をはいて、ひよこり〱と高くなり低くなりして歩いて行くのがよく見えた。
姉は珠數をもみ〱默念した。逆縁に遇つた姉と鶴吉との念佛の掌に雪が後から〱降りかゝつた。

（一九一六年一月、白樺所載）

フランセスの顔

闌な秋の或る一夜。

光の綾を織り出した星々の地色は、底光りのする大空の紺青だつた。その大空は地の果てから地の果てにまで擴がつて居た。

淋しく枯れ渡つた一叢の黄金色の玉蜀黍、細い蔓——その蔓はもう霜枯れて居た——から奇蹟のやうに育ち上つた大きな眞赤なパムプキン。最後の審判の喇叭でも待つやうに、さゝやきもせず立ち連なつた黄葉の林。それ等の秋のシムボルを靜かに乘せて暗に包ませた大地の色は、鈍色に黒ずんだ紫だつた。その闌な秋の一夜の事。

私達は彼女の家に近づいた。末の妹のカロラインが、つきまつはるサン・ベルナール種のレックスを押しのけながら、逸早く戸を開けると、石油ランプの琥珀色の光が焔の劍のやうな一筋の眩しさを廣縁に投げた。私と連れ立つた彼女の兄達と妹とは、孤獨の客の居るのも忘れて、蛾のやうに光と父母とを目がけて驅け込んだ。私は少し當惑して這入るのをためらつた。ばね仕掛けである筈の戸が自然にしまらないのを不思議に思つてふと氣が付くと、彼女が靜かにハンドルを握りながら、微笑んで立つて居た。私は彼女に這入れと云つた。彼女は默つたまま輕くかぶりをふつて、少しはにかみながらそれでもぢつと私の目を見詰めて動かうとはしなかつた。私は心から嬉しく思つて先きに這入つた。その瞬間から私は彼女を強く愛した。

フランセス——然し人々は彼女を愛してファニーと呼ぶのだ。

その夜は興ある座談に時が早く移つた。ファニーとカロラインの眠る時が來た。ブロンドの巻髪を持つたカロラインはもう眠むがつた。栗色の辮のない髪をアメリカ印度人のやうに眞中から分けて耳の下でぶつりと切つたファニーの眼はまだ堅かつた。ファニーはどうしてもまだ寢ないと云ひ張つた。齢をとつたにこやかな母が怒る眞似をして見せた。ファニーは父の方に訴へるやうな眼付を投げたが、とう〳〵從順に母の膝に頭を埋めた。母は二人の童女の項に輕く手を置き添へて、口の中で小さな祝禱を捧げてやつた報酬に、先づ二人から寢前の接吻を受取つた。それから父と兄等とが接吻を受けた。二人が二階にかけ上らうとすると母が呼びとめて、お客様にも挨拶をするものだと輕くたしなめた。カロラインは飛んで歸つて來て私と握手した。ファニーは——ファニーは頸飾りのレースだけが眼立つ程影になつた室の隅から輕く頸をかしげて微笑を送つてよこした。而して二人は押合ひへし合ひしながらがた〳〵と小さい階子をかけ上つて行つた。その賑やかな音の中に「ファニーのはにかみ屋奴、いたづら千萬な辮に」と云ふ父の獨言がさゝやかれた。

*

寒く、淋しく、穩かに、晩秋の田園の黎明が來た。窓硝子に霜華が霞程薄く現れて居た。衣服の着代へをしようとして巖乘一方な木製の寢臺の側に立つて居ると、戸外でカロラインと氣輕く話し合ふファニーの彈むやうな聲が聞こえた。私はズボンつりをボタンにかけながら窓際に倚り添つて窓外を見下ろした。

一面の霜だ。庭めいた屋前の芝生の先きに木柵があつて、木柵に竝行した荷馬車の通ふ程な廣さの道の向うには、可なり大きな收穫小屋が聳えて見えた。收穫小屋の後ろには大方耡き返されて大きな土塊のごろ〳〵する畑が、荒地のやうに紫がゝつて擴がつて居た。その處々は、落葉した川柳が箒を倒しまに立て連ねたやうにならんで居る。轍の泥のかん〳〵にこびりついたまゝになつて居る收穫車の上には、仕舞ひ殘された牧草が魔女の髪の

やうにしだらなく垂れ下つて居た。それ等總ての上に影と日向とをはつきり描いて旭が横ざしにさし始めて居た。鳥の聲と鷄の聲とが遠くの方から引きしまつた空氣を渡つて硝子越しに聞こえて來た。自然は産後の疲れにやつれ果てゝ靜かに産褥に眠つて居るのだ。その淋しさと農人の豐かさとが寛大と細心の象徴のやうに私の眼の前に展けて見えた。

私はファニーを探し出さうとした。眼の届く限りに姿は見えないなと思ふ間もなく收穫小屋の裏木戸が開いて、斑入りの白い羽を半分開いて前に行くものゝ背を乘り越し／＼走り出た一群の鷄と一緒に、二人の童女が現れ出た。二人は日向に立つた。そのまはりには首を上に延ばしたりお辭儀をしたりする鷄が集まつた。一羽はファニーの腕にさへとまつた。カロラインがかゝげて居たエープロンをさつと振り拂ふと、燕麥が金の砂のやうに凍つた土の上に散らばつた。一羽の雄鷄は群から少し離れて高々と時をつくつた。

ファニーのエープロンの中には小屋のあちこちから集めた鷄卵があつた。彼女はそれを一つ／＼大事さうに取出して、カロラインと何か言ひ交はしながら、木戸を開いて母屋の方に近づいて來た。朝寒がその頬に紅をさして、白い齒なみが恥かしさを忘れたやうに「ほゝゑみの戸口」から美しく現れてゐた。私はズボンつりを左手に持ち直して、右の中指で輕く窓の硝子を彈いた。ファニーは笑みかまけたまゝの顏を上げて私の方を見た。自然に獻げた微笑を彼女は人間にも投げてくれた。私の指先は硝子の傳へた快い冷さを忘れて熱くなつた。

*

夏が來てから私は又この農家を訪れた。私は汽車の中でなだらかな斜面の半腹に林檎畑を後ろにして蹲るやうに孤立するフランセスの家を考へて居た。白く塗られた白堊が斑らになつて木地を現した收穫小屋、その後ろに半分隱れて屋根裏とも云へる低い二階を持つた古風な石造りの母屋、その壁面にならんで近づく人をぢつと見守

つて居るやうな小さな窓、前さがりの庭に立ちそぼつ骨ばつた楡とねりこ、而して眼をさすやうに上を向いて尖つた灌木の類、綿と棘荊とに身よそほひした薊の亡骸、針金のやうに地にのたばつた霜枯れの蔓草、風にからからと鳴るその實、糞尿に汚れ返つたエイシャー種の九頭の乳牛、飴のやうな色に氷つた水溜り、乳を見ながら飲まうともしない病兒のやうに、物うげに日光を尻目にかけてうづくまつた畑の土……。

然しその家に近づいた私の眼は私の空想を小氣味よく裏切つてくれた。エメラルドの珠玉を連ねわたしたやうに快い緑に包まれたこの小樂園は一體何處から湧いて出たのだ。母屋の壁の鼠色も、收穫小屋の斑らな灰白色も、緑蔭と日光との綾の中に宛ら小跳りをして居るやうだ。木戸はきしむ音もたてずに輕々と開いた。私はビロードの足ざはりのする芝生を踏んで廣縁に上つた。蟲除けの網戸を開けて戸をノックした。一度。二度。三度。應へる者がない。私は何んの意味もなく微笑みながら靜かに立つてあたりを見廻した。縁の欄干から軒にかけて一面に張りつめた金網にはナスターシャムとhoney-suckleとが細かくからみ合つて花をつけながら、卵黄程な黄金の光を板や壁の所々に投げ與へて居た。その濃緑の帷からは何處ともなく甘い香りと蜂の羽音とが溢れ出てひそやかな風に搖られながら私を抱き包んだ。

突然裏庭の方で笑ひどよめく聲が起つた。私は又醉ひ心地に微笑みながら、楡の花のほろ〱と散る間をぬけて臺所口の方に廻つた。冬の間に燃き捨てた石炭殼の堆の外には、靴のふみ立て場もない程にクロヴァーが茂つて、花が咲きほこつて居た。よく肥つた猫が一匹人おぢもせずに蹲つて草の間に惜しげもなく流れこぼれた牛の乳をなめて居た。

臺所口をぬけるとむつとする程むれ立つた薔薇の香りが一時に私を襲つて來た。感謝祭に來た時には荊棘の迷路であつた十坪ほどの地面が今は隙間もなく花に埋まつて、夏の日の光の中で一番麗はしい光がそれを抑し包ん

で居た。私は自分の醜さを恥ぢながらその側を通つた。ふと薔薇の花がたわゝに動いた。見返る私の眼にフランセスの顔が映つた。彼女は薔薇と一緒になつて微笑んで居た。

　腕にかけた經木籃から摘み取つた花をこぼし〳〵フランセスの駈け出す後に私も從つた。跣足になつた肉付の恰好な彼女の脚は、木柵の横木を輕々と飛び越して林檎畑に這入つて行つた。私は彼女の飛び越えた所に一とかたまり落ち散つた花を、氣ぜはしく拾ひ上げた。見るとファニーは安樂椅子に仰向き加減に座を占めた母に抱きついて處きらはず續け樣に接吻して居た。蜘蛛の巣にでも惱まされた樣に母が娘を振り離さうとするのを、スカルキャップを被つた小柄な父は、讀みかけて居た新聞紙をかいやつて鐵縁の眼鏡越しに驚いて眺めて居た。此處では又酒のやうな芳醇な香が私を襲つた。シャツ一枚になつて二の腕までまくり上げた兄等の間には大きな林檎壓搾機が置かれて、銀色の龍頭からは夏を煎じつめたやうなサイダーの原汁がきら〳〵と日に輝きながら眞黒に煤けた木槽にしたゝつて居た。その側に風に吹き落された未熟の林檎が累々と積み重ねられて居た。兄等は私を見付けると一度に聲を上げた。而して蜜蜂に體のめぐりをわん〳〵飛び廻らせながら一人々々やつて來て大きな手で私の手を堅く握つてくれた。その手はどれも勤勞の爲めに火のやうに熱して居た。私は少し落着いてからファニーの方を見た。彼女は上氣した頰を眞赤にさせて、スカーツから下はむきだしになつた兩足をつゝましく揃へて立つて居た。あの眼は何んと云ふ眼だ。この何もかにも明らさまな夏の光の下で何を訝り何を驚いて居るのだ。

*

　ある朝兩親は毎時もの通り古ぼけた割幌の輕車を重い耕馬に牽かせて、その朝カロラインが集めて廻つた鷄卵を丹念に木箱に詰めたのを膝掛けの下に置いて、がら〳〵と轍の音をたてながら村の方に出かけて行つた。歸りの馬車は必要な肉類と新聞紙と一束の手紙類とを齎らして來るのだ。私は朝の讀書に倦んでカロラインを伴れて

庭に出た。花園の側に行くとその受持ちをして居るファニーが花の中からついと出て來て私達をさしまねいた。而して私を連れて林檎畑に這入つて行つた。カロラインと何かひそ／＼話をした彼女の眼はいたづらさうな光を輝かして居た。少し私を驅け拔けてから私の方を向いて立ち止つて私にも止れと云つた。私は止つた。自分の方を眞直に見て外に眼を移してはいけないと云つた、私はどうして他見をする必要があらう。一、二、三、兵隊のやうに歩調を取つて自分の所まで歩いて來い、さう彼女は私に嚴命を下した。私はすなほにも彼女を突き倒す程の意氣込みで歩き出した。五歩ほど來たと思ふ頃私は思はず跳り上つた。跣足になつた脚の向脛に注射針を一どきに十筒も刺し通された程の痛みを覺えたからだ。ファニーとカロラインが體を二つに折つて笑ひこけて居るのをいま／＼しく睨みつけながら足許を見ると、紫の花をつけた一莖の大薊が柊のやうな葉を擴げて立つて居た。私はいきなり不思議な衝動に驅られた。森の中に逃げ込むニンフのやうなファニーを追ひつめて後ろから抱きすくめた私はバッカスのやうだつた。ファニーは盃に移されたシャンパンが笑ふやうに笑ひつゞけて身もだえした。頭の上に擴がつた櫻の葉蔭からは櫻桃について一群の椋鳥が驚いてうとましい聲を立てながら一時に飛び立つた。私ははつと恥を覺えてファニーを懷ろから放した。私の胸は小痛い程の動悸にわく／＼と恐れ戰いて居た。ファニーは人の心の嶮しさを知らないのだ。踊る時のやうな手ぶりをして事もなげに笑ひ續けて居た。

*

書棚とピアノとオルガンと、俄百姓の素性を裏切る重々しい椅子とで晝も小暗い父の書齋は都會からの珍客で賑はつて居た。總てが煤けて見える部屋の一隅に、盛り上げた雪のやうに純白なリンネルを着た貴女は滑らかな言葉で都會人らしく田園を褒め讃へて居た。今日はカロラインまでが珍しく靴下と靴とをはいて居た。ふと其處にファニーが素足のまゝで手に一輪の薔薇を捧げて急しく這入つて來た。彼女は貴女の居るのに氣付くと手持無

沙汰さうに立ちすくんだ。貴女とファニーとがこの部屋の二つの極のやうに見えた。母が母らしく立上つて無作法を責めながら髪をけづり衣物を整へに二階にやらうとするのを、貴女は椅子から立上りさへして押しとゞめた、而して飾り氣のない姿の可憐さと、野山に教へられた無邪氣な表情とをあくまで賞めそやした。ファニーはもう通常の快活さを取りかへして、はにかみもせずに父に近づいて、その皺くちやな手に薔薇の花を置いた。

「パヽ、是れがこの夏咲いた花の中で一番大きな綺麗な花です」

父はくすぐつたいやうに微笑みながら、莖を指先に摘んでくる／＼とまはして見た。都會人の田舍人を讃美すべきこの機會を貴女はどうしてのがして居よう。

「ファニー貴女は小さな天使そのものですね」

と綺麗な言葉で云ひながら父の方に手を延ばした。父は事もなげに花を貴女に渡すと、貴女は一寸香をかいで接吻して、驚いた表情をしながらその花に見とれて見せた。ファニーははじめてほがらかな微笑を頬に湛へて貴女の方を見た。而して脚の隱れさうな物蔭に腰から上だけを見せて座を占めた。貴女は續けて時々花の香をかぎかぎ、ファニーを相手に、怜悧らしくちよい／＼一座を見渡しながら、

「この薔薇は紅いでせう。何故世の中には紅いのと白いのとあるか知つてお出で？」

と首を華やかにかしげて聞いた。ファニーは「知りません」と素直に答へて頭をふつた。「それでは教へて上げませうね。その代り是れを下さいよ。昔ある所にね」と云ふ風にナイティンゲールが胸を荊棘にかき破られてその血で白の花瓣を紅に染めたと云ふオスカー・ワイルドの小話を語り初めた。ファニー許りでなく母までが感に入つてその滑らかな話振りに聞き惚れた。話が仕舞はない中に臺所裏で鷄がけたゝましくなき騒いだ。鷄の世話を預かるカロラインは大きな眼を皿のやうにして跳り上つた。家内中も一大事が起つたやうに聞耳を立てた。カロ

ラインが部屋を飛び出しながら、又レックスが悪戯をしたんだと叫ぶと、犬好きのファニーは無氣になつて大きな聲で「レックスがそんな事をするもんですか。猫よ屹度それは」と口惜しさうに叫んだ。「ミミーなもんですか」と口返しする癇高な妹の聲はもう臺所口の方で聞こえた。一座が鎭まると貴女は薔薇の話は放りやつて、父や母とロスタンのシャンテクレールの噂を始めだした。ファニーはもう會話の相手にはされて居なかつた。その當時賣り出した、バリモアと云ふオペラ女優の身ぶりなどを巧みに眞似ながら貴女は手に持つて居た薔薇を無意識に胸にさしてしまつた、暫く默つて聞いて居たファニーが突然激しくパヽと呼びかけた。私はファニーを見た。いやに眞面目臭つた彼女の頬はふくれて居た。父はたしなめるやうに娘を見やつた。ファニーは負けて居なかつた。一寸言葉を途切らした貴女が又話し續けようとすると、ファニーは又激しくパヽと云ふ。父は貴女の手前怒つて見せなければならなくなつた。

「不作法な奴だな、何んだ」

「That rose was given to *you*, Papa dear!」

「I know it.」

「You don't know it!」

仕舞の言葉を云つた時ファニーの唇は震へて居た。涙が溜つたのぢやあるまい。然し眼は輝いて居た。父は少し自分の弱味が裏切られたやうな苦笑ひをして居る。貴女は微笑んで暫く口をつぐんで居たが、又平氣で前の話を始め出した。父と母とはこの場の不作法を償ひ返さうとでもするやうに、一層氣を入れて貴女の話に耳を傾けた。纖細な情緒に何時でもふるへてゐるやうに見えた貴女の心は、ファニーの胸の中を汲み取つてはやらぬらしい。田舍娘は矢張り田舍娘だとさへも思つては居ないやうだ。私は可哀相になつてファニーを見た。その瞬間に

彼女も私を見た。私は勉めて好意をこめた微笑を送つてやらうとしたが、それは彼女のいら〳〵と怒つた眼付の爲めに打ちくだかれた。ファニーは輕蔑したやうに二度とは私を見返らなかつた。而して暫くしてからふと立つて外に出て行つた。入れちがひにカロラインが這入つて來て鷄の無事だつた事を事々しく報告した。貴女は父母になり代つたやうに、笑みかまけてカロラインの報告にうなづいて見せた。

暫くしてから戸が又開いたと思ふとファニーがそつと這入つて來た。忠義を盡くしながら却つて主人に叱られた犬のやうな遠慮と謙遜とを身振りに見せながら父の側に近づいて、そつとその手に又一輪の薔薇の花を置いた。話の途切れるのをおとなしく待ちつけて、

「是れが二番目に綺麗な薔薇なの、パヽ」

と云ひながら柔和な顏をして貴女を見た。一生懸命に柔和であらうとする小さな努力が傍目にもよく見えた。

「さうか」無口な父は微笑を苦笑ひに押し包んだやうな顏をして云つた。

「是れを〇〇夫人に上げませうか」

父は唯うなづいた。

「是れが貴女のです」

ファニーはそれを貴女に渡した。貴女は輕く挨拶してそれを受取ると先程のに添へて胸にさした。ファニーは貴女が最初の薔薇と取代へてくれるに違ひないと思ひ込んで居たらしいのに、貴女は又それには氣が付かないらしい。ファニーが何時までもどかないので、挨拶がし足りないと思つたのか、

「Thank you once more, dear.」

と又輕く辭儀をした。ファニーもその場の仕儀で輕く頭を下げたものだから、もう如何する事も出來なかつた。

俯向いたまゝで父室を出て行つた。その姿のいた〳〵しさは私の胸を刺すばかりだつた。

私は暫くぢつとして堪へて居たが、何んだかファニーが哀れでならなくなつて、靜かに部屋をすべり出た。食堂と居間とを兼ねた隣りの部屋にも彼女は居なかつた。靜かな臺所でこと〳〵と音のするのを便りに其處の戸を開けて見ると、ファニーが後向きになつて洗ひ物をして居た。人の近づくのに氣が付いて振返つた彼女の眼は、火のやうに燃えて居た。而して氣でも狂つたやうにした〻つた水を私の顔にはじきかけた。

貴女が暇乞をして立つ時、父は物優しくファニーの無禮をことわつて、一番美しい薔薇を返してもらつた。客の歸つたのを知つて臺所から出て來たファニーが父の手にその薔薇のあるのをちらと見ると、もう堪らないと云ふやうにかけ寄つてその胸に顔を埋めた。父が何かたしなめると、

「This rose is yours anyhow, Papa.」

とファニーが震へ聲で云つた。而して堪へ〳〵して居たすゝり泣きがやゝ暫く父の胸と彼女の顔との間からメロヂーのやうに聞こえて居た。

*

次ぎの年の春に私は又この一つの家を訪れた。櫻の花が雪のやうに白くなつて散り始め、ライラックがそのらうたけた紫の花房と香とで畑の畦を飾り、林檎が田舍娘のやうな可憐な薄紅色の蕾を武骨な枝に處せきまで裝ひ、菫と蒲公英が荒土を玉座のやうにし、軟かい牧草の葉が沛若いバッカスの顔の幼毛のやうに生え揃ひ、カックーが林の靜かさを作る爲めに間遠に鳴き始める頃だつた。空には鳩が居た。木には木鼠が居た。地には雛の子が居た。

すべての物の上に慈悲の様な春雨が暖かく靜かに降りそゝいで居た。私の靴には膏藥のやうに粘る軟土が慕ひ

よつた。去年の夏訪れた時に誰も居なかつた食堂を兼ねた居間には、總ての家族が居た。私の姿を見ると一同は總立ちになつて「ハロー」を叫んだ。ファニーが毎時ものの快活さで飛んで來て戸を開けてくれた。遠慮のなくなつた私は、日本人のするやうに戸口で靴をぬぎ始めた。毛の毬のやうな綺麗な仔猫が三匹すぐ背をまるめて靴の紐に戯れかゝつた。

母と握手した。彼女は去年のまゝだつた。父と握手した。彼はめつきり齡をとつて見えた。ファニーの兄達は順繰りに去年の兄位づゝの背丈になつて居た。カロラインはベビーと呼ばれるのが似合はぬ位になつた。ファニーは――今まで居た筈のファニーは見えなかつた。少しせつかちな父は聲を上げてその名を呼んだが答へがない。父は暫く私と一別以來の事を話し合つたりして居たが、矢張り氣になると見えて、又大聲でファニーを呼び立てた。その聲の大きさに背負投げを喰はしてファニーの「Here you are」と云ふ返事は、すぐ二階に通ふ戸の後ろから來た。而して戸が開いた。ファニーは前から戸の間際まで來て居たのにきつかけを待つて出て來なかつたのだと知つた私は、一寸勝手が違ふやうな心持がした。顏中赤面しながらそれでも恥かしさを見せまいとするやうに白い齒なみをあらはに微笑んでファニーはつか〳〵と私の前に來て、堅い握手をした。

「めかして來たな」

兄から放たれたこの簡單なからかひは、然しながらファニーの心を顚倒させるのに十分だつた。顏を火のやうに赤くしてその兄を睨んだと思ふと戸口の方に引返した。部屋中にどつと笑ひが鳴りはためいた。ファニーの眼にはもう涙の露がたまつて居た。

ファニーは決して素足を人に見せなくなつた。而して一年の間に長く延びた髮の毛は、ファウストのマーガレットのやうに二つに分けて組み下げにされて居た。それでもその翌日から彼女は去年の通りな快活な、無遠慮な、

心から善良なファニーになつた。私達はカロラインと三人でよく野山に出て馬鹿々々しい悪戯をして遊んだ。

其處に行つてから三日目に、この家で決めてある父母の誕生日が來た。兄達は鷄と七面鳥とを屠つた。私と二人の娘とは部屋の裝飾をする爲めに山に羊齒の葉や草花を採りに行つた。

木戸を開けて道に出ると、收穫小屋の側に日向に群がつて眼を細くしながら日の光を浴びて居た乳牛が、靜かに私達を目がけて木柵の際に歩みよつて來た。毛衣を着かへたかと思ふやうにつや〱しい毛なみは一本々々きら〱と輝いた。生れて程もない仔牛は始終驚き通して居るやうな丸い眼で人を見やりながら、柵から首を長く延ばして、さし出す二本の指を、ざら〱した舌で器用に卷いてちう〱吸つた。私達は一摘みづゝの青草を萬遍なく牛にやつて、又歩き出した。カロラインは始終大きな聲で歌ひつゞけた。その聲が輕い木魂となつて山から林からかへつて來る。

カロラインは又電信をしようと云ひ出した。ファニーはいやだと云つた。末子のカロラインはすぐ泣き聲になつてどうしてもするのだと云ひ張る。ファニーは姉らしく折れてやつて三人は手を繫いだ。私は眞中に居てカロラインからファニーに、ファニーからカロラインに通信をうけつぐのだ カロラインが堅く私の手を握ると私もファニーの手を堅く握らねばならぬ。去年までは私がファニーの手を堅くしめるとファニーも負けずにしめ返したのに、今年はどうしても堅く握り返す事をしない。而してその手は氣味の惡い程冷たかつた。フアニーから來る通信が何時でもなまぬるいので、カロラインは腹を立てゝわやくを云ひ出した。ファニーは「それではやめる」と云つた切り私の手を放してしまつた。カロラインが如何に怒つて見ても賴んで見ても、もうファニーは私と手をつながうとはしなかつた。

森に這入ると森の香が來て私達を包んだ。樫も、楡も、いたやも總ての葉はライラックの葉程に軟かくて淺い綠

を湛へて居た。木の幹がその特殊な皮はだを是れ見よがしに葉漏りの日の光にさらして、その古い傷口からは酒のやうな樹液がじんわりと浸み出て居た。樹液の滲み出て居る所にはきつと穴を出たばかりの小さな昆蟲が黒くなつてたかつて居た。蜘蛛も巣をかけ始めたけれども、その巣にはまだ犧牲になつた羽蟲がからまつて居るやうな事はない。露だけが宿つて居た。靜かに立つて耳を欹てると幽かに音が聞こえる。落葉が朽ちるのか、根が水を吸ふのか、卷葉が擴がるのか、蟲がさゝやくのか、風が渡るのか、その靜かな音、音ある靜かさの間に啄木鳥とむさゝびがかつ／＼と聞こえ、ちゝと聞こえる聲を立てる。頭を上げると高い梢をすれ／＼にかすめて湯氣のやうな雲が風もないのに飛ぶやうに走る。その先きには光のやうな青空が果てしもなく人の視力を吸ひ上げて行く。

私達三人は分れ／＼になつて花をあさり競つた。餘りに遠く隔てると互に呼びかはすその聲が、美しい丸味を持つて自分の聲とは思へない程だ。私は醉ひ心地になつて、日あたりのいゝ斜面を選んで、羊齒を折り敷いて腰をおろした。村の方からは太皷囃しを極く遠くで聞くやうな音がかすかにほがらかに傳はつて來る。足の下に踏みにじられた羊齒の青くさい香を私は耳でかいで居るやうな氣がした。私は極く上品なセンチメンタルな哀傷を覺えた。而して長いとも短いとも定めがたい時が過ぎた。

ふと私は左の耳に人の近づく氣配を感じた。足音を忍んで居るのを知ると私は一種の期待を感じた。而してその足音の主がファニーであれかしと祈つた。足音はやゝ斜後ろから間近になると突然私の眼の前に、野花をうざうざする程摘み集めた見覺えのある經木の手籃が放り出された。私は徐ろに左を見上げた。ファニーが上氣して體中ほゝゑんで立つて居た。

暫く躊躇して居たがファニーは軈て私の命ずるまゝに私の側近く坐つた。二人切りになると彼女は却つて心の

ぎごちなさを感じないやうにも見えた。何か話し合つて居る中に二人はいつしか兄弟のやうな親しみに溶け合つた。彼女は手籠を引きよせて、花を引出しながらその名を教へてくれた。蕃紅花、毛莨、萎蕤、Bloodroot, 小田卷草、ふうりん草、Pokeweed…. Bloodroot はこの通り血が出る。蕃紅花は根が藥になる。Pokeweed の芽生えはアスパラガスの代りに食べられるけれども根は毒だから食べてはいけない。毛莨は可愛いではないか、王の酒杯と云ふ名もある。小田卷草は心變りの花だ。さう云ふ風に云つて來てふと暫く默つた。而して私をぢつと見た。私は彼女の足許に肱をついて横はりながら彼女の顏を見上げた。今までついぞ見た事のなかつた媚びるやうな表情が浮んで居た。彼女はそれを意識せずにやつて居る。それは判る。然し私は不快に思はずには居られなかつた。

There's Fennel for You, and Columbines…………

ふと彼女は狂氣になつたオフェリヤが歌ふ小歌を口ずさんで小田卷草を私に投げつけた。ファニーはとう〳〵童女の境を越えてしまつたのだ。私は自然に對して裏切られた苦々しさを感じて顏をしかめた。私はもう一度顏を擧げて「ファニー」と呼んだ。ファニーはいそ〳〵と直ぐ「何？」と應へたが、私の顏にも聲にも今までとは違つた調子の現れたのを見て取つて、自分も妙に取りかたづけた顏になつた。

「お前はもう童女ぢやない、處女になつてしまつたんだね」

ファニーは見る〳〵額の生際まで眞赤になつた。自分の肢體を私の眼の前に曝すその恥かしさを如何していゝのか解らないやうに、深々とうなだれて顏を擧げようとはしなかつた。手も足も胴も縮められるだけ縮めて私の眼に觸れまいとするやうに彼女は恥ぢに震へた。

火のやうなものが私の頭をぬけて通つた。ファニーは私の言葉に勘違ひをしたな。私はそんな積りで云つたの

ぢやないと氣が付くと、私はたまらない程ファニーがいぢらしく可哀さうになつた。

「そんなに髪を伸ばして組んだりなんぞするからいけないんだ。元のやうにおし」

然しその言葉は、落葉が木の枝から落ちて行くやうに、彼女の心に觸れもしないですべり落ちた。

歸り路にカロラインは私達二人の變り果てた態度にすぐ氣が付いて訝り出した。幼心に私達は口喧嘩でもしたと思つたのだらう、二人の間を行きつもどりつしてなだめようと骨折つた。

この日から私は童女の清淨と歡喜とに燃えた元のやうなファニーの顏を見る事が出來なくなつてしまつた。

＊

永久にこの家から暇乞をすべき日が來た。ファニーは朝から私の前に全く姿を見せなかつた。晝頃馬車の用意が出來たので、私は家族のものに離別の握手をしたが、ファニーは矢張り居なかつた。兄等は廣縁に立つて大きな聲でその名を呼んで見た。無駄だつた。私は庭に降りて收穫小屋の方に行つて見た。その表戸によりかゝつて春の日を浴びながら彼女はぼんやり畑の方を見込んで立つて居た。私の獨りで近づくのを見ると彼女ははつと思ひ直したやうにづか〳〵と歩み寄つて來た。私はせめてはこの間の言譯をして別れたいと思つて居た。二人は握手した。冷え切つたファニーの手は堅く私の手を握つた。私がものを云ふ前にファニーは形ばかり口の隅に笑みを見せながら「Farewell!」と云つた。

「ファニー」

私の續ける暇も置かせずファニーは又「Farewell!」と疊みかけて云つた。而してもう一度私の手を堅く握つた。

（一九一六年三月、新家庭所載）

潮霧

南洋に醱酵して本州の東海岸を洗ひながら北に走る黑潮が、津輕の鼻から方向を變へて東に流れて行く。樺太の氷に閉されてゐた海の水が、寒い重々しい一脈の流れとなつて、根室釧路の沖をかすめて西南に突進する。而してこの二つの潮流の尅する所に濃霧が起る、北人の云ふ潮霧とはそれだ。

六月の或る日、陽のくれ〴〵に室蘭を出て函館に向ふ汽船と云ふ程にもない小さな汽船があつた。

彼はその甲板に立つてゐた。吹き落ちた西風の向うに陽が沈む所だつた。駒ケ嶽は雲に隱れて勿論見えない。禮文華峠の突角すら、魔女の髮のやうに亂れた初夏の雲の一部かと思はれる程朧ろである。陽は叢り立つて嚙み付かうとする雲を光の鞭でたゝき分けながら沈んで行く。笞を受けた雲は眩むばかりの血潮を浴びる。餘つた血潮は怖れをなして飛び退いた無數の鱗雲を、黃に紅に紫に染める。

陽もやがて疲れて、叢雲の血煙を自分の身にも受けて燃え爛れた銅のやうになつた。堅く積み重なつた雲の死骸の間を、斷末魔の苦悶にきり〳〵と獨樂のやうに舞ひながら沈んで行く。垂死の人が死に急ぐやうに陽は夜に急ぐ。彼は氣息を飮んでそれを見つめた。

陽は見る間に少し隱れた。見る間に半分隱れた。見る間に全く隱れた。海は蒼茫として靑み渡つた。ほの黃色い緩やかな呼吸を續けながら空も海の歎きを傳へた。

その瞬間に萬象は聲を絕えた。黃昏は無聲である。そこには叫ぶ聲もない。又さゝやく夜もない。臨終の恐ろ

しい沈默が天と海とを領した。天と海とが沈默そのものになつた。汽罐の騒音と云ふか。そんなものは音ではない、況して聲ではない。陽は永久に死んだ。復た生きる事はないだらう。彼は身を慄はしてさう思つた。

來た方を振返ると大黒島の燈臺の灯だけが、聖者の涅槃のやうな光景の中に、小賢しくも消えたり光つたりしてゐる。室蘭はもう見えない。

その燈臺の灯もやがて眼界から消え失せた。今は夜だ。聞耳を立てるとすつと遠退いてしまふ夜の囁きが海からも空からも聞こえはじめた。何事でも起り得る、又何事も起り得ない夜、意志のやうな又運命のやうな夜、その夜が永久に自分を取りまくのだなと思ふと彼はすくみ上つて船首樓に凝立したまゝ、時の經つのも忘れてゐた。同じ晝ながら時のすゝむにつれて明るみの增すやうに、同じ夜ながら更の闌けるにつれて闇は深まつて行く。あたりには人氣が絶えた。どうすれば船客等は船底にやす〳〵と眠る事が出來るのだらう。今朝陽が上つた故に明日又陽が上るものとは誰が保證し得るのだ。先刻陽の沈むのを見たものは陽の死ぬのを見たのだ。それだのに彼等は平氣だ。一體彼等は何物に自分々々の運命を任せてゐるのだらう。神にか。佛にか。無智にか。彼等は明日の朝この船が函館に着くものと思つてゐるのだ。思ひだもしてはゐないのだ。而して神々よりも勇ましく安心して等しなみに聲も立てずに眠つてゐる。

かく思ひめぐらして彼は夜露にしとつた肩をたゝきながら、船橋の方を見返つた。眞暗な中に唯一人眠らないものがゐた。それは船長だ。その人は夜の隈取りをした朧ろげな姿を動かしながら天を仰いで六分儀を使つてゐた。彼も亦それに引入れられて空を見上げた。永遠を思はせる程高くもなり、眉に逼るほど低くもなる夜の空は無數の星に燐光を放つて遠く擴がつてゐた。

彼はまた思つた。大海の中心に漂ふ小舟を幾千萬哩の彼方にあるあの星々が導いて行くのだ。人の力がこの卑しい勞役を星に命じたのだ。船長は一箇の六分儀を以て星を使役する自信を持つてゐる。而して幾百の、少くとも幾十の生命に對する責任を輕々とその肩に乘せて居る。船客の總ては、船長の頭に宿つた數千年の人智の蓄積に全く信頼して、些かの疑も抱かずにゐるのだ。人が己れの智識に信頼する、是れは人の誇りであらねばならぬ。それを躊躇する自分はおほそれた卑怯者と云ふべきである。

半時間毎に淋しい鐘が鳴つて又若干の時が過ぎた。船は暖潮に乘り入れたらしい。彼は無風の暑苦しさに堪へかねて船首から船尾の方へ行つた。而してそこにある手舵に身をよせて立つて見た。冷々する風がそつと耳をかすめて通る。彼は眼を細めてその涼しさになぶられてゐた。

かくて又若干の時が過ぎた。

突然彼は寒さを顏に覺えて何時のまにか陷つた假睡から眼をさました。風は習々と東方から船尾を拂つて船首へと吹き出してゐるのだ。彼の總身は身戰ひするまで冷え切つてゐた。見ると東の空は眼通りほど幕を張りつめたやうに眞黑な物に蔽はれてゐた。海面が急に高まつたかと思はれる彼方には星一つ光つてはゐなかつた。その黑いものは刻々高さを增して近づいて來る。風が東に廻つて潮霧が襲つて來るのだと氣がついた時には、その黑かつたものは黑眞珠のやうな銀灰色に光つて二三町と思はれる距離に逼つてゐた。海に接した部分は風に吹かれる幕の裾のやうに煽られながら惡夢の物凄さを以て近よつて來る。見る／＼近よつて來る。突然吹きちぎられた濃霧の一塊が彼を包んだ。彼の眼は盲ひた。然しそれは直ぐ船首の方へ飛び去つた。と思ふと第二の塊が來た。それも去つた。第三、第四、それも去つたと思ふ間もなく、彼はとう／＼むせ返るやうな寒い白さの中に包まれてしまつた。眼の前に圓く擴がつてゐた海は段々圓周をせばめて遂には眼前一尺の先きも見透す事が出來なくな

つた。彼は驚き慌てゝ探るやうに手舵を握ると、それを包んだカンバスはぐつしより濕つてかん／＼にこはばつてゐた。檣頭に掲げられた灯が見る／＼薄れて、唯有るか無きかの圓光に變つてしまつた。

彼は船長の居る方へ眼をやつた。その頭に宿る幾千年間の人智の蓄積にすがらうとしたのだ。然し一かたまりの霧は幾千年の人間の努力を塵の如くに踏みにじつてしまつたのではないか。今は姿さへ見えない船長は、胸をさわがせながら茫然として、舷橋の上に案山子のやうに立つてゐる事だらう。

暫くの間船は事もなげに進路を取つて進むやうに見えた。然しそれが徐行に變つたのは十分とはたゝない短い間だつた。突然この不思議な灰色の闇を劈いて時を知らせる鐘が續けざまに鳴り出した。思ふまゝに渦卷き過ぎる濃霧に閉ぢこめられてその鐘の音は陰々として淋しく響いた。

船はかく警戒しながら又十分程進んだが、やがて彼は足の下にプロペラーのゆらめきを感じなくなつた。同時に船足の停つた船體は、三口目の茶の湯茶碗のやうな無氣味な搖れ方をしたまゝ停つて、波のまに／＼漂ひ始めた。

彼の心臓をどきんとさせて突然汽笛が鳴りはためいた。屠所に引かれる牛の吼聲のやうなその汽笛。かすれては吼え、かすれては吼えて、吼えやむと物淋しい鐘が鳴り續く。

彼の肺臓には空氣よりも多くの水氣が注ぎ込まれるやうに思へた。彼は實際むせて咳いた。髪の毛からは滴が襟に傳はつた。而して耳と鼻とは氷のやうに冷えた。陽は復たと生れて來ない、さう思つた彼の豫覺は悲しくも裏書きされて見えた。彼は幾人もの男女が群盲のやうに手さぐりしながら彼に近づくのに氣がつくと、何んとも云へぬ哀れみを覺えながらさう思つた。

汽笛が船中の人の眼をさましたのだ。而して眼をさまされたものは殘らず甲板に這ひ上つて來たのだ。

鐘の音と汽笛の聲との間に總ての船客の歎きと訴へとの聲が泡のはじけるやうに聞こえ出した。

潮霧は東の空から寄せて來る。彼の乘つて來た船は霧の大河の水底に沈んだ一枚の病葉に過ぎない。船客は極度の不安に達した。矢よりも早く流れて行くのに、濃霧の果ては何時來るとも思はれない。狂氣のやうなすゝり泣きが女と小兒とから慘らしく起り出した。葬ひのやうな淋しい鐘は鳴り續ける。總ての人を醉はさないでは置かぬやうに船は停つたまゝかしぎ搖れる。

彼の心には死に捕へられた人の上にのみ臨む物凄いあきらめが首を擡げかけた。

その時奇蹟のやうに風が方向を變へた。西へ／＼と走つて居た霧は足をすくはれたやうに暫くたじろぐと見えたが、見る／＼人々の眼がかすかな視力を回復した。空はぼうつと明るくなつて人々の身のまはりに小さな世界が開けて行つた。やがて遠く高く微笑むやうな青空の一片が望まれた。と思ふ中に潮霧は夢のさめるやうに跡かたもなく消えてなくなつた。それは慌たゞしい心よりもなほ慌たゞしく。

霧が晴れて見ると夜は明けはなれてゐた。眞靑な海、眞靑な空、而して新らしい朝の太陽。

然し霧の過ぎ去ると共に、船の右舷に被ひかゝるやうに聳え立つた惠山の峭壁を見た時には、船員も船客も呀つと魂を消して立ちすくむのみだつた。濃霧に漂ひ流れて居る間に船は知らず／＼かゝる危地に臨んでゐたのを船員すらが知らずにゐたのだ。もう五分霧の晴れるのがおくれたならば！　船自身が魂でゞもあるやうに驚いて向きをかへなかつたならば！　この惡魔のやうな峭壁は遂に船をかみくだいてゐたに違ひないのだ。

函館に錨を下した汽船の舷梯から船客はいそ／＼と笑ひ興じながら岸をめざして降りて行つた。先刻何事が起つたかも忘れ果てた如く彼等は安々と眼を開いて珍らしげもなくあたりを見て居た。

彼はさうはしてゐられなかつた。彼は始めて陽を仰ぐやうに陽を仰いだ。始めて函館を見るやうに函館を見た。新らしい世界が又彼の前に開け亙つた。而して彼は涙ぐんで居た。　（一九一六年七月、時事新報所載）

平凡人の手紙

もう一年になつた。早いもんだ。然し待つてくれ給へ。僕はこゝまで何んの氣なしに書いて來たが、早いもんだとばかりは簡單に云ひ切る事も出來ないやうな氣がする。僕が僕なりにして來た苦心はこの間の時間を長く思はせもする。まあ然し早いもんだと云つておかう。早いもんだ。妻が死んだ時電報を打つたら君はすぐ駈けつけてくれたが、その時僕がどんな顔で君を迎へたかは一寸想像がつかない。僕は多分存外平氣な顔をしてゐた事と思ふがどうだ。その時の君の顔は今でもはつきり心に浮べて見る事が出來る。この男が不幸な目に遇ふ――へえ、そんな事があるのかな、何かの間違ひぢやないのか。そんな顔を君はしてゐた。

僕は實際その後でも愛する妻を失つた夫らしい顔はしなかつたやうだ。この頃は大分肥つても來たし、平氣で諸興行の見物にも出懸けるし、夜もよく眠るし、妻の墓には段々足が遠のくし、相變らず大した奮發もしないで、妻がゐる時とさして變らない生活をしてゐる。ある友達は、僕が野心がなさ過ぎるから皆んなで寄つてたかつて、侮辱でもして激勵しなければ駄目だと云つたさうだ。まあその位に無事泰平でゐる。君が僕の樣子を見たら一つ後妻でも見附けてやらうかと思ふ程だらう。それ程物欲しげな顔をしてゐる時もある。怒つてくれるなよ。決して僕が不人情だからではない、是れが僕の性質なんだ。僕の幸運が僕をさうしたのだ。

實際僕ほど運命に寵愛された男は珍らしいと云つていゝだらう。小さい頃神社や佛閣に參詣した時、僕を連れて行つてくれた人達が引いてくれたお神籤には何時でも大吉と書かれてゐた。五黄の寅と云ふのは強い運星だと

誰でも云つた。實際その通りだつた。少年時代に僕の持つた唯一つの不幸は、非常に羸弱な體質と、それに原因する神經過敏だつたが、それも青春期からは見事に調節されて、兵隊にさへ取られる程の頑健さになつた。

君はそこまで氣が附いてゐるか如何か知らないが、幸福の中でも最も幸福な事は、君も知つてる通りの僕の平凡がさせる業だ。生ひ立ちが平凡であつたばかりではない、行爲事業が平凡であつたばかりではない、對社會的關係が平凡であつたばかりではない、僕の人物が都合よく平凡である事だ。僕の人物は感心によく平均されて出來てゐる。智能も感能も誠によく揃つて出來てゐる。容貌も體格も實によく釣り合つて出來てゐる。而してその總てが十人並みに。そこで僕は幼年時代にはさるやむごとなきお方のお學友と云ふものに選ばれた。中學校を卒業して或る田舍の學校に行く時、僕等の畏敬した友人は僕に「送〇〇君序」を書いて「君資性溫厚篤實」とやつた。大學では友人が僕に話しかける時は大抵改まつた敬語をつかつた、――〇〇君はあまり圓滿だから同輩のやうな氣がしないと云つて。教會に出入する頃は日曜學校の教師にされた。教員をすると校長附主事と云ふ三太夫の役を仰附かつた。家庭では時たま父に反抗したが、毎時でも愚圖々々に妥協がついてゐた。母は、感心な程癇癪を起さない、實直な、働き甲斐のない男として、憐むやうな氣味でゐる。弟は銀行會社の監査役になる事が一番安全な道だと考へてゐる。妹は小兒教育が最も適當だらうと勸める。ある友人は、妻がまだ病氣でゐる時、若し君の細君が不幸な事にでもなると、君の性格は始めて磨きをかけられて立派なものになるだらうと豫言してくれた。僕は決して自分の幸福を見てくれがしに云ふのではないが、僕の是れまでの閱歷や、近しいものゝ觀察は、本質的なものであり、肯綮に中つたものである事を承認せざるを得ない。而して僕の幸福は自分でも認め、他人も認める、この缺點のない平凡から生れ出てゐるのだ。客氣のあつた青年時代には圓滿だと云はれる事にすら不滿を覺えたものだが、この頃のやうに長男が小學校に這入るなどゝ云ふ事になつて見ると、僕は自分の平凡

をありがたく思ふばかりだ。

何んと云つても、「遇ひ難き人生に遇ひて」幸福でゐられると云ふ事は不平の申出やうのない好い事だよ。餘程前に時事新報で何んとか云ふ人が或る月の文藝批評を書いてゐたが、泡鳴と云ふ人の書く作物には下劣な醜陋な人間ばかりが活躍してゐて、讀むのもいやになるさうだ。然し人生の實相はこんなものではないと誰が云ひ得ようと、論者は作者に強く同感を表してゐた。而してその直ぐ後にコェーベルと云ふ人の「問者に答へて」と云ふ文の批評がしてあつて、その西洋人の熱實な道義的氣魄（表現はこの通りではないのだよ。然し意味はさうだつた）には深い尊敬を拂ふと結んであつた。この頃の人は、僕のやうな十人並みの頭では判らない程微妙な皮肉を弄するさうだから、或はその批評家も皮肉を云つてるのかも知れないけれども、まあ文字通りに取るとすると、その人などは隨分不幸な人だと同情に堪へなかつた。下劣、醜陋が實相である人生に居て、熱實な道義的氣魄を憧憬する――出來ない相談を常住腰にぶらさげてゐなければならないと云ふ不幸は全く同情に値する。これ程不幸な人は多分そんなに澤山ゐる譯ではないのだらうけれども。

一寸失敬、今手紙を女中が持つて來たから。

實は僕は餘程以前から云ふのも一寸恥かしいやうな僕らしく平凡な道樂氣を出してゐたのだ。それは妻の一周忌の日に、妻の世話になつてゐた平塚の病院に行つて、そこにゐる患者達に花束を贈らうと思ひ立つてゐたのだ、そんな事を前日か何んかに當意的に、天啓的に發意しないで、何箇月も前から考へてゐたと云ふ事なぞは自分ながら少し幸福過ぎるやうだが、事實だから仕方がない。そこで今在院患者數の問合せに對して病院から返事が來たのだ。明日は當日だからいよ〳〵出かけるのだ。そんな事を思ひながらこの手紙を書いたもんだから「もう一年たつた。早いもんだ」と僕にしては「起し得て輕妙」な事を云つてのけた譯だ。

話を前にもどすのは面倒だから、思ひ出し放題に書き續けるが、妻が死んで百箇日にもならない中に、僕の耳はあつちこつちで僕の後妻の事が噂されてゐるのを聞いた。愛する妻を失つた僕に取つて……一寸又話がそれるよ。愛する妻なぞと書かれたこの手紙が萬一世間に發表されたら、いくら僕が共に語るに足らない平凡人であつても、この言葉だけは世間も齒牙にかけずにはゐられまい。中年を過ぎた男が「愛する妻」！ 非凡にやり切れない事を云ふ男があつたものだ。有髯の男子である以上は、その人が女權論者であらうとも、戀愛神聖論者であらうとも、屹度かう云ふに違ひない。少くとも腹のどん底の方でかう思つてゐると云ふ事を人に見せるにちがひない。不幸な人ほど、言ひ換へれば非凡な人ほど、夫婦關係なぞと云ふものより一段高い所に廣々とした餘裕を持つてゐるものだ。處が僕は平凡で從つて實直だから、思つた通りに愛する妻と云つてしまふ次第だ。……是れから又本筋に話がもどる。愛する妻を失つた僕に取つて、こんな事を聞かされるのは實に嬉しかつた。睦まじかつた夫婦仲が絶えて、嘸さびしく悲しいだらう。一日も早く前にも增した好い妻を探してそのやる瀨ない淋しさ哀しさを慰めてやらう。さう云ふ親切な心持が平凡な僕にも感ぜられるからだ。中にはもつと實際的な立場からこの問題を見てくれる人もある。それも有難くない事はない。ないが、その方は理由なしに感じがぴつたり來なかつた。處で温厚篤實である筈の僕も、偶には柄にない非凡なまねをして、後で腹の底がむづ〳〵するやうな自己嫌惡を經驗する事がないでもない。いゝ例がある。それは丁度百箇日の法事が終つた後で、僕は鹿爪らしい顏をして集まつてくれた家族親類の前に出てから云つた「皆樣が私の後妻の事について色々心配して下さるのは誠に有難く存じます。然し私は今その問題を考へる氣が致しません。と云つて再婚する氣がないと云ふのではないのです。そんな心地になる時が來るかも知れません。その時は無理にも私の方からお願ひするとして、それまでは、無駄な事ですから、この問題はお捨て置き下さい」こんな事を云ふ中にもう實際は腹の底がむづ〳〵して來たも

のだから、言葉がはつきりしなかつたと見える。その晩食事をすまして雜談をしてゐると、親類の一人が僕の所に來て「お前の先刻云つた事は私の胸にこたへた。お前が細君の遺稿を印行した時分にもう私はお前が一生獨身でゐる決心だなと想像してゐた」と眼に涙をためて云つてくれた。「さう云ふ積りではないんです」と僕が平凡なら、從つて實直ならその場で云はなければならなかつたのだ。ところが僕はその人の思ひ違ひをいゝ事にして默つてゐた。非凡でもない奴が非凡なまねをすると兎角こんなディレンマにかゝつて、平凡の純一さを失つてしまふ。その晩は僕も大分不幸だつた。僕は何時女が欲しくなり、女が欲しくなる事によつて妻が欲しくなるか知れなかつたから。

然し是れは僕が平凡振りを發揮して率直に云ふ話だが、僕は今の所では……矢張り率直には云へないな、一寸持つてまはつた但書をつけ加へたくなる――突然運命のやうな女が現れて來さへしなければ――……戀愛關係を作る心持はまだ起つて來ない。妻が死んでから僕にはちよい〱女の友達が出來た。さう云ふ人と心置なく話をするのは非常に樂しいものだ。何んと云つてもそんな氣分は同性からは得られない。然し戀愛と云ふ事が顧慮され出すと、僕は平凡にすげなくそれを斥けてしまふ。特別に異性に對してはにかみやだつた僕が妻の死後、割合に平氣で話でも何んでもするやうになつたのは、多分戀愛の衝動を度外視してゐるためかも知れない。然しどうせ妻に對する具體的な記憶は段々薄れて行くにちがひない。さうなつたら又燒くやうに第二第三の戀を思ふ時が來さうな事だ。そんなぐうたらな考へでゐるなら、何故徹底的に妻の死んだ翌日から後妻を探さなかつたんだ。一年の間も孤獨を守つて來た位なら何故立派に妻の記憶の中にのみ生き徹さないのだ。さう非凡な人は僕のあまりな平凡さを責めるだらう。

全く一言もない彈劾だ。返す言葉もない。然し僕が始めから自覺的にそんな事をしてゐたら、僕の幸運は恐ら

くは僕を捨て去つて、僕は不幸な男になつてゐたらう。それは「大吉」「五黄の寅」に對してもしかねる事のやうに思ふのだ。

偖てこゝまで書いたら十一時になつてしまつた。僕は規則正しくこの時間に寢て、朝は六時に起きる事にしてゐるのだ。この手紙は明日又後を書く事にして、今夜は寢る。

こゝから先きは鉛筆で而かも走書きだから判讀しにくからうが、汽車の中での仕事だから許してくれ給へ。今日は昨日も書いた通り妻の一周忌の日だ。朝花屋に行つて花束を百三十把註文した。それを持つて十一時の汽車に乘つた。かう云ふ不幸は幸運な僕にもちよい〳〵あつて困る事だが、汽車の中でとう〳〵一人の友人に出遇つてしまつたんだ。何處に行く。平塚に。何か儲け事でもあるね。どうして痛事さ。と云ふ風に會話が運んで行くと、どんな友達が如何なる場合に現れて來ようとも無事なんだが、何か儲け事でもあるねと聞かれて、妻の一周忌の記念に世話になつた病院の患者の所に花束を持つて行く所だと云はないと僕の實直な味が沁み出て來ないのだから困つてしまふのだ。おまけに今横濱で別れたばかりのその友達と云ふのは、ある大會社の支配人をしてゐる若手の切れ者で、而かも先年細君を亡くして後妻を迎へたばかりなんだから、その場合の僕には凡そ苦手だつた。型通りに何處へ行くと聞かれたので、來たなと思ひながら平塚にと云ふと、眼から鼻にぬける非凡な人物だけあつて、平塚と云ふ手蔓からすぐ妻の死を考へ出して、もう一周忌になる頃だと云ふ事まで云つてくれたので、僕は氣にしてゐた實直さを悉く暴露しないで濟んだのを有難く思つた。花束の事なんかは感心に噫にも見せなかつた。そこ迄はよかつたがそれからが難題だつた。「丁度いゝ所で遇つた。前から是非遇つて話さう〳〵と思つてゐたのだが、人傳てに聞くと君は獨身で通す氣ださうだね。而かもそんな事を衆人稠座の前で言明したさうだね。まあ默つて聞き給へ」さう疊みかけて攻めよせて來た。實際を云ふと今日ばかりは僕は獨りで考へてゐたかつた

んだ。妻の記憶は兎に角まだはつきり殘つてゐたから。こんな日には――平凡な人間は月並みに命日とか何んとか因緣のつく場合に改つた心になる習慣が膠着してゐるのだから――思ひ存分感傷的になつて見たかつたのだが、友人の機嫌を損じてまで、それを押し通す非凡人の非常識は持ち合さなかつたのだ。「それは尤もだ。僕も自分の經驗から君の心持はよく理解が出來る。僕も妻を失つてから一年間はどんな事があつても再婚はしない覺悟をしてゐた。友人にも君が云つたやうに云ひふらした。全く君は僕のやつた事をその儘まねてゐるやうに見えるよ」尤もその友人は非凡な才人の通有性として女に近づく巧みさと女から尊敬愛慕される色々な資格を具備してゐたから、一つは交際の必要からも來た事ではあるが、藝者と云ふ階級の人達には大持てに持てゝゐた。その一點が僕とは全然違ふ。然し待つてくれ給へ、僕も妻が死んでから女の友達が出來たと云つたね。友人の場合には女の方がちやほやするのだし、僕は――僕の方から女性に心が牽かれてゐた、とするとこの點でも僕の方が上手かも知れないとその時も友人の前で思ひ返した。そして悉く恐縮した。「所が君は自分の勝手ばかり考へてはゐられないのだ。君には第一事業がある。世の中に出て思ふ存分活動して少しでも餘計人間の爲めに盡さうと思へばどうしても後顧の患を絕たなければならない。僕なんぞは一年間と云ふもの業務の一部分である交際から絕緣して、宴會に出られないのが一番困つた。子供を雇人の手に委ねて夜晝家を明けて置く事はとても出來ないからね」ところが幸なことには僕には定職がないんだ。僕は朝から晩まで家の內にのらくらして子供ばかり相手にしてゐる。母なんぞは自分だけとしては僕がかうやつて父の遺產を守つてゐるのが結句安心だと考へてゐるやうだが、親類なぞに遇つた時、新御主人はこの頃どちらへお勤めですなぞとやられると身を切るやうな思ひをするらしい。僕が外國にゐて一かど勉強をしてゐる積りの時、ある女と話しをしてゐた序でに、何をしてゐる男と見えると聞いて見たら躊躇なくお前は loafer だと云つてのけられた事がある。僕は平凡人だけに小さい時分から人の

下積みになつてこつ〳〵と働く事はさう苦にならない質なのに、かう云はれる事は少し過ぎた次第だが、よく考へると僕が何んにもしないのは天才や非凡人が何んにもしないのとは趣がちがつて、何かする爲めに暫く何んにもしないのではない、天から何んにもしないのだ。母や兄弟が氣を揉んでくれるのも全く無理がない。然し彼等としても僕が今更ら何處かの屬官にでもなつて齷齪するのは品が惡いと思ふだらうから、このまゝ暫く無爲を通さうかとも思つてゐるのだ。唯人間の爲めに何んにもしないと云ふ非難は一番度膽にこたへて、飯を喰ふのも憚られる。全くすまない譯だ。一體皆んなは、どうすれば人間の爲めになるかと云ふ、僕なんかには一寸見當のつけやうもない問題を、感心によく辨へてゐると見えて、少しも不安なげに仕事にいそしんでゐるのが羨ましい。然しこんな事が分らないのが僕の幸運な所以かも知れない。その代り子供の番は可なり忠實にやつてゐる。いつかトルストイの息子さんが日本に來た時有名な警句の名人が、トルストイの總ての創作の中で一番劣惡な創作はあの息子だと云つたさうだが、僕には創作と云つては子供三人の外にないのだから、……大變だ、もう平塚に汽車が着くから又その……（以下缺文）

先刻は手紙に夢中になつてゐてもう少しで乘り越しをする所だつた。今停車場前の茶屋で上り列車を待ち合せてゐる間に又續けて書く。

病院の事を先きに書かうか、友人の話の續きにしようか。僕は病院の事を先きに君に書きたいが君としては話の聯絡が亂れて困ると思ふから、友人の話を書かう。「君は又年老いたお母さんの有る事を考へなければいけないね。僕の母なんぞは割りに若くつてね、元氣はいゝししたが、一度はゆつくり京都大阪の方でも見物に連れて行かう行かうと思つてゐる中に、仕事が忙しくてそのまゝにしてゐると、突然腦溢血で亡くなつてしまつた。生みの苦勞をさせて、育てさせて、おまけに孫の世話まで燒かせて、樂もさせない中に死なしてしまつたのは實に痛

恨に堪へない。是れも僕が早く再婚しなかつた罰だ」

「妻さへゐればどんなに忙しくつても家の事を委せておいて旅位はして來られたんだし、さう孫の世話ばかり見させないでも濟んだんだ。是れは特に注意するが、取り返しのつかない後悔をしないやうにし給へよ」僕は子供を持たない中から親子の關係を僕なりに解釋して一つの格言を作つてゐた。子供が生れた時に神興的に口を衝いて出でもすると生氣がつくのだけれども、そこは平凡人の悲しさで、是れも理窟でこねあげた格言だからつまらないもんだが、然しそれを口外する事だけは、子供が生れて僕が親たるの資格を得た時にしようと思つて、胸の中に保留して置いた。子供が生れた。そこで僕は虎の子のやうにしてゐた格言を發表した。「子を持つて知る子の恩」と云ふのだ。何んだと君は思ふだらう。所が物好きな奴もゐるもので、僕の弟に小說を商賣にしてゐるのがあつて、僕を小說の材料に使用した時、兄貴の言葉としてはこれ位を奇拔なものとして置くより仕方がないと思つたのだらう、その格言を文句の中に取り入れたもんだ。然るに或る都合で僕が校正を見てやる事になつたら「子を持つて知る親の恩」としてあつた。多分、植字の方で書き損じと思つたのだらう。僕は大切な格言が臺なしになつては大變だから、インキ赤々と親と云ふ字を抹殺して子の字に訂正して置いた。所がどうだ、雜誌が出て見ると、麗々と「子を持つて知る親の恩」と直つてゐるではないか。その時僕はつく〴〵と自分の平凡さが一面識もない植字工にまで知れ渡つてゐるのに驚かされた。僕が一かど功名顏をしてこの格言を父に云つて聞かしたら、父は澁い顏をして、そんな事を誰にでも彼にでも云ふものではない、人がお前を異を立て奇を好む男としてしまふぞとたしなめた。そこでこれから本題に這入るが僕にはとうから祖父と孫との關係について一つの格言が僕の胸の中に出來てゐるのだ。それは前に云つた親子關係の格言よりもも少し平凡離れがしてゐると自信してゐる格言だ。是れは僕が祖父の資格を得たら發表すべきものだ。がこゝに一寸君の爲めに片鱗を見せるが、僕のその格

言を標準にして友人の言葉を考へて見ると、どうも喰ひちがつた所が出來て來るのだ。非凡な彼の思想と平凡な僕のそれとの間に喰ひ違ひの出來るのは不思議でも何んでもない。で僕はもう一度僕の格言を考へ直さうと思つた――植字工が自信をもつて僕のもう一つの格言を訂正してくれたやうに。何んと云つても彼は十目の見る所十指の指す所天下晴れて非凡な才能を持つて生れた人だ。僕は又誰にでも平凡な男と云ふ値ぶみをされる人間だ。だから、どうしてももう一度考へて見る必要がある。親がその子の不幸を共感する場合には自分の都合や、世の中の習俗や、周圍の顧慮なぞはまづ後廻しにして、その子の切實な哀愁をそのまゝ受け入れてやる事が、その子を一番喜ばし一番勵まし一番慰めるのだし、子は亦子でその親の心情に溺れこむ事が親を一番快くするものだと僕の思つてゐたのには訂正を加へねばならないさうだ。親は假令さうしてくれても、子の方では親の不自由を思ひやり、蛆が湧きはしないかと云ふ周圍の顧慮にも耳を傾け、君の所謂悲哀の中に浸り切る事なんぞはなるべく早く切り上げて、善後策を講ずるのが孝道にも叶ひ人道にも合ふやうだ。「さうか、そんなら君は必ずしも再婚を拒絶してゐるんではないんだね。何しろ僕は妻を亡くした友人に遇ふと先づ孤獨を守るなんて云ふ事は他人に公言するなと嚴しく口どめするのだ。僕の周圍には隨分澤山鰥夫が出來るが、再婚をしたもので後悔してゐるのは一人もないよ。世間には君の想像もしない程澤山女がゐるよ。僕が一つ立派な人を見つけて上げよう。もう櫻木町だね。ぢや失敬お母さんに宜しく」

僕はぼんやり取り殘された。過重な大問題を裕に僕に惠んでくれて、同情深い僕の友人は重荷でも捨てたやうに、洋杖を振り廻しながら身も輕く列車を出て行つた。何しろ頭のめぐりが鈍いんだから、胃弱の男が山のやうな珍味の前に坐らされたやうに、暫く僕はうんざりして首垂れてしまつた。こんなに物が解らないでは僕は是れからまあどうして世間を渡ればいゝんだらうと思つた。まあ何んでもいゝ手紙でも書けと思つて、それから夢中

で君に手紙を書き出したんだ。

手紙を書くと云へば先刻上り列車が一つ通つたんだが、手紙に夢中になつてゐたから一汽車延ばす事にした。こんな下らない手紙一つ書くのに悠々と汽車まで延ばしてゐると聞いたら、世間の人は惘れて物が云へないだらう。實際自分でも少々自分を持て餘す次第だが、それにつけても幸福はかうしてゐないと來てはくれないものらしい。

そこで今度は病院の事を書く。松原を通ると村井弦齋さんの家が見えた。秋口から結核菌が腸についたので妻は下痢を始めた。ふと或る雜誌に弦齋さんの書いた記事で妻は胃腸の妙藥と云ふのを發見したんださうだ。それは楢の根の皮を煎じて飮むのださうだ。楢なら北海道に澤山ある。僕は早速手紙を僕の教へた學生の所に出して賴んでやつた。早速送つてよこしてくれた。學生の手紙によれば深い雪の中を山の奧に分け入つて、何尺も積つた雪を掘り起し、堅く凍つた土を割りくだいて採收したのだから、澤山あげられないのが殘念だとしてあつた。澤山でないと云ふのが兩手では持ち切れない程あつた。僕は早速弦齋さんの所に行つてその用法を尋ねようとした。弦齋さんの所の書生さんは二三度けゞんな顏をして弦齋さんと僕との間を取次いでくれたが、結局楢はたらの木の間違ひだと云ふ事が知れた。病院に歸つてから妻と大笑ひをした。所が今日弦齋さんの家を見ると、巨人のやうな古い楢の木の根元に蹲つてせつせと雪をかき分ける二人の學生の姿が、ぎら〳〵光る八月の太陽の光の中ではつきり想像に上つた。「是れで先生の奥さんが治れば隨分いゝなあ」そんな聲までが聞こえるやうに思つた。僕の心は急にわく〳〵し出した。そして涙が他愛もなく眼がしらににじんだ。

矢張り一年前の通りに病院の手前の洗濯屋では醫員や看護婦の白衣や帽子がふはりと風を孕んで、病院の人達が舞踏でもやつてるやうに、魂もなく中有に整列して動いてゐた。あの時からすると醫員の大多數は東京の本病

院の人と交代して、見知り越しの顏は副院長がゐるばかりだつた。相變らず黑く痩せてゐた。それがなつかしかつた。醫者には珍らしい挨拶の下手な口少なゝこの人を妻は一番快く思つてゐた。僕はその人に花束の事を賴むと事務所を出て、妻の病房の所に行つて見た。その病房と云ふのは八、六、三疊の三間から成る獨立の家屋で、少しの風にも習々と枝を鳴らす若い松林の間にあつた。庭前の方から見ると患者が住まつてゐた。竹垣の傍には四寸程の丸石が昔の通りに立つてゐた。それは庭に落ちて死んでゐた雀を妻が自分で葬つてやつたその墓石なのだ。看護婦や附添の人がじろ／＼僕を見るので、僕はさう長い間その邊にゐる事が出來なかつたから、そのまゝ引き返して花壇の方に行つた。眞夏の晝にこの邊を歩く患者は幸ひ一人もゐなかつたので、嘗て妻と散歩した時腰かけた藤棚の下のベンチに足を休めた。そこで僕は熱い涙を零したと君は思ふだらう。所が僕は疎な考へ事もせず、忙しく歩き廻りもしない癖に、何んだか、どうしていゝのか分らない程だるくつてぐつすり寝込んでしまつた。全く以て平凡人には不似合な所作だと君は思ふだらうが、それは君が自然のはたらきを恐らくは理解してゐない事からさう思ふのかも知れない。哀愁が極まると人は夢も見ない熟眠に陷るものだ。それは自然が人知れずする慈善の一つだ。で、僕が眠りに落ちたと云ふ事は、結局、僕がどれ程平凡人らしく愛する妻を悲しんでゐたかの證據になる譯だ。

ふと眼を覺ました時は、總てのものが活々と日に輝いたこの見慣れた景色を、却つて夢ではないかと驚いた位だつた。いぎたなく寝たと見えて、涎が衣物の肩の所を圓く濡してゐた。氣味惡く流れ出た油汗をハンケチで拭くとやつと人心地がついた。喉がひどく乾く外には、何と云つて望ましいものもない位僕は飽き足つてゐた。

眼の前の白砂の上には女物らしいゴム草履の跡が、靜かに人の歩いて行つた形をそのまゝに語つてゐた。それは妻の足跡ではないかと思ふほどそこいらは舊の通りだつた。ところが妻と云ふ一人の女は二度と顏出しの出來ぬ

やうに、「死」と云ふ奴がこの地上から綺麗にこそぎ取つてしまつたのだ。そんな事を考へると彼奴の惡戯が一寸ほゝゑましくなる。やがては彼奴が、腐つた手拭のやうな香のする古雜巾で、生存の意義も知らず、人類の爲めにも役に立たず、一身の處理すら出來ない僕と云ふ男を、穢ない染斑だと云はんばかりな澁い顏をして丹念に拭き取つてしまふ時が來るのだ。それは間違ひのない事だ。僕は勝手に色んな虛言をつきもしたし又是れからだつてつきもしようが、この事ばかりは何んと云つても虛言にしやうがないんだ。どんな大箆棒な虛言つきでも、一生に一度は本當を云はないではゐられないのだ。それは死ぬと云ふ事だ。この正直一つで大概な虛言までは寬大に見てやつてもいゝやうな氣が僕はする。こんな我儘な僕が同時に非凡人だつたら――そんな事はあり得よう筈はないが、論理上、假定的前提はどう作つても構はないのだから――歷史にさへ不朽の功業とか、不滅の名聲とかを殘して世間迷惑な事にもならうが、僕にはそんな事は大丈夫ないのだから、暫くの間小さくなつて人間社會の片隅にゐる位の事は許して貰つてもいゝと思ふのだ。

一體非凡な人達が兎角幸福を感じないのはこの「死」と云ふ奴に何んとか打ち勝たうとするからではないのだらうか。ところが僕となると愛する妻を彼奴に奪はれながらあまり不幸さうな顏をしてゐないのはどう云ふ譯だ。僕はこの手紙の始めで幸運な筈の男だと書いたが、而してその幸運から幸福が生れると書いたが、考へて見ると幸運と幸福とは道伴れぢやない。現在妻が死ぬ二年程前に、或る友人が占ひを見て貰つてくれたが、それには、明かに妻は三度娶れば三度とも死ぬと書いてあつた。兄弟喧嘩で近親とは離れ〴〵になると書いてあつた。事業をすれば衆人の親分になるやうな事業をして一時は成功するが、人望をつなぐ事が出來ないで失敗してしまふとも書いてあつた。尤も、その占ひには生年月日時間を書き込んで賴まなければならないのだが、僕の生れた時間が判然しないので、或は僕より少し早くかおそく生れた人の卦が出てゐるのかも判らない。三人死ぬと云はれた

妻の一人が死んだ事だけは的中してゐる。もしこの占ひが幼年時代のそれを凌いで正確なものだとすると、僕はあんまり幸運な男だとは云へさうもない。然るに君が僕を不幸ではあり得ない男だと思つてゐる通りに、僕は中中幸福を感じてゐる。妻を失つてもその爲めに悶死したり再婚などは思ひもよらないと思ふ程不幸ではない。是れは多分死と云ふ奴が萬事の形をつけてくれると高を括る平凡な見方から出てゐるに違ひない。こんは事を云ふと靈魂不滅論者などは何んと云ふしみつたれた根性の男だらうと僕を惡むよりも憫殺したくなるだらう。基督教徒などは、あんな人生觀とも云へない人生觀によつて生きようとするのだから平凡に終るのも尤もだ。可哀さうな男もあつたものだと高い所から同情を垂れてくれるに違ひない。所が僕の知つてる範圍で云ふと、基督教徒程再婚を手取早くする連中はないやうだが、あれは一體どうしたものだらう。男女戀愛の神聖を主張した本元は基督教だと云ふ事だし、靈魂不滅殊に地上生活で鍛錬を受けた人格を持つたまゝの靈魂不滅を唱道するのは固より基督教だが、再婚した人が死んで後、あの世で二人の細君に出喰はしたらどうする積りだらう。その男は戀愛神聖論者だから前の妻に對しても後の妻に對しても、心からの愛を感じてゐるのでなければ、夫婦になつた筈がない。一方の妻が極樂にをり一方の妻が地獄にでもゐてその男が片方の妻だけに遇へるなら、別條はないが、基督教徒の事だから大抵は皆んな極樂に行くだらう。さうなると問題が大分紛糾して來る。あの世では一夫多妻が許されるのであらうか。さうでないとするとその男は二人の中の一人を選んで一夫一婦の愛情を繼續する事になるのだらうか。或は地上に於て人格發揮鍛錬の唯一の壇場と云つてもいゝ親子、兄弟、朋友、夫婦などの愛情は撥無されてしまふのだらうか。さうなつては靈魂に人格や個性を結び附けて考へる事が出來るもんだらうか。基督教徒は勿論それ等の事には解決がついてゐて、實行をしてゐる事だらうから別に妙な氣もしまいが、僕が若し今の通り平凡なまゝであんな信仰を持たせられたら、苦しくつて再婚は戲談にも出來ないやうな氣がするよ。そ

こに行くと僕の方は死と云ふもので畢がつくのだから大いに呑氣なものだ。その爲めに僕は割合幸福なんだと獨りできめてゐる。

そら次ぎの汽車がもう來る。今度はさすがに僕も乘りおくれてはゐられない。

汽車に乘つてから思ひ出したから書き添へる。一體何んだつて寒暄の挨拶もせず健康も尋ねず、こんな放圖もない事を長々と書いてよこしたのだと君は訝るだらう。それは一年もたつと君までが或は再婚を勸めてくれはしないかと思ふからだ。そのお志は實に有難い。僕は再婚しないと云ふのではない。唯もう少し考へさせてくれ給へ、結婚したくなつたらこつちから申出るからそれまで待つてゐてくれ給へ。僕のやうに平凡な點からのみ幸福を見出してゐる人間は、眞似にも非凡人のしたやうな事をすると取り返しのつかない怪我になるから、自分が自分の尺度を探し出すまで永い眼で見てゐてくれ給へ。さう云ひたいまでだつたのだ。さうしたら、頭が惡いもんだから大いに脫線してしまつたのだ。然し脫線しない位なら僕は天からこんな平凡な事は書きはしない。書かずに置いては僕の用が足りなくなる。判るかな。では左樣なら。

（一九一七年七月、新潮所載）

カインの末裔

一

長い影を地にひいて、痩馬の手綱を取りながら、彼は默りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその後からとぼとぼとついて行つた。

北海道の冬は空まで逼つてゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌプリの麓に續く膽振の大草原を、日本海から内浦灣に吹きぬける西風が、打寄せる紆濤のやうに後から後から吹き拂つて行つた。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこゞめて風に刃向ひながら默つたまゝ突つ立つて居た。昆布嶽の斜面に小さく集まつた雲の塊を眼がけて日は沈みかゝつてゐた。草原の上には一本の樹木も生えてゐなかつた。心細い程眞直な一筋道を、彼と彼の妻だけが、よろ〳〵と歩く二本の立木のやうに動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のやうにいつまでも默つて歩いた。馬が溺りをする時だけ彼は不承無精に立ちどまつた。妻はその暇にやうやく追ひついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすますと二人は又默つて歩き出した。

「こゝらおやぢ（熊の事）が出るずら」

四里にわたるこの草原の上で、たつた一度妻はこれだけの事を云つた。慣れたものには時刻と云ひ、所柄と云

ひ、熊の襲來を恐れる理由があつた。彼はいま〳〵しさうに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん〳〵太くなつて國道に續く所まで來た頃には日は暮れてしまつてゐた。物の輪廓が圓味を帶びずに、堅いまゝで黑ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が來た。

着物は薄かつた。而して二人は饑ゑ切つてゐた。妻は氣にして時々赤坊を見た。生きてゐるのか死んでゐるのか、兎に角赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ默つてゐた。

國道の上にはさすがに人影が一人二人動いてゐた。大抵は市街地に出て一杯飲んでゐたのらしく、行違ひにしたゝか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼は酒の香をかぐと急にゑぐられるやうな渇きと食慾とを覺えて、すれ違つた男を見送つたりしたが、いま〳〵しさに吐き捨てようとする唾はもう出て來なかつた。糊のやうに粘つたものが唇の合せ目をとぢ附けてゐた。

內地ならば庚申塚か石地藏でもある筈の所に、眞黑になつた一丈もありさうな標示杭が斜になつて立つてゐた。そこまで來ると干魚をやく香ひがかすかに彼の鼻をうつたと思つた。彼ははじめて立ち停つた。痩馬も歩いた姿勢をそのまゝにのそりと動かなくなつた。鬣と尻尾だけが風に從つてなびいた。

「何んて云ふだ農場は」

背丈の圖拔けて高い彼は妻を見おろすやうにしてかうつぶやいた。

「松川農場たら云ふだが」

「たら云ふだ？　白痴」

彼は妻と言葉を交はしたのが癪にさはつた。そして馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩き出した。暗くなつた谷を隔てゝ少し此方よりも高い位の平地に、忘れたやうに間をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人氣

のない所よりも却つて自然を淋しく見せた。彼はその灯を見るともう一種のおびえを覺えた。人の氣配をかぎつけると彼は何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。それを意識する事が彼をいやが上にも佛頂面にした。「敵が眼の前に來たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」とでも云ひさうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帶をしめ直した。夫の顔付には氣もつかない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の後について歩いた。

K市街地の町端れには空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は髑髏のそれのやうな眞暗な眼を往來に向けて開いてゐた。五軒目には人が住んでゐたがうごめく人影の間に圍爐裡の根粗朶がちよろ／＼と燃えるのが見えるだけだつた。六軒目には蹄鐵屋があつた。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじつて火花が飛び散つてゐた。店は熔爐の火口を開いたやうに明るくて、馬鹿々々しくだゞつ廣い北海道の七間道路が向側まではつきりと照らされてゐた。片側町ではあるけれども、兎に角家並みがあるだけに、强ひて方向を變へさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鐵屋の前の火の光に照りかへされて濛々と渦巻く姿を見せた。仕事場の鞴の圍りには三人の男が働いてゐた。鐵砧にあたる鐵槌の音が高く響くと疲れ果てた彼の馬さへが耳を立てなほした。彼はこの店先きに自分の馬を引つ張つて來る時の事を思つた。妻は吸ひ取られるやうに暖かさうな火の色に見惚れてゐた。二人は妙にわく／＼した心持になつた。

蹄鐵屋の先きは急に闇が濃くなつて、大抵の家はもう戸じまりをしてゐた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返つた濁聲がもれる外には、眞直な家並みは廢村のやうに寒さの前にちゞこまつて、電信柱だけが、けうとい唸りを立てゝゐた。彼と馬と妻とは前の通りに押し默つて歩いた。歩いては時折り思ひ出したやうに立ち停つた。立ち停つては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思ふと、彼等はもう町はづれに來てしまつて居た。道がへし折られたやうに曲つて、その先きは、眞闇な窪地に、急な勾配を取つて下つてゐた。彼等はその突角まで行つて、又立ち停つた。遙か下の方からは、うざ〳〵する程繁り合つた濶葉樹林に風の這入る音の外に、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえてゐた。

「聞いて見ずに」

妻は寒さに身をふるはしながらかううめいた。

「汝聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまつた彼の聲は地の中からでも出て來たやうだつた。妻は荷をゆりあげて鼻をすすり〳〵取つて返した。一軒の家の戸を敲いて、やうやく松川農場のありかを教へてもらつた時は、彼の姿を見分けかねる程遠くに來てゐた。大きな聲を出す事が何んとなく恐ろしかつた。恐ろしいばかりではない、聲を出す力さへなかつた。そして跛脚をひき〳〵又歸つて來た。

彼等は眠くなる程疲れ果てながら又二三町程歩かねばならなかつた。そこに下見圍、板葺の眞四角な二階建が外の家並みを壓して立つてゐた。

妻が默つたまゝ立ち停つたので、彼はそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほんたうを云ふと彼は始めからこの建物がそれに違ひないと思つてゐたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまつたのだ。もう進退谷まつた。彼は道の向側の立樹の幹に馬を繋いで、燕麥と雜草とを切りこんだ亞麻袋を鞍輪からほどいて馬の口にあてがつた。ぽりゝ〳〵と云ふ齒ぎれのいゝ音がすぐ聞こえ出した。彼と妻とは又道を横切つて、事務所の入口の所まで來た。そこで二人は不安らしく顔を見合はせた。妻がぎごちなさうに手を擧げて

髪をいぢつてゐる間に彼は思ひ切つて半分ガラスになつてゐる引戸を開けた。滑車がけたゝましい音をたてゝ鐵の溝を滑つた。がたぴしする戸ばかりをあつかひ慣れてゐる彼の手の力があまつたのだ。妻がぎよつとするはずみに背の赤坊も眼を覺まして泣き出した。帳場に居た二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼と妻とが泣く赤坊の始末もせずにのそりと突つ立つてゐた。

「何んだ手前達は、戸を開けつぱなしにしくさつて風が吹き込むでねえか。這入るのなら早く這入つて來う」

紺のあつしをセルの前垂れで合せて、樫の角火鉢の横座に坐つた男が眉をしかめながらかう怒鳴つた。人間の顔――殊にどこか自分より上手な人間の顔を見ると彼の心はすぐ不貞腐れるのだつた。刃に刃向ふ獸のやうに捨鉢になつて彼はのさ〳〵と圖拔けて大きな五體を土間に運んで行つた。妻はおづ〳〵と戸を閉めて戸外に立つてゐた、赤坊の泣くのも忘れ果てるほどに氣を顚倒させて。

聲をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭の不似合な、長顔の男だつた。農民の間で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るやうなものだつた。彼の心は緊張しながらもその男の顔を珍らしげに見入らない譯には行かなかつた。彼は辭儀一つしなかつた。

赤坊が縊り殺されさうに戸の外で泣き立てた。彼はそれにも氣を取られてゐた。

上り框に腰をかけてゐたもう一人の男はやゝ暫く彼の顔を見つめてゐたが、浪花節語りのやうな妙に張りのある聲で突然口を切つた。

「お主は川森さんの縁のものぢやないんかの。どうやら顔が似とるぢやが」

今度は彼の返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場さんにも川森から話いた筈ぢやがの。主がの血筋を岩田が後に入れて貰ひたい云うてな」

又彼の方を向いて、

「さうぢやろがの」

それに違ひなかつた。然し彼はその男を見ると蟲酸が走つた。それも百姓に珍らしい長い顏の男で、禿げ上つた額から左の半面にかけて火傷の跡がてら／＼と光り、下瞼が赤くべつかんこをしてゐた。而して唇が紙のやうに薄かつた。

帳場と呼ばれた男はその事なら呑み込めたと云ふ風に、時々上眼で睨み／＼、色々な事を彼に聞き糺した。而して帳場机の中から、美濃紙に細々と活字を刷つた書類を出して、それに廣岡仁右衛門と云ふ彼の名と生れ故郷とを記入して、よく讀んでから判を押せと云つて二通つき出した。仁右衛門（是れから彼と云ふ代りに仁右衛門と呼ばう）は固より明盲だつたが、農場でも漁場でも鑛山でも飯を食ふ爲めにはさう云ふ紙の端に盲判を押さなければならないといふ事は心得てゐた。彼は腹がけの丼の中を探り廻してぼろ／＼の紙の塊りをつかみ出した。而して楮の皮を剝ぐやうに幾枚もの紙を剝がすと、眞黑になつた三文判がころがり出た。彼はそれに氣息を吹きかけて證書に孔のあく程押しつけた。而して渡された一枚を判と一緒に丼の底にしまつてしまつた。是れだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だつた。戸外では赤坊がまだ泣きやんでゐなかつた。

「俺ら錢こ一文も持たねえからちよつぴり借りたいだが」

赤坊の事を思ふと、急に小錢がほしくなつて、彼がかう云ひ出すと、帳場は惘れたやうに彼の顏を見詰めた、――こいつは馬鹿な面をしてゐる癖に油斷のならない横紙破りだと思ひながら。而して事務所では金の借貸は一切しないから緣者になる川森からでも借りるがいゝし、今夜は何しろ其處に行つて泊めて貰へと注意した。仁右衛門はもう向腹を立てゝしまつてゐた。默りこくつて出て行かうとすると、そこに居合はせた男が一緒に行つて

やるから待てととめた。さう云はれて見ると彼は自分の小屋が何處にあるのかを知らなかつた。

「それぢや帳場さん何分宜しう賴むがに、鹽梅よう親方の方にも云うてな。廣岡さん、それぢや行くべえかの。何んとまあ孩兒の痛ましくさかぶぞい。ぢやまあおやすみ」

彼は器用に小腰をかゞめて古い手提鞄と帽子とを取り上げた。裾をからげて砲兵の古靴をはいてゐる樣子は小作人と云ふよりも雜穀屋の鞘取りだつた。

戸を開けて外に出ると事務所のボン〳〵時計が六時を打つた。ぴゆう〳〵と風は吹き募つてゐた。赤坊の泣くのに困じ果てゝ妻はぽつりと寂しさうに玉蜀黍殼の雪圍ひの影に立つてゐた。

足場が惡いから氣を附けろと云ひながら彼の男は先きに立つて國道から畦道に這入つて行つた。大濤のやうなうねりを見せた收穫後の畑地は、廣く遠く荒凉として擴がつてゐた。眼を遮るものは葉を落した防風林の細長い木立だけだつた。ぎら〳〵と瞬く無數の星は空の地を殊更ら寒く暗いものにしてゐた。仁右衞門を案內した男は笠井と云ふ小作人で、天理敎の世話人もしてゐるのだと云つて聞かせたりした。

七町も八町も步いたと思ふのに赤坊はまだ泣きやまなかつた。縊り殺されさうな泣き聲が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行つた。

やがて畦道が二つになる所で笠井は立ち停つた。

「この道をな、かう行くと左手にさへて小屋が見えようがの。な」

仁右衞門は黑い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添へて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募つてゐた。笠井はくど〳〵とそこに行き着く注意を繰り返して、仕舞ひに金が要るなら川森の保證で少し位は融通すると附け加へるのを忘れなかつた。然し仁右衞門は小屋の所在が知れると後は聞い

てゐなかつた。餓ゑと寒さがひし〳〵と應へ出してがた〳〵身をふるはしながら、挨拶一つせずにさつさと別れて歩き出した。

玉蜀黍殼といいたどりの莖で圍ひをした二間半四方程の小屋が、前のめりにかしいで、海月のやうな低い勾配の小山の半腹に立つてゐた。物の饐ゑた香と堆肥の香が恣にたゞよつてゐた。小屋の中にはどんな野獸が潜んでゐるかも知れないやうな氣味惡さがあつた。赤坊の泣き續ける暗闇の中で仁右衞門が馬の背からどすんと重いものを地面に卸す音がした。瘦馬は荷が輕くなると、鬱積した怒りを一時にぶちまけるやうに嘶いた。遙かの遠くでそれに應へた馬があつた。後は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんだ手で荷物を提げながら小屋に這入つた。長く火の氣は絕えてゐても、吹きさらしから這入るとさすがに氣持よく暖かつた。二人は眞暗な中を手さぐりで有り合せの古蓆や藁をよせ集めて、どつかと腰を据ゑた。妻は大きな溜息をして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取つた　乳房をあてがつて見たが乳は涸れて居た。赤坊は堅くなりかゝつた齒齦でいやと云ふほどそれを嚙んだ。而して泣き募つた。

「腐孩子！　乳首食ひちぎるに」

妻は慳貪にかう云つて、懷から鹽煎餅を三枚出して、ぽり〳〵と嚙みくだいては赤坊の口にあてがつた。

「俺らがにも越せ」

いきなり仁右衞門が猿臂を延ばして殘りを奪ひ取らうとした。二人は默つたまゝで本氣に爭つた。食べるものと云つては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴」

吐き出すやうに夫がかう云つた時、勝負はきまつてゐた。妻は爭ひ負けて大部分を掠奪されてしまつた。二人

は又押し默つて闇の中で足しない食物を貪り喰つた。然しそれは結局食慾をそゝる媒介になる計りだつた。二人は喰ひ終つてから幾度も固唾を飲んだが、火種のない所では南瓜を煮る事も出來なかつた。赤坊は泣きづかれに疲れてほつぽり出されたまゝ何時の間にか寢入つてゐた。

居鎭まつて見ると隙間もる風は刄のやうに鋭く切り込んで來てゐた。二人は申し合せたやうに兩方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱き寢をしながら藁の中でがつ〳〵と震へてゐた。然しやがて疲勞は總てを征服した。死のやうな眠りが三人を襲つた。

遠慮會釋もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のやうな闇が大河の如く東へ東へと流れた。マツカリヌプリの絶巓の雪だけが燐光を放つてかすかに光つてゐた。荒くれた大きな自然だけがそこに甦つた。

かうして仁右衛門夫婦は、何處からともなくK村に現れ出て、松川農場の小作人になつた

二

仁右衛門の小屋から一町程離れて、K村から倶知安に通ふ道路沿ひに、佐藤與十と云ふ小作人の小屋があつた。與十と云ふ男は小柄で顏色も青く、何年たつても齡をとらないで、働きも甲斐なささうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だつた。あすこの嚊は子種を他處から貰つてゞもゐるんだらうと農場の若い者などが寄ると戲談を言ひ合つた。女房と云ふのは體のがつしりした酒喰ひの女だつた。大人數なために稼いでも〳〵貧乏してゐるので、だらしのない汚い風はしてゐたが、その顏付は割合に整つてゐて、不思議に男に逼る淫蕩な色を湛へてゐた。

仁右衛門がこの農場に這入つた翌朝早く、與十の妻は袷一枚にぼろ〳〵の袖無を着て、井戸――と云つても味噌

樽を埋めたのに赤錆の浮いた上層水が四分目ほど溜つてる――の所で、アネチョコと云ひ慣はされた船來の雜草の根に出來る薯を洗つてゐると、そこに一人の男がのそりとやつて來た。六尺近い背丈を少し前こゞみにして、榮養の悪い土氣色の顏が眞直に肩の上に乘つてゐた。當惑した野獸のやうで、同時に何處か奸譎い大きな眼が太い眉の下でぎろ〳〵と光つてゐた。それが仁右衞門だつた。彼は與十の妻を見ると一寸ほゝゑましい氣分になつて、

「おつかあ、火種べあつたらちよつぴり分けて呉れずに」

と云つた。與十の妻は犬に出遇つた猫のやうな敵意と落着きを以て彼を見た。而して見つめたまゝで默つてゐた。

仁右衞門は脂のつまつた大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、

「俺らあすこの小屋さ來たもんだのし。乞食では無えだよ」

と云つてにこ〳〵した。罪のない顏になつた。與十の妻は默つて小屋に引きかへしたが、眞暗な小屋の中に寢亂れた子供を乘りこえ〳〵圍爐裡の所に行つて粗朶を一本提げて出て來た。仁右衞門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。而して何か一言二言話しあつて小屋の方に歸つて行つた。

この日も昨夜の風は吹き落ちてゐなかつた。空は隅から隅まで底氣味惡く晴れ渡つてゐた。そのために風は地面にばかり吹いてゐるやうに見えた。佐藤の畑は兎に角秋耕をすましてゐたのに、それに隣つた仁右衞門の畑は見渡す限りかまどがへしとみづひきとあかざととびつかとで茫々としてゐた。ひき殘された大豆の殼が風に吹かれて剽輕な音を立てゝゐた。あちこちにひよろ〳〵と立つた白樺はおほかた葉をふるひ落してなよ〳〵とした白い幹が風にたわみながら光つてゐた。小屋の前の亞麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い莖が青い色を

見せてゐた。後は小屋も畑も霜の爲めに白茶けた鈍い狐色だつた。仁右衞門の淋しい小屋からはそれでもやがて白い炊煙がかすかに漏れはじめた。屋根からともなく圍ひからともなく湯氣のやうに漏れた。

朝食をすますと夫婦は十年も前から住み馴れてゐるやうに、平氣な顔で畑に出かけて行つた。二人は仕事の手配もきめずに働いた。然し、冬を眼の前にひかへて何を先きにすればいゝかを二人ながら本能のやうに知つてゐた。妻は、模樣も分らなくなつた風呂敷を三角に折つて露西亞人のやうに頰かむりをして、赤坊を背中に背負ひこんで、せつせと小枝や根つこを拾つた。仁右衞門は一本の鍬で四町にあまる畑の一隅から掘り起しはじめた。外の小作人は野良仕事に片をつけて、今は雪圍ひをしたり薪を切つたりして小屋のまはりで働いてゐたから、畑の中に立つてゐるのは仁右衞門夫婦だけだつた。少し高い所からは何處までも見渡される廣い平坦な耕作地の上で、二人は巢に歸り損ねた二匹の蟻のやうにきり〳〵と働いた。果敢ない勞力に句點をうつて、鍬の先きが日の加減でぎらつ〳〵と光つた。津波のやうな音をたてゝ風のこもる霜枯れの防風林には烏もゐなかつた。荒れ果てた畑に見切りをつけて鮭の漁場にでも移つて行つてしまつたのだらう。

晝少しまはつた頃仁右衞門の畑に二人の男がやつて來た。一人は昨夜事務所にゐた帳場だつた。今一人は仁右衞門の緣者と云ふ川森爺さんだつた。眼をしよぼ〳〵させた一徹らしい川森は仁右衞門の姿を見ると、怒つたらしい顔付をしてづか〳〵とその傍によつて行つた。

「汝や辭儀一つ知らねえ奴の、何條云うて俺らがには來くさらぬ。帳場さんのう知らしてくさずば、いつまでも知んやうも無えだつた。先づもつて小屋さ行ぐべし」

三人は小屋に這入つた。入口の右手に寢藁を敷いた馬の居所と、皮板を二三枚ならべた穀物置場があつた。左の方には入口の掘立柱から奥の掘立柱にかけて一本の丸太を土の上にわたして土間に麥藁を敷きならしたその上

に、ところ〴〵蓆が擴げてあつた。その眞中に切られた圍爐裡にはそれでも眞黑に煤けた鐵瓶がかゝつてゐて、南瓜のこびりついた缺椀が二つ三つころがつてゐた。川森は恥ぢ入る如く、

「やばつちい所で」

と云ひながら帳場を爐の横座に招じた。

そこに妻もおづ〳〵と這入つて來て、恐る〳〵頭を下げた。それを見ると仁右衞門は土間に向けてかつと唾を吐いた。馬はびくんとして耳をたてたが、やがて首をのばしてその香をかいだ。

帳場は妻のさし出す白湯の茶碗を受けはしたがそのまゝ飮まずに蓆の上に置いた。而してむづかしい言葉で昨夜の契約書の內容を云ひ聞かし初めた。小作料は三年每に書換への一反步二圓二十錢である事、滯納には年二割五分の利子を附する事、村税は小作に割り宛てる事、仁右衞門の小屋は前の小作から十五圓で買つてあるのだから來年中に償還すべき事、作跡は馬耕して置くべき事、亞麻は貸附地積の五分の一以上作つてはならぬ事、博奕をしてはならぬ事、隣保相助けねばならぬ事、豐作にも小作料は割增しをせぬ代りどんな凶作でも割引は禁ずる事、場主に直訴がましい事をしてはならぬ事、掠奪農業をしてはならぬ事、それから云々、それから云々。

仁右衞門は云はれる事がよく呑み込めはしなかつたが、腹の中では糞を喰らへと思ひながら、今まで働いてゐた畑を氣にして入口から眺めてゐた。

「お前は馬を持つてる癖に何んだつて馬耕をしねえだ。幾日もなく雪になるだに」

帳場は抽象論から實際論に切り込んで行つた。

「馬はあるが、プラオが無えだ」

仁右衞門は鼻の先きであしらつた。

「借りればいゝでねえか」

「錢子が無えかんな」

會話はぷつんと途切れてしまつた。帳場は二度の會見でこの野蠻人をどう取扱はねばならぬかを呑み込んだと思つた。面と向つて埒のあく奴ではない。うつかり女房にでも愛想を見せれば大事になる。

「まあ辛抱してやるがいゝ。こゝの親方は函館の金持で物の解つた人だかんな」

さう云つて小屋を出て行つた。仁右衛門も戸外に出て帳場の元氣さうな後姿を見送つた。川森は財布から五十錢銀貨を出してそれを妻の手に渡した。何しろ帳場につけとゞけをして置かないと萬事に損が行くから今夜にも酒を買つて挨拶に行くがいゝし、プラオなら自分の所のものを貸してやると云つてゐた。仁右衛門は川森の言葉を聞きながら帳場の姿を見守つてゐたが、やがてそれが佐藤の小屋に消えると、突然馬鹿らしい程深い嫉妬が頭を襲つて來た。彼はかつと喉をからして痰を地べたにいやと云ふ程はきつけた。

夫婦きりになると二人は又別々になつてせつせと働き出した。日が傾きはじめると寒さは一入に募つて來た。汗になつた所々は氷るやうに冷たかつた。仁右衛門は然し元氣だつた。彼の眞闇な頭の中の一段高い所とも覺しいあたりに五十錢銀貨がまんまるく光つてどうしても離れなかつた。彼は鍬を動かしながら眉をしかめてそれを拂ひ落さうと試みた。然しいくら試みても光つた銀貨が落ちないのを知ると白痴のやうににつこりと獨笑ひを漏らしてゐた。

昆布嶽の一角には夕方になると又一叢の雲が湧いて、それを目がけて日が沈んで行つた。

仁右衛門は自分の耕した畑の廣さを一わたり滿足さうに見やつて小屋に歸つた。手ばしこく鍬を洗ひ、馬糧を作つた。而して鉢卷の下ににじんだ汗を袖口で拭つて、炊事にかゝつた妻に先刻の五十錢銀貨を求めた。妻がそ

れをわたすまでには二三度横面をなぐられねばならなかつた。仁右衛門はやがてぶらりと小屋を出た。妻は獨りで淋しく夕飯を食つた。仁右衛門は一片の銀貨を腹がけの丼に入れて見たり、出して見たり、親指で空に彈き上げたりしながら、市街地の方に出懸けて行つた。

九時――九時と云へば農場では夜更けだ――を過ぎてから仁右衛門はいゝ酒機嫌で突然佐藤の戸口に現れた。佐藤の妻も晩酌に醉ひしれてゐた。與十と鼎座になつて三人は圍爐裡をかこんで又飲みながら打ち解けた馬鹿話をした。仁右衛門が自分の小屋に着いた時には十一時を過ぎてゐた。妻は燃えかすれる圍爐裡火に背を向けて、綿のはみ出た蒲團を柏に着てぐつすり寝込んで居た。仁右衛門は悪戯者らしくよろけながら近寄つて、わつと云つて乘りかゝるやうに妻を抱きすくめた。驚いて眼を覺ました妻は然し笑ひもしなかつた。騒ぎに赤坊が眼をさました。妻が抱き上げようとすると、仁右衛門は遮りとめて妻を横抱きに抱きすくめてしまつた。

「さられまんだ肝べ焼けるか。かう可愛がられても肝べ焼けるか。可愛い獸物ぞい汝は。見ずに。今にな俺ら汝に絹の衣裝べ着せてこすぞ。帳場の和郎（彼は所きらはず唾をはいた）が寝言べこく暇に、俺ら親方と膝つきあはして見せるかんな。白痴奴。俺らが事誰れ知るもんで。汝や可愛いぞ。心から可愛いぞ。宜し。宜し。汝や是れ嫌ひでなかんべさ」

と云ひながら懐から析木に包んだ大福を取り出して、その一つをぐちや／＼に押しつぶして氣息のつまる程妻の口にあてがつてゐた。

三

から風の幾日も吹きぬいた擧句に雲が青空をかき亂しはじめた。霙と日の光とが追ひつ追はれつして、やがて

何處からともなく雪が降るやうになつた。仁右衛門の畑はさうなるまでに一部分しか鋤き起されなかつたけれども、それでも秋播小麥を播きつけるだけの地積は出來た。妻の勤勞のお蔭で一冬分の燃料にも差支ない準備は出來た。唯困るのは食料だつた。馬の背に積んで來ただけでは幾日分の足しにもならなかつた。仁右衛門はある日馬を市街地に引いて行つて賣り飛ばした。而して麥と粟と大豆とを可なり高い相場で買つて歸らねばならなかつた。馬がないので馬車追ひにもなれず、彼は居食ひをして雪が少し硬くなるまでぼんやりと過ごしてゐた。

根雪になると彼は妻子を殘して木樵に出かけた。マツカリヌプリの麓の拂下官林に入りこんで彼は骨身を惜しまず働いた。雪が解けかゝると彼は岩內に出て鰊場稼ぎをした。而して山の雪が解けてしまふ頃に、彼は雪焼けと潮燒けで眞黑になつて歸つて來た。彼の懷は十分重かつた。

仁右衛門は農場に歸るとすぐ逞しい一頭の馬と、プラオと、ハーローと、必要な種子を買ひ調へた。

彼は每日々々小屋の前に仁王立になつて、五箇月間積り重なつた雪の解けた爲めに膿み放題に膿んだ畑から、惠み深い日の光に照らされて水蒸氣の濛々と立ち上る樣を待ち遠しげに眺めやつた。マツカリヌプリは每日紫色に暖かく霞んだ。林の中の雪の叢消えの間には福壽草の莖が先づ綠をつけた。つぐみとしじふからとが枯枝をわたつてしめやかなさゝ啼きを傳へはじめた。腐るべきものは木の葉と云はず小屋と云はず存分に腐つてゐた。

仁右衛門は眼路の限りに見える小作小屋の幾軒かを眺めやつて糞でも喰らへと思つた。未來の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年經つた後には彼は農場一の大小作だつた。五年の後には小さいながら一箇の獨立した農民だつた。十年目には可なり廣い農場を讓り受けてゐた。その時彼は三十七だつた。帽子を被つて二重マントを着た讃岐長靴ばきの彼の姿が、自分ながら小恥しいやうに想像された。

とう／＼播種時が來た。山火事で燒けた熊笹の葉が眞黑にこげて奇蹟の護符のやうに何處からともなく降つて

來る播種(たねまき)時が來た。畑の上は急に活氣立つた。市街地にも種物商や肥料商が入り込んで、たつた一軒の曖昧屋(ごけや)からは夜毎に三味線の遠音が響くやうになつた。

仁右衞門は逞しい馬に、磨(と)ぎすましたプラオをつけて、畑におりたつた。耡(す)き起される土壤は適度の濕氣をもつて、裏返るにつれてむせるやうな土の香を送つた。それが仁右衞門の血にぐん／＼と力を送つてよこした。

總てが順當に行つた。播(ま)いた種は伸びをするやうにずん／＼生ひ育つた。仁右衞門はあたり近所の小作人に對して二言目(ふたことめ)には喧嘩面(けんくわづら)を見せたが、六尺ゆたかの彼に楯つくものは一人もなかつた。佐藤なんぞは彼の姿を見るとこそ／＼と姿を隱した。「それ『まだか』が來おつたぞ」と云つて人々は彼を恐れ憚(はゞか)つた。もう顏がありさうなものだと見上げても、まだ顏はその上の方にあると云ふので、人々は彼を「まだか」と諢名(あだな)してゐたのだ。

時々佐藤の妻と彼との關係が、人々の噂に上るやうになつた。

一日働き暮すとさすが勞働に慣れ切つた農民達も、眼の廻るやうなこの季節の忙(いそが)しさに疲れ果てゝ、夕飯もそこ／＼に寢込んでしまつたが、仁右衞門ばかりは日が入つても手が痒(かゆ)くてしやうがなかつた。彼は星の光をたよりに野獸のやうに畑の中で働き廻つた。夕飯は圍爐裡の火の光でそこ／＼にしたゝめた。而してはぶらりと小屋を出た。而して農場の鎭守の社(やしろ)の傍の小作人集會所で女と會つた。

鎭守は小高い密樹林の中にあつた。ある晩仁右衞門はそこで女を待ち合はしてゐた。風も吹かず雨も降らず、音のない夜だつた。女の來(き)やうは思ひの外早い事も、腹の立つ程おそい事もあつた。仁右衞門はだゞつ廣(びろ)い建物の入口の所で膝をだきながら耳をそばだてゝゐた。

枝に殘つた枯葉が若芽にせきたてられて、時々かさつと地に落ちた。天鵞絨(びらうど)のやうに滑(なめ)かな空氣は動かないま

まに彼をいたはるやうに押し包んだ。荒くれた彼の神經もそれを感じない譯には行かなかつた。物なつかしいやうなごやかな心が彼の胸にも湧いて來た。彼は闇の中で不思議な幻覺に陷りながら淡くほゝゑんだ。

足音が聞こえた。彼の神經は一時に叢立つた。然し軈て彼の前に立つたのはたしかに女の形ではなかつた。

「誰だ汝や」

低かつたけれども闇をすかして眼を据ゑた彼の聲は怒りに震へてゐた。

「お主こそ誰だと思うたら廣岡さんぢやな。何んしに今時こないな所にゐるのぞい」

仁右衛門は聲の主が笠井の四國猿奴だと知るとかつとなつた。笠井は農場一の物識りで金持だ。それだけで癇癪の種には十分だ。彼はいきなり笠井に飛びかゝつて胸倉を引つゝかんだ。かーつと云つて出した唾を危くその面に吐きつけようとした。

この頃浮浪人が出て毎晩集會所に集まつて焚火なぞをするから用心が惡い、と人々が云ふので、神社の世話役をしてゐた笠井は、おどかしつける積りで見廻りに來たのだつた。彼は固より樫の棒位の身じたくはしてゐたが、相手が「まだか」では口もきけない程縮んでしまつた。

「汝や俺らが媾曳の邪魔べこく氣だな、俺らがする事に汝が手だしはいんねえだ。首ねつこべひんぬかれんな」

彼の言葉はせき上る氣息の間に押しひしやげられてぐわら／＼震へてゐた。

「そりや邪推ぢやがなお主」

と笠井は口早に、そこに來合せた仔細と、丁度いゝ機會だから折入つて賴む事がある旨を云ひだした。仁右衛門は卑下して出た笠井にちよつと興味を感じて胸倉から手を離して、閾に腰をすゑた。暗闇の中でも、笠井が眼をきよとんとさせて火傷の方の半面を平手で撫でまはしてゐるのが想像された。而してやがて腰を下ろして、今

までの慌てかたにも似ず悠々と煙草入を出してマッチを擦つた。折入つて頼むと云つたのは小作一同の地主に對する苦情に就いてゞあつた。一反歩二圓二十錢の畑代はこの地方にない高相場であるのに、どんな凶年でも割引きをしないために、小作は一人として借金をしてゐないものはない。金では取れないと見ると帳場は立毛の中に押收してしまふ。從つて市街地の商人からは眼の飛び出るやうな上前をはねられて食代を買はねばならぬ。だから今度地主が來たら一同で是非とも小作料の値下げを要求するのだ。笠井はその總代になつてゐるのだが一人では心細いから仁右衛門も出て力になつてくれと云ふのであつた。

「白痴なことこくなてえば。二兩二貫が何高値いべ。汝たちが骨節は稼ぐやうには造つてねえのか。親方には半文の借りもした覺えは無えからな、俺らその公事には乘んねえだ。汝先づ親方にべなつて見べし。こゝのがよりも慾にかゝるべえに。……藝も無え事に可愛くも無え面突んだすなてば」

仁右衛門は又笠井のてか〱した顔に唾をはきかけたい衝動にさいなまれたが、我慢してそれを板の間にはき捨てた。

「さうまあ一概には云ふもんでないぞい」

「一概に云つたが何條惡いだ。去ね。去ねべし」

「さう云へど廣岡さん……」

「汝や拳固こと喰らひていがか」

女を待ちうけてゐる仁右衛門にとつては、この邪魔者の長居してゐるのがいま〱しいので、言葉も仕打ちも段々荒らかになつた。

執着の強い笠井も立たなければならなくなつた。その場を取りつくらふ世辭を云つて、怒つた風も見せずに坂

を下りて行つた。道の二股になつた所で左に行かうとすると、闇をすかしてゐた仁右衛門は吼えるやうに「右さ行くだ」と嚴命した。笠井はそれにも背かなかつた。左の道を通つて女が通つて來るのだ。

仁右衛門は又獨りになつて闇の中にうづくまつた。彼は憤りにぶる〳〵震へてゐた。生憎女の來やうがおそかつた。怒つた彼には我慢が出來切らなかつた。女の小屋に荒れこむ勢で立ち上ると彼は白晝大道を行くやうな足どりで、藪道をぐん〳〵歩いて行つた。ふと或る疎藪の所で彼は野獸の敏感さを以て物のけはひを嗅ぎ知つた。彼ははたと立ち停つてその奥をすかして見た。しんとした夜の靜かさの中で惡謔ふやうな淫らな女の潜み笑ひが聞こえた。邪魔の這入つたのを氣取つて女はそこに隱れてゐたのだ。嗅ぎ慣れた女の臭ひが鼻を襲つたと仁右衛門は思つた。

「四つ足めが」

叫びと共に彼は疎藪の中に飛びこんだ。とげ〳〵する觸感が、寝る時のほか脫いだ事のない草鞋の底に二足三足感じられたと思ふと、四足目は軟かいむつちりした肉體を踏みつけた。彼は思はずその足の力をぬかうとしたが、同時に狂暴な衝動に驅られて、滿身の重みをそれに託した。

「痛い」

それが聞きたかつたのだ。彼の肉體は一度に油をそゝぎかけられて、そゝり立つ血のきほひに眼がくるめいた。彼はいきなり女に飛びかゝつて、所きらはず毆つたり足蹴にしたりした。女は痛いと云ひつゞけながらも彼にからまりついた。而して噛みついた。彼はとう〳〵女を抱きすくめて道路に出た。女は彼の顏に鋭く延びた爪をたてゝ逃れようとした。二人はいがみ合ふ犬のやうに組み合つて倒れた。倒れながら爭つた。彼はとう〳〵女を取り逃がした。はね起きて追ひにかゝると、一目散に逃げたと思つた女は、反對に抱きついて來た。二人は五

に情に堪へかねて又毆つたり引つ掻いたりした。彼は女のたぶさを摑んで道の上をずる〳〵引つ張つて行つた。集會所に來た時は二人とも傷だらけになつてゐた。有頂天になつた女は一塊の火の肉となつて、ぶる〳〵震へながら床の上にぶつ倒れてゐた。彼は闇の中に突つ立ちながら燒くやうな興奮の爲めによろめいた。

四

春の天氣の順當であつたのに反して、その年は六月の初めから寒氣と淫雨とが北海道を襲つて來た。旱魃に饑饉なしと云ひ慣はしたのは水田の多い内地の事で、畑ばかりのK村なぞは雨の多い方はまだ仕易いとしたものだが、その年の長雨には溜息を漏らさない農民はなかつた。

森も畑も見渡すかぎり眞靑になつて、掘立小屋ばかりが色を變へずに自然をよごしてゐた。時雨のやうな寒い雨が閉ざし切つた鈍色の雲から止途なく降りそゝいだ。低味の畦道に敷きならべたスリッパ材はぶか〳〵と水の爲めに浮き上つて、その間から眞菰が長く延びて出た。蝌蚪が畑の中を泳ぎ廻つたりした。郭公が森の中で淋しく啼いた。小豆を板の上に遠くでころがすやうな雨の音が朝から晩まで聞こえて、それが小休むと濕氣を含んだ風が木でも草でも萎ましさうに寒く吹いた。

ある日農場主が函館から來て集會所で寄り合ふと云ふ知らせが組長から廻つて來た。仁右衛門はそんな事には頓着なく朝から馬力をひいて市街地に出た。運送店の前にはもう二臺の馬力があつて、脚をつまだてるやうにしよんぼりと立つ輓馬の鬣は、幾本かの鞭を下げたやうに雨によれて、その先きから水滴が絶えず落ちてゐた。馬の背からは水蒸氣が立ち昇つた。戸を開けて中に這入ると、馬車追ひを内職にする若い農夫が三人土間に焚火をしてあたつてゐた。馬車追ひをする位の農夫は、農夫の中でも冒險的な氣の荒い手合だつた。彼等は顏にあたる焚

火のほてりを手や足を擧げて防ぎながら、長雨につけこんで村に這入つて來た博徒の群の噂をしてゐた。捲き上げようとして這入り込みながら散々手を燒いて驛亭から追ひ立てられてゐるやうな事も云つた。

「お前も一番乘つて儲かれや」

とその中の一人は仁右衞門をけしかけた。店の中はどんよりと暗く濕つてゐた。仁右衞門は暗い顏をして唾をはき捨てながら、焚火の座に割り込んで默つてゐた。ぴしや／＼と氣疎い草鞋の音を立てゝ、往來を通る者がたまさかにあるばかりで、この季節の賑ひ立つた樣子は何處にも見られなかつた。帳場の若いものは筆を持つた手を頰杖にして居眠つてゐた。かうして彼等は荷の來るのをぼんやりして二時間あまりも待ち暮した。聞くに堪へないやうな若者共の馬鹿話も自然と陰氣な氣分に抑へつけられて、動ともすると、沈默と欠伸が擴がつた。

「一はたりはたらずに」

突然仁右衞門がさう云つて一座を見廻した。彼はその珍らしい無邪氣な微笑をほゝゑんでゐた。一同は彼のにこやかな顏を見ると、吸ひ寄せられるやうになつて、云ふ事をきかないではゐられなかつた。蓆が持ち出された。四人は車座になつた。一人は氣輕く若い者の机の上から湯呑茶碗を持つて來た。もう一人の男の腹がけの中からは骰子が二つ取り出された。

店の若い者が眼をさまして見ると、彼等は興奮した聲を押しつぶしながら、無氣になつて勝負に耽つてゐた。

若い者は一寸誘惑を感じたが氣を取り直して、

「困るでねえか、さうした事店頭でおつ廣げて」

と云ふと、

「困つたら積荷こと探して來う」

と仁右衛前は取り合はなかつた。

晝になつても荷の囘送はなかつた。仁右衛門は自分から云ひ出しながら、面白くない勝負ばかりしてゐた。何方に變るか自分でも分らないやうな氣分が驀地に惡い方に傾いて來た。氣を腐らせれば腐らす程彼のやまは外れてしまつた。彼はくさ〳〵してふいと座を立つた。相手が何とか云ふのを振り向きもせずに店を出た。雨は小休なく降り續けてゐた。晝餉の煙が重く地面の上を這つてゐた。

彼はむしやくしやしながら馬力を引つぱつて小屋の方に歸つて行つた。だらしなく降りつゞける雨に草木も土もふやけ切つて、空までがぽとりと地面の上に落ちて來さうにだらけてゐた。面白くない勝負をして焦立つた仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮え切らない景色だつた。彼は何か思ひ切つた事をしてゞも胸をすかせたく思つた。丁度自分の畑の所まで來ると佐藤の年嵩の子供が三人學校の歸途と見えて、荷物を斜に背中に背負つて、頭からぐつしより濡れながら、近路する爲めに畑の中を歩いてゐた。それを見ると仁右衛門は「待て」と云つて呼びとめた。振り向いた子供達は「まだか」の立つてゐるのを見ると、三人とも恐ろしさに顏の色を變へてしまつた。毆りつけられる時するやうに腕をまげて目八分の所にやつて、逃げ出す事もし得ないでゐた。

「童子連は何條云うて他人の畑さ踏み込んだ。百姓の餓鬼だに畑のう大事がる道知んねえだな。來う」

仁王立ちになつて睨みすゑながら彼は怒鳴つた。子供達はもうおびえるやうに泣き出しながら怯づ〳〵仁右衛門の所に歩いて來た。待ちかまへた仁右衛門の鐵拳はいきなり十二程になる長女の瘦せた頰をゆがむ程たゝきつけた。三人の子供は一度に痛みを感じたやうに聲を揚げてわめき出した。仁右衛門は長幼の容赦なく手あたり次第に毆りつけた。

小屋に歸ると、妻は蓆の上にぺつたんこに坐つて馬にやる藁をざくり〳〵切つてゐた。赤坊はいんちこの中で

章魚のやうな頭を襤褸から出して、軒から滴り落ちる雨垂れを見やつてゐた。彼の氣分にふさはない重苦しさが漲つて、運送店の店先に較べては何から何まで便所のやうに穢かつた。彼は默つたまゝで唾をはき捨てながら、馬の始末をするとすぐ又外に出た。雨は膚まで沁み徹つてぞく〳〵寒かつた。彼の癇癪は更につのつた。彼はすた〳〵と佐藤の小屋に出かけた。が、ふと集會所に行つてる事に氣がつくとその足ですぐ神社をさして急いだ。

集會所には朝の中から五十人近い小作者が集まつて場主の來るのを待つてゐたが、晝過ぎまで待ちぼけを喰はされてしまつた。場主はやがて帳場を伴につれて厚い外套を着てやつて來た。上座に坐ると勿體らしく神社の方を向いて柏手を打つて默拜をしてから、居合はせてる者等には半分も解らないやうな事をしたり顏に云ひ聞かした。小作者等はけゞんな顏をしながらも、場主の言葉が途切れると尤もらしくうなづいた。やがて小作者等の要求が笠井によつて提出せらるべき順番が來た。彼は先づ親方は親で小作は子だと說き出して、小作者側の要求を可なり強く云ひ張つた後で、それは然し無理な御願ひだとか、物の解らない自分達が考へる事だからだとか、そんな事は先づ後廻しでもいゝ事だとか、自分の云ひ出した事を自分で打ち壞すやうな添言葉を附け加へるのを忘れなかつた。仁右衞門はちやうどそこに行き合せた。彼は入口の羽目板に身をよせてぢつと聞いてゐた。

「からまあ色々とお願ひしたぢやからは、お互も心をしめて帳場さんにも迷惑をかけぬだけにはせずばなあ（ここで彼は一同を見渡した樣子だつた）。『萬國心をあはせてな』と天理敎のお歌樣にもある通り、定まつた事は定まつたやうにせんとならんぢやが、多い中ぢやに無理もないやうなものゝ、亞麻などを親方、ぎやうさんにつけたものもあつて、まこと濟まん次第ぢやが、無理が通れば道理もひつこみよるで、なりませんぢやもし」

仁右衞門は場規もかまはず畑の半分を亞麻にしてゐた。で、その言葉は彼に對するあてこすりのやうに聞こえ

た。

「今日なども顏を出しよらん横道者もありますぢやで……」

仁右衞門は怒りの爲めに耳がかあんとなつた。笠井はまだ何か滑らかにしやべつてゐた。

場主がまだ何か訓示めいた事を云ふらしかつたが、やがてざわ／＼と人の立つ氣配がした。仁右衞門は氣息を殺して、出て來る人々を窺つた。場主が帳場と一緒に、後から笠井に傘をさしかけさせて出て行つた。勞働で若年の肉を鍛へたらしい頑丈な場主の姿は、何處か人を憚からした。仁右衞門は笠井を睨みながら見送つた。やゝ暫くすると場内から急にくつろいだ談笑の聲が起つた。而して二三人づゝ何か語り合ひながら小作者等は小屋をさして歸つて行つた。やゝ遲れて伴れもなく出て來たのは佐藤だつた。小さな後姿は若々しくつて青年のやうだつた。仁右衞門は木の葉のやうに震へながらづか／＼と近づくと、突然後ろからその右の耳のあたりを毆りつけた。不意を喰つて倒れんばかりによろけた佐藤は、後も見ずに耳を押へながら、猛獸の遠吠を聞いた兎のやうに、前に行く二三人の方に一目散にかけ出して、その人々を楯に取つた。

「汝や乞食か盜賊か畜生か。よくも汝が餓鬼共さ敎唆けて他人の畑こと踏み荒したな。毆ちのめしてくれずに。來」

仁右衞門は火の玉のやうになつて飛びかゝつた。當の二人と二三人の留男とは毬になつて赤土の泥の中をころげ廻つた。折り重なつた人々がやうやく二人を引き分けた時は、佐藤は何處かしたゝか傷を負つて死んだやうに青くなつてゐた。仲裁したものはかゝり合ひから已むなく、仁右衞門に附添つて話をつけるために佐藤の小屋まで廻り道をした。小屋の中では佐藤の長女が隅の方に丸まつて痛い／＼と云ひながらまだ泣きつゞけてゐた。爐を間に置いて佐藤の妻と廣岡の妻とはさし向ひに罵り合つてゐた。佐藤の妻は安坐をかいて長い火箸を右手に握

つてゐた。廣岡の妻も背に赤坊を背負つて、早口に云ひ募つてゐた。顏を血だらけにして泥まみれになつた佐藤の後から仁右衛門が這入つて來るのを見ると、佐藤の妻は譯を聞く事もせずにがた／＼震へる齒を噛み合せて猿のやうに唇の間からむき出しながら仁右衛門の前に立ちはだかつて、飛び出しさうな怒りの眼で睨みつけた。物が云へなかつた。いきなり火箸を振り上げた。仁右衛門は他愛もなくそれを奪ひ取つた。噛みつかうとするのを押しのけた。而して仲裁者が一杯飲まうと勸めるのも聽かずに妻を促して自分の小屋に歸つて行つた。佐藤の妻は素跣のまゝ仁右衛門の背に罵詈を浴せながら怒精のやうについて來た。而して小屋の前に立ちはだかつて、轉るやうに半ば夢中で仁右衛門夫婦を罵りつゞけた。

　仁右衛門は押し默つたまゝ圍爐裡の横座に坐つて佐藤の妻の狂態を見つめてゐた。それは仁右衛門には意外の結果だつた。彼の氣分は妙にかたづかないものだつた。彼は佐藤の妻が自分から突然離れたのを怒つたりをかしく思つたり惜しんだりしてゐた。仁右衛門が取り合はないので彼女はさすがに小屋の中には這入らなかつた。而して皺枯れた聲でをめき叫びながら雨の中を歸つて行つてしまつた。仁右衛門の口の邊にはいかにも人間らしい皮肉な歪みが現れた。彼は結局自分の智慧の足りなさを感じた。而してまゝよと思つてゐた。

　總ての興味が全く去つたのを彼は覺えた。彼は少し疲れてゐた。始めて本當の事情を知つた妻から嫉妬がましい執拗い言葉でも聞いたら少しの道樂氣もなく、どれ程な殘虐な事でもやり兼ねないのを知ると、彼は少し自分の心を恐れねばならなかつた。彼は妻に物を云ふ機會を與へない爲めに次から次へと命令を連發した。而して晩い晝飯をしたゝか喰つた。がらつと箸を措くと泥だらけなびしよぬれな着物のまゝで又ぶらりと小屋を出た。この村に這入りこんだ博徒等の張つてゐた賭場をさして彼の足はしやう事なしに向いて行つた。

五

よく是れほどあるもんだと思はせた長雨も一箇月程降り續いて漸く晴れた。一足飛びに夏が來た。何時の間に花が咲いて散つたのか、天氣になつて見ると、林の間にある山櫻も、辛夷も、青々とした廣葉になつてゐた。蒸風呂のやうな氣持の悪い暑さが襲つて來て、畑の中の雑草は作物を乘りこえて葎のやうに延びた。雨の爲め傷められたに相違ないと、長雨の只一つの功德に農夫等の云ひ合つた昆蟲も、すさまじい勢で發生した。甘藍のまはりにはえぞしろてふが夥しく飛び廻つた。大豆にはくちかきむしの成蟲がうざ／＼する程集まつた。麥類には黑穗の、馬鈴薯にはべと病の徵候が見えた。虻と蚋とは自然の斥候のやうにもや／＼と飛び廻つた。濡れたまゝに積み重ねておいた汚れ物をかけわたした小屋の中からは、あらん限りの農夫の家族が武具を持つて畑に出た。自然に刃向ふ必死な爭鬪の幕は開かれた。

鼻歌も歌はずに、汗を肥料のやうに畑の土に滴らしながら、農夫は腰を二つに折つて地面に囓り附いた。耕馬は首を下げられるだけ下げて、乾き切らない土の中に脚を深く踏みこみながら絶えず尻尾で虻を追つた。しゆつと音をたてゝ襲つて來る毛の束にしたゝか打たれた虻は、血を吸つて丸くなつたまゝ、馬の腹からぽとりと地に落ちた。仰向けになつて鋼線のやうな脚を伸したり縮めたりして藻掻く様は命の薄れるものゝやうに見えた。暫くすると然しそれはまた器用に翅を使つて起きかへつた。而してよろ／＼と草の葉裏に這ひよつた。而して十四五分の後にはまた翅をはつてうなりを立てながら、眼を射るやうな日の光の中に勇ましく飛び立つて行つた。

夏物が皆無作と云ふ程の不出來であるのに、亞麻だけは平年作位にはまはつた。青天鵞絨の海となり、瑠璃色の絨氈となり、荒くれた自然の中の姫君なる亞麻の畑はやがて小紋のやうな果をその纖細な莖の先きに結んで美

しい狐色に變つた。

「こんなに亞麻をつけては仕様が無えでねえか。畑が枯れて跡地には何んだつて出來はしねえぞ。困るな」

或る時帳場が見廻つて來て、仁右衛門にかう云つた。

「俺らがも困るだ。汝が困ると俺らが困るとは困りやうが土臺ちがわい。口が干上るんだあぞ俺らがのは」

仁右衛門は突慳貪にかう云ひ放つた。彼の前にあるおきては先づ食ふ事だつた。

彼は或る日亞麻の束を見上げるやうに馬力に積み上げて倶知安の製線所に出かけた。製線所では割合に斤目をよく買つてくれたばかりでなく、他の地方が不作な爲めに結實がなかつたので、亞麻種を非常な高値で引き取る約束をしてくれた。仁右衛門の懐の中には手取り百圓の金が暖かくしまはれた。彼は畑にまだしこたま殘つてゐる亞麻の事を考へた。彼は居酒屋に這入つた。そこにはK村では見られない様な綺麗な顔をした女もゐた。仁右衛門の酒は必ずしも彼をきまつた型には醉はせなかつた。或る時は彼を怒りつぽく、或る時は悒鬱に、或る時は亂暴に、或る時は機嫌よくした。その日の酒は勿論彼を上機嫌にした。一緒に飲んでゐるものが利害關係のないのも彼には心置きがなかつた。彼は醉ふまゝに大きな聲で戯談口をきいた。さう云ふ時の彼は大きな愚かな子供だつた。居合せたものは釣り込まれて彼の周圍に集まつた。女まで引つ張られるまゝに彼の膝に倚りかゝつて、彼の頬ずりを無邪氣に受けた。

「汝がの頬に俺らが髭こ生えたらをかしかんべなし」

彼はそんな事を云つた。重いその口からこれだけの戯談が出ると女なぞは腹をかゝへて笑つた。陽がかげる頃に彼は居酒屋を出て反物屋によつて派手なモスリンの端切れを買つた。又ビールの小瓶を三本と油糟とを馬車に積んだ。倶知安からK村に通ふ國道はマツカリヌプリの山裾の椴松帶の間を縫つてゐた。彼は馬力の上に安坐を

かいて瓶から口うつしにビールを呷りながら濁歌をこだまにひゞかせて行つた。幾抱へもある椴松は羊齒の中から眞直に天を突いて、僅に覗かれる空には晝月が少し光つて見え隱れに眺められた。彼は遂に馬力の上に醉ひ倒れた。物慣れた馬は凸凹の山道を上手に拾ひながら歩いて行つた。馬車はかしいだり跳ねたりした。その中で彼は快い夢に這入つたり、面白い現に出たりした。

仁右衛門はふと熟睡から破られて眼をさました。その眼にはすぐ川森爺さんの眞面目くさつた一徹な顏が寫つた。仁右衛門の輕い氣分にはその顏が如何にもをかしかつたので、彼は起き上りながら聲を立てゝ笑はうとした。そして自分が馬力の上にゐて自分の小屋の前に來てゐる事に氣がついた。小屋の前には帳場も佐藤も組長の某も居た。それはこの小屋の前では見慣れない光景だつた。川森は仁右衛門が眼を覺ましたのを見ると、

「早う内さ行ぐべし。汝が嬰子はおつ死ぬべえぞ。赤痢さ取ツつかれただ」

と云つた。他愛のない夢から一足飛びにこの恐ろしい現實に呼びさまされた彼の心は、最初に彼の顏を高笑ひにくづさうとしたが、すぐ次ぎの瞬間に、彼の顏の筋肉を一時にひきしめてしまつた。彼は顏中の血が一時に頭の中に飛び退いたやうに思つた。仁右衛門は醉ひが一時に醒めてしまつて馬力から飛び下りた。小屋の中にはまだ二三人人がゐた。妻はと見ると蟲の息に弱つた赤坊の側に蹲つておい〳〵泣いてゐた。笠井が例の古鞄を膝に引ツつけてその中から護符のやうなものを取り出してゐた。

「お、廣岡さんえゝ所に歸つたぞな」

笠井が逸早く仁右衛門を見附けてから云ふと、仁右衛門の妻は恐れるやうに怨むやうに訴へるやうに夫を見返つて、默つたまゝ泣き出した。仁右衛門はすぐ赤坊の所に行つて見た。章魚のやうな大きな頭だけが彼の赤坊らしい唯一つのものだつた。たつた半日の中にかうも變るかと疑はれるまでにその小さな者は衰へ細つてゐた。仁

右衛門はそれを見ると腹が立つ程寂しく心許なくなつた。今まで經驗した事のないなつかしさ可愛さが燒くやうに心に逼つて來た。彼は持つた事のないものを强ひて押し附けられたやうに當惑してしまつた。その押し附けられたものは恐ろしく重い冷たいものだつた。何よりも先づ彼は腹の力の拔けて行くやうな心持をいま〳〵しく思つたが、どうしやうもなかつた。

勿體ぶつて笠井が護符を押し頂き、それで赤坊の腹部を咒文を唱へながら撫で廻すのが唯一の力に思はれた。傍にゐる人達も奇蹟の現れるのを待つやうに笠井のする事を見守つてゐた。赤坊は力のない哀れな聲で泣きつゞけた。仁右衛門は腸をむしられるやうだつた。それでも泣いてゐる間はまだよかつた。赤坊が泣きやんで大きな眼を引ツつらしたまゝ瞬きもしなくなると、仁右衛門はおぞましくも拜むやうな眼で笠井を見守つた。小屋の中は人いきれで蒸すやうに暑かつた。笠井の禿げ上つた額からは汗の玉がだら〳〵と流れ出た。それが仁右衛門には尊くさへ見えた。小半時赤坊の腹を撫で廻すと、笠井は又古鞄の中から紙包を出して押しいたゞいた。而して口に手拭を啣へてそれを開くと、一寸四方程な何か字の書いてある紙片を摘まみ出して指の先きで丸めた。水を持つて來さしてそれをその中へ浸した。仁右衛門はそれを赤坊に飮ませろとさし出されたが、飮ませるだけの勇氣もなかつた。妻は甲斐々々しく夫に代つた。渴き切つて居た赤坊は喜んでそれを飮んだ。仁右衛門は有難いと思つてゐた。

「わしも子は亡くした覺えがあるで、お主の心持はようわかる。この子を助けようと思つたら何んせ一心に天理王樣に賴まつしやれ。な。合點か。人間業では及ばぬ事ぢやでな」

笠井はさう云つてしたり顏をした。仁右衛門の妻は泣きながら手を合せた。

赤坊は續けざまに血を下した。而して小屋の中が眞暗になつた日のくれ〳〵に、何物にか助けを求める成人の

やうな表情を眼に現して、あてどもなくそこらを見廻してゐたが、次第々々に息が絶えてしまつた。

赤坊が死んでから村醫は巡査に伴れられて漸くやつて來た。香奠代りの紙包を持つて帳場も來た。提灯と云ふ見慣れないものが小屋の中を出たり這入つたりした。仁右衛門夫婦の嗅ぎつけない石炭酸の香は二人を小屋から追ひ出してしまつた。二人は川森に附添はれて西に廻つた月の光の下にしよんぼり立つた。

世話に來た人達は一人去り二人去り、やがて川森も笠井も去つてしまつた。

水を打つたやうな夜の涼しさと靜かさとの中に、かすかな蟲の音がしてゐた。仁右衛門は何と云ふ事なしに妻が癪にさはつてたまらなかつた。妻は又何と云ふ事なしに夫が憎まれてならなかつた。妻は馬力の傍にうづくまり、仁右衛門はあてもなく唾を吐き散らしながら小屋の前を行つたり歸つたりした。他處の農家でこの凶事があつたら少くとも隣り近所から二三人の者が寄り合つて、買つて出した酒でも飲みちらしながら、何かと話でもして夜を更かすのだらう。仁右衛門の所では川森さへ居殘つてゐないのだ。妻はそれを心から寂しく思つてしく〳〵と泣いてゐた。物の三時間も二人はさうしたまゝで何もせずにぼんやり小屋の前で月の光にあはれな姿をさらしてゐた。

やがて仁右衛門は何を思ひ出したのかのそ〳〵と小屋の中に這入つて行つた。妻は眼に角を立てゝ首だけ後に廻して洞穴のやうな小屋の入口を見返つた。暫くすると仁右衛門は赤坊を背負つて、一挺の鍬を右手に提げて小屋から出て來た。

「ついて來う」

さう云つて彼はすた〳〵と國道の方に出て行つた。簡單な啼聲で動物と動物とが互を理解し合ふやうに、妻は仁右衛門のしようとする事が呑み込めたらしく、のつそりと立ち上つてその後に隨つた。而してめそ〳〵と泣き

續けてゐた。

夫婦が行き着いたのは國道を十町も倶知安の方に來た左手の岡の上にある村の共同墓地だつた。そこの上からは松川農場を一面に見渡して、ルベシベ、ニセコアンの連山も川向ひの昆布嶽も手に取るやうだつた。夏の夜の透明な空氣は青み亙つて、月の光が燐のやうに總ての光るものゝ上に宿つてゐた。蚊の群がわん／＼うなつて二人に襲ひかゝつた。

仁右衞門は死體を背負つたまゝ、小さな墓標や石塔の立ち列なつた間の空地に穴を掘りだした。鍬の土に喰ひ込む音だけが景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだまゝで時々頬に來る蚊をたゝき殺しながら泣いてゐた。三尺程の穴を掘り終ると仁右衞門は鍬の手を休めて額の汗を手の甲で押し拭つた。夏の夜は靜かだつた。その時突然恐ろしい考へが彼の吐胸を突いて浮んだ。彼はその考へに自分ながら驚いたやうに呆れて眼を見張つてゐたが、やがて大聲を立てゝ頑童の如く泣きをめき始めた。その聲は醜く物凄かつた。妻はきよつとんとして、顏中を涙にしながら恐ろしげに夫を見守つた。

「笠井の四國猿めが、嬰子事殺したど。殺したどあ」

彼は醜い泣き聲の中からさう叫んだ。

翌日彼は又亞麻の束を馬力に積まうとした。そこには派手なモスリンの端切れが、亂雲の中に現れた虹のやうにしつとり朝露にしめつたまゝ穢い馬力の上に仕舞ひ忘られてゐた。

六

狂暴な仁右衞門は赤坊を亡くしてから手がつけられない程狂暴になつた。その狂暴を募らせるやうに烈しい盛

夏が來た。春先きの長雨を償ふやうに雨は一滴も降らなかつた。秋に收穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に變つた。自然に抵抗し切れない失望の聲が、默りこくつた農夫の姿から叫ばれた。

一刻の暇もない農繁の眞最中に馬市が市街地に立つた。普段ならば人々は見向きもしないのだが、畑作をなげてしまつた農夫等は、捨鉢な氣分になつて、馬の賣買にでも多少の儲けを見ようとしたから、前景氣は思ひの外强かつた。當日には近村からさへ見物が來た程賑はつた。丁度農場事務所裏の空地に假小屋が建てられて、爪まで磨き上げられた耕馬が三十頭近く集まつた。その中で仁右衛門の出した馬は殊に人の眼を牽いた。

その翌日には競馬があつた。場主までわざ〳〵函館からやつて來た。屋臺店や見世物小屋がかゝつて、祭禮に通有な香ひのむし〳〵する間を着飾つた娘達が、刺戟の强い色を振り播いて步いた。

競馬場の埒の周圍は人垣で埋まつた。三四軒の農場の主人達は決勝點の所に一段高く棧敷をしつらへてそこから見物した。松川場主の側には子供に附添つて笠井の娘が坐つてゐた。その娘は二三年前から函館に出て松川の家に奉公してゐたのだ。父に似て細面の彼女は函館の生活に磨きをかけられて、この邊では際立つて垢拔けがしてゐた。競馬に加はる若い者はその妙齡な娘の前で手柄を見せようと爭つた。他人の妾に目星をつけて何になると皮肉を云ふものもあつた。

何しろ競馬は非常な景氣だつた。勝負がつく度に揚る喝采の聲は乾いた空氣を傳はつて、人々を家の中にぢつとさしては置かなかつた。

仁右衛門はその頃博奕に耽つてゐた。始めの中はわざと負けて見せる博徒の手段に甘々と乘せられて、勢ひ込んだのが失敗の基で、深入りする程損をしたが、損をするほど深入りしないではゐられなかつた。亞麻の收利は疾の昔にけし飛んでゐた。それでも馬は金輪際賣る氣がなかつた。剩す所は燕麥があるだけだつたが、是れは

播種時から事務所と契約して、事務所から一手に陸軍糧秣廠に納める事になつてゐた。その方が競爭して商人に賣るのよりも割がよかつたのだ。商人共はこのボイコットをどうして見過ごしてゐよう。彼等は農家の戸別訪問をして糧秣廠よりも遙かに高價に引受けると勸誘した。糧秣廠から買入代金が下つてもそれは一應事務所にまとまつて下るのだ。その中から小作料だけを差引いて小作人に渡すのだから、農場としては小作料を回收する上に是れほど便利な事はない。小作料を拂ふまいと決心してゐる仁右衞門は、馬鹿な話だと思つた。彼は腹をきめた。而して競馬の爲めに人の注意がおろそかになつた機會を見すまして、商人と結託して、事務所へ廻すべき燕麥をどん〳〵商人に渡してしまつた。

仁右衞門はこの取引をすましてから競馬場にやつて來た。彼は自分の馬で競走に加はる筈になつてゐたからだ。彼は裸乘りの名人だつた。

自分の番が來ると彼は鞍も置かずに自分の馬に乘つて出て行つた。人々はその馬を見ると敬意を拂ふやうに互にうなづき合つて、今年の驪では一番物だと賞め合つた。仁右衞門はさういふ私語を聞くといゝ氣持になつて、いやでも勝つて見せるぞと思つた。六頭の馬がスタートに近づいた。さつと旗が降りた時仁右衞門はわざと出おくれた。彼は外の馬の後から内埒へ〳〵とよつて、少し手綱を引きしめるやうにして駈けさした。ほてつた彼の顏から耳にかけて埃を含んだ風が氣息のつまる程ふきかゝるのを彼は快く思つた。やがて馬場を八分目程廻つた頃を計つて手綱をゆるめると馬は思ひ存分頸を延ばしてずん〳〵おくれた馬から拔き出した。彼が鞭とあふりで馬を責めながら最初から目星をつけてゐた先頭の馬に追ひせまつた時には決勝點が近かつた。彼はいらだつてびしびしと鞭をくれた。始めは自分の馬の鼻が相手の馬の尻とすれ〳〵になつてゐたが、やがて一歩々々二頭の距離は縮まつた。狂氣のやうな喚呼が夢中になつた彼の耳にも明かに響いて來た。もう一息と彼は思つた。――その

時突然棧敷の下で遊んでゐた松川場主の子供がよた〳〵と埒の中へ這入つた。それを見た笠井の娘は我れを忘れて駈け込んだ。「危ねえ」――觀衆は一度に固唾を飲んだ。その時先頭にゐた馬は娘の派手な着物に驚いたのか、さつときれて仁右衛門の馬の前に出た。と思ふ間もなく仁右衛門は空中に飛び上つて、やがて敲きつけられるやうに地面に轉がつてゐた。彼は氣丈にも轉がりながらすつくと起き上つた。直ぐ彼の馬の所に飛んで行つた。馬はまだ起きてゐなかつた。後脚で反動を取つて起きさうにしては、前脚を折つて倒れてしまつた。訓練のない見物人は潮のやうに仁右衛門と馬とのまはりに押し寄せた。

仁右衛門の馬は前脚を二脚とも折つてしまつてゐた。仁右衛門は惘然したまゝ、不思議さうな顔をして押し寄せた人波を見守つて立つてる外はなかつた。

獸醫の心得もある蹄鐵屋の顔を群集の中に見出してやうやく正氣に返つた仁右衛門は、馬の始末を頼んですごすごと競馬場を出た。彼は自分で何が何だかちつとも分らなかつた。彼は夢遊病者のやうに人の間を押し分けて歩いて行つた。事務所の角まで來ると何んといふ事なしにいきなり路の小石を二つ三つ摑んで入口の硝子戸にたたきつけた。三枚程の硝子は微塵にくだけて飛び散つた。彼はその音を聞いた。それは然し耳を押へて聞くやうに遠くの方で聞こえた。彼は悠々として又そこを歩み去つた。

彼が氣がついた時には、何方をどう歩いたのか、昆布嶽の下を流れるシリベシ河の河岸の丸石に腰かけてぼんやり河面を眺めてゐた。彼の眼の前を透明な水が後から〳〵同じやうな渦紋を描いては消し描いては消して流れてゐた。彼はぢつとその戯れを見詰めながら、遠い過去の記憶でも追ふやうに今日の出來事を頭の中で思ひ浮べてゐた。總ての事が他人事のやうに順序よく手に取るやうに記憶に蘇つた。然し自分が投り出される所まで來ると記憶の絲はぷツつり切れてしまつた。彼はそこの所を幾度も無關心に繰返した。笠井の娘――笠井の娘――笠

井の娘がどうしたんだ――彼は自問自答した。段々眼がかすんで來た。笠井の娘……笠井……笠井だ馬を片輪にしたのは。さう考へても笠井は彼に全く關係のない人間のやうだつた。その名は彼の感情を少しも動かす力にはならなかつた。彼はさうしたまゝで深い眠りに落ちてしまつた。

彼は夜中になつてからひよつくり小屋に歸つて來た。入口からぷんと石炭酸の香がした。それを嗅ぐと彼は始めて正氣に返つて改めて自分の小屋を物珍らしげに眺めた。さうなると彼は夢からさめるやうにつまらない現實に歸つた。鈍つた意識の反動として細かい事にも鋭く神經が働き出した。石炭酸の香は何よりも先づ死んだ赤坊を彼に思ひ出さした。若し妻に怪我でもあつたのではなかつたか――彼は爐の消えて眞闇な小屋の中を手さぐりで妻を尋ねた。眼をさまして起きかへつた妻の氣配がした。

「今頃まで何處さゐただ。馬は村の衆が連れて歸つたに。傷はしい事べおつぴろげてはあ」

妻は眠つてゐなかつたやうなはつきりした聲でかう云つた。彼は闇に慣れて來た眼で小屋の片隅をすかして見た。馬は前脚に重味がかゝらないやうに、腹に蓆をあてがつて胸の所を梁からつるしてあつた。兩方の膝頭は白い切れで卷いてあつた。その白い色が總て黑い中にはつきりと仁右衞門の眼に映つた。石炭酸の香はそこから漂つて來るのだつた。彼は火の氣のない圍爐裡の前に、草鞋ばきで頭を垂れたまゝ安坐をかいた。馬もこそつとも音をさせずに默つてゐた。蚊のなく聲だけが空氣のさゝやきのやうにかすかに聞こえてゐた。仁右衞門は膝頭で腕を組み合せて、寢ようとはしなかつた。馬と彼は互に憐れむやうに見えた。

然し翌日になると彼は又この打擊から跳ね返つてゐた。彼は前の通りな狂暴な彼になつてゐた。彼はプラオを賣つて金に代へた。雜穀屋からは、燕麥が賣れた時事務所から直接に代價を支拂ふやうにするからと云つて、麥や大豆の前借りをした。而して馬力を賴んでそれを自分の小屋に運ばして置いて、賭場に出かけた。

競馬の日の晩に村では一大事が起つた。その晩おそくまで笠井の娘は松川の所に歸つて來なかつた。こんな晩に若い男女が畑の奥や森の中に姿を隱すのは珍らしい事でもないので初めの中は打捨てゝおいたが、餘りおそくなるので、笠井の小屋を尋ねさすとそこにもゐなかつた。笠井は驚いて飛んで來た。然し廣い山野をどう探しやうもなかつた。夜のあけ〳〵に大搜索が行はれた。娘は河添の窪地の林の中に失神して倒れてゐた。正氣づいてから聞きたゞすと、大きな男が無理やりに娘をそこに連れて行つて殘虐を極めた辱かしめかたをしたのだと判つた。笠井は廣岡の名を云つてしたり顔に小首を傾けた。事務所の硝子を廣岡がこはすのを見たと云ふ者が出て來た。

犯人の搜索は極めて祕密に、同時にこんな田舍にしては嚴重に行はれた。場主の松川は少からざる懸賞までした。然し手がゝりは皆目つかなかつた。疑ひは妙に廣岡の方にかゝつて行つた。赤坊を殺したのは笠井だと廣岡の始終云ふのは誰でも知つてゐた。廣岡の馬を躓かしたのは間接ながら笠井の娘の仕業だつた。踏鐵屋が馬を廣岡の所に連れて行つたのは夜の十時頃だつたが廣岡は小屋にゐなかつた。その晩廣岡を村で見かけたものは一人もなかつた。賭場にさへゐなかつた。仁右衛門に不利益な色々な事情は色々に數へ上げられたが、具體的な證據は少しも上らないで夏がくれた。

秋の收穫時になると又雨が來た。乾燥が出來ないために、折角實つたものまで腐る始末だつた。小作はわやわやと事務所に集まつて小作料割引の歎願をしたが無益だつた。彼等は案の定燕麥賣揚代金の中から嚴密に小作料を控除された。來春の種子は愚か、冬の間を支へる食料も滿足に得られない農夫が澤山出來た。

その間にあつて仁右衛門だけは燕麥の事で事務所に破約したばかりでなく、一文の小作料も納めなかつた。綺麗に納めなかつた。始めの間帳場はなだめつすかしつして幾らかでも納めさせようとしたが、如何しても應じないので、財産を差押へると脅威した。仁右衛門は平氣だつた。押へようと云つて何を押へようぞ、小屋の代金も

まだ事務所に納めてはなかつた。彼はそれを知りぬいてゐた。事務所からは最後の手段として多少の損はしても退場さすと迫つて來た。然し彼は頑として動かなかつた。ペテンにかけられた雜穀屋をはじめ諸商人は貸金の元金は愚か利子さへ出させる事が出來なかつた。

七

「まだか」、この名は村中に恐怖を播いた。彼の顏を出す所には人々は姿を隱した。川森さへ疾の昔に仁右衞門の保證を取消して、仁右衞門に退場を迫る人となつてゐた。市街地でも農場内でも彼に融通をしようと云ふ者は一人もなくなつた。佐藤の夫婦は幾度も事務所に行つて早く廣岡を退場させてくれなければ自分達が退場すると申し出た。駐在巡査すら廣岡の事件に關係する事を體よく避けた。笠井の娘を犯したものは——何等の證據がないにも係はらず——仁右衞門に相違ないときまつてしまつた。總て村の中で起つたいかゞはしい出來事は一つ殘らず仁右衞門になすりつけられた。

仁右衞門は押し太く腹を据ゑた。彼は自分の夢をまだ取消さうとはしなかつた。彼の後悔してゐるものは博奕だけだつた。來年からそれにさへ手を出さなければ、而して今年同樣に働いて今年同樣の手段を取りさへすれば、三四年の間に一かど纒まつた金を作るのは何んでもないと思つた。いまに見かへしてくれるから——さう思つて彼は冬を迎へた。

然し考へて見ると色々な困難が彼の前には横はつてゐた。食料は一冬事かゝぬだけはあつても、金は哀れな程より貯へがなかつた。馬は競馬以來廢物になつてゐた。冬の間稼ぎに出れば、その留守に氣の弱い妻が小屋から追ひ立てを喰ふのは知れ切つてゐた。と云つて小屋に居殘れば居食ひをしてゐる外はないのだ。來年の種子さへ

工面のしやうのないのは今から知れ切つてゐた。焚火(たきび)にあたつて、きかなくなつた馬の前脚をぢつと見つめながらも考へこんだまゝ暮すやうな日が幾日も續いた。

　佐藤をはじめ彼の輕蔑し切つてゐる場内の小作者共は、おめ〳〵と小作料を搾(しぼ)り取られ、商人に重い前借をしてゐるにも係はらず、更に角さした屈託もしないで冬を迎へてゐた。相當の雪圍ひの出來ないやうな小屋は一つもなかつた。貧しいなりに集まつて酒も飲み合へば、助け合ひもした。仁右衛門には人間がよつてたかつて彼一人を敵にまはしてゐるやうに見えた。

　冬は遠慮なく進んで行つた。見渡す大空(おほぞら)が先づ雪に埋められたやうに何處から何處まで眞白になつた。そこから雪は滾々(こん〳〵)としてとめ度(ど)なく降つて來た。人間の哀れな敗殘の跡を物語る畑も、勝ちほこつた自然の領土である森林も等(ひと)しなみに雪の下に埋れて行つた。一夜の中に一尺も二尺も積り重なる日があつた。小屋と木立だけが空と地との間にあつて汚(きたな)い斑點(しみ)だつた。

　仁右衛門は或る日膝まで這入る雪の中をこいで事務所に出かけて行つた。いくらでもいゝから馬を買つてくれろと頼んで見た。帳場はあざ笑つて、脚の立たない馬は金を喰ふ機械見たいなものだと云つた。而して竹箆返(しつぺがへ)しに跡釜が出來たから小屋を立ち退(の)けと逼つた。愚圖々々してゐると今までのやうな煮え切らない事はさして置かない、この村の巡査でまにあはなければ倶知安(くつちやん)からでも頼んで處分するからさう思へとも云つた。仁右衛門は帳場に物を云はれると妙に向腹(むかつぱら)が立つた。鼻をあかしてくれるから見て居(を)れと云ひ捨てゝ小屋に歸つた。

　金を喰ふ機械――それに違ひなかつた。仁右衛門は不憫(ふびん)さから今まで馬を生かして置(い)いたのを後悔した。彼は雪の中に馬を引つ張り出した。老いぼれたやうになつた馬はなつかしげに主人の手に鼻先きを持つて行つた。仁右

衞門は右手に隱して持つてゐた斧で眉間を喰らはさうと思つてゐたが、どうしてもそれが出來なかつた。彼は又馬を牽いて小屋に歸つた。

その翌日彼は身支度をして函館に出懸けた。彼は場主と一喧嘩して笠井の仕終せなかつた小作料の輕減を實行させ、自分も農場にゐつゞき、小作者の感情をも柔らげて少しは自分を居心地よくしようと思つたのだ。彼は汽車の中で自分の云ひ分を十分に考へようとした。然し列車の中の澤山の人の顏はもう彼の心を不安にした。彼は敵意をふくんだ眼で一人々々睨めつけた。

函館の停車場に着くと彼はもうその建物の宏大もないのに膽をつぶしてしまつた。不恰好な二階建ての板家に過ぎないのだけれども、その一本の柱にも彼は驚くべき費用を想像した。彼は又雪のかきのけてある廣い往來を見て驚いた。然し彼の誇りはそんな事に敗けてはゐまいとした。動ともするとおびへて胸の中ですくみさうになる心を勵まし〳〵彼は巨人のやうに威丈高にのそり〳〵と道を歩いた。人々は振返つて、自然から今切り取つたばかりのやうなこの男を見送つた。

やがて彼は松川の屋敷に這入つて行つた。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならない程ちがつた宏大な邸宅だつた。敷臺を上る時は、彼はつまごを脱いでから、我れにもなく手拭を腰から拔いて足の裏を綺麗に押し拭つた。澄んだ水の表面の外に、自然には決してない滑かに光つた板の間の上を、彼は氣味の惡い冷たさを感じながら、奧に案内されて行つた。美しく着飾つた女中が主人の部屋の襖をあけると、氣息のつまるやうな强烈な不快な匂ひが彼の鼻を强く襲つた。而して部屋の中は夏のやうに暑かつた。

板よりも固い疊の上には處々に獸の皮が敷きつめられてゐて、障子に近い大きな白熊の毛皮の上の盛り上るやうな座蒲團の上に、はつたんの褞袍を着こんだ場主が、大火鉢に手をかざして安坐をかいてゐた。仁右衞門の姿

を見るとぎろつと睨みつけた眼をそのまゝ床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし附けられて這入る事も得せずに逡巡みしてゐると、場主の眼が又床の間からこつちに歸つて來さうになつた。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで疊の上ににちやつ〳〵と音をさせながら場主の鼻先きまでのそ〳〵歩いて行つて、出來るだけ小さく窮屈さうに坐りこんだ。

「何しに來た」

底力のある聲にもう一度どやし附けられて、仁右衛門は思はず顏を擧げた。場主は眞黑な大きな卷煙草のやうなものを口に啣へて青い煙をほがらかに吹いてゐた。そこからは氣息づまるやうな不快な匂ひが彼の鼻の奧をつん〳〵と刺戟した。

「小作料の一文も納めないで、どの面下げて來臭つた。來年からは魂を入れかへろ。而して辭儀の一つもする事を覺えてから出直すなら出直して來い。馬鹿」

而して部屋をゆするやうな高笑ひが聞こえた。仁右衛門が自分でも分らない事を寢言のやうにいふのを、始めの間は聞き直したり、補つたりしてゐたが、やがて場主は勘忍袋を切らしたといふ風にかう怒鳴つたのだ。仁右衛門は高笑ひの一とくぎり毎に、たゝかれるやうに頭をすくめてゐたが、辭儀もせずに夢中で立ち上つた。彼の顏は部屋の暑さの爲めと、のぼせ上つた爲めに湯氣を出さんばかりに赤くなつてゐた。

仁右衛門はすつかり打摧かれて自分の小さな小屋に歸つた。彼には農場の空の上までも地主の頑丈さうな大きな手が擴がつてゐるやうに思へた。雪を含んだ雲は氣息苦しいまでに彼の頭を押へつけた。「馬鹿」その聲は動ともすると彼の耳の中で怒鳴られた。何んといふ暮しの違ひだ。何んといふ人間の違ひだ。親方が人間なら俺は人間ぢやない。俺が人間なら親方は人間ぢやない。彼はさう思つた。而して唯呆れて默つて考へこんでしまつ

た。

粗朶がぶし〳〵と燻るその向座には、妻が襤褸につゝまれて、髪をぼう〳〵と亂したまゝ、愚かな眼と口とを節孔のやうに開け放してぼんやり坐つてゐた。しん〳〵と雪はとめ度なく降り出して來た。妻の膝の上には赤坊もゐなかつた。

その晩から天氣は激變して吹雪になつた。翌朝仁右衛門が眼をさますと、吹き込んだ雪が足から腰にかけて薄ら積つてゐた。鋭い口笛のやうなうなりを立てゝ吹きまく風は、小屋をめきり〳〵とゆすぶり立てた。風が小凪ぐと、滅入るやうな靜かさが圍爐裡まで逼つて來た。

仁右衛門は朝から酒を欲したけれども一滴もありやうはなかつた。寢起きから妙に思ひ入つてゐるやうだつた彼は、何かのきつかけに勢よく立上つて、斧を取上げた。而して馬の前に立つた。馬はなつかしげに鼻先きをつき出した。仁右衛門は無表情な顏をして口をもご〳〵させながら馬の眼と眼との間をおとなしく撫でゝゐたが、いきなり體を浮かすやうに後ろに反らして斧を振上げたと思ふと、力まかせにその眉間に打ちこんだ。うとましい音が彼の腹に應へて、馬は聲も立てずに前膝をついて横倒しにどうと倒れた。痙攣的に後脚で蹴るやうなまねをして、潤みを持つた眼は可憐にも何かを見詰めてゐた。

「やれ怖い事するでねえ、傷ましいまあ」

すゝぎ物をしてゐた妻が、振返つてこの樣を見ると、恐ろしい眼付をしておびえるやうに立上りながらかういつた。

「默れつてば。物いふと汝もたゝき殺されつぞ」

仁右衛門は殺人者が生き殘つた者を脅かすやうな低い皺枯れた聲でたしなめた。

嵐が急にやんだやうに二人の心にはかーんとした沈默が襲つて來た。仁右衛門はだらんと下げた右手に斧をぶらさげたまゝ、妻は雜巾のやうに汚い布巾を胸の所に押しあてたまゝ、憚るやうに顏を見合せて突つ立つてゐた。

「こゝへ來う」

やがて仁右衛門は呻くやうに、斧を一寸動かして妻を呼んだ。

彼は妻に手傳はせて馬の皮を剝ぎ始めた。生臭い匂ひが小屋一杯になつた。厚い舌をだらりと横に出した顏だけの皮を殘して、馬はやがて裸身にされて藁の上に堅くなつて横はつた。白い腱と赤い肉とが無氣味な縞となつてそこに曝された。仁右衛門は皮を棒のやうに卷いて藁繩でしばり上げた。

それから仁右衛門のいふまゝに妻は小屋の中を片附けはじめた。背負へるだけは雜穀も荷造りして大小二つの荷が出來た。妻は夫の心持が分ると、又長い苦しい漂浪の生活を思ひやつて、おろ／＼と泣かんばかりになつたが、夫の荒立つた氣分を怖れて涙を飲みこみ／＼した。仁右衛門は小屋の眞中に突つ立つて隅から隅まで目測でもするやうに見廻した。二人は默つたまゝでつまごをはいた。妻が風呂敷を被つて荷を背負ふと、仁右衛門は後ろから助け起してやつた。妻はとう／＼身を震はして泣き出した。意外にも仁右衛門は叱りつけなかつた。而して自分は大きな荷を輕々と背負ひ上げてその上に馬の皮を乘せた。二人は言ひ合せたやうにもう一度小屋を見廻した。

小屋の戸を開けると顏向けも出來ない程雪が吹き込んだ。荷を背負つて重くなつた二人の體はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まつた。

仁右衛門は一旦戸外に出てから、待てと云つて引き返して來た。荷物を背負つたまゝで、彼は藁繩の片つ方の端を圍爐裡にくべ、もう一つの端を壁際にもつて行つてその上に細く刻んだ馬糧の藁をふりかけた。

天も地も一つになつた。颯と風が吹きおろしたと思ふと、積雪は自分の方から舞ひ上るやうに舞ひ上つた。それが横なぐりに靡いて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまはりの木立は見えたり隠れたりした。風に向つた二人の半身は忽ち白く染まつて、細かい針で絶間なく刺すやうな刺戟は二人の顔を眞赤にして感覺を失はしめた。二人は睫毛に氷りつく雪を打振ひ／＼雪の中をこいだ。

國道に出ると雪道がついてゐた。踏み堅められない深みに落ちないやうに仁右衛門は先きに立つて瀬踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負つた二人の姿はまろび勝ちに少しづゝ動いて行つた。共同墓地の下を通る時、妻は手を合せてそつちを拜みながら歩いた――わざとらしい程高い聲を擧げて泣きながら。二人がこの村に這入つた時は一頭の馬も持つてゐた。一人の赤坊もゐた。二人はそれらのものすら自然から奪ひ去られてしまつたのだ。

その邊から人家は絶えた。吹きつける雪の爲めにへし折られる枯枝がやゝともすると投槍のやうに襲つて來た。吹きまく風にもまれて木と云ふ木は魔女の髪のやうに亂れ狂つた。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しづゝ倶知安の方に動いて行つた。

椴松帶が向うに見えた。總ての樹が裸になつた中に、この樹だけは幽鬱な暗緑の葉色をあらためなかつた。眞直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のやうな風の音を籠めてゐた。二人の男女は蟻のやうに小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまつた。

（一九一七年六月一三日、鷄鳴を聞きつゝ擱筆）

（一九一七年七月、新小説所載）

クララの出家

○

これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出來事の一つである。

○

又夢に襲はれてクララは暗い中に眼をさました。妹のアグネスは同じ床の中で、姉の胸によりそつてすや／＼と靜かに眠りつゞけてゐた。千二百十二年の三月十八日、救世主のエルサレム入城を記念する棕櫚の安息日の朝の事。

數多い見知り越しの男達の中でどう云ふ譯か三人だけがつぎ／＼にクララの夢に現れた。その一人は矢張りアッシジの貴族で、クララの家からは西北に當る、ヴィヤ・サン・パオロに住むモントルソリ家のパオロだつた。夢の中にも、腰に置いた手の、指から肩に至るしなやかさが眼についた。クララの父親は期待をもつた微笑を頰に浮べて、品よくひかへ目にしてゐるこの青年を、もつと大膽に振舞へと、勵ますやうに見えた。パオロは思ひ入つたやうにクララに近づいて來た。而して佛蘭西から輸入されたと思はれる精巧な頸飾りを、美しい金象眼のしてある青銅の箱から取出して、クララの頸に卷かうとした。上品で端麗な若い青年の肉體が近寄るに從つて、クララは甘い苦痛を胸に感じた。青年が近寄るなと思ふとクララはもう上氣して輕い瞑眩に襲はれた。胸の皮膚は擽られ、肉はしまり、血は心臟から早く強く押出された。胸から下の肢體は感觸を失つたかと思ふほどことはゞつ

て、その存在を思ふ事にすら、消え入るばかりの羞恥を覺えた。毛の根は汗ばんだ。その美しい暗綠の瞳は、涙よりももつと輝く分泌物の中に浮き漂つた。輕く開いた唇は熱い氣息の爲めにかさ〳〵に乾いた。油汗の沁み出た兩手は氷のやうに冷えて、青年を押もどさうにも、迎へ抱かうにも、力を失つて垂れ下つた。肉體はやゝともすると後ろに引き倒されさうになりながら、心は遮二無二前の方に押進まうとした。

クララは半分氣を失ひながらもこの恐ろしい魔術のやうな力に抵抗しようとした。破滅が眼の前に迫つた。深淵が脚の下に開けた。さう思つて彼女は何とかせねばならぬと悶えながらも何んにもしないでゐた。慌て戰く心は潮のやうに荒れ狂ひながら青年の方に押寄せた。クララはやがてかのしなやかなパオロの手を自分の首に感じた。熱い指先と冷たい金屬とが同時に皮膚に觸れると、自制は全く失はれてしまつた。彼女は苦痛に等しい表情を顔に浮べながら、眼を閉ぢて前に倒れかゝつた。そこにはパオロの胸がある筈だ。その胸に抱き取られる時にクララは元のクララではなくなるべき筈だ。

もうパオロの胸に觸れると思つた瞬間は來て過ぎ去つたが、不思議にもその胸には觸れないでクララの體は抵抗のない空間に傾き倒れて行つた。はつと驚く暇もなく彼女は何處とも判らない深みへ驀地に陥つて行くのだつた。彼女は眼を開かうとした。然しそれは堅く閉ぢられて盲目のやうだつた。眞暗な闇の間を、颶風のやうな空氣の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて行つた。「地獄に落ちて行くのだ」膽を裂くやうな心咎めが突然クララを襲つた。それは本當はクララが始めから考へてゐた事なのだ。十六の歳から神の子基督の婢女として生き通さうと誓つた、その神聖な誓言を忘れた報いに地獄に落ちるのに何んの不思議がある。それは覺悟しなければならぬ。それにしても聖處女によつて世に降誕した神の子基督の御顔を、金輪際拜し得られぬ苦しみは忍びやうがなかつた。クララはとんぼがへりを打つて落ちながら一心不亂に聖母を念じた。

ふと光つたものが眼の前を過ぎて通つたと思つた。と、その兩肱は柵のやうなものに支へられて、膝がしらも堅い足場を得てゐた。クララは改悛者のやうに啜泣きながら、柵らしいものゝ上に組み合せた腕の間に顔を埋めた。

泣いてる中にクララの心は忽ち輕くなつて、やがては十ばかりの童女の時のやうな何事も華かに珍らしい氣分になつて行つた。突然華いだ放膽な歌聲が耳に這入つた。クララは首をあげて好奇の眼を見張つた。兩肱は自分の部屋の窓枠に、兩膝は使ひなれた樫の長椅子の上に乘つてゐた。彼女の髪は童女の習慣どほり、侍童のやうに、肩あたりまでの長さに切下にしてあつた。窓からは、朧夜の月の光の下に、この町の堂母なるサン・ルフィノ寺院とその前の廣場とが、滑かな陽春の空氣に柔らめられて、夢のやうに見渡された。寺院の北側をロッカ・マジョーレの方に登る坂を、一つの集團となつてよろけながら、十五六人の華車な青年が、聲をかぎりに青春讃美する歌をうたつて行くのだつた。クララはこの光景を窓から見おろすと、夢の中にありながら、これは前に一度目撃した事があるのにと思つてゐた。

さう思ふと、同時に窓の下の出來事はずん／＼クララの思ふ通りにはかどつて行つた。

夏には夏の我れを待て。
春には春の我れを待て。
夏には隼を腕に据ゑよ。
春には花に口を觸れよ。
春なり今は、春なり我れは。

春なり我れは、春なり今は。
我がめぐはしき少女。
春なる、あゝ、この我れぞ春なる。

寝しづまつた町並みを、張りのある男聲の合唱が鳴りひゞくと、無頓着な無恥な高笑ひがそれに續いた。あの青年達はもう立止まる頃だとクララが思ふと、その通りに彼等は突然坂の中途で足をとめた。互に何か探し合つてゐるやうだつたが、やがて彼等は廣場の方に、「フランシス」「ベルナルドーネの若い騎士」「圓卓子の盟主」などゝ聲々に呼び立てながら、はぐれた伴侶を探しにもどつて來た。彼等は廣場の手前まで來た。而して彼等の方に二十二三に見える一人の青年が夢遊病者のやうに足もともしどろに歩いて來るのを見つけた。クララも月影でその青年を見た。それはコルソの往還を一つへだてたすぐ向うに住むベルナルドーネ家のフランシスだつた。華美を極めた晴着の上に定紋をうつた蝦茶のマントを着て、飲み仲間の主權者たる事を現す笏を右手に握つた様子は、ほかの青年達にまさつた無頼の風俗だつたが、その顔は痩せ衰へて物凄いほど青く、眼は足もとから二三間さきの石疊を孔のあく程見入つたまゝ瞬きもしなかつた。而してよろけるやうな足どりで、見えないものに引きずられながら、堂母の廣場の方に近づいて來た。それを見つけると、引返して來た青年達は一度にときをつくつて駈けよりざまにフランシスを取りかこんだ。「フランシス」「若い騎士」などゝその肩まで搖つて呼びかけても、フランシスは恐ろしげな夢からさめる樣子はなかつた。青年達はそのていたらくに又どつと高笑ひをした。「新妻の事でも想像して魂がもぬけたな」、一人がフランシスの耳に口をよせて叫んだ。フランシスはついた狐が落ちたやうにきよとんとして、石疊から眼をはなして、自分を圍むいくつかの酒にほてつた若い笑顔を苦々しげに見廻した。クララは即興詩でも聞くやうに興味を催して、窓から上體を乘出しながらそれに眺め入つた。フラ

ンシスはやがて自分の纏つたマントや手に持つ笏に氣がつくと、甫めて今まで耽つてゐた歡樂の想ひ出の絲口が見つかつたやうに苦笑ひをした。

「よく飮んで騷いだもんだ。さうだ、私は新妻の事を考へてゐる。然し私が貰はうとする妻は君等には想像も出來ない程美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」

さう云つて彼は笏を上げて靑年達に一足先きに行けと眼で合圖した。靑年達が騷ぎ合ひながら堂母の蔭に隱れるのを見屆けると、フランシスはいま／＼しげに笏を地に投げつけ、マントと晴着とをずた／＼に破りすてた。

次の瞬間にクララは錠のおりた堂母の入口に身を投げかけて、犬のやうにまろびながら悔恨の淚にむせび泣く若いフランシスを見た。彼女は奇異の思ひをしながらそれを眺めてゐた。春の月は朧ろに霞んでこの光景を初めから仕舞ひまで照してゐる。

寺院の戶が開いた。寺院の內部は闇で、その闇は戶の外に溢れ出るかと思ふほど濃かつた。その闇の中から一人の男が現れた。十歲の童女から、いつの間にか、十八歲の今のクララになつて、年に相當した長い髮を編下げにして寢衣を着たクララは、恐怖の豫覺を持ちながらその男を見つめてゐた。男は入口にうづくまるフランシスに眼をつけると、きつとクララの方に銳い眸を向けたが、フランシスの襟元を攫んで引きおこした。ぞろ／＼と華やかな着物だけが宙につるし上つて、肝腎のフランシスは溶けたのか消えたのか、影も形もなくなつてゐた。クララは恐ろしい衝動を感じてそれを見てゐた。と、やがてその男の手に殘つた着物が二つに分れて、一つはクララの父となり、一つは母となつた。而して二人の間に立つその男は、クララの許婚のオッタヴィアナ・フォルテブラッチョだつた。三人はクララの立つてゐる美しい芝生より一段低い沼地がゝつた黑土の上に單調にずらつとならんで立つてゐた――父は脅かすやうに、母は歎くやうに、男は怨むやうに。戰の街を幾度もくゞつたらしい、

日に燒けて男性的なオッタヴィアナの顏は、飽く事なき功名心と、強い意志と、生一本な氣象とで、固い輪廓を描いてゐた。而してその上を貴族的な誇りが包んでゐた。今まで誰の前にも弱味を見せなかつたらしいその顏が、恨みを含んでぢつとクララを見入つてゐた。クララは許婚の仲であるくせに、而してこの青年の男らしい强さを尊敬してゐるくせに、その愛をおとなしく受けようとはしなかつたのだ。クララは夢の中にありながら生れ落ちるとから神に獻げられてゐたやうな不思議な自分の運命を思ひやつた。晩かれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考へた。見ると三人は自分の方に手を延ばしてゐる。而してその足は黑土の中にじり／＼と沈みこんで行く。脅かすやうな父の顏も、歎くやうな母の顏も、怨むやうなオッタヴィアナの顏も見る／＼變つて、眼に逼る難儀を救つてくれと、恥も忘れて叫ばんばかりにゆがめた口を開いてゐる。然し三人とも聲は立てずに死のやうに靜かで陰鬱だつた。クララは芝生の上からそれをたゞ眺めてはゐられなかつた。口まで泥の中に埋まつて、淚を一ぱいためた眼でぢつとクララに物を云はうとする三人の顏の外に、果てしのないその泥の沼には多くの男女の頭が靜かに沈んで行きつゝあるのだ。頭が沈みこむとぬるりと四方からその跡を埋めに流れ寄る泥の動搖は身の毛をよだてた。クララは何もかも忘れて三人を救ふために泥の中に片足を入れようとした。

　その瞬間に彼女は眞黃に照り輝く光の中に投げ出された。芝生も泥の海ももうそこにはなかつた。クララは眼がくらみながらも起き上らうともがいた。クララの胸を摑んで起させないものがあつた。クララはそれが天使ガブリエルである事を知つた。「天國に嫁ぐ爲めにお前は淨められるのだ」さう云ふ聲が聞こえたと思つた。同時にガブリエルは爛々と燃える炎の劍をクララの乳房の間からずぶりとさし通した。燃えさかつた尖頭は下腹部まで屆いた。クララは苦悶の中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して、十字架にかゝつた基督の姿が嚴かに見やられた。クララは有頂天になつた。全身は嘗て覺えのない苦しい快い感覺に木の葉の如くをのゝいた。

喉も裂け破れる一聲に、全身に張り滿ちた力を搾り切らうとするやうな瞬間が來た。その瞬間にクララの夢はさめた。

クララはアグネスの眼をさまさないやうにそつと起き上つて窓から外を見た。眼の下には夢で見たとほりのルフィノ寺院が曉闇の中に嚴かな姿を見せてゐた。クララは扉をあけて柔かい春の空氣を快く吸ひ入れた。やがてボルタ・カプチイニの方にかすかな東明の光が漏れたと思ふと、救世主のエルサレム入城を記念する寺の鐘が一時に鳴り出した。快活な同じ鐘の音は、麓の町からも聞こえて來た、牡鶏が村から村に時鳴を啼き交すやうに。

今日こそは出家して基督に嫁ぐべき日だ。その朝の淺い眠りを覺ました不思議な夢も、思ひ入つた心には神の御告げに違ひなかつた。クララは涙ぐましい、しめやかな心になつてアグネスを見た。十四の少女は神のやうに眠りつゞけてゐた。

部屋は靜かだつた。

○

クララは父母や妹達より少しおくれて、朝の禮拜に聖ルフィノ寺院に出かけて行つた。在家の生活の最後の日だと思ふと、さすがに名殘が惜しまれて、彼女は心を凝らして化粧をした。「クララの光りの髮」とアッシジで歌はれたその髮を、眞珠紐で編んで後ろに垂れ、ベネチヤの純白な絹を着た。家の者の居ない隙に、手早く置手紙と形見の品物を取りまとめて机の抽斗にしまつた。クララの眼にはあとから〳〵涙が湧き流れた。眼に觸れるものは何から何までなつかしまれた。

一人の婢女を連れてクララは家を出た。コルソの通りには織るやうに人が群れてゐた。春の日は麗かに輝いて祭日の人心を更に浮き立たした。男も女も僧侶もクララを振りかへつて見た。「光りの髮のクララが行く」さう云

ふ聲があちらこちらで私語(さゝや)かれた。クララは心の中で主の祈りを念佛のやうに繰返し〳〵一向(ひたすら)に眼の前を見つめながら歩いて行つた。この雜閙(ざつたう)な往來の中でも障害(しやうがい)になるものは一つもなかつた。廣い秋の野を行くやうに彼女は歩いた。

　クララは寺の入口を這入るとまつすぐにシッフヒ家の座席に行つてアグネスの側に座を占めた。彼女はフォルテブラッチョ家の座席からオッタヴィアナが送る視線をすぐに左の頰に感じたけれども、もうそんな事に頓着はしてゐなかつた。彼女は座席につくと面(おもて)を伏せて眼を閉(と)ぢた。やゝともすると所も辨(わきま)へずに熱い涙が眼がしらににじまうとした。それは悲しさの涙でもあり喜びの涙でもあつたが、同時にどちらでもなかつた。彼女は今まで知らなかつた涙が眼を熱くし出すと、妙に胸がわく〳〵して來て、急に深淵のやうな深い靜かさが心を襲つた。クララは明かな意識の中にありながら、總てのものが夢のやうに見る〳〵彼女から離れて行くのを感じた。無一物な清淨な世界にクララの魂だけが唯一つ感激に震へて燃えてゐた。死を宣告される前のやうな、奇怪な不安と沈靜とが交る〴〵襲つて來た。不安が沈靜に代る度にクララの眼には涙が湧き上つた。クララの處女らしい體は蘆の葉のやうに細かくをのゝいて居た。光のやうなその髮も亦細かに震へた。クララの手は自(おのづか)らアグネスの手を覓(もと)めた。

「クララ、あなたの手の冷たく震へる事」

「しつ、靜かに」

　クララは賴りないものを賴りにしたのを恥ぢて手を放(はな)した。而して咽(む)せる程な參詣人の人いきれの中で又孤獨に還つた。

「ホザナ……ホザナ……」

内陣から合唱が聞こえ始めた。會衆の動揺は一時に鎭つて座席を持たない平民達は敷石の上に跪いた。開け放した窓からは、柔かい春の光と空氣とが流れこんで、壁に垂れ下つた旗や旒を静かになぶつた。クララはふと眼をあげて祭壇を見た。花に埋められ香をたきこめられてビザンチン型の古い十字架聖像が奥深くすゑられてあつた。それを見るとクララは咽せ入りながら「アーメン」と心に稱へて十字を切つた。何んと云ふ貧しさ。そして何んと云ふ慈愛。

祭壇を見るとクララはいつでも十六歳の時の出來事を思ひ出さずにはゐなかつた。殊にこの朝はその回想が嚴しく心に逼つた。

今朝の夢で見た通り、十歳の時眼のあたり目撃した、ベルナルドーネのフランシスの面影はその後クララの心を離れなくなつた。フランシスが狂氣になつたと云ふ噂も、父から勘當を受けて乞食の群に加はつたと云ふ風聞も、クララの乙女心を不思議に強く打つて響いた。フランシスの事になるとシッフヒ家の人々は父から下女の末に至るまで、いゝ笑ひ草にした。クララはさう云ふ雜言を耳にする度に、自分でそんな事を口走つたやうに顏を赤らめた。

クララが十六歳の夏であつた、フランシスが十二人の伴侶と羅馬に行つて、イノセント三世から、基督を模範にして生活する事と、寺院で説教する事との印可を受けて歸つたのは。この事があつてからアッシジの人々のフランシスに對する態度は急に變つた。ある秋の末にクララが思ひ切つてその説教を聞きたいと父に歎願した時にも、父は物好きな奴だと云つたばかりで別にとめはしなかつた。

クララの回想とはその時の事である。クララは矢張りこの堂母のこの座席に坐つてゐた。着物を重ねても寒い秋寒に講壇には眞裸なレオと云ふフランシスの伴侶が立つてゐた。男も女もこの奇異な裸形に奇異な場所で出遇

つて笑ひくづれぬものはなかつた。卑しい身分の女などはあからさまに卑猥な言葉をその若い道士に投げつけた。道士は總ての反感に打ち克つだけの熱意を以て語らうとしたが、それには未だ少し信仰が足りないやうに見えた。クララは顏を上げ得なかつた。

そこにフランシスが是れも裸形のまゝで這入つて來てレオに代つて講壇に登つた。クララはなほ顏を得上げなかつた。

「神、その獨子、聖靈及び基督の御弟子の頭なる法皇の御許によつて、末世の罪人、神の召によつて人を喜ばす輕業師なるフランシスが善良なアッシジの市民に告げる。フランシスは今日教友のレオに堂母で說教するやうにと云つた。レオは神を語るだけの辯才を神から授かつてゐないと拒んだ。フランシスはそれなら裸かになつて行つて、體で說教しろと云つた。レオは雄々しくも裸かになつて出て行つた。偖てレオが去つた後、レオに斯かる苦行を强ひながら、何事もなげに居殘つたこのフランシスを神は嚴しく鞭ち給うた。眼ある者は見よ。懺悔したフランシスは諸君の前に立つ。諸君はフランシスの裸形を憐れまるゝか。然らば諸君が眼を注いで見ねばならぬものが彼處にある。眼あるものは更に眼をあげて見よ」

クララはいつの間にか男の裸體と相對してゐる事も忘れて、フランシスを見やつてゐた。フランシスは「眼をあげて見よ」と云ふと同時に祭壇に安置された十字架聖像を恭々しく指さした。十字架上の基督は痛ましくも瘦せこけた裸形のまゝで會衆を見下ろしてゐた。二十八のフランシスは何處と云つて際立つて人眼を引くやうな容貌を持つてゐなかつたが、祈禱と、斷食と、勞働の爲めにやつれた姿は、靈化した彼の心をそのまゝ寫し出してゐた。長い說教ではなかつたが、神の愛、貧窮の祝福などを語つて彼がアーメンと云つて口をつぐんだ時には、人人の愛心がどん底からゆすりあげられて思はず互に固い握手をしてすゝり泣いてゐた。クララは人々の泣くやう

には泣かなかつた。彼女は自分の眼が燃えるやうに思つた。

その日彼女はフランシスに懺悔の席に列なる事を申しこんだ。懺悔するものはクララの外にも澤山居たが、クララはわざと最後を選んだ。クララの番が來て祭壇の後ろのアプスに行くと、フランシスはたゞ一人獸色と云はれる樺色の百姓服を着て、繩の帶を結んで、胸の前に組んだ手を見入るやうに首を下げて、壁添ひの腰かけにかけてゐた。クララを見ると手まねで自分の前にある椅子に坐れと指した。二人は向ひあつて坐つた。而して眼を見合はした。

曇つた秋の午後のアプスは寒く淋しく暗み渡つてゐた。ステインド・グラスから漏れる光線は、いくつかの細長い窓を暗く彩つて、それがクララの髮の毛に來てしめやかに戲れた。恐ろしい程にあたりは物靜かだつた。クララの燃える眼は命の綱のやうにフランシスの眼にすがりついた。フランシスの眼は落着いた愛に滿ち〳〵てクララの眼をかき抱くやうにした。クララの心は醉ひしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拜まうとした。やがてクララの眼に涙が溢れる程たまつたと思ふと、ほろ〳〵と頰を傳つて流れはじめた。彼女はそれでも眞向にフランシスを見守る事をやめなかつた。かうして又いくらかの時が過ぎた。クララはたゞ默つたまゝで坐つてゐた。

「神の處女」

フランシスはやがて嚴かにかう云つた。クララは眼を外にうつすことが出來なかつた。

「あなたの懺悔は神に達した。神は嘉し給うた。アーメン」

クララはこの上控へてはゐられなかつた。椅子からすべり下りると敷石の上に身を投げ出して、思ひ存分泣いた。その小さい心臟は無上の歡喜の爲めに破れようとした。思はず身をすり寄せて、素足のまゝのフランシスの爪

先に手を觸れると、フランシスは靜かに足を引きずらせながら、いたはるやうに祝福するやうに、彼女の頭に輕く手を置いて間遠につぶやき始めた。小雨の雨垂れのやうにその言葉は、清く、小さく鋭く、クララの心を打つた。

「何よりもいゝ事は心の清く貧しい事だ」

獨語のやうなさゝやきがかう聞こえた。而して暫く沈默が續いた。

「人々は今のまゝで滿足だと思つてゐる。私にはさうは思へない。あなたもさうは思はない。神はそれをよしと見給ふだらう。兄弟の日、姉妹の月は輝くのに、人は輝く喜びを忘れてゐる。飛雀は歌ふのに人は歌はない。木は跳るのに人は跳らない。淋しい世の中だ」

又沈默。

「沈默は貧しさ程に美しく尊い。あなたの沈默を私は美酒のやうに飲んだ」

それから恐ろしい程の長い沈默が續いた。突然フランシスは慄へる聲を押鎭めながらつぶやいた。

「あなたは私を戀してゐる」

クララはぎよつとして更めて聖者を見た。フランシスは激しい心の動搖から咄嗟の間に立ちなほつてゐた。

「そんなに驚かないでもいゝ」

さういつて靜かに眼を閉ぢた。

クララは自分で知らなかつた自分の祕密をその時フランシスによつて甫めて知つた。長い間の不思議な心の迷ひをクララは種々に解きわづらつてゐたが、それがその時始めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何んと感謝していゝのか、どう詫びねばならぬかを知らなかつた。狂氣のやうな自分の泣き聲ばかりがクララの耳

にやゝ暫くいたましく聞こえた。

「わが神、わが總て」

また長い沈默がつゞいた。フランシスはクララの頭に手を置きそへたまゝ默禱してゐた。

「私の心もをのゝく。……私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄道した。……さりながら愛によつてつまづいた優しい心を神は許し給ふだらう。私の罪をも亦許し給ふだらう」

かく云つてフランシスはすつと立上つた。而して今までとは打つて變つて神々しい威嚴でクララを壓しながら言葉を續けた。

「神の御名によりて命ずる。永久に神の淸き愛兒たるべき處女よ。腰に帶して立て」

その言葉は今でもクララの耳に燒きついて消えなかつた。而してその時からもう世の常の處女ではなくなつてゐた。彼女はその時の回想に心を上ずらせながら、その時泣いたやうに激しく泣いてゐた。

ふと「クララ」と耳近く囁くアグネスの聲に驚かされてクララは顏を上げた。空想の中に描かれてゐたアプスの淋しさとは打つて變つて、堂内にはひし〳〵と群集がひしめいてゐた。祭壇の前に集まつた百人に餘る少女は、棕櫚の葉の代りに、月桂樹の枝と花束とを高くかざしてゐた――夕榮の雲が棚引いたやうに。クララの前にはアグネスを從へて白い髯を長く胸に垂れた盛裝の僧正が立つてゐる。クララが顏を上げると彼は慈悲深げにほゝゑんだ。

「嫁ぎ行く處女よ。お前の喜びの涙に祝福あれ。この月桂樹は僧正によつて祭壇から特にお前に齎らされたものだ。僧正の好意と共に受けをさめるがいゝ」

クララが知らない中に祭事は進んで、最後の儀式即ち參詣の處女に僧正手づから月桂樹を渡して、救世主の入

城を頌歌する場合になつてゐたのだ。而してクララだけが祭壇に來なかつたので僧正自らクララの所に花を持つて來たのだつた。クララが今夜出家するといふ手筈をフランシスから知らされてゐた僧正は、クララに他處ながら告別を與へるためにこの破格な處置をしたのだと氣が附くと、クララは又更に涙のわき返るのをとゞめ得なかつた。クララの父母は僧正の言葉をフォルテブラッチョ家との 縁談と取つた のだらう、笑みかまけながら挨拶の辭儀をした。

やがて百人の處女の喉から華々しい頌歌が起つた。シオンの山の凱歌を千年の後に反響さすやうな熱と喜びのこもつた女聲高音が内陣から堂内を震動さして響き亙つた。會衆は蠱惑されて聞き惚れてゐた。底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらはれにも嵐のやうに感動した。花の間に顔を伏せて彼女は少女の歌聲に揺られながら、無我の祈禱に浸り切つた。

○

「クララ……クララ」

クララは眼をさましてゐたけれども返事をしなかつた。幸に母のゐる方には後ろ向けに、アグネスに寄り添つて寢てゐたから、そのまゝ氣息を殺して默つてゐた。母は二人ともよく寢たもんだと云ふやうな事を、母らしい愛情に滿ちた言葉で云つて、何か衣裳らしいものを大椅子の上にそつくり置くと、忍び足に寢臺に近よつてしげしげと二人の寢姿を見守つた。而して夜着をかけ添へて輕く二つ三つその上をたゝいてから靜かに部屋を出て行つた。

クララの枕はしぼるやうに涙に濡れてゐた。

無月の春の夜は次第に更けた。町の諸門をとぢる合圖の鐘は二時間も前に鳴つたので、コルソに集まつて賣買

に忙しかつた村の人々の聲高な騷ぎも聞こえず、軒なみの店ももう仕舞つて寢しづまつたらしい。女猫を慕ふ男猫の思ひ入つたやうな啼き聲が時折り聞こえる外には、クララの部屋の時計の錘子が靜かに下りて齒車をきしらせる音ばかりがした。山の上の春の空氣はなごやかに靜かに部屋に滿ちて、堂母から二人が持つて歸つた月桂樹と花束の香を隅々まで籠めてゐた。

　クララは取りすがるやうに祈りに祈つた。眼をあけると間近にアグネスの眠つた顏があつた。クララを姉とも親とも慕ふ無邪氣な、素直な、天使のやうに淨らかなアグネス。クララがこの二三日やゝともすると眼に涙をためてゐるのを見て、自分も一緒に涙ぐんでゐたアグネス。……そのアグネスの睫毛はいつでも涙で洗つたやうに美しかつた。殊に色白なその頰は寢入つてから健康さうに上氣して、その間に形よく盛り上つた小鼻は穩かな呼吸と共に微細に震へてゐた。「クララの光りの髮、アグネスの光りの眼」と云はれた、無類な潤みを持つた童女にしてはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出來なかつた。クララは、見つめる程、骨肉のいとしさがこみ上げて來て、そつと掌で髮から頰を撫でさすつた。その手に感ずる暖かいなめらかな觸感はクララの愛慾を火のやうにした。クララは抱きしめて思ひ存分いとしがつてやりたくなつて半身を起して乘しかゝつた。同時にその場合の大事がクララを思ひとゞまらした。クララは肱をついて半分身を起したまゝで、アグネスを見やりながらほろ／＼と泣いた。死んだ一人兒を母が撫でさすりながら泣くやうに。

　彈條のきしむ音と共に時計が鳴り出した。クララは數を數へないでも丁度夜半である事を知つてゐた。而して涙を拭ひもあへず靜かに床からすべり出た。打合せておいた時刻が來たのだ。安息日が過ぎて神聖月曜日が來たのだ。クララは床から下り立つと昨日堂母に着て行つたベネチヤの白絹を着ようとした。それは花嫁にふさはしい色だつた。然し見ると大椅子の上に昨夜母の持つて來てくれた外の衣裳が置いてあつた。それはクララが好

んで着た藤紫の一揃ひだつた。神聖月曜日にも聖ルフィノ寺院で式があるから、昨日のものとは違つた服裝をさせようと云ふ母の心盡しがすぐ知れた。クララは嬉しく有難く思ひながらそれを着た。而して着ながら若し是れが兩親の許しを得た結婚であつたならばと思つた。父は恐らくあすこの椅子にかけて微笑しながら自分を見守るだらう。母と女中とは前に立ち後ろに立ちして化粧を手傳ふ事だらう。さう思ひながらクララは音を立てないやうに用心して、かけにくい背中のボタンをかけたりした。而していつもの習慣通りに小箪笥の抽斗から頸飾りと指輪との入れてある小箱を取り出したが、それはこの際になつて何んの用もないものだと氣が附いた。クララは不圖その寶玉に未練を覺えた。その一つ〳〵にはそれ〴〵の思ひ出がつきまつはつてゐた。クララは小箱の蓋に輕い接吻を與へて、元の通りにしまひこんだ。寂しい花嫁の身じたくは靜かな夜の中に淋しく終つた。その中に心は段々落着いて力を得て行つた。こんなに泣かれてはいよ〳〵家を逃れ出る時にはどうしたらいゝだらうと思つた床の中の心配は無用になつた。沈んではゐるがしやんと張切つた心持になつて、クララは部屋の隅の聖像の前に跪いて燭火を捧げた。而して靜かに身の來し方を顧みた。

幼い時からクララには云ひ現し得ない不滿足が心の底にあつた。いら〳〵した氣分はよく髮の結ひ方、衣服の着せ方に小言を云はせた。さん〴〵小言を云つてから獨りになると何んとも云へない淋しさに襲はれて、部屋の隅でたゞ一人半日も泣いてゐた記憶も甦つた。クララはそんな時には大好きな母の顏さへ見る事を嫌つた。ましてや父の顏は野獸のやうに見えた。いまに誰か來て私を助けてくれる。堂母の壁畫にあるやうな天國に連れて行つてくれるからいゝとさう思つた。色々な宗教畫がある度に自分の行きたい所は何處だらうと思ひながら注意した。その中にクララの心の中には二つの世界が考へられるやうになりだした。一つはアッシジの市民が、僧侶をさへこめて、上から下まで生活してゐる世界だ。一つは市民等が信仰してゐるにせよ、ゐぬにせよ、敬意を

捧げてゐる基督及び諸聖徒の世界だ。クララは第一の世界に生ひ立つて榮耀榮華を極むべき身分にあつた。第二の世界に何故渇仰の眼を向け出したか、クララ自身も分らなかつたが、當時ペルジヤの町に對して勝利を得て獨立と繁盛との誇りに賑やか立つたアッシジの辻を、豪奢の市民に立ち交りながら、「平和を求めよ而して永遠の平和あれ」と叫んで歩く名もない乞食の姿を彼女は何んとなく考へ深く眺めないではゐられなかつた。軈て死んだのか宗旨代へをしたのか、その乞食は影を見せなくなつて、市民は誰憚らず思ふさまの生活に耽つてゐたが、クララはどうしても父や父の友達などの送る生活に從つて活きようと思ふ心地はなかつた。その頃にフランシス――この間まで第一の生活の先頭に立つて、雄々しくも第二の世界に楯をついたフランシス――が百姓の服を着て、子供等に狂人と罵られながらも、聖ダミヤノ寺院の再建勸進にアッシジの街に現れ出した。クララは人知れずこの乞食僧の擧動を注意してゐた。その頃にモントルソリ家との婚談も持上つて、クララは度々自分の窓の下で夜おそく歌はれる夜曲を聞くやうになつた。それはクララの心を躍らし、ときめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた。

その時分クララは著者の知れない或る古い書物の中に下のやうな文句を見出した。

「肉に溺れんとするものよ。肉は靈への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまづ肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺むものは靈に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉に倚らずして直ちに愛の隱るゝ所を知るなり。聖處女の肉によらずして救主を孕み給ひし如く、汝等心の眼さときものは聖靈によりて諸善の胎たるべし。肉の世の廣きに恐るゝ事勿れ。一度恐れざれば汝等は神の恩惠によりて心の眼さとく生れたるものなることを覺るべし」

クララは幾度もそこを讀み返した。彼女の迷ひはこの珍らしくもない句によつて不思議に晴れて行つた。而し

てフランシスに對して好意を持ち出した。フランシスを辯護する人がありでもすると、嫉妬を感じないではゐられない程好意を持ち出した。その時からクララは總ての緣談を顧みなくなつた。フォルテブラッチョ家との婚約を父が承諾した時でも、クヲラは一應辭退したゞけで、後は成行きにまかせてゐた。彼女の心はそんな事には止つてはゐなかつた。唯心を籠めて淨い心身を基督に獻げる機ばかりを窺つてゐたのだ。その中に十六歳の秋が來て、フランシスの前に懺悔をしてから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出る事が出來た。それからの一年半の長い〳〵天との婚約の試練も今夜で果てたのだ。是れからは一人の主に身も心も獻げ得る嬉しい境涯が自分を待つてゐるのだ。

クララの顏はほてつて輝いた。聖像の前に最後の祈りを捧げるといそ〳〵として立上つた。而して鏡を手に取つて近々と自分の顏を寫して見た。それが自分の肉との最後の別れだつた。彼女の眼にはアグネスの寢顏が吸附くやうに可憐に映つた。クララは靜かに寢床に近よつて、自分の寢てゐた跡に堂母から持歸つた月桂樹の枝を敷いて、その上に聖像を置き、そのまはりを花で飾つた。而してもう一度聖像に祈禱を捧げた。

「御心ならば、主よ、アグネスをも召し給へ」

クララは輕くアグネスの額に接吻した。もう思ひ殘す事はなかつた。

ためらふ事なくクララは部屋を出て、父母の寢室の前の板床に熱い接吻を殘すと、戶を開けてバルコンに出た。手欄から下をすかして見ると、暗の中に二人の人影が見えた。「アーメン」と云ふ重い聲が下から響いた。クララも「アーメン」と云つて應じながら用意した綱で道路に降り立つた。

空も路も暗かつた。二人はボルタ・ヌオバの門番に賂して易々と門を出た。門を出るとウムブリヤの平野は眞暗に遠く廣く眼の前に展け亙つた。モンテ・ファルコの山は平野から暗い空に崛起しておごそかにこつちを見つ

めてゐた。淋しい花嫁は頭巾で深々と顔を隱した二人の男に守られながら、すがりつくやうにエホバに祈禱を捧げつゝ、星の光を便りに山坂を曲りくねつて降りて行つた。

フランシスとその伴侶との禮拜所なるポルチウンクウラの小龕の灯が遙か下の方に見え始める坂の突角に、炬火を持つた四人の敎友がクララを待受けてゐた。今まで氷のやうに冷たく落着いてゐたクララの心は、瀕死者がこの世に最後の執着を感ずるやうにきびしく烈しく父母や妹を思つた。炬火の光に照されてクララの眼は未練にももう一度涙でかゞやいた。云ひ知れぬ淋しさがその若い心を襲つた。

「私の爲めに祈つて下さい」

クララは炬火を持つた四人にすゝり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて默つたまゝうづくまつた。

平原の平和な夜の沈默を破つて、遙か下のポルチウンクウラからは、新嫁を迎ふべき敎友等が、心をこめて歌ひつれる合唱の聲が靜かに、かすかにおごそかに聞こえて來た。

（一九一七年八月一五日於碓氷峠）

（一九一七年九月、太陽所載）

兄と彼とは又同じ事を繰返して云ひ合つてゐるのに氣がついて、二人とも申合せたやうに押默つてしまつた。兄は額際の汗を不愉快さうに拭つて、せはしく扇をつかつた。彼は顯微鏡のカヴーの上に薄らたまつた埃を隻眼で見やりながら、實驗室に出入しなかつたこの十日間程の出來事を、涙ぐましく思ひかへしてゐた。

簡單に云ふと前の日の朝に彼の妻は多量の喀血をして死んでしまつたのだ。妻は彼の出勤してゐる病院で療治を受けてゐた。その死因について院長をはじめ醫員の大部分は急激な乾酪性肺炎の結果だらうと云ふに一致したが、彼だけはさう信ずる事が出來なかつた。左肺が肺癆に罹つて大部分腐蝕してゐるのは誰も認めてゐたが、一週間程前から右肺の中葉以上に突然起つた聽診的變調と、發熱と、腹膜肋膜の炎症とを綜合して考へて見ると粟粒結核の勃發に相違ないと堅く信じたのだ。喀血が直接の死因をなしてゐると云ふ事も、病竈が血管中に破裂する粟粒結核の特性を證據立てゝゐるやうに思はれた。病室で死骸を前に置いて院長が死亡屆を書いてくれた時でも、院長は悔みや手傳ひに來た醫員達と熱心に彼の妻の病氣の經過を論じ合つて、如何しても乾酪性肺炎の急激な場合と見るのが至當で、斃れたのは極度の衰弱に起因すると主張したが、彼はどうしても腑に落ちなかつた。妻の死因に對してさへ自分の所信が輕く見られてゐる事は侮辱にさへ考へられた。然し彼は場合が場合なのでそこに口を出すやうな事はしなかつた。而して倒さに着せられた白衣の下に、小さく平べつたく、仰臥さしてある妻の死骸を眺めて默然としてゐた。

默つて坐つてる中に彼の學術的嗜慾はこの死因に對して激しく働き出した。自分は醫師であり又病理學の學徒である。自分は總ての機會に於て自己の學術に忠實でなければならない。こゝに一個の死屍がある。その死因の斷定に對して一人だけ異說をもつものがある。解剖によつてその眞相を確める外に途はない。その死屍が解剖を不可能とするのなら是非もないが、それは彼自身の妻であるのだ。眞理の闡明の爲めには他人の死體にすら無殘な刄を平氣で加へるのだ。自分の事業の成就を希ふべき妻の死體を解剖臺の上に運んで一つの現象の實質を確定するのに何の躊躇がいらう。よし、自分は妻を學術のために提供しよう。さう彼は思つた。暫く考へてから彼は上の考へにもう一つの考へを附け加へた。妻は自分が解剖してやる。同じ解剖するなら夫に解剖されるのを妻は滿足に思ふだらう。自分としては自分の主張を實證するには自分親ら刀を執るのが至當だ。その場合解剖臺の上にあるものは、親であらうが妻であらうが、一個の實驗物でしかないのだ。自分は總ての機會に於て學術に忠實であらねばならぬ。

彼は綿密にこの事をも一度考へなほした。彼の考へにはそこに一點の非理もなかつた。しいかとさう得心が出來ると、彼はそれを院長に告げて許可を受けた。その晚彼は親族兄弟の寄合つてゐる所で所存を云ひ出した。云ひ出したと云ふより宣告した。親族は色々反對したが甲斐のないのを知ると、せめては肺部だけの解剖にしたらどうだと云つた。若し死因が粟粒結核なら他の諸機關も犯されるのだから肺部だけですますわけには行かないと彼は云つた。それなら他人に賴んでして貰へと云つた。彼は自分のするのが一番いゝんだと云つた。そんな不人情がよくも出來るものだと淚を流して口惜しがる女もゐた。彼は妻の介錯は夫がするのが一番いゝのだと云つて動かなかつた。妻の里の親達は勿論、親族の大多數は、その場の見えばかりからでも、彼の決心に明らさまに反對な色を見せた。學術に對する俗衆の僻見をこれほど見せつけられると、彼は意地にも初一念を通さずには置け

なかつた。而して妻は自分に嫁いだ以上は自分のものだから、その處置については他人を煩はすまでもないと云ひ切つてしまつた。列座の人々は呆れたやうに口をつぐんだ。

愛憎を盡かした人々の中に、彼の兄だけは何處までも彼の決心を翻へさうとした。今朝も兄はわざ〳〵彼の實驗室までやつて來て、色々と話し合つてゐたのだ。

「お前は自分の生活と學術とどつちが尊いと思つてゐるんだ」

兄は扇をたゝむと、粘氣のある落着いた物言ひをして又かう論じ始めた。彼は顯微鏡のカヷーの上の埃から物惰氣に眼を兄の方に轉じた。

「僕は學術を生活してゐるんです。僕の生活は謂はゞ學術の尊さだけ尊いんですよ。……もういくら論じたつて同じぢやありませんか」

さう云つて彼は立上つた。而して壁際のガラス張りの棚の中から、ミクロトームのメスを取り出して剃刀砥にかけ始めた。滑らかな石砥に油を滴して、その上に靜かにメスを走らせながら、彼は刃物と石との間に起るさゝやかな音にぢつと耳をすましてゐた。手許から切先まで澄み切つた硬い鋼の光は見るものを寒く脅かした。兄は眼をそばだてゝ、例へば死體にしろ、妻の肉に加ふべき刃を磨ぎすます彼の心を惡むやうに見えた。

「そんなものを使ふのか」

彼は磨ぐ手をやめて、眼近くメスを見入りながら、

「解剖に使ふんぢやない、是れはプレパラートの切片を切る刃物です。慣れつてものは不思議で磨いでると音で刃の附具合が分りますよ。生物學者は物質的な仕事が多いので困る」

「俺れはこの際になつてもお前の心持にはどこか狂つた所があるやうに思ふがな。お前は今學術を生活するんだ

と云つたが、自然科學は實驗の上にのみ基礎を置くのが立場だのに、生活は實驗ぢやないものな。話があんまり抽象的になつてしまつたが、お前の妻の死體に刃物を加へてどこか忍びない所がありはしないかい。少しでもそんな心地があつ……」

そこに小使が這入つて來て、死亡室に移してある彼の妻の處置を如何したらいゝかと彼に尋ねた。九時から解剖をするからすぐ用意をして置けと彼は命じた。兄は慌てゝそれはもう少し待つてくれと云つたが、彼は敵意に近い程な激しい態度で兄の言葉を遮りながら小使を死亡室に走らした。

兄は歎息して默つてしまつた。彼も默つた。部屋の隅の瀨戶物の洗槽に水道の龍頭から滴る水音だけがさやかに聞こえた。病院の患者や看護婦の騷がしさも、研究部にある彼の實驗室の戶の內には押しよせて來なかつた。彼は解剖後の研究に必要な用意をするために忙しかつた。整溫器にパラフィンを入れてアルコール・ランプの灯をともしたり、ヘマトキシリン、イオシン、ホルマリン、アルコール、クロロホーム、石油ベンジンなどの小瓶を順序正しく盆の上に列べたり、〇・八ミクロの切片を切り出すやうにミクロトームを調節したり、プレパラート・グラスをアルコールに浸したりしてゐる中に、暫く打ち捨てゝあつた習慣が全く元にもどつて、彼は研究者の純粹な心持に這入つて行つた。彼の前にもう妻はなかつた。興味ある患部の縱斷面や橫斷面が想像によつて彼の眼の前にまざ〳〵と見えるやうだつた。半ば膿化した粟粒が肺の切斷面や腹膜やに顯著に見られたら愉快だらうと彼は思つた。先刻から考へる力を失つたやうに默つたまゝ、うつむいて、扇をつかつてゐる兄が弱々しい殉情の犧牲の如くに憐れまれた。

眞黑に古びてはゐるが極めて正確な懸時計の針が八時五十分を指した時、小使がまた現はれて解剖室の用意が出來てゐる事を報告した。彼は一種の勇みを感じた。上衣を脫いで眞白な手術衣に手を通しながら、

「兎に角支度が出來てしまつたから僕は行きます。人間はいつか死ぬんですからね。死んでしまへば肉體は解剖にでも利用される外には何んの役にも立ちはしないんですからね。Y子なんぞは死んで夫に解剖されるんだから餘榮ありですよ。……兄さんはすぐお歸りですか。お歸りならばどうか葬式の用意を……」

「俺れは立ち合せて貰はう」

この兄の言葉は彼にも意外だつた。「どうして」とその理由を聞かずにゐられなかつた。

「お前と俺れとは感情そのものが土臺違つてしまつたんだ。假りにも緣があつて妹となつてくれたものを、お前はじめ冷やかな心で品物でも取扱ふやうに取扱ふ人達ばかりに任せて置く氣にはどうしてもなれないんだ。お前はお前で、お前の立場を守るのなら、それは俺れはもうどうとも云はないが、俺れの立場もお前は認めてくれていゝだらう」

「無論認めますがね、解剖と云ふものは慣れないと一寸我慢の出來ない程殘酷に見えますよ。それでよければいらつしやい」

さう云つて彼は兄にも手術衣を渡した。

死體解剖

三谷

9h. A. M.

Aug. 2.

關口 ｝ 內科解剖
花田 ｝ 室ニテ

と彼自身が無造作に書いた半紙の掲示が、廊下をふきぬける朝風にそよいでゐるのを見て、二人は廊下の出口で解剖室用のスリッパに草履をはきかへた。薄暗く冷たい準備室に兄を待たして、彼は防水布の胸あてをし、左の手にゴムの手袋をはめた。兄弟は互に顏を見合せて、互にひどく血色が悪いと思ひ合つた。

不思議な身ぶるひが彼を襲つた。彼はいつの間にか非常に緊張してゐた。手を擴げて眼の前にもつて來て見ると、いつになく細かく震へてゐた。意志の強い彼はそれを不愉快に思つた。而してたしなめるやうに右手を二三度嚴しく振りまはしてから、兄と共に解剖室に這入つて行つた。

解剖臺の二つ置いてある廣やかな解剖室の白壁は眞夏の朝日の光と、青葉の射翠とで青み亙るほどに淸々しく準備されてゐた。助手と見學の同僚とが六人ほど彼の來るのを待ちかまへてゐた。あるものはのどかに煙草を燻らし、あるものは所在なげに室の中を歩きまはつてゐたが、這入つて來た彼の姿を見ると一寸改まつて挨拶した。

一體彼は醫者に似ず滅多に笑はない口少なゝ男だつた。內科の副醫長の回診だと云ふと、看護婦などはびりびりした。人をおこりつけるやうな事は絕えてしなかつたが、彼は何處にも他人を潜りこませるやうな隙を持つてゐなかつた。高い額と、高く長い鼻と、せばまつた眉の下でぢつと物を見入る大きな隻眼とを持つた彼の顏は、その日は殊更に緊張してゐた。何處にか深い淋しさを湛へた眞劍な表情は、この晴れやかな解剖室を暗くするやうにさへ見えた。

彼は兄に椅子を與へて置いて死屍の乘つてゐる解剖臺のそばに來た。若い二人の醫學士は煙草を窓からなげ捨てゝ、机について記錄の用意をした。見學の人達もそろ〳〵臺のまはりに集まつた。彼は二人の助手と二人の記錄者とに「今日は御苦勞を願ひました」ときつぱり挨拶して解剖臺の上に鋭い眼をやつた。死んだ妻の前に立つ

彼を思ひやつて、急にヒステリックにむせび出した二人の看護婦の泣き聲が後ろで聞こえた。

無造作に死體を被つた白衣の上には小さな黑い汚點のやうに蠅が三四匹とまつてゐた。枕許には型の如く小さなカードが置いてあつた。彼はそれを取り上げて讀んだ。

三谷Y子。二十歲。八月一日午前七時死亡。病症、乾酪性肺炎。

三谷Y子――その名は胸をぎゆつとゑぐるやうに彼の網膜に寫つた。彼は然し自分の感情を人に氣取られるのを厭つた。彼はせき込む感情を、强い事實で拂ひのけるために死體から白衣を剝いで取つた。

昨日まで彼の名を呼び續けに呼んで、死にたくないから生かしてくれ〳〵と悶え苦しんだ彼の妻は、悶えた甲斐も何もなく痩せさらぼへた死屍となつて、彼の眼の下に仰臥してゐた。顏と陰部とを小さなガーゼで被うてある外は、死體にのみ特有な支那の桐油紙のやうに鈍い冷たい靑黃色い皮膚が、溢れるやうな朝の光線の下に曝されてゐた。永く湯をつかはなかつた爲めに足の裏から踵にかけて、痂のやうに垢がたまつてゐた。肉が落ちたので、手足の關節部は、骨瘤のやうに氣味惡く眼立つてゐた。肺癆に罹つてゐた左胸は右胸に比べると格段に小さくなつてひしやげてゐた。

見學の人達は好奇な眼をあげて彼の顏に表はれる感情を竊かに讀まうとした。彼の隻眼は、いつものやうに鋭く輝く外には、容易に自餘の意味を語らなかつた。彼は冷靜な明瞭な獨逸語で死體の外貌上の報告をしはじめた。彼の手は冷たい死體の皮膚を蠅を追ひながらあちらこちら撫でまはした。記錄者はフールスキャップに忙しくペンを走らせた。その音だけが妙に際立つて聞こえた。

「メス」

やがて彼の發したこの一言に、室内は一時小さくどよめいた。助手の一人は解剖臺に取りつけてある龍頭をひ

ねると、水は氷柱(つらゝ)でもつるしたやうに音もなく磁器製の解剖臺に落ちて、小さな幾條(いくすぢ)かの溝を傳つて、中央の孔から床(ゆか)の下に流れて行つた。一人の助手は黑塗りの滑らかな檢物臺(オブゼクト・テイツシユ)を死體の兩脚の間に置いた。看護婦は大きな磁盆にしこたま大小のメス、鋏、鋸、楔(くさび)、止血ピンセット、鉗子(けんし)、持針器の類を列(なら)べたのを持つて來た。牛刀のやうな腦刀も備へられた。膿盆は死體のそこゝに幾個も配置された。人々の右往左往する間に、記錄者は机を解剖臺に近く寄せて、紙を改めて次ぎの瞬間を待ちかまへた。

彼はこの隙(ひま)に兄の方を見た。兄は眞蒼(まつさを)な額に玉のやうな冷汗を滴らしながら、いつの間にか椅子から立ち上つて、腕を組んだまゝぢつと死體を見詰めてゐた。「もうお歸りになつたらどうです」彼は試みにかう云つて見た。兄は返辭をしなかつた。彼の言葉を聞き取り得なかつたのだ。

彼は靜かに準備の出來るのを待つてゐた。人々がもとの位置に立ちかへると、彼は手術衣の腕を高々と看護婦にまくらせた。

乾酪性肺炎か粟粒結核か、事の眞相を否應(いやおう)なしに定むべき時が來た。自分の臨床上の技倆と研究上の蘊蓄(うんちく)とを、院長はじめ他の人々のそれと比較すべき時が來た。さう思ふと彼の隻眼(かため)は光つた。何んと云つても未だ漸く三十の彼は、少くとも老練と云ふ事を誇り得るまでに多くの經驗を積んだ反對意見の人々の壓迫を感じない譯に行かなかつた。誰も彼の內心の葛藤を知らないのが一つの便利ではあつたけれども、彼の不安を人に氣取(けど)られまい爲めには、彼の意志を極度に働かせねばならぬ程のものだつた。

「解剖上の現象」

かう彼は記錄者に報告しておいて、メスを死體の喉許(のどもと)にあてがつたと思ふと、覺えのある腕の冴(さ)えを見せて、まつすぐに引きおろした。こんな事には慣れきつた二人の看護婦も思はず兩手を顏にあてゝ下を向いてしまつ

た。兄は二三歩後ろによろけて、部屋中に響きわたるやうな鈍い呻聲を立てた。兄の眼は然し寸時も死體から離れなかつた。

どす黒い血が解剖臺の眞白な表面のあちこちを汚し始めた。眠さうな音を立てゝ窓際ではつてゐる蠅取機の甘酸ぱい香を離れて解剖臺の方に飛んで來る蠅の數はふえた。牛肉屋の前を通つた時のやうな一種の血なまぐさい香が忽ちに清淨な空氣を汚なくした。

彼の解剖の手際は水際だつてゐた。見る〳〵中に胸部から腹部にかけての諸機關は個々に取り除けられて、左胸部に肺痨の爲めに潰滅した肺の殘塊が咯痰樣の粘液に取りまかれて殘つてゐるのと、直腸部に塡充した脫脂綿がところ〳〵血に汚れて、うねくつて露出してゐる外には何も殘らなかつた。內臟は緣の高い圓い膿盆に盛られて死體の足許に置かれた。若し比喩が許されるなら、それは珍らしい果物でも盛つたやうだつた。尖端を上にむけて置いてある心臟の如きは殊に桃を聯想させた。

內臟が抉出されてしまつて見ると、見學の人々は、死體に對して本能的に感ずる一種の遠慮も、今朝の解剖に限つて存在する死體と執刀者との異常な關係なども忘れてしまつて、學術的の興味に釣り込まれた。あるものは硬直した死體の手の指を强ひてまるめて拳固を造り、心臟を持ち出して大さを較べて見た。而して、

「隨分この心臟は小だねえ」

と云つて彼に示したりした。

「どつちだらう、小だと肺が犯され易いのか知らん、肺が犯されると心臟が小さくなるのか知らん」そんな事を云ひ合ふ人々もあつた。

彼は內臟を一つ〳〵黑塗りの滑らかな臺の上に乘せて腦刀で縱橫に斷割つて見ながら、綿密な報告を落着いた

言葉で記錄者の方に云ひ送つた。著しく擴大した脾臟を割いて見ると粟粒狀の結節を到る所に發見した。彼は心の內で飛上るやうな勇みを感じた。然し彼は落着いてゐた。

「脾臟。形狀普通。著しく擴大。色普通。中部到る處に粟粒狀結節あり」

彼は冷靜に報告した。腹膜にも肋膜にも多數の結節を認めた。この上は肝腎の右肺部を檢査しようかと思つたが、粟粒がどの位廣く結成されたかを確めるために頭蓋骨を開いて腦膜を調べて見たくてたまらなくなつた。彼は始め妻の首から上には手を觸れまいと思つてゐた。まだ乙女の純潔と無邪氣とをどこかにそのまゝ持つてゐた妻の顏にメスをあてゝ支離滅裂にするのはとても忍び難い事だつた。どうせ腐るにしても彼女の顏はなるべく長くそのまゝにして置きたかつた。それだけの理由からでも彼は妻を火葬にしまいと思つた程だつた。妻が少しも疑はない信賴と尊敬と戀慕とを以て、よく彼の項に手をまいて、近々と彼の顏の前で他人には見せない蠱惑に滿ちた微笑をほゝゑんだ、さう云ふ記憶は現在の事のやうに鮮かに殘つてゐた。

彼は大膿盆に置かれた肺臟に手をかけながら、貪るものゝやうに死體の頭部に眼をやつた。顏は雪白のガーゼに蔽はれてゐて見えないが、髮の毛は、艶をこそは失つたけれども、漆のやうな黑さで、木枕から解剖臺の上に乘り餘るほど豐かだつた。彼はそれを見ると銳利なメスを頭蓋骨に達するまで刺透して、右の顳顬から左の顳顬にぐつと引きまはしたい衝動に襲はれた。彼の感じたその衝動は研究心以外の不純な或る感情―― Sadistic と云ふ言葉でゞも現はさなければならないやうな――が湧いたのではないかと思ふほどに強いものだつた。彼は今までの通り、見た所は冷靜であつたが、その心の中には熱い一種の欲望が燃えて來た。彼はとう〳〵助手に指圖して腦の抉出に取りかゝつた。

又ざわ〳〵と一しきり人々が動いて位置をかへた。助手は根元で無造作に結はへてある元結を切つて兩耳の後

ろと旋毛の邊にかけて前頭部と後頭部の髪を二束に分けた。分け目には日の目を見ない一筋の皮膚が冷やかな青白さをもつて現はれ出た。

その準備が出來ると彼は死體の枕許に立つた。而してメスを右の耳の下の髪の分け目の所につき刺した。顏の上には前頭部の髪の毛がもつれあつて物凄く被ひかぶさつてゐる。

突然彼のメスを持つた右手が、しつとり冷たい手のやうなもので握りしめられて自由を失つた。緊張し切つた彼の神經は不思議な幻覺に働かれて、妻のこはゞつた手が力強く彼の無謀を遮るやうにも思つた。と、冷水を腦の心に注ぎこまれたやうに彼の全身はぞつとした。

「氣でも狂つたのか、亂暴にも程がある」

かすかな、然し恐ろしい程力のこもつた聲が同時に彼の耳を打つた。見かへる鼻先きに眞蒼になつて痙攣的に震ふ兄の顏があつた。瞬きもせずに大きく彼を見詰めてる兄の眼は、全く空虛な感じを彼に與へた。彼にはそれが虛な二つの孔のやうに見えた。その孔を通じて腦髓までも見ようと思へば見通せさうだつた。

たゞ瞬間の奇怪な妄想ではある。然しこの時彼の眼に映つた兄は兄のやうには見えなかつた。妻の死靈に乘り移られた不思議な野獸が、牙をむいて逼りかゝつて來たやうに思はれた。彼の大事な仕事を土臺からひつくり返さうとする大それた邪魔者のやうに思はれた。緊張し切つてやゝ平靜を失ひかけた彼の神經は疾風に見舞はれた冬木の梢のやうにざわ〳〵と怒り立つた。彼は兄弟の見界をも失はうとした。而して次ぎに來るべき狂暴な動作を頭にたくらみながら、兄の握りしめてゐる右手を力まかせに拂ひのけようとした。その瞬間に彼の手はひとりでに自由になつた。兄は眼を見開いたまゝ棒倒しにセメントの床の上にどうと倒れたのである。

彼の命令によつて、兄は看護婦に附添はれて、失神したまゝ病室に運ばれた。

「あれは僕の兄です。看護で頭が疲れてゐる所に、見た事のないこんな有様を見たもんだから……餘計な御心配をかけました。……僕は少し疲れた。關口君、君一つやつてくれ給へ。腦膜が見たいんだから注意してなるべく完全に剝離してくれ給へ」

から彼は助手に云つた。彼は努めて元の冷靜に回らうとしてゐたが手の震へをとゞめる事が出來なかつた。それを人々に知られるのを惡んだ。

實際手を洗つて窓際に來て見ると彼は相當に疲勞してゐた。彼は衣嚢から卷煙草を出して火を擢りながら、四方を建物で圍はれた中庭に眼をやつた。

八月の日は旣に高く上つて、樹々の蔭を小さく濃く美しい芝草の上に印してゐた。卵色のペンキが眩しく光る向ひの建物の壁際のカンナの列は、燃えるやうな紅と黃の花を勢よく陽に擡げてゐた。もちの木の周圍には羽のある一群の小蟲が飛びかひながら、集つては遠ざかり集つては遠ざかりしてゐた。その間を、大きな蜻蛉が襲擊するやうにかけぬけた。看護婦が間遠に眞白な印象を殘して廊下に輕やかな草履の音を立てた。蟲が一本調子に靜かになき續けてゐた。彼の吐き出した靑い煙は、中庭の空氣の中をゆるく動いて行つて、吹きぬけの渡廊下の所まで來ると、急にあわてたやうに搖れ動いて殘りなく消え失せた。總てのものはしん〳〵と暑さに蒸れた。向うの建物の燃えるやうに屋根瓦の上には、眞靑な火のやうに、雲のない大空が輝いてゐた。そこから電車のきしみ走る音が幽かに聞こえた。

彼は庭から來る照り返しを避けるやうに隻眼を細めながら、生氣の充ち溢れた自然の小さな領土を眺めやつた。解剖臺からはごし〳〵と鋸で物をひく音が聞こえた。彼の妻の頭蓋骨は今椀の形にひき割られてゐるのだ。彼は見返らうとはしなかつた。

日影になつた建物の窓に二人の看護婦の姿が現はれた。二人は彼が解剖室から見てゐることには氣が附かないで、さも親しげに寄り添つてゐた。忙はしい仕事から漸く暇を得たやうに、二つの若々しい健康さうなその顔は上氣して汗ばんでゐた。美しくさへあつた。中でも若い方の一人は懷から小さな桃色の用箋に書いた手紙を取り出して、二人は互の顏を觸れるほど寄せ合つて熱心に讀みはじめた。二人は時々をかしさうに微笑んだり、嬉しさうに眼を見合せたりしてゐた。眞夏の光の中で、總ての情熱を初めて經驗してゐるらしい二人の處女の姿は、彼に何んとも云へぬ美しさと可憐さとを味はした。

解剖臺からは鋸の音と違つた或る鈍い音が又聞こえて來た。それは鋸の切れ目に鐵の楔子をさし入れて、椀狀の頭蓋を離すために、木の槌で輕くたゝく音だ。彼は自分の頭にその楔子をさし込まれたやうな苦痛を感じ始めた。

彼は現在華やかな眞夏の景色を眺めながら、それと少しの關係もない自分を見出だした。一度後ろを振り向けばそこに彼の世界があるのだ。まざ〳〵と何事も明らさまな晝の光の下で、最愛のものゝ腹を割き頭を抉る……さうする事が自分の事業に對して一番忠實な處置であるのを信ぜねばならぬ彼の世界はすぐその背後に擴がつてゐるのだ。「自分の生活と學術とどつちが尊いと思つてゐるんだ」と今朝兄の云つた言葉が突然恐ろしい意味を持つて彼の懷に飛び込んで來た。「自分は學術の爲めに全力を盡すべき一個の學徒である。自分は自分の學術に十分の信頼と十分の興味とを持つてゐた。然し自分が人間として要求し又要求せねばならぬものは生活することだ。生活を生活して見る事ではない。經驗する事だ。實驗する事ではない。然るに自分の奉事する學術は一から十まで實驗の上に立脚してゐる。自分の一生は要するに最小限の生活と最大限の觀察から成立たねばならぬ、自分は生活をそれほど局限して學術に奉事する滿足と覺悟とをほんとに持つてゐるのか」さう彼は嚴しく自己に詰問し

た。「生活と學術とどつちが尊い。我れを見失つてどこに學術がある」彼は今までの自己の立場をはつきり辯解すべき術を知らなかつた。

むしやくしやして彼は吸殼を芝生になげ捨てようとしたが、ふと窓際で手紙を讀みつゞけてゐる少女だちを驚かしてはいけないと思つて、室内の床の上に落して踏みにじつた。今の彼の心には、その二人の少女は彼の及びもつかない美しい存在のやうに見えたからだ。

「出來ました」

助手が彼の方にかう呼びかけた。默想は破れてしまつた。彼は今までの習慣に引きずられてその先きを辿らなければならないのを知つた。而して再び解剖臺の方に進んで行つた彼の顏には、前の通りな冷靜な緊張した色だけが漲つてゐた。人々は暑がつて顏や手をハンケチで拭つたが、彼の顏には汗一つ見えなかつた。

彼は然し死體の頭部に眼をやる事はしなかつた。而して黑塗りの臺の上に置いてある腦膜を取り上げた。脾臟程に顯著ではないけれども結節は可なり明瞭に觀察された。妻が死前に激烈な頭痛を訴へて、思想に一種の混亂を來した理由も說明せられるやうだつた。

もう疑ふべき餘地は全くない。彼の診斷は院長はじめ多數の醫員の所見を壓倒して勝利を得たのだ。彼の隻眼はまたひとりでに輝いた。窓際で休息してゐた時彼を犯した不安は、いつの間にか忘れられて、彼は又熱意をこめて目前の仕事に沒頭して行つた。

次に彼は敵の本城に逼るやうな勢で大膿盆から肺臟を取り上げた。人々も亦非常な興味をもつてそのまはりに集つた。今日の解剖の最頂點はこゝにあるのだ。彼は外部の記述が終ると、腦刀を持ち直して、縱にづぶりと刃先を入れた。彼が診斷した通り中葉以上の患部のやゝ粗雜な海老茶色の表面には、咯啖樣の色をした粟粒がうざ

うさする程現はれ出た。

「是れはひどい」

と誰かゞ驚嘆する聲がすぐ起つた。彼は思はず、最愛の妻の肺臓を、戰利品でもあるかの如く人々の眼の前に放り出した。

「死因。粟粒結核の結果と見るを至當なりとす」

昂然として彼は記錄者の方に向いてからう云つた。

列席者の中でそれに異議を稱へようとするものは一人もなかつた。

「胃」

彼は破竹の勢でべちやべちやに潰れた皮袋のやうなものを取上げて臺の上に置いた。彼の目的が達せられると、彼の熱心は急に衰へて一時も早く悲しい孤獨に歸りたかつた。彼は心の底にすゝり泣きのやうな痛みを感じた。然し濟ますべき事は順序通り濟ましてしまはねばならなかつた。見學者の中にも欠伸をしながら、患部の切片を入れたガラス瓶を衣囊にしまつて、そろそろ歸り支度をするものがあつた。

胃の解剖からは何んの結果も得べき筈はない、さう彼は思ひながらも、型の通り鋏を取つて一方を切り開いて見た。その內部からは旣に胃壁に凝着した血液が多量に黑々として現はれ出た。

「喀血を嚥下したんだな」

思はさる所に不意におもしろい事實を見出したやうに、一人の醫員は、死體が同僚の妻である事も忘れて、かう叫んだ。

彼はこの有樣を見ると思はず、手の甲で眼をかくしながら二三歩たじろいで後ろを向いてしまつた。この有樣

を見た瞬間に、妻の斷末魔の光景が、彼の考へてゐた學術の權威、學徒の威嚴、男の沈着、その外總ての障碍物を爆彈のやうにたゝき破つて、いきなり彼の胸にまざ〳〵と思ひ浮べられたからだ。

それはまだ三十時間とはたゝない昨日の明方の事だ。彼の妻の病室は醫員や看護婦の出入りでごつた返してゐた。その日一日の壽命はないと家族の人々も覺悟してはゐたが、こんな變調が突然起らうとは思ひもよらなかつたのだ。丁度夏の夜が早くも東明にならうとする頃、熱の爲めに浮かされて囈言を云ひながらも、うと〳〵と眠つてゐたY子は、突然はつきり眼をあいて床の上に起き上つた。

「氣がちがひさうに頭が痛みます。私の腦は破裂するんぢやないでせうか。私はもつと生きてゐたいんですから、先生、どうか助けて下さい。殺さないで下さい。どうか〳〵……あゝ痛い〳〵〳〵……死ぬのはいやです……私は死にたくないんです」

さう云ひながら彼女はそこに居合はした醫員にすがり附かうとした。醫員は惡靈にでも追はれたやうに顏の色をかへて飛び退いた。眞蒼に瘦せさらぼへたY子の顏の二つの眼だけに、總ての生命が死に追ひつめられて立籠つたやうに見えた。彼女はその眼で少しでも生命のあるものは引きよせて食はうとした。隅の方に坐つて彼女の不幸を悲しみながらも、その病氣のために自分の研究の中挫したのを殘念に思ふ程の餘裕を有つてゐた彼は、この有樣を見て、そんな事を考へてゐた薄情さを悔むと共に、ほんとに眞劍な同情が勃然として湧き起るのを感じた。彼は始めてのやうに自身の生命を自覺して、死の本當の恐ろしさに震へ上つた。而してたまらなく妻が憐れまれてその寢床にかけよつた。次の瞬間に二人は堅く抱きあつてゐた。妻は熱に燃える眼を見開いて、見入つても〳〵飽き足らないやうに彼の顏を凝視した。

「あなたゐて下すつたのね。私死んではいけないわね。私、死ぬやうな事はしてゐませんよ。助けて頂戴、ね、

ね。私本當に死ぬのはいやなんですもの。怖いんぢやない。いやなんです。胸が苦しくなつた。どうしたんでせう、火が附いたやう……あゝ、苦しい……」

その時彼はかたびらの胸許にどつと生暖いものを感じた。見るとそれは火のやうな鮮血だつた。妻の顏は一段と蒼ざめて、瞳は釣り上つて急に生氣を失つてゐた。やゝともすると居睡りでもするやうに彼女の顏は彼の胸にもたれかゝつて來た。

「Y子。氣をしつかりお持ち。何んでもないんだからな」

彼は思はず妻の耳もとでこんないゝ加減を叫んだ。而して彼女を靜かに臥かした。

暫くすると彼女はまた前のやうに異常な活氣を現はして起き上つた。而して又多量の喀血をした。さう云ふ事が二度も三度も續けて行はれた。

何時の間にか世の中は眩しいやうな朝の光になつてゐた。

「こんなぢや……血が無くなるだけでも死にます……コップ……コップを下さい」

看護婦が水をついでコップを持つて來ると、彼女は別に飮むでもなく、それを枕許に置かした。而してコップを見入りながら何かを考へてゐるやうだつたが、やがてむく／＼と身を起すと又喀血した。然し彼女は瀕死の病人に似もやらず、素早くもコップの水を床にあけて、それを口許に持つて行つた。コップには八分目程血が滿ちた。

Y子は暫く恨めしげにコップを見やつてゐた。と、いきなりそれを唇にあてゝ自分の血をぐつ／＼と飮みはじめた。

座にあるものは思はず固唾を飮んで、平手打ちでも喰はされたやうに後ろに靡きたじろいだ。一人として彼女からコップを奪はうとするものはなかつた。

彼が正氣を取りかへしてコップを妻からもぎ取つた時にはもうそれは虛になつてゐた。

是れが彼女の死に反抗する最終の激しい努力だつた。彼女の意識はだん〳〵不明瞭になつたが、それでも喀血する度每にその血を吐き出さずに嚥みこんだ。而して激しくむせた。頭の毛をかきむしつた。

「アッ……」

やがて總ての執着を、帛を裂くやうな銳く高い一聲に集めて絕叫すると、その途端に彼女は死んでゐた。

胃を鋏で開いて見た瞬間に、是れだけの記憶が、同時に、その犇正確な順序を取つてはつきりと彼の心を襲つたのだ。最後の絕叫を彼はもう一度たしかに聞いたと思つた。三日も不眠不休でゐた彼の腦は輕度の貧血を起して、胸許に嘔氣をさへ覺えた。見學の人々は彼が突然よろけて後ろを向いてしまつたのを見て怪訝の眼を見張つた。

「くだらない事を想ひ出したらもう解剖がいやになつた。闢口君、花田君、勝手ですが後の始末を君等にお賴み申します。夕方には僕が引取りに來ますから」

から彼は後ろを向いたまゝで云つた。人々はさすがにいかにも氣の毒さうに彼を見やつた。

彼は武士が武器を捨てゝ遁世するやうな心持でゴムの手袋を脫ぎ捨てた。匆々に手を洗ふと、助手が用意してくれたいくつかのガラス瓶に入れた內臟の切片を興味もなく受取つて解剖室を出た。

總ては彼の前で空に見えた。妻の死因が粟粒結核であるのを確めて、たつた先刻心ゆくまで味つた近頃にない喜び――一つは自分より熟練だと考へられてゐる多數の先輩に對して見事に占め得た勝利の喜び、一つは自分の妻の病症の眞相をしかと確めて何にともなく復讐をしおほせた喜び――その喜びは跡方もなく消えてしまつた。彼の心は眞底から哀愁に搖り動かされ、自暴自棄にさいなみ苦しめられた。

掲示場の前を通る時彼は今日の解剖の廣告が掲示板にぶら下つて風にひらめいてゐるのを見た。彼は力をこめて引剝すと、いま／＼しげにそれを丸めて庭に投げ棄てた。

「稚氣、衒氣……而も嚴肅に取りあつかはねばならぬ妻の死體と記憶とをめちや／＼に踏みにじつて、心竊かに得意を感じた稚氣、衒氣！　恥ぢて死ね」

部屋に歸つてからしつかりと考へる積りでゐながら、性急な彼の本心は瞬時も彼に餘裕を與へて置かなかつた。彼は足早に廊下を歩きながら絶間なくこんな考へに驅り立てられた。

自分の部屋に這入らうとするところに小使が來て、彼の兄の腦貧血はもう囘復して先刻家に歸つたと云つて兄が書き殘したといふ封書を渡した。

實驗室——彼の庵室とも、城廓とも、宮殿とも昨日まで思つて、この六年間立籠つてゐた實驗室を彼はいまいましげに見まはした。そこは機械と塵埃との荒野だつた。今朝、妻を解剖する可否を兄と論じながら、彼が自信と興味とに心ををどらして、殘りもなく準備したミクロトーム、染色素、その外のものゝきちんと一つの机の上に列べてあるのが、積み重ねられた枯枝のやうに今の彼には見えた。棚の中に等身に集められたプレパラートもあてもない無益な努力の古塚だつた。そこにあるもので、一つとして命のあるものはなかつた。何の關係もない物質がごつたかへしして秩序もなくころがつてゐる間に、龍頭から絶えず流れ出る水道の水だけが、たゞ一つすが／＼しい感じを彼に與へて脊も輕く涼しかつた。それほど室内は彼には厭はしく汚なく見えた。魔術師は法力を失つた。自己僞瞞の世界が彼の眼の前でがら／＼と壞れた。

手術衣を脱いで床になげ捨て、綿のやうに疲れ果てゝ放心した彼は、死んだものゝやうに椅子に身をなげかけた。而してあてどもなく壁を見詰めてゐた。

暫くすると彼の眼の中に無念の涙が熱くたまつて來た。身も魂も投げ込んだ積りで努力に努力を重ねて來た半生の生活は跡方もなく根こそぎにされて、彼は總ての人の生活から全く切り放されてしまつたのを感ぜずにはゐられなかつた。總ての科學者は、疑はしげもなく銘々の研究にいそしんでゐる。彼等は自分の仕事にどれ程の自覺を持つてゐるのか、またどれ程自己省察の眞劍さを缺いてゐるのか、それは判らない。然し兎に角彼等は各自の研究室で實驗所でこつ〳〵と働いてゐる。彼等は彼等だ。彼は彼だ。彼にはもう彼等の心は通じなかつた。中庭を見やりながら彼が考へた事は、理窟としてゞなしに、實感として否應なしに彼に逼つた。彼の妻の胃袋の中に凝固した血糊を見出した瞬間から、彼はこれまでの生活の空虚さをしつかりと感じてしまつた。實際をいふと妻の死因を實證した時にも、思ひあがつた誇りと滿足との裏に、何處か物足らない不思議な感じがあつた。それを實證したとて、それが彼の妻との悲しい關係をどうする事も出來ないではないかと云つたゞけでは說明し足りないが、何かさういふやうな不滿がすぐ頭を擡げてゐたのを彼は感じないではなかつた。さういへば、實驗に熱中してゐた最中でも、或る重大な研究結果を發表する喜びに際會した時でも、よく考へて見るとそこには一味の物足らなさが附きまつはつてゐた。さういへばずつと過去に遡つて、科學の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかゝる覺悟をした苦痛の覺えがあつた。六年間彼は、心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかつたのだ。而して强ひてそれがあるべき事であると思ひなさうと努めてゐたのだ。白紙のやうな無益な過去を彼は眼の前の塵によごれた冷やかな壁に見た。砂の上に立てられた三十年の空しい樓閣――それは今跡方もなく一陣の嵐に頽れてしまつた。彼の隻眼は抑へ切れぬ悲痛の涙を湛へてまじ〳〵と實驗室を見廻した。

徒らに正確な懸時計は遠慮なくけうとい音に時を刻んでゐた。その音と、龍頭を流れ下る水の音とが、森閑と

した眞夏の暑い沈默を靜かに破つた。ツァイス會社製の、無駄な飾りのない、然しいかなる點にも綿密な親切と注意との行き亙つた、從つてたくらまないで美しい直線や弧線の綜合を成就した顯微鏡も、今は彼の使役を拒むもの〻やうに見えた。彼は又窓の外の並木を眺めた。二階から見るので梢だけが鳥瞰的に眼に映つた、それは今まで氣附かないでゐた珍らしい樹の姿だつた。一つの葉も光に向いてゐないのはなかつた。而して無邪氣に快活に手をつなぎ合つて、夏の光の中に戯れてゐた。彼等はあの無邪氣と快活とを以て、風にでも雨にでも小跳りするのだ。彼の住む世界にもこんなものがあるのか。こんなもの〻ある世界にも彼が住んでゐるのか。さう彼は苦い心で思つた。

や〻暫くして彼は長い溜息と共に椅子から立上つた。而して手術衣を脱がうとするとその衣嚢の中でかちつと堅いものにぶつかり合ふ音を聞いた。彼は何げなく衣嚢に手を突つ込んで指先に觸れたものをつかみ出して見ると、それは解剖臺から持つて來た四つのガラス瓶だつた。水より輕やかに澄んだ薄いアルコールが七分目ほど入れてあるその底に、表面だけ蛋白の凝固した小さな肉片が一つづ〻沈んでゐた。それを見ると彼はぎくつとして夢から覺めたやうに解剖室の光景を思ひ浮べた。妻の――昨日までは兎も角も生きてゐて、彼と同じに人間であつたその妻の形見といつては、これだけになつてしまつたのだ。如何して二人はこの世に生れたのだ。如何にして二人は十億の人間の中から互々を選び出して夫婦になつたのだ。如何して妻は彼よりも先きに死んだのだ。如何して彼女の肉片は寸斷されてアルコールに漬けられるやうな運命に遇つたのだ。如何してこの偶然のやうな不思議が彼の心をいつまでも〱すゝり泣かせるのだ。

科學を生活する――何んといふおほそれた空言を彼は恥かしげもなくほざいたものだ。

彼はどう考へていゝか判らなかつた。然し彼は考へ直して見るより外に道を知らなかつた。

深い絶望に沈んだ彼はすがるやうな心になつてその瓶を四つとも取上げて自分の額にあてた。妻が死んでから今まで彼の強い意志でせきとめてゐた淚が、燃えるやうに、盲ひた眼からもはら〱と流れ落ちた。

（一九一七年八月一九日、輕井澤に於て）

（一九一七年九月、中央公論所載）

Aisaiwa Ribyuni nemuru.
Sono nemuritaru Tsumano Shikabane ni Tsumetaki mesu
wa kuwaerareta Sokoni Toriidasareru 5 gō 6 pu sokoni
ikaben saretaru byōgen Kaibo man no kokorowa odotta
daga ?—— Sokoniwa kanashi ka'nashi itoshi tsumono
iki taetaru shitai ga yokotawatte iru koreo omō to imamaden
Gakuri teki ni ugoita kokoro wa dokoe yara —— tsumeo
togite osoi kakaru yōna sabishi sato kanashi satoga
ato kara atokara to atamao motageta. karu
jikkenshitsu o idete koramo sono kanashi sabishi kokoro
wa kieyara de Tsai ni sono me kara atsui atsui
namidaga Harhara to koboreta.

3. 12. U. Motsumoto

凱旋

馬の名にて明治廿七八年戦役時分の軍用馬が地方民に渡されて其末が馬車を引く様に成つた時の作なり（源郎注）

甲州路から山越えに信州の羽黒下といふ小さな村に出る國道――國道とは云ひながら、人通りのすくない、こごしい山道――を凱旋は乗合馬車を引きずつてとこ〳〵と駈けた。高山の山峽は八月の事とてひどく暑い。千曲川は、汽車の窓から見る電線が高くなり低くなりするやうに、ひた〳〵と道添ひにせまつたり、見おろすやうに深く遠ざかつたりした。

御者は山育ちの、齒ぎれのいゝ無鐵砲さうな若者だつた。脊骨の所がいた〳〵しく赤むけになつた凱旋の尻を、彼は手綱でびゆんとしごいたり、頑丈な棒切れに馬の革を結びつけた鞭で續けざまにひつぱたいたりした。その度毎に凱旋は鬣をふり動かして、後脚でちよつと物を蹴あげるやうな動作をして歩度を早めた。曲角などでは馬車がきほひを喰つて、乘つてるものは人でも荷物でも危なく投げ出されさうになつた。

「是れはひどい」

めつたに口をきかない老將軍は苦い顏に强ひて笑ひを浮べながら御者に聞こえるやうにかうつぶやいた。將軍の向座に坐つてゐる、案内の役にまはつた村役場の若い書記は、將軍の意を迎へるやうに御者に向つて、薄鬚のはえた口に手を置きそへながら怒鳴つた。

「おいさう亂暴に駈けさせずといゝぢやないか」

御者は客に後ろを向けたまゝ「あさひ」をふかしつゞけた。

「この位駈けさせんぢや汽車の間にはあはんからな」

而して又ぴしりと鞭を馬の尻にくれた。將軍は顏をそむけて御者臺から熱い灰と煙との遠慮なく飛びかゝるのをよけた。

馬を見慣れた將軍には凱旋がよほどの齡であることが知れた。將軍は御者の氣を馬から轉じさせようとして、無駄話らしい調子で何歳だと尋ねて見た。

「さあ、若くも十八にはならうよ。何せ日露戰爭の時分にへえいゝ加減年つくひだつたに、大砲を引つぱり廻して大手柄をした名馬なんだかんな。牡であんす。齡はとつてもこの通りだ。こんな駈ける馬はこの近在には半匹だつてゐつこねえ。凱旋云うだ、名は。去年だつたかな、知事樣がこけへ來さした時感心してつけていつた名だあ」

さう云ひながら若者は見せつけるやうに、冴えた音をたてゝ鞭ち／＼馬を走らせた。實際凱旋の足なみは齡に似合はない早かつた。

「畜生だと云つてさう無性に鞭をくれるものぢやない」

將軍はとう／＼怒つた聲を出して見せずにはゐられなくなつた。沙河の大會戰に○○軍の參謀長であつた將軍の古い記憶がまざ／＼と念頭にうかび出たからだ。三百メートルの餘にもわたつて放列をした陣地の後方の窪地に、幾かたまりかにかたまつて、雷のやうな砲聲にも頓着なく、疲れ切つて首を垂れたまゝ、眼を細めて群がつた幾十頭の輓馬の姿がはつきりと眼の前に浮び出たからだ。

「さうたゝきどほしにたゝいては、鞭に慣れて利目がなくなる。鞭を見せるだけにしといて時たまたゝくがいゝのだ」

御者は將軍の言葉には答へもせずに書記の方をふりむいて、

「しぶとい野郎の事を面の皮が厚い云ふだらう。こやつはへえ畜生だけに尻の皮が厚いだ」

將軍の怒つたらしい聲をきくとまづ第一に自分でも叱りつけられた樣に震へ上つてゐた書記は、この場合さうあつてはならぬと思ひながらも、とんきよな聲をたてゝ笑ひ出してしまつた。

「ひつぱたく時にはひつぱたくし、可愛がる時には可愛がらねえぢや馬は動きつこねえ。俺やこれでおつかあの腹ん中にゐる時から馬車屋だつたで心得がある」

さうらそぶいて御者は搖られながら新しい「あさひ」に、吸ひきつた「あさひ」の火を移さうとした。火の子や灰が盛んに馬車の中に飛びちつた。

「手前は腹の中から馬車屋だつたか知んねえが、こつちは腹の中からこんな惡搖れのする乘合馬車にばかり乘るやうには出來てゐないんだからな」

書記は今の不謹愼な笑ひをとり消すつもりでかう云つて見た。

今度は御者がから〳〵と高笑ひをした。

「全くだよ。お前さんの馬車に乘つたは知事樣の來さした時このかた見た事がねえ」

書記は意志の弱さうな顏を眞赤にしてちらつと將軍の方を見た。將軍は知らん顏をしてきら〳〵と寶玉のやうに夏の日に輝く千曲川の水流を見つめてゐた。

會話の緒目はそれでぷつんと切れてしまつた。

凱旋は相變らず骨ばつた身體をかたみがはりにゆり動かしながら、鞭にせきたてられてぽく〳〵と駈けた。ぼろぼろに千切れた莫蓙の下の、靑だか栗毛だかわからないほど汚れて白毛の交つた背中の毛なみはぐつしより汗を

かいてゐた。齡のために眼のまはりと尻尾とは際だつて毛が薄くなつてゐた。四足とも蹄はすつかり開いて縱に皺が入つてゐた。老衰のむごたらしさ痛ましさが、何處から何處までもゆき亙つてゐた。而してその歩きつきは、感激も興味もなく慣れたをどりでも不恰好にをどつてゐるやうに見えた。

馬流といふ小さな村の手前にかけてある釣橋まで來ると御者は斷りもなく不意に馬の鼻をぐんと橋の方に向けた。急角度に方向をかへた馬車は鋭く一方に傾いで、暫くは一側の車輪だけで危く空中に浮いてゐたが、やうやくの事でがたんとひどい地響きをたてゝ、安定の位置にかへつた。默りこくつてゐた馬車の上の二人は思はず顏を見合せて幌の骨をかたく摑んだ。

「馬鹿！　何をしやがるんだ。何處に行くつもりだ手前は」

書記は恐ろしさに蒼くなりながら田舍の語氣をそのまゝ怒氣と一緒にさらけ出した。御者は惡戲者らしい横着な顏をふりむけて、

「近道をしにや汽車の間にあはんだ。それにあすこ（馬流の方を鞭で指しながら）へ行くとへえ別嬪がたんとゐるで馬が歩きやせん」

とほざいた。その言葉は然しがら〳〵ごと〳〵とけたゝましく鳴り響く橋板の音に、半分がた打ち消された。

凱旋は千曲川の右岸に沿うてうね〳〵と人家の間に續く村道を走つた。それは國道からするとまた一きは惡路だつた。頭だけ出した大きな石のまはりの土はどつかり落ちに落ちくぼんでゐて、車輪がどんとそれにはまり込むと、凱旋ははずみに引きもどされてとまつてしまつた。

「うぬ、くたばり損ひが……骨を惜しみやがつて……」

ぴしりと鞭が高く鳴つた。老馬は激しく鼻をならしながら、痩せた肩の骨を慘らしく飛び出さして前脚をふん

ばつた。やうやく車輪がゆるぎ出たと思ふと、

「走れ」

といふ御者の聲と共に、怒り狂つた蛇のやうな鞭の先きが續けざまに、赤むけになつた尻の邊にかみついた。凱旋の鼻の孔は充血して眞赤になつた。眼かくしに遮られた眼は狂氣のやうな興奮の色を見せた。

負ひかぶさるやうに川岸の山のせまつた右岸には國道にあつたほどの風もなかつた。やゝ傾いた午後の日は、一日中で一番暑い光を草ばかりの山腹に投げて、かつとするやうなその照返しを僅かばかりな平地にあびせかけた。處々で白い泡にくだけながら眞青に流れ下る川の水すらが暑苦しく眺められた。御者は、時々「あさひ」を口からはなして食指と中指との間にはさみ、小指と手の平でラッパを取上げながら、剽輕な暑苦しい音をたてた。而して左手では手綱をしごき續ける事を忘れなかつた。馬車はをどつたり、よろけたり、かしいだり、のめつたりしながら狹い道路をまつしぐらに轉がつて行つた。馬車に慣れないその邊の村の人達は右往左往に逃げ退いて、惘れたやうに馬車のあとを見送つた。

將軍と役場の書記とは、堅い石からすりへらされて出來た、砥の粉のやうに細かい砂の濛々と舞ひ込む馬車の中で、ぎん／＼と蒸しかへす土いきれに眼をそばめながら、汗ばんだ顏を苦ましてゐた。歷史にも名が殘るほどの大人物がひどく迷惑してゐるのを恐縮し切つた風が書記の顏にはよく讀まれた。將軍の苦い顏はもつと苦かつた。その白鬚に被はれた口尻や、深い眉の間の縱皺には、生活全體を悔むやうな苦さがあつた。

將軍は御紋章を上蓋に彫りこんだ恩賜の時計を帶の間から出して時間を見た。なる程汽車の時刻はかなり逼つてゐた。その汽車に乘り遲れると明日でなければ目的地には着けないのだ。そこには將軍の孫達が將軍の歸りを頻りと待ちわびてゐる筈だつた。その孫達の父にあたる將軍の獨息子は矢張り軍人だつたが、臺灣に駐在してゐ

る間に赤痢にかゝつて死んでしまつた。その嫁も夫が亡くなつてから間もなく、假初の病氣がもとで夫の後を追つた。頑是ない將軍の孫達はあはれな孤兒なのだ。將軍はどうしてもその日のうちに孫達の所に歸りたかつた。齡につれて一徹になり增さる心には、目的地が近くなればなるほど歸りが急がれた。そこに持つて來て、將軍の心を、全くちがつた、今になつて考へて見ると何とも云へず恐ろしく慘らしい戰爭といふ方面に否應なしに引きずつて行く瘦馬は、將軍の眼の前に、將軍を鞭つやうな皮肉な姿を見せてゐた。あたり前の老人になり切らうとする將軍は、この馬一匹の爲めに絕えず苦しい壓迫を感じなければならなかつた。馬をいたはつてやらうか、早く孫に遇はうかといふ平凡な問題のために將軍の顏は苦りきつてしまつたのだ。愚痴にかへつたものだと將軍は心の中で歎息した。同時にこの平凡な問題の後ろには、將軍の心にあまる程な虛ろな眞暗な世界が果てしもなく擴がつてゐるやうにも思はれた。老人ばかりがどうかした拍子に味ふ寂しさが、烈日の下で將軍の胸に重苦しく沈んで行つた。

凱旋の步度がゆるくなつたと思ふ程もなく、突然何かにつまづいて危く倒れようとした。はげしい轍の音の間に金屬性のものが石にあたつて彈返つた音がはつきり聞こえた。次の瞬間に御者は手綱をぐんと引きしぼつて、御者臺からひらりと飛んでおりてゐた。書記がふらつく腰を立て直し〱馬車から頭をつき出した時には、御者は既に馬の右後脚を自分の膝の上にかいこんでゐた。

「何ね蹄鐵がとれたゞ。爪が破れてるだで釘がきかねえだ。これツ。ぢつとしてゐくされ」

といひながら御者は項をかへして眼を怒らしながら馬の顏をにらみつけた。

馬車がとまつて見ると、乘客の身體は電氣をかけられたやうに妙にしびれて、耳はかーんと聾がへつてゐた。御者が馬に草鞋をはかせてゐる間に、將軍ははじめてのう〱とした心地になつて、體に込めてゐた力をゆるめ

ながらそちこちを見まはした。
行手に轉がり出た山の鼻に大きな石塔のやうなものが立つてゐた。
「あすこに見えるのはあれは戰勝記念碑か招魂碑か」
さう云ふもの丶前に來ると一禮する癖のついた將軍は御者に尋ねて見た。
「あれであんすか。あれはへえあんなものだよ」
御者は無頓着にぶり〳〵しながらからいひ放つた。書記はこの失禮な答へにぎよつとした風で、等分に將軍と御者とを見ながらもぢ〳〵してゐた。
「一際つぶさせやがつて見ろ。かうしてくれるから」
御者はいきなり頬革をくゞらして、馬の眼かくしを沒義道に後ろに折り返した。手綱をひけば否應なしにそれが馬の頬をせめる事になる。おまけに今まで遮られてゐた眼界が急に大きく擴がつた。脚の先きまで汗みどろになつて弱り切つた凱旋も、針を打ちこまれたやうにきつとなつて耳を立てなほした。
「おい御者。もういゝ。汽車には間にあはんでもいゝからゆつくりやれ」
將軍はとう〳〵たまらなくなつてさう云つた。
「一體お前さんの商賣は何んだ」
この留度のないぶしつけな御者の言葉に、書記ははら〳〵して思はず又腰かけから立上つた、而してこの粗末な和服を着た肥大な爺さんが誰であるかを知らせて、御者に一泡ふかせようと身がまへた。將軍は然しそれを氣取ると嚴しく眼でとめてしまつた。御者は御者臺にのぼりながら言葉を續けた。
「何んの商賣でもいゝ。商賣をするに途中でごしたい(疲れた)云うてやめたら、働いたゞけが無駄になるばつか

だ。何んの得もありつこはねえ。この馬だつて何んで今までから汗流したか譯がわからなくなる……り、りり、りゝゝ……」

　彼は舌を上脣に巻き上げて氣息を吸ひこみながら器用に音をたてた。而して同時に鞭で續けざまに馬の尻をなぐつた。

　凱旋は暫くは失つた力を盛り返したやうに見えた。馬車はまた激しく動搖しながら、村道を人もなげに轉がつて行つた。將軍は御者の言葉をおもしろいとも思つた。自分が大將まで經上つたのも矢張りさうだつた。馬は少しかはいさうだが早く孫達の顏を見るのもいゝと思つた。

　馬車は夕景になつてからとう／＼停車場に着いた。凱旋は目的地に來ても、秣や水にありつけるのが眼の前に見えても、少しも勇む樣子はなかつた。暑さと勞役に打ちのめされた奴隷のやうに頭を低く垂れたまゝ、はつ／＼と荒い氣息づかひをした。その鼻の先きの地面の上で砂埃が小さく亂れ動いた。將軍は信玄袋から出しておいた甘味の強い菓子を凱旋の鼻先きにもつて行つてやつた。凱旋は從順に將軍の手からそれを口で受取つた。將軍は汗ばんだ額を撫で廻しながらやゝ暫くそれに見入つてゐた。

　無事に將軍を汽車に乘りこました役場の書記は重荷をおろして安心した顏に人の好さゝうな微笑を浮べて、薄鬚をひねり／＼御者に近づいた。御者は「あさひ」を燻らしながら、凱旋の後脚の爪を前から見横から見して眉の間に皺をよせてゐた。

「お前今のお客が誰だか知つてるか」

　御者は馬鹿にした顏を若い書記の方に向けた。

「誰が知るかさ」

「知つたら驚かうな」
「俺は驚いた事なんかねえよ」
　それを聞くと書記は滿足さうににつと笑つた。
「あれはな陸軍の〇〇大將だ」
「何んと」
　中腰をして馬の爪ばかり見てゐた御者は飛び上らんばかりに驚いて棒立ちになつた。書記はいよ〳〵滿足してにこ〳〵した。
「お前かつぐな」
　やがて御者は疑はしさうにかう云つて見た。書記の虛榮心は絕頂に達した。
「是れを見ろ」
　と云ひながら將軍が村長にあてゝ禮の心を書いた大きな肩書附きの名刺を御者の前につきつけると、御者はそれを見て馬鹿なやうな顏をしてしまつた。書記の薄鬚には急に重みがついて、村役場の役人となると矢張りえらいものだと御者に思はせた。
　書記は半日分の復讐を一擧に收めた快さにほく〳〵しながら、賃銀を渡した外に、壹圓の紙幣を勿體ぶつて御者の眼の前につきつけた。
「是れは閣下（彼はこゝで村長の口調をまねて見た）が凱旋に下さつたのだ。いゝか。あんな名馬を亂暴に使ふもんでねえ。いゝか。これでうまい馬糧でも買つてやるがいゝとかう仰有つたんだ。有難く頂戴して親方に見せるんだぞ」

御者は妙に改まつて「あさひ」を口から離して壹圓札を受取つた。

書記は貰つたばかりの細君の待つてる自家をさして獨笑ひをしながら歸つて行つた。三日の間何んともぎごちない思ひをして將軍についてまはつた旅の窮屈さから解放されて、ゆつくり夕飯の膳に向ふ幸福がむづ／＼するほど後から／＼彼の胸にこみ上げて來た。彼は懷に手を入れて將軍から貰つた一封を撫でまはして見た。自分の友達でゞもあるやうに將軍の話を細君にして聞かせる時の得意さを考へても見たりした。その外の事は綺麗に忘れてしまつてゐた。

御者は貰つた札をと見かう見した。薄い鋼のやうな彈力をもつた手垢のつかない札には折目一つなかつた。「これがほんとの札つぴらつていふのだ」と彼は思つた。彼はそれを押しいたゞくやうに帽子の中にそつと入れて凱旋の口を取つて厩の方に引つぱつて行つた。凱旋は可なりひどくちんばをひいて歩いた。御者はそれを見るといま／＼しさうに舌をならした。うまく親方の眼をごまかして逃げないと、又親方と徳利との前に引きすゑられて、酒の肴に一晩中小言を喰はなきやならないと思つた。

厩に行つて見るとうまい事にそこいらに親方の姿は見えなかつた。御者は手取早く馬具を解いて凱旋を厩に引きこんだ。水をつかはせる隙も恐ろしいので彼は寢藁をいそがしく丸めていゝ加減に汗だけ拭つて置いてすぐ厩を飛び出した。

暫くすると御者は或る曖昧屋の帳場に現はれて盛切をひつかけてゐた。白粉をこつてり塗つた二三人の酌婦の前に折目のない壹圓札をふり廻して見せた。

「是れがほしいか。是れがほしけりやな。是れがほしけりやなあよ」

さういつて彼は女達に、自分の顏を近々とよせて一人々々睨めまはすやうにした。酌婦達は誘惑するやうな風

つきで、彼の眼の前で媚び笑つた。彼は滿足で滿足で誰でも彼でもはりなぐりたい位だつた。凱旋に秣と水とをやる事などはすつかり忘れてしまつてゐた。

一番あとまで凱旋を忘れなかつたのはかの年老いた將軍だつた。汽車の中で一人になると一心に凱旋の事を考へた。如何なる名馬でも駿馬でもその運命は同じ事だ。齢を取れば取るほど段々卑しい苦しい勞役にまはされて結局死んでしまふのだ。將軍は自分の飼つてゐた幾匹かの乘馬の末路をも思ひやつて見た。而して老いてから榮達といふ榮達を一身に荷つた自分の一生といふものも考へた。彼はかゝる榮位にありながら何處か馬ばかり憐れんではゐられないやうな不安――といふ程ではないが、もつと變にひきしまつた感じ――を覺えずにゐられなかつた。「あの馬もさう長い命ではあるまい。あれは早く死んだ方がいゝんだ」さうも思つて見た。

ふと將軍は自分の旅した界隈には肉といつては牛肉も豚肉もなく、「さくら」と俗稱する馬の肉ばかりだといふ事實を念頭に浮べていやな心持をした。

それでも汽車が目的地に近づくと將軍の心は可憐な孫達の方に引かれて行つた。丸々と肥つた頬ぺたや、始終驚いてゐるやうなくりくりつとした眼やが見えるやうに思ひ浮べられた。さういふ想像はいつでもめぐりのゆるくなりかゝつた老年の血行に力を與へてくれた。將軍は荷物棚から孫達の土產に買つた玩具の新聞包みを取りおろして、上からはさつて見た。馬車の動搖にも格別いたんでゐないらしかつた。將軍は安心してそれを膝の上にのせたまゝ、ゆつくりした氣持になつて涼しく暮れて行く山國の野山の景色を眺めやつた。

凱旋の記憶はいつともなく將軍の頭からも消えてしまつた。

藪蚊と馬蝿とがわんわん飛びまはる薄暗い臭い厩の中に、凱旋は眼を細めて失神したやうにしよんぼり立つてゐた。尻の赤はげには地も見えない程に蝿がたかつてゐた。凱旋は尻尾をふつて見た。然し細い短いその尻尾を

蟲どもは恐れる風がなかつた。細めた眼のまはりにも、吐出した泡の乾いた口のまはりにも、蠅どもは遠慮なくつめよせた。空になり切つた腹は時々ぐう／＼と音をたてゝ鳴つた。

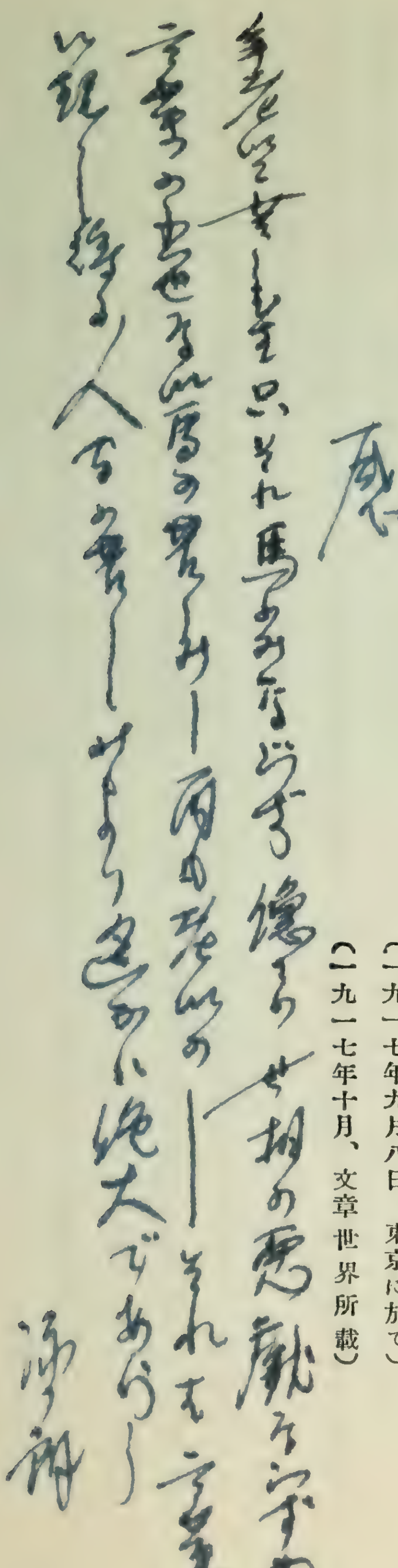
凱旋は堪へきれないやうに頭をもたげて高く嘶いた。嘶いて耳をすますやうにした。然し人の近づく氣配はなかつた。

凱旋はしかたなく又頭を下げて眼を細めた。而して知らず識らず體を前後に小さくゆすりながら眠りに落ちて行つた。空腹が疲勞に打ち勝つ瞬間だけ彼は驚いたやうに頭を上げて大きく眼を開いた。然し總てが無駄だと知るとまた疲勞にけおされて淺い眠りに落ちた。

夏の日はこゝにも靜かに暮れて行つた。

（一九一七年九月八日、東京に於て）

（一九一七年十月、文章世界所載）



迷　路

首　途

「迷路」序篇

某年八月十四日。晴。

くだ〳〵しいけれども「秋が來る」と繰返して書かずには置けない。朝、食卓の用意をする爲めに食堂に這入ると、水のやうな朝風が靜かに廣間一杯にこもつてゐて、晝の暑さなどは考へても見られない程體がひきしまる。「無常を思へ」……床の上に落ち散つたパンの屑すらがさうさゝやく。

僕は又苦しい心を抱いて芝生に出た。初秋の日は眞夏のそれよりもぎら〳〵と眼に沁みて痛い。空氣が乾いて行くからだらう。患者達はこの强い光の中にも薄い影を草に染めて、羊のやうに默つたまゝ、立つたり居たりしてゐる。噪狂患者の病房からは、室內に閉ぢ込められて、炎熱に興奮の度を增した男女の叫び聲が、何か恐ろしい運命の警告でもあるやうに、おど〳〵した僕の心を脅かして時々響いて來る。眼には憔れにやつれ果てた患者の痛ましい姿を見、耳には獸のやうな恐ろしいその呻き聲を聞きながら、僕の魂はまだ本當に眼を覺まさうとはしないのか。僕は祈りたい。然し祈れない。死刑の宣告を受けながら、その事柄の重大過ぎる爲めに、はつきりと自分に逼りつゝある恐ろしい運命を見極める事の出來ない囚人のやうに、僕は唯わく〳〵と的もない事を思ひ惑ひながら芝生の上を行つたり來たりする。如何かしなければ生きながら死んでゐるのも同然だぞと、胸の中で煮

えくりかへるやうに逼つて來るものがある。然し僕には如何していゝのか全く見當の附けやうがないのを如何しよう。

一旦神を信じたと信じた者が、純一な自分の心の導きに從つて歩いて行く中に、何時の間にか神から離れて、自分は畢竟本當に神を知つてはゐなかつたのだと氣が附いた時ほど、孤獨を感ずることが外にあらうか。僕は然しこんな心の叛逆を堅く胸に祕めて誰にも漏した事はない。而して心の底に捲き起つた渦卷が段々と表面に浮び出て來るのを、物凄く感じながら默つて見守つてゐるのだ。今でも僕の所には色々な人から思ひもかけぬ手紙が屆いて來る。「私はあなたのお話に感激して罪を悔い改めた」、「私が不幸の淵に沈み果てゝゐた時、あなたは神の名によつて同情を示して下さつた」、「我が信仰の子よ、自分はお前の信仰と行ひとが、やがて世の光となる時を待ち望んでゐる」、「本國に歸つて來い。野は黄色に熟して苅手の數は少ない」……さう云ふ言葉が哀願となり、詰問となり、呵責となり、脅威となつて、私の心に深い不安を投げ與へる。考へて見ると、僕は少からぬ犧牲を人に拂はせ、又自分でも拂つてこゝまで進んで來た。如何しても僕が信仰を屈げようとしなかつた爲めに、父母からは勘當同樣な言葉を浴びせられた。而して僕を自分の眼程に愛してくれた祖母は、悲しみの餘り死病に罹つて、來世で僕を佛弟子にする外はないと云ひながら亡くなつた。僕の心にはそれが深く刻まれて忘れる事が出來ない。神の信仰から離れてしまつた僕は、今あの世の祖母を泣かしてゐるだらうか、喜ばしてゐるだらうか。

總ては若い情熱の仕業だつたのだ。僕は女を戀する代りに神を信じたのだ。若い、華やいだ、平和に育つた心が、如何して生に對する不安を信仰となるまでに感じ得よう。心の底には負けじ魂を有り餘る程持ちながら、而して熱し易い南國の血液を十分稟けながら、女のやうに內氣で物にこだはる僕は、何事につけても心のまゝに振舞ふ放膽さがなくつて、動ともすれば、獨りで何事も胸の中に收めて物を思ふやうな青年だつた。その結果僕の

情熱は内面的な信仰の方へと牽かれて行つた。僕は戀人の胸に流す涙を、寢前の祈禱に流してゐた。戀人の手を撫でるやうに、獨り山の奥に分け入つて白樺の滑らかな幹を撫でた。愛したい、命をかけて愛したいあの力強い衝動を、僕は一人の女に與へる代りに、神の名によつて無暗にまき散らした。愛の浪費――そこには如何しても癒やす事の出來ない一味の物足らなさが伴つてゐたけれども、全く浪費しない苦しみには代へがたい事だつたのだ。然しこんな心の傾向は今から振返つて見て始めて判るので、その時は夢にもさうとは思はなかつた。僕は全身全靈の要求から神を求めてゐるとばかり思つてゐたのだ。僕は瘦せるまでに身を詰めて日夜神の中に住み切らうとした。然し僕にはそれが出來なかつた。色々な誘惑が叢雲のやうに絶えず心の中に湧き起つて來て、神と僕との間に眞黒な壁を築かうとした。その誘惑の中でも殊に重い恐ろしい誘惑は肉情のそれだつた。僕が殊に神に近づいたのを意識して、有頂天に感謝の祈禱を捧げた次の瞬間には、いつでも肉慾の惡魔が爪を磨いで襲ひかゝつて來た、立直つた僕の信仰を突き崩さうとでもするやうに。僕はそれと戰つて大抵は敗かされた。天國に屆く梯子から眞逆樣に突き落されたやうな落膽を苦く味つた。誘惑は肉情ばかりではなかつた。自分の心に疚しい有らゆる欲望が絶えず胸に湧き起つて僕を神から叛かせようとした。

さうであるのに人々は僕を堅固な神の人と噂した。而して心弱くも僕は、さう噂する人達に、心にもない行ひや言葉で阿らうとしてゐた。それにはつきり氣が附くと僕はもう堪らなくなつたのだ。僕の今までの生活は全く空だつた、無だつた。僕は二十何年を根なし草のやうに過ごしてしまつた。さう思ふと底のない寂しさに包まれずにはゐられなかつた。

惡人であれ善人であれ、僕は僕の生活を生きよう。先づ自分に歸らう。而して僕は悔悟した放蕩息子のやうに、幻だつた總ての榮華を後に見て、僕自身といふ見る影もないあばら家を唯一つの隱れ家と目指して歸つたのだ。

然しそこにも僕を待つものは亂離と荒廢ばかりだつた。僕はどうそれを處置していゝのか判らない。こんな事を思ふと僕は居ても立つてもゐられなくなる。然し僕はさうしてはゐられない、落着いてしつくりと考へなければならない。さう自分をたしなめながら、僕は慄へる心と足とを縛りつけるやうに、强ひてベンチに腰をかけた。而してダンテの地獄篇を開いて、昨日の續きを讀み進んだ。

第九地獄の果てしもない氷原が寒く廣く僕の想像の眼の前に展けて來る。その第三界のプトレミヤで苦しみ踠くフラ・アルベリーゴの姿がまざ／＼と現はれる。同宗の法友を裏切つて、食卓に甘い果物を命ずる聲を合圖に、刺客を呼び入れて恐ろしい殺戮をしてのけたその靈は、アトロポスの鋏も待たずに、眞逆樣にこの幽界に陷りながら、肉體だけは地上に殘つて惡魔の假りの宿りとなり、ゼノアの街をなほ僧體のまゝさまよつてゐるといふ懺悔の聲が――懺悔しても懺悔しても、未來永劫救ひを受ける事の出來ない懺悔の聲が――心の髓をわなゝかして聞こえて來る。僕の五體も去年の形を少しも變へてはゐない。人は僕の姿だけを見て、心の奥で戸板を裏返したやうに行はれた恐ろしい叛逆の苦しみ悲しみを如何して察し得よう。沍寒の地獄では、熱い悔恨の涙も亦氷るのだ。茵陳のやうな苦い悲しみを吐き出さうとして、涙堂のしぼり出す涙は、流れる間もなく睫毛に凍りついて、厚い皮瘡のやうに視力を奪つてしまふのだ。永劫の氷に首まで閉ぢられて、手足の自由を失つたアルベリーゴは、せめてはの慈悲に涙の氷を取りのけて、もう一度泣く事の出來る境涯にしてくれとダンテに賴む。僕もアルベリーゴと一緒になつてさう賴んでやりたく思ふ。「無禮こそは彼に對する最上の禮儀なれ」――ダンテは吐き捨てるやうに唯一言かういつて、冷やかな眼もくれずにヴァージルと一緒に第四界に向つて遠ざかつて行く。熱のない、光のない一面の氷原は、また永劫の沈默に鎖されて、ヴァージルとダンテとの小さな後影が動くともなく遙かのあなたに遠ざかつて行く………。

この時僕は突然聞き覺えのある底力の籠つた聲で「A」とこの空恐ろしい瞑想から喚び覺まされた。思はず立上りはしたが、まだ夢心地でゐる僕の眼の前に、副院長のラドラム博士と、中年を過ぎた見知らぬ一人の紳士とが立つてゐた。太陽からまともに來る琥珀のやうな光が、綺麗に刈り込まれた芝生を眩しい程に照らしてゐる。僕はあの物凄い氷原とこの爽やかな日光とのどちらが夢であるかを思ひ惑つた。

副院長はきさくに僕の肩に手をかけてその紳士の方に振り向きながら、

「この異邦の青年です、あなたの話相手にならうと思ふのは。忠實な働き手で而して同時に哲學者です」

といつて、彼は僕に皮肉な、然し奇妙に濕味を持つた眼をくれた。如何にも閑雅な、控目らしい紳士は默つたまゝ少し微笑んで僕に握手の手を差出した。

僕は今日からこの紳士の專屬看護夫になる事を副院長から命ぜられたのだ。この紳士の顏の輪廓には何處か大探險家のリビングストンを想ひ出させるやうな所があつて、いつかその小傳を書いた僕には、それがある特別な親しみを感じさせたが、その皮膚の不愉快な青黄色さと、一種の緩みとは、決斷心の鈍さを裏切つてゐた。と同時に、眉から眼にかけたあたりには、澄んだ良心と鋭敏な神經とが絶えず眼覺めてゐるやうに見えた。この人に專屬すれば、下等な看護夫等との交渉が自然に少くなるだらう。それは有難い。然し前とちがつて、是れからは讀書ばかりはしてゐられまい。

夜、ラドラム博士の所にバークレイの「精神病論」を返しに行つた。獨身の博士はがらんとした圖書室の隅に座を占めて、大きなモロッコ表紙の醫書に讀み耽つてゐた。ノックするのも憚られるやうな靜かさが其處を領してゐた。僕はこの病院の中ではこの若い副院長に一番心を牽かれてゐた。科學者らしい冷靜さと底深い熱意とが、背丈の高い瘦形の體にも、嘘飾りのない顏にも、自然に色濃く浮み出てゐた。博士は僕が這入つて來たのを見る

と、讀書椅子をぐるりと半分廻して、暖かい眼でぢつと僕を見た。而して僕からどつしりと重いバークレイの本を受取りながら、

「判つたかい？　心理學的研究の所だけは判つたらう。君等にはそこだけ判つてゐれば澤山だ、生理的の研究はまだ專門の學者にも判つてはゐない位だから。何しろ君も物好きな所を選んで夏休みを暮すもんだ。いつかゆつくり日本の事でも聞かして貰はうね」

それから、僕の看護すべき今日入院した患者はスコット博士と云つて、Ｐ醫科大學の秀才で、一時助教授をしてゐたが、その後開業して餘り働き過ごしたゝめに、悒鬱症に犯されたのだと教へてくれた。

「この本にも書いてある通り、狂癲ほど恐ろしい遺傳病はない。スコット博士の弟も二三年前に自殺してゐるのだ。隨分氣をつけて看護してくれ給へよ。こんな所に來て見ると人間の世界が違つた姿で眺められるだらう。この心持を醫者達が何時までも無くさなければいゝんだが、……もう行くの。お休み」

僕は、再び厚い書物に體をふり向けて熱心に研究を續ける博士を一人殘して、靜かにこの大きな圖書室の戸を閉めて階子段を下つた。僕は不思議に感傷的になつてゐた。而してふとしんとした夜の沈默に激動した。熱い涙が思はず眼頭から滲み出た。

某年八月十七日。晴。

今日もからりと空の澄んだいゝ日だつた。患者達も機嫌よく笑ひ合つて、結構な土曜日だといつてゐた。胡桃樹の葉が黄ばんだのから風もないのにほろ〳〵と青空をかすめて散るのが眼に附く。又病房の壁に這ふ英國葛の葉に、秋の葡萄葉に見るやうな紫色の滲み出したのにも心が驚く。

僕はスコット博士に伴つて庭に出た。博士は一種の誇りよりか、それとも内氣らしい遠慮よりか、外の患者に近づくのを憚つて、芝生の隅に唯一本隱者のやうに立つ大楡の下蔭のベンチに腰を下ろした。楡の下枝に吊られた鐵製の鉢には、溢れんばかりにナスターシャムが生えほこつてゐた。ナスターシャムの花の紅さは、夏を思はせるよりも秋を思はせる。夏の最中に咲くのを見ても、この花だけは秋に操を立てゝゐるやうだ。僕は時々その葉の間から辛味を持つた菱形の實を摘み取つて舌の上で弄んだ。而して博士の側にゐて、博士が話しかける時だけ、出來るだけ親切な當りさはりのない返辭をした。

　その内容は兎も角、スコット博士は固定した思想の堅實さを示すやうに見える。彼はどんな事柄を考へる時でも、ある中央點から射出される光に照らしてゐるらしい。一寸見にはおど／＼したその眼の奥に、妙に堅いどつしりしたものが潜んでゐる。それは病的な現象の一つなのかも知れない。然しそれにしてからが、僕には羨ましく思へる力の感じがある。ところが僕は如何だ。總てのものは流れる。眩しく流れる。信仰に立つと思つてゐた僕の心には赫耀とした光明があつた。その光に照らして僕は總てのものを見る事が出來た。又戀よりも強く清く見える戀のやうなものがあつた。自分の罪と定めたものを悔んでも／＼足りない苦しみもあつたが、同時にダビデと一緒に裸で跳りたいと思ふ程の法悅にひたる瞬間もあつた。然し今の僕には、何處にそんな神々しい純一さが殘つてゐる。總ての音響と色彩とは唯雜然として僕の心の宮を犯して來る。女王を失つた蜂の巣のやうに、今まで確實に行はれたと見えた規律は、瞬く隙に散り失せてしまつた。塵の運動にさへ法則はあるのに、僕の心は思ひもかけぬ所に僕を引きずつて行く。自分で自分を欺く事をすまい――唯この一つの自覺の外に、僕は何一つ持つてゐない。神を離れたと氣が附いた時から、僕は自分が一人で立つ外に道のない事を覺悟してゐた。それは當然な、而して潔い覺悟だつたとは云へ、無謀に近い程困難な企てゞあるのをしみ／＼と感じない譯には行かな

かつた。杖の手引きから離れた盲人も僕以上の混亂を心の中に起しはしないだらう。未知の世界に投げ出された赤子のやうに、僕は途方に暮れて泣き出さうとする。以前には泣くと救ひの手が現はれた。今は泣いても僕を省るものはない。僕は泣かうとして思はず苦い涙を飲み込んでしまふ。泣くのも亦無益だと知るからだ。

成就か死か。

リリイの姿がこの二三日見えない。あの娘の名はリリイではない、イーディスだとロバーツが敎へてくれたが、僕には始めさうと思つたリリイの名で彼女を記憶する方がいゝ。病的と云ひたいほど童女に對して執着の強い僕に取つて、この悲慘な不幸人の集合所に、この淋しい荒んだ心の僕の境涯にリリイを見出したのは、云ひ現はし難い慰藉だ。僕がこの院の看護夫となつた日の夕方、患者達の舞踏の敎師だつた一人の婦人が院を去るについて芝生で送別會が開かれた。綠の濃やかな樹々の間に吊られたほゝづき提灯の灯が黃色い黃昏の光の中に淡く輝き始めた頃、いくつもの小卓のまはりに集まつた男女の中に僕は初めて彼女を見たのだつた。ロバーツが僕を彼女に紹介すると、彼女は心得顏に、

「私はあなたに私の敎會のバザーでお眼にかゝりました」

といつてにこやかに氣取らずに挨拶した。さういへば、B府にゐた時僕は或るクエカー宗の慈善市に招かれて行つた事があつた。僕の醜い而して黃色い皮膚の顏は彼女に憐憫の印象となつて殘つたのかも知れないのだ。何しろこの送別會の夜からリリイはこの病院に於ける僕の生活の必要物となつてしまつたのだ。

柔かい綠の蔭で夏の日を遮つた形のいゝ二本の楓樹の間にハンモックを釣つて、膝頭もあらはなリンネルの眞白な着物を淸く着て、讀書に餘念のない彼女の姿は、僕の眼から消えてしまつた。何處に行つたのだらう。兩親のホール君夫婦はこの病院の理事として今日も忙しく働いてゐる。それだのにリリイは姿を見せない。患者達も

物足りなげな眼をハンモックの方に向けてゐる。

日がかげる頃になつて十二人の患者が、不規則な列を作つて病房に歸る有樣は、何時でも僕に深い印象を與へる。彼等は夕日がうなだれるやうにうなだれてゐる。彼等は一人々々深い思ひに沈んでゐるやうに見える。然し一人として何も考へてはゐないのだ。あの深刻な姿勢の表現の後ろには唯空虛があるばかりだ。

某年八月十八日。晴。

淋しくなり勝る木の枝をいたはるやうに、今日も太陽が朝から夕方まで眩しい光を惜氣もなく投げ與へた。夕燒は見る者の眼を涙させる程莊嚴なものだつた。秋が來るのだ。

晝飯の時、ミュラーといふ獨逸生れの患者がAは何故この頃食堂の手傳ひをしないのだ。お前がゐないと淋しいと云つてゐた。ミュラーは或る工場の職工長で、非常に勤勉な男だつたのださうだが、如何かしたはずみに不圖自殺の誘惑を感じ出して、鐵道線路とか、高い崕の上とかに來ると、自然に死の方に無理々々牽きつけられてゆく、その恐ろしさに、自分から進んで入院したのだ。一分一秒も無駄にしまいといふ風で、顏を眞赤に汗ばませながら、せつせと働く姿を見るのは慘ましい程だ。彼は患者でありながら食堂の仕事も手傳つてゐたのだ。Leader worker（患者達は僕の事をかう呼んだ）がゐないと食堂の仕事が面白くない。然し君も餘り働いて僕のやうになつてはいけないよと彼は云つた。僕は恐ろしくなつた。僕の父は二度ほど狂人として取扱はれねばならぬ狀態に陷つた事があるからだ。

スコット博士と僕とは昨日も今日も互に探り合ふやうな態度で暮したが、夕方彼は一封の手紙を內懷から取出して、他人に知らせずに投函してくれろと僕に賴んだ。僕が段々信用を受けるやうになつた事が察せられる。言

葉少なにうなだれて坐つてゐる博士は時々ひよつと顔を擧げて耳を欹てる。而して暫く聞耳をたてゝゐてから、苦い顔をして何かぶつ〳〵と囁くのだ。その囁きが「そこを退け」と叱るやうにいふ言葉であるのを確めると、僕は不快を感ぜずにはゐられなかつた。然し僕の立上るのを見ると、博士は慌てゝ僕を引きとめるのだ。而してすがるやうに僕の方にすり寄つて來る。

いよ〳〵病房に歸らうとする時、偶然のやうにかう彼は僕に尋ねた。僕は偶然にも――多分病人の氣休めといふ心も何處かにあつたのだらう――「さうだ」と答へた。而して二人とも心の不安を包み兼ねるやうに互に顔を見交はした。

「A！　お前は基督信徒か」

夜は休み番だつたから、患者の世話をして一緒に夕餉をすますと、直ぐ三階の看護夫室に退いて、くつろぎながらC教授の書いた「ゲーテと内部生活」といふ小論文を讀んだ。この大詩人と基督教思想との交渉が可なり精緻に研究されてゐる。何もかも高い所から靜かに見おろしてゐるやうなこの詩人の心の鏡に、一向に上ばかり見窮めようとする信仰といふものが如何映つたらう。さま〴〵な人の心だ。ある時は心外の諸縁に餓鬼同様の妄執を繫ぎ、ある時は内部の見神に本能自然の憧憬を向ける僕の心は、まるで三界流轉の亡者のやうだ。淺ましい姿ではないか。

某年八月二十一日。晴。

丁度十日美しい初秋の日が續いた。過去の思ひ出を靜かにまとめて見て、笑ふのにも歎くのにも都合のいゝのは秋だ。物の亂れが整へられる時だ。秋の夜長に針箱を開くやうな事があつたら、頑是ない少女でも、日頃捨て

て置いた絲の亂れをほどき分けて見る氣になるだらう。何んとなく逼り近づく寂寞裡に立つて、自分の心をぢつと見詰めてゐると、無數の想が唯一筋の眞直な道のやうになつて、醜美が手に取るやうに心の眼に映つて來る。それだから秋は淋しいのだ。

この夜は月がよかつた。ロバーツと一緒に後園を散歩した。夜になるとあひゞきに恰好な場所として看護夫や看護婦を引きつける花園を通りぬけると、看護婦などは恐れて足ぶみもせぬ程奥深くも淋しい。茂り交はした森の木々の間からは、深山のやうに、濕つた、木茸臭い匂ひが襲つて來る。うね〳〵した小逕を二人とも默り勝ちに歩いた。月の光が銀粉のやうに木の間をぬけて斜に地に落ちた。而して帽子を被らぬ頭髮や肩に觸つて見ると、しつとりと濕つぽかつた。ロバーツとは僕がまだP府にゐて或る神學校を訪問した時知合ひになつたのだが、偶然にもこの病院に來て見ると、同じ病房で落合ふ事になつたのだ。彼は無反省な大食家だ。僕は、こんな夜に、彼とこんな所に散歩に來た事を少し後悔したが、歸りがけに婦人患者の病房近く來た時、而して月をさながらに浴びて、寒い程の青白い色に咲き亂れた百合の花を見た時、「君はこの花の香と色とを、恐らくは死ぬまで忘れる事が出來まい」としみ〴〵云つたその言葉だけは、彼の總ての死語の中から唯一つ生き殘つて僕の思ひ出となるだらう。僕はその花を三輪摘み取つた。而してロバーツに別れてから、リリイの家に廻つて、その階段に一輪を置いた。一輪は自分の枕許のコップに挿した。一輪はこのページに押し花としておく。明日の朝リリイは太陽のやうに快活に廣縁に出て來るだらう。而して階段に置かれた一輪の百合の花に眼をとめるであらう。それは確かだ。然し僕が昨夜それを見たやうな心持では、彼女がそれを見ないにきまつてゐる。恐らくは彼女は唯階段の上に一輪の百合の花があるのを見るだけだらう。而して百合の花は旭の光に電燈が消えるやうに萎んでしまふだらう。僕のする事にはそんな運命が一番起りさうな事だ。

夜十二時を過ぎてから不寢番が來て僕をおこした。スコット博士が狂躁狀態に陷つたと云ふのだ。僕は飛び起きて支度もそこ〳〵に病房に行つて見た。長い眞白な寢衣一つになつた博士は、兩手に頭髮を摑みながら、押附けられるやうに部屋の隅に立ちすくんで、何物かを見入るらしく一箇所に眼を定めてわな〳〵と震へてゐる。「そこを退け、そこを退け」といふ言葉が、始めの中は小さく囁かれるが、仕舞ひにはわめくやうに高くなつて、博士はとう〳〵堪へ切れずに、頭を抱へたまゝ壁の隅に顏を隱すのだ。靜かに近づいて、何んですと問ひたゞして見ると、憚るやうな低い聲で「あれを御覽A」と天井を指す。勿論僕には何んにも見えはしない。博士の神經は段々荒んで行くやうだ。不寢番に手傳つて貰つて强ひて纒絡浴をさせたら段々鎭靜して、うと〳〵と眠り出した。今までの緊張に引きかへてゆるみ切つた顏面筋を被ふ黃蠟のやうな皮膚を見つめてゐると、死よりも物凄い或る恐怖が膚を粟だゝせる。

博士には妻があるのだ。而して三人の可憐な女の兒があるのだ。昨日の午後にそれ等の人々が揃つて博士を訪れて來た。博士は沈着な態度で彼等と親しげに話してゐた。病房に歸る時、今日來たのは誰々だと聞いて見たら、博士は少し驚いた顏付で、「誰か來たのか」と反問した。

今博士の看護から歸つて來て寢に就く前にこの日記をつけてゐるのだが、この靜かな夜はその妻と娘達とを靜かな眠りの中に誘ひ込んだらうか。月は益々冴える。室內の電燈の方が暗い程だ。物思ひの多い人には見せたくないやうな光だ。この夜を寢入つて通せ、憐れな人々よ。二時半擱筆。

某年八月二十三日。雨。

昨夜から降り出した激しい雨に乘じて一人の患者が病房を逃げ出した事が發見された。始終同じ道筋を流れる

溝川のやうな單調は、この一つの事件の爲めに珍らしく破られた。逃げ出した患者といふのは紐育市の金持で、酒と女に身を持ち崩した結果、ぶよ〳〵と脹れた四十男が白痴のやうになつてしまつたのだ。仕立ておろしの見事な洋服にだら〳〵とスープなどをこぼしたまゝでゐるのをよく見たものだ。看護夫長と一人の看護夫とは直ぐに紐育市に向けて發つて行つた。何處から何時探し出したものか、その患者の窓から古い麻索が垂れ下つて、それが雨に濡れて、風になぶられてゐた。

　患者は皆んな運動の爲めに球戲室に行つた。スコット博士はその附屬室の隅にある皮張りのディバンに身を埋めて默つて考へてゐた。僕はその側に立つて、窓から薄暗く射しこむ光をたよりにダンテを讀んだ。球戲室からは、象牙の球のぶつかり合ふ音が、句點を打つやうに時々こゝまで聞こえて來た。

　僕は人並み以上の才能を受けて生れて來た。而して僕はそれを捨つべきものゝ如くに踏み躙つた。僕の家には僕を華やかな社會に推し薦めるだけの資力と位置とがあつた。家のもの等は好んでそれを提供したばかりでなく、如何かして僕をその方面に向はせようとしたにも係らず、僕はぐじ〳〵にそれを拒んでしまつた。僕は人から愛され親しまれる性情を持つてゐる。それだのに僕は好んで孤立した。こんな風に、自己と眞實な交感をしたい爲めに、僕は不自然をさへ敢てして、あらゆる內外の負擔物を捨てようとあせつた。而して仕舞ひには神にさへ叛いた。然るにこゝまで來て靜かに自分の身の周りを眺めて見ると、諸緣から絕ち放たれた自己の餘りに淋しく餘りに亂雜なのに驚く。外部の壓力を取り去られた液化空氣のやうに、僕の自己は見る〳〵形を失つて氣化しようとする。僕は聖者になるには餘りに人間の欲情を持ち過ぎるし、凡人になるには餘りに潔癖過ぎる。僕の生命は原始的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分解されてゐる。これが憤られ、悲しまれる。然し僕は恐れまい。僕は自己の分解を徹底させる。掘り下げて〳〵遂に個性を見失ふか、又はそこに不壞の

金剛士を見出すか。二つに一つだ。それが僕の一生の事業であらねばならぬ。僕は何時か必ず自分を實證する。僕の存在を存在として味識する。そこに行き着くまで僕は決して休むまい、どんな成功にも蹉跌にも。僕の心の底には程々にしておく事の出來ない一つの力が潜んでゐる。僕はその力を欺きおほす事が出來ない。

博士は朝から沈默を續けてゐた。博士の怪しい瞑想はしと〳〵と落ちる雨の雫と一緒に靜かに深く地の底に滲み込んで行くかと思はれた。晝過ぎの空が一入陰鬱な雲にどよんで、部屋の隅々にもう夕暮の影がさまよひ出したかと思はれる頃、博士はふと顏を擧げて僕がダンテに讀み耽つてゐるのに眼をつけると、獨言のやうに、ダンテは何故基督を敵に渡したイスカリオテのユダと、シーザーを刺したブルータスとを地獄のどん底に陷れたのだらうと尋ねた。僕は「その最も親しむべきものを賣つたからでせう」と答へた。と、博士は聞くまじきものを聞いたやうに眼を見張つてゆるく唇を開いた。極度の恐怖の描き出されたその顏は、眼も向けられぬ程無氣味だつた。彼は暫くさうした體で僕を見つめてゐたが、やがて牛のやうに苦しげに呻いた。而して死のやうな沈默がその後に續いた。

夕方博士に附添つて病房に歸る途中、ふとリリイとすれちがつた。何時歸つて來たのだらう。廢園に唯一輪咲き出た花のやうな彼女は、半外套に肩をつゝんで、華車な編上げ靴の爪先きに雨をいとひながら小走りに步いて來たが、きつと頭を擧げるとやさしい微笑と共に快活な目禮を博士と僕とに投げて側をすり拔けた。氷のやうに悒鬱に寒く閉ぢてゐた僕の心は、その瞬間に暖かく嬉しく跳り上つた。然し僕はあの何事も知らぬ純潔なリリイに對してすら、唯淸い嘆美の情を向けてゐると自分を欺きながら……腐り切つたセンチメンタリズムよ。僕の心はすぐ又氷よりも冷たく堅く閉ぢてしまつた。

夜になつて雨は風を加へて嵐になつた。何んとなくむし〳〵と汗ばむ程暑かつた氣溫が急にすが〳〵しく冷え

始めて、暗闇を通して後園の方を眺めると、樹といふ樹は折り重なつて、怒濤に揉まれる海草のやうに魔の舞を舞つてゐた。窓の外は電光と暗黒との綾を織つた。電光が消えたと思ふと、暗黒の天と地が激しくぶつかり合ふかと思ふばかりに雷鳴が起つた。僕は興奮してほてり切つた頰を窓硝子に押しあてた。大粒の雨が頰に感ぜられる程ひどく硝子板をたゝき續けた。僕はさうしたまゝで疲れ切つて、何時の間にか眠りに落ちて……。

某年八月二十四日。晴。

黎明になつてから嵐は漸く北に去つた。雷鳴の中に何時ともなく假寢をして、やがて眼を覺まして見ると、世界は朝の光になつてゐた。空にはちぎれた雲、地には吹き殘された風がまださすらつてはゐるもの﹅、秋の朝の嚴粛な靜けさが涙となるまで心に逼つて來る。看護夫達はまだ寢しづまつてゐた。僕はすぐ窓際から立上つて戸外に出て、飽く事なく後園を歩きまはつた。雨に洗ひ出された砂が白い布のやうに地の窪みに溜つてゐる。枯枝や枯葉が其處此處に吹きよせられて、ぴつたり地面に粘りついてゐる。風の吹いた方に靡き伏した草の根元には、寂寞の限りを盡して靜かに蟲が啼いてゐる。森に這入るとはら〳〵はら〳〵と霰のやうに雨の雫が落ちる。花園に來るとリリイの爲めに摘んだ白百合の花が算を亂して縱橫に倒れ伏してゐる。

午後スコット博士と庭を歩きながら圖らず心靈上の諸問題を話し合つた。彼の心中にも矢張り色々な葛藤があるのだ。丁度もつれあつた種々の色絲のやうに、一つをほごさうとすれば外のがほつれ、外のをほごさうとすれば更に外のがほつれるのだ。かくて博士の理路は果てしのない圓周を果てしもなくぐる〳〵とめぐつてゐる。その議論を聞いてゐるとひとりでに輪廻とか豫定とかいふやうな事を暗示されて恐ろしくなる位だ。

今までにも博士は打明けようとしては幾度も躊躇してゐたらしかつたが、今日とう〳〵その心の祕密を委しく

僕に話して聞かせた。

「私には一人の弟があつてT州で農場を經營してゐたが、遠い爲めに、思ひながら互に無沙汰して二十三年も顏を合はせずにゐた。弟は親切にも豐作の秋には必ず私にその喜びを分けてよこした。弟は本當に心のまめな勉强家だつた。所が今から三箇月程以前に弟の友人から私の許に手紙をよこして、T州一帶は雹害の爲めに麥の收穫が皆無だつた爲めに、非常な經濟界の恐慌が起つて、弟の關係してる銀行は破産の憂目に遇ひ、弟は農場と銀行との整理に夜の眠も合はさず奔走してはゐるが、迚も見込みはなさゝうだ、と知らして來た。その時私は何を措いても弟に遇つて言葉だけでゞも慰め勵ましてやらなければならなかつたのだ。所が克己心の勝つた弟自身からは、割合に平氣らしい音信があつたのに氣を許して、心にもなくつい一日々々と怠つてゐた或る朝、突然弟の自殺した通知が來て私をうちのめした。その時の驚きと苦痛とを察してくれ。私はそれから神に呪はれた身であることを知るやうになつたのだ。この事があつてから私は極端に神經質になつてしまつて、極く簡單な手術をする時でも、安全な藥劑の處方をする時でも、不思議に疑ひと不安とが附き纏つて躊躇ばかりするやうになつた。私は元來スペンサー派の哲學の捧誓者で、心靈の問題などは度外視してゐたから、平常でも說教を聽聞するやうな事は絕えてしなかつたが、あまりの苦悶に堪へかねて、或る日教會に出席して見る氣になつた。その教會は監督教會だつた。まだ年若な銳い眼を持つた牧師は、カルヴィンを思はせるやうな妙に浸滲的な熱のこもつた低い聲で、諄々と豫定說を說いた。私は極めて冷靜な批評的な態度でそれを聞いてゐた。聽衆の興奮を心竊かに哂ひたい程冷靜だつた。而して歸りがけに一人で或る一本の櫻の樹の下まで來ると、（さういつて博士は押しつぶすやうに聲を低くした）Aよ、私はその樹の上から惡魔の囁く聲を確かに聞いたのだ。人にはこの耳の外に、もう一つ音聲を感知する機關が何處かにあるを始めて知つたのもその時だ。惡魔の聲はこの耳からは這入つて來なかつた。さ

うなら空耳と疑ふ事も出來る。然し私の聞いたのはもつと精密な機關を通してだつた。「貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた靈魂だぞ」。私はその瞬間から絶えず惡魔の聲に脅かされるやうになり、從つて正義の神の嚴存をしかと心の底に感ずるやうになつたのだ。神は又愛でなければならぬとお前も人並みの事を云ふのか。神は愛だ。それが畏ろしい事なのだ。愛のみが義しいのだ。義しきが故に、世の最初から最終に亙つて据ゑられた運命の道を塵ほども抂げようとはし給はぬのだ。私のしみつたれた涙が運命を如何する事が出來ようぞ。科學も信仰も原因結果の不變を暗示する。Aよ、お前は自分の力で運命を變へる事が出來ると思ふのか。恐らくはさう思つてゐるのだらう。お前の顔には嶮しい叛逆の色が浮んでゐる。強ひても天地の大事實を抂げようとする苦痛がお前の顔には書き記されてゐる。それは然し哀れむべき人の子の憐れな妄想に過ぎないぞよ」云々。僕は默つたまゝをのゝいてこの不思議な告白に聽き入つた。

眼の前には果てしもない暗黒が峭壁のやうに果てしもなく連つてゐる。後ろには底無しの深淵が音も立てずに凝然と澱んでゐる。僕は死力を盡して自分の周圍から暗黒を追ひ退けようとしてゐるのだ。僕は一人で、僕一人の力でそれを押しもどして行かなければならない。然し暗黒は動もすれば却つて僕を呑まうと逼つて來る。その暗黒に大きく書かれた字を讀め。“Raphel bal ameth, sabi almi”。永劫に意味の知られない一連の魔語!

今日いつもの大楡のベンチに坐つてゐたらロバーツが來て僕の寫眞を撮つた。蓋を切らうとする時、大きな黒い蝶が來て胸の所で羽ばたきした。拂ひ退けようとするのをロバーツは強ひて遮つてそのまゝ寫してしまつた。黒い蝶の舞ひこむ家には死ぬ人があると幼い頃に聞かされたその回想が僕を本當に懼れさせる。生を持て餘し切つてゐる僕が……。

月は缺け始めた。靜かな夜だ。窓の外は蟲の聲ばかりだ。

某年八月二十九日。曇。

「そこを退け惡魔」といふ聲は絶えずスコット博士の唇に上るやうになつた。堪らない、聞いてゐられないといふ風に、耳許で激しく手を振りながら、博士が思はず座席から跳り上るのを見ると、僕も一緒になつておど〳〵と落着きを失はうとする。「A！　恐ろしい〳〵。お前にはまだ妻と子があるまい。私を失ひ、從つて生活を失ふ妻子の悲慘な運命を考へてくれ。それよりもこの妻子の悲慘な運命さへ考へてゐられない私を考へてくれ。永遠の呪咀――それを受けた者の外には判らない恐ろしさだ。少しだけでも思ひやつてくれ」……博士に豫定說を說いた牧師とは一體何者だ。圖書館の塵の中から引きずり出して來た貴樣の神學は、一人の人間を狂氣に誘ひこみ、死に陷れようとしてゐるのだぞ。冷やかな言葉で行ふ殺人犯……それを平氣で犯しながら、自分だけ天國に救はれて行かうとする貴樣と、熱い情慾で自分から地獄に落ちたフランセスカやパウロを較べて見ろ。「不幸に臨めるの日、歡樂の時を想ひ起すより悲しきはなし」。貴樣はその言葉が判るか。せめてはそんな言葉を心から云はねばならぬ人のある事が判るか。……然し牧師が博士を狂氣にしなかつたら、石が狂氣にしてゐたかも知れない。牧師が博士を殺さなかつたら塵が殺してゐたかも知れない。牧師も亦大きな無情な齒車の齒の一つに過ぎないのではないか。今僕の心には世界が氷つてしまつたやうに見える。

今日も僕はスコット博士と意志と自由といふ事や、罪惡といふやうな事を話し合つた。僕は如何かして博士を論理の輪廻から救ひ出したいとあせつた。然し結果は意外だつた。僕があせればあせる程、博士の先入主觀は深く濃くなつて行くばかりだ。博士の容體は段々險惡になつて、その口からは一種の不愉快な臭氣――重症患者に特有な口臭が漏れるやうになつた。

二十日程前から僕等の病房の看護夫となつた一人の華車な青年は、健康が續かないのに、妙に物が恐ろしくつて迚も不寢番が勤まらないといふから、今日から僕が代る事になつた。こゝにゐる看護夫共は皆んな働き盛りの男達だのに、一週間僅かに四弗の給金を貰つて、碌々仕事もしないのを見ると、總て無賴な人間であるのが知られる。彼等は病院を「蟲の巢」といつて、患者を「蟲けら」と呼んでゐる。患者は朝夕の挨拶を忘れずにするけれども、彼等はどうかすると起き拔けから看護夫長の眼を忍んで、患者の頬げたに平手を見舞ふやうな事をする。そんな奴等の間にこの一人の青年がゐるのは僕に取つて慰めだつた。父は二歲の時に死に、病身の母の外に姉が一人ゐるのだが、それが狂氣で或る瘋癲病院に送つてある所から、狂人に對して同情が起つて、俳優になりたい自分の希望を暫く捨てゝ、こゝに來たのだと談つた。米國の青年には一寸類のない、女のやうに優しいその心根が僕の同情をそゝつた。僕は成るべく穩かな言葉で彼の心に觸れるやうに心懸けた。然し彼の意志は異常に弱かつた。而して二十日もゐない中に神經が過敏になつて、不寢番が勤まらないと云ひ出したのだ。

僕は今日久振りで鏡を見た。我れながら醜い顏に恥をかゝすまいとして、成るべく鏡からは遠ざかつてゐたのだが、久振りで見ると、僕の顏は驚くばかり瘦せてゐた。而して妙にぎら〳〵する兩の眼は眼の働きをしてゐない。僕の眼は見る代りに考へてゐた。

弟から手紙を受取つた。彼は自分の行くべき道を色々に思ひ惱んだ末、畫家になる決心の臍を固めて○○氏の門下に加はつた。彼は嫁いで行く處女のやうだ。涙を以て彼の爲めに祝盃を擧げよう。

某年八月三十一日。朝、晴曇不定。夜、雨。

自由論と決定論とは僕に取つて單なる知的遊戲ではない。それは僕の二元的な性格の根柢から湧き出て來る嚴

肅な問題だ。自分の心を見詰めると、そこには意志の絶對自由がある。卽ち無限の自己責任がある。自分はこの誇りから一歩でも退くのを屑しとしない。けれども現象の種々相を見渡すと、そこには宿命の鐵鎖がある。卽ち嚴確な運命の統流がある。運命を感じ、運命を知り、自己を運命の波に乘せて走れ。そこに心內心外の自由は開けて來るだらうと人は云ふ。然しそれは何んといふ痛酷な反語だ。誰が眞に運命を感じ得るか。誰が眞に運命を知り得るか。運命を感じ運命を知るものは運命ばかりだ。僕の眼からは梁が落ちた。僕はもうそんな幻影を目蒐けて走る盲動をし得なくなつた。と云つて、僕は自己の行爲なり思想なりを運命に辯疏させて平氣でゐる程厚かましくはない。といつて、世の罪惡や世の虛僞の總てを自己を責めるやうに責める事が如何して出來よう。こゝに埋める事の出來ない溝が出來る。人は如何してこの矛盾を知らず顏に過して行く事が出來るのだらう。それとも僕は熱くも冷たくもなり得ぬ人間なのか。「命令する事も服從する事も出來ぬ不用の人間」なのか。僕はあせりにあせる。統一された純一な生活が欲しい。この葛藤に惱まされながら、パンを口に運ぶのは苦しい事だ。僕はスコット博士の宿命說に極力反對してゐる。それは然し僕の小さな策略に過ぎない。僕の心に確信があるからではない。僕は口では反對しながら、如何かすると心の中で兩手を擧げて賛成してゐる。藪醫者よ。盲人の手びきする盲人よ。

　小兎と木鼠との遊ぶ平和な廣庭と、生活苦の慘らしい犧牲なる百七十餘人の狂人とを目がけて、光と影とが交る／＼天から落ちて來る。雨になるかと振仰ぐ空の一角には、忽ち金砂を篩つて陽の光が流れ下る。運命の呼吸を形にして見るやうな空合ひだつた。スコット博士の悒鬱は極度に達した。僕の近づく事をすら避けて、手を後ろに組んだまゝ、俯向いて楡の木蔭をあてもなく步き廻つてゐる。その後姿は上品な、教養のある紳士を描き出すが、前から見ると取り亂した表情の慘らしさが亡靈のやうに襲ひ逼つて來る。僕は恐ろしさの餘り、ラドラム

博士を呼んで來た。スコット博士は副院長の近づくのを見ると、險しい眼付をして僕を見やりながら、

「若い博士。私にこんな間諜をつけて置いて下さる必要はない。あなたは未だ永遠の地獄がどんな物だか全く御存じがないでせう。地獄ですか。私を御覽なさい。地獄が神の間諜なのです」

と云つたぎり、くるりと僕等に後ろを向けて、芝生を先方に歩いて行つてしまつた。ラドラム博士は眉をひそめながらその後姿を見送つて、默つたまゝ立つてゐた。その一場の光景は悲劇的だつた。僕にはスコット博士が老先きの長くない人のやうに思はれた。

不寢番には午後は自由な睡眠時間が與へられるので、久振りでP市に行つて見た。H大學に行く用意をする爲めに、九月の三日にはこの病院を去るのだから、買物などに出かけたのだ。歸り際に少し時間に餘裕があつたから商業會議所の圖書館に這入らうとしたら、その入口で一人の乞食に遇つた。その顏には覺えがあつた。思ひ出して見るとその男は、僕が去年の降誕祭の休暇中にこの圖書館に通つてゐた時、時々やつて來ては僕に話をしかけて讀書を妨げたその男だつた。彼は僕が歷史を研究してゐると云ふのを嘲けるやうに退けて、お前の國のやうな新興國に歷史の研究が何んの利益になる。歷史といふものは老大國の國民が祖先の自慢をする程耄碌した時に研究すればいゝものだ。總じて學府的研究に實人生の助けとなるものは一つもない。自分もアカデミーを中途でやめた一人で、今は兄と共に絨毯の製造に從事してゐる。自分は工場を君に開放して見せようから、一つその調査でもしたら如何だ、と僕に說いた。僕は初めからこの男が蟲酸の走る程嫌ひだつたから、ある時可なり激しく交際を斷つて圖書館を出た。丁度黄昏時で、街は人の往來にこみ合つた中を、二人は妙に喰ひ違つた心で別れた。僕はその翌日から圖書館に行かなくなつた。從つてその男とはこの世では復た遇ふ事はあるまいと思つてゐた。

而も見よ、僕は又彼に遇つたのだ。僅か八箇月の間に彼は全く別人のやうな容貌になつてゐた。彼はその後酒

にでも親しんだのだらう。その力のない眼はいよ〳〵鈍つて、梅雨時の空のやうになり、半分開かれたまゝの唇はひどく厚味を加へた。ひよろ〳〵とした足どりで、永く勞働を厭つた手は棒のやうに兩脇に垂れ下つてゐた。僕の眼はすぐ彼を見分けたけれども、彼の眼は旣に僕を忘れ果てゝゐた。折しもじめ〳〵と時雨が降つてゐた。僕はこの醜い男に對して本能的な憎惡を感じながら、飛び退くやうに一町程離れた。

恐るべき實有の世だ。彼はあのやうにして彼の道の末遠く旅するのだらう。彼の地に踏みつける步みは段々鈍つて覺束ない間に、肉の眼に見えぬ彼の步みは疾風のやうに疾く銳く、最後の顚倒を目がけて、時限と方處とを走り去る事だらう。實有の世…… 何んといふ恐るべき實有の世だ。

ロバーツは患者とくだらない喧嘩をして今日病院を出て行つてしまつた。來年の六月になると、彼は兎に角神學校を卒業して、何處かの敎會の副牧師になるのだらう。

心外の世界に投げ與へてゐたお前の斷片を少しづゝなりとも引きもどして自己を築き上げろ。今はその外に道はない。「心の貧しき者は幸なり」と云つた基督の言葉に詐かれてゐてはならない。いゝ氣になつてその言葉を自分の都合のいゝやうに解釋してゐてはならない。心の貧しさを信仰となるまでに體得するのは一通りの發心で出來る事ではない。それは少しでも自分に阿り諛ふ弱者のなし得る所ではない。それは或る意味に於て、自己主義者より更に勇敢な飛躍を必要とする努力と經驗との結果だ。

八月も過ぎた。是れから夜直の爲めに病房に行く。

某年九月二日。雨。

僕のこの院で過すべき最終の日が來た。今日まで滿二箇月、僕は安閑としてはゐなかつた積りだ。然し、唯あ

せりにあせる事が何んの足しになつたらう。有つて無いものゝやうに僕は二箇月を住み暮したやうだ。僕の生活經驗の中には確かに一つの不思議な世界が建立された。その世界といふのは生活の埃捨場だ。こゝに集まつた二百人足らずの男女は、人生の足許に暗い影となつて何時までも離れずにゐるだらう。彼等一人々々の過去を思つて見ても、人の生活は暗いものと思はれる。然し僕はまだ失望はしないのだ。僕は若い。力がある。その力と若さとで僕は歩いて行かう。躓いたら力のある限り又起き上るまでだ。成就か死か。僕はなほこの言葉を繰返すばかりだ。

親兄弟にも遠く離れてしまつたものだ。彼等と僕との間には一つの大陸と一つの大洋とが横たはつてゐる。それですら遠い距離だ。然し思想の距りには大陸も海もない。そこには眞白な空間があるばかりだ。何んといふ悲しい距りだ。私は離別の布を力限り振り動かす。然し親兄弟はそれに氣も附きはしないのだ。

スコット博士はさすがに僕との名殘りを惜しむやうに見えた。博士は一入の悒鬱を加へた。而して降りそぼつ雨の中を外套も着ずに歩きまはつてゐる。僕は博士の姿を見てゐるに堪へなくなつた。

今朝眼覺める前に、僕は何んとも云へない美しい夢を見た。羅馬の昔にあつたやうな大浴場に僕はゐた。入口の右の男子の脱衣室で、汗に汚れた衣服を脱がせられて、薄緑の絹で作つたトガのやうな浴衣を着せて貰つた。左手に新しい着換へを抱へて、美しいモザイクの床の上を正面の階段の方に跣足で進んで行つた。僕の足は冷たからぬ石の上を音もなく踏んで、浴衣の衣ずれの音だけがさや／＼と氣高く聞こえた。浴衣からか、廊下の隅に飾られた花鉢からか、何んとも云へない美しい香がほのかに鼻をかすめて漂つて來た。幅十四五間もあらうと思はれる廊下は、上から射して來る琥珀のやうな光で華やかに輝きながら、同じ幅の純白大理石の階段に續いてゐる。階段は十四五段の所で四角な石疊となり、石疊の先きには華麗な大理石の欄干を隔てゝ、鬱々と茂り合つた熱帶

かつた。僕は王侯のやうな裕かな心持で、顏を正面に向けたまゝ悠々と階段に近づいた。最上の階段と第二の階段とに筋ちがひになつて、雪白の衣服を着た二人の少女が坐つてゐた。その一人は振仰いで天から降る光を見、一人は俯向きになつて頰杖をついてゐた。僕はしと〳〵と階段を踏み昇りながらリリイだなと思つた。僕がリリイだと思つた少女は、空の光から眼を移して、靜かに僕を見下ろした。二人は睃かに微笑み交した。僕の足が石疊に近づくと彼女はなよ〳〵と立上つて輕い會釋をした。僕は出來るだけ優しく名を尋ねて見た。「イポリータで御座います」と胸に手をあてゝ、こゞみ加減になりながら、その少女は禮を盡して答へた。側の少女は頰杖をついたまゝ動かうとはしなかつた。僕はまたその名を尋ねた。「ビヤトリスで御座います」とイポリータが代つて答へた時、その少女は甫めて聲のする方に顏を擧げた。可憐なその眼は痛ましくも盲ひてゐた。純潔といふ感じが誘ひ起す pathos の爲めに僕の眼はその頃から濕ひ始めた。イポリータはやがて輕やかに步を移して、右の方の階段から僕を浴池の方に導かうとする。ビヤトリスは淋しさうに默つたまゝ又頰杖をついた。浴池に導かれる階段には蘭と香葛とが處せまく茂つて、濃厚な匂ひを漂はしてゐる。その間を一段々々低くなつて降りて行くイポリータの後に續きながら、僕の眼は不純を洗ひ流すやうに涙に濕つた。階段を一つ曲り二つ曲つた所から、玉のやうな泉が湧き出して、草の間を浴池の方に流れてゐた。そこまで來るとイポリータは美しい素脚を泉の中に浸して、こゞみながら右手でその底を探つてゐる。僕の不審がるのを察したイポリータは、こゞんで少し上氣した顏を僕の方に振り向けて、湯の加減をするのだと云つた。僕は佇んだまゝ泉のニンフのやうなその姿を嘆美しながら見やつてゐた。軈てイポリータは水の中から何か取上げて立つたと思ふと、少し首をかしげて虔ましげに微笑みながら「覺えていらつしやる？」といつてそれを僕に手渡した。それは白い百合の花だつた。

「あなたはそれを召上らなければいけません」――さうイボリータに云はれた聲に驚かされて、もう一度僕の手にあるものを見直すと、それは生々しい眞赤な小さな心臟だつた。イボリータは屹と僕を見つめてゐる。「それはあの盲ひたビヤトリスの可愛いゝ心臟で御座います。眞紅の衣を着けた『愛』が持つて參りました。召上れ」さういふ聲が厳かに聞こえる。「僕はダンテのギタ・ノーバを思ひ出してゐるのだ」……僕は夢の中でさう思つた。そんな事を思ひながら僕はリリイに對して抱いてゐた不純らしい心を鞭たれるやうに思つた。心から湧き出るやうな懺悔の涙がじり〳〵と滲み出て來た。僕の夢は覺めた。然し全く覺め切つたとは思へないで、暫くはそのまま不思議に淸く淋しい夢幻の間を彷徨つてゐた。秋雨の降る音ばかりが唯しと〳〵と窓の外に聞こえてゐた。そのまゝで夜が悒鬱に白んだのだ。

　この夢の爲めに今日一日僕は不思議に淸められた意識の中に生活した。又夢をさへ賴まうとする實生活の分解が悲しまれた。九月から開展する大學の新しい生活に、何物かを期待した幼稚な考へまでが今は憐れまれた。又新しい荒野が僕の前には展けようとしてゐる。そこを旅して行く唯一人の旅客。夕べ〳〵には石を枕にして冷やかに眠らねばなるまい。朝な〳〵には長い一つの影を牽いて淋しく歩まねばなるまい。然し僕は二度と再び賴るまじきものに賴みをかけてはならぬ。而して是れから實行的に築き上げて行く自己といふものに死の如く強い執着を繫いで行く外はない。

　午後の休憩時間に僕はラドラム博士の所に行つて暇乞ひをした。二人は再會を期して堅い握手をして別れた。それからホール氏の所に別れに行つた。賄所にゐた細君も、本館にゐたリリイも歸つて來て紅茶をもてなしてくれた。普連土宗に通有な單純と、素朴と、淸潔とが部屋の隅々まで行き亙つてゐた。僕は、在院の間讀み返し讀み返しゝて手垢のついたダンテの聖劇を記念として贈らうとした。然しホール氏は禮儀を盡してそれを斷つた。

「私の學校時代にはシエクスピヤを讀むのが飲酒に次ぐ惡德だつた。どうもこの書物も私の圖書室にはふさはしくなさゝうだ」。僕はその言葉を却つてゆかしく思つた。然しホール氏は他人の好意を無下に退ける事を旅人に對する禮儀ではないと思つたらしい。「然し」といつて微笑みながら「この若い貴女は私共とは時代がちがふ。彼女はルツ物語以外のものも知つてゐるやうだ。若い貴女、あなたの好みに從つていたゞくならいたゞいたらう」リリイは快く手を伸べてくれた。僕はその手の上に赤皮の表紙の小さい冊子を載せた。その冊子の脚註の一つには、ギド・カバルカンチの詩が連ねてある。

「けだかく、やさしく彼女過ぎ行けば、
驕慢は默し、病は癒え、
信仰より害はれたるものは信仰に還り、
穢さるゝものとては一つだにある事なからん。
我れ更に彼女の高き德を語らん、
彼女を見て惡心を抱き得るものは絕えてなしと」

夜十二時から不寢番の椅子に就いた。今夜が名殘りだと思ふと、單調極まるこの建物にも生物に對するやうな未練が感ぜられる。鍵形に折れ曲つた長廊下の曲り角に置かれた粗末な机の上に、燭光の弱い電燈が置いてあつて、廊下の處々にともされてある光と靜かに見交はしてゐるやうに見える外、生きた感じを與へる物とては一つもなく靜まり返つてゐる。それだのに總ての記憶は生々しく矢つぎ早に僕の心に集まつて來て、それが幻影のやうに廊下に充ち滿ちてゐる。あゝこゝで僕は腑甲斐ないながら僕だけの苦しみを苦しんだのだ。生涯恐らくは二度とこの病房を訪れる事はあるまい。僕の跫音は明日からこゝには永遠に消えてしまふのだ。そんな事を色々と思ひ

ながら僕は眼が冴えるまゝに日記をつけてゐた。二時頃だつたらうか。僕は思はずぎくりとして姿勢を變へる力もない程すくんでしまつた。この眞夜中に突然僕の左後ろに人の佇んでゐるけはひを感附いたからだ。暫くは振り向くのさへ躊躇して筆を止めてゐたが、やゝ落着いてからそつと顏をその方に向けて見ると、何時の間に來てゐたものか、長い白の寢衣を引きずつたスコット博士が、素足のまゝでしよんぼりと立つてゐた。極度の悒鬱が顏から體全體に擴がつてゐて、何處からともなく近づいて來る、而してどうしても避ける事の出來ない恐ろしいものゝ前に立つたやうに博士は戰いてゐた。而して先程から僕を熟視してゐたらしく、どんより血走つたその眼は電燈の灯をまともに受けて瀦水のやうに光つてゐた。僕は博士の顏を一眼見ると、恐怖の餘り思はず聲を立てようとした。丁度その時、博士は靜かな口調で堪へ切れぬ程深まつた沈默を破つてくれた。博士は僕が忠實に看護に當つた事を賞めて、僕が永久に彼から離れ去る事を悲しんでくれた。而して最後に、「A、お前はいつか基督信徒だと云つた。私は信徒たるお前に一言だけ云ひ殘しておく事がある。お前の生涯に、意識して些かの惡でも犯してはならない。若し犯したならばお前の平和は永遠に歸つて來ないだらう。償ひは出來ない。それを忘れてはいけない」。博士はさう云ひ終ると幽靈のやうに靜かに僕の側を立ち離れて病室に這入つて行つた。

僕は今これだけの事實を書くに止めて置く。今僕の總身は、深更の寂寞の中で、恐怖とも、感激とも、發作とも解らない身ぶるひに震へてゐる。

某年九月五日。

（前略）

夜がほの〴〵と白み初めた頃、列車はロード・アイランドを横切つて、コンネッカット州の岡がかつた若い白樺

の林の間を走つてゐた。うと〳〵と夢の多い眠りから覺めて、窓の外を眺めると、上弦の月が淡く殘つて西の空に低く落ちかゝつてゐた。東の窓からはもう幽かながら日の目も見やられる事だつたらう。透き通るやうな果てしもない濃藍の空はやゝ黄を交へて、濁りのない鱗雲がほのかに紅く休らつてゐた。然し地の上には、木蔭や草叢の間に夜の影がまだ紫色にさすらつてゐた。なよ〳〵と肌の白い樺の若木は、小さな心臟のやうな葉を擴げて、靜かにしつとりと立ちならんでゐた。淡黃、淡紅、淡綠の秋の葉には、重過ぎるほど露が宿つてゐた。而して總ては唯靜かに蕭かだつた。

　自然の移り變りのあわたゞしさに增して慌たゞしいものが何處にあらう。美しくない自然は何處にもない。一生の間に自然の美しさを見盡すのは餘りに容易な事のやうにも見える。然し自然が笑ふ時なのか泣く時なのか、總てが調和の極に達するやうな瞬間は、短くない一生の中にも幾度も見る事は出來まい。今朝僕の見た自然はそんなに美しい自然だつた。僕は一種の壓迫をすら感じながら、夢中になつて窓の外を眺めた。それは然し五分とは續かなかつた。見る〳〵中に西北の方に一叢の濁つた雲が湧き出たと思ふと、完全の極に達した調和は他愛なく破れて、自然は眼の前で平凡な自然に歸つてしまつた。

　僕は薄寒を覺えて、窓から顔を引つこめて外套の衣嚢に手をさし込まうとすると、P市で買つて置いた夕刊新聞に指が觸れた。さしたる必要もないのに、取り出して皺くちやになつた紙を伸べながら、拾ひ讀みをして行つた。ふと或る所まで來ると僕の眼は動かなくなつた。「醫師の縊死」といふ文句に續いて、ドクトル・ジェー・ビー・スコットといふ字が讀まれた。僕は驚いてしまつた。僕の眼の前で活字が躍つた。

“That well-known Dr. J. B. Scott, 48 years old, of Gettysburg, comttmied suicide, by hanging himself with a handkerchief in the F's asy'um, at F.

He was received at the insti ution sometime ago, to be treated for melancolia, as his health had been seriously injured by the over-conscientious attention towards his patients. During the absence of his nurse he ended his life. etc., etc."

それを讀むと僕は思はず椅子から立上つてゐた。深い眞實が眞暗に眼の前に立塞がるのを覺えた。たつた今まで伸び〳〵した心で賞翫の眼を自然に與へてゐた僕は、次の瞬間にはもうこんな恐ろしい目に遭はなければならないのだ。よく僕の衣嚢からは火が燃え上らなかつたものだ。よく僕の指先きは新聞に觸れた時に焼け爛れなかつたものだ。僕は再び椅子に腰を下ろした。幸に多くの旅客はまだ眠つてゐて僕のこの奇怪な擧動には氣が附かなかつた。僕は博士の爲めに密かに幾度か眼に逼る涙を押拭つた。

僕の首途は血祭で呪はれた。或は血祭で祝福された。どちらであれ僕は活を入れられたやうな心持がする。瘋癲病院の二箇月は殉情的な夢の二箇月だつた。僕は是れからは今までのやうにセンチメンタルであつてはならぬ。自己を安價に辯護してはならぬ。蹉跌を恐れてはならぬ。善惡醜美――僕のあらゆる力を集めて如實に生活して行かう。僕はもつと自由に、もつと嚴肅にならねばならぬ。僕はそんな生活に堪へ得られるだらうか。……然し今の場合になつて躊躇は無益だ。

成就か死か……唯靜かに、靜かに、靜かに。（後略）

（一九一五年三月、白樺所載）

迷路

一

再び事新しくもない學徒生活といふ空氣の中にAが自分を見出した時は、夏がもう過ぎ去らうとする九月の始めだつた。押しなべていふと、金のあるものには暇つぶしの爲めの、金のないものには少しでもうまいパンを口に運ばうとするための生活——一方にはふやけた、而して一方にはこせ〳〵と餘裕のない生活——他人眼には氣高くも嚴めしくも見えながら、當事者には心尤めのする程に効果の薄い生活——彼はさういふ境遇に立ちまじる豫想から、一種の苦い不安を胸に感ぜずにはゐられなかつた。

然しながら、やゝ黃葉になつた、枝ぶりのやさしいエルムの木立に見え隱れして、宏大もなく立ちならんだ講堂や研究室を見上げたり、革紐できりつとくゝつた重さうな書物を小脇にかゝへて、傍眼もふらず大股の足並みを揃へて步き廻る學生の群を見たり、房々しい白い眉が、思想の重さに押へつけられたやうに、銳い眼に逼つた老教授が、挨拶する學生等に親しみをこめた顏を向けながら行き過ぎるのを見たり、廣やかな大學の敷地を取りまいて、建て連ねられた學市の閑雅な姿を見たり、學年開始のいさみにつれて、蝦茶色の學帽が、旌旗が、幔幕が、九月の靑空をわたる太陽の光に、秋にふさはしい彩りを漲らすのを見たりすると、彼の心にも、さすがに、離れて考へてゐた時とはちがつた誘惑と期待との湧き出るのを覺えた。

總立ちになつたやうに賑やか立つた街の間を彼は友もなく默つて步いた。而して已に實になつたライラックの生垣に沿つて、ある橫町を十軒あまりも行つた突當りの古めかしい木造の平家に着いた。鍵の孔は鏽びてゐた。

鍵をさしこむと不愉快な感觸が齒に傳つた。

絨毯も何も敷いてない北向きの小部屋は、濕つぽい冷やかさで彼を迎へた。取りちらかして單調を破るべき小道具すらなかつた。彼は亂想を頭からもぎ取るやうに、沒義道に帽子を脫いで、部屋の隅の古トランクの上に投りやつた。それでも彼の頭は重苦しかつた。で、いきなり窓際にいつて、繫釘を外すと、がら〳〵ツと窓をはね上げた。眼の前の小庭には唐檜が茂りあつて、永年落ちたまつた黃葉は、銹びた針を敷いたやうに積り積つてゐた。外の空氣は、黴臭い香をたゝへてひそやかに部屋に通つて來た。彼はほとつた手を窓の枠にもたせたまゝで、ぼんやりとその陰氣な北向きの庭を眺めやつた。

辯護士のPはまだ歸つて來ない。蟲籠のやうにがらんとしたこの家には彼の外に人氣はなかつた。

もう臺所の支度に取りかゝる時分だと彼が氣附いた時は、部屋に這入つてから可なり長い時間がたつた後だつた。彼はむづかしい顏をしながら窓際から離れて、いきなり上衣を脫いで臺所に出た。

寂しい光景がそこでも彼を待ち設けてゐた。薄暗くだゞつぴろい部屋の隅に置かれた西洋竈の鈍重な色は、空氣にまで滲み込んでるやうに見えた。第一の仕事として、彼はこゝでも亦窓を開けた。而して燃木を竈に投げ入れて、石油をかけて火を作つた。火が燃え始めた――紅い火が。丸い孔を通して見える眞暗な中で、渦卷く白い煙を追ひかける火は、この物憂い部屋の中でたゞ一つの生物のやうに、細長いしなやかな斷片となりながら、光つては消え、消えては光つた。彼はやがて頃を見計つて石炭をくべて蓋をした。而して大股に筋違ひに部屋を步き始めた。

狂癲病院に看護夫として過ごした夏の二箇月は殊更彼を悒鬱にしてゐた。消す事の出來ない無邪氣さを持つた彼の顏も、一寸見には牢獄からでも來た人のやうに暗かつた。おまけに道を步く時には、何時でも雜多な事を思

ひ耽る癖の彼の頭は、古綿がつまつたやうにこぢれてゐて、大學の事務所で受取つた學則の細かい活字が、うるさい蚋の群のやうに、うづ〳〵頭の中にうごめいてゐた。彼は頑丈な拳をあげて右の顳顬を絶えずたゝいた。

彼は臺所を筋違ひに歩み總ける事をやめなかつた。身にあまり、心にあまり、部屋にあまる彼の悒鬱な力が、出來るなら彼を戸外に、戸外から曠野に、曠野から地極にまでも驅り立てようとするらしく思へた。彼はあらんかぎりの意志を集めてそれに反抗した。然しその努力にも係らず、彼はぢつとしてはゐられなかつたのだ。

家庭と境遇と周圍から來る總ての壓迫は故國に捨てゝ來た。彼の心を捕へて逃がすまいとする或は甘い、或は悲しい、或は美しい記憶のいくつかゞないではなかつたが、彼はそれ等を思ひ切つて捨てゝしまつて惜しんではゐなかつた。それほど彼は若かつた。女の聲と讀經の聲とが同じ强さで心を牽くといはれる齡頃に、彼が擇み取つた信仰の生活も、二箇月の狂癲病院の生活の間に綺麗に崩してしまつた。何んにもなかつた。何んにもなかつた。唯自由と若さだけがあつた。だから、彼は小兒のやうに快活で無頓着であらねばならなかつた。然し事實は反對だつた。彼に與へられた命力は働きかける對象を失つた爲めに、彼の肉體の中でのたうちまはつて苦しんだ。その力は色と形とを失つた暗い渾沌に還つた。謂はゞ放電しながら、それを發散する機縁を失つた黑雲のやうに、力强い非形が彼の心に滿ち〳〵てゐた。我れながらその虛無の力を彼はあつかひあぐんだ。おまけに衣食の問題に頭を惱まさないですむ境遇に置かれるので、その暗い力は純粹に暗くなつて行つた。手がゝりのない暗さだつた。彼には、そこまで自分を還元した事が恐ろしい以上に物凄かつた。彼の悒鬱はそこから生れ出たのだ。

「靜かに、靜かに」

彼はどすん〳〵と床板を踏みならして歩いて、何處かに突き出ようとあせる力を强ひて押し鎭めながらつぶやいた。思はず獨言をいふのが、その頃の彼の癖になつてゐた。

その時突然天井に近い所で呼鈴がけたゝましく鳴つた。心の中を見詰めてゐた彼はぎよつとして、心の一部分でも眺めるやうに臺所を見廻した。而して足を停めて聞耳を立てた。

二度目に呼鈴が鳴つた時、彼は始めて玄關に客のあるのに氣附いた。それは珍らしい事だつた。彼は急いで上衣を引つかけながら入口に行つて戸を開けた。戸の外は華やかに晴れた九月の夕方だつた。その夕方の光と一緒に、黒い裝ひをして、黒い厚いヹールをかけた婦人が、吸込まれるやうに這入つて來た。而して彼の手からハンドルを取上げて、ぱたんと戸をたてゝしまつた。

急に暗くなつた眼の前に彼は小柄な華車な黒い立像を見た。而してヹールの奥の恐らくは大きな二つの眼が、檢べるやうにぢつと彼を見守つてゐるのを感じて、先方にばかり勝手を働かれる不快を覺えた。

「失禮ですが、一體あなたは誰方です」

一體などとはこんな場合婦人に對して使ふ言葉でないのを知りながら、彼は故意と使はずにはゐられなかつた。

「私はマーグレットの母です」

不幸な中年の婦人を思はせる色澤のある聲が可なり疳高くかう云つた。マーグレットの母なら、Pと別居してゐるその細君だ。Pの妻だともいはず、マーグレットを愛稱でマァギイとも呼ばなかつたのが、彼には氣の毒に聞かれた。彼はP夫人がさし出した手を快く握つた。

「Pはまだ歸りませんね。さう。私今日あなたに御願ひがあつて參つたのですの。是れからはマァギイ……マーグレットの送り迎へをあなたがして下さいましな、お忙がしいでせうけれども。私はもうPには顏は合せたくありませんし、マーグレットはあなたになづき切つてゐるんですから。いかゞ。引受けて下さいまして」

さういつて夫人はちよつと顏をかしげるやうにした。隨分やんちやな少女を土曜から日曜にかけて連れて來た

り連れて行つたりするのは、子供好きな彼に取つても面倒臭かつた。然しそれをすげなく斷るのは何んだか氣の毒だつた。彼は簡單にPに尋ねて見ようとだけ答へた。

「Pは屹度この上なしに喜びますよ。Pにとつて私の顏を見る以上の呵責はないのですもの。有難う御座いました。次の土曜日には私あなたにお目にかゝれますわね。ではその時まで左樣なら」

いくらか蠱惑的でさへあると思はれる調子でさういつて、夫人は再び彼と握手すると、戸を開けて身輕に石階をかけ下りて、足早に行つてしまつた。その姿は彼の眼に美しく映つた。身だしなみのいゝ婦人から漂ひ出るかすかな優しい香が跡に殘つた。

彼は上衣を自分の部屋に脫ぐと、又臺所に戻つた。而してP夫人の來訪のために、今まで陷つてゐた默想からほんとに眼がさめて、急いで馬鈴薯の皮をむき始めた。

そこに凹んだ眼を持つたPが、大きな體を埃だらけにして、牛肉とバタとを小脇にかゝへて歸つて來た。

二

「今夜も私の所に友達が來るからね」

夕食を終つたPはナプキンをぐぢや〳〵に食卓の上に置きながら、友達といふのが來る日に限つて見せる暗い顏をしてからいつた。而して、

「火曜日々々々には來るのだからね」

と附け足した。

不愉快な顏は見せまいとしながら、彼の眉はひとりでにびり〳〵動いてしまつた。Pの言葉に從へば、紐育で

生れて今の夫人と紐育で結婚したのだつたが、二人の間の理解は新婚の當初からちぐはぐになつて、子供を設けても、その間の深い溝は埋らずに廣くなるばかりだつたので、互の間に離婚の話がもちあがつたけれども、紐育州の離婚手續は面倒なので、成るべく早く決行が出來るためにマサシューセッツ州に移つて來たのださうだ。この州では移籍後三年で離婚の條件は成立つたのだ。で、P夫婦は別居してこの三年の期限の來るのを待つてゐるのだ。Pが友達といふのは一人の婦人だ。彼がPと共同生活を始めてからもう三週間になるが、その婦人は一週間に必ず一度づゝPに連れられて來て、三四時間をPと共に過ごして行くのだつた。それが必ず火曜日の晩であることを彼はPから話されて始めて氣が附いた。

　Pと共同生活を營んでから始めてその友達といふのが來た晩の彼の心の醜さを彼は忘れる事が出來なかつた。友達を連れて來るが君はどうか顏を見せないでゐてくれと云ひ置いて出て行つたPが、暗くなつてから歸つて來た時、Pの跫音の外に廊下に聞こえた跫音は女のそれだつた。彼は別に怪しみもしないで書物を讀んでゐた。Pの書齋と寢室とは彼の部屋からは廊下一つを隔てた向ひにあるので、話聲は、意味までは解らぬながら、可なり明らかに聽き取れた。始めの中は友達の間に交されるらしい快活な高い聲と笑ひとが漏れて來てゐた。然し少時して讀み耽つてゐた書物から彼が注意をPの書齋にふり向けた時、聞こえた聲は、押しひしやがれて、たゝむやうに早口な、熱のこもつたものだつた。彼は書物から顏をあげて書齋の方に眼をやりながらぢつと聞耳をたてた。脅かすやうな男の低いしやがれた聲……何か甘たれるやうな女の蠱惑的な甘々しい聲、沈默……彼の心臟には破れさうに血がこみ入つて、頭ははち切れさうに暴れ狂ひ始めた。

　童貞を守り通して來た彼の想像力は事實以上の境まで彼を連れていつた。彼の手には冷たく脂汗が滲んで、脚は椅子にも堪へないやうにわな〳〵と慄へた。その間にも彼は自分と戰はうとした。

「貴樣は何んといふ馬鹿氣違ひだ。こんな事を誘惑とさせる程貴樣は淺薄なのか。讀め書物を。書物の中の思想に喰ひ入つて行け。齒を喰ひしばつて思想が千切れるまで嚙みくだけ。貴樣の頭を向ける事は山ほど外にある。滿洲で戰つてゐる露西亞人と日本人の一人だけの事ですら考へて見ろ。貴樣の醜態を打ちくだくには十分過ぎる筈だぞ」

さう嚴しく自分をたしなめながら、彼は矢張り渴いた野獸のやうに固唾をのんで、恣まゝな想像を頭一杯に描いてゐた。而して血走つた眼でぢつと書齋の方を見詰めてゐた。彼は高熱になやむ病人と同じ足どりでひよろ〳〵立上つて漸くと〳〵部屋の空氣が彼には息苦し過ぎて來た。彼は高熱になやむ病人と同じ足どりでひよろ〳〵立上つて漸く窓の所に行つた。而して力任せに窓を開けると、水を得た魚のやうに、口を開けて夜の空氣を吸ひ入れた。張り切つた絲同樣、次ぎの瞬間には斷ち切れさうだつた彼の力は、漸くかすかなゆるみを見附け出した。彼の口からはすゝり泣きのやうな長い震へた溜息が漏れた。

然しすぐにその後から盲目な本能は二重の力を集めて押しかへして來た。詩人の想像がクライマックスに達するまでは何處までも灼熱して行くやうに、一度眼覺めた欲情の衝動は、天才のやうな正確さで、彼の心の中に恐ろしい樓閣を築き上げた。Pの書齋から寢室に通ふ唐戶が開くのを聞いたと思つた瞬間から、彼の神經は極度の緊張に達して、彼は苦しげに喘ぎながら、ある一事をのみ專念した。欲情の忘我が來た。始終P達のゐる方ばかりを見詰めながら、彼は我れ知らず盜賊のやうに靴を脫いだ。而して靜かに自分の部屋の戶の所に寄つて行つた。而して鍵の孔に耳をつけた。而して天から地につながつた落雷の光のやうに震へてゐた。

その翌朝Pは、彼の機嫌を取る積りも手傳つてゐたのだらうが、すつきりした氣分で、四十男にも似ず子供のやうにはしやいでゐた。それに反して彼の險しく澄んだ眼のまはりは紫色に黑ずんで、口の中は物をいふさへ苦

しい程乾き切つてゐた。而して自己に對して暴虐の限りを盡した頭は、泥のやうに濁りながら痛々しく傷ついてゐた。彼の感じ深い心は、今まで自分でも知らなかつた醜さをしみ〴〵怒つたり恐れたりした。

次ぎの週にPが婦人を連れて歸つて來るといつた時、彼は驅り立てられるやうにPの留守の間に家を出てしまつた。彼は罪の思ひ出にのみ生きるカインのやうに、開校前の寂しい學校町の夜を處嫌はず歩きまはつた。その時々にPの家で行はれてゐると思はれる恣まゝな光景が、後から後から彼に追ひすがらうとした。彼は暗闇の間を逃げ廻つた。狂癲病院内の隱者のやうな嚴かな生活を彼は祈るやうに繰返して考へても見た。然し惡魔はその淋しい生活をすら娼家の生活にして見せようとした。天使のやうに純潔な可憐な監督の娘のイーディスは媚びた眼をあげて、嚴格な副院長の接吻を求めてゐた。看護夫と看護婦とは木蔭や叢の中を蜜のやうな私語で滿した。白髮の老院長すらが、躁狂性の或る美しい婦人患者にからかつてゐた。彼は釋迦を思つた。釋迦を思ふと、その沐浴を垣間見て乳を捧げたといふ處女が眼に浮んだ。彼は基督を思つた。基督を思ふと、白晝姦淫を犯したマグダラのマリヤが想ひ出でられた。

彼はいつの間にか詩人ローウェルの住んでゐた家の前に來てゐた。暗い木立の奧深く續く道の所々に輝く電燈の光は、やゝ乾いた樹の葉をも水々しく照してゐた。(いつもなら彼はそのしめやかな感じに打たれて帽子を脫ぎでもしたであらう)彼は反抗するやうに電燈の光に映えた白壁を睨みつけた。「僞善者」さう彼は獨語ちた。彼は總ての人を僞善者と考へなければ、自分の立つ瀬がないやうに思つた。

知らない中に彼は又町に沿うて流れるチャールス河の河べりに出てぼんやり暗い水を眺めてゐた。眞黑な水はボートや杭をしゃぶりながら流れるともなく流れてゐた。遠くの方ではボストンに通ふ電車が時々青白い火花を散らしてゐた。その外に動くものとてはなかつた。自然は、不服なく慌てずに、その大きな力で活きてゐた。然

し彼の頭の中では全世界が亂雜に動いてゐた。全世界が淫蕩に動いてゐた。「この瞬間に」と彼は思つた。「また次ぎの瞬間に、Pの今しつゝある事が地球の表面にどれ程行はれてゐるか。夫婦の間に、その時まで童貞であつた男女の間に、總ての醜行に飽き果てた娼婦と放蕩者の間に、自然に、不自然に、而して强迫的に、……」彼の心の眼には、色々な忌むべき場面が、眼まぐるしく次ぎから次ぎへと折重つて現はれ出た。顏や手に蚊の來るのも忘れたやうに、彼は身動きもしないで、その奇怪な幻影を見入つてゐた。世界のどんづまりの姿がそれのやうに思へた。彼は恐ろしい欲望にさいなまれて、わな〳〵と戰いてゐた。

ふと彼は襟を傳ふ冷たいものに氣がついた。眞暗な空はいつの間にか雨になつて、彼の帽子と肩とはぐつしよ濡れてゐるのだつた。彼はそれでもそこを立退かうとはせずに、奇怪な空想に、身を委ねた。

「俺は臆病なんだな全く」

しと〳〵と降る秋雨の中に唯一人立つて、かう彼は囈言のやうにさゝやいた。

「力があるんだからな」

「あゝあゝ……馬鹿になつてはゐないぞ」

「どん底……靜かに……靜かに」

思ひ出したやうに彼はかうも獨語ちた。

雨は次第に降りつのつて彼の上衣からワイシャツを濡らし、メリヤスの肌着を通し、滴になつて脊骨を傳ひ始めた。その時彼は漸く我れに還つた。冑を着たやうに硬ばつて重い衣服の感觸の間に、彼の肉體は寒さと感情とで慄へてゐた。

痺れた脚を重さうに引きずりながら、人通りの絕えたがらんとした往來を通つて彼は歸路についた。是れまで

人は彼を信仰の人と呼び、自分もそれを以て任じてゐた。それだのに一度剝して彼の僞らざる心の姿を露はして見ると、忽ちこんな醜い有樣に出遇はなければならないのだ。そんな穢い所をも躊躇する事なく回避せずに通りぬけて行く覺悟をしながら、彼は餘りな自分の淺ましさに呆れてしまつたのだ。彼の悲しみを知るものは何處にもなかつた。空しく費された肉は疲れ果てゝゐた。彼はそつと表戸を開けて部屋に這入つた。婦人を送りとゞけて歸つたPの安らかな鼾がかすかに廊下を隔てゝ聞こえてゐた。彼はぐつしより濡れそぼつた衣物を、はがすやうに脫いで、跛脚な椅子にかけた。而してこちんとした寢臺に橫になつた。

「靜かに、靜かに」

やゝ暫くしてから、熱い涙と共に彼はかう獨語ちた。

是等のいまはしい記憶は、今Pの言葉を聞くにつれて、彼の心にまざ〳〵と甦つた。別居とはいふものゝ、離緣も同樣なPの境遇で、Pが外の婦人と親しむのを彼は尤めようとは思はなかつた。たゞその事を祕密に――彼に對してさへ――してゐるらしいのが彼に不快を與へた。それよりも彼を不愉快にするものは その事柄が彼に與へる恐ろしい影響だつた。彼は何んとかしてその日の呵責から免れたかつた。

で、Pが家を出ると彼も家を出た。薄寒い程に空はよく晴れてゐた。明日から學校の始まらうといふこの町は、夜になる程賑やかになつてゐた。店といふ店は電燈の光で寶石のやうに輝いてゐた。男女の學生の笑ひさゞめく聲や、面白い校歌を歌ひ步く聲が一つの音樂となつて耳を撲つた。群集の總ては自由に快活に心を許して振舞ひ步いてゐた。その中を、彼だけは、囚徒を護送するやうに、彼自身の心に嚴しい警戒を與へながら步いた。彼は自分が健全であるのか病的なのかを疑はないではゐられない恐ろしい心の狀態にあるのを感じた。

彼はもう一人で町の中を步き廻る事にも懲りてしまつた。溺れた人が一片の藁にも最後の望みをかけるやう

に、彼は誰かにすがつてこの恐ろしい一夜の誘惑から逃げようとした。然し住みついてから三週間にしかならないこの町に知人といふやうなものはなかつた。彼は已むを得ず日本にゐた時顏だけ知つてゐたMを尋ねて見る事にした。

Mはこの町でも一流の寄宿舍に住まつてゐた。五分も厚みのあらうと思はれる絨毯を敷きつめた階段を昇つて、九尺も一丈も高さのある楢造りの戸を開くと、そこに善美を盡したMの部屋があつた。小柄なMは折しも鏡の前に立つて、絹のシャツ一つになつて髭を剃つてゐたが、それが部屋の置物の一つのやうに小さく見えた。彼が這入つて行くと頰から顎にかけて石鹼だらけになつた顏を一寸こつちに向けて、その父によく似た低級な愛嬌を浮べて首から上だけで挨拶した。一箇月三百圓づゝ送らうかといつてよこした父に對して、それはけた違ひでせう、三千圓なら間に合つて行くかも知れませんと、高飛車に返事をしたといふ男だなと思ひつゝ、彼は安樂椅子に體の半分も埋れながらその後姿を見やつてゐた。

「一寸待つて下さい。すぐ濟ませるから」

Mは頰をあたりながら、鏡に映るAの顏をうろんさうに見詰めて云つた。

「時にね。あなたは勞働してゐるといふがさうですか。……感心だね」

こゝでMは丁寧に剃刀の石鹼を紙で押し拭つた。而して剃刀をまた顎の所に持つていつた。

「あなたは勞働なんどせんでもいゝでせうがね。もう一人Kとかいふのも勞働してゐるさうだが、西部とちがつてこゝでは……こゝもエールなんどなら別だけれども、おやめになつたら如何です。お父さんの顏もある事だし、こゝにゐる日本人達も面白くは思つとらんやうだから」

Mはから途切れ〳〵にいひながら、顏の皮をあちこち引つ張り上げて毛を掘つた。

言葉もだが、人を人とも思はないしやあ〳〵した小生意氣な顔は、彼を怒らした。彼の悒鬱はそのまゝ憤怒に代つた。彼は自分がこんな所に來たのを恥ぢ入つて赤くなりながら立上つた。

何んとか言譯をいつてゐるらしいMの言葉を聞き捨てにして、彼は往來に出た。いつもの落着いたAに似ず、既にいゝ加減昂奮してゐたその血は熱湯のやうに煮えくりかへつて、皮膚に近い所を漂り流れた。總てのものから切り放された彼の心は少しの手がゝりさへ見附ければ、容赦なく驀地にそつちに働きかけた。

彼はPの事などは忘れてしまつてゐた。Mの導くやうな生活に對する憤激だけが暴れ狂つた。他人事ながら、外面にばかり卽して、自分といふものを置きざりにしたまゝ、澄し込んでゐるやうな鈍さ加減が、彼をいらだたした。彼は、おまけに、そんな所に彼自身を運んで行つた自分の心を恥ぢ怒つた。「信仰を持つてた貴樣は少くとも神に慰藉を求めようとしてゐたのに、今はMづれに行つて慰藉にありつかうとする。その態は何んだ」彼は肩を怒らしながら、さうつぶやいてアカシヤの葉の散り敷いた歩道をがむしやらに歩いて行つた、お蔭でその夜の恐ろしい誘惑からのがれた事は忘れながら。

三

「ウエッブでも讀んでやるかな」

かう獨語ちながら、AはL教授の講堂から校庭に出て來た。「今の時代に生れて社會問題を閑却するのは精神的のなまけ者だ」といつたウエッブの言葉を面白いと思つてゐた彼は、社會問題の講座を受持つL教授の開講に、參考書の一つとしてその名を擧げられたので、讀んで見る氣になつたのだつた。貸出されない中に早く〳〵と思つて彼は圖書館の方に急いだ。

晩い午後の陽は薄曇つた空にぼんやり隠れて、秋だつた風が立ち竝んだエルムのなよ〳〵しい枝を可なり激しくゆり動かしてゐた。青いまゝに吹きちぎられた木の葉は、學則の切端や、本の包紙の屑なぞと一緒に、乾いた音を立てゝ、彼の足許を轉げて行つて、建物の隅に波頭のやうな渦を巻いた。それを見て彼はその年の老いてゆかうとするのをしんみりと思ひやつた。故國を去つてから四年目の秋が來たのだ。燃えるやうな暑さの中に、汗みどろになつて狂人を相手に働いた夏の間の事は、遠い昔のやうにも、夢のやうにも思ひなされた。

彼の眼はひとりでに夢みるやうになつた。廣い厚い肩を持つた中背の健康な體の上に正しく据ゑられたその顔は、體格に比べては少し小さく見えたけれども、きりつと引きしまつてゐた。デリケートな輪廓ではなかつた。のみならず耳から顎にかけての骨だつた堅い線は、肉情と物慾の激しさをさへ語つてゐた。鼻は不恰好に大きく平べつたかつた。口も大きかつた。然しその口尻は笑靨のやうにくぼんで、子供らしい無邪氣さと怜悧さとを示してゐた。左の眼は右の眼より少し大きかつた。女を知らないその眼は、女の眼のやうに澄んでゐた。左の眼は見、右の眼は考へてゐた。物思ひにでも耽る時どうかすると、少し細まつた彼の眼は夢遊病者のそれのやうに瞬きをしなくなつた。さういふ時の彼の顔は非常に精神的になつて美しかつた。

その時も彼はさういふ夢みるやうな顔付をしてゐた。すれちがつた學生達は、何んといふ事なしに、振返つて彼を見送つた。「あれも Jap か知らん。いゝ顔をしてゐる」さう彼等の或る者はいつた。それ程彼の顔には人の注意を牽く特徴があつた。

彼は古めかしい大きな建物の暗い階段を登つて閲覧室に這入つて行つた。エマーソンもソローもロングフェローもそこで書物を繙いたといはれるだけに、米國には滅多にない古い落着いた空氣が漂つてゐた。開校の日だつたので、さしもに廣い室内も數へる程より閲覧者はゐなかつた。彼は眞直に目錄棚の所に行つてカードを繰り始

めた。ウエッブに來るまでに色々な書物の名や著者の名が彼の注意を牽いたので、彼は興に入つてかの抽斗、この抽斗と漁つて歩いた。

その時女の靴音が彼に近づいた。が、彼は格別の注意を拂はうともしなかつた。

「お手傳ひ致しませうか」

彼は夢みるやうな眼をあげてぢつとそこに立つ人を見た。それは一人の女事務員に過ぎなかつた。

「え、ウエッブを」

「ウエッブの何んで御座います」

「ウエッブの『生産業上の民主主義』でも讀みませう」

から彼は答へた。而して、

「然しファビアン協會ぢやいやになるな」

と日本語で獨語ちた。彼はPの大好きなファビアン協會を妙に好まなかつた。ウエッブがその有力な一會員である事をその時思ひ出して、不圖いつもの癖の獨言を云つてしまつたのだ。

「御免下さい。今のお言葉はよく判りませんでしたが……」

その聲を聞くと彼は夢から覺めたやうに、始めて自分の側に立つてる婦人を意識的に見た。彼はすぐその婦人に好意を持つた。而して獨語する馬鹿らしい癖を恥かしく思ふと子供のやうに赤面した。

見ろと彼の眼の前の若い事務員も髮の根まで顏を赤めて伏眼になつてゐた。咄嗟に、彼は、この女は自分の獨語を惡く取つたなと思つた。けれども處女らしいその婦人の顏には少しも惡意の色は表はれてゐなかつた。彼はやゝ安心した。

「お許し下さい。私決してあなたを辱しめる積りで伺ひ返したのではなかつたのですから。もしか私の伺つておく事を聞き漏らしたかと思ひまして」

　彼女はすぐ顏を擧げて、彼を靜かに見やりながら、潤みのある優しい聲でかう詫びた。それを聞くと彼は何んといふ素直な sensitive な心だと思つた。打ちとけたなつかしみがその胸にこみ上げて來た。而して口ごもりながら自分の惡い癖と、今云ひ放つた言葉の意味とを言譯した。彼女は喜ぶやうに微笑んだ。彼の顏にも微笑が乘り移つた。彼は久しぶりで微笑んだのに氣がついた。それは醉ふやうな快さだつた。

　暫くして彼女は彼の机の所に書物を持つて來てくれた。

「つまるかつまらないか、もう一度學徒の生活だ」

　彼は一人になると又さう獨語ちた。

　齒ぎれのいゝ條理のたつた文章は、然しだん／＼彼を著者の思想の圏内につれこんで行つた。彼は論理に弄ばれまいと思ひながら、彼の知る限りの社會の實狀を頭に置いて、それに照し合せてその書物を讀み進んだ。

　一時間過ぎた。緯度の高いこの町ではもう電氣が來て天井と壁との電球は一時に輝いた。彼は始めて書物から眼を放して前を見た。丁度眼の前に、粗末な洋服を着て鼻眼鏡をかけた痩せぎすな日本人がゐるのに氣が附いた。その男は前から彼を見て笑つてるらしかつた。……物好きな、皮肉な、然し正しい笑ひを笑つてゐた。而していきなり立つて彼の所に寄つて來た。

「先刻から言葉をかけようと思つたんだが、讀書を妨げちやいかんと思つて控へてゐた。君はA君だらう。僕はKだよ」

　初對面の彼に對してKは兄が弟にでもいふやうな言葉遣ひをした。

「何を讀んでゐる。ふむ、ウエッブか。ウエッブのコッブウエッブ（蜘蛛の巣）に引つかゝつちや困るぜ。それより、今夜ボストンで主義者の週會があるから行かう。今日は僕が演說をやるから君にも聞かせてやるさ。さあ行かう」

さういつてKは彼の前にある書物をしめてしまつた。無遠慮な奴もあるものだと思ひながら、彼はKを憎んだり卑しんだりする氣にはなれなかつた。而して一種の好奇心を感じながら椅子から立上つた。PやMの噂したKとはこの男だなと思ひながら。

圖書係の事務室の細長い棚机のかなたに先刻の若い事務員は、彼とKを見守りながら、肘をもたせてゐた。而して彼が差出した書物を受取る時、

「私の父もファビアン協會は嫌ひですの」

と小さい聲で云つて微笑んだ。彼はむッつりしてゐた。

「あなたのお父さんとは誰方です」

「M教授です」

彼は色々な意味で驚ろいてしまつた。M教授といへば米國でも有名なゴシック藝術研究の權威的學者だつた。それが社會問題に對してもきつぱりした意見を持つてゐるのだ。M教授の令孃ともあるものが圖書係をするといふのもアメリカに來て始めて見る意外だつた。彼がM教授の建築史を聽講する事になつてゐるのも奇緣だつた。微笑はまた彼の眼に歸つて來た。大部なM教授の建築史の挿畫を描いたのが令孃であるのを思ひ出して、彼は尋ねて見た。

「それは私の姉です」

彼女は素直に云つてそこを出て行く二人に輕く挨拶した。彼はKと一緒に、薄暗い急な階段を下りて、風の吹

きつのる夕闇の校庭に出た。

四

濛々と煙草の煙のこもつた汚い室には、つめこむやうに總ての階級の人が立つたり坐つたりしてゐた。六階目に部屋のあるためか、建築の粗雜なためか、强い西風が窓ガラスに强く吹きあてると、部屋はぐら〳〵と輕い地震位にゆすれた。一段高くしつらへた講壇の後ろまで聽衆はつまつてゐた。その眞中に、Kは鼻眼鏡をかけて、體格の立派な聽衆の間に殊に細々と衝立つてゐた。而して熱意をこめて自分の主張を演說してゐたが、その扁平な胸から出る聲は、動ともすると部屋の隅々には行き渡らなかつた。

「もつと大きな聲で賴む戰士」

「何んだ。勢よくやらねえか」

「そんな聲の持主に俺達の仕事が出來るか」

「いや俺達の仕事は小さい聲でするに限る」

そんな聲が色々の國籍の人達から蕪雜な英語で叫ばれた。Kの側にゐる座長は大きな腹を抱へながら立上つて呼鈴を鳴らした。

「辯士に敬意を表していたゞきたい諸君」

その側から洋服屋の看板のやうにきちんと衣物を着たしやれ者らしい佛國人が立上つて、

「事實と數字、それを私は辯士に要求したい」と力のぬけた英語で甭高にいふと、遙か離れた末座から國籍不明の、美術家らしい、大きなネクタイをかけた男が、

「第一に火第二に火而して第三の火」

と虎のやうに叫んだ。仕舞ひにはAは、手を振り、立上り、地團太を踏み、笑ひどよむ聽衆の立てる騷音の波の中にもまれて、已むを得ず立上つて席を避けねばならぬまでになつた。彼はそこに出席してゐる人々の主義に對して、今まで抱いてゐた熱意と尊敬とを揉み消されたやうに思つた。

突然言葉を切つて、立ちすくみになつてゐたKが、兩手をさし上げると見る間に、恐ろしい鋭い叫び聲をたてた。鼻眼鏡はその拍子に眼から落ちて、兩腕は、節だつた繩のやうに、彼が着てゐた日本服の袖口からあらはになつて、細くよれて天井を指した。

「君等は僕を怒らせる」

劈頭に彼はから叫んだ。この不意打ちに聽衆は思はず鳴りを鎭めた。Kは涙にかゞやく眼をむいて、自分の感情に壓倒されながら、深い呼吸をして、聽衆を見まはした。而して Sing-song で語りつゞけた。その聲は前にもまして細かつたが、もう立騷がうとする聽衆はなかつた。

「君等は僕のこの細い聲と扁平な胸とが雄辯に語る所に耳を傾けないのか。それほど人類に對して冷酷なのか。祖先以來の不合理な生活の壓迫と、方便的な結婚とが、この胸を造り、この聲を造つたとは氣がつかないのか。諸君！　この胸は結核菌の巣になつてゐるのだ。僕は僕だけの仕事を仕遂げる前に斃れなければならないのだ。是れは事實だ。而して正確な數字だ……」

Kがまだ結論に達しない中に、「火」を叫んだ男ははね返されるやうに椅子から跳り上つて、

「ブラボー」

とわめいた。それにつゞいて起つた多數の激烈な拍手は、人々のしいしいと制する聲でぱつたりやんだ。その後

には意味ありげな沈默が續いた。笛のやうに鳴る風の聲と、ガラス窓のひしめく音とが耳立つばかりだ。

鼻をすゝる聲がした。彼はふりかへつてその方を見た。晩年のユーゴーを思はせるやうな顏付をした一人の勞働者は眼を赤くして、ハンケチを鼻の下に丸めてゐた。そのそばには商賣人らしいショーのやうな男が皮肉な眉の下から灰色の鋭い眼を光らしてKを見据ゑてゐた。

「僕はもう多くを語らない」

Kはまたやゝ冷靜になつた聲に力をこめて言葉をつゞけた。

「君等は日本からこゝまでの距離の遠さを知つてゐる。無資産で虛弱な僕が、自分の生命とする思想の容れられない爲めでなかつたならば、何を好んでこの遙かな旅を企てようぞ。信じてくれ給へ、僕はそれだけ自分の思想を愛重して來た。僕の演說が低聲な爲めに、又事實の羅列の少い爲めに、又數字の引用の不足な爲めに、君等を說伏し得なかつたとしてもそれは僕の責めではない。君等の思ひ遣りの未熟な爲めだ。無智な勞働者の叫び聲に何んの事實があり、何んの數字があらう。勞働者そのものが事實であり數字であるのだ。君等は僕を怒らした。然し僕の怒つた事によつて僕がどれ程君等の友であるかを知つてくれたらう。だから、僕は、僕を怒らした君等に感謝する」

Kはかう結論して、床から鼻眼鏡を拾ひ上げながら眼を拭つた。今まで沈默してゐた聽衆の中から、いかにも男性的な、ぐん〳〵と人の胸を衝くやうな拍手と叫喚の響きが突然室內をゆり動かして起つた。人々は總立ちになつた。Kは眼まぐるしくさし出された手に、兩手をつかつて握手してゐた。Aの若い心も思はず識らず昂奮してゐた。

彼はKの演說に感動させられた譯ではなかつた。彼はKの言葉の中に煽動者の常用する空虛な表現のある事を

直感してゐた。然しそこに集まつた人達は、一人々々奥深い背景を持つてゐる事を彼に思はせた。彼は是れまで、互に噛み合ふ勞働者を見てゐた。然しKの演說が濟んでからの聽衆の親しさは、彼を淚ぐました。大學の老敎授も、有名な雜誌記者も、大商店の管理人らしい人達も、賃銀によつて生活する勞働者の一人として、普通の勞働者と隔意なく話し合つてゐた。演說中互に激しい言葉でいひ罵つてゐたものも、今は手を取り交はして打解けてゐた。彼は始めてこゝに力になり合つてゐる勞働者の群を見た。而してその後ろには大きな實生活といふ大事のある事を深く感じた。彼等の親しみは、主義から來たのでもなく、趣味から來たのでもなく、生命の根柢を形造る生活の必要から來たものだと思ふと、彼は人の心の土臺を手の平で撫でゝ見るやうな氣がした。それが彼を淚ぐました。

集會が終つて、煙草の煙と濃密な空氣の中から出て來たKとAとは、別々な心で夜の更けた街路を歩いてゐた。製鋼所を近所に持つたこの邊の町並は、耐久性な材料で造つた建築物の穢さに充ち滿ちてゐた。裝置の不完全なためにはげしい明暗を作つてまたゝく瓦斯の街燈に照らされて、敷石の上にたまつた汚水も、踏みしだかれた果物、南京豆の皮や、襤褸、紙類の屑も、雨露にへこんだ煉瓦の壁に描き散らされた樂書も、半分剝がれて風の爲めにばた／＼と鳴る安興行物の畫びらも、痛ましい醜さと貧しさを、不快な臭氣と一緒にそこら一面に漂はしてゐた。夜目にもしるく埃を立てながら乾いた風が往來を吹きまくつてゐた。すれちがふものといつては、飮んだくれか、何處か不具らしい男か、かすれて猥らな聲を持つた豚のやうな賣春婦だけだつた。偶には瘦せこけた犬にも遇つたが、二聲三聲吠えかけたと思ふと、自分の聲を恐れるやうに尾を卷いて、かういふ時間に、こゝらをうろつく人間達が、犬に對してどんな殘酷な奴等であるかを知り顏に、ひよろ／＼と姿をかくしてしまつた。

KはしきりとAに話しかけるのだつたが、Aは苦り切つたやうな顏をして、押し默つて歩きながら考へた。そ

の右の眼は殊に鋭く輝いた。新らしい眼で彼の見た世の中には、深い溝や奇怪な矛盾がそこら中にあつた。經驗の乏しい彼の若い心は、そこいら中に陷穽があつて而も足許の暗い廣野に押し出されたやうに思つた。彼は解放された自分の力を如何使つていゝのか益々解らなくなるのを感じた。

「あゝあゝ如何にすればいゝんだ」

Ｋのゐるのも忘れて彼はかうつぶやいた。

「支那料理屋に上つてチョップスイでも食ふのさ」

いきなりＫがかう答へた。彼はぎよつとしてＫを尻眼にかけた。Ｋはその機會を外さずに彼との會話をつなが

うとしたけれども、Ａはまた沒義道に默つてしまつた。

然しいつの間にかＫの意志通り二人は支那料理屋の二階に上つて隅の方の小卓に向ひあつて座を占めてゐた。今まで通つて來た町の樣子と打つて變つた賑かさの中に、淫靡な色彩と音響とが彼の感覺の總てを擽つた。手も肩も足も裸形になつた女樂人の合奏團のヴァイオリンや笛から俗謠が奏で出されると、そこらから男女の客の歌ひ合はせるだらしのない唄聲が起つた。その間を、いたちのやうに敏捷い瘦せぎすな給仕の支那人が、生眞面目な顏をして周旋した。客の中には女ばかりの群もゐた。Ｋと彼とはさういふ群から絕えず眼つきや手まねで挑みかけられた。二人はこゝでもちぐはぐな心持で、食事をしてゐた。

「いくらよこすかな。五弗は間違ひなからう。あれだけしやべるにも相當の準備はいるからね。おまけに日本服着用といふ景品まであるんだから。それにあすこにやね、中々偉い奴が來るんだぜ。今夜なんかも、アリイナの主筆もゐたし、レヴィユー・オブ・レヴィユスの支局長もゐた。而して早速僕に寄稿を賴みやがつた。……厚かましくやるに限るよ」

Ｋは濃厚な支那酒に醉を催しながら、鷙鳥のやうに上瞼の眞直な眼で彼を見つめてかういつた。Ｋがどれ程笑顏をくづす時でも、その眼だけは除け物のやうに笑はなかつた。それがＫの笑ひを皮肉にして不自然にした。Ａはその笑ひに遇ふと一種の壓迫と不愉快とを感じた。

「ふむ、君は主義を賣りに行つたのか」

かう云はないではゐられなかつた。Ｋは再び皮肉に笑つた。

「主義は愚かな事だ。僕自身が一つの物件だよ。從つて賣物だよ」

彼は承服しなかつた。

「然し無條件で、無條件どころぢやない命まで投げ出して……」

「主義や信仰に殉じた人間もあるぢやないかといふんだらう。笑はせやがる。愛を賣つてやるから救世主をよこせと大きな聲で立賣りをした奴は誰だい。涅槃が欲しけりや無上光明佛といふ貨幣で買ひに來いと大店を張つた奴は誰だい。そいつ等は一番づう〳〵しい生産掠奪者ださ。愛だ涅槃だといつて、謂はゞ空氣に色をつけたやうなまやかし物を恐ろしく高値で賣附けたんだ。どうだ飲み給へな。飮まん？　酒を飲まん奴はな、人世といふ世界にゐて、樂園そのまゝな熱帶地を旅行しない馬鹿者のやうな奴だよ。から飮むんだ。そら、坐つたまゝで眼の前の景色が變つて來る。……然し君は賴もしい所があるよ。君のやうな境遇にゐてＰと共同生活をやつたのは毛色が變つてゐる。それだから僕は進んで交際を求めたんだ。實はね、僕もＰと一緒にゐた事があるんだ」

かういはれると、彼の來る前に一人の日本人が一緒にゐたとＰが彼に話した事が又思ひ出された。

「Ｐは一寸話せる男だつたんだが、僕がその細君にからかつたので氣まづくなつたんだ。おい、何を考へてる。そんな暇に女でも物色しておき給へ。こゝは今夜は割合にいゝ景色だ」

さういつてKは臆面もなく女達を見まはした。

Aは我慢の出來るかぎり我慢しようとした。單にセンチメンタルな好惡で人を見てはならないと自分をたしなめても見た。然し彼の心の中の或る力が猛り狂つてそれに反抗した。たつた今、眼に涙をためて、悲壯な事をいつてゐたKが、彼の眼の前に見せたり云つたりしてゐる事は、彼のKに對する信頼を二重に裏切つた。自分の判らない彼は他人を批判すべき何等の標準も力量もない事を十分に知つてゐた。それにも係らず、彼は本能的にKを憎まないではゐられなくなつて來た。

咄嗟にKの口から重い溜息が漏れた。今までの元氣にも似ずKは俯首れて、食卓の上に立てた手で亂雜な髮の毛をかきむしるやうにしてゐた。

「とはいふものゝだね」

Kは又顏をあげて、少し憚るやうに彼を見た。

「君はいくつ？　二十四？　若いなあ。而して君は健康な體質といゝ顏つきをもつてるね。君の顏つきはほんとにいゝよ。君はいくつになつても子供でゐられる質だ。僕にはそれがない。おまけにもう三十二だ。君を見てゐると後ろから新らしい時代が追つかけて來るやうな氣がするよ。僕等の努力は總てのものを物質に還元したのだ。そりや今になつて見ればこそ何んでもないが、小さな仕事ぢやなかつたんだ。けれどもねえ、來る所まで來て見ると、又先きには遠い道があらあ。解るかい。君には解るまい。けれども君の顏つきにはちやんと解つてると書いてあるよ。そいつが恐ろしく癪にさはるね。僕にはそこに跳ね返つて行く力がもうないよ。健康も許さないしね。僕は自分の主義を働らかす代りに、主義に働らかされてしまつたんだ。畜生！　くやしいけれども主義の腰辨になつてしまつた、いつの間にか。健康がありやなあ。……然しこれも自分でこはしたやうなもんさ。十

七の齢から女を道具と思つて取りあつかつたんだからな。Hipの形で女の醜美を見分けないやうな奴は、唯物主義者の面よごしだと思つてゐたんだからな。然しこれ位時代思潮に徹底すれば、僕も觀念して成佛しなければならんのかも知れないて。まあ、後は頼むぞ。自重し給へ。君のバプテズマのヨハネが一獻進呈する、飲んでくれ給へ。いゝだらう。まさか君は禁酒會員ぢやあるまい」

　Kの言葉は段々しんみりして來て、仕舞ひには兩眼から感傷的な涙が痩せた頬を傳つて流れ下つた。Aは默つて酒杯を擧げてKのと打合はして一息に飲み乾した。

　突然Kが惡魔のやうな笑ひ方をして、椅子の上で背にそり反つた。その眼からは續けざまに涙が出た。

「飲んだな。おだてられていゝ氣になつて飲んだな。ハヽヽヽ。おい飲んだ駄賃に勘定し給へ。僕は一錢もないから。ハヽヽヽ」

　Aは懷中を探つた。小錢が無くなつて二十弗の紙幣があるばかりだつた。彼は已むを得ずそれで支拂ひをしようとした。Kは彼の手に大きな札があるのを見ると、いきなりそれをひつたくつて女の群の方に向いて高々と振り廻した。而して口では、

「おい勘定！　二十弗だぞ。二十弗だぞ」

と叫んだ。給仕の來るのより早く、四五人の女が、火を見かけた蛾のやうに、Kと彼との周りに集まつて來た。蠱惑的な、むせる程强い女の香が彼の鼻をついた。Kの眼は忽ち生氣を回復して、女達の中から一人を選んだ。而して處女のやうに赤面してゐるAを指して、女達を見やりながら、

「この若い紳士はなあ、本當に生粹の生なんだ。一肩入れようといふのはゐないか」

といつた。それと同時に、彼の首は三四人の女の腕で重苦しく抱きすくめられてゐた。而して彼の耳は「妾よ」

「妾にね」「妾だつてば」などいふ甘つたれた、なまめかしい聲で滿たされた。

「やめないか」

彼はとう〳〵本氣に怒つてしまつた。場合が彼の女性に對する好奇心から彼を救つて、彼は無恥な女達に蟲酸を走らしながら、女達をつき退けると同時に、帽子と杖とを取つて料理屋を出た。すぐ支拂ひをすませたKは、四五分もたゝない中に連れの女ともつれ合つて往來に出て來た。而して遠方から大きな聲でAに呼びかけた。

「おうい、お坊ちやん御成人！　ハ、、、さう怒るもんぢやないよ。女達は全く君を可愛がりたがつてゐるんだよ。ハ、、、、金は土曜の支拂日まで借りとくぜ。まあ折角自重し給へ、ハ、、、」

さう呼びおこす聲は風に送られて高く低く彼に達いた。彼は默つたまゝ足早に三四町歩いた。何んとも云へない不快な思ひに驅り立てられながら。

その時彼は不圖自分の側に一人の女の歩いてゐるのに氣がついた。彼は驚いて立止つた。女は彼の耳許にビイドロの震へるやうな小刻みな笑ひを送つて、

「獨言と無口は貴婦人に對して失禮よ。もういゝ加減にして妾の家に歸りませうね」

とさゝやくのだつた。彼女は若かつた。蓮葉な物云ひに似ず、街燈の光に照らされたその顏は妙に沈んで、險相で、而して痛々しい程瘦せてゐた。この女がよく笑へたと思ふほどその表情は堅かつた。その上に頰紅と白粉とが乘り惡く塗つてあつた。嘗て彼がP府の街の中で、前から知り合つた男の、乞食におちぶれたのに偶然出遇つた時、その男の忌むべき性格と、自分で自分を引張り上げるだけの努力をしないその腑甲斐なさが癪にさはつて、何か汚いものでも踏みつけたやうに逃げ退いた、その時の事まで回想して、彼は自分の高慢ちきな單純――最も惡むべき所謂美德の一種――を深く恥ぢた。而して、強い力の感覺が齎らす一種の哀情にふるへながら彼は

慌てゝ衣嚢を探つたが、有金はKが殘らず持つて行つた事に氣がつくと、胸のあたりを撫で廻して、嘗て父から貰つたネクタイピンを拔取つて、それを女の手に渡すと、逃げるやうにその女から遠ざかつた。

彼は漸く孤獨になる事が出來た。淫らな光景を見せつけられながら、彼はその夜は少しも肉慾の衝動を感じなかつた。のみならず、そんな衝動に對する不思議な嫌惡の情が、ひし／＼と感ぜられた。彼の頭は熱に燃えてゐた。而して芝居氣のない崇高な感じが甦つた。彼に追ひすがつて來た女が、人類の不幸な運命の使者でもあるかの如く深く憐れまれた。恐ろしい人間生活の缺陷が彼女の姿を通じて、彼に救ひを求めながら、叫んでゐるやうだつた。

支那料理屋ではKにもしたゝか飜弄された。然し彼は確かに打負かされたとは思はなかつた。彼は雪に埋れた筍のやうに自分を感じた。雪はいつか解ける。その時筍は跳ね起きて見せる。春を迎へてぐん／＼生長するために跳ね起きて見せる。彼はKの人を人とも思はぬ態度の中に、何處か弱さの潛んでゐるのを感じた。Kの通つた道は歩くまいといふ自信もあつた。

「それにしても自分はどう歩けばいゝのだ」

こう彼はつぶやいた。そこまで來ると哀れな彼の心には何等の手應へもなかつた。恐ろしい虛無な力が彼の內部に張り滿ちてゐるだけだつた。彼は砂塵を卷き上げて吹きまさる風に刃向ひながら力強く歩いた。

「ぶつかれ、ぶつかれ。躓くのを恐れてはゐられない。躓いたら起き上るまでだ。新らしい生活を獨りでするのに躓くのを恐れて何が出來る。もう力にも倦きた。その力が何んであるかを知るのが肝要なんだ。明日から。今夜から。今から」

電車の往來もなくなつた眞夜中のボストンの街を、風に吹きまくられながら、彼は、齒を嚙みしめて歩きつゞ

けた。

五

その冬の或る日曜日の夕方だつた。

彼はマーグレットを連れてＰ夫人の家に急いでゐた。

Ｐはマァギイを眼睛程愛してゐたが、夫人は土曜から日曜にかけて泊りにやることだけしか許さなかつた。その送り迎へを彼が引受けるやうになつたのは、三箇月も前からの事だつた。その間に彼は夫人と唯ならぬ關係を結んでしまつてゐた。

それは、Ｋと支那料理屋で物を食べてから間もない、十月初めの日曜日の晩の出來事だつた。夫人はいつものやうに彼の歸りを引きとめて色々ともてなしをした。いつも非常に神經質な夫人はその夜に限つてしとやかに落着いてゐた。三十になるかならない小柄な彼女が、頸もとまで黑い衣物を着てゐるのが、非常につゝましやかに美しく見えた。卵形の顏立で、素直に筋の通つた鼻の先きから、折れ返つたやうな小さく引きしまつた厚手の唇にかけての線は、實際男の心を肉的に引きつける力を持つてゐた。又その手は米國人には珍らしく整つてゐた。彼女の手を見た人は、小さな靴の中に包まれた足の形を想像せずにゐられなかつた。そんなに肉的な道具立てを備へながら、夫人には非常に冷やかな所があるらしく見えた。それが一層男の心をあせらす力となつてゐた。彼はこの夫人を見ると、何故Ｐがこの人から別れたのかを訝つた。

彼が立たうとするのを夫人は幾度か引きとめた。彼は段々不思議な不安を感じ始めた。極く普通な事柄を二人は平氣らしい顏をして話し合ひながら、互に憎み合ひ、引寄せ合つてゐるのを彼は氣附いた。動かしてはならな

いと思ふ衝動が、どつと彼を襲つて來る事もあつた。彼は自分を引き締めようとする努力の爲めに妙にぎごちなくなつて體中が充血して來た。彼は幾度か立つて部屋の中を力強く歩きながら、少し惡戯者らしい眼付をしてそれを見送る夫人と會話を取りかはした。哀れな未經驗者なる彼は、知らない中に、夫人のかけた陷穽に段々と近づいて行つた。

「あなたは妾の立場がつらいものだとはお思ひにならない」

無表情な聲で夫人はかういつた。

「思ひます」

彼の答へた聲はどす黒く震へてゐた。恐ろしい暫くの沈默の後に、

「お思ひになるわね」

といひながら、突然椅子から立上つて夫人は彼の立つてる方に近づいて來た。彼は何もかも知つてゐた。バロの妻に對してヨセフがしたやうな潔い態度を取るべき時が來てゐるのを十分知つてゐた。然し知つてるだけだつた。彼の全身の血は彼を憐れむやうに、勵ますやうに沸き立つた。彼はよろ〳〵とよろけた――而してそれが思ひもかけず夫人の方に。しまつたと思つて立直らうとすると又そつちに引きつけられた。夫人と彼とが、どつちからともなく身を近づけた次ぎの瞬間に、彼はあらん限りの力を籠めて、たゝきつけるやうに夫人を床の上に突つ放してゐた。

眼の前は眞暗だつた。自分に呆れ果てつゝ、彼は、息苦しくよろけながら、戸があると思ふ方へ歩いて行つたが、そこに倒れてゐる夫人を危く踏みつけようとしてよける拍子に自分も床の上にどうと倒れてしまつた。彼は倒れたまゝ怒りと恥とにふるへて、野獸に備へるやうな身構へをした。彼の眼の前は眞暗だつた。（眞赤だつた

ともいへる）彼の耳が聽覺を回復してから始めて聞いたものは、痛ましい夫人の啜泣きの聲だつた。

深い悲しみが彼の腹のどん底からも湧き上つた。滿たされない力が一齊に泣き叫んだ。彼はもう我れを忘れてゐた。溺れるものが手がゝりを求めるやうに、彼の手はそこいらをわな〳〵と無闇に尋ね廻つた。火のやうな夫人の手がさはつた。彼はそれを摧けるやうに摑んだ。その後を彼は知らない。

彼は、雪の上を、マーグレットの手を引いて步きながら、その時以來今日までの事を思ひめぐらした。彼は本當に夫人を愛してはゐないのだ。夫人も彼を性格的には愛してゐないのだ。Pが外國人を選んで共同生活をしてゐる事について、Kのいつた言葉などが思ひ出された。それはPの性的生活の祕密を保障する爲めには同國人を寄留さす事が不利益だからというたのだつた。彼は同じ理由をP夫人にあてはめて考へたりした。そんな屈辱を思ふと彼は夫人を踏み殺しても飽き足りなかつた。それにも係らず、土曜日が來ると、彼はおめ〳〵とマーグレットを迎へる爲めに夫人の家に出かけて行くのだつた。日曜日に受ける苦い悲しい後味は月曜日の堅い覺悟と變るけれども、それが土曜日に近づくに從つておぞましくも薄らいで行つた。

第一彼はこの事をPに告白せねばならぬ事を知つてゐた。Pの祕密主義を不快に思つた彼はPに對して祕密を持つべき言ひ開きがないと思つた。けれども彼は今日までそれをせずにゐた。

今日こそと彼は可憐な顏をしたマーグレットを見返りながら思ひこんだ。何んにも知らない少女は緋の外套に白狐の襟卷をし、同じ毛のボアに兩手をさしこんで、長脚絆をはいた小さな脚を豆々しく働かしてゐた。然しその顏の何處かには、不幸な結婚が生んだ不幸な烙印が誤たず押されてゐるやうに見えた。この小さい子は父と母との祕密を知る事なしに生長するかも知れない。然しこの恐ろしい祕密が祕密として終ると誰が保證する事が出來よう。自然は道を踏み外さぬ人々の思ふほど寬大ではない。それを思ふと彼は切られるやうな苦痛を感じた。

彼は今まで自分が力量を感じ、熱意を感じ得る所では、どんな犧牲でも平氣で拂はせて澄してゐた。然し出來心のために、一人の人間の一生を暗くすると思ふと、彼は少女のやうに臆病だつた。

マーグレットは、ちよこ〳〵と彼の歩度におくれまいとして、顏を赤くしながら歩いてゐた。惡戯が激しいだけに、おとなしい時のその子の顏は可憐だつた。彼はひとりでに涙ぐんだ。

「マァギイ、あなたはパヽが好きか、マヽが好きか」

彼はやさしく尋ねて見た。

「みんな嫌ひよ」

「何故」

「何故でもみんな嫌ひよ」

確信してゐるやうに小さな貴女はかう答へた。「皆んなが祕密を持つて妾をどけものにしてゐるから」彼はさう答へられたのと同じ感じでそれを聞いた。クリスマス前の寒い雪道を、衣服だけはきらびやかに着飾らせられて、小さな歩みをこの子は一體何處に運ばうとするのだらう。感じの深い彼の眼の前には、果てもない雪の廣野の眞中に、一點の汚點のやうに、かじかんだ手を口にあてゝ途方に暮れてゐる子供が見えるやうだつた。

彼は思はずマーグレットを抱き上げて歩いた。

やがて彼はP夫人の家の戸口に立つて、抱いてるマーグレットに呼鈴を押さした。彼の耳に親しいP夫人の靴音が近づいたと思ふと、戸が音もなく内に開いた。

「まあだつこして下すつたの」

といひながら、夫人は少女を荷物かなんぞのやうに彼の手から受取る間にも、眼を彼から離さうとはしなかつ

た。その眼は一週間の待遠しさを濃厚に語つてゐた。

彼は怒つた。彼はそのまゝ歸つてしまはうとした。然し夫人の眼は彼の弱點のどん底を射ぬいてゐた。彼は、夫人の眼つきが命令するまゝに、絲で操られるやうにおぞましくも、門口を潜つた。

乳母がマーグレットを寢かしに二階に連れていつてしまふと、直ぐ夫人は彼に近々と寄つて肩に手をかけた。

「あなたは妾を嫌ひ始めたのね」

夫人の眼は險しく彼の眼を射た。彼はその時「然り」を答へなければならないのを知つてゐた。然し、實際は彼も嫉妬するらしい顏つきをして、

「あなたこそ僕を嫌つてるんだ」

と云ひ返してゐた。その行きつく先きは知れてゐた。二人とも虛言のつき合ひだといふ事は萬々承知しながら、互に嫌つてゐるのではないと證明し合つて、禁斷の木の果を敵同志の內から盜み取るのだ。

彼の內部の爭闘は激しかつた。然し敵人の門を潜つた以上、それも一つの作爲であるのを苦々しく彼は心の隅に同時に感じてゐた。彼の肩に置かれた夫人の手は、彼が始めて知つた女の手の强味をもつて、彼の心には關はずに、彼の肉をどん〳〵目覺ましていつた。

その夜九時過ぎにAがPの家に歸つて見ると、Pの所に來客があつた。それはPの所によく話に來るボストンの醫師で、ホヰットマン會の會員だつた。ホヰットマン會とは老詩人の死後その愛讀者が組織した會で、米國の諸州に小さいながら堅い團體を作つてゐた。その會員には殊に婦人が多いと、彼はホヰットマン崇拜者なるPから聞かされた事があつた。醫師といふのは心の廣さうな、品のいゝ、健康な、白髮の老人だつた。煙草をゆるく燻らしながら、白い髭と髯を動かしてゆつくり物をいふ有様は長閑だつた。Pも打ちくつろいで始終微笑を浮べ

ながら、話の相槌をうつてゐた。彼が書齋に這入ると、老人はPよりも先きに握手を求めて、自分の側に坐れといつた。

「いつ見てもいゝのは青年だ。こつちまで若いやうな心持になる。然し」

とPに向けてゐた顏を彼の方に向けて、

「今夜は如何したといふんだ。君の顏色は大層惡い。然しホヰットマンにでも『默つて、考へる』といふやうな時もあつたんぢや。大きく、……大きく人生を見んぢや駄目ですよ」

さういつてから、老人はしかけてゐた話の續きを靜かにつないだ。

彼は、隣りの屋根の雪が星あかりで燐のやうに光るのを、窓を通して茫然と見つめてゐた。

「そこでY氏の夫人が俺にいふには……お前はたしかあの奧さんを知つてゐたな。あれでもう三十五ぢやさうな。若う見える、美しいで……俺にいふには、俺が好もしいのぢやさうな。人間一生の間にしんぞ好もしいと思ふはさう澤山はをらん。好もしい人を見かけたら、その人と戀人だけに親しまんぢや、この世に生きる甲斐はない。心と心との喜びに比べれば、どんな社會の秩序も制度もたはけた干からびた邪魔物ぢや。愛をさまたげるものゝあるべき謂れはないと思ふ、どうぢやといふのだ。相違のない事だ。その通りと俺がいふと、直ぐ相談が出來てな、二人で近くの海岸に旅行してからに、夫婦よりも親しく一晩過ごした。その翌日二人はこの世の中がな、一段輝くやうに思うて快く別れたよ。滅多にない事だが面白からうが」

Pは快げにから〳〵と笑つた。老人は後學の爲めにしろといはんばかりに晴れやかにAを顧みた。

老人はゆつたりと落着いて色々な事をPと話し合つてゐた。然しいら〳〵した彼の頭にはこの話以外の話はまるで聞き取れなかつた。今の話を聞いてPの快げに笑つた顏の印象は彼に勇氣を與へた。云ふべき時は今夜の外

にないと彼は思つた。彼は席にゐたゝまれない程昂奮して來た。

老人が元氣らしく歸つていつたのは遲かつた。Ｐは可なり疲れて見えた。然し緊張し切つた彼の顏は、この部屋の今までの呑氣な空氣を一掃してゐた。Ｐは老人を玄關まで送り出して、歸つて來ると、已むを得ず書架からホヰットマンの詩集をぬいた――毎日曜日にＰが彼に朗讀して聞かせるのが習慣になつてゐたから。

「今夜はおそいから少しだけ讀むよ」

さういつてＰはどつかと燃えかすれたストーヴの前に疲れたらしく腰を下ろした。客に對して愛想のいゝＰはやゝともすると家人には澁い顏を見せた。今までのＰの快活さは影を隱さうとしてゐた。

「僕今夜あなたに少し折り入つて告白して置く事があるんです」

彼は立つたまゝでさういつた。Ｐは楔形の髯に埋つた顎を引いて、禿げ上つた廣い額を大きく見せながら、上目づかひに眼鏡の上から彼を見た。而して默つたまゝＡを促すやうにして、顏を苦ましてゐた、面倒な話を聞くには疲れ過ぎてゐると云ひさうに。彼は已むを得ず言葉をつがなければならなくなつた。

「僕はＰ夫人と友達以上の關係を結んでゐるのです」

申譯などをいかに長々とした所が何んにもならないと思つた彼は、一氣にきつぱりとかういつた。と同時に彼の心は自分でも物凄い程しんと鎭まるのを覺えた。

Ｐは、彼の言葉か、自分の耳かゞ信じられないやうに、暫くしてから「ふむ」と云つたが、被告を睨める檢事の眼つきでぢつと彼の顏を見入つてゐた。Ａは悠然としてＰを見返した。

やゝ暫くしてから漸く彼の言葉を頭に入れたやうに、Ｐは突然すつくと立上つた。二人は大きなテーブルを中に置いて立ちながら向ひ合つた。Ａの切り出した言葉が餘り端的だつたので、今までゞもいやに緊張してゐた

氣分は、ゆるめやうがなくなつて、Pも思はず激しい短い言葉を求めねばならなかつた。

「何日からだ」

Pは簡潔にかう聞き糺した。

「あなたがマァギイの送り迎へを僕にさせた時から」

彼も短く答へた。Pは考へるやうに俯向いた。而して考へこむ時にはいつでもする癖を出して、下唇をかみしめて、手を後ろに廻して握り合せながら、俯向いたまゝ、眞蒼になつて、窓際を二度三度往來した。而してやがて立止るときつと顔を上げてAを睨みながら、衣嚢から光つたものを出してテーブルの上に置いた。ピストルだつた。Aは格別驚かなかつた。

「P夫人は私の妻としての籍をまだ脱してゐない事を君は知つてゐるんだな」

「知つてゐる」

Pは再び「ふむ」といつて、ちらつと彼を睨めつけた。彼は少しも騒がないで立つてゐた。

「そんな事をいふ權利が貴様の何處にある」Aはさう思つた。彼は自分の力が何んであるかを何んとなく感じた。「是れだ。是れでぐんぐん進んで行くのだ」さう彼は、切迫したこの場の體にも係らず餘裕をもつて考へた。

「どつちから始めた事だ」

沈默がまた續いた。

Pは、長い躊躇の末に、聞いてはならない、然し聞かずには置けないこの問題に觸れて來た。

「僕だ」

彼は咄嗟に答へた。Pは滿足と不滿足とを同時にしたゝか飲みこませられたらしかつた――妻が主動者でない

爲めに滿足を、而して皮膚の黃色い猿のやうな劣等人種の挑みに敗けた不滿足を。――その顏はAに不時な笑ひの衝動を强ひる程澁かつた。

若い時俳優になる積りだつたといふPは、突然ピストルを取上げて彼につきつけた。

「二挺のピストルは二人の間の決鬪を可能にしたらう。一つ足りないのは君の爲めに僥倖だ。今から君が取るべき手續きは君が承知してゐる筈だ。左樣なら」

さう云ひ放つてPはピストルをぶら下げたまゝ、憎々しげに下唇をかみしめてAを睨みつけた。

Aは默つたまゝPの書齋を出た。打出して見ると總てはあまりに簡單であまりに平凡だつた。

然し彼の心の中では悔恨と誇りとが烈しく鬪つてゐた。彼は自分の部屋に歸つて僅かばかりの所有品をトランクにつめ込んで錠を下ろした。

彼はすぐに又寒い戶外に出た。外套の襟を立てゝ、靴の下にきゆつ〳〵ときしむ澱粉のやうな雪を踏みしめながら步いた。先刻まで晴れてゐた空は何時の間にか曇つて、思ひ出したやうにちらほらと白いものが降つてゐた。

遠い街燈の霞んでゐる下を、たつた一人の男がよぼ〳〵と步いてゆくのが見えた。

「哀れなマーグレットの前には、頭を地につけて詫びても足らない。俺は何んとかしてその埋合せをする」彼はその孤獨な人影を見ながら、小さな少女に大きなものを感じてさう思つた。

彼はやがて、Kが置いて貰つてゐるB敎授の家に來た。玄關の直ぐ右にあるKの部屋からだけ光が漏れてゐた。

彼は近寄つて外部から窓の扉を敲いた。と、矢庭に日本手拭で後鉢卷をしたKが顏を出した。

「敲き方で君だなと思つたよ。何んでこんなにおそくやつて來たんだ」

「まあ入れてくれ」

Kの部屋は新聞と雑誌で足の踏み立て場もない程散らかつてゐた。煖爐は感心に勢よく燃えてゐた。その側にある小さな机の上には書きかけの原稿が可なり堆く積んであつた。

「おい紙とペンを貸してくれ給へな」

「さ、一本しかないから之を使へ。紙も原稿紙だけだ。……一體如何したんだ、いやに君は無氣になつてゐるぞ」

Aは何もかも一埓明いたその滿足で、少し快活な顏になつてゐた。

「まあ書くから讀んでゐ給へ」

彼はペンを執つてP夫人にあてる手紙を書き出した。それには簡單に、彼がPに總てを打明けて、その家を出なければならぬやうになつた事と、夫人とは今後交際を絶つ事が二人の爲めにもマァギイの爲めにも大切であると認めた。Kは鼻眼鏡をなほしながら、突つ込むやうに顏を近寄せて彼の書き卸す字を拾つて行つた。

Aが自分の署名をし終ると、Kはいつもの皮肉な然し正しい笑ひを顏に浮べた。

「僕の失敗した所に君は成功したんだね。だから君は隅に置けないといふんだ。然しこんな手紙をやるには當らないこつた。大いに醜行を續けろよ。馬鹿正直な」

「正直なものか。僕は馬鹿だ。馬鹿だ。馬鹿だ」

彼は激しく自分の顳顬をたゝきながらかうなつた。Kは彼の心を推しかねるやうにけゞんな顏をして彼を見やつてゐた。

手紙を投函した彼がKの部屋に駈けこんで來ると、Kは、

「これから君の居所はどうする積りだ」

と聞いた。彼はKの所に置いて貰ひたいのだといつた。それから二人の間に談判が開始された。

「少し勉强の妨げにはなるが置いてもいゝさ。然しいくら出す」

「部屋代だけ三弗ぢやどうだ」

「金のある癖にしみつたれた事をいふなよ。五弗よこし給へ。こゝの主人は學者だけに呑氣だが、細君と來ては鼻持がならないから、君を置くにも交渉に骨が折れるよ。煖爐だつて石炭にやかましいから、晝間は寒くても燃かずに我慢してゐて、奴等が寢てしまふとこの通り燃くのだ。五弗出し給へ」

Kの借金するのは有名なものだつた。然しきちんと借金を返すのも有名なものだつた。Kは總ての事を金で見積らなければ承知しなかつた。そこにKの主義に對する質實さがよく見えた。

「それぢや細君懷柔費に二弗だけ奮發しよう」

彼は笑ひながらいつてしまつた。

「Agreed! そこで僕は勉强を始めるから、君は顏の見えない所にゐてくれ給へ。これを讀んだか」

さういつて新聞の切抜きを彼に渡すとKは窓から氷柱を二三本折つて來て、手拭に巻きこんで鉢卷をし直した。降りまさる雪は、總ての音を空中から奪つては地面の中に埋めていつた。その寂寞の中で、大學の大時計が、時の前後を截斷してはつきりと一點を打つた。

部屋の中ではKのペンを走らせる音が、がり〳〵とかすかに聞こえてゐた。Aはストーヴの傍に椅子をよせて、Kから受取つたロンドン・タイムスに發表したトルストイの平和論を讀み進んでゐた。讀んで行くうちに、彼は、自分が大事のやうに考へて今まで沒頭し切つてゐた事件が、彼の全努力を必要とするものであるにも係らず、小つぽけな波瀾に過ぎないと思つた。トルストイが達した水準にまで行くだけにも、彼には見極められない程の遠さがあつた。然し兎に角あの老年な思想家が、世界を向うに廻すやうな意氣組で自信を述べてゐるその思ひ入

つた態度はAを勵ました。感激から感激に飛躍してゆく彼の心はその特異な眼の中に炭火のやうに閃いた。彼の脣は折々痙攣的に震へた。

それは乃木軍とステッセル軍とが、旅順要塞の内外に肉迫して、國家の存亡をそこに集めて戰つてゐたその夜の一つであつた。新らしい次ぎの時代を生み出す陣痛のやうな、重い、鈍い、形のない自然の力がこの小さな部屋には濃く立籠つてゐた。

夜は靜かに更けた。

六

Kと同居して以來、彼の上には、彼に當然來べきであつた、然し彼には一々意外な色々な運命がまくし上つた。或る日本の雜誌に屢々發表した彼の論文は、彼が思ひ設けた以上の恐惶を家族や親戚の間に起して、とう／＼學費の杜絶を彼に結果した。兩親と自分との間の時代の隔りが引起すべき思想の隔りを、彼は十分に察してゐたから、兩親に對しては怒りを感ずる代りに、深い憐れみを感じた。今まで平氣な顏で學費を受けてゐた自分を卑しみさへした。彼は家族や親戚との文通を絶つてしまつた。

然し自活といふ事は彼が空に考へてゐたやうな生優しいものではなかつた。學科の出席時間を極端に減じて、彼はM教授の研究室の助手として金を取らねばならなくなつた。然しそれは彼に三つのいゝ結果を持つて來た。一つは自分の生活全部に主となつた事。二つは自分と周圍とに本當の關係が成立つた事。三つは圖書館で働いてゐるM教授の令孃の姉なるジュリヤといふ畫家と研究室で一緒に働く事。

聖フランシスの傳を讀んで、聖者がその父に衣服を投げ返して神に還つたといふ條に來ると、彼はいつでも物

足りなく思つた。命まで投げ返すのでなければ、人はその親から本當に獨立する事が出來ないからだ。然し親から思想に於て離れた以上は、他の部分に於ても出來るだけ離れなければならない。せめてはそれだけでもしなければならないと思ひながら、彼はそのまゝに問題を放置してゐた。それが遂に段落を告げたのだ。それは彼の心を活々とさせた。骨肉を引きちぎる例へやうのない淋しさの中から、彼の自由は逞しく羽を擴げた。彼は自分の若さに任せて、思ふまゝに振舞つた。彼は放たれた小鳥のやうに、恣まゝに米國の雜誌新聞の上で舞ひ躍つた。始めは商賣上の打算と興味から彼の投書を歡迎した出版業者も、彼の放圖のない言説に對しては相當の警戒をしなければならない事を發見した。而して彼の主張を或る程度まで鈍らせる事を要求した。彼は頑として應じなかつた。かくて彼の收入の減じて行くと共に、活動の範圍は見る／＼狹められた。大學の日本人會は、彼とKとに除名を通告した。ある教授は、彼の才能を認めながら聽講を拒んだ。彼は已むを得ず、狹められたゞけ深まつて行つた。彼は、隱れてゞなければ、這入つてならない幾軒かの家を知るやうになつた。それは多く地の底か空の上にあつた。地の底では藥品が調合された。空の上では活字が激しい思想をまき散らす爲めに働いた。そこに住む人は狂暴だつた。然しその涙腺は普通の人より大きかつた。物の釣合ひといふ事を知らなかつた。然し一番重いものと一番輕いものゝ何んであるかを知つてゐた。さう彼には思へた。彼は自分の心に最も近い氣圍氣をそこに見出したのだ。

然し彼の生活はみじめだつた。Kは寒さのつのると共に半病人になつて、屢々喀血した。M教授の研究室に行く前に、彼は拭掃除から皿洗ひまでKのするだけの事を代つてしなければならない事が幾度もあつた。彼は洗ひ物の中から、精巧なシャンペーンのコップを取り出して、細い把手をびし／＼と折りくだいて、床の上に粉微塵にたゝきつけたりした。Kの外出しない時は、その外套を借着しなければならない程貧しくもなつてゐた。瘦せ

たKの外套は彼の背中と脇の下とをつねるやうにした。衣食に充ち足つた人の知らない、下らない然し深い悲しみが彼を涙ぐますやうな事があつた。生來の貧窮に慣れなかつた彼は、金を取る術に疎く、金を捨てる道に明るかつた。「若いサン・シモン」とKは彼を諢名した。然しサン・シモンは生涯に自分の力を如何使ふべきかを知つてゐた。然し彼はまだそれを知らなかつた。

この荒んだ殺風景な彼の生活の間に、彼をまつしぐらに牽き附けるものが一つあつた。それはM教授の研究室だつた。北向きに大きなガラス窓の篏つた廣やかな部屋はスチームで冬でも春のやうだつた。部屋のそこゝには中世紀の文化を代表する彫像、浮彫、柱冠、繪畫の原物や複製が飾られてゐて、棚の上には、ビオラ・ル・ドュークを始めゴシック美術史の大家の著書とポートフオリオが所狭く置きならべてあつた。その一隅を衝立で圍つてM教授の机があつた。ゴール人の血を潤澤に持つてるらしい小肥りな七十四のM教授は、そこにどつかと坐りこんで、二重にかけた眼鏡越しに古文書を漁つてゐた。窓に沿うて長く据ゑられた卓子には四五人の助手が椅子を竝べて各自の業務にいそしんでゐた。彼はこの研究室の空氣をなつかしんだ。老教授を更に愛した。然し彼の隣りにジュリヤが座を占めてゐなかつたら、この研究室も彼に取つては一箇のあたりまへな學究的城廓に過ぎなかつたらう。

彼が第十三世紀に於ける獨立市と寺院建築との關係を研究してゐる側には、ジュリヤがコンパスや尺度を使つて、彫刻物の綿密な縮寫圖を作つてゐた。仕事をしながら小聲で彼女の歌ふ感傷的な小唄は、絶えず彼の耳から彼の心に清涼劑を送つてよこした。

彼とジュリヤが本當に親しく交際し出したのは、正月休暇中の或る晴れた日に、M教授が二人の娘と彼とを伴つてコンコードに遊んだ時からだつた。教授とジュリヤとは橇の前座に坐り、彼と妹娘のフロラとは後座に坐つた。

風もなく、日も華やかに照りながら、耳も鼻も押しつぶしさうに寒さのひしひしと逼る、恰好な櫂日和で、敎授の操る逞しい馬は、停留所に停つては走る電車を追ひ拔いて、しなやかな鋼鐵のやうな脚を輕々と動かした。わざと何も被らないジュリヤの少し赤味を帶びた金髮は、引つ張られるやうに後ろに靡いて、形のいゝ耳朶は珊瑚色に赤らんでゐた。右の手を父の肩に廻して、疎くなつた父の耳許に口をよせて、何か云つて二人でどつと笑ふかと思ふと、高い美しい聲でシェレーの小詩などを心ゆくまで歌つたりした。而して時々後ろを振りかへつて、彼に、好意に溢れた、少しいたづらしい、完全に美しい流眄を送つてよこすことも忘れなかつた。それが少しも迎情的ではなかつた。そこには藝術家の有つ、小鳥の快活さがあると彼は思つた。彼の悒鬱な心は火を見つけたやうにそれに暖たまらうとした。彼の注意はいつともなくジュリヤの耳の後ろの生え際に引かれてゐた。

臘虎の帽子と襟卷をしたフロラは、正面に顏を向けたまゝ、靜かな眼を擧げて森や野の景色を眺めてゐた。彼はジュリヤに心を牽かれながらも、時々フロラの橫顏を盜み見ないではゐられなかつた。それほど彼女の顏には可憐な所があつた。深い嘆美と愛着とを受くべき身でありながら、何かの魔障の爲めにそれを受けられないでゐる、そんな可憐さがあると彼は思つた。フロラは殆んど彼に話しかけなかつた。彼もフロラには何も云はなかつた。然し二人の間には、少しのぎごちない無さもかけ隔てもなかつた。何時でも話せるから話さないまでだといふ親しみが感ぜられた。

小さな村が見えた。その入口の、三叉に道の分れた所に、上衣をぬいだまゝ銃を腰にあてがつた男の小さな銅像が立つてゐた。

「レキシングトン」

眞直に手を延ばして村をさしながらジュリヤは彼の方に振向いた。

「御存じね獨立戰爭の火蓋を切つた所。フロラ、あなた何故もつとAさんにお話してあげないの。困るわね。いえ〳〵私今度そつちに乘るわ。プロフェスサーM、どうぞ橇をおとめ下さい」

さう戯談らしい口調で父に呼びかけて、橇をとめて貰つてジュリヤとフロラとは座を乘りかはつた。ジュリヤは「寒い寒い」といひながら、ぴつたりと彼に寄添つて座をしめた。厚い膝掛けの下からは、血ぶとりな彼女の體の暖味が遠慮なく彼に傳はつた。

「さあ澤山々々お話しませう、普段は仕事が忙しいもんだからお隣り同志な癖に異邦人のやうでしたものね。あなたの御仕事はお進みになつて？」

ジュリヤはもう道の案内なぞはしなかつた。

「えゝ、少しは。今ライムの寺院をやつてゐます」

「ライム！　ライム！」

ジュリヤは喜び勇んで手を打合せた。

「ライムのマリヤ、聖ジョセフ、シバの女王、聖母堂の柱冠！……佛蘭西人に嫉妬を燒かせる程賞めたつて私はまだ云ひ足りない。行つて御覽なさい。あすこのマリヤの像一つで人は羅馬教徒になつてしまひます。何んといふ信仰でせう。何んといふ美意識でせう。何んといふ獨創と自由でせう。亞米利加にあるものは自由だけです……金腐れの自由」

「僕の國にはそんな自由すらないんですよ」

ジュリヤの顏は眞面目になつた。

「あなたの顏を見てゐると私は始終悲しくされます。大學にお國の留學生は澤山ゐますけれども、あなた見たい

な、考へ深い顏の方は一人もゐませんわ。何か御心配でもおありになるの。今あなたの御國はほんとに大變ですわね」

「さうです……色々な意味で」

「私あなたのお書きになるものは澤山讀みましてよ。あなたは隨分亂暴な方ね。私思つたまゝしか云へないのですもの」

「今にあなたの所の研究室からも追ひ出されるんです」

彼は豫覺を以てかう云つた。彼はそれをつらく思つた。

「反對に、反對に、」

彼女は熱意をこめて彼の手をしつかりと握つた。

「私共の父は大變あなたに感心してをりますよ。あなたにはいゝ素質が潤澤におありになるつて。けれども少し亂暴すぎるつて。而してあなたのして下さる仕事は大變父の爲めになるんですの。大學にはあなたの聽講を斷つた教授があるんですつてね。私は大學の爲めに恥かしく思ひますわ。ほんとに。……あ、この上はスリーピー・ホローの墓地です。エマアソンやホーソーンの墓のある所です。そら、あすこに森が見えるでせう。まあ綺麗、綺麗、あの森が雪に落す紫色の影は如何(どう)です。こんな景色を見ると私父の手傳ひをして模寫なんぞするのが呪(のろ)はれますわ。畫が描きたいなあ。あの奥の方にワルデンがあるんです。……ソーローもあの理解のいゝ眼でこの景色を見たんでせうね。ソーローは少し氣狂ひじみてるけれどもエマアソンより偉(えら)いとはお思ひにならない？　エマアソンは始終外界からばかり自分を見てゐますわね。そら、あすこで道が二つに分れてるでせう。その右の方に見えるのが鼻の大きい哲學者の家です。さういへば、エマアソンの顏はほんとに鼻と口ばかり見たいね」

彼は思はずジュリヤの饒舌にほゝゑんでゐた。ジュリヤは彼の微笑をぢつと大きな眼を開いて見詰めてゐたが、彼が笑ひやむと、

「もつと、もつと、もつと、……も一度笑つて見せて頂戴。さあ、よ」

とすねるやうに云つて彼の手をふり動かした。彼の心はいつの間にか心から快活にされてゐた。彼は又微笑んだ。

「何故あなたは始終その顔をしていらつしやらないの。そんないゝ笑顔を持ちながら」

ジュリヤの大きな眼は躍るやうに輝いて彼を熟視した……彼が子供のやうにはにかんで眼を伏せてしまつてもまだ。

歸途にもジュリヤは彼と同座した。途中まで相變らず元氣だつた彼女は、如何してか不圖默つてしまつた。夕暮の催すにつれて募つて來た風は眞向から吹きつけた。ジュリヤは外套にしまつてゐた黒の肩掛けで頭を包んだ。それが間顏で色白の彼女を恐ろしく美しく見せた。フロラの場合とちがつて、彼はジュリヤの沈默をぎごちなく思つた。何か知ら困る事でも起りさうな不安が暫く續いた。

橋がM教授の家近く來た時、ジュリヤは突然彼の耳近く顏をよせた。

「フロラは心からあなたを愛してゐるんですよ。御存じ？　あの子はほんとに神のやうな子ですわね。あんなにおとなしい癖に隨分進歩した思想を取り入れる事も怠つてはゐないんですよ」

彼の心は暗かつた。彼は何んとも答へなかつた。

「何しろ私達はあなたにほんとに御同情申してゐる事を信じて下さいましよ。決して〳〵どんな事があつても失望なさつてはいけませんよ。私（私達は私に變つてゐた）はあなたに伺つて敎へられる事の澤山あるのを知つてます

わ。どうぞ私にだけはあなたもつとお饒舌になつて下さいまし。よござんすか。眞實な心は眞實な心がよつく解りますわ。こんな生溫い自由國にゐるより、私は露西亞のやうな思想と藝術と而して壓制のある國に生れて、思ふ存分ほんとに生きて見たい。あなたが終始あの美しい微笑を湛へていらつしやる時の來るのを、私は神樣……こんな時にこそ使ふ言葉ですわね……神樣に祈りますわ」

ジュリヤの眼には涙があつた。あゝ何年、彼はこんな愛に充ち滿ちた言葉に潤はずに過ごして來たらう。身を引きしめるやうな嬉しい悲しさが彼の胸にふさがつて來た。急に暗黑から光明に引出されたやうに心は眩しかつた。彼は生れて以來嘗て知らなかつた不思議な感激に戰いてゐた。

七

Aは醉ひしれた人のやうになつてM教授の家から歸つて來た。Kは仕事を終つて、パンを肴に葡萄酒を飲んでゐる所だつた。彼を見ると、

「やあ、もう飲つて來たな。然しいゝだらう一杯つきあへよ」

といつて、飲み乾したコップを彼にさした。Aはいきなり机の上に腰をかけて、帽子を部屋の隅に放りなげた。而してチョッキのボタンを外して脚を開けるだけ開いて、手を頭の上で振り廻した。その頰には上氣したやうに若い血が漲つてゐた。

「そんな酒が飲めるか。僕は酒を飲まないで今日は醉つてるんだ。醉つてゝ正氣なんだ。僕は皆んな解つた。愛だK！　愛だつたんだ僕が探してゐたのは。僕は今日から生れ代る事が出來る。今日こそ僕の爲めに祝杯を擧げてくれ。僕は乞食の子一人の爲めにも死んで見せる、屹度。サン・シモンと呼ぶなら呼んで見ろ。もうそんな名に

びく／＼はしないから。サン・シモンのした位な事は僕にだつて出來る。K！　K！　僕は君に何をすればいゝんだ。云つてくれ、云つてくれ。僕は何んでもする、何んでもする。何かさせてくれ」

さういつて彼は叫んだ。

さすがにKも驚いた樣子をした。而して、暫くしてから皮肉に落着いて、

「一體如何したと云ふんだい」

とナイフで昨日のらしいパンに切り込みながら尋ねた。

Aは有頂天になつてゐた。彼の眼には今總てのものが餘りに美しかつた。而して餘りに善かつた。彼はこゝに來てからも、何一つ纏まつた仕事とてはしてゐない癖に、而してやゝもすれば已み難い内部の要求に促されて、思ひ切つた亂暴を働いて來てゐる癖に、そんな事は忘れ果てゝ仕舞つたやうに、氣が晴れ／＼してゐた。生々した新しい力が急に附け加へられて、而もそれが少しも彼の重荷にはなつてゐない事を感じた。彼の生活はこの日から始めてはじまるやうに思へた。色々の目論見や熱意が胸の中で湧き返つた。彼の顏は實際耀いてゐた。まるで酒を飲み過ごした無邪氣な子供のやうだつた。彼はジュリヤの云つた「いゝ笑顏」を惜しげもなくKに見せた。

「どうもしはしないけれども、どうかしてしまつたんだ。僕は今日始めて僕がどれ程善良な親切な人間だかといふことが判つたんだ……さう云つてはまだ云ひ足りないな。僕はねえ……何しろ君はもつと健康な、心から樂しい人間にならなけりや駄目だよ。見給へ、この世界を。矢張りこの世界は完全なんだ。僕は自分を未成品だと思つてゐた。何か足りない所があると思つてゐた。その通りだつた。さうしたらそれが今日見附かつたんだ。……あゝK！　僕は君に何をすればいゝんだ。何んでもいゝからさせてくれ。僕はもうこゝにかうぢつとしてはゐられないんだ。この手はこんなに熱いんだよ」

さう云つてAはKに近づいてKの手を握らうとした。Kは馬鹿々々しさうに、又薄汚らしいと云ふやうに、Aの手先きを振り拂つて身をかはした。而してその皮肉な眼でじろりと睨むやうにAを見据ゑた。而して、

「させろといふならさせてやらうさ。今日君の所に手紙が來てね。女文字だつたから一寸好奇心を出して開封したら、見ろ、P夫人から難題が來てゐらあ。そんなに手が痒ければ、しこたま働いて、この問題を片付けて見るがいゝ」

といひながら小さな封筒を彼の手に渡した。P夫人と聞くと、忘れかけてゐた過去の惡夢が眞暗に彼の澄み切つた心を塞いでしまつた。彼は物をも云はずに、Kのさし出す手紙を受取つて、ぢつと讀んだ。讀んでゐる中に彼の手はぴり〳〵と震へ出した。今まで醉つたやうに紅かつた彼の頰は見る〳〵血の氣を失つてKよりも靑くなつた　その手紙によるとP夫人は懷姙してゐるといふのだ。

Kは彼の變りやうの激しさを見ながら、又皮肉に笑つて葡萄酒を乾した。

「今日は僕は働くだけ働いたからこれから貴女の所に出かけるんだ。おいサン・シモン。今夜一晩苦しんで見給へ。智慧が出なかつたら明日の朝僕が授けてやるからな。……おいその外套を脫いでくれ。この寒空に出れば又喀血だ。一つ女の面にでも吐きかけてくれよう」

彼はぼんやりしたまゝ外套を脫いでKに渡した。Kの出て行くのをとめようともしなかつた。

彼は自分の夕食の用意もせずにストーヴの前に椅子を引きよせて腰かけた。最高の歡樂から最低の絕望に一氣に追ひこめられた彼は、すつかり打ちくだかれて、どうして自分の本性を支へていゝのか分らなかつた。しびれたやうな彼の頭には、不思議な幻像の斷片が通り過ぎるばかりだつた。

ジュリヤの手だけが夢とも幻ともなく現はれて彼の手を暖く握つた…… 彼はときめいた……彼は部屋を見廻し

た……大きな黒い彼自身の影がはつきり彼の動く通りに動いた……鼻から顎にかけて蠱惑的なP夫人のプロフヒールが見えた……彼は恐れながらもなつかしげにそれを見詰めた……Pの顏の全輪廓が現はれた……彼は思はず椅子から立上つた。而してよろけて壁に身を支へた。而して熱で夢中になつた患者のやうに右手を額に上げて汗を拭くやうなまねをした。……知らない一人の後向きの赤子が……黒い髮の毛に物凄いほど濃く被はれた赤子の後頭が……彼は又壁からよろ〳〵と離れて、元の座に歩みよつて、椅子の背をしつかりと摑んで立つた。……泣く聲が……女の赤子の……彼の母が彼を抱いて……フロラの靜かな悲しげな顏が……彼は恐ろしい事を考へてゐるやうだつた。胸の中は燒けるやうに苦しかつた。彼は椅子に腰を下ろして、苦しさの餘りその背の所に顏を埋めた……彼は躊躇した……或る兇惡な心算を胸に蓄へてP夫人の所に行く彼が……赤子の喉にまかれた紐が……彼の手が紐の一端を捕へた……女の手が他の端を捕へた……頸が見る〳〵縊れて行く……

「あツ」

彼は背から刀を浴せられたやうな聲を立てゝ思はず椅子から飛上つた。床の上に正しく据ゑられた石像のやうに堅くなつて突立つた彼は、兩手を前頭に擧げて髮の毛をむしつたまゝで恐ろしげに四周を見廻した。彼の眼の前で床は高く低く波をうつた。而して床を見つめたまゝ彼は全く放心の狀態に陷つた。

さうしてどの位時間がたつたか知れない。彼が寒さに氣附いて、始めて顏を上げて見た時にはストーヴの火は疾うに消えてゐた。彼の頭はしーんと澄み切つてゐたけれども、何を考へていゝのか全く判らなかつた。彼は先づ身近のものからそろ〳〵と考へていかねばならなかつた。寒いのに氣が附いて見ると外套を着てゐなかつた。外套はKに返したのだ。「Kの事だつたな」と思つて見た。然しさうらしくはなかつた。赤子を殺すんぢやなかつたな……さう彼は無關心に考へた。もう殺してしまつたのだ。恐ろしい事をしたものだ。……段々胸に逼る不安

を感じながら、さう考へはじめた。と、突然ぶちまけたやうに總ての事が明かになつて彼の心に現はれ出た。彼はぎよつとした。然しその澄んだ理性はいやがる彼を引捕へて、無理に一歩々々考へさした。

「お前が基督教徒な以上は意識的に惡いと思ふ事は露程でもしてはならない。お前は金輪際その償ひをする事が出來ないから」

かう云つたスコットと云ふ醫學博士の言葉が、ふと眞先きに思ひ出された。それは彼が去年の夏ある狂癲病院の看護夫をしてゐた時、そのスコット博士といふ患者が自殺する三四日前に彼に云つて聞かせた言葉だつた。

彼はぞつとして奇妙な惡寒を水月のあたりに感じながら、おづ〳〵あたりを見廻した。固より何もそこらにゐやう筈はない。然し彼の身近には何か魂のあるものが默つて立つてゐるやうに思はれた。彼の心の底までを見ぬかうとぎゆつと睨みつけてゐる者があるらしかつた。

彼は右手の指を痙攣的に動かしながら、ストーヴの消え果てた寒い部屋の中を、悒鬱に歩き廻つた。ある時はKの机の前に立ち停つて、その上に堆く積まれた原稿紙をぢつと見入つたり、ある時は椅子に腰かけて靴の紐を神經質に幾度も結び直したりした。彼はさうした狂噪な狀態から、段々淋しさの底に沈んで行つた。而して苦しいヂレンマから遁れ出る道を求めるためにあせりにあせつた。夜は容赦なく更けて行つた。

曉方近くに彼は漸くまとまつた結論に達したと思つた。

「P夫人の懷姙は、夫人自身が責任の大部分を負ふべきだ。夫人の宿したものが彼の子であると誰が保證出來よう。夫人は彼を不幸にした。墮落させた。ジュリヤは彼を幸福にし彼の行くべき道を暗示した。彼は彼女を失ふ事が出來ない。どうしても出來ない。P夫人の我儘な性慾の衝動の犧牲となつて、そのまゝ小さく朽ち果てゝ、ジュリヤを永久に失ふ事は出來ない。彼は利己的かも知れない。然し若い者は利己的である權利を持つてゐる。

P夫人は自分で招いた結果に苦しむがいゝのだ。彼はこの躓きから急いで跳り上らなければならない。夫人のしたい放題にさして置け。彼は夫人に何等の返事をしまい。而してジュリヤにはこの不愉快な自分の過去を祕し通さう！」

彼はこの決心を二度三度心に繰返した。彼はそれでいゝと思つた。同時にいけないと思つた。新しく踏み出した生活が崩れてしまふと思つた。

然し彼の心はジュリヤを離れる事が出來なかつた。どうしてもジュリヤにこんな汚い自分をあらはに見せる勇氣が出て來なかつた。彼は自分を憐れむやうに壁に映つた自分の影を見た。

「弱い奴だ」

暫くして彼はさうつぶやいた。その聲が彼の耳に這入つた。彼の眼からは始めて苦い涙がぢり／＼と頬を傳つて流れ落ちた。

八

かの恐ろしい一夜の翌日、彼が研究室に這入つて行くと、ジュリヤは既に來てゐて、いきなり飛んで來て彼と堅い握手をした。而して驚いた顏をして心配氣に彼を見やりながら云つた。

「またあなたは一晩の中にそんな顏になつてしまつて。私が昨日懸命に創作しておいた顏は何處に置いていらしつたの。昨日のが假面なら、その假面を被つて下さい。今日のが假面なら、そんな假面は捨てゝ下さい。私には醜い顏よりも美しい假面の方がいゝんですもの」

彼はぎよつとしてジュリヤが祕密を知らないのを却つて訝るやうに、その顏を恐る／＼見守つた。ジュリヤの顏

には何んのこだはりもなかつた。明らさまな好意だけが窺はれた。

その二人の間の親しみは日に〳〵加はつた。研究の間でも、ジュリヤの顏が戀しくなつて、彼が隣りに坐つてゐる彼女の方を向くと、申合せたやうに彼女も彼を見やつてゐた。而して二人は溶け合ふやうに微笑んだ。

二人はよくわざと仕事をしつゞけて、教授や助手の歸る後まで居殘つてゐた。而して電燈を灯して椅子を引き寄せながら、歴史や、藝術や、演劇の話などに語り耽つた。ジュリヤはよくフロラの噂をして彼の口うらを引かうとした。姉の妹に對する輕い嫉妬だと思ふと、それが却つてジュリヤをおぼこにして見せた。

彼は時々圖書館に出入するので實際フロラにも度々遇つてゐた。フロラはいつでも靜かな女だつた。姉とちがつてやゝ細面な彼女には、眞中で分けた黒味勝ちな髮がよく似合つた。彼が行くと親切によく世話をしてくれた。然し何處といつて特別に彼がこの處女を引きつけてゐるやうには見えなかつた。たゞ一度こんな事があつた。フロラが彼の爲めに或る書物を探して、それを書棚の高みに見附けた時、フロラでは手が屆かなかつたので、彼がその後ろからのし上つて、左手を輕く彼女の肩に置いて力にしながら、右手を高く延ばすと、突然彼女が後ろに倒れるやうになつて、彼に寄りかゝつて來た。見るとフロラは眞靑だつた。而して眼を上づるやうにして、激しく小刻みに震へてゐた。彼がどうしたのだと聞くと、彼女はさつと紅くなつて、眩暈がしたのだといつた。そんな事があつてからは彼とは握手さへ成るべく避けるやうになつた。若しジュリヤといふものがゐなかつたら、彼はフロラに對して、ジュリヤに對するよりも自然に自由に愛を運んでゐたかも知れない。然しジュリヤによつて愛に眼ざめ、ジュリヤによつて愛に育つてゐる彼の眼には、フロラは唯落魄した王女のやうに、淑かな可憐な處女として映るのみだつた。

彼は夜となく晝となくジュリヤを思ひ慕つた。家に歸つても彼は成るべくKを避けて天氣さへ惡くなければ戸

外で、寢るまでの夜の間を過ごすやうになつた。而してKの惡所通ひを極端に嫌つて、兎もすると、强意見をしたりした。その行爲は今までにも增して潔癖になつて、一寸した汚らしい事にもすぐ顏をそむけた。彼とKとは何處となく疎みあふやうな所が出來た。

ある時Kは雜誌に載つた彼の論文を讀んで、

「おい、サン・シモン。この頃の君の文章の調子は何んだ。まるで學者か資本主見たやうぢやないか。莊重で婉曲で、喰ひ入るやうな、押しつけるやうな文體はどうしてしまつたんだ。ジュリヤの功德も恐ろしいもんだね」

と嘲つたりした。Kの健康は冬から春に向ふに從つて惡くばかりなつた。從つて恐ろしく機嫌の惡い事もあつた。Aの悒鬱――それは春のやうな悒鬱であつた――を感ずると、Kは殊更不機嫌になつた。而して兎もすると捨鉢な振舞ひをしたり、亂暴な口をきいたりした。

Aは心の奧底では、非常にKを憐んだ。然しKの粗野なのが氣になつてならなかつた。是れまで少しも構はなかつた病菌の傳播といふやうな事も、恐ろしく思はれ出した。生命が彼には尊くなつた。

彼の健康も何んとなくいゝ方ではなかつた。譯もなく淚ぐましい夕方が來たり、怒りつぽい朝が來たりした。少女のやうなやさしい圓い心持と、野獸のやうな烈しいがむしやらな氣分とが、目まぐるしく出たり隱れたりした。どうかすると突然夜中に起きて、M教授の家の邊りを、寒風に吹きさらされながら、夜明まで步きまはつたりした。

ジュリヤに對するこんな激しい思慕の間にも、彼の心はP夫人の胎の內にある肉塊に對して、やむにやまれぬ愛情を感ずる事があつた。それが彼を一層不機嫌にした。唯ジュリヤと顏を合せてゐる時だけ、彼は白熱した平安を感ずるのだつた。P夫人の手紙の爲めに痛ましく破られかけた彼の底力は、ジュリヤの手がやさしく養ひ立

てゝくれた。だから彼に取つてはジュリヤは保護女神でもあつた。罪惡の呵責から彼を庇つてくれるものはジュリヤの外になかつた。彼はもとの若さに歸るためにも彼女にすがらなければならないのを知つてゐた。

然し時の進むにつれてこの葛藤は激しくなつた。ジュリヤに對する愛は育つた。P夫人の胎の肉塊も育つた。突然不安に胸を騷がすやうな瞬間をAは續けざまに經驗しなければならなかつた。

九

雪が消えた。土が乾いた。草が萠えた。卷葉が開いた。雲が空を弄ぶ代りに、空が雲を弄び始めた。ライラックの生垣はその梢に重い花房をつけて、花はうなだれながら喘ぐやうに濃艶な香を擴げた。蕾の林檎畑では郭公が啼き始めた。若者の額は汗ばみ、少女の瞳は潤つた。……春が來た。

迷ひと苦しみとの中にAにも春が來た。

結果を見なければ我慢が出來ない、といつて、結果が惡かつた場合には死んでも納まらないやうなうづ〳〵する惱ましさが、晝といはず夜といはず、彼の若い心と肉とをさいなみ虐げた。彼はもう忍んでゐる事が出來なかつた。

散光ばかりを受ける研究室の北向きの窓からは、夕方の日に映える樹木の間にちらほらと立つ家の屋根だけが見渡された。その厨の煙筒から立昇る炊煙は、紫に煙つて眞直に空に消えて行つた。靑葉になつた樹、芽立ちの樹、ライラックなどのやうにもう花になつた樹、樹といふ樹は、みづ〳〵しい枝を幹から張り擴げて、互に空間を讓り合ひながら、それでも心ゆくまで延び〳〵として立連なつてゐる。冬の間のぬかるみに打つて變つて、見違へるまでに淸々となつた往來は埃の舞上らぬ程に乾いて、その街樹のあちこちにしつらへた小さな小箱には、

木鼠が房々とした長い尾をふりながらこまめに出たり這入つたりしてゐる。芝生の上には澤山の駒鳥が、一羽殘らずその赤い胸毛を西日の方に向けて、忙しく餌をあさりながら、ほがらかに啼いた。その聲が開け放した窓からなごやかな匂しい空氣と一緒に聞こえて來た。又薄色の輕い衣服に着かへた學生達が、研究室やら教室から、四人五人と組になつて足並を揃へながら、聲高に笑ひ興じつゝ下宿の方に歸つて行くのが、春らしい氣分をそゝつて眺めやられた。

M教授が書物をぱたんと伏せて、煙草を吸ふためにマッチを擦る音が長閑に聞こえた。やがて刺すやうな硫黄の香がマニラの煙の香と共に鋭敏になつたAの鼻に幽かに觸れた。

ジュリヤは深い溜息をした。已みがたない處女の心の惱ましさをそのまゝ歎くやうに、その溜息は慄へを帶びて長かつた。彼はそつとジュリヤを見た。ジュリヤも上氣した顏を心持ちひねつて流眄に彼を見返つた。その額の生え際は汗ばんでゐるとさへ見えた。二人は互を理解するやうにゆるやかに微笑んだ。

時計臺の時計が粘るやうな音で靜かに五時を打つた。と、M教授は椅子を動かして立上つた樣子だつたが、やがてジュリヤの側に來て、その肩に手をかけて覗きこむやうにしながら、

「ジュリヤ行かうかな。皆さんももう歸りませう。こんないゝ春の夕方は一生の中にも度々はない。何んといふ軟かさだこの空氣は」

さういつて博士は惚れ〴〵と眼を細めながら窓の外を見た。ジュリヤはちらつとAの方を見て置いて、

「もう少し、ね。こゝまで濟ましたらやめますから、どうかお先きに」

といつて又少し惡戲者らしく微笑みながらAを見た。彼は笑へなかつた。云ひ現はし難い恐ろしい瞬間をジュリヤは平氣で彼の上にたぐり寄せてゐる。さう彼は感じて笑へなかつた。彼は妙に固くなつてM教授から逃げか

くれでもするやうに書物にばかり眼を落してゐる。その癖彼の眼の前に跳つてゐるものは、活字の群ではなくて、疑ひと不安ばかりだつた。

教授と助手達とはやがて何か賑やかに話し合ひながら、廊下に高い跫音を殘して歸つて行つた。

ジュリヤと彼と二人だけ取殘されたたゞつ廣い研究室は、殊更がらんとして靜かになつた。駒鳥の啼く聲が、香の匂ひのやうに幽かに、窓の外から聞こえて來た。

彼は恐ろしい胸苦しさを感じてゐた。自分等二人の外に、この大きな建物の中には、小使が一人ゐる切りだと思ふと、彼の心臟は知らず識らずどきんどきんときめいた。彼は書物の字を拾ひ落すまいとする人のやうに、顔を紙に近づけて、指さしをするかつかうに食指を延ばして、それで押しつけながら、一行々々字を追つて行つた。その心は知らず、彼の姿はジュリヤのゐるのを忘れたやうに見えた。

ジュリヤも何かそは〳〵と落着かないやうにAには思へた。さうかと思ふと何か企み事でもしてゐるらしくもあつた。

かうしてぎごちない二十分が過ぎた。長い春の日も黄色く暮れ始めようとした。

「さあお仕舞ひにしませうね」

ジュリヤはから云つて立上つた。この言葉を聞くと、Aも立上つて、その邊を整頓し、窓をしめ、窓かけを引き終る間に、ジュリヤは製圖具を片附けてしまつてゐた。

二人はいつものやうに椅子を近づけて向ひ合つた。然しいつもならばAはこの時に一日中で一番な快活な顔色になるのであつたが、どうしてもさうは出來なかつた。ジュリヤの顔を見るのさへ、妙に憚られた。ジュリヤはほてつた頬を手の平で撫で廻しながら平氣で笑つてゐた。彼は笑へなかつた。

「さあ今日はあなたにいゝものを見せて上げようと思つて今朝から樂しみにしてゐたの。見せて上げませうか」

さう云つてジュリヤは覗き込むやうに彼の澁い顏を見やりながら、一冊の皮表紙の書物を渡した。

それはフロラの日記だつた。Aは心尤めを感じながらも、已みがたい好奇心に促されて、ジュリヤの開いて出した所を讀んで見た。細かい字で丹念に一面に書いてあるページの餘白には到る所にAの名が徒ら書きしてあつた。

「その次ぎを御覽なさい」

彼女は顎で指圖した。彼は手帳をめくつて見た。そこにも彼の名が到る所に書かれてゐた。ジュリヤはさすがに日記の文句を讀んで見ろとは云はなかつた。彼はフロラの仕業を驚くよりも、ジュリヤが何んでこんなものをこゝに持ち出したのかを怪しまずにはゐられなかつた。

「何んだつてあなたはこんなものを僕に見せるんです」

「フロラがどれ程內所であなたを愛してゐるかをお知らせする爲めに。私共の父はよくあなたのお噂をするので、あなたは大變私の家庭ではお親しい名前なのです。フロラがあなたに愛を持ち出したのに不思議はありませんのよ。あなたはフロラを憐れとはお思ひにならない」

「思ひます」

「そら、さうでせう」

ジュリヤは思ふ圖を云はしたといふやうに微笑んだ……人の心を探るやうな、惡戯らしい、蠱惑的な微笑を……と思ふと、やゝ俯向けにしたその顏は見る〳〵濃く曇るやうに見えた。

Aは追ひすがるやうに云つた。

「哀れと思ふ……それは云ひ過ぎでした。僕は寧ろ深い感激を感じます。若し僕に僕の愛を占領してゐる人がなかつたら、僕は恐らくはフロラが僕にしたよりも先きにフロラに對して愛を感じてゐたでせう」

ジュリヤは忽ちもとの笑顏になつて上を向いた。

「まああなたにそんな方がいらしつたの？　それはちつとも知りませんでしたのね。どなた？」

さういひながら、ぢつと瞳を定めて彼を見やつた。彼の全身はぎゆつと引きしまつて氷のやうな寒さを感じた。總てを打ち明けなければならない大事な時が來たのを感じた。彼が立上つてジュリヤの手首を取らうとした刹那、

「待つて下さい。私も呑氣ですわね。そんなあなたの大事な方の名を粗忽にもこの場で伺はうとしたりなんかして。でもこれだけ聞かせて頂戴……その方も矢張り東京にお住ひなんですか」

彼はせきこんでゐた。

「東京ぢやないこゝです、ジュリヤ！」

彼は立上つた。彼が立上ると同時にジュリヤも立上つた。彼は熱意の爲めに狂する許りだつた。ジュリヤは氷のやうに冷靜に彼を見据ゑてゐた。日頃の愛嬌は姿を隱してゐた。Aはそれを見て取るべきだつたのだが、その餘裕は全く無くなつてゐた。

彼は飛びかゝるやうにジュリヤに近づいた。而してそのしなやかな白い手を握らうとした。その素早い動作をひらりと裏切つて、彼女はもう彼から二三歩の後ろにゐた。

「何をなさるの」

この冷やかな言葉を聞くと、さすがのAも一寸たじろいだ。

「あなたは東洋の方ですよ。よござんすか。お忘れになつたんぢやありますまいね」

彼は然しそんな事ではもう引つ込んではゐなかつた。彼の生涯の別れ目はこゝにあつた。彼は又踏み出した。その手に軟かいジュリヤの手が觸れた。彼は誤たずそれをつかんだ。血走つた眼はジュリヤを嚙んで飲みこむやうに輝いた。

「どうぞジュリヤ！　僕を助けて下さい。あなたは僕を勵ました。僕はどう自分を云ひ現はしていゝのか知らない。あなたのない僕は蔭だ、暗闇だ、死だ。信じて下さい。あなたは僕を穴から、谷から……死の谷から……」

彼は感極つてその先きを續ける事が出來なかつた。彼は握手するやうにジュリヤの手を振つた。而して日頃の誇りを捨てゝしまつたやうにその眼は歎願の涙に潤んで輝いた。

「お放し下さい……私は婦人です。……而して一人です」

彼は一人の貴女に對して脅迫に近い激しさを以て愛を求めてゐるのに氣がつくと、はつと思つて思はずジュリヤの手を放した。その瞬間にジュリヤは思ひきり蔑んだ眼で彼を鞭つてから、身も輕くその場を走り退いて出口のハンドルを握つてゐた。

「ジュリヤ」

捨鉢になつて彼の呼んだ聲は吠えるやうに空しく研究室の中に響いた。彼はこの瞬間にどうしてもジュリヤを見逃してはならないのを知つてゐた。然し次ぎの瞬間にジュリヤの姿はもう見えなかつた。廊下を急ぎ足で階段の方に遠ざかつて行く靴音のみが、雷のやうに彼の耳朶を打つた。

彼は呆氣に取られて研究室の中を見廻した。今の今起つた出來事を知らぬ顔に、總てのものは整頓して置かれてあつた。彼の亂脈に搏つ心臟の音だけが、この出來事の結末を語り顔だつた。彼はあらん限りの精力を集めて

今の始末の意味を讀まうとした。

火の旋風のやうなものが彼の頭を突き通して去つた。

「俺はジュリヤのおもちやになつてゐたのだ。俺は何んたるたはけものだ！」

彼は狂氣の如く階段を下つて戸外に出た。而して茫然と身のまはりを見廻した。

春の夕暮の街は事もなげに靜かに穏やかだつた。今點つたばかりらしい街燈が入日の光の中に螢火のやうに輝いてゐた。

咄嗟に彼の頭に閃いたものはフロラだつた。その姿は忽ち彼の心の中を一杯に領してしまつた。この急激な變化を彼は少しも怪しまなかつた。彼が本當に愛せねばならなかつたものはフロラであるのを前から知り拔いてゐるものゝ如くに怪しまなかつた。

「俺はどうかして間違つてゐただけなんだ」

彼は平氣でこんな事を考へた。

「ジュリヤが家に歸れば俺の事を何んと云ふか判りはしない。俺はフロラがジュリヤに遇ふ前にどうしてもフロラに遇はなければならないんだ」

難破船が燈臺を求めるやうに彼は圖書館を目がけて急いだ。彼の足は空を踏んでゐた。

「俺はまだ屈しやしない……まだ生きる……俺の眼が盲ひてゐたんだ。俺はフロラを求めねばならぬのをちやんと知つてゐたんだ。それだのに……俺は馬鹿だ……俺はジュリヤの誘惑に易々と陷つたのだ。俺はどうしてこんなに迷はされ易いんだ。力はあるんだ。然し何故その力には眼がないんだ。フロラ！　俺は惡人ぢやない。俺は何んといふ馬鹿だ。フロラ！　それを知つてくれ。而して俺をどうか……どうか愛に生かしてくれ。ジュリヤは

物好きにもあなたと僕が結び附くのを妨げようとしたのだ。物好きから僕を弄んだのだ。僕の哀れな盲目を許してくれ。僕を生かしてくれ。本當な生き方を敎へてくれ。賴む。あなたを僕は前から知つてゐたんだ。それだのに僕は……あゝ俺は何んといつても馬鹿だ、馬鹿だ。フロラ！　どうか許してくれ。この確かな運命を狂はさないでくれ」

彼は心の中でかう叫んだ。

彼は圖書館の階段を一足飛に駈け上つた。夢中でそこまで來た彼は恐ろしい躊躇に襲はれた。

「若しフロラが家に歸つた後だつたら！　ジュリヤはその父とフロラとにどんな事でも言ひつけて、僕を眞黑に描く事が出來るのだ。あのフロラの純潔な心臟が姉の言葉で傷けられたが最後だ。俺の望みはその時に絶えてしまふ。若しフロラがこゝにゐなかつたら！」

彼は言葉通りに足の先きから頭髮まで興奮の爲めに震へてゐた。彼はそつと戸を開いて恐る〳〵閲覽室に這入つた。電燈の煌々と點つた室內には、ぎつしり學生がつまつてゐた。然し女の事務員は一人殘らず男の事務員と交代してゐた。

彼は見る〳〵蒼くなつてそつとそこを出た。廊下に出ると烈しい動悸が一時に彼の胸を襲つて來た。今にも心臟が破裂しはしないかと思ひながら、彼は壁に凭れて、暫く兩手を左の肋骨の上に置き添へてゐた。眼の前が間を置いて暗くなつた。彼の顏は一時にやつれて見えた。大きさのちがつた左と右との眼はぎよつと見開いたまゝ大きく、凹んだ頰の下にある口尻は、べそでもかきさうに小刻みに震へてゐた。

やがて彼は靜かに歩き出した。彼は階段の手欄に身をもたせながら、膝頭のがくつく脚を踏みしめ〳〵靜かに降りて行つた。

「なあに」

ともう暗くなつた芝生に出てから彼は獨語ちた。彼は然し自分で何を云つてゐるのかを知らなかつた。

一〇

その夜おそく、泥のやうに酩酊したAはP夫人の家の門口に立つて呼鈴を押してゐた。

酒を飲まない奴は豐麗な熱帶地を旅しないやうなものだとKの云つた、その快さ樂しさは藥にしたくもなかつた。曹達水と一緒に質の惡いウヰスキーをおつかけひつかけ呷りつけた體はけだるく燃えて、腦味噌は頭蓋骨の中で斷末魔らしい呼吸をしながら、ひし／＼と骨をぶち破る程膨れたり、こちんと石のやうに小さく固まつたりした。指先きと唇とは熱くかじかんで自在を失つてゐた。腰から下を襲ふこの酒の魔力にかゝつて、踵はどうしても地につかなかつた。而して五體はやゝともすると前のめりに棒倒しにならうとした。

彼は辛うじて表戸に倚りかゝりながら、戸に近づく靴音を聞き取らうとした。然し呼鈴に眼を覺ました人のあるらしい氣配は更になかつた。彼はもう一度長く呼鈴を押して耳を欹てた。怒りとも悲しみとも知れない衝動が、胸先きにさし込んで來て、彼をがむしやらに怒鳴らせようとした。その時の彼にしては、あらん限りの自制をしなければ、その誘惑を退ける事ができなかつた。彼は振り仰いで眞綿のやうに暖く軟かい春の空氣に長々と呼氣を吐きかけた。

夜は更けてゐた。見亙せるかぎりの町並は、街燈のかげに朧ろに霞んだまゝしいんとして、巨人の列のやうな石造の家屋が、無數な窓の眼をカーテンで暗くとざしてゐた。

何んともいへない物淋しさが又一しきり彼を襲つた。彼はつき上げて來る嘔氣を飲みこみながら又呼鈴を押し

て見た。家の內の奧深い所で眼ざまし時計のやうな音のするのは聞こえながら、矢張り出て來ようとする人はなかつた。彼は胸苦しさに耐へかねて、石段の上に腰をおろしてしまつた。そのまゝ彼は靜かな淋しさの底に沈んで行つた。

　ふと彼は頭の上で極くひそやかな物のきしる音を聞いたと思つた。彼は氣懶い眼をやうやく上に向けて音のする方を見た。丁度自分の頭の上の二階の窓から、白い圓いものが現はれてゐるのに氣がついた。彼はふら／＼と立上つた。白い圓いものは少しも動かなかつた。その正體を見極めようとする彼の眼はたゞ空間を盲目のやうに漂ふばかりだつた。やゝ暫く彼はぐら／＼五體をゆすりながら、上を向いたまゝ默つて立つてゐた。

「誰です」

　耳も醉ひしれてゐた。けれども彼はかくさゝやいた聲の主の誰であるかをすぐ知つた。白い圓いものは彼の心の中ではつきりとP夫人の顏になつてゐた。濃くも薄くもない尋常な髮の毛を二本の編み下げにして、伊太利製の手細工のレースをつけた眞白なナイト・キャップを被つたその見慣れた顏が窓から不安げに彼を覗いてゐるのだ。さうと知ると彼は攀ぢ上るやうな恰好になつて入口の壁にしがみつきながら顏を上に向けた。

「誰です」

　少しうろんらしく尖つた聲が又さゝやくやうに聞こえて來た。彼はすぐさま答へようとした。然し彼の脣も舌もしびれてしまつて働かうとはしなかつた。怒鳴りはしまいかと案じたのは無益な心配であつたばかりでなく、出さうとしても聲の出ないのに自分ながら慌てゝしまつて、彼は右の手を高々と振り動かして表戸をどすん／＼と敲いた。

「誰です一體。Wさん？」

自分ながらうとましい呻き聲が夫人のやゝ險しいこの質問に應じてやうやく彼の唇から漏れた。

暫くすると彼は家の内に跫音を聞いた。而して戸が開けられると同時にのめり込むやうに戸と一緒に廊下によろけ込んで、P夫人の腕で辛くも倒れずにすんだ彼を見出した。P夫人は彼を支へながら慌てるやうに戸を閉めてしまつた。廊下は急に眞闇になつて戸外よりも冷え〲としてゐた。

二人はまろんだりのめつたりしながら階子段を登つてP夫人の寢室に這入つた。寢室には電燈が明るく點されてゐた。二人はそこで始めて絶えて久しく顏を見合せた。

P夫人は深夜にそこに現はれたのがWと呼ばれた男ではなくAだと知ると、倒れんばかりに驚いて思はず椅子を楯にとつてその後ろで身構へた。彼は然しそんな事には氣附かなかつた。來る所に來たと思ふと、彼の醉は急に發して、頭は破れるやうに脹れ上つて、嘔氣が胸許にぐん〲こみ上げて來た。彼はよろけながら夫人が開け放しにして置いた窓に寄つていつて、首をつき出すと同時に嘔き始めた。胸から腹を無性にかき廻すやうな苦痛の中に、彼の五體は段々知覺を失つて行つた。彼はもう死んだと思つた。酒場でウヰスキーを呷りつけてゐた時、「若い衆。そんなに飲むと心臓が破裂して死んじまふぞ」と、自分も醉拂ひながら、彼に忠告がましい事を云つた年老いた勞働者の顏が、どういふものかひつきりなしに彼の眼の前に現はれて、彼をさいなんだ。彼の眼からは何んといふ事なしに涙が後から〱流れ出てゐた。而してそのまゝ知覺を失つてしまつた。

惡夢のやうなものを彼は見續けに見てゐるやうだつたが、やがてふと眼が開いたと思ふと、彼は自分の前に、寢衣の上に外套を纏つて額を冷してくれてゐるP夫人を見出した。彼は夫人からそんな憐れみを受けてゐるのを恥ぢもし怒りもした。同時に自分が憐れまれ、夫人が憐れまれた。彼は直ぐさま額の上のタオルをはねのけて、その場を立去らなければならないと思つた。然し働いたのは彼の意志だけだつた。何かいふ夫人の聲は途切れ途

切れに耳に響きながら、彼は拒むやうに手を振つただけで又深い眠りに陷つてしまつた。

水が欲しいといふ意識が段々はつきりして來て彼は又瞼の重い眼を見開いた。外界を見るより先きに自分の眼がひどく充血してゐるのを直ぐ感ずる位少しばかりの光線が網膜にしみて痛かつた。彼は自分が何處にゐるのか皆目見當がつかなかつた。彼はすぐ眼を閉ぢて、ぎごちない體の位置を換へながら、靜かに考へて見ようとしたが、五體も頭も鉛のやうに鈍く重く彼を抑へつけるばかりで、考へらしいものは一つも浮んで來なかつた。彼はそんな慘めな有樣からはね返る力もなくなつて、そのまゝ暫くは身動きもしないでゐた。

然し極く徐々にではあつたが心が斷片的に働くやうになつて來た。始めは夢のやうに今まで遇つた人の顏だの言葉なぞが現はれたり消えたりしてゐたが、やがて意志が少しづゝその間の連絡をつけるやうになつて來た。彼はしめたと思ひながら回想の緒をほごしにかゝつた。他人事でも考へるやうに彼は我が身の上を考へ始めた。

「酒を飲んで醉つてしまつたのが惡かつたんだな。何んだつてまたそんなに酒を飲んだんだらう」

そこまで考へて來たらもう先きがわからなくなつた。彼はぢつと心を鎭めなければならなかつた。ふとジュリヤの顏が思ひ浮べられた。惡戲者らしい肉感的な美しい圓顏がそつぽを向いて白い齒を脣の間からのぞかして笑つてゐた。それが段々薄らぐと思ふと、その鼻のあたりに拇指ほどに小さくはつきりとフロラのつゝましやかな顏が現はれた。顏ばかりではない。見る中に小柄なりに形のいゝ背丈が見え出した。彼は大事な藏を開く鍵を見附け出したやうにその幻想にあらんかぎりの執着をこめた。フロラは靜かに動き出した。やゝともすると彼の心の屆かない所に逃れ出ようとするのを二度も三度も強ひて元の位置に押戻した。その中に、幻想を借らないでも彼の心は思慮する事が出來るやうになつて、云はゞ心の眼でフロラの姿を見つめながら、徐々に昨日の出來事を繰返し始めた。戀の申出をジュリヤに卻けられてから、フロラにすがる外はないと夢中になつて圖書館に急いだ

事も、圖書館に行つたらフロラが歸つてしまつた後だつた事も、前後の辨へもなく圖書館を出た事も他人事のやうに浮んで來た。彼はまたしめたと思つた。然しそれだけだつた。その後は眞黑だつた。眞白だつた。

急に非常な恐怖がひし／＼と逼つて來た。死よりも物凄いと思はれるものが彼の心臟の働きを一時にとめた。彼はほんとに眼をさまして額際に冷汗をかきながら、寢てゐる所から突然跳ね返されるやうにをどり上つた。どつど、ど、ど……と急にうち始めた心臟の激しい鼓動にひるみながら、倒れかゝる拍子に何かに腰をおろした。彼の眼の前には、忘れる事の出來ない罪惡の寢臺が寢亂らされたまゝに、朝の光にしら／＼しく立つてゐた。彼の體の下にはソファーが　P夫人と彼とが倚りそつて心にもない口の上だけの甘語を取り交はした――すゑられてあつた。總てはその頃のまゝだつた。彼はいつの間にかP夫人の寢室に來てゐた事をはつきりと意識した。

「そんな事ではないかと思つたんだ。俺は何んといふ……何んといふ馬鹿だ」

彼は涙も流し得ないで、ぼんやりとあたりを見廻しながらかうつぶやいてゐた。燒きつくやうな喉の渇きは彼を一層苦しませた。どうしやうもなかつた。彼は兩膝の上に肱を立てゝ、顏を手の中に埋めて、俯向いたまゝ默つてしまつた。

さうしたまゝで半時間も經つたと思ふ頃、戶を靜かに開けてP夫人が這入つて來た。彼はそれを知つてゐたが顏を上げようとはしなかつた。殺すなら殺せ、彼はそんな氣持になつてゐた。

「あなた眼がさめたの」

夫人は一間ほど離れたまゝでかう云つて見たが、彼が動く樣子もないので、足早に窓際に近よつてカーテンを一ぱいに引き開けた。晴れた朝の光が溢れるばかりに室內にさし込んだ。

彼は思はず光からたじろぎながら叫んだ。

―しめて下さい。しめて下さい。あなたはどうして平氣で光が見られるんです。眼が痛むから早く……早く閉めて下さい」

「あなたは一體この部屋に這入る權利があると思ふんですか」

「そりや知らない」

「あなたは最後の手紙に何んと書いたか覺えてゐませうね。私があの文句を忘れてゐるとでも思ふんですか。あんな大事の起つた事を知りながら、ぢやありません、知つたもんだから、體よく私から逃げてお仕舞ひでしたんでせう。私はあなたの臆病な心持をすつかり見せてお貰ひしたんですからね……」

P夫人は言葉が續けられない程激昂してゐるらしかつた。彼は手の間に顏を埋めたまゝ石のやうになつてゐた。

窓の下の往來には群集が出盛つてゐた。自動車や馬車の馳せちがふ音や、新聞賣子が晝刊版を呼賣りする聲が手に取るやうに聞こえて來た。窓硝子を通して見える街路樹の梢は、五月の陽とそよ風に、きら／＼と輝いて小躍りした。その上を燕が忙しくつい／＼と飛びかはした。

P夫人の寢室にだけは唯しぶとい沈默が續いた。

「醉がさめたら出て貰ひませうか」

やがて夫人はおとなしくかう云つた。氷のやうな冷やかさが彼を襲つた。

彼はふつと顏を上げて、眼をすゑてP夫人の姿を見た。未經驗な彼は彼の見ようとしたものをそのすつきりした姿勢の中に認める事が出來なかつた。ガウンを羽織つた夫人の胸部から腹部にかけての樣子は猶更ら懷姙の徵候の有る無しを曖昧にしてゐた。然し彼にはこのまゝ夫人の許を去る氣が出て來なかつた。罪の結果であれ何んであれ、彼にはどうしても踏みにじり切れない執着がP夫人の體に宿つてゐるのを感じた。不思議な憎しみと愛

とがより合つて夫人にまつはり附いてゐた。彼は又うなだれてしまつた。

「さあ出て下さい。あなたは私の寢房に足を踏み入れる權利をお持ちにならない」

夫人の癇高な言葉は段々冷やかに改まつて行くばかりだつた。どんな場合でも、熱し切らないばかりでなく、自分には無關係の事のやうに冷淡でゐられるらしい恐ろしい性情を、彼は前から氣が附いて不快に思つてゐたが、今それが遠慮なく自分に向けられてゐるのを見ると、彼はぐつと癪にさはつて來た。でも彼はどこまでも思慮深くあらうとした。彼はきつと顏を擧げて正しく夫人を見て云つた。

「私は辯解をするのが大嫌ひです。又自分の責任を避けようともしますまい。然し私があなたに最後の絶交の手紙を書いたのは、あなたの懷姙を知らない前だつた事だけは思ひ出して下さい。私はさうする事が私ばかりでなく、あなたの爲めに、又あなたの可憐なマァギイの爲めにも至當な事だと思つたんです……」

「僞善者！」

彼の言葉をひつたくつてP夫人はかう叫んだ。靑味を帶びた夫人の顏は小刻みに震へながら、輕蔑し切つた表情を湛へて、口許を輕く笑ひにゆがめてゐた。

「絶交はそんなに都合のいゝものなのですか。責任を分けなければならない事柄が起つて來ても、絶交してしまへばあなたは平氣でゐられるんですか。私が懷姙したといふ通知を受取りながら今日まで知らん顏で通したあなたは本當に責任を重んずる方ですわね。つ、つ、つ、つ、（こゝで彼女は激しく舌をならした）野獸！　お出なさい、こゝを、今、この瞬間に！」

夫人は顏を引いて肩をそびやかして、彼を見下ろすやうにしながら、手を眞直に延ばして戶口を指した。

彼はこれ程の侮辱を受けながらまだP夫人をなぐり附けようとも、席を蹴立てゝこの場を去らうともしなかつ

た。彼のたゞ一つの望みは夫人の生むべき子に父親の愛を感じたい事だつた。この動物的な本能は、寂しい彼の心を遮二無二ひつ捕へて離れようとはしなかつた。彼の血を分けた一つの存在が數歩を離れた彼の前にあると思ふと、彼はすゝり泣きたい程の執着を感ぜずにはゐられなかつた。彼は脆くも歎願するやうな眼をP夫人に向けて靜かに云つて見た。

「私は何もかもあなたに謝る。その代りあなたは私を受け入れてだけ下さい。私は何んと云つてもその子の父である事を願はないではゐられないんですから。一人の子の母であるあなたは私の心を察して下さるでせう。あなたのマァギイに對する愛によつて私はあなたに訴へる。私は……」

「唯殘された一つの道はあなたがこの戸の取手をねぢる事です。あなたがお出にならなければ……」

　P夫人は急ぎ足で部屋を出ようとした。彼は慌てゝ夫人の前に立ち塞がつた。而して猶も何か云はうとした。けれどもその時夫人が彼のすぐ眼の前で、敵を眼がけた毒蛇のやうな身構へをした時、彼は自分でも意識しない中に威丈高になつてゐた。

「よし、あなたは笠にかゝる積りだな」

　彼の左の眼は殊に大きく見開かれて、射るやうな光がP夫人の眼にそゝぎ込まれた。而して一歩々々逃げのく夫人を追ひつめて、部屋の片隅まで逼つて行つた。逃げ場を失つた夫人は、心の中ではすくみ上りながらも、見下げるやうな態度を變へようとはしなかつた。

　ひしやげた重苦しい聲が無氣味な部屋の中の沈默を破つて、途切れ〳〵に彼のがつしりした胸から吐き出された。

「私は父の權利を要求する。あなたの名譽にかけて要求するからそれをはつきり理解なさい。若し社會上の死を

あなたが死にたくなければ、あなたの恥辱が屋根の上から叫ばれたくなければ、あなたは私の意志に犬のやうに從順でなければならないんだ。それをよく理解なさい。……それが分つたらこの部屋を出るがよろしい。而してあなたのすべき事をするがいゝ。私はこゝでもつと休息する必要があるんだ」

さう云つておいて彼はP夫人のために部屋の戸を開いた。P夫人は見る〳〵打ちくだかれてしまつてゐた。子供でもあつかふやうな高飛車な誇らしげな姿は、深く怨みを抱きながら、それを氣取らせる事すらし得ない、奴隷のやうな慘めな樣に變つてゐた。夫人はぶる〳〵と細かく震へながら戸の方に近づいて來た。而してふと顏を上げて彼を見た。その眼は屈辱の怒りに燃えてゐたが、彼の鋭い眼に迎へられると、咄嗟に訴へるやうな、憐れみを求めるやうな眼付になつた。

「マァギイを考へて下さい。あれはもうぢき幼稚園から歸つて來るんです。マァギイが今夜寢つくまでこの家を出てゐていたゞく事は出來ないでせうか」

といふその聲まで夫人の聲のやうではなかつた。

「そんな事はあなたの指圖を待つべき事ぢやない」

P夫人はしを〳〵として自分の寢室を出て行つた。

彼は靜かに戸をしめた。而してP夫人の跫音が階子段を降りて段々遠ざかつていくのに耳をかたむけた。それから部屋の中をぐるりと見廻した。もう一人ぎりになつたと思ふと、堪へ〳〵てゐた涙が一どきに眼がしらに滲み出て來た。それはジュリヤに對する失戀の憤りでもなかつた。フロラを永久に見失はうとするその悲しみでもなかつた。知りながら自分を墮落させた苦しみの涙だつた。怒りに任せた上の事だとはいへ、あまりに人を踏みつけにして、自分ばかりを勝手に振舞はうとしたP夫人に對する腹いせだつたとはいへ、夫人の弱點につけ入つて

彼自身それには責任を分たねばならぬ、あまり痛ましい夫人の弱點につけ入つて、無理にも夫人を押へつけてしまつたその醜さはどうだ。人の弱點につけ入る……彼の若い心はそんな事を他人の上に見たゞけでも蟲酸を走らせずにはゐられなかつたのに、今は自分に蟲酸を走らせる自分を見出したのだ。どんな切端つまつた場合にでも、是れまで彼はそんな手段を考へ出すことすらしないで來た。それだのに今はどうだ。常習的な强盜が立派な自分の仕事としてゆすりをするやうに、彼はたくらみもせずに、易々とP夫人のかよわい手をひねり上げてゐたのだ。而してP夫人の當惑した顏付に、一瞬間だつたとはいへ、復讐の快感をさへ味はつてゐたのだ。彼は全く氣附かずにゐた物凄い恐ろしいものが自分の心のどん底にうごめいてゐるのに始めて氣がついた。

彼はP夫人が震へたやうに震へてゐた。拭ひもやらぬ熱い涙のために、歪んだりとろけたりして見える部屋の中は、ゐたゝまれない牢獄のやうに彼の眼に映つた。P夫人が寢亂したまゝにして置いた寢臺、その上に脫ぎ捨てられた雪白な寢衣、毒の花でも散つたやうに床の上にころがつてゐる猩々緋のスリッパー、枕許の小さな卓の上に置かれた、不思議な醉を起す栗色の液體の壜と、氷水のコップ、それらは彼をいましめた鋼鐵の鎖だ。彼の上にかけられた羽蒲團の皺くちやにまるめて載せてある、而して彼の體の溫味のぬけ切らないソファーは彼を打ちのめした刑杖だ。彼は幾度この部屋の中で、あの忌はしい刑杖に追ひ立てられながら、あの罪の鎖に縛り上げられるのを甘んじ樂しんだらう。思へば今日陷つた彼の墮落は疑ひもなくこの部屋の内で哺み育てられてゐたのだ。

惡醉につゞく彼の頭はこれだけの反省にも惑亂した。留度なく流れ落ちる涙を流れるまゝにして、死刑を宣告された囚人のやうにわく／＼しながら、息づかひあらく彼は部屋の中を歩きまはつた。その間に彼はコップの水を深々と飲んだり、ソファーに腰を下ろして見たり、救ひを求めるやうに壁紙を撫で廻したり、ぼんやりと窓か

ら下の往來を眺め込んだりしてゐた。づき〳〵と痛む眼の奥は、漏斗のやうな形に、見るものを段々小さく頭の心にひきずり込んだ。頭の中は針の尖ほどに鋭くとがつた視象でぎり〳〵と刺しとほされた。彼はたまらずに寢臺の上に伏し倒れた。嗅ぎ慣れた移り香が彼の鼻を異常に刺戟した。

「何んでもするぞ。お前の爲めになら何んでもするぞ。俺には今お前の外には何んにも無くなつてしまつたんだからな」

さう獨語つと彼は聲を揚げて本當に泣き出した。

「生れて來い、俺の恥を見返す程に大きな產聲を揚げて生れて來い。いゝか。俺はお前の父である事を恥ぢはしないからな」

彼の聲は痛ましくひしやげてゐた。彼は愛撫するやうに敷蒲團を汗ばんだ手で撫でゝゐた。

部屋の中が薄暗く見える程に窓の外は春の日を漲らしてかつと明るかつた。

二

その日一日を彼はP夫人の寢室で過ごした。昨夜前後も知らずあれ程寢た癖に、彼はソファーに倚りかゝりながら、やゝともすると眠りに落ちた。若い彼の力は一眠り每に恢復して、彼は朝よりも冷靜に物を考へるやうになつた。而して下の部屋でマァギイの立てる快活な聲だの跫音だのを聞くと、この部屋にゐるのが非常に怖れられた。然しマァギイの眼にとまらずにこの家を出て行く手段はなかつたので、その時々にP夫人によつて食物が運ばれたのにも係らず、少しも口には入れずに、日の暮れるまでこつそりと潛んでゐた。

P夫人はいつの間にか普段の通りな貴夫人らしいしとやかさと威嚴とを保つやうに――それは習慣がさせる業

だつた。彼女は彼に對してそんな風をする無益と無意味とを知りながら、矢張り或る瞬間を除いてはそんな風を見せた――なつてゐた。彼は然しその奥に、夫人が彼を憚り惡む事がどれ程嵩じたかを見て取る事が出來た。一旦血を見た彼はそれを快くさへ思つた。

夜になつてP夫人が食事を運んで來た時には、ちやんと接待の服に着かへて化粧までしてゐた。頸のまはりに白いレースを附けた眞黒な單純な服を裾長く着て、月光石の珠數のやうな頸飾りをしたその姿は、彼がPの家で始めて夫人を見た時と同樣できよ／＼しかつた。手の甲まで隱れさうに袖口の長い、きちんと肉についた筒袖からのぞき出た手先きは、惡意に燃える彼にさへも不思議に蠱惑的だつた。第一印象の聯想も手傳ふのだらうが、彼は夫人の手先きを見ると、この場合でもあの品のいゝ小さな足の形を思はずにはゐられなかつた。彼はいま／＼しさうに夫人の手から眼を夜になつた窓の方に向けた。

「あなた今夜は泊つていらつしやる？」

夫人はかう云つてまともに彼を見ようとした。然し彼が窓の方から顏を夫人に振向けると、夫人は思はず眼を落してしまつた。

「僕は歸る」

「Kさんの所に？」

「うむ、さうだ」

P夫人は不安さうにちらつと彼を見た。

「私Kさんは少しも知りませんけれどもね（何をしらばつくれるんだと彼は心の中でほどいた）いゝ方なの？Pは何んだか大變油斷のならない人だとも噂してゐましたわ。さういふ人との交際であなたは不幸を見はなさら

ないか知らん」

彼はそつぽを向いたまゝ答へた。

「Kとの交際は、肺病を僕に移すかも知れないだけで何んの不幸も引起しはしないんだ。然しその交際の爲めにあなたが不幸を見るやうに成るか成らないかは保障の限りぢやない」

彼のこの言葉はP夫人の圖星を指した。夫人はKの後押しをひどく怖れてゐたのだ。而して彼の言葉を聞くと、急いで何かいひ出さうとしたが、思ひ返したらしく默つてしまつた。

彼は暫くの間互に探りを入れ合ふやうな會話をP夫人と交はしてから立上つた。

「僕はこれで今日は歸る。然しあなたは僕のものを僕に返すまでは僕の拳の中から遁れられない事だけは覺悟するがいゝ。血が僕をあなたに引きよせた。血が僕をあなたから引きのけた。血が僕をあなたの中に創つてしまつたんだ」

彼はいきなり先刻から立つたまゝでゐるP夫人を抱きすくめた。彼はその瞬間に奇怪な自分の心におびえなければならなかつた。執着といつてもいゝ、憎惡といつてもいゝ、その不思議な力――極度の憎しみと極度の征服慾とが火のやうにからみ合つて燃え立つた。その力に震へながら、彼は嚙むやうに夫人の冷たい唇を吸つた。而していきなり部屋を出てしまつた。

戸外に出ると空はまだほの明るかつた。緯度の高い大陸の夕方は日本の夏の夜のやうだつた。物靜かな屋敷町の兩側の家並で切り狹められた大空は、やうやく輝き出した星の光を霞めて、惠み深い河のやうになごやかに長く横つてゐる。彼は眼を擧げてそれを見やりながら思はず溜息をついた。白いモスリンの輕い服の上に外套を羽織つて、わざと帽子を被らずに、腕を組み合せて食後の散歩に出て來たらしい少女の群がいくつもあつた。家々の

ヴェランダからは、安樂椅子を持ち出して、何か面白げに笑ひ興ずる男女のさゞめきが聞こえた。薫の高い花の香ひが、彼の心をさへときめかして、どこからともなく通つて來た。春だ。本當に春だ。總ての醜いものは何處に姿を隱し終せたのだらう。見える限りは皆美しく、聞こえる限りは皆麗はしかつた。彼は這入つてならない庭園にでも迷ひ込んだやうなおど／＼した氣持で、その間を歩いて行つた。彼にはこれが彼の世界だとは思へなかつた。帽子を眼深に被つて、兩手を上衣の衣囊に、義手者のやうに突つこんで、眼の先き五六間の所を見詰めたまゝ、急ぐかと思へば立留り、立留るかと思へば急ぎ出すその姿は、春に厭はれるには十分だつた。

ある横町でふと敷石の一つがどかんと凹んでゐるのに氣が附いた。「こゝでマァギイがいつかけつまづいたんだな」と彼は前後の連絡もなく考へた。彼は自分がころばないやうに用心してそこを跨いだ。それから又暫く何か考へあぐみながら何んにも考へずに歩いた。

電車の乘場に來たけれども彼は知らん顏で歩きつゞけた。いつとも知らず彼は自分の影法師を面白がつて眺めてゐたのだ。一つの街燈を通りこすと、彼の影は黑く濃く足許に現はれ出して、次ぎの街燈に近づくに從つて段段細長く朧ろになり、やがてはいつともなく消え失せて、後ろの方に長いぼんやりした影が現はれはじめた。而して、それがまた段々小さく濃くなつて、次ぎの街燈の下に來ると、足許でやゝ躊らつた後に、又ぞろ彼の眼の前に黑い濃い影となつて短く現はれた。どす黑いまでに血の氣を失つて、險しく眼のすわつた顏付をしながら、彼は延びたり縮んだりする自分の影ををかしがつて、どこまでも歩いて行つた。而して不思議にも道を間違へずにKのゐる家の前に辿り着いた。

始めて彼は自分の影から眼をはなして、家を見上げた。而して衣囊から鍵を探り出して戸を開けながらポストンの方を振返つた。極光のやうにそこと思はれる空が光つてゐた。

Kはまだ寢ないでいつもの通り、かじり附くやうに机に凭れて書き物をしてゐたが、戸の開く音を聞くとすばしこくAの方を振向いた。一日遇はない中にKの顏が幽靈のやうにやつれてゐるのに彼は驚いた。Kは Kで彼を見ると思はず椅子から飛び上つた。

「どうしたんだ」

二人は申合せたやうに同時に聲を上げた。

「どうしたんだ」

Aはもう一度さう問はずにはゐられなかつた。

「僕か？　僕はどうもしやせんさ。相變らず肺病で頑健ださ。この通り半日でこれだけ原稿を仕上げたんだ」

Kはかういひながら上瞼の眞直な眼をするゑて彼を熟視した。

「君は然し非常にやつれてゐるぞ。腹でも下したのか」

彼はKの顏を見入りながら云つた。

「馬鹿をいへ。非常にやつれてゐるのは君自身ぢやないか。昨日の朝とは別人の感だ。ふむ、まあ坐れよ。帽子でも脫いだらどうだい」

彼は大事な注意でも受けたやうに、すぐ帽子を脫ぐと、むしるやうに頭の毛をひつかき廻した。然し坐らうとはしなかつた。Kは椅子の背に肱を凭せて彼の眼をまじ〳〵と見ながら聲を低めた。

「おいサン・シモン。君は又何かのぼせ上つてるな。馬鹿な事でも思ひ附いたんぢやないんか。昨日は一體何處にゐたんだい。〇〇主義者の den にでもいつて、cry in action か何かたきつけられて來たんだらう」

よく見るとKは格別やつれてはゐなかつた。Aは不思議な自分の眼の錯覺を訝りながら、もう一度Kを見直し

た。而してKも同じ錯覺にかゝつてゐるのではないかと思つた。然しKの顏を見るにつけて、彼の心を今更のやうに嚴しく打つたものは生きる事の苦しさだつた。成程Kは昨日見たKとさして變つてはゐなかつた。が、三十を越したばかりで、もう少しづゝたるみ始めた皮膚や、眉の間や口の邊に常住消えずにたゝまれた皺をよく見ると、Kがそこまで生きて來た間にも、どれ程激しい苦しみと戰つて、兎も角もそれを切り拔けて來たかゞ、可なり明かに語られてゐるのを知つた。彼は人の容貌を二重に見る事を發見したやうに思つた。而してKにやさしい心持を感ぜずにはゐられなくなつた。彼は何もかも語つて仕舞はうと思つた。而して始めて傍にあつた椅子を引きよせてそれに腰を下ろした。

「何時だ」

彼は夜が更け過ぎてはゐないかと恐れながらから尋ねた。Kはチョッキの衣嚢から銀時計をちよつと出してすぐ仕舞ひこむと、その邊を輕くたゝいて、例の皮肉な癖にどこまでも自然な笑ひをほゝゑんだ。

「時計の奴跛脚をひき〱僕の後について來やがつたつけが……とう〱往生してしまつたよ。昨日からこの部屋を支配するものは永遠だけだ」

全くそれは心持のいゝ言葉だつた。彼もつい釣り込まれてほゝゑみかけたが、すぐ苦い感情が灰汁を引つかきまはす棒のやうに彼の心を攪拌してしまつた。

彼は出來るだけ落着いて昨日からの出來事を語りはじめた。彼はジュリヤとの會見を靜かに話した。フロラを見失つた失望の心持も他人事のやうに物語つてのけた。然しP夫人を沒義道に抑へつけた道行きをいひだす頃には、思はず心から熱してしまつてゐた。若いその心臟には音をたてゝ血が流れこむやうに思はれた。彼はいつの間にか立上つてゐた。而していら〱しながら部屋の中を悒鬱に歩きまはつた。

「不思議な感情なんだ……君にそんな經驗が有るか無いか知らないが……生れて來るその赤坊を見失つたら、氣が狂ふにちがひないとさへ思ふよ。何んて云つたらいゝかなあ……撲き殺してくれたい程P夫人を憎んでゐる癖に……夫人との關係を汚れ切つたもんだと思つてる癖に……僕は矢張りどんな風にか夫人に執着を持つてゐるんだ。……僕はその結果を……結果を命にかへても慈しまないではゐられないんだ。……僕は何處か間違つてる……間違つてるにちがひないと思つて見るんだが、どうしても分らないんだ。ジュリヤとの戀を夢みてる間でも、P夫人の懷姙の事を思ふと、所嫌はず跳り上らうとした、まるで孫に眼のない爺見たいなんだ僕は。然し僕はそれを恥ぢる氣にはどうしてもなれないんだ。……だからP夫人が……あいつは失敬な奴だ、獸だ……マァギイといふ子供のある癖に……おい、君、僕は氣がふれてるんだらうか。去年の夏僕が狂癲病院で働いてる時……くだらない、おい、寢よう」

　Kが椅子の背に肱をかけて、上體をねぢつて、書きかけの原稿に眺め入つてる樣子に氣がつくと、彼は談りつづけるのが自分でも馬鹿らしくなつて言葉を切つた。Kは原稿を見つめたまゝ冷やかな調子で、

「Go on! go on!」

　といつた。彼は口先きばかりのやうなKの言葉に氣をそこねた。而してKに對してふと賴もしさを感じたのを後悔して、頑固に默つてしまつた。

　Kは暫くすると彼の方に顏をねぢむけて、詰るやうな口調で、

「何んだつてもつと話さないんだい」

　といつた。

「君に話すのをくだらないと思つたからだ」

苦々しげにかう答へた彼の言葉はKに痰でも吐きかけるやうに響いた。Kはめげもせずに追ひすがつて來た。

「君はほんとにさう感じてゐるのか」

「感じないとでも思つてゐるのか。……僕は寢るよ」

「まあ待て。僕は今君の迷ひを立派にさましてやらうと思つてる所なんだ。……本當に寢るのか……君の寢衣はそのストーヴにかけてある、僕の外套の下に。おいサン・シモン。何よりも第一に君は馬鹿だよ。第二に君は向不見だよ。第三に——といふより、馬鹿で向不見だから、君は超人間的に不仕合せな男で、而して超自然的に愚圖だよ。……君は自然といふ奴はどれ程贅澤な無駄遣ひをする奴だか考へた事があるかい。そんなに突つ立つてゐないで寢たけりや寢たまへ。起きてゐたつて感心だとは思はないやうに、寢たつて無禮だとは思はないよ。縱にしたつて横にしたつて、耳は同じやうに聞こえるんだから……。魚の卵を見給へ。五匹か六匹の魚を造るために幾萬といふ卵を用意するといふのが、何によらず自然のやり方だ。人間の生活だつて同じ事ださ。僕等の生活は勢力の過剩でふうはりと包まれてゐればこそどうかかうか成立つんだ。所が君は馬鹿だから、過剩勢力まで生活の本體だと思ひ込んだり、向不見だから、過剩勢力を生活の中に引つ張り込まうとしたりするんだ。考へても見給へ、欠伸をするたんびにふんぞり伸ばす腕の力を無駄にせずに、實用的に使はうと云つたつて、無理だらう。それをしようとする人間に限つて、愚圖々々物に拘泥して、世界中の不幸を一人で背負つたやうな面をするもんだ。全く君は二十世紀のサン・シモンだよ。ハヽヽヽ」

Kは不愉快さうに快い聲を立てゝ笑つた。彼は寢衣を着てその上からKの外套を羽織つたまゝ寢臺のつかまに腰をかけて、ぢつと腕組みをしてゐた。

何處かで鷄がけたゝましく時をつくつた。二三箇所で遠くそれに應ずる牡鷄の聲がした。それに驚いて吠えた

犬がゐた。

「まだ夜が明けるんぢやあるまい」

さういひながらKは机ごしに窓をあけて、眉をそばめながら戸外を見た。彼も首を擧げて窓の外を見た。おそく月が上つたのだつた。夢のやうな淡い光がライラックの生垣の花や葉にそゝぎかゝつてゐた。遙か向うには、大學の時計臺が朧ろに霞んで、まだ葉にならない楡の木立の上に聳えてゐた。その先きには燐光のやうな大空が淡く靜かに擴がつてゐた。部屋の中の空氣はひそやかに動いて甘い花の香りを招ぎよせた。

Kは暫く見てゐると非常に不快な顏をして窓をしめてしまつた。

「こんな空氣位肺病患者に惡い空氣はない。沃度瓦斯でも吸ふやうだ」

といひながら彼を見た。そこには然し春に對するKの呪ひが讀まれた。恢復し難い生活の失敗を自覺し始めた中年の男の、惠まれて行く自然に對して懷く險しい呪ひが讀まれた。それでもKは自分を乘り越えるやうな氣勢を示して、机の上の埃を、縱に持つた雜記帳でさつと拂ひ落しながら、又論じ始めた。

「要するにだ。君が今の境遇から自由の境遇に跳ね返らうと思ふなら、君の過剩勢力が生み出したものを、自然がするやうに一とつぶしにつぶしてしまへばいゝぢやないか。簡單にいへばP夫人に智慧を授けて子をおろさせるんだ。P夫人もどれ程喜ぶか知れやしないよ。而してその結果に對して自然そのものゝやうに無關心でゐればいゝんだ。自然がちやんと模範を示してゐるぢやないか。……君見たいな人間が出て來るからマルサスなんかゞ氣を揉むんだよ」

彼はKに對して明かな敵意を感ぜずにはゐられなくなつた。然し彼はKの僞惡的傾向を知つてゐたから、無關にKに襲ひかゝらうとはしなかつた。たゞ彼の心の中には煮えくりかへるやうに、Kの言葉に反抗する强い本能

の力が荒れまはつてゐた。彼の眼はひとりでに險しくならないではゐられなかつた。

「理窟は君を雄辯にしても經驗は君を沈默させるだらう。君なんぞはそんな境遇に自分が立つまで靜かに待つてゐて見るがいゝんだ」

彼はきつぱりかういつて、二つの大きな眼に涙をためながらKをぢつと見た。

Kはせゝら笑つた。

「君位な經驗は僕は十も二十も通つて來てゐるんだよ、氣の毒ながら。僕の靑年時代は『文學界』の連中が思想の解放を叫んだ頃で、それが若い女にも飛火をし出してゐたんだ。少し眼の早いものには機會はそこいら中にいくらもころがつてゐたんだ。どんな理窟でも僕の理窟が經驗から來てゐなかつたらお目には懸らないんだよ」

彼はもう我慢がしてゐられなかつた。

「君のその尊い經驗は君にそんな理窟より敎へなかつたのか」

Kは彼を冷やかに見かへした。

「ぢや君の御大層な經驗が君に敎へた理窟といふのを伺はうか」

彼はその隙になると何んにもいへなかつた。云つていへない譯ではなかつたけれども、こんな場合に物をいふのが屈辱としか感ぜられなかつた。彼は自分をK以上に立ち優れたものとは少しも思はなかつた。彼はP夫人に對する卑劣な言動で十分打ちのめされてゐた。彼は自分の墮落を誰よりも強く感じてゐた。Kに對して何んの誇るべき所があらうぞ。彼はKの前にでも頭を下げてあやまりたかつた。而してもう一度太陽の光を少年の心で仰ぎ見たかつた。彼は何んとかして償ひが出來るなら償ひがしたかつた。感じ深い心はやむ時なくすゝり泣いてゐた。若し懺悔で自分が自分を兎せるなら、どんな人間の前に出ても懺悔をしたかつた。彼はP夫人との愛情のな

い肉交を心から憎んだけれども、それは本當に彼の災ひではなかつたのだ。彼は穢いものを憎むやうな心持でこの事を憎んだのだ。然し夫人を強迫した彼の心を思ふと、彼は自分に戰慄せずにはゐられなかつた。どんな事でもする心だと彼は自分の心に烙印を押してしまつたのだ。彼はこの心持をKに傳へたいと思つて何もかも打ち明けて見た。然しKは彼の心持を存分に辱かしめたり穢したりした。もうこゝにも自分の落着き場はないと彼は心の中で思つた。

彼はKに一言も云はずにその顏をぢつと見續けた。彼の大きな眼は、涙をためたまゝ、惡夢にでも襲はれたやうに瞬きをしなくなつてゐた。張り切つた色白の額もKを見詰めてゐると思はれた。興奮の爲めに彼の四肢はあすこゝ痙攣的に震へてゐた。

Kは暫くの間はしら〴〵しい樣子で彼を尻眼にかけてゐたが、やがて彼の熱烈な熟視を受け切れずに眼をたじろがし始めた。Kはそれを自分でいま〳〵しく思つてゐるらしかつた。而して笑つた聲に怒りをこめた。

「何んだつてさう僕の面ばかり見るんだい。僕の面には君の答へは書いてはないよ」

といつた。彼はそのまゝの眼付で答へた。

「僕は君の顏なんぞは見てはゐやしない。君の心を見ようとしてゐるんだ。君の魂を見ようとしてゐるんだ。君は自分の魂を僞つてゐるに違ひないんだ。僕には君のいふ事が解らない。もし二人の間が眞劍なら、そんな筈はないんだ。君は自分の生活を後悔した覺えはないのかい」

「後悔！」

こゝでKはまた不愉快さうな顏をしながら快げな聲を出して高く笑つた。

「生れた事には後悔もしようさ。その外の事に後悔もへちまもあるもんか。おいその眼を何處かに片附けないか。

僕は影が段々薄くなりさうだよ。戯談ぢやない」

Aの眼は依然としてKから離れなかつた。Kはうろたへ始めた。

一二

Kと激しい口論をした翌日、一睡もしなかつた彼は二三の新聞に、家庭の仕事に雇はれたいといふ廣告を出して見たら、すぐ雇主がついた。それはボストンから汽車で五十分かゝる或る大地主の家だつた。彼はKと氣まづいまゝで別れて、小さなトランク一つを持つてその小さな村に落着く事になつた。それまでに、彼はジュリヤの父なるM教授から何んとか云つて來るにちがひないと恐れを抱きながら心待ちをしてゐたが、何んの消息もなかつた。ジュリヤやフロラからは勿論風の便りもなかつた。彼はそれを心安くも思つた。然し同時に喰ひ入るやうな淋しさをどうする事も出來なかつた。彼がもう一度と思つて試みた學徒の生活は、彼が豫期した通り、悲しくも無益に終つてしまつたけれども、たゞM教授だけは不思議に彼の愛慕と尊敬をそゝる唯一人だつたのだ。むづかしい顔をして、怒りつぽいせつかちな老人でありながら、十分な學識と獨自性とを持つて、眞實な人ばかりに備はる本當のユーモアに隈どられたその人柄を、彼は又なく愛せずにはゐられなかつた。愛憎の激しい青年期の彼の心は、この老教授をいたゞく研究室の空氣の中ではいつでも快活であられた。けれども彼はその老人から第一に離れなければならないはめになつてしまつた。彼が大學を見棄てるにつけて、一番名殘り惜しく感じたのはそれだつた。彼は汽車の中でM教授の事を思ひながら眼に涙を浮べてゐた。而して一枚の葉書に、

「わが敬愛する老教授！

さうあなたをお呼び申したい一人の異邦の青年は、あなたの信頼を裏切つた墮落で自分を存分に鞭ちながら、

一秒々々あなたから離れて行きつゝあります。今地上に私位孤獨な漂浪人はありません。あなたの記憶さへこの胸からもぎ取らなければならないのですから。左様なら永久に。

あなたの健康を祈る事すらしてはならぬ　　Ａより」

と書いて見た。彼は暫くそれを涙の眼で眺めてゐた。が、何を思つたのかずた／＼に引きさいて汽車の窓からなげ棄てゝしまつた。窓の外にはしめやかな五月の雨が降つてゐた。

眼ざす停車場に着いて見ると、それは flag station といつてもいゝ位さゝやかな建物だつた。苜蓿やチモシーが構内まで生えてゐて、入口の屋根裏からは燕が雨に濡れながら呑氣らしく飛び出したり飛び歸つたりしてゐた。入口には大きな收穫車にパーシェロン種の輓馬を二匹までつけて、農場の管理人が彼を迎へに來てゐた。車の中に小さなトランクがたつた一つ彼によつて抛り込まれると、日本人のやうにぢやき／＼した髮の胡麻鹽頭の管理人は人の好さゝうな小さな眼をくり／＼させて、荷物はこれだけかと訝るやうに尋ねた。赤帽にしこたま荷を背負はして、旅館の番頭にペコ／＼御辭儀をさせながら、家族と一緒にかつかと暑い避暑地などの停車場を出た彼の過去が、弱くなつた心につけ込んで思ひ出されたりした。

車の上で彼のさしてゐた洋傘の柄に雨が漏り出した頃、馬車はやうやく農場についた。母屋の臺所の前に馬が止ると、そこいらの窓からガラス越しに、この邊には珍らしい異邦人を眺めようとする顔が現はれた。彼は管理人の家族の住家と雇勞働者の合宿所を兼ねた一構へに、輕々と彼のトランクを擔いでくれた管理人に案内されて這入つて行つた。大きな食堂のすぐ側からまがりくねつた暗い狹い階子段を上ると、たつた一つ切り放されたやうに、物置きにでも使はれてゐたらしい西向きの小さな部屋があつた。一つの木製の寢臺と、一つの洗面臺と、一つの椅子――而して離れて建てられた便所に通ふ渡廊下の屋根と、女中部屋や臺所のある母屋の背面とを景色と

して切り取る一つの窓。それは辯護士のPが彼にあてがつた部屋よりも更に貧しい部屋だつた。

然し今の彼にとつて一人になるのはどれ程望ましい事だつたらう。顔でも洗つたら主人に引合せるから降りて來いと云つて、管理人が部屋を出てしまふと、彼はすぐ窓をあけて魚が水を吸ふやうに、しとつた初夏の大氣を吸つた。而してほつと氣息をついた。是れまで惡性の蔦のやうに彼の心にまつはり附いてゐた苦々しい味ひが兎に角綺麗に取り去られたやうに思つた。彼がKと一緒に住つてゐた町も、畑や野の眞中にぽつゝんと投げ下ろされたやうに出來た町で、淸い空氣と淸い水との潤澤な閑雅な所であつた。大地を愛する彼の心はその町を好まないではゐられなかつた。そこに足を踏み入れた時には胸に動悸を感ずる位喜んでゐた。こゝなら勉强らしい勉强が出來さうだと思つてゐた。然し一度P夫人との忌はしい關係が出來たり、ジュリヤとの愛の破綻が持上つたりして見ると、その閑雅な町も彼の眼には見違へるやうに姿を變へてしまつてゐた。彼がその町を汚したやうにも思へた。町が彼を汚したやうにも思へた。そこに居續けるのは上面だけでしか交際の出來ない人間と向ひ合つてゐるやうなぎごちなさを彼に覺えさせた。彼は路傍の人を見捨てるやうにその町を見捨てゝこゝまで逃げて來たのだつた。

今彼の眼の前には總てのものが新しくなつてゐた。堅くこびりついた思ひ出の汚點はどんな汚い隅つこにも見出されなかつた。臺所の前の廣場は萠えさかる牧草に被はれて、降り續く雨の爲めに綠を流さんばかり靑かつた。小さく出來た水溜には巢を出たばかりと思はしい雀の子が、親鳥に敎へられて可愛らしく行水をつかつてゐた。戶外からも家の中からも、耳にたつ程な音は聞こえて來ないで、總ての上にしめやかな雨が降りそゝいでゐた。淋しくはあつた。然しそれは彼にとつて久しぶりの甘い淋しさだつた。

つれづれと窓から戶外を見てゐる中に、彼は抵抗しがたい睡氣に襲はれた。さういへば眠りらしい眠りを知ら

なかつたのはもう幾日になるだらう。幾箇月になるだらう。彼は窓際を離れるとふら〳〵と寢臺に近よつて、靴もぬがずにその上にぶつたふれた。何處かで雨樋を傳つて落ちる琴のやうな雨水の音がかすかに聞こえてゐた。それは日本を去つてから彼が絕えて聞かなかつたなつかしい音だつた。彼はそれに耳を傾けながらいつの間にか眠つてしまつてゐた。

突然彼は夢も見ない平和な眠りから沒義道に呼びさまされた。彼はぼんやり眼を開いて見たが、そこに管理人が突つ立つてゐるのは見えながら、快い睡氣が彼の體をどん〳〵深い柔かい所に連れ込んで行くので、それに身を任せて、又もや眠りに落ちて行かうとした。彼の眼は義理にも開かうとはしなかつた。彼はも一度こづき起された。途端に彼はむしやくしやな怒氣を感じて起き上るとはつきり眼を開いて管理人を睨みつけた。眼は眞赤に充血して、體の中の細胞は一つ〳〵飽き足らない眠りを要求して地團駄を踏んでゐた。然し管理人を見ると彼は初めて自分が何處にゐて何をすべき人間であるかゞはつきり分つた。眞晝間假睡をする勞働者があるべき筈がない。

彼の新しい境遇は彼がぼんやり思つたやうに自由でも呑氣でもなかつたのだ。寢不足な澁い顏をしながら彼は自分の身のまはりを見まはした。而して管理人の後についてぶツつりしながら母屋の臺所の方に渡廊下を歩いて行つた。

一三

夕食の後始末をすますと七時半にはなつてゐた。朝の五時半に床を離れて、夕方の七時半まで何か彼にかして働かなければならないのは、非常な苦痛に相違なかつた。しかもその勞働は彼にとつて何んの興味もないものだ

つたからなほたまらなかつた。五月末といへば、五時半ではまだ薄暗かつた。眼ざまし時計が食堂で鳴るのを合圖に、讀書のために夜中過ぎるまで閉ぢずにゐた石のやうに重い瞼を彼は强ひて開いて床を離れた。蠟燭の灯で服を着かへて、オーヴァオールを着けながら階下に降りると、そこにはいつでも管理人の痩せた細君が、籐椅子に腰かけて、足許の大籠から馬鈴薯を取り出してせつせと皮をむいてゐた。妙に高慢で佛頂面なその顔付は起きぬけに見るには適はない顔付だと彼はいつも思つた。母屋の臺所に行くと、眼をさましたばかりの肥つた愛蘭土生れの下女が、ぼんやり立つたまゝ何んにもしないで彼の來るのを待つてゐた。先輩らしく彼女は出來るだけの重荷を彼に投げかけようとした。

　然し萬事は何んと云つても心安かつた。こゝで彼にぶつかつて來る人間は、どれもこれも高が素朴な田舍の人たちで、而も互の間が通り一遍の交渉に過ぎなかつた。彼の生れつきの少年らしい快活さは珍らしく大つぴらに彼の顔に上るやうな事があつた。人々はそれを見て彼に親しみ近づいた。

　然しどうかすると恐ろしい悒鬱が突然地震のやうに襲ひかゝつて來た。彼の顔は見る〳〵蒼ざめて仕事も忘れ果てたやうにぢつと考へ込んだ。催眠劑のやうな田園の空氣は暫くの間、打ちのめされた彼の心に熟睡を與へたが、彈力に富んだ若い氣象をいつ迄も眠らせる事は出來なかつた。いらだゝしい慘めな不眠の習慣が段々又彼を虐み始めた。それはこゝに落着いてから十日目の夜の事だつた。彼は何か忌はしい夢に襲はれて突然夜中に眼を覺ました。しんと鎭まりかへつた恐ろしい暗闇の中で、昂進し切つた彼の心臟だけが今にも破裂しさうに音をたてゝ動悸を打つた。彼は大きな眼を闇の中に開いて自分の周圍を見まはして見た。闇は闇に續くばかりだつた。何處にも光はなかつた。暫くの間さうして闇を見つめてゐると、彼は死の谷に一歩々々落ちて行く魂魄のやうな寒い淋しさを感じ始めた。人の生活から、强ひて、强ひられて、自分を殘る隈なく斷ち切つた自分が恐ろしく淋

しく眺めやられた。熱の高い若い心はおど〳〵と彼を怨みながら彼の胸の中ですゝり泣きをし始めた。

「馬鹿！」

しんとした暗さの中で、叱りつけるやうな彼の獨言が聞こえた。

「これでいゝんだ。是れで貴樣はいゝんだ。貴樣は思ひ存分傷いたがまだ起き上る事を知つてゐたんだ。誰も貴樣の心持を分つてくれる人がない？　それがいゝんだ。貴樣の身のまはりは沙漠のやうに際限もなく荒れ果てたといふのか。いゝぢやないか。貴樣はその眞中に一本生えた椰子のやうに眞直に立つて見ろ。それが出來ない位なら、腰をかゞめて元の生活に歸るがいゝんだ。曲つて生きるよりは眞直に折れて見ろ。どう生きたつて一生は一生だ。貴樣が曲つて生きられるかい」

これだけの言葉を彼の耳は、誰か彼を導いて行く教師の訓戒のやうに聞いた。自分の獨語とは思はれなかつた。「さうだ」とはつきり彼はその言葉に應答へをした。が、すぐその後から淋しさが一層强く湧き起つた。彼は淋しさの爲めにわく〳〵震へ出した。默つてはゐられなくなつて、兩手を延ばして寢臺の上にかけた物を所きらはず撫でまはしたりした。毛布のざら〳〵した手ざはりが小氣味惡く傳はつて來るばかりだつた。固い大地までが、彼の體の下で砂のやうにずる〳〵と崩れ落ちるやうに思へた。

とても又寢附けさうにはなかつた。そればかりではない。激しい神經の興奮に促されて、フロラの記憶がまざまざと甦つて來た。圖書館の事務所の椅子につゝましく腰をかけて、鼻から口許にかけて特色のある横顏を見せながら、書物を讀み耽つてゐる姿などが、彼の肉情をさへ誘つて思ひ出された。それに較べるとジュリヤの記憶は、あの激情的な告白の場面があるにもかゝはらず、段々彼の心から薄れて行つた。彼はフロラに於て取り逃がしてならないものを取り逃がしたと思はないではゐられなかつた。生れるとから半分だけしか持つて來なかつた

彼の心をフロラが持つて生れてゐて、殘りの半分を、自分では氣が附かぬながらに、一心に探し求めてゐる、その物足らない淋しさをフロラはあの澄み透つて眞實な眼に集めて、彼を見てゐたやうに思はれた。彼は寢床の中で彼女のしいいなやかな、すこやかな、若々しい肉體を眼の前にあるやうに想像し始めた。暫くの間は、彼はこの妄想のするがまゝに任せてゐた。彼は暗闇の中で大きく眼を見開いたまゝ暗闇を見ずに、みづ〳〵しく汗ばんだ處女の肉體を、胸を躍らせながら見詰めてゐた。絶望の心持はどん〳〵彼を忌はしい行爲の方に引きずり込んだ。彼は自分に惘れながらも、それに抵抗しようとする潔癖を差控へて、成行きに任せてゐた。媚びるやうな六月の初めの柔かい暖かい空氣は、抱擁するやうに彼を軟かく押包んだ。彼は自分で自分を忘れようとした。

ふとP夫人の胎に宿つてる肉塊を思ふと、彼は跳ね飛ばされたやうに、總ての妄想を蹴破つてがいばいと床の上に起きなほつて了つた。彼は妄想にふくれてぼいんいやいりしかけた頭を激しくふつて、顳顬を續けざまにたゝいてゐた。

而して手探りで衣服を着かへた。而して音のしないやうに階子段を下りて戸外に出た。

闇夜だつた。一面に晴れ亙つた空は梨地のやうに星をちりばめた淨らかな溫かい膚を擴げて、生々の氣に充ち溢れた大地を母のやうに抱いてゐた。彼は潤ひを帶びて脹らんだ土の上を足で探りながら廣い馬車道を池のある方に降りて行つた。母屋を出はづれると木柵があつて、その先きは兩側とも牧草畑になつてゐた。野趣に富んだ苜蓿の花の甘い香がよどんだまゝほのかに漂つてゐた。彼は眼がだん〳〵暗さに慣れて遠近の見さかひがつくやうになると、急ぎ足でだら〳〵下りの坂道を三町あまりも歩きつゞけた。水の匂ひがして、大きな池の一部が入江のやうに現はれ出た。彼は一氣にその汀の所まで行つた。母屋や合宿所は高みに隱れてもう見えなかつた。半分頽れかゝつた農具置場の細長い屋根だけが圓つこい丘からすべり落ちさうに斜めになつて、黑く空を切り取つ

てゐるだけだつた。

夜晝をかまはず歩き廻る事の好きな、從つて自然の姿の色々を可なり精しく知つてる彼にとつても、その夜のやうなごやかな穩かな夜は珍らしかつた。部屋の中で彼を虐げ苦しめた妄想は途々薄らいで無くなつてしまつて、彼の心には沈んだ、涙ぐましい、圓い悲哀がどんよりと殘つてゐた。

池のめぐりには道がつけてあつて、それが畑に出たり木立を潜つたりしてゐた。廣やかな眼路の限りは晩春の生氣をしたゝかに吸つて醉ひしれて見えた。草の葉や若芽からは青い匂ひがむれ立つて、分秒を爭ひながら延び擴がらうとする草木の力が聲となつて聞こえるかと思はれた。その癖あたりは餘りに靜かだつた。池の水は睡さうな美しい眼のやうに、なごやかに薄濁つて粘りつこく淀んでゐた。眞菰や睡蓮の若葉の間に、水に根をひたして二三本の榛の木が考へ深く立つてゐた。池の對岸には水と空との間を黑く區切つて雜木林が同じほどの背丈に生ひ連なつてゐる中に、錐のやうな椴松だけがすい〳〵と高く聳えてゐた。

ちやぷり……近い中に來る惠み深い雨を豫言するやうに小魚がはねた。その外にも聞こえない聲はあつた　然し音はなかつた。

どう變つて行くかわからないやうな悲しみを胸に祕めながら彼は池のほとりを行つたり來たりした。顎が胸にさはるばかりに頭を垂れて、彼の兩手は衣嚢の中に深くしまはれてゐた。彼の若さとしては、その姿は哀れだつた。彼は自分が知らず識らず感傷的になつてゐるのに氣附いて、いま〳〵しく思ひながらも、やゝともすると譯のわからない甘いやうな涙にひたらうとしてゐた。

然し彼はいつまでもそんな呑氣な事はしてゐられなかつた。自分を甘やかさうとする感情から彼は段々と如實の自分を考へずにはおかれなくなつて來た。彼の歩みは硬ばつて來た。而して仕舞ひには、牛馬に水を飮ませる

ために、水の上にしつらへた小さな棧橋に近寄つて、その杭の一つに孑然と腰をおろした。
彼は石のやうに凝然として動かなかつた。然しその胸の中には恐ろしい執着や、後悔や、絶望的な希望が渦卷きはじめた。彼の心は又P夫人の寢室の方にゐざり寄つて行つた。そこのなじみ深い寢臺の上で熟睡する夫人の體の中に彼の執着はまつしぐらに這入り込んだ。何故そんな事に思ひ切りがつかないんだ。しなければならない仕事はあり餘る程あるではないか。大きな世界が開けかけてゐる。今日まで總ての愛着をふり切り斷ち切り、持つた限りのものをかなぐり捨てたその若々しい冒險的な心が、何故小さな一つの肉塊にそれ程の執着を繫がねばならないのだ。おまけにその肉塊は愛の滿足の結果ではない。醜い偶然が生み出した自然の惡戲に過ぎないのだ。P夫人はたしかにその肉塊に對して露程の愛情も執着も持つてはゐないのだ。そんなくだらない出來事に對して貴樣位馬鹿らしい未練を持つた人間が一體一人でもあるか。どうして生きる積りだ。何をする積りだ。何を愚圖愚圖してゐるのだ。墮落に墮落を重ねながら無駄に時を過ごすのが一生の仕事ではよもあるまい。貴樣は人生から一體何を要求してゐるんだ。第一、要求してゐるのか、與へようとしてゐるのか。獨自の生活を切り開くと覺悟しながら、する事なす事、無自覺な人達のする事とどこが違つてゐるのだ。貴樣はKだけにも徹底してはゐないではないか。父母と兄弟とが貴樣の爲めに拂つた高い代價だけでも考へて見るがいゝ。まあいゝ、勝手なまねをして勝手に苦しんでゐろ。貴樣のやうな手もつけられない馬鹿正直には生活といふものゝ方で呆れ返つてゐるんだ。三昧さがつて氣がつく頃には生活の方で見向きもしないだらうから。土端場に來て馬鹿な面を下げないやうにしろよ。……
焦らだゝしい氣持はわく／＼湧きかへつて、彼を居ても立つてもゐられなくした。どん／＼と胸にうちつけて、機會は急流のやうに彼の後ろに遠ざかつて行くのに、彼は、ぼんやりして懷手をしたまゝ、一つ／＼それを取逃

がしてゐるやうにも思へた。さう考へながらも、彼自身くだらないと思ふ執着は牛蝨のやうに執念く彼の心に喰ひ込んで行くのだ。捨てようと思へば思ふほど二重三重の力を增して逼つて來る愛着。白紙のやうに何もかも分らなくなつてしまつた彼の命をどん底から搖り動かして脅かしに來る愛着。何しろ彼はたゞ一つ殘された彼自身のものを兩手に抱きかゝへたい唯一つの願ひに固まつてしまつてゐた。牛のやうに底力の强い鈍い暗い彼の意志を彼自身どうする事も出來なかつた。一度輝かしい愛の姿に變らうとした彼の若い力は、殘酷な運命の手に脆く踏み躪られながら、ぶす〳〵と何時までもくすぶりながら燃えてゐた。

外のものとては何んにもない。彼はその力が彼を生かすものであれ、殺すものであれ、それにたよる外はなかつた。彼はその力をもてあつかひかねて「どうすればいゝんだ」とよく獨語ちたが、今になつて見ると、どうにもかうにも、その力に引きずられて行く所まで行つて見るより外はなかつた。

彼はやうやく强ひてそこに落着きを見つけて立上つた。露にしとつた肩をたゝきながら、切端つまつた覺悟の齒を喰ひしばつたまゝで、もと來た坂道をそろ〳〵と登り始めた。

夜はまだ明けようとはしなかつた。岡の上まで來て後ろを振り返ると、池の水だけがかすかに燐のやうに光つてぼんやり眞黑な大地の凹みに淀んでゐた。それを見ると彼は今更のやうに、ひし〳〵と自分の孤獨を感じた。慟哭したいやうな、地びたにぶつ倒れて誰にともなく祈りたいやうな淋しさが胸先きに眞黑くこみ上げて來た。

一四

その日の夜、仕事をすますと、彼は管理人に斷つて家を出た。母屋の側を通る時に、窓から、灯のかん〳〵ついた居間の中を見ると、地主夫婦が一人づゝ可愛いゝ女の兒を膝の上に乘せて、さし向ひに何か微笑みながら話

をしてゐた。言葉の少しも聞こえないのが、不思議にも夢のやうな神祕的な感じを彼に與へた。そこを通りぬけると、曇つた空の下に横たはる田舍道は、鼻をつまみさうに暗かつた。

ボストン行きの列車には、おくれ走せながら芝居見物に行くらしい幾組かの男女が、ちらほら座を占めてゐた。他處行きの服裝をして、氣分まで輕くなつたらしいその人々の高笑ひや快活な會話の聲が、彼を一層淋しくさせた。その當時の大統領のローズベルトが日露兩交戰國の爲めに仲裁を試みようとしてゐる、その噂で總ての集團の話題は持ち切つてゐた。彼等はそれが他處行きの衣裳に丁度似附いた話題であるかの如く、面白い興行物の噂でもするやうに噂し合つてゐた。

「一匹の虻だつて大きな馬を惱ます事が出來る。と云つてそれは虻が馬より强いといふ證據にはならない」

「然し東鄕のあの見事な勝はどうだ。もつとやらせておくがいゝよ。どうせ亞米利加の不利益になるんぢやないから」

「何しろ小ぽけな日本は素晴らしい。吶喊する時に啞のやうに默つたまゝで吶喊するさうぢやありませんか」

「本當でせうか」

「たしかに日本人自身の書いた新聞記事にありましたよ」

「專制君主國は羨ましいと私がかねがねいふのはそこの事なんだ。專制國の主權者はたつた一人だが、立憲國になると何百となく議員といふ奴がゐるんだ。そいつが腐敗して見ろ、腐りかけたチースと同様始末のしやうがなくなるんだからな」

「所が日本は立憲國ですよ」

「何？　立憲國？　呪はれでもするがいゝ」

「ハ、ハ、、」

「Teddyは何んといふ敏捷い男だらう。次ぎの選擧は又共和黨の勝利だよ、お氣の毒ながら」

「君のやうな新しがりやには民主黨の國家的價値はわかるまいさ。露西亞や日本まで持つて行つてモンロー主義の破壞を企てないでもよささうなものだ。見てゐ給へ。いまに帝國主義の軛にかゝつて亞米利加が立往生する時が來るから」

「見てゐるとも、節孔のやうな大きな眼を開いて見てゐるよ、見てゐたつて無駄だといふ豫定の事實を暫く片附けて置いてね」

「おや、あすこに坐つてゐるのは日本人ぢやないでせうか」

「どれ、どこに」

「聞こえますよ。すぐ後ろですよ」

こんな會話が前後もなく、あつちこつちで交はされてゐた。Aは自分が注意され出したのに氣がつくと、しまつたと思つた。然しさう思ふ暇も與へないで、好奇心に燃えた客車中の人々の視線は綾のやうに彼に向けられてゐた。一人の政治狂らしい顎髯を生やした老人は突然彼のそばに來て、彼の手を握りながら堅く振つた。

「お前は日本人かえ」

さう問はれると彼は氣むづかしい顔を上げて、老人を見ながら激しく答へた。

「さうだ。が、何か用ですか」

それを皆まで聞かずに老人は彼の手を無二無三に打ちふりながら叫んだ。

「小さな勇ましいJapのために三度萬歳！　私の國とお前の國とは提督ペルリ以來の親友だ。私はお前の國の武

士道も將軍もちやんと知つてゐる。支那を腐らしたやうに露西亞もしたゝか腐らしてやるがいゝ。いゝか。しつかりやれ。私の國は義俠心が强い。いつまでも小さいものに加勢するのを忘れやしない。ローズベルトは何んといつても世界一だ。心配せずに私の國に任せておきな。こゝにゐる人たちは皆んなお前に同情してゐるんだからな」

彼は固よりその老人が一知半解の政治狂だとは察してゐた。それにもかゝはらず不快はやまなかつた。車中の人の、無邪氣には相違ないが、あまり反省のない俗人らしい眼付で、面白半分じろ／＼見られると、むしやくしやしてゐる彼の胸の中には皮肉な輕蔑の心持がむら／＼と起つて來た。

彼は熱心な老人の握手から冷やかに手を引いた。老人は不思議さうな面持で彼を眺めた。彼は今更に變り果てた自分を自分で眺めた。彼はいつの間にか國籍のない浮浪人と同樣になつてゐる事に氣が附いた。彼は國の區別を立てゝ人に接する事を忘れてゐた。彼の前には人は人としか寫らなかつた。彼はこの心持でジュリヤに戀を求めてゐた。又P夫人に對して、この心持で二人の造つた悲しい結果を眺めるやうに、口には出さなかつたが、要求してゐた。彼にとつて餘りに自然なこの要求は、然しジュリヤに取つてもP夫人に取つても考へ及ばない程不自然な要求だつたのだ。彼はその時始めて、自分の淋しさがそんな所にも根を持つてゐるのに氣が附いた。

「この戰は大きいぞ。日本が露西亞と戰つてる間に、貴樣は貴樣で戰ふべき戰があるのだ。貴樣は國籍のない浮浪人なばかりか、どの階級にも屬しない眞裸な人間なんだ。それは貴樣が疾の昔に氣が附いてゐていゝ筈のものだつたんだ。貴樣はまだ小さくつて弱い。然し貴樣の敵はあの政治狂の爺がいふ露西亞でもない。唯物主義のKのいふ有產階級でもない。生活そのものなんだ。……馬鹿正直。貴樣の馬鹿正直は何んといふ止度のない恐ろしい馬鹿正直だらう

落雷のやうに、天啓のやうに、これだけの斷想が彼の頭を過つて通つた。彼の眼の前にはもう政治狂の老人も、輕い心ではしやぎ合ふ乘客もなかつた。彼の顏は人々の興がつて見てゐる前で、悒鬱に、夢みるやうになつた。夢遊病者のやうに大きく見開かれた二つの眼は、用をなさないもの〻恐ろしさを以て人々を撫つた。固く結ばれた大きな口は復た開かうとは思はれなかつた。彼の腕はひとりでに胸の所で堅く組まれてゐた。

乘客は突然石になつたやうな彼を見ると笑ひを殺して顏を見合せた。

「Confounded freak!（手の附けられない變物奴）」

彼の物いふのを聞きに來てゐた生意氣らしい中年の女は、口の所に指をおきそへて、眉をひそめながら、憎らしげに彼を見やつてゐたが、小さな聲で、吐き捨てるやうにかういふと、下らない見世物に高い金を拂つた人のやうに、不平な顏付をして、どん／＼自分の座席に歸つてしまつた。

一五

Aがボストンの停車場に着いて、P夫人の家の前に立つたのはもう九時過ぎてからだつた。いやに雜鬧する市中の賑ひを、田園から來た彼は殊にいやなものに思ひながら、やうやく眼ざす戸口に近よつて呼鈴を押すと、すぐ内から跫音が聞こえた。開けられた戸口には見慣れた女中が立つてゐた。女中は彼を見ると不意打ちを喰つたやうに驚いたらしかつたが、彼は會釋もなく廊下の中に足を踏み入れた。女中は戸もたてずに、一寸お待ち下さいと云つたま〻二階に走りあがつた。

彼は靜かに戸をしめて、帽子掛けに帽子をかけると、ずん／＼客間に這入つて行つた。客間は念入りに掃除がしてあつた。窓に近いソファーの前に眞白なリンネルをかけた小卓が置いてあつて、その上には赤い傘を着た置電

燈と茶器とがきちんと並べてあつた。部屋の眞中に天井から吊り下げられた燭光の强い電燈を消しさへすれば、そこの隅は誂へ向きのあひゞきの場所になると思はれた。もう一つの隅にはマホガニーのグラン・ピアノが昔のまゝに重々しく置かれてゐた。それを見ると彼にはすぐあの時の事が見るやうに思ひ出された。彼はあの邊を嘗て覺えない惑亂した心でもつて、傷ついた牛のやうに歩きまはつてゐたのだ。若し夫人に對する――どう見ても不幸だと思はれ、又さう思はせるやうに巧みに振舞つた、夫人に對する同情さへなかつたら、いかに彼の心が暖かみに飢ゑてゐたとはいへ、彼はあれほどな輕はずみな蹉跌はしなかつたらう。入口に近い肱掛椅子に淺く坐つて、多恨な大きな眼に涙を一ぱいためながら、名もない異郷の一青年にすら同情を求めてゐるP夫人を見ると、彼はもう何もかも忘れてしまつてゐたのだ。彼は肱掛椅子のあつた位置を振り返つた。そこから夫人が運命のやうに、蛇のやうに、飮み込まんばかりに彼を見つめながら近づいて來たのだ。彼は自分の肩にもう一度夫人の震へる手を感じたやうに思つた。彼は彼の暗い生活を導き出したこの部屋に一人で永くはゐ殘れない氣がした。夫人が降りて來なければ、早くこの煉獄をのがれて、二階の地獄に行つた方が却つて心安いと思つた。彼はグラン・ピアノに手を置きそへて顏を伏せてしまつた。而して、それにしてもマァギイはもう寢たのか知らんと、彼の負ふべき十字架のやうな少女の事を思つてゐた。

知れない程靜かに戸が開いたと思つた。彼ははつと空想から取つて返して入口を見た。そこには雪白な服を着て、髮を希臘風に結つたP夫人が、白々しくも處女のやうな氣高さを裝つて、ほゝゑみながら立つてゐた。

その姿は總ての男を彼女に引きつけるには十分淸らかに美しかつた。三十を越してゐるのは明かに知れながら、子供のやうな若さを失はない、淋しく神經質らしいその姿は、不圖彼をすら動かさうとした。然し一度夫人の幻を打破つた彼は、直ちに反動的な不快を夫人の姿勢全體に感じた。然しP夫人はそんな事にはこだはつてゐ

ないらしく、浮いて流れるやうに彼の側によつて來て握手した。而してソファーに案内しようとした。彼はピアノの傍を動かなかつた。夫人はそれをさして氣にかける樣子もなく自分だけソファーに腰かけた。

彼は大膽な、敵意を含む程な眼付を夫人の胸の所に投げた。彼は檢事のやうな冷やかさと鋭さを以て夫人の懷姙の經過を探らうとした。P夫人が彼に姙娠の恐ろしい報知を投げつけたのは十二月の末だつた。而してもう六月が來た。未經驗な彼にも眼につくだけのものが見え出さねばならぬ筈だと彼は思つた。所が夫人の胸は少しも醜くはなつてゐなかつた。下着が減つた故か、前に遇つた時よりも夫人は却つて瘦せた位に見えた。

「あなたは矢張りKさんの所にいらつしやる？　少しもいらつしやいませんでしたわね」

夫人は少し甘えるやうに首をかしげながら尋ねた。その晩彼はもつと彼自身をはつきり夫人に說明する積りで來たのだから、割合に落着いて口がきけた。

「私は今田舍に行つてゐます。然しそれは大した問題ぢやない。私は今夜もつと私をあなたに理解して貰ひたいために來たのです……」

夫人は又機嫌を取るやうに微笑みつゞけた。

「私解つてゐますわ。あの晩の事なんぞ私――その時はそれはこの通りの神經質ですから腹も立てましたけれども――何んとも思つてはゐませんから、もう云はないで下さい。で、今夜はあなたゆつくりいらつしやる御積り？」

「直ぐ歸るんです。だから……」

「終列車は何時に出ますの？」

「それは僕が心得てゐます。あなたが僕を早く歸らせようとしてゐるのに不思議はない。僕にも同感が出來ます。

然し僕は云ふ事だけは云つて歸ります。いけませんか？　いゝ。宜しい」

P夫人は仕方なしに靜かに彼の顏を見守つた。P夫人を眼の前に見ると、彼の心はしめつてゐた。然し雄々しい彼の聲は少し震へを帶びたゞけだつた。

「あなたと僕との間柄はあなた自身の心がよく知つてる筈です。簡單にいへばあなたは僕を弄んだ。まあお聞きなさい。あなたの經驗は僕が憐れむべき童貞の若者だといふ事を見ぬいてゐたのだ。まあ仕舞ひまでお聽きなさい。おまけにあなたはその時飢ゑてゐた。僕は自分の責任を免れようとしてかういふのではない。僕は眞正面から事實を捕へずには置けない質だからいふんです。僕もあなたを弄んだ。言葉がをかしいかも知れない、然し僕の魂は――魂なんだ――魂はあなたを要してはゐなかつた――あなたが要してはゐなかつたやうに。然し僕も飢ゑてゐた。僕の飢ゑてゐたものはあなたの飢ゑてゐたものと同じなのかも知れない。異つてゐるかも知れない。それは兎に角僕の飢ゑがあなたで滿たされないのは、あの恐ろしい破操の瞬間でも僕は忘れてはゐなかつた。それだのに僕はあなたを弄んだ。

いゝからお聽きなさい。

手紙であなたに書いたやうに、僕はこの墮落に對する一番深い責任をあの小さなマーグレットに感じました。然しそれよりも深く自分自身に感じました。虛僞から自分を救ふために僕はあの絕交の手紙を書いたんだ。然しそれよりも恐ろしい虛僞はすぐ後から僕を捕へました。あなたが僕に二人の罰の恐ろしい結果を知らしてよこした時、僕は或る女を戀してゐると思つてゐた。そしてその戀に醉ひしれたあまりに、あなたの手紙には返事も書かなかつた。而してその女にも事實を告げないでゐた。

然し、その女が僕を欺いてゐるのを知つた瞬間に、父といふ僕の本能は僕に十分の復讐をしてしまつた。悄みな

がら、僕はあなたを捨てる事が出來なくなつてしまつたんです。僕はこの苦しみをどう切り拔けていゝか知らなかつた。僕は酒を飮んだ。酒が僕を本能だけにしてしまつた。（こゝまで來ると彼の聲はむせぶやうに震へはじめた）而して本能は僕をあなたの所に引つ張つて來た。醉つたお蔭で僕は本氣に歸つてゐたのに、その時のあなたはどうだ。その時母の慈愛はあなたの何處にあつた。あなたはマーグレットの親でありながら、親の心を知らない人間のやうに、僕の父としての喜びと悲しみを踏み躪らうとした。あなたの心はどん底まで沈んでもその邊より下には行き切らないんだ。あなたは哀れな浮游動物に過ぎないんだ。あなたがどれ程そんな顏をして僕に惡意を持たうとも、明かな事實は云つて退けられねばならない。こんな所で僕は感情に殉じてはゐられない。

あなたが若しその子の母でないとしても僕はその子の父だ。その權利を失はない爲めに僕はあなたの弱點につけこんであなたを强迫した。子のためとはいへ、僕がどれ程この墮落を怒り悲しんだかは、あなたは知るまい。あなたは今でも、この瞬間でも、なほ恐ろしい强迫をし兼ねない男としてのみ僕を怖がつてゐるやうだ。安心なさい。僕は縱令子を失はうとも……永久に失はうとも、もうあんな墮落をして自分を見失ふやうな事はしないから。

僕は二度とあなたの弱點につけ込むやうな醜い事をしない爲めに、これだけの事實をありのまゝに云つたのです。あなたは縱令顏付では怒つたらしく見せても、心の中では釘をうち込まれるやうに僕のいふ事を認めない譯には行かないんだ。

あなたが若し僞善の假面を脫がうとしないのならそれでもいゝ。たゞその子を僕に與へて下さい。その子が僕の子である事をはつきり誓つて下さい。僕の爲めにその子を殺さずに生んで下さい。その子が何時生れるかを知らして下さい。その子を胸に抱いた時に僕ははじめて本當の生活をする事が出來るんだから。何んにもない僕には

その子だけがあるんです。若し僕を感ずる事が出來なければ、あなたは少くとも僕を理解してくれる事は出來るだらう。若し……」

ぎよつとして彼は入口の方に耳を欹てた。魂からしぼり出されるやうな彼の告白に打たれながらも、淺墓な負惜しみの心から、わざと平氣を裝つて、まじろぎもせず彼を見入つてゐたP夫人は彼以上に驚いて顏色を變へたが、彼の眼に觸れないやうに顏をふりむけて、いきなり立上ると急いで玄關の方に部屋を出た。表戸の外からは鍵を入れて錠をあけるらしい音がなほ聞こえてゐた。

突然の侵入者にP夫人の返事を聞きはぐらした彼は、感情の突然ゆるんだのと、返事の得られないとのために、失望して、輕い眩暈をすら感じた。

廊下では男の聲とP夫人の聲とが恐ろしくもつれあつて二三分の間聞こえてゐたが、突然客間の戸を蹴破るやうに押開けて、P夫人に追ひすがられながら、一人の男が這入つて來た。彼は氣を取直してその男を見た。見知らない男だつた。男は彼を見ると急に落着き拂つて、自分を蔑むとも彼自身を蔑むとも思はれるやうな笑ひの影を唇のあたりに漂はしながら、P夫人を見返つた。夫人もその男に眼くばせするやうにして狎れ〳〵しく微笑んだ。而していかにも品よく彼と男との間に立つて、

「まだお近づきがありませんでしたわね。これは私のお友達のWさん。これはF大學にゐるAと仰有る日本の方」

といつて二人を引合はせた。何んとなく駱駝を思はせるやうな、背の高い、頸の長い、鈍さうな形をした癖に光の鈍い眼をもつたその男は、握手の手を出さうとしたが、Aが冷然と立つてるのを見ると、A以上に冷淡な態度になつて、その癖丁寧に上體を屈めて佛蘭西人のやうな挨拶をした。

「貴國の海戰の捷利をお目出たく思ひます」

いかにも氣取つた調子でWといはれた男は白ばつくれた事をいつた。而して今度はP夫人の方を顧みて、親しげに、

「今日は土曜日なもんだから、仕事が少し早く濟みましてね」

といつた。

彼はもうなすべき事がなかつた。いくらあつたとしてももう仕様がなかつた。二言三言言葉をP夫人と交へてから、彼は夫人と離れた。Wといはれた男は戸口まで彼を送り出した。

雨がぽつ〳〵降り出してゐた。彼は服の襟を立てゝ停車場の方に急いだ。P夫人が落着いてゐるらしく見せながら、彼を歸らせよう〳〵としてゐた事がはじめて解つたと彼は思つた。土曜日と聞くとマァギイのゐない譯も分つた。Pの所に泊りに行つてゐるのだ。マァギイのゐない日にWの來たのは或は偶然かも知れない。それにしてもWといふ名は聞いたやうな名だと彼は思つた。

十二時近く農場に歸り着いて合宿所の戸を開けようとする時、はつと彼は思ひついた。かすかな記憶ではあるが、彼が泥醉してP夫人の家に行つた時、二階の窓からP夫人が呼んだ名前ではなかつたらうか。……さうだ……それに違ひなかつた。

P夫人に對する惡意がまた更に彼の胸の中で深まつた。

彼が自分の部屋に這入るとすぐ、遠くから駈け出して來たやうな雨の脚が板屋根をけたゝましく叩いてすつとまた遠退いて行つた。それは眼の前に近づいた夏をはつきりと思はせるやうな自然の奏でる序曲だつた。然し彼はその時の心持とはいかに緣遠いものであつたよ。

彼は蠟燭に火を移して洗面臺の片端に置き、他の片端に紙切をのべて忙しく筆を取つた。

「P夫人
W氏の來訪は總ての問題を未解決のまゝに殘した。あなたは私に返事を認める責任を持つてゐる。私にはあなたを二度と訪れる程の力がない。もつと正確にいへば、二度と訪れるにしては、あまりに激しい力の過剩に押しひしやがれてゐる。
如何なる父も私以上には強く愛しなかつた。愛する所に權利がある。さうだ。愛のある所に權利がある。私はこの權利によつてあなたに訴へる。子は私に返せ」
始めに彼はその投函を明日の朝にしようと思つて、そのまゝ洗面臺の上に置いて、服を脫ぎはじめた。然しすぐ思ひなほして上着も着ずに又眞暗な戶外に出た。郵便函までには四五町行かなければならなかつた。大きな並木の一つに鐵の鎖で結びつけられた不恰好な木箱に手紙を抛りこむと、彼は安堵して元來た道を靜かに歸つて行つた。彼の心は唯火のやうに熱してゐた。熱い淚が譯もなく後から〳〵流れ出るのを彼は拭はうともしなかつた。
部屋に這入ると蠟燭が急に搖れて、彼の大きな影は泳ぐやうに後ろの壁に搖曳した。P夫人を見た事が彼には悪かつた。胎兒に對する愛着の念が腐蝕劑のやうに彼の胸の心に喰ひ込んで來た。獨りぽつちな大きな影は極度に彼を悒欝にした。彼はいきなり蠟燭を消して、闇の中で衣服を着かへた。而して母の胸にすがり附くやうに寢床の中にもぐりこんだ。
シーツで顔を被ひながら、彼はすゝり上げ〳〵泣き出した。

一六

彼がボストン市に行つてから三日目の朝P夫人の返事が來た。

「A様

御手紙拜見。他人の心持を直覺すると思ひこむのは若い人たちの誇りの一つのやうですね。私はそれを面白がつて眺めてゐることが出來ます。

だが胎兒に對してのあなたの愛と私の愛と、どつちが强いかは、直覺を誇るあなたの決め得る問題でない事だけは明かです。折角の直覺を歪めてしまふのは誇りの心がさせる業ですからね。左様なら」

その日は火曜日で、一週間分の麵麭を燒いておく日だつた。昨夕練つておいた麵麭粉が、細長いブリッキ箱の中で一杯に脹れあがつたのを、彼は女中に手傳はせながら、一つ〳〵オーブンの中に入れてゐた。文火ではあるが、オーブンの近くにゐると、汗ばむ程に氣候は暑くなつて來てゐた。彼はシャツの上にオーヴァオールを着て、せつせと働いた。そこに裏口から郵便脚夫が手紙を投げ込んで行つたのだつた。

床に落されたその手紙を見ると彼はすぐにP夫人から來た事を知つた。手紙はこれまで二三回往復したゞけだつたけれども、夫人の手蹟には奇妙な癖があつたのだ。斜に鋭角を爲して字と字の間に迫つたその書體は、見る人を奇妙にいら〳〵させた。彼は殊にその字體が嫌ひだつた。その時も床の上にとげ〳〵しい横文字を見ると、それが確かな凶兆のやうに思はれて、封を切る氣先きを摧かれてしまつたけれども、中に書かれた文句は彼が想像した以上に不愉快なものだつた。胎兒に對しては何處から見ても皆無と思はれる感情をいひ紛らす爲めに、虛ろな言葉で上品ぶつた皮肉を弄してゐる。それが彼の生一本な心持を傷つけ辱かしめた。彼はそこに女中のゐるのも忘れてしまつて、激しい怒りにぶる〳〵震へながら、手紙をずた〳〵に引き裂いてオーブンの中に投げこんだ。

彼の樣子が急に變つたのを訝りながら眺めてゐた女中は、手紙が火にくべられるのを見ると、思はず彼から飛び退いて、無智な顏に氣味惡げな表情を漲らした。

彼は口をきくのが厭になつた。恐ろしい眼付で怖がる女中を呼び寄せて、手まねでブリッキの箱を運ばせた。而してすつかりそれをオーブンの中に入れてしまふと、パタンと蓋をたてゝ、その前に椅子を持つて來て腰かけた。而して默つたまゝで考へ込んでしまつた。

暫くの間不思議な彼の擧動を怖づ〳〵見守つてゐた女中は、ゐたゝまれないといふ風で合宿所の方に臺所を出て行つた。臺所の中では柱時計の音と、ゆるく燃える火の音とだけ靜かに聞こえてゐた。短いながら針で刺すやうなP夫人の手紙の内容で考へて見ると、夫人は單に彼を苦しめる目的のために、生れて來る子に彼を父と名乘らせない積りであるのがよく讀まれた。彼はその子の運命を色々と悲しく考へて見ないではゐられなかつた。八月か九月か、兎に角その一ケ月位の間に哀れな一人の嬰兒が生れ出るだらう。黃色人種の血を半分享けたその子は、生れるとからどんな輕蔑と敵視との的になる事だらう。その子の母が旅行とか病氣とかいふ名義の下に突然姿を隱して移り住む、種々な罪惡の捨て所隱し所である產婦預り所といふ一構への暗い一室で、世の中の光からは全く遮斷されて、その子は生れ出るに違ひない。その子を取り上げる產婆は先づ思ひも寄らない混血兒の出現に眼を見張つて驚くだらう。而してその子の體格や相貌を香具師が一寸法師を見るやうな卑陋な好奇心であらためるだらう。その子が生れ出て、まづはじめに受けなければならないのはこの侮蔑だ。愛するにしろ、憎むにしろ、同じだけの產の苦しみを味はゝねばならぬその母が、その子を枕許近く一瞥した時、その疲れ果てた眼の中にはどれ程忌むべき焰が閃くだらう。彼は母と產婆との間に直ぐ取交はされるに違ひない會話の內容をすら想像して見る事が出來ると思つた。產婆は母の申出を承諾した報酬として多額の金貨を右手に握る事が出來るだらう。而

してその左の手は――地獄の毒焔で洗禮されたその左の手は、嬰兒の小さな口と鼻とに濡れ紙のやうにあてがはれるのではないか。愛のない母は、憎むだけの勞さへ厭はうとするその母は、やうやく惡夢を拂ひ退けた人のやうに、産後の疲勞で昏々と眠つてゐる。その子の父は、自分の子の誕生の何日であるかを知る由もなく、日々の糧を得るために悶えながら、その子の健かな誕生を祈つて心にもない勞働の首木にかゝつて苦しんでゐる。その中で、その嬰兒は薄暗い部屋の中の光を眼に感じて、悲しむとも喜ぶとは思はれぬ一聲の産聲を立てる暇もなく、永遠の――無劫の闇に葬られて行く。若し幸にしてその子が命を取止めても、死から逃れた幸福は、次ぎの瞬間に生の不幸と縫ひ合はされるだらう。

こゝまで考へると、ふと思ひついて、彼は椅子から立上つてオーブンに石炭をなげ込んだ。

いかに彼自身の生活がよく生活されて、氣息を引き取る枕の上で、勝利と叫ぶ事が出來たとしても、若しP夫人の生んだその子の一生が不幸で封印されたものだつたら、彼の生活は畢竟何んだ。彼が生み出した生活は畢竟何んだ。さう思ふと彼の眼の前で人生は墨のやうに暗くなつた。若い彼の心が夢想して築き上げようと努力してゐる人生は、有つて無いも同樣な蜃氣樓に過ぎないのだ。人生とは畢竟運命の玩具箱だ。人間とはその玩具箱に投げ込まれた人形だ。箱の中で人形が頭を上に足を下に順當らしく立つてゐたとした所が、それは逆立ちをしたり、ぶつ倒れたりしてゐる人形があると同樣に偶然な事だ。順當に立つものに誇るべき何物もないやうに、逆立ちするものにも恥づべき何物もないのだ。總ては欠伸にしか値しない程平等だ。

哀れな混血兒は育つて行く。黑い硬い眞直な髮毛と、靑い眼と、白と黃との漆喰をこね合はしたやうに澤のない濁つた皮膚と、病的に瘦せこけた體格とを持つた哀れな混血の私生兒は育つて行く。彼を見る眼はどれもこれも彼を爪彈きする。彼に與へられた食物は、彼に××臭い勞働を要求する。見世物小屋の舞臺か、靴磨きの臺の

下か、孤兒院の臺所か、感化院の矯正室か、監獄か、火葬場か、……それ等が彼には一番似合つた背景なのだ。彼の奇怪な眼は、人を空睨みする奇怪な眼となり、彼の物いはぬ口は、呪咀だけをいふ物いはぬ口となるのだ。誰にも愛されない彼は、憎む事すら知らないで死んで行くだらう。

彼はまたふと椅子から立上つた。而して無意識に石炭をすくひ上げてオーブンの燃口に抛り込んだ。日は高く上つて眞白な光を大きな腰高窓から臺所の床半分がたに撒いてゐた。穢い床板さへ玉のやうに光つた。磨かれた眞鍮の金物類は殊更よく輝いて、光線のあたる所はきら／＼と光る眼のやうだつた。爽かな朝の風が眞白の紗のカーテンを脹らましながら靜かに臺所を吹きぬけた。彼は椅子にかけたまゝ、膝の上に肱をついて、上體を前こごみに丸めて瞬きもせずにまんじりと、オーブンを見詰めてゐた。

彼は然しどうしてもその胎兒を思ひ切る事が出來なかつた。人生が偶然であれ必然であれ、そんな事はどうでもよかつた。生れて來るべきその子を彼自身のものにするのが第一の事だつた。さうする事が人生を偶然にしてしまつてもそれでいゝと思つた。必然にしてしまつてもそれでいゝと思つた。彼は何しろその子を自分の腕に抱き取つて、その行末をしつかりと見取らなければ氣がすまなかつたのだ。

暫くの間その子の事しか考へてゐなかつた彼が、眼がさめたやうにオーブンを見ると石炭の火は消えんばかりになつてゐた。麵麭は碌々脹らみもしないで糝粉のやうにちや／＼と固まつてゐるに違ひない。彼は思はず舌打ちして立上りながら女中の名を呼んだ。女中はゐなかつた。彼は始めて臺所中を見廻した。いつでも一人ではしやいで、愛蘭土の小唄でも謠つたり、下らない戲談を彼にいひかけたり、無駄にあり餘つた五體の力をもてあますやうに、長い溜息をついて、自分の二の腕を脇腹にすぼめて置いて片方の手でたてつゞけになぐりつけたりする、肥つちよの女中がゐないと、矢張り臺所は臺所らしく見えなかつた。彼は又舌皷をうちながら急いで石炭をオ

ーブンにくべた。而して恐る〳〵ブリツキ箱の入れてある方の蓋を開けて見た。箱から膨れ出た麵麭の頭はまだ黃色くもなつてゐなかつた。女中よりも肥えてる癖に恐ろしく性急な地主の細君が、出來損つた麵麭をつきつけてがみ〳〵と怒り出す樣子が眼に見えるやうだつた。彼はその場の光景を想像して苦笑してしまつた。

見ると朝飯の調度の洗ひかへしすらそのまゝにほつたらかしてあつた。時計はもう十時を過ぎた。晝飯の用意に取りかゝらねばならぬ時刻となつてゐるのだ。それまでにオーブンがあいてゐないと晝の燒き物は出來やしない。やがて細君も臺所に顏を見せる時刻だ。怒られると大業に泣き出す女中を思ふと可哀さうになつて、彼は急がしく器物を洗ひはじめた。

そこに管理人に連れられて、女中が這入つて來た。管理人は針のやうに髯を短く延ばした顎を撫でながら、何かいひ出しにくいやうな顏をしてゐたが、女中を見返り〳〵、

「この貴女は少し臆病過ぎるやうだが、先刻どうしたのか、あんたの顏や仕草が餘りこはくて、ゐたゝまれなくなつたと云つて私の方まで顏色を變へて逃げて來たのだ。東洋人は妙な魔法を遣つて不運の種を播くとこれは信じ切つてゐるのでね。何しろ貴女の前で無性に怒つたり呪文を唱へたりするのはよくないよ、あんた」

さう云つてから女中の方を向いて、もう二度とそんな子供じみた眞似をして來たつて寄せつけないからその積りでゐろとたしなめながら、二人を取りなして出て行つてしまつた。

女中は少し足りない顏付に、遠慮らしい色を見せて、薄笑ひしながら彼から洗ひ物を受取つた。

「おい汽車が出來たり汽船が出來たりすると東洋人も西洋人もありはしないんだよ。お前だつて俺だつて同じ心臟を持つてるんだからね。俺の怒るのは矢張り西洋人のやうにしか怒りはしないんだから、これから日本人に遇つても不思議な魔法なんぞ遣ふと思つちやいけないよ。お前のやうに手紙が一本來ると衣囊に三日もしまつてお

いて、日に幾度も讀み返す人から見ると變だつたらうが、あの手紙には本當に俺を怒らす事が書いてあつたんだから燒いたまでだ。お前には關係のない事だから氣を惡くしてはいけないんだ。解つたかい」
といひながら、彼はその女の肥(ふと)つた肩をやさしく敲(たゝ)いてやつた。
彼はさういひながら又しても、生れて來る子がこの國で受けるに違ひない運命を暗く思ひやつた。生れるまで父親といふものが自分の子に對して少しの自由も持ち得ず、母親だけに獨占させて置かねばならぬ自然の法則をさへ恨めしく思つた。而してどんな方法でゞもその子を自分が所有するまでは戰ひぬかうと固く決心した。

一七

農場の仕事は一時間々々々忙しくなつて來た。受精を終つたその花が散る間に楡(エルム)は若い葉をたれ下つた枝に萬遍なく開いて、綠の降下傘のやうな梢を木立の中や、芝生の上にかざし、アカシヤの並木が小さい白藤のやうな花をつけて、鄙(ひな)びた甘つたるい匂ひを所嫌はず振りまき始めると、牧草の一番草と、小麥と燕麥(からすむぎ)との收穫時が來た。周旋人によつて驅り集められた勞働者は合宿所に一ぱいになつた。管理人の細君は眼を廻さんばかりに忙しく臺所をしなければならなかつた。彼と一緒に働いてる女中は合宿所の若者等に色々な意味の眼付を投げられて、有頂天になつた。樂しい時が來ると彼女の云つたその時が來たのだ。彼女はそは／＼と髮や衣裳ばかり氣にし出した。
五時半には、穀物小屋に高くつるされた鐘が、永い冬の眠りから勢よく眼ざめたやうにがーん／＼と朗(ほがら)かに鳴り亙つた。それを合圖に、聲と力と笑ひとの世界が開けた。鷄(にはとり)が啼いた。犬が唯譯もなく滅多無性にそこらを驅け廻つた。旭(あさひ)の光が横ざしに、露にしつとりしとつた野菜畑や牧草地や若木の木立を綠玉のやうに輝かした。總

ての青葉はどん／＼翠を深めた。ぴか／＼光る大鎌や差叉をてんでに持つて、收穫車に乘つた勞働者たちは、胸から出るやうな強い聲で大つぴらに笑ひ興じた。それを挽く蘆毛のパーシェロンは象のやうな足を重く力強く動かしながら、淸く澄み始めた池の方へと降りて行つた。青空の高い／＼かなたからは、雲雀の聲が大地の上に光のやうに降りそゝいだ。

勞働の手はいくらあつても足らなかつた。Ａは臺所の仕事から野良の仕事に廻された。それこそ彼の望む所だつた。この自然の大きな舞踏を見ると、沈みきつた彼の心もさすがに躍り立たないではゐられなかつた。大地を何よりも愛する彼に取つて畑に出て働く程の幸福はないらしく思へた。彼は自分の二倍もありさうな勞働者の中に交つて、收穫車に乘つて野良に出かける身となつた。地主の細君が彼に代つて玉のやうな汗をかき／＼、臺所をした。

勞働者は大部分は日露戰爭が始まつてから故國を離れて米國に漂浪して來たポーランドの人たちだつた。大抵のものには英語が通じなかつた。然しポーランド人と聞くと何故か彼の親しみは極度に湧き上つた。四五人のポーランド生れの猶太人を除けると、彼等の總ては自然から切り取つたばかりの男たちだつた。彼等は仲間に彼の加はつた事をうれしがりも邪魔にもしなかつた。どうかするとその中の一人が彼の臂を捕へて、手眞似で日本が露西亞より強いといふ事を云つて聞かせるらしい事もあつたが、その男自身は戰爭の事などは蚊の鳴いた程にも感じてはをらぬらしかつた。

正直をいふと彼は新しい文明の出發點を彼等に見出したやうに思つた。彼等の心があのまゝで生長したら、今の文明を覆へすに足る美しい文明が生れ出るに違ひないと思つた。彼等と同じ生活を生活するのを彼は喜びとさへ感じた。

然し野良の仕事は他處眼で見た程樂なものでも樂しいものでもなかつた。殊に彼のやうに他の人々に比べて體力の著しく劣つた場合にはさうだつた。負け嫌ひの彼は、彼等のかつぐだけのものを擔ぎ、彼等の刈るだけのものを刈る積りでゐながら、晝近い熱い太陽の光の下では思はず呻き聲を立てた。夕方になつて合宿所に歸る頃には彼は眼を開けてゐられない程草臥れてゐた。晩い夕食を終へて部屋に歸ると何よりも先づ冷たい水で體中の汗が洗ひたかつた。然し西向きの彼の部屋は夕方になる程眞暑くなつてゐて、汲みためて置いた瓶の水は溫湯程に溫んでゐた。シャツの中やズボンの中からは牧草や麥の屑が體溫でひからびて、ぽろ〳〵と床に落ちた。左の腕は刈る時に抱きこむので、麥の刺の爲めに刺戟されて眞赤に痛々しく腫れ上つて熱を持つてゐた。

それでも彼は服を着かへると蠟燭の光の下で洗面臺の上に書物を擴げたり紙をのべたりして見た。彼の意氣組みだけは勞働者等の生活をもつと理想的に生活する積りだつたのだが、無理な姿勢の爲めに體が痛むのに氣がついて眼を覺まして見ると、書物の上に伏つたり、ペンを落したりして、そのまゝ眠りこけてゐる自分を見出して涎を拭きながら苦笑した。

然しかう激しい手足の勞働の爲めに、彼はフロラに對する回想や、生れて來る子に對する執着から大分遠のいて、多少の餘裕を心の中に見出すやうになつてゐた。夕食が濟んで月のいゝ晩などに、彼等と芝生に團欒して、言葉の通ぜぬなりに笑ひ興ずるのは心から樂しまれた。彼等の中の一人にバンジョーのやうな形の、ポーランド特有な樂器を持つてゐるものがあつた。その男は彼等の桂冠詩人だつた。その男が本國の民謠を素朴な調子で奏で出すと、一同は聲をそろへて和唱した。彼はそれを聞きながら潜かに涙を拭つた。そんな感激は滅多に讀書からは得られなかつた。彼は特に親しみを感ずる若い男と、互に頸に腕をからみ合つて、仰向けに芝生に寝ころび、涼しい月の光を浴びながらその謠を聞いた。彼の頸に手を卷いた男も低い聲で歌を謠つた。仁王のやうに頑丈な

その胸の震へが彼の横腹にも傳はつて來た。

彼はさうしてゐながら、靜かに去年の今頃の事を考へた。狂人を相手に悒鬱な狂癲病院に看護夫として過ごしながら、彼の心に汚い塵埃のやうに積り積つた假り物の思想や、迷信や、繫累やを遮二無二血眼になつてこそぎ取らうとしてゐたのだ。性急に剝がした皮痂には、生々しい血が附着してゐるやうに、彼のこそぎ取つた塵埃には屢々彼の肉片までが着いてゐるやうな事があつた。それから一年、何度彼は爐の縁に突つ放された赤坊がやりさうな失敗を重ね／＼したらう。たつた一年の間に彼は足腰が立たない程苦しんだ。彼の前途にどれ程の蹉跌が起るのかそれは分らない。然し少くとも今は彼の生命が本筋を辿つてゐるやうに見えた。この生活の內容を彼は十分嚙みしめて見なければならないと思つた。

若い彼の心には本當の若々しさが本當の道筋から頭を擡げ出したやうに思はれた。人並勝れた大膽さと勇氣と素質とを持ちながら、岐路にそれて、傷つきながら惱み通してゐるKの生活が、今は深い同情と洞察を以て眺めやられた。

一八

かういふ生活が續いて七月も暮れた。勞働に慣れると、烈しい一日の仕事も、夜になつてから讀書もし思索にも耽り得る餘裕を彼に殘した。と同時にP夫人の胎內に向けられた焦々した配慮も甦つた。然し彼はもう徒らに煩悶するやうな事はしなくなつて、强い意志で最後の勝利を收める工夫に餘念がなかつた。一年前に詩人のやうな感傷的な容貌を持つてゐた彼は、この頃の彼とは別人のやうだつた。彼の肉は瘦せる代りに引きしまつて、小鼻や口尻に、盛り上るやうな肉塊が出來た。而して思ふ存分日に燒けて黑くなつた。變らないのはその眼だけだ

つた。左は考へ右は視てゐた。古い麥稈帽子を眼深に被り、シャツの腕をまくり上げ、だぶ〳〵なズボンをはき、大鎌を肩にかたげて、ポーランド人等と一緒に畑に出て行く彼の姿はもう立派な一人前の男だつた。

それは日露の平和會議が大統領ローズベルトの膽煎りでポーツマスに開かれることになり、兩國の使臣が遠からず米國に派遣されるといふ號外が、彼の住んでゐるやうな田舍まで配られた、恐ろしく暑い日の事だつた。彼は十人程の勞働者と一緒に牧草地に出て、心持よく延びた牧草の二番苅をやつてゐた。彼の大鎌に薙ぎ拂はれたライグラスは横倒しになると彼の背丈位はありさうだつた。それが熬り附けるやうな日の光に照らされて見る見るしをれて乾いて、烈しい枯草の香に變つた。瑞々しい草がさつ〳〵と倒れる面白さに彼は暑さも忘れて一心に大鎌を振るつてゐた。

突然彼は眩暈を感じて大鎌を地に突き立てたまゝ眼を閉ぢてしまつた。餘りの激動に彼は端なくも腦貧血を起したのだ。彼は地べたに腰を下ろしたい程五體の疲勞を覺えながら、眞暗くなつた視野の眞中で暫くふら〳〵としてゐた。その時暗黑だつた眼の前がほのかに明るくなつたと思ふとまざ〳〵とKの顏を見た。いつかPと喧嘩をしてその家を出て、Kの所を尋ねたその冬の晩のやうに、Kは日本の手拭で額の所をぎゆつと鉢卷をしてゐた。而してあの皮肉な正しい笑ひを笑つてゐた。彼は思はずはつと思つた。而して額際にはたら〳〵と冷汗を流してゐた。

彼の眩暈はすぐ直つたけれども、Kの不思議な幻影はいつまでも彼の頭にこびり着いて離れなかつた。よくそんな豫覺が實際の結果を牽起した經驗を持つ彼は、何んとなく不安な心懸りを抱いたまゝその日を過ごした。

その翌日彼に配達された郵便は彼の懸念を立派に裏書きしてしまつた。Kから手紙が來たのだ。しかもそれはKの手で書かれたものではなかつた。七月半ばから肺患が嵩じてボストンのC慈恵院に收容されてゐるが、是非

一度來て貰へまいかといふ事が、文章も字も下手な看護婦らしい女の手で認めてあつた。Kの不幸な生涯を深く同感してゐた彼は、この報知に接すると自分の兄の危篤でも知らされたやうに思つた。何んといつても、新しく踏み出さうとした彼の生活に一番深い印象と刺戟とを殘した男は彼だつた。彼は何事を措いてもKの病氣を見てやらなければならないと思つた。Kがたつた一人で惱んでゐる樣子があまりまざ〳〵想像されたから。

彼は早速村の傭人周旋所に駈けつけて無理に一人の男を周旋して貰つた。殘る一ケ月半の傭期限に對して彼はその男に自分の收入から或る高の金を增して渡した。而して古トランクは一時管理人に賴んでおいて身輕な體に有りつたけの金を懷中してボストンに急いだ。

C慈惠院といふのは市の外廓の貧民窟に近い塵溜場の傍に建てられた、バラックのやうな細長い二階建の家だつた。慈惠院といつても、慈善家が寄附し合つて設けた行旅病人收容所に過ぎなかつた。アスファルトが溶けさうに熱した道を行き切つて、玄關に着くと、入口には癈兵らしい老人が椅子に凭りかゝつたまゝ死人のやうに眠つてゐた。彼はその老人をゆり起してKのゐる病室のありかを尋ねた。氣のよさゝうな老人は腰をまげながらよち〳〵と玄關を出て、しなびた手でぎら〳〵と輝く眞晝の太陽から、羊のやうにしよぼ〳〵しい眼をかばひながら、顎をしやくつて向うに見える隔離病室を敎へてくれた。彼はまた靴の底皮を燒きたゞらかすやうな、草も木も生えてゐない、ぽく〳〵埃の立つ赤土の上を、ものゝ一町も歩いて行かなければならなかつた。近所の塵溜場からは物の饐ゑた惡臭が澤山の金蠅と一緒にむれ立つて來た。彼は情けなく思つた。

隔離室はさすがに一人一室だつた。小さな窓の一つだけ開いた、白壁の汚れた小さな部屋に一ぱい擴がつた古型の大きな寢臺の上にKはこちんと小さく橫になつてゐた。その寢臺はこの部屋に合はして造つたものではなく、誰か慈善家が要らなくなつたので寄附したものらしかつた。そのやうにKもその寢臺に臥せるやうに生れたので

はなく、金がないばかりでその中にたゝき込まれたやうに見えた。寢臺の傍には一人の人相の惡い老婆が、頭にだけ看護婦用の白帽を被つて魔女のやうに坐つてゐた。

暑さと胸苦しさにはつ〳〵と喘いでゐるKは開いた戸の前に彼の立つて居るのを見ると、眼を光らして性急に彼をさし招いた。彼は胸をつかれながら近よつて行つて、默つたまゝその痩せさらぼへたKの手を堅く握つた。二人はさうしたまゝで顏を見合はしてゐた。

Kは然しすぐその殉情的な場面をさげすむやうに、皮肉らしく笑つて見せようとした。然しそれはKの顏を薄氣味惡い泣き顏にしてしまふに過ぎなかつた。

「とう〳〵大革命家の末期が來たよ……君にも來るんだ、よく見せておかうと思つて……思つて呼んだんだ。あれだけ攻擊してやつたのに、資本家といふ奴は懲りも性もなく……僕を世話しやがるんだ。慈善家面をしやがつて……（普段ならばKはそこで皮肉に聲を立てゝ笑ふ所だつた。然し彼は顏を滅茶苦茶に歪めて泣くやうに見えた）大革命家も……生產の掠奪者とこの通り妥協したよ。面白いや」

Kはそこで又泣くやうな顏をした。

「まあ坐り給へ」

さう云つて凹んだために恐ろしく大きくなつた眼で老婆の坐つてゐる椅子を指してから老婆を睨みつけた。木偶のやうに知らん顏をしてゐた老婆は不承無精に立上ると、大きな靴をごとん〳〵いはして部屋を出て行つてしまつた。

Aは老婆の坐つてゐた椅子が氣味惡く暖まつてゐるのを感じながら、それに腰をかけた。

「よく僕の居所が分つたね」

彼はKに對する好意を十分に示すやうな聲で尋ねて見た。

「Wといふ社會主義者の出來損ひがP夫人から聞いてくれたんだ。WはPの細君の所で君にも會つたと云つてゐた……君は……君はあの女の事は知つてるんだらうな」

「七月の初めに會つたぎりでその後の事は知らないんだ」

Wと聞くと、彼は駱駝のやうに無様なその男を思ひ出すと共に、P夫人のその後の消息が氣になつて暗く默つてしまつた。

「さうか……彼女はPと法律上の離婚がすんで、もうWと一緒にフロリダの方に新婚旅行に出かけたよ」

彼はそれを聞くと、病人の前も忘れて飛び上らんばかりに驚いてしまつた。而してせき込みながら、

「ぢや產はもうすましたのか」

と前後もかまはず尋ねずにはゐられなかつた。

「產？」

Kは又極端に顏を歪めた。

「馬鹿！　七月の初めに會つてゐながら、彼女の腹の具合が……分らなかつたんか。彼女は孕んでなんかゐやしなかつたんだ。あれはどうも君を自分に引きつけて置いて醜交を續けるための手だつたんだな屹度」

彼はそんな事を夢にも信ずる事が出來なかつた。

Kは大急ぎでいふべき事をいはないではゐられないやうに、咳嗽の間から、さし逼る呼吸の間から、つぶれた笛のやうな聲をふり搾つて言葉を續けた。

「それがだね……それがWが出來て見ると、君なんかは……彼女の物好きの槍玉に擧げた君なんかは……何んて

云つたらいゝかなあ……兎に角要らなくなつたんだ（Kはまたひい〳〵苦しく呼吸をしながら、惨めに顔を歪めた）……だから僕の云はない事か。年嵩の者の云ふ事は聽くもんなんだ。これから苦しむなら……苦しむなら、少しは苦しみ甲斐のある事で、苦しみ給へ」

Kはさういふと、苦しさうに眼をつぶつてしまつた。

彼はまだKの言葉を信ずる事が出來なかつた。Kが抱いてゐる性的道徳から割り出して、彼を無用な配慮から救ひ出さうとする末期の老婆親切らしく思はれた。彼も默つたまゝ暗い心で下を向いてしまつた。

然しWといふ名は彼にとつて呪はしい名だつた。彼が醉つぱらつてP夫人の軒下に立つた時、夫人が二階の窓から恐る〳〵訊ねた名だと思ふと、Kの言葉には急に否む事の出來ない重みが加へられるやうにも思へた。

「熱が出たやうだ。頭に氷嚢をあてゝくれ」

暫くしてからKは眼をつぶつたまゝでさう云つた。

彼は慌てゝ氷嚢を作りに部屋を出た。

…………………………

その次ぎの日の午食をKは廿さうに彼の匙から食べた。而して赤の他人に介抱されるよりは心持がいゝと云つたりした。彼は何故もつと早くKを看護しに來なかつたらうと悔んだ。

その日もひどく熱い日だつたが、Kには熱いのも寒いのもよう分らないらしかつた。Aが脂汗をかきながら風通しの惡い部屋でシャツ一つになつてゐると、寒くはないかなどと云つた。釜の底のやうな寢臺の中でKは惡寒の爲めにわな〳〵と震へてゐた。堅く閉ぢた眼のまはりは紫色に輪をかけて、小鼻がげつそりとこけたその下に、脣が合はない位齒ぐきが飛び出してゐた。金蠅が追つても〳〵血の氣なく開かれた唇のあたりを目がけて飛びよ

つた。Aはボール箱の破片でそれを追ひながら、Kの死期が近よつたのを思はないではゐられなかつた。時世が時世ならばKなどはかうして朽ち果てる人間ではないのだ。何んといふ純な心を持つた男だらう。立派な一人の殉教者である癖に、Kは自分を一かどの利己主義者として誇つてゐる。而してこの誇りの爲めには、こんな異郷で碌々看護する人もなく、死んで行くのだ。P夫人の事などは忘れてしまつて、彼の眼にはKを憐れむ涙が一杯に溜つてゐた。彼はそれをKに氣取られまいために色々に苦しくごまかした。

Kは不圖大きな眼をあけて怪しさうにあたりを見廻してゐたが、Aを見　けると、手まねで唇を濡らせと命じた。彼は乾いた粘液でこはゞつた唇に、匙から氷水を移してやつた。Kは甘さうに暫くそれをちやぶ〱と味はつた。

「おい……僕の枕許に財布があるだらう。それを……あの鬼、……看護婦の鬼婆に知らせ……まいとし……て僕は苦心したよ。彼女はひどい婆だ。苦心もかうなると……惨めなもんだ……それに、君も金があるか……あるならいくらでも僕のに……僕のに加へて、……いゝか……支那料理屋……君と行つたな……あすこで張つてるBといふ女に……やつてくれ……僕の形見だつて、……その代り……その代り、君にもいゝ事を聞かせるから、な……」

Kの唇は叉匙で沾はされなければならなかつた。

「大學の……教授連が……その家族が……親切ごかしに、交る〲……見舞ひに來るんだ……後の祭だい。フロラも一度來たよ。僕は……僕は君を……美しく……描いておいたぜ。あれはいゝ女だ。死ぬ前には人間が……人間の心が……不思議に瞭り分る……あれはいゝ……フロラはいゝ……フロラが來たよ。……そこに行くと……日本の奴等は氣持がいゝ……影だつて……見せやせん」

恐ろしい顏をしてKはこれだけの事を云ひ終ると、また眼を閉ぢて默つてしまつた。

二時頃Kは又眼を開いた。Aは唇をしめしてやつた。
「時計は……君にやる……直せ……動く……それからな君はフロラにな……人間は……人間は……それから……それ……」
Kの呼吸は不思議に靜かになつて、それと共に聲まで薄れて行つた。喉の所で痰がぜろぜろいつた。彼はぎよつとして思はず立上つた。而してKの耳に口をよせて、
「おい……K……しつかりしろ。今醫者を呼んでくる。しつかりしろ」
と怒鳴りつけた。死ぬるものなら早く死ぬ方がどれだけ幸だらうと思つてゐた彼は、この瞬間に來ると自分が死にさうにうろたへて、部屋を走り出た。
あちらに走りこちらに走りしてゐる間に時間はだんだん經つた。彼はもどかしがつて事務員や看護婦に歎願したり怒鳴りつけたりした。
憂慮に震へながら醫者を案内して彼がKの部屋に這入つた時には、そこを出てから半時間の餘を費してゐた。Kは半眼に眼を開いて、口をあんぐりと開けたまゝ死んでゐた。この哀れな殉教者の唇のまはりには金蠅が早くも五六匹たかつてゐた。醫者はKの樣子を見ると診察もせずに歸つて行つてしまつた。
Aは蒸すやうな暑さにひたりながら、涙も出ない程落膽してKを見守るのみだつた。

一九

Kの死骸はその夕方死亡室に移された。
Aは通夜の心持で、その棺の側で一夜を過ごした。

病院の庭の隅に建てられた八角形の堅い輪廓を持つた死亡室は、暗い夜の空の下に、ぢつと蹲るやうに立つてゐた。

黑布で被はれた粗末な棺の上には、薔薇の花を三つほどちりばめた貧しい草花の十字架が、反語のやうに小さく置かれてゐた。

木柵で仕切られた隣りの一構へには、赤子のらしい小さな棺が据ゑられてあつた。舊敎に歸依する家族のものらしく、棺の前には小さな聖母の畫像が安置されて、小さな蠟燭が點されてゐた。眞黑な喪服に身を包んだ中年らしい一人の女が、時々啜泣きをしながら、死んだものゝやうに棺の側に蹲つてゐたが、十二時が打つと共に夜廻り番が來て促したので、絕望的な泣き聲を、靜まり返つた夜の空氣に震ひ漂はせながら、歸つて行つてしまつた。夜番はAにも歸つたらいゝだらうといつたが、Aは聽かずに殘つてゐたのだ。

暫くすると蠟燭の火は急に燃えさかつて急に消えてしまつた。晴れ亙つた空にちりばめられた星々のかすかな光の外には、たゞ底深い暗黑だけが彼の周圍を取卷いてゐた。その暗黑は彼の胸の中までも沁み透るやうに見えた。

「この總てのものゝ空しさはどうだ」

Kの棺の前の窓框に腰かけてゐたAは、夜の空を見上げながら不圖かう獨語ちた。

今朝の今朝まで、彼の頭を一杯に領してゐた大きな問題——P夫人の胎に宿つた嬰兒——は、Kの一言の爲めに、今は煙よりも果敢なく迹形もなくなつてしまつた。未練とも云ふべき奇怪な彼の愛着と、彼の生涯についてまはるべき苦しい責任とは、たゞ一瞬の間に有から無に歸してしまつた。それは一つの強い鐵鎖から彼がすつかり解放された事ではあつたけれども、彼の心の底には解放された瞬間から虐たらしい生傷が出來て、その傷口が

苦しげにをめき叫んだ。理窟から云ふと、KがP夫人の近況を語つて聞かせた時、彼は思はず愁ひの眉を開くべき筈だつた。實際そんな心持は十分彼の胸に湧き起つてゐた。それにも拘はらず、そんな心持までを押包んでどす黒い空虚が彼を戰かした。總ては一場の惡夢に過ぎなかつたと喜びもしよう。然しこの惡夢を生んだ人間の心はどうだ。それは何んといふ暗い姿だ、P夫人と云ひ、彼自身と云ひ。P夫人を責め拔いてそれを正當な事だと思つてゐた彼は、端なくもその夫人と同じ事を欲し、同じ事を恐れ、同じ事で喜ぶ彼自身を見出して了つたのだ。彼は眼を据ゑてKの棺をしげ／＼と見やつた。Kの存在も今は空しいのだ。先刻までKはゐた。今は居ない。今彼の心からも體からも、總てのものは殘りなく去つてしまつてゐた。彼にはP夫人の事を思ひ煩ふ必要もない。Kは又Kで死んでしまつてゐた。空しい悒鬱と厭世の心が古沼のやうに熱も光もなく澱んでゐるばかりだつた。

唯斷末魔にKの唇から漏れかゝつて永久に姿を隱したその斷片的な言葉だけが、幽靈のやうに彼に襲ひ逼つた。一體彼は死際までフロラの名を呟いてどうする積りだつたのだらう。「人間は……人間は……」と二言云つたKは人間といふものについて何を彼に教へようとしたのだらう。Kの意志は永久に閉されて、彼はKの心の程を推し測る事すら出來ないのだ。さう思ふと彼の心は不意に氷のやうに固く冷たくなつてしまつた。

黎明前の空氣は冷えてゐた。大陸の夏でなければない冷え方だつた。彼は夏服の襟を立てゝ腕組みをしながら、がた／＼と震へて棺の前を往つたり來たりした。

「夜だけでもせめて早く明けるがいゝんだ」

さう小さく獨語ちて、彼は又窓際に行つて空を仰いだ。秋のやうに天は澄んで寒かつた。黎明はまだ來なかつた。黎明前の闇は眞夜中の闇よりも更に暗かつた。

「靜かに……靜かに……」

その闇の中で、逸る心をぢつと押鎭めようと努めて、Aは又幽かにかうさゝやいた。

その時まで火のやうに乾いて燃えてゐた彼の眼から、Kを悲しむのか、自分を憐むのか、熱い涙が流れ出ようとした。Aは齒を喰ひしばつてそれを呑み込んでしまつた。喰ひしばつた唇がぶる／＼と震へた。

（一九一七年十月、中央公論所載の「迷路」と
一九一八年一月、新小説所載の「曉闇」とを合して）

小さき者へ

お前たちが大きくなつて、一人前の人間に育ち上つた時、——その時までお前たちのパヽは生きてゐるかゐないか、それは分らない事だが——父の書き殘したものを繰擴げて見る機會があるだらうと思ふ。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現はれ出るだらう。時はどん／＼移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出來ない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を嗤ひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を嗤ひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏臺にして、高い遠い所に私を乘り越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐたかといふ事實は、永久にお前たちに必要なものだと私は思ふのだ。お前たちがこの書き物を讀んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤ふ間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、勵まし、人生の可能性をお前たちの心に味覺させずにおかないと私は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてゝ書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人のマヽを永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雜誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけといつて來た時、私は何んの氣もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だ」と書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私

の心は悪事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

　曉方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川沿ひの一つ家はけし飛ぶ程搖れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉ぢられた陽の光を二重に遮つて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かしたり、使を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころげこんで來た時は、家中のものが思はずほつと氣息をついて安堵したが、晝になつても晝過ぎになつても出産の模樣が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌てゝしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待つてゐられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の兩手をしつかり握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫くの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまつた。鼾さへかいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から駈けつけてくれた醫者も、顔を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が來る度毎に何か非常の手段を用ゐようかと案じてゐるらしかつた。

　晝過ぎになると戸外の吹雪は段々鎭まつていつて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に來てそつと戯れるまでになつた。然し産室の中の人々にはます〳〵重い不安の雲が蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕はれてしまつた。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と胎兒だけだつた。二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

丁度三時と思はしい時に——産氣がついてから十二時間目に——夕を催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと瞼を開いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげといふより、恐ろしげに顏をゆがめた。而して私の上體を自分の胸の上にたくし込んで、背中を羽がいに抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度にいきんでゐなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこにゐる人々の心は思はず總立ちになつた。醫師と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を勵ました。

ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顏を擧げて見た。産婆の膝許には血の氣のない嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は毬でもつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒々々々といつてゐた。看護婦がそれを持つて來た。産婆は顏と言葉とでその酒を盥の中にあけろと命じた。激しい芳芬と同時に盥の湯は血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸された。暫くしてかすかな産聲が氣息もつけない緊張の沈默を破つて細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現はれ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほゝゑんだ。私はそれを見ると何んといふ事なしに涙が眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たちに何んといつて云ひ現はすべきかを知らない。私の生命全體が涙を私の眼から搾り出したとでもいへばいゝのか知らん。その時から生活の諸相が總て眼の前で變つてしまつた。

お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このやうにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れやうに難易の差こそあれ、父と母とに與へた不思議な印象に變りはない。

かうして若い夫婦はつぎ／＼にお前たち三人の親となつた。

私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐた。而して始終齷齪しながら何一つ自分を「滿足」に近づけるやうな仕事をしてゐなかつた。何事も獨りで嚙みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活を生活してゐながら、私の心はやゝともすると突き上げて來る不安にいら〳〵させられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を惡んだ。何故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のある爲めに後ろに引きずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。家庭の建立に費す勞力と精力とを自分は他に用ふべきではなかつたのか。

私は自分の心の亂れからお前たちの母上を屢〻泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちを沒義道に取りあつかつた。お前達が少し執念く泣いたりいがんだりする聲を聞くと、私は何か殘虐な事をしないではゐられなかつた。原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前たちが泣き騷いだりしたりすると、私は思はず机をたゝいて立上つたりした。而して後ではたまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐながら、激しい言葉を遣つたり、嚴しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が來た。どうしてもお前達を子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寢かしつけたり、一人に牛乳を溫めてあてがつたり、一人に小用をたさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に來てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徵候があるといつた時には、私は唯譯もなく靑くなつてしまつた。檢痰の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つとになるお前たちを殘して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばなら

ぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私がその町に住まひ始めた頃働いてゐた克明(こくめい)な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前達の姿を見ると隱し隱し涙を拭いた。お前達は母上を寢臺の上に見つけると飛んでいつてかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかされてゐないお前たちの母上は、寶を抱きかゝへるやうにお前たちをその胸に集めようとした。私はいゝ加減にあしらつてお前たちを寢臺に近づけないやうにしなければならなかつた。忠義をしようとしながら、周圍の人から極端な誤解を受けて、それを辯解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持を幾度も味つた。それでも私はもう怒る勇氣はなかつた。引きはなすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。玄關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等は二三人もゐる癖に、殘しておいた赤坊のおしめを代へようともしなかつた。氣持ち惡げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐしよ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだつた。やう〳〵お前たちを寢かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は興奮してゐた。仕事をすまして寢付かうとする十一時前後になると、神經の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。曉方(あけがた)になるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされると私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝飯を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心(しん)のやうなものゝ出來た頭を抱へて仕事をする所に出懸けた。

北國には冬が見る〳〵逼(せま)つて來た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寢臺の上に起きかへつて窓の外た眺めてゐたが、私の顏を見ると、早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があんなになつたのを見ると心

細いといふのだ。なるほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も殘らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本當の心持はそんな所にはなくつて、お前たちから一刻も離れてはゐられなくなつてゐたのだ。

今日いよ〳〵退院するといふ日は、霰の降る、寒い風のぴゆう〳〵と吹く惡い日だつたから、私は思ひ止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが、貰つたものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の隅でごそ〳〵と始末してゐた。急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりに集まつて嬉しさうに騷いでゐた。私はそれを見ると淚がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん〳〵押寄せて來る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雜草の株のやうに、互により添つて暖みを分ち合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち五人の暖みでは間に合はない程寒かつた。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを勞はりながら旅雁のやうに南を指して遁れなければならなくなつた。

それは初雪のどん〳〵降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育てゝくれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れる事の出來ないいくつかの顏は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名殘りを惜しんだ。陰鬱な津輕海峽の海の色も後ろになつた。東京まで附いて來てくれた一人の學生は、お前たちの中の一番小さい者を、母のやうに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までゐた處とちがつて、東京には澤山の親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それ

は私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なくK海岸にさゝやかな貸別莊を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして樂しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小康を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼はどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母上は假初の風邪からぐん／＼惡い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病兒は病兒で私を暫くも手放さうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私は遂に倒れた。病兒と枕を竝べて、今まで經驗した事のない高熱の爲めに呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？　私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔まうとはしなかつた。お前たちの爲めに最後まで戰はうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絕頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の眞相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顏を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な淸々しい顏をして枕についたまゝ母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對する Resignation と共にお前たちに對する根強い執着がまざ／＼と刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は凄慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々H海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の臍を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる——而して實際着なかつた——晴着を着て座を立つた母上は內外の母親の眼の前でさめ／＼と泣き崩れた。女ながらに氣象の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場

合でも泣顏などは見せた事がないといつてもいゝ位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまつた。大空を亙る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、太洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のゐる所に來ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、――一人はよち〳〵と歩いて、――一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた――母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頑是ない驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前達は女中に勸められて兵隊のやうに擧手の禮をした。母上は笑つて輕く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の氣息を引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戰が鬪はれた。母上は死に對して最上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめ込むために、鬪つた。血まぶれになつて鬪つたといつていゝ。私も母上もお前たちも幾度彈丸を受け、刀創を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が總てを壓倒した。而して死が總てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を讀む時

があつたら、同時に母上の遺言も讀んで見るがいゝ。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに會はない決心を飜さなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの淸い心に殘酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び〳〵て行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を殘す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時は女中をお前たちにつけて樂しく一日を過ごさして貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」

とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちを母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうとさへ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に强ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが殘酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寢てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齢になつたら私のした事を、卽ち母上のさせようとした事を價高く見る時が來るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて來たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいゝのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の中に妻を犧牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犧牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周圍のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出來ない、憐れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さ

して見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出來ない所に仕事を見出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、勞役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭ち他を生きる事が出來るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらして悒鬱な氣分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が默つて私の書齋に這入つて來る。而して一言パヽといつたぎりで、私の膝によりかゝつたまゝしく／＼と泣き出してしまふ。あゝ何がお前たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、この世を淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駈けて行つて、「マヽ、ちやん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐざと刳り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫の世界を眼前に見る。

世の中の人は私の述懷を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもこゝにも倦きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人は閑散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝはらず、私といはず、お前たちも行く／＼は母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が來るのだ。世の中の人が無頓着だといつてそれを恥ぢてはならない。それは恥づべきことぢやない。私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかつて見ることが出來る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつ

け、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金錢の累ひからは自由だつた。飲みたい藥は何んでも飲む事が出來た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出來た。私たちは偶然な社會組織の結果からこの特權ならざる特權を享樂した。お前たちの或るものはかすかながらU氏一家の模樣を覺えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有ちながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。藥がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の藥が飲みたかつたのだ。然しそれが出來なかつたのだ。U氏は毎日下血しながら役所に通つた。ハンケチを卷き通しな喉からは皺嗄れた聲しか出なかつた。働けば病氣が重る事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出してして貰つた古賀液の注射は、田舍の醫師の不注意から靜脈を外れて、激烈な熱を引起した。而してU氏は無資産の老母と幼兒とを後に殘してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思ひ出すと共に、U氏を思ひ出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋める工夫をしなければならない。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで擴げさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世は淋しい。私たちは唯さういつて濟ましてゐる事が出來るだらうか。お前達と私とは、血を味つた獸

のやうに、愛を味つた。行かう、而して出來るだけ私たちの周圍を淋しさから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものは、たゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならないものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨てゝ人生に乘り出して行くがいゝ。

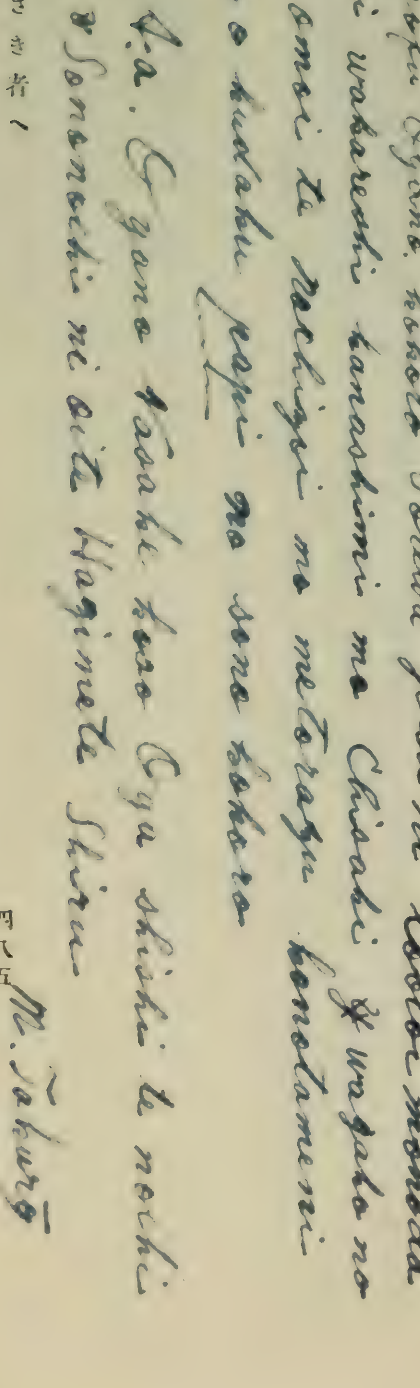
今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと靜まつた夜の沈默の中にお前たちの平和な寢息だけが幽かにこの部屋に聞こえて來る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年たけたものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかつた。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にはミネルバの像や、ゲーテやクロムウエルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は輕い皮肉の心で觀てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨てゝしまふことはどうしても出來ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて來た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。産は女の出陣だ。いゝ子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の裝ひをしたのだ。――その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

深夜の沈默は私を嚴粛にする。私の前には机を隔てゝお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものゝ作用にお前たちを打任してよく眠れ。さうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出來るだらう。

小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。

（一九一八年一月、新潮所載）



動かぬ時計

マリー・アントワネットの寢殿にあつて、華麗なマンテル・ピースを飾つてゐた時には、その置時計は確かに動いてゐたに違ひない。花のやうなその皇后と、溫雅なルヰ第十六世とが濃やかな春をこめた睦言の間に、その時計の精巧な螺條はゆる〳〵とほぐれ、秒から分を刻み、分から時を刻んで、黃金の鈴を靜かな夜の沈默の中に穩かに鳴り響かしたものだらう。恐ろしいギロティンの斧の刃が、王家の誇りをさすがに最後まで捨てなかつた皇后の頸に、情け容赦もなく加へられた頃から、その時計は動かなくなつたと傳へられてゐる。その後ルヰ・ナポレオンが偉大な伯父大帝の遺業を稟けて、佛蘭西帝政の再興を企てた時、チュィレリー宮殿の一室を飾る爲めに、その置時計をヴェルサイユから移したのだが、どれ程熟練な時計師でもそれを元通り動くやうにする事は出來なかつたので、時計はそのまゝ暫く宮中にとゞめ置かれてから、用のないものと一緒に街頭に送り出されて、塵を被つたまゝ、ある骨董屋の店の隅に曝される悲しい運命に陷つてしまつた。骨董屋を訪れる客足は絕えなかつたが、一人として動かぬ時計に未練をかけるやうな物數寄をするものはなかつた。外の商品がどん〳〵新陳代謝する間に、その時計ばかりは、根が生えたものゝやうに、賣れ殘つて幾年か經つた。

所が國家學者のRが巴里に留學中、ふとその時計を見付け出して、由來の面白さに、捨値で日本に買つて歸つたのだつた。それ以來その時計は、廣やかな薄暗いR教授の書齋の一隅に、大理石の事々しい臺の上に据ゑ付けられて、塵も置かせず大切に保存されるやうになつた。

それはどつしりしたマホガニー製の置時計だつた。脚を踏み伸ばしたビザンチン型の牡獅子が横向きに丸彫りになつて立つてゐるその下に、精巧な唐草模様が浮彫りにあしらつてあつて、その花や葉の蔭からは、首の附根に羽根の生えたシェルビムの顔が五つ笑ひながら平和さうに覗き出してゐた。唐草模様は複雑な種々な弧線を描いて、圓い指針盤をしつかりと圍んでゐた。土臺は三段の長方形な角塊を積み重ねた形に出來てゐて、重々しい時計全體を少しのあぶなげもなく支へてゐた。

金で縁取られた雪白の指針盤は、嚴肅ながら何處までも優雅な時計全體の塊體の中央に、プルトーに抱きすくめられてゐたプロサーピナのやうに抱きすくめられてゐた。ダマスクの匕首を思はせる精鋼の指針は凝然として動かなかつた。然し短針より一寸おくれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見やつてゐると、澄み亙つた十二の音が、時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から、今にも凛々と鳴り出しさうに思はれた。

やゝ陰鬱と云ひたい程重々しい書齋の中は森閑としてゐて、物賣りや車の音も聞こえず、解け出した雪のしたゝりが庇を離れて時折り下の水溜りを打つその音だけが、締め切つた窓ガラスを通して幽かに聞こえて來た。

國家學者なるR教授は、窓の傍に引寄せた讀書椅子に悠然と身を凭せて、右手に鉛筆を爪さぐりながら、Cと云ふ若い博士が發表したRに對する反駁文を讀み耽つてゐた。その反駁文といふのはRがその後繼者たるべきB助教授に起草させて、Rの名の下に公けにした國家學史上の論文に對して發表されたものであつた。一年々々度の強くなる老眼鏡越しに、C博士の極めて秩序立つた、急所をゑぐるやうな論旨が、首肯させずには置かないぞといふやうに、ぐん／＼とR教授の腦裡に逼つて來た。明敏な頭腦は持つてゐるが、まだ何處かその師の學説を咀嚼し切らないB助教授の議論にC博士は鋭利なメスのやうな觀察を投げつけた。然しながら攻撃はそれだけでは終つてゐなかつた。それだけならまだいゝがとR教授を思はせるやうな箇所が所々にあつた。R教授の學説の

根柢にまで誤たず逼つて來て、その周圍に穴を掘り下げてゞも行くやうな文意がちよい〳〵見出された。C博士は近頃歐洲留學の旅を終へて歸つて來た若い學者の一人だつた。大學にゐる時には熱心にR教授の講座にも出席した一人だつた。女のやうに華車な身弱さうな若者でゐながら、その人はうそのない、阿らない、精力的な印象を誰にでも與へるやうな容貌を有つてゐた。R教授は竊かにこの若者に特別の注意を拂つた。それ故C博士が留學中に、R教授は自分の關係してゐる大學に招聘しようとして、幾度も手紙をやつたのだけれども、C博士は曖昧な返事をしてゐて、日本に歸るや否やすぐ或る政治上の協會を起し、少數な篤學者を糾合して、政治の學說や實際問題やを熱心に研究し始めた。一般の社會はその小さな協會の存在にすら氣付かなかつたらしいが、學者間にはそれが一つの有力な彈正臺として考へられる程勢力を持ち始めたのだつた。

　R教授が當時歐洲の學界を席捲する程な勢を示したスタイン博士の學說を取入れて歸朝した時は、日本の學界はまだ荒野のやうな處女地だつた。研究機關も教育機關も官學の外には求めやうがなかつた。明晰な精緻な頭腦と異常な努力とがR教授に幸したのは勿論だけれども、學術上の既成觀念が一つも日本に存在してゐなかつた事も、並々ならぬ力となつて彼のために働いた。R教授の主張は唯一の國家學的名說として、スポンジによつて水が吸ひ込まれるやうに、日本の學界に受入れられた。彼の名は忽ちの中に群小を壓して、國內から海外まで響き亙つた。

　R教授は然しそんな事で慢心するやうな下らない人間ではなかつた。政治學や法律學に多少の自信を持つ人々が、風雲に乘じて行政立法の要路に立ち、見る〳〵華々しい社會の表面に浮び出て、新聞の種や噂の的となつた間に、彼は何處までも學者として、書齋と研究室との外には姿を現はさなかつた。その篤學は後進の人たちを驚かしもし、警しめもした。每朝講堂の扉を開いてそこらを掃除し終へるか終へないに、小使の眼に映るものは誰

よりも先づR教授だつた。痩せぎすな背丈の高い教授は、紫メリンスの包みを小脇にかゝへて、古洋服を恥かしげもなく一着して、輕く小使に挨拶を返しながら研究室に這入つて行つた。研究室に這入るや否や、彼は等身に積み重ねられた書物や原稿の間に埋まり込んで、講義の外には一歩たりとも部屋を出なかつた。夕暮が催して來ると、彼は又研究室から自分の家の書齋へと傍目もふらず道を急いだ。

その癖彼は只の一學究では決してなかつた。R教授に接した人は誰でも彼に於て圓滿な高級な常識の所有者と、非難の隙を見せない日用道德の典型的な捧誓者を見出したらう。かくて敬畏と名譽とはひとりでに彼の周圍に集まるやうになつた。

そればかりではなかつた。R教授の學說は何時の間にか實際政治施設の根本方針を定める基礎として重んぜられるやうになつた。日本の政界に新しい記錄を造らうと云ふ程の政治家は、殆んど一人殘らず教授の學說の中から銘々の政治哲學を汲み取つた。要路の人々は兎もすると彼を招いたり、彼の玄關先きに馬車を乘りつけたりした。その爲めばかりにも彼は住宅を相當に廣く造つて置かなければならなかつた。而して彼の養成した學生達は、每年々々官邊の樞要な地位に採用されて、どん／＼榮達の道を開いた。彼が大學に開講してから四十二年の間矻々と造り上げた分身は雲のやうに多勢になつてその晩年を賑やかにした。彼に取つて總てが思ひ通り行つてゐるやうに見えた。そこには不足らしい不足はないと思はれた。

R教授は少し疲れたので、讀書椅子に凭つたまゝ、讀みかけてゐたC博士の論文を膝の上に置いて、ストーヴの火で春のやうに暖められた室内から、雪解の庭の方へやゝ物憂げな眼をやつた。平凡ながら相當に雅味を持たせて造つた平らな廣い庭園のこゝかしこに叢消えた雪の中を、二人の令孃と中學に通ふ末子の少年とが何か笑ひ興じながら歩き廻つてゐた。見慣れた眼にも見る每に美しく眺められるのはその令孃達だつた。その年嵩の方は

C博士にやらうとしたのを、C博士が斷つたので、今は或る若い刑法學者にやる約束が出來てゐたし、十九になる乙娘の方には降るやうに澤山な結婚申込みがあつた。二人の生ひ先きには、長閑な春ばかりが開けてゐるやうに見えた。末子の中學生は然し彼の貧しい收穫だつた。やうやく十七に手の屆くばかりなその子は、不良少年團の利者といふ評判を新聞にまで書き立てられてゐた。姉達に似て、女にしても見たいやうな容貌の中に、變態心理學者に云はせれば先天的犯罪性とでも名づけさうな惡慧い鋭い眼が嵌めこまれてゐた。R教授はその子を見るといつでも淋しい苦々しさを覺えて、眉をひそめずにはゐられなかつた。庭下駄に粘りつく雪をあつかひあぐねて、姉娘がよろけかゝるのを少年は支へてやつてゐたが、すばしこくその袖に手を入れて、美しい襦袢の袂の中から手紙らしいものを奪ひ取つた。驚いて取り返さうとしながら、足許の不確かさにやゝともすると中心を失つて、よろけようとする姉の鼻の先きに、かの少年は白い西洋封筒を是れ見よがしにつきつけてはひらめかした。R教授はそれを見ると苦々しい不愉快を感じて輕い吐息を漏らした。而して眼鏡をとゝのへながら、强ひて、眼を讀みかけの論文の方へ移した。そこにも然し彼の心持をこぢらせるものは待ち伏せしてゐた。

R教授は頁を繰り戻して鉛筆で印をつけて置いた或る一節をもう一度讀みなほし始めた。そこは、その當時の內閣が議會の協賛を經ないで專行した或る外交上の處置に對して、やかましい世評が勃發したのを、R教授が學理の上から婉曲に內閣を辯護した、その內容を容赦なくC博士が批判した一節だつた。そこではB助教授は彼の學說を少しも謬つて解釋してゐないばかりでなく、R教授の豫ての主張を十分過ぎる程明快に表現してゐるのが、却つて累をなしてゐた。C博士は極めて徹底した論理を用ひてR教授の平生の立場から云ふと、內閣をかく辯護するのは極めて自然で良心的な態度であると賞讃しておいて、然し內閣の處置は明かに立憲制度の故意的蹂躙であるといふ事をぴし〳〵と指摘した。而して少しも破綻のない理路を辿つた末に、

「かくの如く內閣は立憲治下の臣民が當然保有すべき名譽と權利とを毀損せり。而してR教授の學說の根柢をなす思想は、この不名譽なる內閣の行動を辯護し盡して更に遺漏あるを見ず。立憲治下にありてかくの如き學說が如何なる價値を有するかは、識者を俟たずして明らかに知るを得べきものなり」

と結論してゐる。R教授の白い眉は互に近づいて來て、深い縱皺を鼻の上にたゝんだ。而して落着きなくそはそはと心臟に流れ込む熱した血液が、青白いその頰にも上つて來て、教授は衆人の中で辱かしめられた時のやうに思はず眼を冊子からたじろがした。彼の棺が釘せられない中に、彼の生命の精髓と云つてゐゝ學說が、砂の上の塔のやうに、脆くも傾き出すやうに思はれるのはつらかつた。のみならず、彼はそのつらいといふ心持のもう一つ後ろに更につらいものを持つてゐたのだ。それが彼の良心の痛い荊棘となつて、かういふ場合に出喰はす度毎に生活を空虛なものに見せようとした。それは微細な心の働きから惹起された恐ろしい結果の一つだつた。教授が大學南校を出ると同時に擢んでられて歐洲に留學した間に研究した政治學說の中で、原則として考へる以上、最も理窟の詰つた正當な立論として首肯しなければならない一つの學說があつた。明敏な學徒としての頭腦を持つた彼はどうしてそれを見遁がしにしよう。彼は非常な興味と熱意とを以て奧深くその學說を研究した。研究すればする程、その內容と結論とには人間生活の深い要求と合理的傾向とが疊み込まれてゐるのを發見せずには置けなかつた。彼は十分それを理解するだけの聰明さを持つてゐた。而して彼の心は非常にそれに牽きつけられた。同時に、彼の聰明さは、その學說が本國の傳承した長い傳統と、その當時の政治的勢力の意向とには全然駢馳し得ないものである事に氣付いた。その學說が取入れられる爲めには本國の歷史そのものゝ解釋を根本的に改める必要のある事に氣付いた。そこにR教授の上に學徒としての恐ろしい試練が來た。而して彼の習性となるまでに强く深い幾千年かに亙る傳統的精神が最後の勝利を占めた。彼は思つた。學說といふものは畢竟歷史の所產でなけれ

ばならぬ。歴史を超越しては二つの考察ですら可能であり得ない。歴史を撥無して人間本來の要求を充足する思想があるなど丶考へるのは衒學者の空想に過ぎない。空想は甘い。然し實質のない甘さは、畢竟するに詩人の食物だ。そんな事に耽るのは學者の恥ぢねばならぬ事だ。かくて彼は本國の歴史が要求すると思はしい學説を大成する爲めに、彼の「人」としての興味を拋つて、スタイン教授の門下に參じた。彼は今になつてその當時を振返つて見ても、その間の消息には、何等學術的良心の詰責を感ずべきものを見出さないと思つた。然し彼は果して如上の動機ばかりで彼の學説なるものを選んだのだらうか。一身の榮達――彼にはそんな事は斷じてない筈だ。が、一般にはよくある事だ。自分の社會的地位の安全の爲めに、眼前の社會の渇仰の前に巨人のやうに立つ事が出來ない爲めに、自分の主張が手短かに追隨者と歎美者とを見出したい爲めに、簡單に云へば、何等かの形で現世の榮譽榮達を收めたい爲めに、自分の人生觀なり學説なりを決めるのはよくある事だ。少くとも極めてあり得る事だ。R教授の心の中にも實を云ふとかう云ふ反省は時々起つて來ないではなかつた。彼は極めて冷靜に物の眞相を考察し得ると自信してゐたゞけに、この問題に對しても決して容赦はしない積りだつた。然しどう考へて見ても自分がそれ程さもしい人間だとは思はれなかつた。彼は學者である以上、學問の尊嚴を第一に考へねばならぬ筈だつた。筈だつた。そこに微細な心の働きがあつた。學者的良心の要求か。一身上の要求か。それは一方の要求を滿たせば、ひとりでに他の要求も滿されるといふ都合のいゝ、而して都合の惡い場合であるだけに、彼の錐のやうに鋭い冷靜な判斷力も、二つの要求の間に截然たる區別をつけかねた。然しそれに何んの不思議があらう。彼は心理學者ではないのだから。彼はその點をそのまゝそつとしておく事にした。「筈だ」といふ言葉でその解決は十分だと思つた。

然し老境といふものはせつかちなものだ。死の來る前に決めておく事はちやんと決めて置かないぢや取返しが

つかんといふ風に、段々寢不足になつて行くR教授の頭を色々な問題でこづき廻した。と云つて、彼はそんな事でうろたへるやうな醜い態は見せまいとした。彼は自分の學說を恥ぢもせず、悔いもせず、一度でも變說しようなどゝは思はなかつた。それは今までの學說を變へる事によつて、折角築き上げて來た堅固な位置がぐわら〳〵と眼の前で壞れるのを見るのがつらくてし得ないのでは斷じてない、と信ずるだけの理由を持つてゐたからだ。何故なら國家と、彼の學說と、彼とは異體同心だからである。彼は固より自分の學說の弱點が何處にあるかを自分で一番よく知つてゐた。若し弱點のより少い學說があるとすれば、綺麗さつぱりとそれに乘りかへる事の望ましくない事でないのはちやんと知つてゐた。「主張を固守する爲めに火で燒かれるやうな馬鹿は俺はしない。主張の內容はそれ程の値を持つものではないかも知れないから。然し主張を宣言したり、主張を變更する爲めに俺を火で燒くと云ふのなら俺は甘んじて燒かれよう」と云つたニイチエの言葉などを近頃涉獵した書物の中などに見出すと、彼は矢張りこの詭辯的な口吻の後ろに微笑ましい共鳴を感ずるだけの氣力は持つてゐた。變說によつて彼の一生をかけて造り上げた生活――それは手取り早くいふと生命そのものと云ひかへてもいゝ位のものだつた――が、崩れてしまふのを恐れるよりも、再び出發點から出直す青年期の勇猛心の永久に歸つて來なくなつた今、彼の生活が崩れてしまふのを恐れるよりも、彼の主張を極力維持しなければならない理由は實は外にあると彼は思つた。若し變說すれば、彼の良心の全部が彼に與へる絕對命令として擁護しなければならない國家の安全發達を阻止する結果に陷るのをどうしよう。こんな風に考へて來ると、彼は自分の學說を何處までも立て通さなければならないと固く決心するのだつた。元來非常に善良な陰日向のない彼の心の中にも、かうした立場からはC博士を憎み呪ふやうな氣分が萌して來ないではゐられなくなつた。まだ若くて前途の多い人を氣の毒ではあるけれども、足腰の立たないまでに擊ち据ゑて置かなければならないと思ふやうになつた。

R教授はこの日もこんな事をつく〲と思ひながら、C博士の論文を膝の上に置いて、左手を伸ばして壁際の呼鈴を押さうとした。その瞬間に彼は思はずあつと小さな聲をたてゝ顏をしかめながら、右手で左の肘を押へてしまつた。この數日來左手に移つた移動性神經痛の爲めに、左の肘を動かすとひどい痛みを感ずるのをはたと忘れてゐたのだ。彼は已むを得ずそつと立上つて右手で呼鈴を押した。長く坐つてゐると彼の體は歩行にも不自由を感じた。何んと云つても下り坂になつたと彼は思つた。元ならば何んの苦もなく跳り越えてしまつた身體の故障を妙に氣にせずにゐられなくなつてゐた。何、死ぬ時が來れば死ぬまでだと思つてゐた彼が、近頃は自分ながらをかしい程養生にも注意し、無病とか長壽とか云ふ手段ならば、何事によらず試みるやうになつてゐるのに氣がついて、彼は自分自身に恥ぢるやうに、机の上に置いてある人參エキスの罐を窃み見した。

彼は窓からもう一度庭先きを覗いて見た。末子の中學生だけがたつた一人、雲の間から陽の光の射し出した庭の片隅の陶榻に腰をかけて、下らない袖珍形の書物に讀み耽つてゐるのが見えた。今日も制服を着てゐる癖に學校は缺席したらしい。それにつけても彼は、むら氣で我儘な自分の妻の事を苦々しく考へた。子供に對して何等の理解も目論見もなく、甘えるまゝに有耶無耶に休ませたに違ひない。何事もきちんと筋目を立てゝおきたい彼の心にはぎり〲と痛が立つた。

ノックの音がして戸が開くと教授の夫人が這入つて來た。眞黑に髮を染めて、柄にもない大きな丸髷に結つて、袖口からは赤い襦袢の袖が覗いてゐた。結婚當時からではあるがR教授は暫くでも離れてゐて、ふと顏を見交はす度毎に思はず不快な心持を起させるのがこの夫人の顏立ちだつた。少し向ひ合つてゐる中にその不快な感じは取去られるけれども、永年添ひなれた今でも、一眼見た時の不快さは同じ事だつた。決してふしだらをした事のないR教授の性的生活としては、この不思議な印象は物足らないものゝ一つだつた。

「まあこの部屋の陰氣だこと……お呼びになりまして？」

と云つて夫人は取りつくろつたやうにお壺口をしてその瓣眼には突拍子もない劍を見せながら、そこいらの窓のカーテンを開けようとした。R教授は苦々しい顏をしながら落着いた言葉で云つた。

「そのまゝにしておいておくれ、書齋は私の思ふやうにするのだから。Bに電話をかけて貰へまいか、用があるから直ぐ來るやうにさう云つて。それからお醫者さんの來てくれないのはどうしたんだらう」

夫人はかしこまりましたと云ひながら、すぐ立つて行きもしないで、後でもいゝやうな用事をならべ立て始めた。R教授の夫人は、明治の初年に廟堂に立つて、飛ぶ鳥も落すやうな權勢を擅まにした一人の參議の娘だつたのを、參議がまだ世に在る時、教授の將來に限をつけて緣付けたのだつた。教授は故參議の國家に對する並々ならぬ勳功を思ふにつけ、この我儘な夫人にも、一日も二日も置いてやつてゐた。明敏な頭腦を持つた教授から見ると低能としか思はれない程廻りくどい不得要領な夫人の心の働きは、屢々彼に地團駄をふみたい程のもどかしさを感じさせたが、それでも出來るだけ落着いてその無智を導かうとした。今日も今日とて雜多な言葉の中に注意して聞いておかねばならぬやうな事が交つてゐるのを、彼は心の中で面倒を見ながら選り分けて行かねばならなかつた。同僚の或る法學博士の病氣が大分惡いと云ふ事だの、故鄕にある菜場の墓守を賴んで、月々仕送りをしてやつてゐる遠緣の老女から、息子の就職口を催促して來た事だの、乙娘の緣談だの、內務大臣が午後に訪問に來るといふ事だの。彼は書齋の中に市中の埃が飛び込んで來たやうにうるさく思つた。

埃といふ聯想から教授はふとマリー・アントワネットの置時計の方を見た。書齋の中はきちんと教授の趣味に叶つて隅から隅まで掃除が行き屆いてゐて、時計にも埃がたまらずに美しく光つてゐた。實は一年程前から教授はこの時計に對して奇怪な一つの妄想を抱くやうになつてゐたのだ。それはその時計がいつか昔の通りに動き出す

に達ひないといふ想像だつた。實際時計は今にも動き出して、凛々と鳴る金の鈴に、昔の榮華を語り出しさうに思はれた。折毎にそれを見詰め慣れた彼には、ます／＼さう思はれた。時といふものを刻み出すべき時計が、凝然として止つてしまつてゐるのを見るのは恐ろしくも神祕的なものだつた。彼はその時計を見詰めながら、やゝ閑散になつた暇にまかせて、色々な空想を描いて見た。さういふ折に彼は時々その時計から突然「死」といふものをぴつたり考へさせられて思はずぎよつとする事があつた。自分も活きなくなつてしまふ時があるのだ。總ての學説も、家庭の中の幸不幸も、今まで持ち續けて來た名譽も、わく／＼した氣持の旋風に吹きまくられて眼の前で消え失せてしまひ、一歩々々死に近づいて行く彼の姿だけが慘めにも想像された。それは冷やかに取り返し難く彼の氣力を沮喪させた。それは老境に進んで、來世の安心もなく、現在に自信の壞れかけた自意識の強い人ばかりが、誰にも語り得ないで、獨り淋しく味はねばならぬ物凄さだつた。

この忌はしい心の經驗は、R教授に時計の動くのを益々願はせるやうになつた。何かいゝ事が起る前兆としてその時計は屹度動き出すに違ひないと思ふやうになつた。

「早く電話を頼みますよ」

何もかも忘れたやうにぢつと時計を見詰めてゐたR教授はふと夫人の方へ振りかへつてから云つた　夫人はその時始めて座を立つて書齋を出て行つた。

「それから太郎はどうしたと云ふんです。休むなら休むでいゝが、部屋に行つて眞面目な書物でも讀むやうに云ひつけなさい」

と彼は出て行く夫人を眼で追ひかけながら云ひ足した。夫人はもう腹を立てたらしく振り向いて見もしなかつた。

、太郎と名を附けたのも、もつと男の子を儲けたい爲めだつた。R教授の裕かな生活では二三人の男の子は少くともあつて欲しかつた。所が一人よりない男の子は、彼が死んで後の成行きを苦慮させる爲めに生れて來たやうなものだつた。鉛のやうに冷やかに鈍い彼の家庭の空氣が、今更ながら彼に生活の失敗を苦々しく思ひ知らせようとした。彼はいら／＼してC博士の論文を膝の上で二つに折り疊んだ。而して左の手に小刻みな痙攣を小うるさく感じてゐた。

夫人が太郎を家の中に呼びこむ樣子は更になかつた。彼は已むを得ずもう一度座を立つて自分で太郎に云つて聞かせようかと思つて見た。然し座を立つのが第一面倒だつた。窓を開けたら雪解で底冷えのする外氣が襲つて來て不快な寒さを覺えさうだつた。太郎の呪ひ返すやうないやな眼を見なければならないと思ふと、姑息な諦めが年老いた父らしく彼の心に起つた。

彼はしやう事なしに又C博士の論文を取上げて讀み始めた。而してその文の中にせめては論理上の缺點でも見付けてやらうと試みた。B助教授はC博士の非難に對してどれ程の機智と學殖とを示すだらうかといふ事も、一種の心配とかすかな興味とを以て考へられた。

彼は然し結局C博士の反駁に同感し屈服しないではゐられない事を認めた。彼は自分の思考力が何んとなく衰へて昔のやうにきび／＼働いてくれないのを感じた。何時ともなく段々失はれた氣力が、二度と彼には歸らないのを痛々しく知つた。彼は軈て打ちくだかれたやうに眼を閉ぢて有罪の宣告でも受ける前のやうに、やき／＼と胸に突き上げて來る不安を強ひて抑へ付けようとした。

解けた雪が庇から落ちて水溜りをうつ音は依然として間遠に窓の外で聞こえてゐた。それほどあたりは森閑として靜かだつた。

さうしたまゝで若干の時がたつた。

突然午砲が雪霽(ゆきば)れの空に響き亙つて、賑やかな汽笛の音が遠くの工場から合唱のやうに傳はつて來た。隣り近所でもボン／＼時計の十二時を打つ音が勇ましく聞こえた。

R教授は物憂(ものう)げな眼を開いて、もう一度振返つてマリー・アントワネットの置時計を見た。金縁(きんぶち)を取つた雪白の指針盤は重々しいながら何處までも優美な時計全體の塊體(マッス)の中央に、プルトーに抱きすくめられたプロサーピナのやうに抱きすくめられてゐた。ダマスクの匕首(あひくち)を思はせる精鋼の指針は凝然として動かなかつた。短針よりも一寸おくれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見てゐると、澄み亙つた十二の音が、時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から、今にも凛々と鳴り出しさうに思はれた。

然しダマスクの匕首を思はせる精鋼の指針は凝然として動く事をしなかつた。

（一九一八年一月、中央公論所載）

「死」を畏れぬ男

「珍らしいでせう、久しぶりで。どうも御無沙汰してゐました。何ね、暑い位はびくともしませんが　この頃のやうにかう忙しくつちや全く命の方が續きさうもありませんよ。これ（と指と指とをつないで輪を作つて見せ）の方はそれでもお蔭で持ちこたへてゐるんですがね」

かう云つて彼は酒肥りに脂ぎつた大きな四十面を惜し氣もなく手拭で一わたり撫でまはしてから、赤らんで貧相な耳たぶを指先きで摘んで二三度こきおろした。さう耳が貧相では儲からないといはれてから、それを氣にして人工的に福相にならうと企てたのが癖になつたに違ひないと、誰かゞ云つたのを私は思ひ出して、その時もをかしく思つた。

「お宅の方にもお變りはありませんか。そりや結構です。私ですか、私は――あゝ女房ですか。有難う。皆んな兎や角宅ではやつてるやうです。金儲けといつても是れで戰爭同樣でしてね。自分の門前まで來てゐながら素通りをしてしまふやうな事がありますんで。

「金儲けといへば、實をいふとね、こちらにあがつたのも全くの所は序でといつちや失禮ですが、ついそこに罫線屋がゐるんで、それに寄つた歸りがけなんですよ。罫線屋のおやぢ奴見當も何もつかなくなつて、眼を白黑やつてる始末です。どうもこの二三日のやうな未曾有の亂脈騷ぎぢや玄人も罫線屋もあつたもんぢやありません。何しろ大正四年以來といふんですからなあ。

「驚いちやいけませんぜ。何、驚かない。初鼻(しよつぱな)からまぜつかへしちやいけません。是れを聞いて驚かないぢや人間ぢやありませんよ。と云ふと是れも失禮に當るかも知れませんが、お聞きになりや驚いておしまひなさるから、あなたを人非人にする事は萬ない積りです。まあかういふ譯です」

彼はもう一度八つにたゝんだ手拭を懐(ふところ)から取りだして、だく／＼と流れ出る汗を顔から胸許にかけて拭つた。而してそこにあるコップを取上げると麥水を一氣にあふりつけた。而して始めてのやうに庭の方を見渡した。然し彼の眼は何んにも見てゐる様子はなかつた。

「山の手にお住まひでこんな庭をひかへていらつしやれば全く暑さ知らずですね。店の二階に目白押しになつてゐて、小僧の取次ぐ値段に頭痛を起してゐると全くうだつてしまひますよ。まあ然し是れも是非がありません私の天職なんだから。所で如何(いかが)です、かうツと、さうだ、七月の三十一日に深川の山さから、八月は何んでも絶對買ひだ、買つて買つて買ひ拔けと云つて來たんで、云ひ手が云ひ手だから少しは迷ひもあつたけれども、乘つてしまひましてね、一日の二節に十五圓五十錢がらみの所をしこたま買つた所が五十九錢まで行つて、二日まではそこいらの所を往來してゐたんですが、三日には暴落と來たでせう。鎌倉から出て來て電話をかけて見ると、十錢ドタと下押しだといふんです。仕方がないからその日はそのまゝにして置いて、四日にこは／″＼場(ば)を覗いて見るとそりや物凄いのなんのつて、ぐわら／＼と音を立てんばかりの大瓦落(がら)です。底も何んにも見越しは付きやしません、一氣にけた違ひのとんで三錢といふ狂ひ方なんです。青くなつちまひましたよ皆んなもう。開きが大きいから兩建をしようにも何んにも手が出ませんや、いやもう全く怖毛(おぞけ)をふるつてしまひました。驚いたもんでせう。え、驚かない。困りますね、あなたにも。縱令(たとへ)ばお互に天職が違つてゐたつて、こんなでつかい事には驚いて下すつたつて差支へないと思ふんですがね。私にした所がですね、歐羅巴の毛唐人なんか、腐つたつてくたばつたつて蚊

の鳴く程にも感じませんが、それでもこの頃のやうな戰爭の有樣を新聞で見るてえと驚かずにはゐられませんからね。世界の歴史をどこを探したつてありやしませんやこんな事は。素晴らしいもんですよ全く。戰線の長さが四百哩もあつて、空には飛行機が飛ぶし、地面にはタンクが走るし、海ん中を潜航艇が自由自在に步くといふだけでも凡そ今までにない圖ですね。何しろロンドンといふ世界の市場で取引が停止されたんだから全く驚かずにはゐられませんよ。世界の相場界があなた暗闇になつたやうなもんですぜ、手取り早い話が」

彼は實際驚いたやうな顏をしてゐた。而して眼を丸くしながら、しきりと耳たぶを下の方へ引張つた。汗は止度もなくだく〳〵とその額から流れる。彼はそれでも撓まずに團扇を執つて忙がしく使ひながら話を進めた。而して話の急所に來ると、その團扇は軍扇のやうに振廻された。

「人間の死ぬ數だつて仇や愚かぢやありますまいさ。この暑いのによくまあやつてるもんです。へ、へ、物好きによく〳〵事を缺いたもんだ。したが、あれで獨逸つて國は放圖のない程しつかりした强い國ですね。今度の戰爭をちやんと睨んでゐたのも見識だが、立ち後れをしない心懸けを普段からしておいて、やつと團扇が上ると、眼にも止まらないあの出足の素早さはどうです。それに金はあり兵糧はあり武器はあり、眼の玉と膽つ玉と金玉と三調子揃つてるんだから大したもんだ。相場なんぞもあゝ行かなけりや矢つ張りうそですよ。所が行つて見るとね、足腰も立たないやうなひよろ〳〵なのが兵糧なしで足搔いてゐるんですからね。のべつにそんなものばかりうよ〳〵してゐるんですからね。日本の相場界も歎かはしいもんです。

「そんなににや〳〵笑つてちや話の腰が折れるぢやありませんか。これで私は眞劍な所を云つてるんですよ。子供つてものは途轍もない事をいふもんだが、この間ね、耶蘇の坊さんが神樣つて奴を敎へこむ積りで子供に、お前達が若し荷足船か何かに乘つてゐて、機で水の中にどぶりんとおつこちたとする。さうしたら何んといふねと

聞いたさうです。大方『救けてくれえ』といひますと答へさせる積りだつたんでせう。さうしたら豫て用意の御說敎で、神樣には、何んでも溺れた時の氣になつてすがり附かなければいけませんとか何んとか、いつて聞かせる積りだつたんでせうがね。所が勇み立つて手を擧げた一人の子供があるので、得たり賢しと坊さんが答へさせると、その子は生眞面目な顏をして『あぶ、あぶ〳〵』といひますと答へたんださうです。傑作だ？　全くですよ。そこでゞすね。そこまでは笑ひ事としておいても、その先きは中々笑ひ事でなくなるんです。といふものが、日本といふ國がこの『あぶ〳〵』をやつてるんですからね。神風だつて今時は相場が上つてゐますから、さうおいそれと吹いては下さいませんや。それに貧乏世帶と來てゐて、おまけに國民心理といふものがてん〳〵ばらばらだからたまりません。地震と火事と神鳴りとをごつちやにして、チヤンとなると、ソレと云つて簞笥の下に逃げこんで、桑原々々を唱へようといふ手合なんです。どうしてもこりや、日本にもロスチャイルドやロックフェラーのやうな金持が出ないぢや腰の据りつこはありませんや。一つそんなのが政府をこづき廻して、思ひ切つた芝居を打たせてやれば、世界もあツといふだらうし、天子樣から下萬民に至るまで御威光がつきますよ。そりや御尤も。今だつて大日本帝國です。御尤々々。當今の御時勢でも國威は揚つてゐるし、不足をいふ譯ではありませんがね、いやが上にもと思ふのは相場師風情にも變りはないと思召せ。よござんすか。

「何、それぢや折角の『あぶ〳〵』の話が活きないと仰有るんですか。私は何もきつかけに使つたゞけでそんなものに拘泥する積りはないんですから、どうせあぶ〳〵なら長く生きちやゐますまいよ。生きてゐないといへば、今日は生きてゐたくない人間を見ちまひましてね。

「こいつは一寸面白かつたんですが、それをお話するには、どうしてももう少し私の天職の方からお話していかないと辻褄が合はなくなるやうですから、その方から始めるとしませう。どうも暑う御座いますね。こりや山の

手も存外馬鹿になりませんよ。もう一杯いたゞかして下さい。

一悪い癖でしてね、しやべり出すとのべつ幕なしに舌が動くもんですから、つい話の筋が通らなくなつてしまふんでしてね。先刻は商賣のお話が何處でそれましたつけね。お忘れになつた？ きびしう御座んすね、どうも。何んでも驚ろかして上げるつてのが發端だつたんだから、かうつと。まあいゝ、はしよつてやりませう。

「何しろ十日の日で手の内は大方けし飛んで殘る所若干もなしといふ窮命に遭つたんですから、私も全く考へこんでしまひました。十一日は實に死物狂ひでした。この土端場で盛り返さなければ、今度こそは落日の行きどまりといふんでせう。朝から店に張り込んで血眼で形勢を見てゐると矢つ張り一節々々下がる一方です。丸で腐れかゝつた釣瓶桶のやうに、すぽん／＼と底が拔けて行く騒ぎなんですよ。そこに持つて來て越後の新見――越後の新見とだけぢやお素人にはお判りになりますまいが、日本一の強氣の大將で、照り降りなしの買屋なんですが――その新見が何を思つたか賣りに廻つたんです。さうなつたから堪りません、どうでせう、あなた、加速度が加はつてぐわらり／＼と坂落しです。

「こゝで私は考へました。膽つ玉だ、ね。劍ケ峯だ、乘るかそるかつむじを曲げて見ろ。尻子玉の小さい奴等の眼には高々日本しか見えまいが、世界を見渡すと戰爭最中だ。諸式が上つて米だけ上らないつて法はない。と、こゝん所に胸が据つたから、洗ひざらひ持ち出して新見のお株をひつたくつてやりました。所がお日和を見るとその日は御承知の通りの靑天白日で、見渡す空に雨雲一つありやしません。高氣壓と低氣壓とがお誂への所にあるからこゝ暫くは荒れつこなしといふ氣象臺の豫報でせう。豐作疑ひなしといふのですから、口先きしか見えない有象無象が寄つてたかつて私を笑ひ草にしたのも一面無理はありませんさ。

「實をいふと私も腹はきめてゐましたがおつかなびつくりしないでもないといふのは、東京の本宅は勿論の事、

強羅と鎌倉の別莊まで投げ出して借りた金なんですから、下手にころべば、その日から路頭に迷ふ仕儀ですからね。罫線屋の奴どういふかと思つてこの間も御近所まで來て奴の家を訪ねて、十一日の仕儀を話して聞かせると、眼を廻さんばかりに驚いてしまひましてね。投げ出さないまでも、せめて持ちこたへる位にして置かう事か、買ひ〆とは氣でも違つたんですか。今度の下落は四年の大底をぶち拔く所謂レコード破りだ。かうなつたら底無沼も同然、何處までのめり込むか知れやしません。飛んでもない事をおつ擴げたもんだとかう云ふんです。さあ私も胸は早鐘です」

かういつて彼は戀になやむ女のやうな仕草をして見せた。而してまた耳たぶを忙しく引つ張つた。私は話が半分分らないながらに一種の好奇心から聞き續けた。

「まかり間違つたら追敷をつんで〳〵積みこくつてくれようと實は少々捨鉢になつて、十二日に行つて見ると矢張り氣まづい相場でしたが、持合つてゐたから追敷までには至らなかつたんです。すつかり氣を腐らかしちやつて、えゝ儘よ可愛いゝ奴の顏でも見て暮せと思つて、後場には鎌倉にしけ込んでしまひました。よう御座んすか、さうすると如何でせう、夕方から急に空模樣が變つて來て、晩になるととう〳〵あの大嵐です。すてゝこを踊つちまひましたよ、全く。電話で聞き合せると日本全體懸引きなしの暴風と來て、そろ〳〵跳つ返りだしたといふんですからね。

「十三日――昨日です。昨日が一日あの通りの吹いたり降つたり鳴つたりです。あれで豐作の豫想は丸つぶれ。お上の豫想高の二割方は減收疑ひなしだからもう此方のもんです。私がほく〳〵してゐると、女なんぞは線香をたてゝぴかツと來るたんびに震へ上つてゐるから、私はさう云つてやりました。一つ鳴つたら祝砲が一つ鳴るんだと思ひねえ。一つ光つたらダイヤが一つ光るんだと思ひねえ。稻光りの數だけ天賞堂で粒選りのダイヤを張り

込んでやるからつてね。店の方からはうるさい程電話で、もう仕切りませうか仕切りませうかと云つて來たんですが、私は戯談云ふないつて取り合ひませんでした。

「昨夜は前祝の心で大分な亂痴氣騷ぎをやつてのけましたぜ。あの吹き降りに鎌倉中にある馬車といふ馬車、自動車といふ自動車を買ひ切りましてね、町中の藝者を一匹殘らず呼び寄せて、三十人程の客をしました。あの神鳴りの音が聞こえなくなるまで騷げといふんですからドンチヤンの程が思ひやられませう。全くあの暴れやうぢや首をくゝつた水呑百姓の一人や二人は出來ましたぜ、可哀さうに。然しまあお蔭でこつちは浮上りましたよ。

「お宅は別においたみは御座いませんでしたか。そりや結構で。

「散々騷ぎ拔いて面白い夢を見て、後は野となれ山となれです。今朝は又一入の風の音に心持よく起される氣で、前後も知らずぐつすり寢込んだ所が、あんまり穩かなもんだからとう〳〵九時まで寢過ごしてしまひました。風の音どころぢやありません。今日樣がまぶしいので眼を覺ましたやうな始末です。これぢや立合停止といふ程の口は出ないなと思ふと、寢起きから出鼻をはたかれたやうなやくざな氣分になつちまひました。

「何しても女ばかり可愛がつてゐる譯には行きませんや、かうなると。づきん〳〵と來る二日醉ひの頭をウキスキーか何かでごまかして、上りに乘つたんですが、大船で待合はしてる間に、その先刻お話した生きてゐたくないつていふ人間を見ちまつたんです」

こゝまで話すと彼は胡坐の居住ひをなほして盛り上るやうな膝頭を改めて私の方へ近寄せた。而して耳たぶを引つ張つた。

「これからが話になるんですがね。今朝はあの暴風の後だから客もないと見えて停車場は割合に人少なでした。大風の後つてよく云ひますが、全く何處つて事なく穴でもあいたやうに物足らないもんですね。プラットホームと

いはずレールの上といはず、何處から吹き飛ばされて來たものか、生々しい小枝が散らばつたまゝ片附け手もなく、ベンチも打倒れたまゝにしてある始末です。すると、一人私位の齡恰好の男が、何か小さい包みを背負ひこんで、うろ〳〵してゐましたつけが、ベンチを起すとそれに腰かけました。すると又伴れらしくない一人の女がかけたやうでした。女つて奴は兎角男に凭れかゝらうとする手合ですよ。面でも踏めるんなら、これで凭れかゝられるのも味なもんですが――いけない〳〵、また脫線しさうです。その外にも一人二人はゐたやうですが、何しろこつちはそこ所の騷ぎぢやありません。親の仇でも見込むやうに空を睨みつけてゐたんですから。

「もう日は大分高くなつてじり〳〵と照り付け始めてゐました。へえ顏を洗つて出なほしましたとでもいひさうな青空が癪に障りまさあ。人間なら『畜生、貴樣の出る幕ぢやないんだぞ』と啖呵の一つも切つてやりたい所ですが、青空ぢやあ何をいつたつて暖簾に腕押しで、けろりかんと光つてゐます。日を見りや日を見るで思ひなしかたんと痛んではゐないでせう。まあ一つ心頼みなのは夜上りだから、永續きはしまいといふ事なんですが、是れとて萬遍なくさうと決つたものでもありませずさ。暑いにつけても、腹が立つやうな恨めしいやうなむしやくしや腹になるんで、私はもうぶり〳〵して、昨夜の散財まであたら無駄になつたかと悔みましたね。心はせくしね。

「恐ろしく待つ間が長いと思つたが、あれで矢張り時間通りだつたんでせう、濱松仕立ての汽車が這入つて來ましたのは。助役の手間取り見たいに細い赤筋を帽子に卷いた驛夫がゐるでせう。あの驛夫は一體皆んないゝ加減の爺さんがやる役のやうですが、列車がホームに近寄つた時、その手間取助役は、信號レバーをがちやんと倒してこつちにやつて來る所でした。私が男の腰かけてゐるベンチの前を通りすぎて、その手間取助役とものゝ三間も離れない所に來ると、ゴーッとすさまじい音を立てゝ機關車が私共の側をすり拔けました。シャン〳〵とシャーン

シヤーンとガン〳〵とゴー〳〵とまぜ合はしたやうな熱苦しい重苦しい音に、殊更頭がうづくので知らず〳〵顔をしかめながら歩いて行くと、何んだかギヤーといふ疳高な聲まで聞こえたと思ひました。するとね、いきなりその手間取助役が飛び上るやうになつて兩手を擧げると、皺くちやなその顔が馬鹿に細長くなつて眼と口とを思ひきり開いたから、はてなと思つたんです。いや、はてなと思はうとします中にね、機關車が彼方に行つちまつたもんだから、その爺さんの聲をかぎりに我鳴りたてるのが聞こえて來たんです。『飛び込んだ〳〵』と云ひながら私を突きのけるやうにして私の後ろの例のベンチの前あたりまで夢中で駈けて行きましたが、そこへぴたりと停つてレールを指しながら『飛び込んだ〳〵』と眞赤になる程怒鳴り續けました。汽車往生だなと思ふと私もさすがにぎくりとしました。『べら棒め縁起でもねえ事をしてのけやがつて』と腹が立つまではそれでも暫くぼんやりしてしまひましたぜ。

慌てた爺さんの様子を見てそこに赤帽が第一番に飛んで來ました。それから辨當屋と新聞屋が商賣品を臺の上にほつぽり出してやつて來ました。その中に列車が停つたものですから、どの箱からもうよ〳〵する程客が降りて來ましてね、押すな〳〵の混雜ですから、私は二番目に駈けつけながら、よく見る事も何も出來やしません。物好きな奴等ですよどうも。それでゐて皆んな上ずつちやつて、眞蒼な顔をしてゐるんですからね。變なもので皆んながや〳〵やつてゐながら、何んとなくかーんとしてゐました。

見るとレールの間に日和下駄が片方裏返しになつて轉がつてゐました。下駄だけでは男が飛び込んだのか女が飛び込んだのか、鼻緒が見えないから見當がつきません。何處かに死骸がありさうなもんだと思つて探したんですが、車輪の蔭にでもなつてゐたか皆目見えませんでした。

「その中に列車の向側に驛長はじめ集まつて何かしてゐるやうでしたが、車掌がやつて來て『さあ出しますから

早く乘つて下さいまし』といふもんですから、死骸を擔ぎ出す所はとう／＼見ないで汽車に乘込んでしまひました。中にあれで十人餘りもそこで降りて次ぎのに乘るといふのが出來ました。私だつてこんな縁起の惡い車に乘るのは業腹でしたけれども、一刻を爭ふ場合だつたもんですから思ひ切つて乘つちまひました。

「私の乘つた一等室にはまだ年增盛りの大家のらしい御新造と十二三になる孃つちやんだけしかゐませんでしたが、二人ともおづ／＼震へ上つてしまつて、しつかり抱き合つて蒼くなつてゐました。私がこんな事をいふと笑はれるかも知れませんがね、何んだかその汽車が殺人犯をやつたがむしやらな若造で、その御新造と孃つちやんはそいつの心臟といふのか、何んといふのか、兎に角惡い事をした時妙にぴく付く腹の中の機械がありませう、それ見たいに思はれました。若造の野郎、燒け糞だといつた風で途轍もない勢で走り出しました。丁度通り合はした車掌をとつ捕まへて聞いて見るてえと、やつたなあベンチに腰かけて包を背負つてゐた私と同じ齡恰好の男らしいんです。何んでも大船の在に住む中百姓でちよい／＼見かける男なんださうですが、先頃中から少々キ印と來てゐた所に昨日の暴風で見事本物になつたらしいんですね。この間中のやうに雨氣なしに照り續く暑さぢや只の人でもいゝ加減氣違ひじみますからね。車掌も飛び／＼に小耳にはさんで來たのですから委しい事は判りませんが、その男と知り合ひの赤帽が云つたんださうですがね、二人も子のある糟糠の妻つて奴を追ん出して、連れ込んだ女に散々いゝ目に遇はされた擧句、金の切れ目が緣の切れ目といふ紋切形で女にも隨徳寺をきめこまれ、この二三ケ月獨りぽつちで暮してゐたんださうです。こりや全く他人事ぢやありませんよ。私はこれで女房も相當に可愛がつてやつてる積りぢやゐますが、何んといつたつて若いぽちや／＼した奴は別ですからな。鎌倉のにでも逃げられて御覽なさい……まさか汽車往生もしはしますまいがね。つまり腹もすわらない癖に柄にもない眞似をするからの事でさあ。そこに行くと此方とらあ大つぴらなもんです。だが是れにつけても金だ／＼とその時

もしみ〳〵思ひましたよ。

「見ると先刻から耳をすまして車掌の話を聞いてた御新造がしく〳〵やり出したぢやありませんか。どうもこの節の男は神經衰弱で女はヒステリーと相場がきまつてゐるやうですね。あなた方の方では世紀末とか何んとか仰有るんでせう。世紀末どころか日本が是れから大いに發展しようといふ二十世紀はまだ十何年しかたつちやゐないんですぜ。全く戲談ぢやありませんよ。仕舞ひにやおい〳〵つてハンケチまで持ち出す騷ぎです。すると孃つちやんまでが釣り込まれて、あなた、すつかりヒステリーになつちまひましてね。可哀さうだ〳〵、てんで二人ながら雨に惱める海棠どころぢやありませんや。

「三人きり客のないボギーの一等車はがらんとあいてゐて、私共三人は何んの事はない棺桶の中に抛り込まれた身代り人形つていふ體たらくでせう。私も追々神經衰弱になりかゝつて來ましたよ。ハヽヽヽ。乙なもんで、これで四十つていふ聲がかゝると、私見たいに出來た人間でも時折りはいけない〳〵と思ひながら變妙もない事を考へるもんですよ。お笑ひなすつちやいけませんぜ。何、腹の底はちやんと据つてゐるんですが、上澄みの所がやゝともするとぐら〳〵つと來ましてね。あの御新造も、旦那にあんまり可愛がられないんぢやないかと思つたり、いや、あのきりやうぢやそんな筈はない。どうだい讓らうかと云はれたら二つ返事で何處からでも手が出さうな玉だ。とするとこりやお妾の方だな。今の話で自分のして來た罪の程が恐ろしくなつたのかな。何しろ赤の他人が死んだつて生れたつて、あゝ泣ける筈のものぢやありませんからな。私の所の女房も事によるとあんな風に泣いてるかも知れないて。だが、あなた、是りやちよいと餘談になりますが、宅の女房なんぞは一體をいふと神棚から大神宮樣をおろしてしまつて、亭主の寫眞でも安置して、毎日大明神樣々でゐてい丶譯合ひなんですぜ。そりや一度は持參の嫁道具まで曲げ込ませた事もありはしましたが、この頃ぢや私の腕一本で押しも押されもし

ない紳士閥の仲間入りをして、けちぢやありますが別莊の二軒も持つて、妾の二人や三人は抱へてる男の奥方になりすましたんですからね。このせち辛い世の中に日に二度づゝは二の膳つきで飯を喰はしておくのに、それで泣き込まれちや間尺にも何んにも合ふもんですか。所が世の中はさう理窟通りにや問屋でおろしませんや。女つて奴は放圖がないと相場がきまつてゐます。撫でてやりや金と來る。金をやりや撫でろとくる。いゝ加減な所でどやし付けておかないと生血まで吸ひ取られてしまひます。すると今度は奥の手を出して泣くの死ぬのと來ますね。わめかれたり死なれたりしちや是れで世間體が惡う御座いますさあ。ざつくばらんな話がさうしたもんです。

「然しその御新造の歎くのはいゝとして、孃つちやんの方が可哀さうだ／＼と頭を震はして泣くのを見ると、私の例の上澄みが妙に搖れ出したんです。何んだか私は一人ぽつちでこつちに一人、世間の奴等は組をつくつて彼方に一かたまり、私にや解らない事を喜んだり歎いたりしてゐるやうに思へるもんですからね。知りもしない人間の一匹や半匹死んだのを自分でも死ぬ事のやうに可哀さうだ／＼つて泣いてるんですからね。あの手合は皆んな私にだけ知らさないで申し合せをしてゐるなとしか思はれませんて。

「私はこれでも若い時から志だけは大きく持つてゐました。何んでも骨節を働かして成功し上げて、日本を背負つて立たうといふんです。だからそんぢよそこらの奴等が私の向うに廻つた所がびくともするんぢやありませんが、何しろ私一人を差措いた仕打ちは癪でさあ」

彼は話に調子が乘つて耳たぶを引つ張りつゞけた。蒸暑い空には雲が湧いて庭は重苦しく蔭つたり、かつと眩ゆく照り込んだりする。濕氣が蒸れて頭痛がする程だ。彼の顏は痛ましい程赤くなつてゐた。

「そこに行くと何んと云つたつて金だ、ね。見やがれ今に世間の奴等の頬げたを札束でたゝき破つてくれるからとさう思ひ直して見ましたが、今朝は生憎と金の方の緣も怪しくなりかゝつてゐたんですから凡そ悲觀したつち

やありませんよ。昨日が五十錢ドタで鬪へたまゝ引けたんぢや今朝の天氣ぢや上つ跳ねる氣遣ひは萬あるまい。大勢が下落と來てゐる所に昨日の嵐で間に合せな跳ね返りを打つたんだから、今朝は寄付きから又ガラ落ちに違ひないと思ひました。何故昨日の嵐の最中に仕切つちまはなかつたらうと業腹にもなりますしね。人を殺した汽車に乘つてめそ〳〵泣く人間を眼の前に見せつけられちやもう私もセント・ヘレナだと思ひましたよ、全く。英雄の心緒亂れて絲の如し。私はよつかゝりに凭れたまゝ背を丸めて考へこんでしまひました。

「するとどうでせう前にゐた孃つちやんの泣き聲が耳に這入る機に『雨』つて事がふつと胸に浮びました。子供が泣く事を雨が降るつていふでせう。あれから暗示を受けたと見えますよ。はてなと思つて見るとレールの下にあつた日和下駄の裏返しになつてゐたのも吉兆です。急に勇み立つちまひましてね、窓から空を眺めると、その時汽車は程ケ谷の先きを走つてましたが、本牧と覺しいあたりにけたゝましい雲が現はれ出てるぢやありませんか。〆この兎どころぢやありません。さういへば鐵道往生が又振ひ切つてゐまさあ。鐵道が往生するんですぜ。輸出の荷が動き過ぎるので米の廻送がとまるか、豪雨で線路が破壞して米が動かなくなるか、兎に角鐵道が往生するんです。丸で御神託を蒙つたやうなもんでさあ。かうなるとあの鐵道自殺もヒステリーの御新造一行も緣なき衆生どころか、私の爲めにわざ〳〵死んだり泣いたりしてくれたやうなもんです。私はすつかり有難くなつちまひましてね。思はず取つときの煙草代用の飴菓子を紙に包んで賽錢代りに孃つちやんに奉つちやひました。泣きやまれちや少し困るとは思ひましたがね。だから人間一人ぽつちだなんて怪我にもひがみは起すもんぢやありませんよ。

「迷信だつて？　さあ、迷信といへば迷信ですが、かう咄嗟に思ひついた事は妙に中るから不思議でさあ。こんな話がありますぜ。私の知り合ひの或る男が大枚な金を紛失した時、高島嘉右衛門さんに占ひを賴んだら易經の

中の何んとかして茀が何んとかいふ文句が出ますとね、高島さんがいきなり金は平沼邊の草つ原に落ちてるから探して見なさいと云つたさうです。所で探して見ますとね、ちやんとそつくり出て來たさうです。あんまり不思議だから、どうして分りましたと聞いて見ると、高島さんの云ひやうがいゝ。茀といふ字は草冠の下に弗だ。草原の中に金はあるに極つてゐるさと答へましたんでね。その男も餘り馬鹿々々しいから、だつて高島さん孔子の時代には弗といふ字をドルとは讀ませなかつたらうぢやありませんかと笑ひますと、『そんな融通が利かないで何が出來る』と叱られたさうですよ。氣が滿ちてるとちよいとした事で宇宙の運命が手に取るやうに知れる所が不思議さね。

「全く世の中は何が仕合せになるか分りませんよ。死にたいつていふ殊勝な男がゐてくれたばかりにすつかり元氣づいちやつて、東京驛に着くとすぐ自動車で出馬して見ますと、云はない事か、豫想通り跳ね返つてゐました。小笠原島の沖に大きな低氣壓が不意に出來てるのも原因の一つだが、夜叉政つていふ弱氣のでか物が昨日頓死したんで大きな番狂はせになつたんださうです。さあ又蠣殼町は鼎の湧くやうな騷ぎで、買ひに廻らうとした奴等もあれよ〳〵といふ中に手が屆かなくなる。賣つてた奴は將棊倒しに無殘な最後を遂げるといふ有樣です。私だけはその中で吞めるもんなら煙草の煙を輪に吹いて、どんなものだいと云つてやりたい位でした。

「何、たんとの儲けでもありますまいが、昨夜の約束通り女にダイヤの五つや六つはおごつてやつていゝ位には這入りませう。是れで見ていらつしやい、この雲行きぢや一昨日以上の恐ろしい暴風雨が今晩あたりはどつと押して來ますから。一つ何んですな日本中の稻の穗が擦れて〳〵擦り切れて、一つ殘らず荒神箒のやうになつてくれりや占めたもんですがなあ。百姓が首をくゝつたつて、物價が騰貴したつて、かうなつて來ちや構つてはゐられません、背に腹は代へられませんからね。

「それでね、今日は一つ罫線屋の老爺に鼻をあかさせてやりに、忙しい中を無理に暇を作つてやつて來た歸りがけなんです。奴、お前さんは全く腹が大きいとかなんとかいつて、いやにおだてあげてゐましたぜ。おこぼれに有り付かうといふ腹なんでせう。あゝなると人間もみじめなもんです」

こゝまで滔々とまくし立てゝから彼は胸中の磊塊を吐き盡したといふやうに滿足な顏をして悠々と耳たぶを引つ張つた。成程空合は段々恐ろしくなつて來た。彼はやがてもう一度麥水を一呑みに飲むと大きな金時計を出してパチンと音をさせたが、慌てゝ歸る挨拶を始めた。

「こりや大變もう十二時半だ。つい長話で御邪魔をしたはいゝが、ナポレオンの大切な五分間が逼つて來ました。それぢやこれで御免を蒙ります。驚いちやいけませんぜ、夕刊を御覧になつて。是れで立合停止さへ喰はなけりや……いづれその中話を聞いて下すつたゞけのお返しは致しますよ。や、落ちて來ましたね。小粒とは有難い。小粒で始まらなけりや長續きはしませんよ。今に御覧なさいどつと來ますから」

さういつて彼はせか／＼と座を立つた。玄關で挨拶をする時に見ると、彼が指で摘んで喰べた餅菓子の餡がその大事な耳たぶに少しばかり喰付いてゐた。私はそれを見ると思はず吹出さうとしたが、咄嗟に出たものは、笑ではなくて涙だつた。今でもその時の心持が自分ながら分らない。私は始めて解放されたやうにほつと溜息をして部屋に歸つた。雨はぽつり／＼と八つ手の葉に音をたてゝ降り增さつて來た。涼しい風がそつと吹き始めた。

ブウ／＼といふ景氣のいゝ自動車の喇叭の聲が五六町もある道の曲り角の邊から聞こえて來た。あの「死」をも畏れない勇敢な男はその時戰場に向つて驀地に駈けさせてゐたのだ。

（一九一八年三月、新時代所載）

Bokuwa kono ikuhenso yonda Mr. Arishima no jinkaku l
gakusetsu shikken narabini sono buntai sabete Arishima sono
man o omowaseru

Bokuwa sono ikuhen kani tanbu ni shoban o shirushi oita
ga! kokoni ikkatsu shite ronzureba bunchyuno ikiron
taru monono shiri ga mottomo nyojitsu ni egaki idasarete
iru kotoga hakken sareru to doji noni Arishima no
Shinri gyotai omo ukagawareru

Yoruno mejikai Natsu no yaiwa kuroguro taru sorani
kakatsuru [illegible] slei-muon to hikarino nibui Stre no
ikutsukao ukamaseteiru Yometsukareta sonokaradao
omotagerni Negani Hakobu

4. 5. 19 th

M. Takurō

初期の文章及び詩歌篇

草いきれ

「……時已に八時を過ぎたるなる可し、蒼空は依然として纖雲を絶ち、月一輪耿として中天に懸り、大地蕭然として眠に入れるが如き間、風全く死し盡して、我が靴の雪に入る聲を聞くのみ。雪積みて風死せる時靜寂なり、風死して日暮れたる時殊に靜寂なり。日暮れて一痕の月地を照す時、靜寂更に極まつて千尋の海底にある想に堪へず。思へ、月明三千里、積雪と相映發して、白々と相撲ち、皚々と相觸れ、俯仰共に銀花交々飛ぶと見ゆる夜氣の潔さを。噫我は遂に忘るゝ能はざるなり。……」

銀華（日誌の一節）

我が北海に入りしは七年の昔なり。其の十一月六日、始めて北方初冬の寂寥を味ひ知りぬ。灰白の雲朝の空を籠め、身を切るが如き風窓なき北向の板壁に衝りて、銀杏の落葉堆きに渦を畫く。祖母と母と姉とを兼ねたる我

が「伯母さん」は、手桶に殘りし水の堅く凍れるを打摧きつゝ云ひぬ「見給へ今日空ひそみぬ、雪の先驅至らん、林檎の苗木に掎枝與へ了り給ひしか」

我は此の日の半ばを沈思に費し、かくて家を出でゝ足は自ら畫人の門に向ひぬ、孤獨は人の子を藝術の壇前に導き行くなり。

彼が家は我が家よりも暖かゝりき。小さき煖爐に近づかしめて、彼は其の美しき夢想を說きぬ。我が向へる壁際には彼がいみじくも摸寫せるミレーがエンゲラスあり、其の左隣には水筆の色彩躍るが如き怒濤の畫の小さきが懸れり。畫人が坐せる當面には、畫聖がマドンナの人も後景も盛春の匂豐かなるを掲げぬ。机の上には位置もたがはで彼が特愛のシエレーの像を据ゑたるが見らるゝなり。

風荒ぶ時、窓の扉輕き音に襲ひぬ。

されども我等が話頭は春の野にあり。畫人は我より六つの年長なり、額際の髮一握計り白盡し、十指の長くして節立てるが其の特相なり。我は歲十九なりき。

「さなりき、好き物見給はずや」

と彼は突然想起せし物あるが如く叫びぬ。

「我はこを以て必ず君を樂まし得可しと信ず。

須く我に聞き給へ。

フロレンスの僧院サン・マルコの墓塋に『隱れたる珠』見出されぬ、題して『忘れ形見』と云ふ。イオニヤの大理石もて刻まれたる彫像なり。

今は昔彼の市の繁榮時の華かなりし時、富みたる老夫婦ありて一、人の愛娘姿も心もやさしき限りなるを、唯一

の傲、唯一の慰藉、唯一の希望とはなしき。然るに彼女十四の秋より病の床にふしぬ。其の因更に知る可らず。父は醫師に、母は聖母に、あらん限りの懇望も祈禱も、病愈革りて更に甲斐なし。西風窓に落ちて、頽日光寒けき頃、彼女は夢みる如く闠市の甍をつゝむ暮靄を見入りて、母に紙を乞ひ、其の隣に住める若く貧しき彫刻師に送る可き書を認めぬ『妾亡き後にはこを彼に與へ給へ、彼をして妾の像を彫らしめ給へ』とのみかすかに云ふなり。

かくて彼女遂にうせぬ。

遺書は妻ある若く貧しき彫刻師の掌に落ちぬ、而して我が君に示さんとする稀代の彫像はなりぬ。

そは是れなり」

と彼は畫集の中より、大板の寫眞一葉を拔きつ。

露輝くと見ゆる花叢の間に、輕羅肩を滑り落つる計り綏やかに着なして、飛ぶが如き足の運び輕く、華やかに擡げたる首よりゆるく亂れし髮は、撫肩を小波の如く流れて腰のあたりに遊び、美しの眼と優しの右の手は、飛び行く胡蝶の行方を一向に……。

是れさへ見るに痛ましきを、像の裏に刻まれたるは、彼女が遺書の一節なりとぞ。

「胡蝶を追ふ人は春の野に出でん
君よ戀を慕ふ乙女
神の懷に至らざらんや」

我は云ふ可らざる優しさ美しさ殊にはあどけなさの限りを思ひ浮べて、夢に醉へるが如くなりしが、再びそを取上げて、乙女の面わに香しき鬈の匂を辿りそめぬ。見上げたる睛の涼しさ、形よき鼻の氣高さ、唇の無心に輕

く開かれたる愛たさ、額廣き細面のなよやかさ。頰より二重顎のあたり、高き感情の表顯の豊けさ。一つ〳〵に見來りて、全體の調和如何にと稍〻遠ざけて眺め入れば……こは如何に。

是れ何者！　伊太利の乙女とや、否、さにはあらじ。歳は十四とや、實に爾かなり。我が血は潮の如く、頭に堰き入りぬ。眼我をいつはれるか、我眼をいつはれるか。彼女にあらずや、彼女にあらずや、彼女にあらずや。見るに從つて實に彼女なり。我を打守りし其の眼ざし、我にさゝやきし其の口、血の色若かりし其の頰、輕く二重となれる其の顎まで、似たりとは愚か、歳は十四、伊太利の乙女、爾り、あらず、おゝ、彼女花を踏みて、我に歸りぬ、我が胸に歸りぬ。我美を得たり、愛を得たり、生命を得たり。我再び放たじ。彼女は死せりとや、否、否、否。彼女は活く。彼女は冷き大理石にあらず、彼女なり、彼女なり、彼女なり、彼女なり。爾り、されど……

物あり娑々として屋を搏ち、窓扉再びはためきて靜まりぬ。風度れるなり。

無益なりき電光よ、汝は暗より出でゝ再び暗に歸らざる可からず。彼女は實に今も尙生けり、されど永久に我が胸には歸らず。我が血爪尖まで冷ゆるを覺えし時、熱涙湧くが如く頰を傳ひぬ。

我が肩輕く畫人のやさしき手を感じつ、

「君の多感は我が比にあらず」

嗚呼我畫人の家にありしか。

彼の家を出づる時日暮れんとす、畫人は我を門に送りて、

「降りの少しく鎭まるを待ち給はずや」

と勸めたれど、我敢て辭しぬ。

打見やれば日は既に山の後ろ、雲暗く空を閉して「伯母さん」が「雪の先驅」と云ひし霰荒れ果てし野と畑と

の限りをたばしる。眼に見えぬ靉天に臨みて吐息する如く、吹きすさび吹きやむ息吹に、颯々娑々として死滅の色斑らに里地を蔽ひ、枯れ残りし草のさゝやき殊に憐れに、天と地と今ぞ墳墓の彼方に行くか。

彼處なる森陰我が冷かなる家に小さき灯見ゆ。

「嗚呼……神……」

我思はずかく獨語ちて熱き涙にむせびぬ。

汝愚かなる者、熱き涙も亦無益なり、人の子枕すべき所なし。

我は此の日始めて北方初冬の寂寥を味ひ知りぬ。

（はつみぞれ）

冷熱（湯沼紀行）

「……午後君と共に山宿を出で、未踏の逕路を拾ひ、山中を上下して行く事十數丁、忽ち白氣の起るを見て湯沼に來れるを思ひつ。枯木亂生せる崖端をめぐれば、皚々たる白雪の中に、毒の如く黒みて蒸氣を吐ける一面の沼現れぬ。辛じて山を下り沼邊に沿うて行くに、黝黒の熱湯、刺臭ある瓦斯、山吹の如き硫花、鐵鏽の如き流藻、歩々の左右を擁して黄泉の中にあるが如し。對岸に到り着きて再び山を登る。雪積める事四尺、僅かに匍匐して進む可し。巓に及びて瞰下するに光景慘として心を傷ましむ。身は人より遠く天に近き山巓に立ちて、死せるが如く雪を被れる地球の、胸のたゞ中に燃ゆる熱火の餘威を此に見る。無限の冷、無限の熱、人は則ち其の間に介在する冷熱共になき小なる土塊なるなからんや」

修驗者定山と云ふものあり。明治の初年飄然として石狩原頭に來り、豐平川を遡る事稍〻九里、山秀で水逼れる邊に來りて玆に溫泉を開き、孤棲十幾年、一日卒然として其の姿を隱しぬ。人は彼を以て五劍山を攀ぢ、巓より直ちに天に行けりと云ふなり。

札幌の市街彼處の下流七里に築かれてより、定山溪には聊かなる二軒の溫泉宿立ちぬ。冬晨秋晩、罕に玆を過りて俱知安に向ふ旅客は、川沿に聳ゆる妖魔の如き靑巖の後ろに、縷々として淡き炊煙を望む時、何とは知らぬ一種の畏怖に打たれて、脚を速めつゝ眞言波羅密の呪文を心深く誦するなりとぞ。

我が心人寰に圍まれ得難くて、獨り定山溪の山宿に逃れ行きし事ありき。時正に嚴冬、一人の浴客だになし。人里遠ければ鳥雀共に住まず。日は沈默の空に生れ、急ぎて山の西に沈み行くなり。北方の冬は晝賓に短し。三時に至れば東山の峰微紅を含める外、滿目の白雲靑み初む可し。四時に至りて淡藍の色風の如く流れ、幽寂の氣沁々として胸に逼る。五時に至りて夜は其の裳もて四三の靈魂と深甚なる自然とを悉く被ひ終るなり。

好來！　夜！　我が暗き心は、汝の接吻を愛す。

我一日谿流に下りぬ、溫泉の氣に蒸されて苔の如く靑き石、銹の如く赤き石、石灰の如く白き石の圭角稍〻圓みたるが、縱橫高下に相重り相連れる間を、稍〻瘦せたる水の色殊に碧なるが、淙々として躍り行くなり。我は水上に露出せる石の上を僅かに傳ひつゝ流に從ひぬ。見上れば鬼鑿鋭くも刻み爲せし懸崖のそも幾十丈ならん、走り向へるが如く兩岸に逼り立ち、岩角石隙には氷柱簾を爲して垂れ懸り、崖上の枯木雪を冠して相交れる間より、鉛色に閉せる密雲は一道の長河を空に見る心地なり。

鶺鴒あり、しるべするが如く、輕く翅を振うて我が七八步の前を行く。我は彼女を又なき友として步を移しぬ。嗚呼人の子、總てを呪咀の中に置くとも遂に友情の懷を忘れ難し。

啄木鳥の蟲をあさる音頭上に聞こえて、不圖首を擡れば、見よ五劍山は彼處に立てり。峰上五裂して劍戟の如く天を指し、雄々しくも連山を携げて、其の脚は地に、其の頭は宵に、王者紫を衣して蒼生の上に臨むが如し。定山が天に行けりと傳へらるゝは彼處なり。此の時、

戞戞……戞……

一連の音寂寞を破りぬ。此の山應へ彼の山答へ、五劍の胸邃にかすかに其の響を反しぬ。鳥語にもあらず、梢を雪のしづれしにもあらず、結氷巨木を割りし音に稍ゝ近くして而も異なれり。佇して耳聳てぬ。

傍にありし鶺鴒は遽然として鋭き聲を擧げつ、――怪しき我が擧動に心安からざりしか――地を離るゝ事三四尺、忽ち身を飜して遠き彼方に飛び去りぬ。

戞戞……

又聞こえぬ。萬壑聲に應じて答へ、須臾にして再び故の寂寞に歸る。

我は意味なき好奇心に促され、此の音の主を究めんものと決心しぬ。

懸崖の梢ゝ夷なる所を辛じて登り、兎迹のみ普き白雪を踏みて林の中に進み入りぬ。此の林の盡くる所より五劍の山は聳ゆるなり。

戞戞……戞……

又聞こえぬ。槲、楡、楓、白楊、椴、蝦夷松の嘗て斧鉞を知らざる幹と枝と、悉く其の音を籠めて、宛ら古伽藍に撞鐘幾聲の其れにも似たり。我は歩を早めぬ。

忽ちにして我は灌木の間に物ありて動くを見たり。

忽ちにして我は惆悵として謠ひ出づる子守唄を聞きぬ。

そは若き女の姿なり。若き女の聲なり。

此の無人の境に何の怪ぞ、思はずも二三歩しざりて凝佇（ぎようちよ）しぬ。

されど今は躊躇すべきにあらず、進み行けり。

林は玆に盡き五劍の麓は胸を壓して聳（そばだ）てるなり。岩に寄りて醜陋なる茅屋立てり、高さと廣さと幅と共に一間には過ぎざる可し。周圍には、古草鞋、炭片、蔬菜、布片、古枝等穢くも散されたり。

彼女は我あるを知るや、忽ち口を緘（と）ぢて彼の小なる城壘近く退きぬ。髮亂れて頰よりは若き血失せ、孱淋しう白ばみて眼に精力の消え行くも著しく、塵垢と古色とより織られたりとも見ゆる夷衣（あつし）を纏ひて、右の手は茅屋の戸に、左なるは背なる嬰兒に。

負へるも負はれたるも、啞の如く默して犢（こうし）の如く驚きぬ。

我は勉めて言葉柔かに問へり。

「御身等は玆に何事をか爲すぞ」

「さなり、鑛山なり、君よ、我が夫は今坑内にあり」

「鑛山とや」

我は驚きて見まはしぬ。實に茅屋の傍に人の這ひて入り得る計りの洞穴あり、カンテラの火幽（かす）かに其の奥にともれり。

「これか」

「さなり」

戛……戛戛……戛……

果然かの聲は洞穴の奥より來れるなり、忽ちにして他の聲亦彼處より來りぬ。
「誰ぞ其處に來りしは」
「我等が知らぬ人なり」
と哀れにやつれたる若き妻答へぬ。
「何……」
と云ひし聲は早や洞口に近かりき。
忽ち痩せて丈高き男顯はれぬ。右手には二挺の截石斧、左手にはカンテラ、胸には頭陀袋、臀には圓座を垂れ、滿身泥もて塗れるが如し。いら〳〵と輝く眼して、不動立ちになりつゝ、我が頭より爪尖、爪尖より頭を讀むが如く打まもりたる後、截石斧と吹き消したるカンテラとを茅屋の傍に置き、數塊の鑛石入りたりと見ゆる頭陀袋をはづしつゝ、
「おさい、火でも燃やせ。一日三界のらくらするが能と思ふか」
手拭を腰より拔きて顏を拭ひつ、
「愚圖の馬鹿阿魔」
若き妻は此の叱責にも動ぜずして悠々と薪を集めぬ。彼もさしていらだつ風なく、切株に腰を下して今は我のあるも忘れし樣なり。
我は徐ろに彼に近づきぬ。
「此の鑛山の主とは君か」
我は彼より一瞥をだに得る能はざりき。彼は妻の爲す樣を見守りたる儘、

「然り」

「何を採掘し給ふや」

五月蠅げに、

「金と銀と銅となり」

「我は其の然らんことを危ぶむ」

「何――」

と云ひつゝ彼は始めて我に眼を轉じぬ。

「何、君は鑛山の事を知り給ふか」

「否、されど御身は果して金と銀と銅とを得しか」

「あらず、唯道廳の役人がかく言ひしのみ」

「故に我はそを危ぶむ」

「フン」

と彼は鼻に笑ひて、

「さらば定山坊主を如何に思ひ給ふ」

此の時彼が前なる薪は燃え上りぬ。彼は兩手を翳し、脛を擧げて足の裏をあぶりつゝ、

「裸一貫にて溫泉を開きしにあらずや」

「されど御身の行先はあまりに暗黑ならずや」

「其の筈なり、山の洞中に侵入するのみなれば」

と云ひつゝ薪を積み直せば、火花と煙と小さき渦を爲して舞上りぬ。彼は其の晃く眼に極めて輕侮の色を見せて、更に我に向ひつ。

曇りし空は端なくも雪を下しつ。綱の如き梢を分けて鵝羽二片三片飛ぶよと見えしが、軈て繽紛として降り初めぬ。嬰兒は泣き出せり。若き妻は手を後ろにして、其の背を撫で體を振りながら、

「又雪」

と空打見やりて、殆ど絶望の聲を擧げぬ。彼はやをら立上りて嬰兒を己が胸に移しつ。薪に近づけて身を以て雪の嬰兒に落つるを遮りぬ。嬰兒は泣きやめり。

我も彼等も忽ち頭と肩とを白盡しぬ。

三個は默せり。霏々たる雪は萬籟を包み去りて、死の手今靜かに地の上を蔽ふ。

（うすきいのち）

「……君を勵ましつゝ雪踏みしめて、歸鳥夕を告ぐる石山を過ぎ、林樾の間を行くに、空は藍を湛へて限りなく晴れたり。雪は萬地に布きて到る所白し。右の方蓊鬱たる樹間には十三夜の月淋しき計り靜かに差上りたり。耳を傾くれば谿底遙か、水聲潺湲として小禽の歌に和す。木材を載せたる橇の今傍を過りたるが、漸く遠ざかりて凛々たる馬鈴の音のみかすかに殘る。君と余と唯二人醉ひたるが如くなりて、歩々次第に緩く、君よりともなく余よりともなく、自ら佇して、手を握り合ひたる儘に、茫然として自然の大觀に向ひぬ。……眞駒内の牧場を夕陽藻岩山頭に舂く頃に打眺めつゝ、蕭條たる孤村の炊煙を後にして、豐平川の假橋を渡る。橋守の竿を收めて去りしより、人影全く絶えて、聲立つるものは漣波のみ。桂影楚々として河水に蘸され、白蛇金馬共に流れて、冬晩

の寂寞茲に極りぬ。二人橋上に佇立し、水の逝くを打まもりつゝ、感慨の盡くる所を知らず。嗚呼此の身、陋劣と雖も功名の人にあらず、又射利の客にあらず、向上の壯圖を抱きて力の足らざるを悲む。悠久たる世路、我等を追ふの鞭、希くは神の御手にあれ。……」

雪の夕（定山溪紀行一節）

死の定運嚴しく我に投げられぬ。悶え、藻がき、苦みて逃れんとしたれど今は詮なし。

橇には舊び破れたる灰色の母衣を掛けたり。老いて瘦せたる馬と、肥えはしたれども馬よりも愚かしき漢子橇を遣るなり。我が困臥せる傍には、拳銃一個横はりぬ。

淡き紫藍の色滿目の雪を染めなして、夜の幕至れり。豆の如き灯漢子の傍に置かる。

橇は宛ら氷の上を滑るが如く、微かなる蹄の音と、灯の小さき搖動あるのみ。

我は瞳乎たる眼に灯を打まもりぬ。心は今中有に懸れる樣なり。

雪を染めたる紫藍の色漸く濃く、遂には黑漆のあやめも分かずなりぬ。灯のみ幽かに照す中に、默せる御者の横貌は宛ら死者の如し。

忽ちにして彼の面に火の如きものの顯はれぬ。而して見よ彼は彼女なりき、火と見えしは血潮なりき。

悽然として我に歸りぬ。總ては舊の如し。左れど心は尙ほ中有に懸れる樣なり。

灯は搖らぎつゝ漸く遠かりぬ。四邊は死灰の色に裹まれて、今は漢子も瘦馬もなし。我は何者にか送られて、飄々として其の間を果しもなく彷ひ行くなり。

忽ちにして銃聲の如きものを聞きぬ。

我が痩馬は今歩度を伸したれば、其の蹄時に戞々として相搏つなり。

いぶかしくも再び御者顯はれぬ。されど煙の如く消えて、今は又寂寞たる灰色の幽界を行く。

心臓も凍らん計りの寒さなり、遙かなる彼方に一點の灯見ゆ。我は灯を支ふる手の如きものを見たる樣なりしも、そは眼の謬なりき。雪を被れる林檎幻の如く眼を過れるなり。

嗚呼我は如何なればかゝる孤獨の野に置かるゝぞ。

阿、灯消えぬ。阿、再びともりぬ。

我は何故に彷ふや、何處に向ふも果てしなきにあらずや。地平線は何處にもなし、天と地とは互に相呑めり。我は如何に狂はん計り彷ふとも渾沌の中心にあり。

彼の灯何ぞ遠き。今蹄の音聞ゆ、されどそは痛く隔りたり、例へば過去世に坐して未來世の聲を聞くが如し。

我が橇我を捨てゝ何處に行かんとするや。

忽ち我が身躍りぬ。爾り橇の急に道を轉ぜしなり。

橇とや、橇とは何ぞ。灯愈ゝ遠し。

嗚呼、我が身、今無限の奈落に沈み行くが如し。嗚呼、噫、何處までも、何處までも。

此處も灰色の幽界なり、聲なし、色なし、香もなし、唯寒し。呀、牡丹の散れるが如き其の血痕は何ぞや。あなや花となりぬ、見知りたる人の姿となりぬ。誰ぞ、忙しげに何處へ行くや、何故に我に物言はぬ、暫し待ち給へ。見えずなりぬ。

灰白の彼方に顏の如きもの顯はれぬ、漸く瞭かとなれるに醜き容貌なり。一眼盲して一眼炬の如く、鼻爛れて紫にくづれ、黄みたる齒冷かに我に向ふ。遽然として彼笑ひぬ。

「夢ばし見給ひしか、痛くうなされ……」

誰の云ひし聲とも知らず、渾沌其の語尾を祕め盡しぬ。彼顏の如きもの旣にあらず。

再び灰白の彼方に大なる拳顯はれぬ。拳は十字架を握り、十字架の叉點に彼灯ともれり。瘦馬白氣を鼻より吹きて、あへぐ樣も、彼御者の橫顏も其の上に顯はれぬ。

「今暫くなり」

かく御者云ひぬ。何の意なるべきぞ。我は是れに答へんとせし時、其の姿は灰白の彼方に去りぬ。

彼は馬より肥えたれども愚なる者なるかな。

見渡せど見渡せど、灰白の外に何者もなし、淋しからざらむや。寒威髓に逼る。我は何者をか抱かんとせり、灯を抱きしと見れば彼女なりき。彼女なりしと見れば黑き裳引きたる骸骨なりき。其の骨の冷さよ。

突如として我は銳き衝動を受けて起き直りぬ。

身は寒水を浴びせられしが如し。

我は依然として橇の中にありき。御者は顧みて、

「今着せり」

と云ふ。我は橇を出でゝ雪に立ちぬ。何時の間に出でし月ならん、寒光銳く滿眸の皚雪を照して晝よりも明かに、森閑たる空山の夜は、萬有に主宰の笏を握り、莊嚴肅殺の氣沁々として腦を衝く。彼處の谿崖に廢寺立てり。

然り、我が行く可き所は彼處なり。

嗚呼、我が精の疲れ、我を誘ひて夢の鄕に至らしめしか。

あらず、汝は今より夢みんとするなる者ぞ。

(ゆめうつゝ)

「嵐吹き落ちて戸障子皆鳴る、恐ろしき天地の激怒なり。

此の夕我獨り机邊に默坐して端なくも憂神の虜となりぬ。祈り思ひ、風に耳を傾くれば、潸然として涙下り止まざるなり。

一言にして曰へば、我は未だ神に全く我の有てる總てを捧ぐる能はざるなり。而して人は我を以て一個の基督信者となし、一個の善人となす。是れ己が憂なり悲みなり。

神は此の如く不謙遜なる者に耳を傾け給ふまじ。

我には勇氣なし、敬虔の情なし、從順の念なし。眞に爾かなり、而も其の眞に爾かなるを奈何せんや。

災なるかな我が魂や。

朔北の風怒號して、飛雪屋牕に逼る。咎を擧ぐる詰責の聲何ぞ急なる。エホバの憤りいかに恐るべきかな。我れ逃るべき所なし。

嗚呼罪人なる我れ……」

咎(日誌の一節)

「お客橇の用意はよきぞ」

門には早かの健氣なる若者立てり。昨日よりの暴風は吹き勝りこそすれ、衰へたる姿はいさゝかも見えず。廣きに過ぎたる帳場の一角には、三分心のランプ心細げにともれり。

したゝかなる冬着の上に二重外套を重ね、二枚續きの毛布を引纒ひたる余は、轉ぶが如く戸を排して出でぬ。飛雪は忽ち鋭き渦を爲して戸内を冒し　余は辛じて橇に身を託しぬ。

「氣を附けようぞ」

「吹き溜りがえらからうに、馬に鼻つかすな、よ」

「飼草は入れてか」

「お客衆、忘れ物はあらしやるまいな」

など戸を楯にして吹雪を避けつゝ我等を送る驛亭の主人主婦下男下女叫びぬ。

侵々として衣を透し、膚を貫き、肉を刺し、骨を削るが如き寒威は既に余をひしと襲ひて、兩耳鼻尖手足は宛ら針をつけたる如し。

余は橇の後方に蟠り、若者は前端に踏みまたがりて巨人の如く立てり。骨逞しき靑なる三歳は、雪にあがきて手綱取れる主人が一揮の下には、空をも突かんずる勢はありながら、さすがになづめる景色も見ゆるなり。

若者は默せる儘に頭を包める洋巾をしめ直し、雪沓はきたる足踏みかため、殘りなき用意の程を確めつ、

「そんだら親方……御客衆出すよ」

引締めたる手綱を放てば、馬は三度首を振ひて橇を動かし初めぬ。蓬然たる頽嵐は天地を壓する如く飛雪を舞ひ下して、主人主婦等が心籠めたる別辭も途切れ〳〵に悽慘の想を牽く。

余は美しき妻を持てり。彼女は去年の春歸ぎ來りしにて、余と殆ど同一の地積を有する賀張村なる地主の愛孃なり。賀張の人は彼女の噂する時、其の名を言ふもの獨りだになく、村端に屹立して海中に突入せる岩鼻の高き頂なる祠の女神の美しさと尊きに思ひ比べてか、「辨天様」と呼び慣ひき。余と彼女との交らひは膠漆も啻ならず、

彼女を得てしより、余はアダムの如く働き彼女はイヴの如く笑まひて今日に至りぬ。

さるに余は彼女の父と語らざる可らざる事件に遇ひて、三日前賀張より半里計りなる其の農場に至り、昨夜其の歸途を以て、賀張の古驛舍に來りし頃は、日漸く暮れて風さへ加はりしかば、枉て一夜を玆に過したりしなり。風は雪を加へて夜をすさび明しぬ。余は命ずるに明朝必ず橇を出すべきを以てしたれど、主人を始め一人だに其の危險を說きて宜なう者なし。余は爐火を圍みて跪坐せる馬追等に脅威する如く、哀願する如く、命じ且つ請ひしかども、彼等は冷然として、

「お客衆は辨天樣が戀しからうが――己等は命が惜いで」

と空嘯くなり。

余の心火はいら〳〵と燃え上りぬ、好、彼等諾はずんば、旦余獨りにして往かん。

馬追等が辨天樣と云へる時、輝く一雙の眼ありて烈しく余を射たりしを覺え、不思其方へ面を移しぬ。同じく若き馬追なり、右手には大茶碗に濁酒を漫々と湛へ、左手には身缺鰊を握りたるが、暗き一隅に坐してありしなり。眉濃く額高きに、男らしきの極致を示し、爛々たる眼と一文字に引結びたる脣は感情の波を漲らして、面は紅をさしたる如く酒氣に燃えぬ。左手を身缺鰊共纍につき、肩を一ゆすりして眼を引据ゑ、舌なめずりしつゝ屹となり、

「お客衆――オ……己行くべい」

ともつるゝ如く云ひ、稍々頸を縮め、右手の大杯を面隱るゝ迄にあふりかけて虹の如き氣を吹きつ。

「お客樣……オ……おら行くだよ、コ、……これ飮まつしやれ」

鷲の兎を見出でたる如く眼光鋭く余にさしつけぬ。

余は彼の意氣に呑まれたる如く、其の大杯を受けて口を濕しぬ。余の爲す樣を凝視しつゝありし彼は、見入りたる儘に淋しき笑みを漏して獨語ちぬ。

「辨天樣が可愛ゆいと見ゆるノー」

「誠に困つた奴、去年までは人もよし、男もよし、氣さきもよし、働きもよし、村一帶の褒者にて、若い娘どもを病みつかせた事尠からぬ果報者なりしが、福壽草の谷間に咲き初むる頃から、何に狂ひ出してか、一向の酒狂亂、飲んでは撲つ蹴る踏みにじる、誰彼の用捨はありませぬ。心を寄せた娘の中には、あの癖を醫してと神信心に水垢離取つた、いとしい話さへ聞きましたが、から埒はあきませず、今夜の言葉もあてにはならねど、言ひ出しては後に引かぬあの男の意氣地、虚言とも覺えませぬが……お客衆全く危なう御座ります。明日はお止めになされませ」

と煎餅の如き床を展べつゝ主人は切に止めぬ。されど余は是れに聞かずして翌朝遂にかしまだちしなり。

牽鞍の前輪に結び下げたる馬鈴の鏘々たる聲のみ風に冴えて、今貞婦橋――アイヌの貞婦が日本の無頼に逼られて投身したりと聞く――は難なく乘り越しぬ。紛々たる飛雪にすかし見れば、今は渺茫たる海沿ひの曠原なり。

馬も彼の若者も必死を期して、敵壘に突入せんとする勇士の如く、余は屢々聲かけたれども――固より聲も亦嵐の爲めに散々に引ちぎられしならん――顧みんともせざるなり。

世に若し最も形容し難き光景ありとすれば、曠原の吹雪なるべし。乾坤白盡して天とも分かず地とも分かず、一種のゆらめき、一種の叫喚、逼るが如く湧き起りて、空を包み、地を圍み、繽紛たる雪は百分千裂、恒河砂の一つ〳〵、靈を享け、魂を得、舞ひ、翔けり、躍り且つ狂ふが如し。我等が橇は宛ら奔濤を乘分くる一葉の棚無

卅、小氣味よき計り逸れる青駒の、鬣と背と雪みどろとなれるが、血走りたる眼に行手を望みて、驀地にのり出づる手綱を握り、右手に長鞭を揚げて屹立したる若者の雄姿は、銀波を驅つて舵に寄れる古スカンヂナビヤ神かとぞ仰がるゝ。

鞳々と鳴りはためく波浪の音、颯々と吹き荒ぶ頽嵐のをめきに伴ひて、一瞬一刻にきざむが如く逼り來る寒威は余をして軈て其の威を忘れしめぬ。耳も鼻も切られて失せしかと怪みし辛楚も、今は漸く遠ざかり、天地怒號の聲將たかすかなり。九天より墜ち九地を捲くかと覺ゆる亂雪の、颶風に向ひし波頭の如く、濛々と亂れて若者と余との間を深霧の如く隔つるを、淡き夢の尚覺めあへぬおぼろと見る迄に、頭腦は知覺を失ひ初めぬ。やがて何とは知らぬ僥倖來り眼は自ら閉ぢんとして幾度か僅かに覺む。余は凍死に瀕せるを自覺して勇氣を振はんと試みたれども總て無益なりき。言ひ樣なき睡慾結束するが如く腦を包み、余は總てを措きて唯眠らん事を希ふに至りぬ。

忽如として橇止りぬ。若者の聲として、

「しまつたり――前を折り腐つた――」

と云ふが聞こえぬ。

「お客衆馬が――だめ――いきついた――呀――お客衆しつかりさつしやれお客衆！」

と云ふ聲尋で聞こえぬ。されど余は尙ほ茫然たりき。かくて余は彼の肩に背負はれし樣なりき。

されど、余の知覺再び歸りし瞬間には、彼の余の上に跨りてありき。彼の鋭き聲は余を喚び起せるなり。嚙むが如く余の耳に口を寄せて、

「お客衆ツ――べ……辨天樣可愛からうぞ」

余は其の以後を知らざりき。

讀者よ、嵐稍ゝ靜まりし共の夕暮、救助者の爲めに救はれて、危き命を愛妻の溫き看護の中に囘し得し後、聞ける所によれば、余と若者とは馬の斃れし地より三丁の此方――農場内なる余が家の南隅に一本立てる大楡樹の稍ゝ見得べき所――にあり。若者は全く余の上に被ひ重りて余を雪よりかばひ、兩手を余の頭上に堅く組み、眼と唇とは何事をか一向專念する如くきびしく結びて、殉敎者のそれにもまさる尊き最後なりしとぞ。

嗚呼讀者よ、今も田園は裕かに實り、若き妻は處女の如く美しかれど……されど讀者よ、余は憐むべき者となり了んぬ。

（殉敎者）

（一九〇三年七月二六日脫稿於麴町區下六番町邸）

斬魔劍

第一　夏の卷

果敢なしや、人の生涯、世の轉變、假令金殿玉樓の中に住んで、琥珀の盃に甘露の水湛へつゝ、伊達の榮華之れ見よがしに誇るとも、之れを舜花一朝の榮と見ば如何に。秋風立たば哀れ北邙に曝す白骨一片、よしや身に縷衣を纏うて、宿るは木蔭、喰ふは殘飯粗茶なりとも、之れを黃粱一炊苦煩の夢と見ば如何に。覺めての後に樂み待つ身の偖もうれしや。

暗き行燈のともしび耿として、かゞやく下、爐に向うて坐せる四十男、色飽くまで黑く、爛々として鋭き眼の上には黑く太き眉毛蟲の如く、鼻は高く口は大に、櫛りもせで亂れる頭髮はかたまで垂れて蓬に似、頰には二つの切疵あと鮮やかなり。恐ろしや惡鬼魔神も手捕にせんず、六尺ゆたかの體をゆるがせ出だして、自在に掛けたる土瓶の湯を缺け茶碗にうつして、一度に呑みほし、眉根よせつゝ語り出しぬ。こを聞く人はそもや誰、見るも優し色白の十歳計りなる童一人。

「それぢや、その事ぢや。先づ聞け。昔を云へば恥かしながら我も槍一條の武士、柏澤大五郎、十年の亂れが起つた時には、田原坂、城山に人に劣らぬ働きして、勇猛軍曹と敵にも味方にも歌はれた男ぢや。さるに、隊長は腹痛き横道者、此の大五が功ねたんでか賞與の沙汰もなく、第一豫備（今の豫備）にし居つた。元より賞與は神かけて欲しうはあらねど、人の心のあさましさはかなさに、儘よ、世に遠ざかりて、かゝづらひ絶えんと、唯我

獨尊の天地を此の山奥に開いたぢや。松見イ、見る通りの此の破れ家、聞こゆるものは蟲聲鳥語、見るものは老松互檜、結句之を樂しと思うて、晝は樵に山中を馳せめぐり、賣りしろなしたるはした錢をたゝいて、夜はどぶろくに醉うて寢たが此に十七年。思へばム、早い者、夢の樣ぢやわ。ぢやが來た初めより、一かどの强者と目を付けたは、此の萩坂村に正念寺の和尙と、村長の窪山ぢや。和尙は見事の高僧、窪山もたしかに强者、なれども邪智卑屈の奸物、なまじひ腕の利くを鼻に掛けて、男を賣る同じ穴の狸なる、似而非俠客の雷吉次とやらを先きにつかうて、かはいや汗水たらして人の手傳に露命をつなぐ水呑百姓をおどしつけ、取りたる錢に鼻歌うたうて、我たゞ一人太平樂、おのれ憎き瘦役人、やわか其の儘に置く可きと、思ひ定めたは度々よ。されど思へば我は世を捨てたる男、人の事にいらぬ口たゝくは無益と、うなる腕をさすつて胸をなでたは幾度と思ふ」と云ひしが遽かに思ひ出して、「ハ、ハ、ア汝に斯樣な事云ふは無駄、大切の用忘れた」と云ひつゝ、きつと座を改めて、しげ／＼と童の顏ながめつゝ、

「松吉」

物心覺えてより、今日ぞ始めて見る父の眞面目に、松吉今更の如く大五郎の顏眺めて、思はず形正せば、「先きも云うた通り、我も武士ぢや。姿見られて里の童に、閻魔々々と歌はるれど、心までは閻魔でないぞ。世は捨てても忠義の心一時片時も忘れぬは。人の定業には何にも足らぬ、老の身の思ひ出に、根限りの働きして、冥土の土產つくらんと思うた今日此の頃、此の戰ぢや。いでや鍛へたる此の足に、朝鮮八道の草を踏んで、四百餘州の山河荒さんと思うたれど、悲しや兵とも成つて出られねば、詮方なしに軍夫となつて行くに心定めた。幸に兩親は早や無く、朋友も妻も元よりなき身」聞くと等しく、凉しき眼に驚きの色あらはしたる松吉、急に大五の言葉遮りて、「それは／＼あのいとしい母御は、此の松吉には御座りませぬのかや」問ひつめられて大五はつと氣付き、

言ひ損ねたりと心にくやみしが、思へば憐れなる松吉の身の上、目を閉ぢ腕うちくみて默然たるを、松吉もどかしげに進みより、膝ゆすりつゝ、「父樣、何を逡巡うて、父樣、早う此の事云うて、これ、かうして賴む程に」可愛や、楓の如き手を合せて早や目にもつ淸き淚のいぢらしさ。さすがの大五堪らず松吉を引寄せて、聲も曇りぬ。「云ふ、語りて聞かすわ。何んでいぢらしい其のまねして此の親父をなかす!? 八年前よ、例の如く山を分けたに、不思議や人目もなき此の奧に、赤兒の泣聲、漸く探し出だして拾ひ取つたは汝ぢや。まこと汝は捨子ぞ」云はせも果てず、うれしげに聞き居たる松吉、驚きとかなしさに、ワツと聲擧げて泣き倒るゝに、大五も其の心をくんで、思はず涕にくれんとせしが、忽ち押拭ひ、わざと聲あらゝげ、「阿呆、泣くな。今日を何の日と思ふ。武士なれば門出の日出度い日ぢや。笑へ笑へ、ハ、ハ、ア」笑うて見する悲しさつらさ。折しも窓外のむら竹風に戰いで、月影曇ればさツと降り來る夏時雨、地もくぼまん計りなりしが、忽ち霽れては月明りに、軒端に落つる點滴もいと涼し。大五端近き障子引き開け、泣きくづほれたる松吉を顧み、「松、泣くなと云ふに何故泣く。見イ、今降つた此の雨を。降る時は小氣味よう降つた。晴るゝ時は又小氣味よいわ。人もかうあれ、男らしうないぞ、松、泣くなツ」

*

思ふてふ思ひあれども子を思ふ
思ひにまさる思ひあらじな

とは誰がうがちける言葉かや。道しばの露ふみわけつゝ、正念寺を出でゝ旭川を渡り行く人影は、正しく大五郎。心あらば月も雲間にかくる可きに、くやしやなまじひあかきをたよりて、後見返れば山門の前に袖しぼりつつ此方見送れるは、正念寺の和尚といとしき松吉、あはれ萬代にかけて誠つらきは親子の愛別離苦なりけり。

第二　秋の卷

今故郷にありもせば、秋風颯と立ちて桐の葉二ひら三ひら散る庭の面に、咲き亂れたる千草に選ぶ、秋の七草眺めつゝ、背戸に砧の音を聞いて、空に雁の文字よまんものを、おぞや八重の潮路渡りて、此の朝鮮に來たる悲しさ。見渡す限りの廣野に、目をよろこばす花一つ咲く草なく、紅葉して風情ありげに散る木の葉一枚梢に殘らで、枯れたる林寒風にざんざと鳴る物さびしさ。百萬の敵前に置きつゝ、笑うて動かぬ丈夫の魂、ズバと引拔くは誠此れなんめり。

是も其の丈夫の一人にや、身には軍夫の衣服着たれど、六尺の身にあまる膽丸は、ギラと輝く眼にあふれて、動かぬ擧動ゆかしくも憎し。筋肉逞しき腕こまぬきて、木蔭に坐しつゝ打案じ顔なるは、此の秋風に誘はれて、魂や故郷に通ふらん。

折しも息せきつゝ走せ來りたる一人の軍夫、大聲あげて、「頭領、頭領、大變が起り腐つた。今此組の軍夫と、共振組の軍夫と喧嘩はじめて、運よくも此方が勝つたが、おツつけ百人長がわたりに來るとのこと、今聞いて其の儘飛んで歸つた」初めてつく一息に、聞き居たる男は手をほどいて膝の上に置き、「喧嘩の人數は何人と何人だ」「一人と一人」「ハ、、ハ、、アゝさうか、分つた、確かに聞いたぞ」再び幹に倚り懸つて、動かざる事土偶の如し。

忽ち入り來りたるは共振組の百人長、丈は高しと云ふにあらねど、强ねたる眉根口元恐ろしく、沈んでかゞやく兩の眼は、人を射て心の巧み、いかにあるらん。引續きて仁王の如きあらくれ男三人、いづれ劣らぬ力瘤に縒かけて、躍つたる胸の炎、からく押鎭め居る樣、あり〱と見えたり。

「閻魔ッ」此の一言に樹下にうづくまつて、知らざりしが如き男、忽ち眉根よせつゝクワッと見開きし眼に、いきまきつゝ、怒氣滿面にあふれて、つめよせたる共振組の百人長を眺めて、呵々と大口開いて笑ひ出し、「閻魔と知つて來たか吉次、汝に取つては殊勝の振舞に、此の大五言ふ事聞いてやる。そこにつくばつてほざけ」聞いたる雷吉次、忽ち癇癪の條ひき立てゝあはやと見えしが又思ひ返して、「フ、念佛前の惡口雜言、吉次憐れに思うて勝手に云はす。だが閻魔、汝も口をつぐんで少しは聞け。先きの喧嘩、疾に承知の筈、それにつけて、らちあけに來た、命もらひに來たッ」眼を閉ぢて頬の虎鬚なでまはしつゝ、默然として聞き居たりし大五、其の儘身動きもせず、嚙んではき出す如く、「タ、痴呆ッ」

憤怒むら／＼と心頭をついて、座を蹴り突つ立ち上りたる雷吉次、太刀の鯉口くつろぐれば、後に續きたる三人も、得物の目釘しめして、いざと云はばござんなれ、肉の山、血の河、目前に顯るゝは危機一髪、木立のすきま／＼には、何れ劣らぬ荒くれ男、百人と百人、頭領の意氣窺うて、事あれかしやと待ち設くる物すごさ、凄じさ。殺氣天地に滿ちて、あはれ瞬く暇に起らん修羅の巷。

此の樣を知るや、知らずや、平然として腕組みつゝ、眠れるが如き大五郎の振舞ひに、もどかしとや歩みよりたる吉次、二人の膝乘り重ならん計りにどつかと坐して、穴の開かん計り睨むれば、大五も始めて形正して、魂かよはん計りねめかへしつ。暫しは言葉もなく、唯聞ゆるはいらだち栖つく二百人の意氣の恐ろしさ。

「ム、、よく云うた大五、痴呆とは大五よくぬかした、其のわけ確かに云へ」先づ出だしたる吉次が鋭き言葉を、大五大口開いたる笑ひに打消しつゝ「百遍、二百遍、汝が度胸すわつて、耳の聞こゆる樣に成るまでは、幾度でも云うて聞かすわ。畜生にも劣つたる喰米蟲とも云ふ可きを、痴呆と云うて呉れたは、大五が慈悲ぞ。吉次耳ほじつてしつかと聞け。汝初めはる／＼此の朝鮮に來たを何の爲めと思ふ、辱い神國にあだを爲す、豚尾漢を膺す其

口論喧嘩の爲めと知らぬか。さるを何事ぞ、唯の一人と一人のいさかひに、百人長とも云はる可き大事の男が、何日何時でもわたりに來い。支那の奴等も腹の皮よぢつて、馬鹿を笑ふわ。汝の組下が殘らずごねたと云ふならば、自分の血眼とならば、百人だけの價値ある此の大五が素首よごれては居れど、見事立派に渡してくれる。是れでも喰米蟲と云ふ軍夫が、勝手に負けた喧嘩を、業々しく持出す、馬鹿さ加減、此の大五ほと〳〵あきれた。天をも呑まん大あくびなしつゝ、立うたが不足か、天晴れ痴呆と笑うたが無理か」云ひつゝ毛腕高くのばして、天をも呑まん大あくびなしつゝ、立上りて、「無駄口たゝいて、上官からの大切な用忘れた」かく、ひとりごちて立ち去らんとせしが、ふりかへつて血走りたる眼に、大五の後姿睨めて氷嚙む如く切齒をなせる吉次に向ひ、「吉次、首尾よく此の大五が首とつても汝の死ぬ時は冥土に閻魔が一人ふえて、萩坂で百姓いぢめた、罪せめらるゝが恐ろしからう。ハヽハヽア吉次、今日はきつい御骨折、早や用は無い。尾を捲いて、たゝかれぬ內失せろ」生れて驍々たる鯁骨の大五、已れの好まぬ奴には、遠慮も會釋もなく、惡口つきつゝ悠々として木蔭に入りぬ。取り殘されたる吉次、立ち上りて茫然自失。

第三　冬　の　卷

卍字と舞ひ巴と躍る白雪は、寸距の空を埋めて四邊唯茫々漠々、耳も手も引きちぎらん計りの寒風は、骨迄もつんざいて、恐ろしや世界破滅の時に吹くと聞く、毘嵐もかくや。天も、地も、山も、林も、白皚々たる中に、雷のとゞろく如く聞こゆるは砲聲鯨波。白雪の中に、春の花散りしくかと驚くは、兵ツと飛ぶ彈丸に、むごや骸破られて、迸りたる血潮の糊、股をも埋めん積雪を蹴立てゝ、右に行き左に馳せ、此を先途と防ぎ戰ふは、共振組の軍夫百人。こを取り卷きて攻め掛けたるは、屈強の支那兵確かに二千騎。

必死とは定めたれど、寒さと多勢には敵しかねて、稍々敗色見えし軍夫の中に、獨りふみ止まりて、大音擧げたるは正しく雷吉次、「ヤイ、奴、卑怯ぞ、返せ、もども、豚尾漢に追ひ立てられて、どの面さげて日本にかへる、病院に一と足も豚ふみこませて、すむと思ふか、返せ／＼、男一匹の此の吉次が死樣、しつかと見ろツ」云ふと等しく、腰にさげたる太刀引抜き、雪にまじつて霰とふる彈丸の中を潜つて眞一文字に走りしが、影は早くも吹雪の中に隱れぬ。

*

すごくもすめる夜寒の空にかゝる氷の如き弦月一痕、昨日よりかけて今日の夕暮まで、小やみもなく降り續けし白雪を照して、韓山の冬に薫らぬ花の、林に咲きぬ。されど、そよ吹く風は暖からで、梢に積もれる雪を誘うて、うなりたてつゝ吹き來る時は、五體縮んで、血は氷らん計り、樹蔭人影竭きて、かすかに聞こゆるは、饑ゑたる狼の遠吼のみ。「エヽ、寒むや、何の用か知らぬが、此の眞夜中人をよぶ第一衞戍病院の奴等、何事が起り居つたか」獨語ちつゝ、外套に纏か寒さをしのいで、三尺に餘る雪ふみ分けつゝ行く一人の男は、是れなん柏澤大五郎なる。

萬籟聲を潜めて、恐ろしき迄に物靜かなる林の奥に、あやしや人の叫聲は漏れぬ。獨りとぼ／＼歩みすぎんとせし大五、不審の眉ひそめつゝ急に足を返して、林の方に進めば、風にともなはれて折々聞こゆるは、確かに日本人の聲、「チ……畜生、殺せるなら、見事殺して見よ、……奴等に、……キ……切つたなツ」俠氣滿身にあふれたる大五、何かは遂らはん。ボタン外すももどかしげに外套ぬぎ捨てゝ、月にさえたる志津三郎の太刀の目釘に、しめしくれつゝ、右手に提げ、雪を蹴立てゝ聲する方に近づき、かはせる枝、かすかに漏るゝ月影たよりて、木蔭に窺ひ寄れば、十人計りなる支那兵、笑ひ興じて、各々得物さげつゝ、くびり入らん計りの繩目かけられたる

一人の日本人を取りまきて、むごや、昔聞きし五分切、一寸だめしもかくや。肩より血糊に塗れつゝも、無念の叫聲に突つ立ち上りて、おのれ、やれ、嚙みつきても殺さんと、あせる日本人を他愛もなく突き倒して、今一切りと太刀擧げたる一人を、見るより、大五堪らず、六尺の體宙に躍らして、二人が間に割つて入りぬ。

不意に出でたる肥滿の大兵に、太刀ふりあげし支那兵、膽ひしがれてか、後へに瞠と倒れて圓き目見張るを、「己れッ」一聲の下、紫雲天に沖して、憐れや首は空に飛びぬ。

此の振舞に恐れけん、殘りし支那兵等、慌てふためき、逃ぐるに疾き足に懸命の力入れつゝ、蜘蛛の子の如く散々に影を隱しぬ。

微笑みつゝ仁王立ちして、逃げ行く支那兵を追はんともせず、見送りし大五、雪を拂うて太刀を拭ひ、鞘に收めつゝ顧みて日本人を見れば、今迄の氣力此に挫けゝん、齒をかみしめて顔は青みぬ。大五驚きつゝ馳せ寄り、繩ひきちぎつて抱き上げつゝ、耳に口付け、「ヤイ、氣を確かに持て、心ゆるますなッ」此の言葉に勵みけん、かすかに眼開いたる男、つく〴〵と大五を見るに、大五も始めてしつかと見れば、思ひもかけぬ雷吉次なりけり。

抱ける大五の手、振りちぎつて、ぬツくと立ちし吉次、重傷に堪へで、再び倒れつゝも、むツくと居直つて、急しき息氣に、大五を睨めつけ、「閻魔、ナ、なにしに來たッ」大五は悄然として、やをら雪拂ひつゝ起き上りて「ム、天晴れ、男、汝は正しい道さへ踏まば、此の大五は兄弟とも親むものを、惜しいもの。ぢやが吉次もう汝も罪亡ぼし、病院には大五が鬼となつて連れて行かぬ、其の代り之れやる」と云ひつゝ懷を探りて、取出だしたる短刀を、吉次が前に置きつゝ、はら〳〵と霑せし一滴の紅涙、「吉次、さらば、別れる」云ひ捨てゝ進み兼ねたる足を、林のあなたに運ばんとするを、吉次は呼び止めつゝ、「エ、閻魔、待て、待つて呉れ、云ふこと有る」大五は其の儘ふりかへつて、「オヽ、言ひ殘しもあらば、聞く、云へ」「大五今日第一衞戍病院から、汝を呼びに

來たらうがな」「ムヽ」「思ひ出だせば此の夏よ、汝が軍夫となつて、此の土地へ突つ走ると聞いたに、村長の猪山が此の吉次を呼んで、結句末まで邪魔臭い閻魔、汝も朝鮮に渡つて、事によせて打殺せと云うた。己れも汝とは日頃よりの敵、好い折と請合うて此の地に渡り、十月の末よ、汝の組下と此方の軍夫との喧嘩によせて、汝を無いものにせうと思うたに、汝の理窟につめられて、すご／＼と手出しもならず、組下の前で尾を捲いた無念さ、腹にこたへて今日の雪を幸ひ、第一衛戍病院に汝を呼びつけ、其の道で殺らうと思うた晝過ぎ、思ひ掛けなく豚尾の奴等が病院を襲うたわ。防ぐ奴は纔か百人、しかも負色立つもどかしさに、一人敵陣に切つて入つたが、多寡の爭ひ何の功もなく、口惜いが今の始末となつて、汝に救はれたは全く天罰、ムヽ、苦しい、此のざんげ云ふは腸湧いて、傷の痛みよりも、ズヽずんと苦しいわツ、閻魔察して呉れ、もう何も云はぬ」惡に強きものは善にも強しとかや、吉次此に惡を悟つては、まこと勇々しき善人と變じて、短刀引抜き、左の側腹に探り入れんとするを、大五飛び寄りて、其の手しつかと握り、「吉次汝の胸たしかに見た、早まるな、吉次、吉次、命は暫し大五があづかつたぞ」短刀もぎ取つて、吉次の懐に入れ、己れは吉次を背に負うて立ち上りぬ。折しも空に東明の光漏らして、月は西山の端に落ちつ。

第四　春の巻

春とは云へど、殘んの白雪、遠山の峡に見えて、梅の南枝は纔にほころびぬ。萱の根の夕陽、漸く西に傾きて、茜さす萩坂村の西、龍頭山を登りて頂に至れば、むぐら茂りて竹戰ぐあたり、いぶせくも住み荒したる、あばら屋あり。一年計り燈の影も見えざりしに、今日は珍らしくも破れ障子を透し、豆の如き燈かゞやきて、一二人の人影おぼろによまれぬ。

相對して坐せる二人の男、一人は髮長く延びて、鬚は栗のいがの如く、身には汚れ切つたる軍夫の衣服纏うて、頭より左の目に掛けて、繃帶をなしたり。客と見ゆるは、目立ちて云ふ可き節はなけれど、顏よりまくりたる腕にかけて、新しき疵あまた見ゆ。前なるは大五郎、後なるは吉次なり。

「海城の戰に、傷負うて、今日漸く歸り着いたが、何より見たきは正念寺の蓮和和尙と松吉、此の山にも登りて其の儘正念寺に馳せ着くれば、寺は蜘蛛の巢に埋もれて、庭は隅まで畑と成つたに驚き、心も空に此の家に歸れば、折よう汝の來た嬉しさ。先はそれより云うて吳れ」進み出でつゝ、問ひ掛くる大五郎の言葉に、吉次默然として腕こまぬきしが、「話すもむごいが、心靜めて聞け。去年の十一月の、日は確かに二十三日、九識の床の上に心を澄し、三密の窓の月に悟を開いたあの蓮和和尙も、人間の三苦はまぬがれいで、其の夜西の方へ旅立ちなされた後、村長の窪山は、あの寺を無住寺として、其の庭は已れの畑同然、村の衆の苦情もかまはず、松吉を已れの家に引取つたはいゝが、聞けば敵の子とかわめいて、朝早くより夜遲くまで、うたぬ計りに追ひ廻し、飯喰ふ時は女房の奴が、角だけ生やさぬ鬼の面して、一膳も食はぬに、體に似合はぬ大飯喰ひと怒鳴り散らすに、可愛や松吉香の物に、箸着くるも恐ろしく、次第に瘦せて、仕事しながらも汝を思うてか、恍惚して目に涙のあふるるを、已れと勵まして懸命に仕事するいぢらしさ、との村の噂、聞いて罪恐ろしく、度々意見もしたが、窪山は、汝は歸つてから、いかい弱蟲に成つた、と笑うて、取合はず。何とかせうと、心苦しめた甲斐もなく、一昨日の事よ、汝の手紙屆いたと、松に話したに、松は躍り上つて喜び、轍に狹まりて、死を待つ鮒の水にも逢うた心地して、何時歸ると問うたを、窪山は押隔てゝ、餓鬼早く仕事ども仕腐れ、閻魔の死んだと云ふ電報、昨日屆いたわ、と云うて嗤うたを、幼心に眞に受けてか、其の夜行方知れずとなつて、未だに歸らぬぢや」聞いたる大五、滿身の熱血頭にやのぼりけん、火の如き顏色恐ろしく、逆鱗したる老松の如き拳に、膝を打つて立ち上り樣、

一マ、松吉が居らぬ、松が、己れ窪山ッ」太刀提げて、狂ひ立ちたる惡鬼の如く、床も蹴破らん計り、足踏みならして走り出でんとするを、吉次は前に立ちふさがつて、「大五、大五、これも元は、コ、此の吉次の罪、冥土で詫する、さらばッ」と立ちたる儘に、大五よりもらひし短刀引拔きて、見事腹一文字、パツと散る鮮血は眞紅に大五の衣を染めて、果敢なく吉次は此に息絶えぬ。

*

吉次の死に力拔けせし大五、詮方なく屍を抱いて、正念寺の庭深く埋め、一片の稱名に無量の情を込めて、月照す道を、すご／＼辿りて、旭川の橋渡らんとする折しも、不圖目に付きしは、しがらみに寄せたる人の死骸、心にあたる節なきにあらねば、急ぎかき上げ月影に照せば、嗚呼、夢なればとく覺めよ、無殘やいとしと思ひし松吉が空蟬の死骸、偖ては我を慕ふのあまり、昨夜旭瀧の瀧壺に、頼み甲斐なき憂身をや投げけん、と案じめぐらせば、目もくらみけん、大五愛しの羈には得堪へで、瞠と坐したる儘、月影青く照す下に、眠るが如き松吉をまもりて、暫しは起きも上らざりしに、何思ひけん、忽ちつと立ちぬ。

憐れ子の暗に迷ふ、親の心、膽も五體も、鐵の如き氣丈の大五も、正しく心は千々に狂ひぬ。うるみて輝く大の眼をクワツと見張りて、松吉を睨め、さと引き拔きし志津三郎の名刀、ギラと月影にきらめくと共に、水もたまらず松吉の首は骸より離れぬ。

血糊に塗れし松吉の首を、弓手に抱きて、魂通らん計り、打見やりたる大五「松、心晴らせ、汝の前で見事、窪山の首、ひん拔いて見するぞ」云ふと等しく、頭髪逆立てゝ、血走りたる眼に、萩坂村をハタと睨みざま、つまさきに砂を蹴り上げつゝ、韋駄天の如く、宙を走りぬ。

*

どう／＼と鳴る響、天に轟いて、漸く茂る若葉の下より、百練の布掛れるが如く、岩を碎いて落つる、旭川の源なる旭瀧、飛沫四方に散れば、霧空をかすめ、浪岸をつんざいて躍る樣は、鬼神の荒れしに異らず。さえたる月凄くも照りて、只聞ゆるは遠山に啼く梟の聲、夜は深きこと森々、樹木悉く眠りて、遠村の燈かすかに澄みぬ。

忽ち走り來る人の足音聞こえて、現はれ出でたるは、色靑ざめし閻魔の大五、弓手に持てる首一つふえしは、確かに窪山の無念の齒嚙みに、眼見張りて、天を怨める悲憤の首。右手は血糊淋漓として、凄き此處の有樣に、すさまじさを增す志津三郎の一刀。

大五は殘んの霜華、踏みしだきて、岩端に進み出でぬ。仰いで空照る月に、無情の涙を振ひ、伏して瀧壺に、憤りの齒嚙みなしつゝ、忽ち高く身を躍らせぬ。迸り立つ浪の花は、月に映りて、玉と散りつゝ、大五の影は、憐れ水底深く消えぬ。

*

あはれ一鄕のしこ草を薙ぎ盡したる、天晴の斬魔劍、己れ亦其の銹に朽ちて、旭瀧のうたかたと共に、果敢なく折れぬ。今こそ知れや、古も今も未來も果敢なきは、人の生涯世の轉變！

（一八九五年九月上旬脫稿於金剛寺晉默庵、勁隼生）

たとへばなし

其の一

先づ或る處に小川がありました。澄んだ水がゆつくり牧場の間を流れて行くところは、誰が見ても美しい事でした。それを美しいと見たのは、人ばかりではなく、大空を亙る白い雲も、汀に咲く紅い花も、そこいらを飛び廻る小鳥も、水を飲みに來た乳牛も、皆んな美しいと思うて此の小川をのぞいて見ました。白い雲がのぞくと、水の中には白綿の樣な影が浮びますし、紅い花がのぞくと、紅い唇の樣な影が浮びますし、鳥は鳥、牛は牛で、其の儘の姿が靜かな水の面にあり〳〵と映るのでした。其處で小川が思ひますには「あの白い雲も綺麗だし、紅い花も美しい。そして鳥の形も、牛の眼付も、皆んな可愛いから、どうか自分に映つたものは一つも消えない樣に殘して置きたいものだ」そこで小川は、自分に一度映つた影は、皆んな消えない樣な工夫をしました。

所がどうでせう、一つの影の上に又一つの影が映るのですから大變です。白い雲の彼方に紅い唇がついて、其の間を鳥が飛んだり、牛が顏を出したりするんです。何んだか氣味の惡い事になりました。そこで小川も愛想を盡かして、其の後は物の影は映るに任せ消えるに任せる樣になりましたのです。小川の水をのぞいて御覽なさい。來た雲は映るけれども、去つた雲は消えてしまひます。斯うすればこそ小川の水は何時までも澄んで居られるのですとさ。

其の二

或る人が不倒翁（おきあがりこぼし）をころがして遊んで居ましたが、皆さんの知つての通り、不倒翁のお尻には重いものが附けてありますから、何度ころがしても起き上ります。それで其の人は腹を立てゝ、どうか不倒翁が起きない様にしたいと思つて、たゝき附けたり、投（はふ）り出したりしますけれども。矢つ張り平氣で起き上ります。幾十度やつても、幾百度やつても、おんなじ事です。

さうすると其處に利口な人が來て云ひますには、不倒翁を起き上らない様にする工夫はたつた一つある。重いお尻をもぎ取つてお仕舞ひなさいと云ひましたとさ。

其の三

或る兒が綺麗な手毬（てまり）を買つてもらつて家に持つて歸らうと町の中を歩いて居ますと、前方（むかう）に大きなお月様が昇りました。其の兒はそれを見ると、「あの手毬は私のよりも餘（よ）つ程大きくつて綺麗だからあれが欲しい」と云ひ出して聞きわけがありません。欲（ほ）しい〳〵と大きな聲を出しながら一晩中お月様を追つかけ廻して居る中に夜が明けて仕舞ひました。もう空には月はありません。さうして其の兒の手の中の手毬も何時の間にか亡（な）くなつて居ましたとさ。

其の四

或る時納屋の上に束になつて積まれてある藁が柱に引つかゝつて居る草鞋（わらぢ）に向つて、

「草鞋(わらぢ)さん〳〵、お前程因果な者はあるまい。おんなじ藁に生れながら、土足で踏まれる役をするとは、餘り氣がきかないぢやないか」

と云ひますと、草鞋は見返つて、

「それではお前は何になるんです」

と聞きました。

「さればさ。私はこれから何にでもなれる、米俵になつてお藏の中で澄(すま)し込む事も出來る、疊の心(しん)になつて御座敷で暮す事も出來る。何んにでもなり度い放題だ、羨(うらや)ましからう」

と答へて鼻を高くしましたが、其の翌日持主は束の藁を切りきざんで肥料に入れて腐らして仕舞ひましたとさ。

其の五

お月樣は器量自慢で、誰にでも遇ふ度に、

「お日さん程可哀さうな者はない、年が年中汗水たらして働いて居ても、人が見かへりもしやしない。それに引きかへ、私は時々しか顏を出さないのだけれども、顏を出す度に下界の人は夢中になつて、綺麗だ美しいと云つて騷ぎます」

と吹聽しました。其の吹聽が餘り度が過ぎるので、人間と星とを除いて其の外の天地萬物は皆んな太陽に加勢する樣になつて仕舞ひました。

それだから御覽なさい、太陽が出ると空が第一に綺麗な〳〵色になります。山には美しい霞がかゝつたり、雪の頂が火の樣な色に輝いたり、森の中は影や日向(ひなた)で綾を織り、野は見渡す限り活々(いき〳〵)となります。さうして太陽が

沈む時には、草も木も鳥も獸も、別れを惜んで皆んな黑い喪服を身に纏ひます。
月が出ても月に加勢するのは、かすかな光の星と、あちこちでかすかに睫を開く水とがある計りです。
成る程、人もほめます。
然し太陽は人がほめるほめない位は平氣で居るんですとさ。

其の六

或るお城に大層えらい美しいお姬樣が居て、お氣にめしたお婿樣を探しておいでゞした。
お婿樣にならうとして來た人は澤山ありましたが、其の中第一に來た人は、いきなりお姬樣を拜しました。第二に來た人は、お姬樣の衣物の襟の折れて居ないのをなほして上げました。第三に來た人は、遠くからお姬樣の名を戀しさうに呼びながら來ました。第四に來た人は、お姬樣の前に自分の持つてるものを皆んな捧げました。
さうすると、第五番目に一人來ましたが、其の人はお姬樣が旣に自分の奧樣でゞもある樣に、手を取つてお城の中に連れて行つて仕舞ひました。
さうして此のお姬樣は第五番目の人をお婿樣になさいましたとさ。

（歸朝後、札幌時代）

秋風

なつかしき君、彼の事ありてより互に淋しく手を取りて、世は唯二人となりぬと歎き暮らせしも、今は中々に頼母しく候かな。君は獨り東京に、妾は獨りシャトルに、君が痩せ行かん腕すら撫でん事叶はずなり候ひぬるよ。

眼に附き纏ひて今も忘れ難く候其の朝夏とは思ひ得ぬまでに雨しと〱と冷かに候ひしを、君新橋まで送らんもつらしとて、玄關にて最後の握手と接吻とを致候節よ、古道具屋が買ひ殘したる破損物の前庭に散りたるも、前の夜君がもだえ泣きて過ち折りし櫛の一片落ちたるも、妾が手慣れしヴァイオリンの是れのみは賣らでと折入つて頼みしが、窓より見え透きたるも、短き石疊をきしりて車の門を出でし樣も、偖ては其の時ちらと顧み候髮殊に亂れて眼に涙滿てつゝ尙強ひてほゝゑみ給ひし君が面影も、唯夢の樣にて候ひき。新橋より汽車に乘りし時も、船宿に事せばしかりし時も、汽船の汽笛けたゝましく鳴りて動搖足許より起り候時も、唯夢の樣にて候ひき。シャトルの旅窓にかくてある今も、其の夢尙覺めあへず覺え候。妾の心うつゝなきにて候べし。

無情かる今の世の人に見せんは恥と忍び〱候。涕は港を出でし後一時間ばかりして船室に獨り籠り候より湧くが如く流れ出でて、三時ばかりは身も心も浮くばかりに候ひき。胸は稍ゝすが〱しう成り候ひぬ。例へば世に比ひなき珠玉をもてる人の飾らん時なき儘に思ひ切りて打捨てたりし心どもやと忍ばれ候。

横濱まで見送り給ひし方は、小關の伯父樣伯母樣、淸岡樣御夫婦、美雄さん英子さんと乳母にて候ひき。船の上にて人のあらぬ隙、妾のスカーツをぢつと見入りつゝ、「襤褸をこそ召して御出でなさりたからうに」と乳母中

してしみ〴〵涕ぐみ呉れ候。妾はたまらなく成り候て、「乳母やありがたうよ」と是れも喉にて消え申候。君よ父上母上のなつかしき〳〵御聲聞かずなり候てより、君のやさしき言葉の外に人らしき聲を聞き候は此の時が始めてにて候。恐らくは又終りならずやと喩へがたなき思も致候。

妾等姉妹には人しげからぬ處こそ親しまるゝにて候得者、東京よりシャトルの方やゝ住みよかるべく候。入日殊になつかしく候。君の方に光齎さるゝと思へばにて候。此の地にも慰め顔の人なきにはあらず候へども、妾御禮としては、冷かに笑ふのみにて候。泣くべきが天性なる女子の涙を涸し置きて尚ほ笑へとは餘りに呪はしき浮世とつく〴〵存じ候事も御座候。

妾十九、君十七、合せたりとて三十六歳なるが、打續きて父上と母上とを失ひ、他に一人の縁もなく候事、世の人は左様かと耳にも止めまじく候はんを君悲しくおはす可し。妾はしんぞ恨めしく候よ。君にはいとしくて構へて知らせ申さじと今迄押隱し參らせ候者から、世の中とは妾の傍におはして君が見給ひし様な者には夢々無御座候。人とは木か石か鐵か水かに候べし。君は知り給はねども父上と母上と妾等と睦みて住み慣れし彼の家は他人の名義にて附木の様に廉く清岡家が買取り給ひしにて候。電話は形見に貰ふとか宣ひて清水様引移し給ひしにて候。君が「姉上何故泣き給ふ」と見尤め給ひし彼の時は、出入毎に頭を疊に擦り附けし甚助が、貸金返せとて催促に來りしにて候ひき。それよりも妾が身を切る思して君と別ちがたき袖わかち候譯申すに堪へず候得共、隱しも置かさぬ此の世あまり憤ろしく候かな。うす〳〵は賢き君の推し知り給ひけん、去る一月父上の身まかり給ひしより引續きて母上病の床に就き給ひ、君も妾もあらん限りのもの賣捨てゝ身をさへ亡きものにして、神様に祈りし甲斐もなう、六月二十五日、嗚呼今も眼に見ゆる様な君が手を其の右の手に、妾の手を其の左の手に取り給ひて「明日よりは君等孤兒と人に呼ばるべき身か」と潸々と涙ぐみて果敢なう成り給ひし悲しの心、亂れて〳〵狂はん計

りなる其の翌々日、小關樣妾に向ひ給うて、君が家の計かたければ、亡き人のよく知りて在せしミス・スミスを賴りて先づ洋行せよ。親族會議にて事定まりぬと宣ひしにて候。其の裏の心を申候べきか、枯れたりとて妾等が家の流れに二人を兎や角養ふ水は殘り候ひしを、欲しゝと思ふ人候ひしなり。妾を妻にと云ひて母上より痛くこばまれし人の恨も籠り居り候なり。委しく申せば(以下抹殺)嗚呼許し給へ、君、此の姉は此の姉は、強き積りには候へども、君の姉として父上とも母上とも成り代るべき身には候へども、今は堪へ得ぬまで弱くなり候ひぬ。妾の意地强き僻見より人樣を彼此と思ひためて君をも迷はさんと致候事、返す〲許し給へや。なつかしき〲君、高尙く清く愛らしき其の心を何處までも持ちつゞけて、人樣になつかしまれ給へ。夢にも妾の樣に物をひがみてな見給ひそ。世の中もつらき人のみには候ふまじ。君が三歳ばかりの頃、夏の夕暮、熟睡しつゝ掛けありしショール踏みはぎ給ひしに、安樂椅子に書見しておはせし父上ほゝゑみつゝ、やをら身を起し、おほきなる御手にショールよき程に掛け給ひしをさな覺えに致居候。何時か皆んなにて熱海に參り候折、大湯に近づきて其の中差覗かんと致候に、母上危しとて、十七になりし妾を嬰兒戒むる樣に止め給ひ候。極々あたり前の事には候ものから、あの心にてあの事妾等になし給ふ人、世界の何處に在すやと、今更に慕しうもなつかしうも戀しうも候かな。されども嘗てはかやうの方二人までおはせしなれば、此の後とて全くなしとは限るまじく候。心强くおはせ。

さはれ亡き方によく似たる御聲なつかしき人に遇ひ給ふとも、君、吳々も今の儘なる乙女にておはせ。妻とも母とも成り給ひそ。是れのみは妾が命かけての願にて候。君あの學校の寄宿に入り給はゞ、妾と共にありしには異りて、つらき事苦しき事もと妾心せばめられ候樣に御座候。何事も孤兒の浮世はかくと思ひしめ給へ。

君、神樣に愛まれ給へ。妾は或は憐まるゝ事もやあらんと禱祈りと感謝忘れ不申候。

ヴァイオリン殘せしは君にとてにて候。其の絃振ひ鳴らん時、君、妾が好みし「花散りうせては」歌ひ給へ。

二階の戸棚に花簪三ある筈にて候。一つは君に一つは英子さんに、一つは毎夜門の前通り候辻占賣に御遣はし被下度候。金子の紙包美雄さんに願置候間、それもあの兒にお遣はし被下度し。彼兒父上のみにて母上なき由に候、可哀さうに候。

昨夜も一昨夜も君の夢ばかり、晝間は木と石の人、夜は血と涙の人、何れも苦しき思出でには候ふものから、面り君に逢ひまつる心地すれば、夜の方樂しみに待たれ候。

此の港も秋風やゝ更け候。嗚呼秋風々々、よくも妾等姉妹に似て候かな。何處より來て何處に去り行く淋しき願にて候べき。籬の朝顏花小くなり候ひぬらん、風邪にな犯され給ひそ。君病みぬとならば妾死にも果て候べし。

九月二十二日夜二時寢らぬまゝ

姉より

萩江様　まゐる

上手なる小說には註釋が必要に御座候。姉なる人は、勝氣なる性質の父母を失ひて、急に社會の暗潮に接觸し煩悶したる後は、何處までも世を呪はんの臍を堅め候事故、心の程不思も筆端に現はれ來り候を、妹なる人の性質やさしく、あどけなきに思ひ至りては、之れをにごして已れの如き苦痛に陷れんことの、恐ろしくも悲しくも、罪深くも感ぜられ、已れの心がまへのあまりなるも省みられ、筆をまげて、心にもなき樂天主義を說き出す所に、御目止まらば幸甚なるにて候。

（歸朝後、札幌時代）

ドラ

—テニスン—

靜けかる田園の伏屋、老農アランと共にウヰリヤムとドラと住みき。ウヰリヤムは其の子にてドラは其の姪なりしを、アラン見る毎に「彼等めあはすにふさへり」と思はぬ事なかりき。ドラよく老伯父が心を知りて、若人に仰慕の思ひ切なりしも、ウヰリヤムは青春のまどひや、目ふりせりとにはあらねども、見なれつればドラを物としも覺えずて過ぎぬ。

一日、アラン其の子を呼び近けて云ひぬ。「我が兒よ、我晩くめあひたれども、能はゞ死なん前に、膝の上に孫を見んと望む。我が心なりぬ。ドラを見ずや。彼女見るに美しくて、年に似ず心まめなり、彼女は已が弟の愛娘、我弟とは鬩ぐ事ありて永く相見ざりしが、彼遂に異郷の空に亡き人となりつ。されど我、彼の爲めに彼女をいつくしみ育みぬ。妻とせよ。我は夜となく晝となく日頃此の慶事あらんことを庶幾へりき」されどウヰリヤムが答はぶしつけの「兒はドラとめあはじ、命の限りめあふことあらじ」とあるを聞きたる老父は得堪へず拳を固めて激怒の聲を上げつ「めあはじとや、心ふとし、思へば我が若かりし日には、父言卽ち法なりき、我には今も爾かぞ、心して思へウヰリヤム、一月が程に深く慮りて我が望に副へよ、若しさらずば神かけて許さじ、さなり、復た我が門に影をだに見すな」と言ひ出づるを、唇を反して罵りいらへつ。ウヰリヤム今は見るにつけて、彼女やゝに好ましからず、もてあつかひ愈ゝ心なかりしを、ドラ美しう忍び堪へぬ。

かくてウヰリヤムは父の家を捨てゝ月一つを閲せざるに、去る畑に働く可き身となり、半ば戀に、半ばつらあてに、勞働者の子マリー・モリソンと相婚しぬ。夕べ、賀式の鐘響きぬる時、アラン其の姪を呼び云ひけるは、「我が愛づる者よ。我痛く汝をいつくしむといへど、若し嘗て我が子なりし者と相語り、彼が妻と呼べる者と語を交へば、此の家復た汝の入るにまかせじ。我が所思即ち法ぞ」ドラすなほにうけがひつ。「爾かあり得ず、伯父君の心解く時あるべし」と心には念じ思ひぬ。

かくて日往き、ウヰリヤム男子生れし幸ありしも、家事やゝに傾きたれば、さすがに心くだけて、日に父の門邊を過りしが、父遂に顧みざりき。されどドラはつゝまやかに貯へたる僅のものを心こめて竊やかに彼等に齎ししを、熱疾ウヰリヤムを襲ひ、麥黃ばむ收穫頃にあへなくなりしまで、彼等さへ何者の業とも悟りあへざりき。

ウヰリヤム身まかりて後、ドラ、マリーを訪ひぬ。マリー坐して忘形見を眺めつゝ、淚にくれて、ドラにそゞろなき恨めしの思なり、ドラ來りて云ひぬ、「妾今日に至るまで、伯父君の意に從ひぬ。始めウヰリヤムに累あらしめしは、總て妾よりなれば、罪逃れ難かり。されどマリー、逝きにし人の爲めに、逝きにし人の擇びたりし君の爲めに、將た其の孤兒の爲めに、妾今君に來りぬ。此の五年が程、此の秋の如くみのりよき年はあらず。妾に其の孩兒を給へ。麥の間に置き、伯父君の見そなはすを待たん。彼豐作に心ゆたかなれば、逝きにし人の爲めに其の兒を祝したまふべし」。ドラ孩兒を抱きて麥畑に入りつ。罌粟の花まじり、まだ苅られざる畦にそを置きしが、老農至りしも、傭れ人彼に、ドラ孩兒もて待ちつゝありと告ぐる者もなければ、彼、彼女に何の質す所なかりき。ドラ起きて彼に行きて告げなんと庶幾ひたれども、それも心折れて止みぬ。かくて麥は苅られつ、日は落ちつ。眼路の限りはあやなくも淋しく暗み渡りぬ。

されど次の朝來りし時、ドラ起ちて再び孩兒を抱き畦に坐し、伯父の眼に入らん時見るに樂しからしめんとて

ほとりに咲ける花の限りを小さき環に編みて、孩兒の頭によそひつゝ待ちぬ。老農果して至り、畑を過る時彼女を質し、俯れ人を差おきて來り云ひぬ。「汝昨日何處にありしや。其の孩兒何人のぞや。此に何しつゝあるや」。ドラ眼を垂れやさしく答へけるは、「こはウヰリヤムが忘形見なり」、「云はざる事か」とアラン罵り出でぬ。「汝に禁め置きたる事忘れ果てしか」、「其の罪妾かしこみてあたらん、されど逝きにし人の爲め、此の孩兒を取りて祝させ給へ」、「かゝる仕業汝と彼の婦とのたくめる所なるを知る。我には我の爲すべき事あり、我が言卽ち法なるを汝犯すとならば、好し、其の孩兒は取らんなれど、汝行きて再び我を見んとはする勿れ」。かく言ひつゝ彼は痛く打叫びて、もだゆる孩兒を抱き上げつ。花環は落ちてドラが足もとにあり。彼女手を組みて差うつむきぬ。孩兒の叫びはやゝに遠ざかりつゝ、尙畑のあなたより聞こゆるなり。彼女遂に地に伏し、懷舊の思彼や是や、胸にみちて裂くる計りなるに、地に首をつけ、聲を飮みつゝ泣きぬ。かくて麥は苅られつ、日は落ちつ。眼路の限りはあやなくも淋しく暗み渡りぬ。

軈てドラ、マリーの家に至り、其の閾に立てりしを、マリー、ドラの手に我が兒なきを見て、足らはぬ勝ちなるやもめのたつきを救ひ給ひし神を讃へぬ、ドラ口を開きて云ひけるは、「伯父君孩兒を受け給ひぬ。されどマリー、君妾を仕はしめ共に働かしめざる可らず、彼夢にだに妾を見じとのたまへるなり」、「そは思ひも及ばざりし。妾が爲めに君に累を負はすべきかは。思ふに彼孩兒をたしなめ其の母を苦めんとし給ふべきに、いざもろとも彼處に至らん。妾は孩兒を伴ひ歸り、君再び戾り得んことを請ひ聞こえんに、是にして許されずば、やむなし、二人かまど一つにしてウヰリヤムが忘形見の爲めに、彼人となりて、我等を助け得んまで、いそしむ可し」。かくて二人口つけしつ。打立ちて老農の家に至れるに、戶はさしてあらざりき。彼女等さしのぞき見るに、孩兒老いたる祖父の膝の上腕の間に抱かれつゝ、時計のくさりにつながれ、爐の火にかゞやく金章を、親しげに弄べり。されど孩兒の

心よ、二人の近けるを見るや、忽ちさけびて其の母に至らんともがきぬ。アラン兒を放ちつ。マリー、「あはれ父上――かく呼ぶを許し給はゞ――妾夢々、妾の爲め、ウヰリヤムの爲め、此の兒の爲めに、物請はんとてまかれるにあらず。ドラの爲めなり。彼女を戻らしめ給へ。彼女やさしくも君を敬へるなり。あはれ君、ウヰリヤムの逝きにし時、なべての人の如く平和に眠りぬ。妾に答へて彼妾と相あへるを悔いず――妾實に永くしのびぬ――されど彼は父上を苦め奉りしを悲み、『神父上を祝し給うて我が苦しかりし日頃を知らしめ給ひそ』と云ひつゝ面をそむけて亡き數に入りぬ。――妾憐むべきかな――そは兎あれ、君を苦め奉る事多かるべければ其の孩兒たまひて、ドラの戻らんを許し、總てを初めの如からしめ給へ」と言ふ。ドラたへかねてマリーの後に身をひそめつ。室の中暫く沈默に滿ちぬ。

忽にして老農涙に破れつ、「我過てり、過てりしかな。我己れの子を殺せり――されど痛くめでしなり――實に誤てり。我が子等我を口づけせよ」。かくて彼女等老父を抱きてあまた度口づけし、老父は唯ゝ悔恨に胸打ち、ウヰリヤムを想起しては、愛着のきほひ衷に熱し、孩兒をかき抱きつゝ、涙を瀉ぐ事やゝ三頃なりし。

此の事ありてより四人は同じき軒に住む身となりつ。年めぐる事そこばくにして、マリーにふさはしき夫ありき。されどドラは世を永久に眠るまで、遂にとつがずてぞありしか。

（歸朝後、札幌時代）

遠友夜學校校歌

一

澤なすこの世の樂しみの
　樂しき極みは何なるぞ
北斗を支ふる富を得て
　黃金を數へん其時か
オー　否　否　否
　樂しき極みはなほあらん。

二

劍はきらめき彈（たま）はとび
　かばねは山なし血は流る
戰のちまたのいさをしを
　我身にあつめし其時か
オー　否　否　否

樂しき極みはなほあらん。

三

黃金(こがね)をちりばめ玉をしく
　高どのうてなはまばゆきに
のぼりて貴き位やま
　世にうらやまれん其時か
オー　否　否
　樂しき極みはなほあらん。

四

樂しき極みはくれはどり
　あやめもたへなる衣手(ころもで)か
やしほ味よきうま酒か
　柱ふとしき家くらか
オー　否　否　否
　樂しき極みはなほあらん。

五

正義と善とに身をさゝげ
慾をば捨てゝ一すぢに
行くべき路を勇ましく
眞心のまゝに進みなば
アー　是れ　是れ　是れ
是れこそ樂しき極みなれ。

六

日毎の業にいそしみて
心にさそふる雲もなく
昔の聖(ひじり)今の大人(うし)
友とぞなしていそしまば
アー　是れ　是れ　是れ
是れこそ樂しき極みなれ。

七

樂しからずや天(あま)の原(はら)
　そら照る星のさやけさに
月の光の貴さに
　心をさらすその時の
アー　是れ　是れ　是れ
　是れこそ樂しき極みなれ。

八

そしらばそしれつゞれせし
　衣(ころも)をきるともゆがみせし
家にすむとも心根の
　天にも地にも恥ぢざれば
アー　是れ　是れ　是れ
　是れこそ樂しき極みなれ。

九

衣もやがて破るべし
　ゑひぬる程もつかの間よ

朽ちせでやまじ家倉も
　唯我心かはらめや
アー　是れ　是れ　是れ
　是れこそ樂しき極みなれ。

（一八九八年作）

花語り

歌の組

霞もにほふ春の野に
雲雀（ひばり）と蝶を友として
さまよひ遊ぶ稚兒の
何をか花と語るらむ。

稚兒

山にも野にも一面咲いた
花よ〳〵きれいな花よ
どうして君は春來る毎に
にほひも淸く色美しく
そよ吹く東風（こち）に咲き綻（ほころ）びて
雲雀や蝶を樂しませるの？

花
めづる我友聞きねかし
野もせ山もせ冬枯の
寂しきさまを見そなはし
神は我等を地に送り
君ともろとも世の人の
惱み爭ひかなしみを
愛と平和と歡喜に
かへよと仰せ給ひけり。

稚兒
それなら君はいつ〳〵までも
きれいに唉いて僕等とともに
唱ひて遊び遊びてうたひ
秋風ふくも萎まぬはずを
なぜちり〳〵に散り亂されて
雲雀や蝶を悲しませるの？

花

いとしの友よさにあらず
我等散らずば來む春を
去年にもまして美はしく
裝ふ花はよもあらじ
あしたに咲いて夕には
爐に投げらるゝ我にさへ
榮光を示す大神の
深き聖旨をあふげかし。

全部合唱

咲くのも散るのも神のまゝ
はげみ遊ぶも神のまゝ
いとしのわらべに悟りけり
ゆかしの花に悟りけり。

（一八九九年作）

札幌農學校校歌

一

永遠の幸（さち）　朽ちざる譽（ほまれ）
つねに我等がうへにあれ
よるひる育て　あけくれ教へ
人となしゝ我庭に。

イザイザイザ　うちつれて
進むは今ぞ
豐平の川　盡せぬながれ
友たれ永く友たれ。

二

北斗をつかん　たかき希望は
時代を照す光なり

深雪を凌ぐ　潔き節操は
　國を守る力なり。

三

山は裂くとも　海はあすとも
　眞理正義おつべしや
不朽を求め　意氣相ゆるす
　我等丈夫此にあり。

（一九〇〇年作）

五日集

明治三十四年十一月三日、思ひ立つ事ありて、鎌倉の秋にさまよへるが、其七日までに成りし短長詩のそこばくを選(え)り集めて五日集と云へるなり。

行く雲

かまくらの秋
たそがるゝ夕べさびしみ
心やめる遊子(あそびと)一人
立ち盡して
何の思ひ
此處も亦
住むにたへずや
ひよろ〳〵と
白旗(しらはた)山を
西に流れ
遙かにも
さまよひ行く

何處の果てに
さすらはゞ
安かる眠り
結び得ん
心か雲よ。

人の世の戀

紺青の
色深くて
潮もわかず
水底まで
暮れ果てし
秋の海に
白銀の
星一つ
影を落して
いぢらしの
細さきさゝやき

嗚呼二萬年
汚(けが)れたりな
人の世の戀。

わが歌

都人(みやこびと)の　跡とだえて
さびまさる　由井の秋。
草のみどり　うすらぎ行き
色濃きや　わが衣(ころも)。
汀(なぎさ)に立ち　櫻貝を
拾ひ取る　海士(あま)の子よ。
何とか聞く　千鳥の聲
何と見る　秋の潮。
はづるや何　よする波を

見入りつゝ　　そとゑまふ。
幸(さち)あるかな　　汝(な)がたつき
ゆめなわが　　歌誦(ず)しそ。

秋來賦

秋は來ぬ　秋は來ぬ
垂穗(たりほ)實(みの)りて
馬は肥えたり
春と夏との
汗は凝(こ)りて
見よ妻のゑまひ
兒等がよろこび。

貴人(あてびと)や
都人(みやこびと)や
おこたりの人や
ほこりの人や

僥倖の人や
虚飾の人や
せん業なきまゝ
今を泣くよ
災なるかな
秋はかなむ子。

朝鳥雄々しく
鳥屋になきて
厩にいさむ
蹄のあがき
背戸の曉
風凜々と
空打仰げば
今日も晴れぬ
鎭守の杉の
梢高く
奇しき力よ

百舌鳥のなくね。

腕はもとより
血潮新た
磨ぎすましたる
鎌は腰に
鍬かる〳〵と
肩になげて
野らに出づれば
靄稍ゝ晴れ
神みのらして
色づける田に
我れ選ばれて
榮ある刈手
面白いかな
森の遠近
楓の紅さ
松の青さ。

東の村に連枷(れんか)ひゞき
南の村に馬いなゝき
北の里に笑み聲どよみ
西の里には刈入れの歌
天さゝやき
地さゞめき
田園さながら
讃美の里
我れ鎌取りて
田に臨む時
勇夫劍に倚りて立つ時
王者笏(しやく)を振ふ時
畫匠布に向ふ時
詩人首を垂るゝ時
乙女(をとめ)の涙濕(うるほ)ふ時
義人首を擡(もた)ぐる時
聖者敎へを宣(の)ぶる時

神の前に
何の差別（けぢめ）。

玉なす汗を
骨よりしぼるも
我れ勞働（いそしみ）の
運命（さだめ）呪はじ
懷手（ふところで）して
衣食足る子よ
憐れむ可きは
汝が腕。

小春の日影
はやかたむけば
夕餉（ゆふげ）の煙
青み初（そ）めて
狹霧（さぎり）にまじる
岡のあなた

五作がほこりの
歌聲冴(さ)えて
潔(きよ)きかな
我等が凱歌
駒よはやるな
道稍ゝ暗し
汝が背には
重きかりいれ。

夕べの鐘聞こえて
村はしづか
やから集(つど)ふ
粗膳の前
髯白き老父
跪(ひざまづ)き
年波しるき
額を垂れて
いつくしき祈

淚すゞろ。

嗚呼世を擧げて
濁らば濁れ
僞善もはびこれ
不義も叫べ
弱きを鞭うて
病めるを責めよ
雲湧く谷間の
秋の夕べ
老父母いまし
妻と兒とあり
神憤り
國をうたんに
ためらひますべき
義人殘れり。

（一九〇一年十一月）

夕暮海邊に立ちて

青、黄、丹紅、紫の
雲、藍色に
日のかげ靜かに薄れゆけば
黄金を浮けし波の穗の
ゆるぎも底にかげろひ
小兵の星のみくゞり出で
遠きみ空に光る哉
夜の幕全く閉ぢぬ。

島姫宿る巖かげ
流れ緩き淵
倦ずる腕に楫をとりて
白く光る鱗の
跳ねかへる音を聞きつゝ

今漕ぎかへる海士(あま)の子等は
闇(くら)き浪路の夕暮れ
わが岸何れと惑ふらんよ。

磯邊に立てる荒屋(あばらや)
童女は早く眠りて
女房屋際に隙(すき)やある
形よき火盥を
南の窓に點(とも)して
舟漕ぐ目路にと輕く据ゑぬ。
渇仰あつき比丘尼(びくに)の
法會にともせる燭の如く

夜次第に擴(ひろが)りて
引汐走る音のみ
眞闇(まやみ)に知らるゝ海のかなた
白き手すがる戸の上
低き光の目標(めじるし)

船人かへると思ひやれば
胸に沁み入る平和に
おぼえず涙を巖にたれぬ。

（一九〇四年米國ハーバアーフオード・カレヂ大學院在學中）

夕暮海邊に立ちて

―第一卷了―

昭和四年三月十五日印刷
昭和四年四月一日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番